

臆物ぶちまけて死にかけの侍を勇者として召喚してしまった件について

トロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

故に斬る

※この作品は拙作の一つである【しゅらばらばら―斬り増し版―】の後日談となります。こちら単体でも読める作品となっていますが、よければしゅらばらばらばらを読んでのからの閲覧を推奨します。

## 目次

プロローグ【しゅらばらのばら】

人の終わり、あるいは超越した君の残酷へ↓

1

第一章【血まみれのボーイミーツガール】

第一話『血まみれの、ボーイミーツガール』

6

第二話『南蛮独自の、技術かよ？』

22

第三話『借りた力に、意味は無く』

41

第四話『巨人を、斬る』

50

第五話『芽吹き華こそ、散らせし乙女』

61

第六話『こんなの僕は、聞いてない』

82

第七話『後悔なんぞ、死んでもせんよ』

94

第八話『勇者（傀儡）を、斬る』

101

第九話『夜風がとつても、寒いよなつて』

120

幕間『その狂気が、歪を呼んだ』

125

幕間『どいつもこいつも、修羅外道』

140

第十話『新たな土地へ、行く前に』

154

第十一話『はじめましてと、聖女が笑う（嗤う）』

168

第十二話『聖女を、斬る（と、どうなるか）』

178

第十三話『異教徒を、正す』

191

第十四話『いざ、山登り』

206

第十五話『貴女の後ろは、私が守るから』

219

第十六話『めいる、がんばる』

231

第十七話『理解出来ない、才覚を』

244

第十八話『連鎖する、狂気の骸』

257

第十九話『血濡れの騎士に、気を付けろ』

268

第二十話『騎士を、斬る』	278
第二十一話『我が虚無は、無感を是とする』	298
第二十二話『しゅらば、ちる』	310
第二十三話『故に、斬る』	328
第二十四話『胸の鼓動は、聞こえているか?』	335
エピローグ『風の吹くまま、気の向くまま』	350
人物設定・世界観設定	360
第二章【変えられず、ごーいんぐまいうえい】	
第一話『地獄よ踊れ、災禍はここへ』	393
第二話『幕間・忍者出立』	401
第三話『掃き溜めの街』	406
第四話『これをきつと老害という』	415
第五話『心鉄』	425
第六話『腐敗した性根』	430
第七話『貴女はだあれ?』	439
第八話『魔族、襲来』	450
第九話『メイル、はりきる』	458
第十話『修羅の兆し』	467
第十一話『一心一身』	475
第十二話『人間』	488
第十三話『魔族殺し』	504
第十四話『散滅』	513
第十五話『EAT, KILL ALL . 1』	530
第十六話『破壊の跡で、いつもと同じ』	539
第十七話『最悪パーティーとアットホーム魔王軍』	549

第十八話 『戦場を走る』	561
第十九話 『交差する者達』	572
第二十話 『無題』ん	587
第二十一話 『しゅらばらばらばら』	598
第二十二話 『人』	619

プロローグ【しゅらばらのばら】  
人の終わり、あるいは超越した君の残酷へ↓

——夢を見る。最低最悪の、夢を見る。

「俺の……！俺の負けだ……！」

直後、嗚咽が漏れるのを聞いた。

土砂降りの雨の中、骸に寄り添い泣きじやくる俺と同じ、いや、もしかしたら俺以上の感情の発露だったかもしれない。

何せ、涙と鼻水を垂れ流して先生のことを呼び続けていた俺が泣くのを止めてしまうほどに、その男は両手を地面について子どものように泣き出したのだから。

「う、うう……！俺は……！俺は無様だ！な、何が斬るだ！」

斬ってみせるだ！お、俺の斬撃はこの人を斬れなかった……！

ああ……！斬れ、斬れなかったじゃないか！斬れてないじゃないかあ！なのに……なんで……！なんで俺が生きてるんだよ！？」

「お、お前……」

男が何を言っているのか意味が分からなかった。

これは、一対一の果し合いだったはずだ。

剣客同士の混じりっ気無し勝負。一合での決着であり、他愛もなく終わった決闘の結末は、男が、俺の先生の刀をその肉体もろ共両断して終わったはずだ。

だというのに、この男は斬れなかったという。

こんなにも容易く俺の先生を斬りながら。

斬れなかったなどと、童の如く泣き叫んでいる。

「お前が先生を……！」

次いで俺の感情を支配したのは、先生との決闘を侮辱しているとか思えない男への憤怒だった。

先生の血で真っ赤に染まった顔を上げて、俺はすぐ傍で体を震わせる男の前に立ち、その情けない姿を、怒りを込めて見下した。

敵討ちなどと高尚な思いを抱いたわけではない。そんなことよりも、先生の命に糞尿をぶちまけたようなこの男の態度を許せない気持ちだけがあつた。

決闘の結果、命が失われる。そんな当然のことで癩癩を起すことはない。当然、先生を失ったことへの悲しみはあるが、そのことを受け入れる覚悟は常日頃から抱いていた。

だが、これはあんまりではないか。

冷たい雨に打たれ、泥に汚れて骸を晒す敗者に膝を折って懺悔する勝者。これ以上ない侮辱があるだろうか？

「お前が先生を殺したんだろうが!？」

だからこそ、俺は悔しきで再び涙を流して、嗚咽混じりに男を糾弾した。

ただただ、悔しかった。命を賭して剣戟の極地を頂く恐るべき剣客との戦いに挑んだ先生の全てが踏みにじられていることが。

そして、情けなかった。そんな先生のために戦おうにも、そのための力が圧倒的に足りない己の不甲斐なさが。

故に俺は叫んだ。あの時の俺に出来るのは叫ぶことだけだった。

「尋常の果し合いで！ 互いに武芸者としての矜持を胸に！ 例え結果が一合とはいえお前は先生を武芸者として殺した！ それなのに、勝者のお前が膝を折ったら……先生の矜持はどうなるのだ……!？」

「ごめんなさい……!？」

「ッ……お前え!？」

顔すらあげず、尚も侮蔑の言葉を吐き続ける男の胸倉を掴み上げて無理矢理俺のほうに顔を向けさせる。そして、無自覚に果し合いの侮辱を止めない男の非道を糾弾しようとして――。

「そう、殺したんだ俺は。斬れず、殺すことしか、出来なかった……出来なかったよ」

そう言つて俺を見る男の瞳を見て、絶句した。

それは腐りきった肉塊で作り上げられた至高の一品だった。ある

いは、金銀財宝で象られた糞尿だった。

醜くも美しく、美しくも醜い。

相反する二つの在り方を成立させる漆黒の眼。

そのあまりにも不気味な瞳に、沸き上がった憤怒すら一気に失われ  
ていく。

そして茫然としていると、続いて発せられた男の言葉によって、俺  
はこの男が何を嘆いたのか理解する。

「でも俺は、彼を斬れなかったという真実を得た」

「あ……う？」

「そう、俺は遂に斬れないものを見つけられた。だから俺の三度目は、  
間違っていないかったんだ」

——何を、言っている？

——この男は今更何をほざきやがった？

俺は咄嗟に男を全力で突き飛ばした。その反動で俺は尻もちを、男  
は泥となった地面に背中から倒れ、そのまま反転してうつ伏せに倒れ  
る。

乞食のようだと、俺は無様な醜態を晒す男を見てどうでもいいこと  
を思った。

事実、体を起こした男は全身が泥だらけとなっており、先生と対峙  
した時に見せた底なしの恐ろしさなど皆無。路傍の石ころ程度の存  
在感と弱弱しさしかなく、だからこそ、その全てを飲み干すような漆  
黒の眼が気持ち悪いくらいに浮き彫りとなっていた。

「俺は……私は、ずうううつと、斬ってきた。至つて、斬ることを是  
とした。当然の立ち位置に、至り続けて超え続け斬り続けていくこと  
が私の終わりだった。だから、俺は今日も当たり前前に私を斬れるん  
だつて思っていた」

男は頭を垂れて懺悔する。そのあまりにも真摯な在り方は、事情さ  
え知らなければきつと誰もが胸を打たれる哀れを誘う姿。

その背中に、不意に少女の姿が重なる。男でありながら女。二つの  
側面を持つ歪は、しかし対極ゆえに成り立っていた。

何だこれは。



これは、本当に、人間なのか？

そんな俺の疑問を他所に、ソレは一人でブツブツと意味不明な言葉を繰り返す。

「その墮落が、その驕りが、私のこの絶望が……その結末で俺は彼を斬れなかった、などと言いつきはしない。全部斬れるのに、この人は斬れなかった。それはとても失礼で、許されず、悲しくて悲しくて、泣いてしまうほどに嬉しくて。本当に、本当にごめんなさい。私が俺の身勝手に貴方をただ死なせてしまってごめんなさい」

そして、這いずるように先生の骸に近寄り、男は寄り添うように手ずから付けた斬り口に手を這わせ。

「だから俺は今、感動している」

「ひっ……」

目で追った横顔に浮かぶ狂気に、俺は思わず悲鳴をあげていた。

悲しくて、感動していて、斬れなくて、斬りたくて、殺してしまつて、殺したくなくて。

そう語る全てが見栄えだけの薄っぺらなものだと、笑う横顔が物語る。

女の眼が全てを語っていた。どんなに言い繕っても、俺の前に居るこいつは自分一人で完結していることを何よりも雄弁に告げていた。

「斬れるのに斬れないものを、斬りたいのに斬れないものを……俺はやっと見つけられたんだ。悲しくて辛い、あり得ないと思っていたのに、あり得ないなんてないって、俺の体が証明していたのに」

「私が貴方を殺してしまった」

「俺は貴方を斬れなかった」

「だから、ありがとう」

「本当にありがとう」

「貴方が居たから」

「貴方が居てくれたから」

そして、ソレは晴れ渡るような笑顔で俺を真正面から見つめて――

「私は君を、斬らない」

「俺は君を、斬る」

いつの間にか抜き払われた鋼鉄が、先生の胴と首を一瞬にして切り捨てていた。

「あ……あああああああああああああああ  
轟轟と雨は続く。  
!!!!!!????」

延々と絶叫は続く。

命も、覚悟も、全ては絶叫と雨に溶けて消え、次いで響く波紋の音色は、いつかどこかで聞いた鈴の音色。

「だからどうか、お願いします」

そんな夢を、俺は見る。

自分の嘆きを聞きながら。

「誰でもいいから——」

毎晩常に、夢に見る。

かき消すことの出来ない、不愉快な言葉を聞きながら。

「俺の超越私悪夢を、終わらせてくれ」

俺は既に知っている。

——修羅人の末路終わりを、知っている。

# 第一章【血まみれのボーイミーツガール】

## 第一話『血まみれの、ボーイミーツガール』

鋼鉄の残響が響く。

連続する音色に間隙は無く、激突の音色が波及するよりも早く弾かれ合う鋼鉄に音すらも既に遅い。

音を置き去りにした合唱を奏でるは人を斬るという一点を突き詰めた武器。刀と呼ばれる業を手にして踊り狂うは二人の剣客だった。

一人は老年の剣客。顔には深い皺が幾つも刻まれており、鍛えた肉体にも老いによる衰えが感じられる。だが長年を通じて練り上げた業の深みは最早若さを頼りにした者には至れぬ極み。老いすらも己の武器と化した老剣客の力は、この年齢にして遂に全盛期と言える領域にあった。

そしてもう一人は老剣客の孫と言っても疑う者はいない若い青年だった。若さ特有の勢いをそのままに刃を繰る腕は重く、鋭い。だが老剣客と比べてこの剣客には業が無かった。確かに同年代と比べても、否、遙か年を経た達人と比しても青年の腕は比肩、あるいは凌駕しているだろう。早熟の天才は、いずれはこの国はおろか海を越えた大陸でも名を残す極みに至るのは誰の目から見ても明らかだった。

だが足りない。

剣聖と、あるいは剣鬼とすら謳われた老剣客と比するには、未だこの剣客は未熟と言わざるをえなかった。

「シィッ！」

「ぬう……！」

今宵、連続した斬撃の応酬は、再び老剣客の一閃が制する形で停止する。常人では見切れぬ僅かな隙を縫って、老剣客の鋭い一突きが青年の体を穿ったのだ。

「……強いな。お主、笑えぬくらいに強すぎるわ」

「受け取ろう。そして貴様も十分に強いぞ、若人。誇れ、今の俺を相手に一刻持たせ尚も立っている腕、賞賛に値する」

「それは……悔しい限りだなあ」

上から見下ろされるような言い様に、青年は己の情けなさに口許を歪めた。

だが現実はこの通り。老剣客もいくつか刃を受けて体から血を滲ませているが、青年が受けた刃の数々に比べれば軽傷でしかない。

あまりにも明白な地力の差は、青年の驕った心を砕くには充分だった。

これが剣聖。

これぞ剣鬼。

日の本において、一騎当千ただこれのみと謳われた頂点の実力は想像していたものを遥かに超えていた。

「だからとて、手を休めるわけにはいかぬがな」

「来るか……今ならば手打ちにすませることも出来るぞ？　貴様の腕、あまりにも惜しい」

この若さでこの腕。達人に比肩する技量は、おそらくこのまま鍛えれば老剣客の域を超えたところにまで行けるのではないかとすら思える。

「そう、貴様ならばあそこへ……あの——」

「御託はここまでだ」

続けようとした言葉に被された青年の鋭い踏み込み、老剣客の鋭い眼が僅かに揺れた。

瞬間、先程以上の苛烈な剣戟の冴えに老剣客は苦悶の声を漏らした。

幾度と重ねた残響が再び響く。超えた音の果て、疾駆する互いの肉体は踊り、狂い、舞い、血を散らす。

だがそれは先程まではまるで違う。ここまで押され続けていた青年が老剣客を圧している。

「貴様……!!　狸を被っていたのか!!」

「違う、違うぞ剣聖。確かに先程まで俺はお主の遥か格下だったよ」

「ならば、この圧は……!」

「毫碌したか？　お主にとって慣れ親しんだものであろう？」

言われ、老剣客は毛色の変わった青年の剣運びを見て——それが己自身の業を模したものであることに気付いた。

「まさか、ここまでの鏢迫りで!」

「然り。もつとも、ここまで時間がかったのはお主が初めてであるがな」

言いながら振るう刃を捌きながら、老剣客の返しの斬撃を、己自身が培ったものに似通った業で青年が受け流す。

しかし、完全にはいかずに僅かにバランスを崩した際に、動揺した心を律した老剣客の刃は突きこまれる。躲しきれずに浅く体を裂かれた青年は、しかし決して笑みを崩すことはなかった。

「流石は剣聖。化け狐の真似では瞬きを奪うだけしか出来なかったか」

「ぬかせ。真似事で済ませられる程、俺の業は安くないぞ」  
「ならば余計に奪いたくなつたわ!」

老剣客の必殺を掻い潜りながら青年は吼える。咆哮に乗せた斬撃を叩きつけて、その威力に唸る老剣客へと殺意の滲み出た笑みを向けた。

やはり、青年が老剣客に押される形は変わらない。それでも、徐々に、だが確実に青年の動きは研磨される刃の如く鋭利に、鋭敏に、無駄を排し、鋭さのみを練磨し続けていく。

一瞬ごとに上がる技量。老剣客の半生を以て鍛え上げた武の頂を、青年の天賦が飲み下す。そのあまりにも馬鹿げた在り方に、普通の剣客ならば憤り、あるいは戦意を失うことだろう。だが相手は剣聖、無双と謳われた狂気の男は、むしろ己の喉元へと迫り続ける青年の在り方に喜悦の笑みを浮かべてみせた。

「俺を食らうか! 良いぞ! 俺を食らい、俺を超え、そして超えた貴様を俺が斬り捨てる!」

「ハッ、そう言い切るお主の啖呵、嫌いではないぞ剣聖。先程までの仙人面より面白い」

「皮一枚剥げば剣客などは所詮これよ。人斬りを楽しめる俺達の何処に無念無想があるものか!」

「それも……そうさなあ！」

剣舞が進む。

速度が止まらない。

今や、互角に届きえた互いの力量は既に人の域を超えている。だが、いよいよもつて青年の武は、吸収した剣聖の武を元にさらなる発展を見せ始め、徐々にだが剣聖の動きが防戦へと傾いていた。

戦いの終わりは近い。否、己が武を、業を奪われ始めた時点で、既に勝敗は決定していたのかもしれない。

それでも、譲れないものがある。

故に、ここからだ剣聖が嗤い、ここからこそだと青年も嗤った。

「剣聖いー！」

「来いよ餓鬼いー！」

互いに嗤い、斬り殺し合う。

防御を捨てた両者の刃は、幾つもの傷を互いに与え流血が迸る。だが、痛みすら忘我した二人の剣客——修羅の動きは衰えない。それどころか、一閃毎にさらに鋭さを増していた。

世代も、駆け抜けた時代も異なる両者だが、必然と重なった刀の道が、こうして恐るべき死闘へと二人を誘い、恐るべき魔技の数々が両者の血肉を存分と滾らせる。

音もなく飛んだ青年は、傍目からは身体を一切動かすことなく、まるでスライドするように袴で隠した独特の歩法で剣聖の懐へと飛び込んだ。

身体が一切揺れることなく疾駆するという常人では理解できぬ動き。対峙する者は、たとえ達人であったとしても青年の動きに惑わされ、あらぬところを斬り裂き、そして返す刀で斬り伏せられてしまうだろう。

これもまたこの戦いで剣聖より得た業を経て青年が手にした新たな業。その動きを前にして、並の剣豪では眼で追うことすら至難となろう。

だが相手は音に聞こえし一騎当千。凡百の達人を斬ってきた剣聖は騙せない。

その手は青年を確かに捉え、天高く掲げた刀を迷い無く振りぬかれた。目に頼るではなく、周囲の空気、敵手の呼吸、戦場を満たす独特の気を見抜き、放たれた弾丸の弾道すら見切る第六感の如き知覚にて、相手を惑わす歩みを捉える。

剣撃は苛烈。壮絶と襲い掛かる渾身の振り下ろしに対して、青年は既に行動を開始していた。

「ッ……ッア」

浅く吐き出した一呼吸の間。脳天を焼く殺気を相手の全身の動きから辛うじて察したことで、間一髪のところまで身体を逸らし、必殺を免れる。

それでも完全に見切るに至らず、二の腕が切り裂かれた。

ぐらり揺らぐ体躯。血を流しすぎた。

だが己の内側に溜めた力を総動員して足を支えると、ふらつきよめいたことすら反動にして、振り抜きの隙を晒す剣聖の両腕と胸部を同時に切り裂くべく真一文字に鉄の鋭利を翻す。

咄嗟、腕を上げつつ身を引いた剣聖の胸部に浅き裂傷。やはり血を流しすぎたためか、あちらも同じくたたらを踏んで、距離を取る。

互いに吐き出した力はほぼ互角。重ねた剣戟は、両者が両者共に、相手がこれまで戦い、下してきた敵手の中で極上であると教えてくれた。

或いは、感謝なのだろうか。

刀傷の痛みすら忘我して、青年は決闘の最中だというのに思考を飛ばす。

だがそれは隙ではなかった。いや、剣聖も同じことを考えていた。感謝、なのだろう。

出会わせてくれた奇跡。

育んだ研鑽を吐き出す至福。

この先を見れるという歓喜。

いやしかし、どうなのか。

「さて……」

青年は青く変色した唇を吊り上げて、下らぬが必要な思考を嘲笑つ

た。

決着は今まさに訪れようとしていた。

互いに無数の刀傷を体に刻み込み、一段飛びで近づいてくる死の淵を自覚しながら、それでも握った刀を構え、眼前の敵手を斬り捨てることを切と願っていた。

最早、残された力は少ない。技巧の限りを尽くして削りあった二人の腕は重く、足は大地に吸い付いたように動かず、見開いた眼も朦朧と翳っていた。

だが、振れるのだ。

手にした刀。

この凶器に代弁させる狂気が胸にあるならば。

人は容易と、修羅を成す。

「ツッ」

直後、同時に駆け出した両者の影が重なる。閃光と走る刃が互いの体を深々と引き裂き、溢れ出た鮮血が時雨に抗うように天へと迸った。

そして、一方が倒れ付す。剣聖は、肋を抜け臓腑を斬った青年の刀に破れ、青年は腹部を横一文字に裂かれながらも、特殊な呼吸法で内臓を上半身に持ち上げることで臓腑を裂かれるのを逃れ、辛うじて一命を取り留めた。

勝敗を決めたのは、まさに紙一重。

「内臓上げ、か」

倒れた剣聖は、死を迎えようとして年相応の老人のように弱弱しくなりながら呟く。

「……海を越えた土地にて、無手で刀を相手取る武術より習ったものだ」

「そうか……ククツ、俺と貴様の差はそこかの。強さのためなら、流派の垣根はおろか無手、武器使い、構わず取り入れる、貴様ゆえ……」  
「だが、勝敗は紙一重であった」

事実、痙攣するような呼吸法にて内臓を上半身に上げている青年だが、大きく切り裂かれた今の腹部のままでは、呼吸を乱した直後に、持



ち上げていた臓腑がそこより溢れ出て絶命することになるだろう。

「引き分け、そう呼ぶべき、決着だ」

致命傷を負ったのは青年も同じだ。

ただ、僅かに生きながらえる時間が老人よりも長いだけ。

そう語る青年に、剣聖は申し訳なさそうな、だが得意げな笑みを浮かべた。

雫が降り注ぐ。決闘の時より空を覆っていた暗雲は、戦いの執着を知らせるように雨粒を二人の剣客へ降らせていた。

「名を、聞かせてくれ」

斬られた体より流れる鮮血が雨に流されていく。残された幾ばくかの時間、剣聖は己を下した青年へと静かに問いかける。

「我流、宗司。お主と違い、名も知れぬ剣客よ」

青年、宗司もまた己の死を予感しながらも、剣聖の最期の願いに一度瞼を綴じて呼吸を整え、静かに答えた。

名も無き剣客。日の本に敵なしと賞賛された剣聖を斬り捨てながら、未だ誰も知らない孤高の天才。

宗司と名乗った青年に、剣聖は小さく頷いた。

「そう、か……宗司か。てつきり、貴様こそ奴であると思ったのだが……」

剣聖と呼ばれた己を斬るのは、あの男だけだと思っていた。

日の本に剣士の鏡として名が知れた己と対照的に、知られてはならぬと蓋をされた悪鬼羅刹。いずれ、雌雄を決すると考えていたが、所詮、それこそ自惚れでしかなかったのだろう。

そうでなければ、この誰も名を知らない剣客に後れをとることなど無かったはずなのだから。

「……安心しろ。お主が挑もうとした相手こそ、俺がいずれ斬る相手だ」

自身も致命傷を受けているにも関わらず、剣聖の言葉を未練と感じて答えただろう宗司に、剣聖は血を吐きながら笑った。

「誰かも知らずに安請け合いとはな。存外、義理深いのか？ だがそうだとしたらやめておけ、俺がいずれ斬り結ぼうとした相手は——」

「知っているよ。あの斬撃のことは、きっとお主よりもな」

宗司の答えに劍聖は僅か驚愕を見せた。今のは決して適当な返事ではない。それは、たった一言、斬撃と答えた宗司の言葉が何よりも雄弁に語っていた。

斬撃。言ってしまったばたつたそれだけの言葉に込められた全て、そこに込められた恐ろしさこそ――。

「……なら、託す。アレを斬り、その先を行けよ」

それはもう不可能だとは、言わなかった。

互いに致命傷。ただ、少しでも宗司が生きながらえるだけの話。

だがそれでも劍聖は託した。

この男なら、アレすらも超えられると信じて、託すことを躊躇わなかった。

最早、それ以上は必要ない。その言葉を最期に、劍聖と呼ばれた男は静かにその生涯を終えるのであった。

「無論、そのために俺はお主を踏み越えたのだからな」

宗司は骸へと語りかける。

答えは無い。

だが、それでよかった。

「全く、斬り殺されておきながら、安らかなものよ。流石は劍聖、死に際も見事なり」

そして、僅かに黙禱を捧げたのも束の間、ここにはもう用が無いと踵を返して歩き出す。

「こんな美しい時雨だ。ご老体には優しく染みこむだろう……全く、羨ましいくらいに良き笑顔で逝きおつて」

だから眠れと最後に語り、宗司は斬られた腹部を押さえつつ、刀を杖に立ち上がった。

俺もまた、この時雨のように儂く散るのだろうか。

奪われ続ける体温、呼吸は次第に維持するのも難しくなり、霞んだ眼は一步先すら見通せぬ。

緩やかに至る死地。人里から離れたここでは誰かの助けを呼ぶことも叶わず、このままでは青年は確実に死に絶えるだろう。

だが歩く足を止めることは出来なかった。  
一步。

いつも、この一步だったから。  
刀に生きた人生。刀に投じた魂。骸の数だけ極めた剣閃。そのためにいつも踏み出した一步を、最後まで止めるわけにはいかない。

だが、やはり動かぬ。

一步も定まらず、呼吸は乱れ、腹部を押さえた腕に暖かな臓腑の重さが押し掛かる。

死ぬのか。

生きて、死ぬ。

当然と呼べる帰結を前に、後悔はあるか。

否、そんなもの、あるわけない。

「だが、お主を食らっただけでは俺は止まらん」

後悔はない。

する必要はきつとない。何せ今この身は動き、未だに刀を振るうことが出来るのだから。

死の間際にありながら、宗司の歩みに迷いはない。

この程度では終われない。

いや、終わるためにも、終われない。

終わりの向こうにこそ、宗司の求める境地があるが故。

「だから俺は嗤うのだ。この様でも嗤えるのだよ、剣聖」

意識が途切れる間際まで、浮かぶ笑みは崩さずに。

そしてその死の間際、淡く光る燐光に己の身体が抱かれるのを宗司は確かに見たのだった。

その日、生身で千騎を両断したと言われる伝説の剣聖は散った。

しかし後世の歴史では、彼が誰に殺されたのかは記されていない。  
その事実が抱えていた幾人もの弟子と共に、歴史上から消え去ってしまった。

千を超える無数の敵によって殺されたのか。

あるいは毒を盛られ、奇襲を受けて殺されたのか。事實はわからぬ。歴史に空いた、不可思議な穴。

唯一の証拠である骸となった剣聖の側には何もなく、ただその体を斬り裂いた幾つもの刀傷だけが、その壮絶なる戦いを物語っていた。

1

違和感を覚えた身体は、咄嗟に意識を手放すことを止めた。

「な、なんだ貴様はあ！」

動揺を露にする声に宗司は閉じていた瞼を開き、前を向く。

そこは時雨の降理注ぐ、決闘に適した開けた場所ではなく、太陽の光が眩しい森の中だ。だがそこまで状況を理解出来る余力もない宗司は、ただ前に立つ男だけを見た。片手に両刃の剣を持った、見慣れぬ鎧——皮で作られた軽装の鎧を装着した、見るからに不衛生で小汚い顔の下品そうな大柄の男だ。

男の背後には、似たような装備をした、これまた汚らしい男達が数人立っている。おそらく、リーダー格は先頭に立つ男なのだろう。背後の男達を従えたその風貌は、まさに悪党の親玉とでも言うべき風格がある。

だが宗司の今の眼では、ぼんやりとその全体像を眺めることしか出来ない。何せ全身は傷つき、呼吸法すらままならなくなった腹部の傷口には、左手で押さえているものの、今にも臓物があふれ出しそうになっているのだから。

辛うじて右手の刀を杖にして身体を支えているが、素人が見ても宗司の命が今にも尽きそうなのは目に見えた。

「あ、ああ……」

宗司の背後、真つ赤な血潮を流すその背中を見つめ声を失っているのは、煌びやかな装飾の施された、白塗りの鞆に収まった立派な剣を両腕に抱きかかえている美しい少女だ。

その体は恐怖し、疲弊している。柔らかい黄金とでも言うべき金色の髪と白い肌、そして身に纏ったシルクのドレスは土と返り血で汚

れ、宝石のように輝く青い瞳には恐怖の色が滲んでいた。

震える唇は、助けを求めるように開閉していたが、既に声を出す気力すら失われているようであった。

そんな彼女は今、地べたに尻をつけて青年を見ていた。その瞳には、恐怖とは別の困惑と畏怖が入り混じった感情が渦巻いている。どうしてこうなったというのか。

その疑問に対する答えを出す時間は無く、宗司の前に立つ男が、二タリと下卑な笑みを浮かべて、背後で震えている少女を見た。

「ケツ、いきなり召喚陣なんかやりやがるから何事かと思ったが、まさか人間呼ぶどころか今にもくたばりそうな奴を呼ぶなんてよお……ま、ささやかな抵抗も終わったところで、これでかくれんぼはおしまいだ。こいつをぶっ殺したら、屋敷に居る女共と一緒にたつぷり可愛がってやるからな」

舌なめずりの音と、情欲で濁った眼差しが幾つも少女に向けられる。

下衆な視線から浴びせられる生ぬるい舌で全身をまさぐられたような不快感に、少女がいつそう剣を抱きしめる力を強くすると——そんな男達の視線から守るように（単純によろめいただけだが）宗司が男の前に立ちはだかった。

折角のいい気分を台無しにされた男が表情を歪ませて怒気を強める。突けば倒れそうな男に己の欲望を遮られた怒りは強く、握った片手剣を鋭く横に振るって宗司を威嚇した。

「黙ってりゃそのままくたばらせてやったつてのによお！ 最後がいいところ見せてくたばりたいってか!? 面白え！ だったら直接お前をぶっ殺してやるぜ！」

「ケケケツ、だったら俺にやらせてくださいよ兄貴。屋敷に押し入つてから誰も斬つてなくて不満だったんでさあ」

「よし……やっちまえ！」

「シャーッ！」

直後、背後に控えていた男の一人が、身体を駆け抜ける激情の赴くままに宗司目掛けて斬りかかってきた。

こそ泥らしく、それなりに鍛えられているが不細工に作られた肉体。同じく未熟で乱雑な踏み込み。どれをとつても宗司が先程まで対峙していた恐るべき剣聖に及ぶところなど何一つないというのに——何故か、その動きは異常なまでに速かった。

その身体を包むのは淡い魔力の光。

宗司が居た世界では存在しなかった異能の術理。魔力という人体から生み出される未知のエネルギーを用いて編み出される魔術と呼ばれる神秘の恩恵。

その一つである強化の魔術によって常人を遥かに凌ぐ能力を得た男の速さは、野生の獣すら凌駕するほどにまでなっている。

対する宗司は死に体。かつ、魔術など見たことも聞いたこともないという身。事前の知識もなく、万全には遥か遠い体調では男に勝る要素など何一つ存在するはずが——否、存在する。

「……」

宗司は一陣の風となって迫り来る男を捉えた。いや、最早意識があるかも定かではないため、見ているかもわからない。

だが、体はいつの間にか動いた。

敵手が居る。

願った敵手。

今わの際で、今一度と望んだ敵手が居る。

ならば、動けぬ道理など——ない。

「死ねえええええええ！」

型も何も無い。下衆な見た目に相応しい力任せの荒々しい振り下ろしが迫る。だが恐ろしきは魔の成す術か。宗司が知る中でも速い部類に入る速度で放たれた閃光の斬撃は、まるで幻を斬ったかのように、手ごたえもなく瀕死の体をすり抜けた。

「あ？」

確実に斬り裂いたはずが、手ごたえが何一つない。

啞然として勢いあまり全身のバランスを崩してつんのめった男は、その疑問を浮かべた表情のまま。

首を落とされ、絶命した。

「はっ？」

斬ったと思ったら、首が落ちていた。

目の前の光景を見ていた全ての人間が、異常極まる出来事に言葉を失う。

この場の誰に分かるうか。宗司が今行った一連の動作。迫る斬撃をそれと分からぬくらい微妙に体をずらすことで、まるで相手に斬ったと錯覚させるくらいぎりぎり回避を行い。支えとしていた刀を、強化された反射神経ですら捉えることの出来ない神速で振るい、その首を一瞬で斬り落としたのだということ。

天に掲げた刀が太陽の光を反射する。

そこでようやく、男達は青年がその手の刃で仲間を殺したのだと理解した。

理解は、同時に恐怖となって男達を支配する。

ああ、眼前の死にかけの男が発する黒い眼光の、何たる嬉々たるか。斬ったのだぞと。

極まった剣戟を今一度振るえたのだぞと。

まるで幼き童のような無邪気な瞳で語りかける、狂気のありさま。死に体などと、誰が一笑できる。

血に塗れた漆黒の着物を羽織ったその姿は、黒いマントを羽織った髑髏の死神ではないか。

「ひ、い……」

異常に対してリーダー格の男以外の連中が首を絞められたような悲鳴をあげた。

だが逃げるところか、一步引くことすら出来ない。天を衝くその牙が、動いたと同時にそれを斬ると誇っているかのようにすら見えて。

一瞬の均衡状態。

その僅かな静寂も、瀕死の青年が踏み出した一步によって瓦解した。

「う、うわあああああ！」

「死ねよおおおお！」

「ひい！ ひいひいひい！」

恐怖によって思考が麻痺した男達が、最初に突撃した男と同じように強化魔術で体を強化した状態で宗司に突貫した。

連携などまるでばらばら。唯一褒められるのは、死地に来て極まった彼らの強化が恐るべき精度で全身を強化し、過去最大級の速度と力を生み出したことか。

一步で数メートルはあった距離を埋めるほどの速度。動きは出鱈目とはいえ、三方向から迫る男達へ、宗司は定まっていないう瞳を軽く周囲に一瞥して、前方の男へと一步踏み出した。

それだけで、連携などとれていない男達の動きは混乱する。左右の男は絶妙のタイミングで宗司が踏み出したせいで、正面を担当した男が壁となり刃を振るえない。

一瞬の躊躇、だが前方からの斬撃は止められず、いや、止める必要などなく。

トンと喉に突き刺した鋼鉄が、ずるりと喉を突き破り。

そのまま縦に振りぬかれた刃は、真ん中から男の顔面を断ち割った。

「……」

左右に分かれた男の頭の中身が熱血と共に漏れ出る刹那。続いて左側に踏み出した宗司は、未だ混乱したままの男の腹部を閃光と化した切っ先を突き立てた。

強化された肉体と皮鎧による耐久力は、石を砕く魔獣の牙に挟まれても耐え切れるほどの堅牢さを誇るが、宗司の刃の前では何もかもが無力。

今度は趣向を変えてとばかりに、腹部から一気に股まで割られた男は、その情欲の固まりたる股間の一物もろとも腹部から内臓のあらゆるを垂れ流して膝をついた。

この間、僅か一秒もない。目を騙す歩法、目で捉えきれぬ斬撃。この二つが合わさって行われた魔技の一連をなした剣客の鋭い瞳が、硬直していた三人目の男へと向けられた。

「ひ、びゃー——」

最早、悲鳴をあげる暇すらも与えぬ。



見えているはずなのにどう動いたのかまるで分からぬ踏み込みで刃の圏内に捕捉された男は、即座に放たれた雷光の突きにより額を抉られ、直後、まるで火薬を使ったかのように男の後頭部が爆ぜ、髪の毛と脳漿と血液の混ざった血肉の固まりがぶちまけられた。

一瞬で作られた臓物の大地、血潮の雨。その中心に立つのは、腹部を裂かれ自身のモツが流れるのを左手でせき止めた瀕死の青年だというのは何の冗談だというのか。

訳が分からん。

だが、こいつを殺さなければ、俺がやられる。

状況の全てが分からないが、己の成すべきことだけは冷静なくらい理解した。

いや、逃げ出せばすむ話だというのに戦闘を選んだことから、既に男は冷静ではないのだろう。混乱が一周して冷静になった風に見えるだけだ。

対峙する宗司には、力など残されていない。ここまで動けただけで奇跡。本来なら指一つ動かせぬ重傷ながら、ここまで歩めたのは執念のなせる業か。

耳垢ほども残されていない意識の中、青年は唯一確かな手の感触を思う。

突撃してくる男は目に映らなかった。

どんなに速く、どんなに力があり、どんなに強くても――。

「うおおおおおおおー！」

己を鼓舞しながら、男はこれまでの最高最大で行った強化の魔術を、さらに二重に掛け合わせることで、強化された者ですら視認できないほどの速度を生み出した。

消える。としか言いようのない踏み込み。零秒で埋められる距離。そして反応される前に振り上げられ、落ちてくる鋼の殺意。

宗司の常識とは違うこの世界でも目を見張るほどの速さと威力。

完璧。

これ以上ない一撃。

「しまらん」

それを宗司は一笑した。視界は見えず、意識は殆どなく、そんな状態でも察知した第六感、男の最強など放たれる前から何処に打ち込まれるかわかっていた。

故に、足らぬ。

故に、及ばない。

これではまるで、俺の修羅には響かない。

臓腑を押さえていた腕は、いつの間にか右手の柄に添えられていた。

露出した腸が噴出すこの間際。抑えても無駄と知ったならば、最後に一つ、己が至った一撃にて。

「天よ——」

凜と歌うは、誰の奏でた音色だろう。

「刹那の桃源に……感謝する」

吐き出された臓物が、敵手の鮮血で温かく染め上げられる。

死ぬ間際まで、斬ることが出来た至福。

この幸福に感謝しながら、今度こそ青年はその意識を手放して、望んだ修羅場たる血肉の大地に仰向けに倒れるのであった。

残ったのは臓腑と死体。空気を汚染する血の香り。

残されたのは、血濡れの少女と死に掛けの青年。

そんな、ボーイミーツガール。

## 第二話 『南蛮独自の、技術かよ？』

幻想世界フアービュラス。海と間違ふほどの巨大な湖『イシス』によつて南北で大陸が分かれたこの世界では、北の大地を悪魔、鬼、竜人などの魔族で、そして南の大陸を亜人、人族、エルフ、ドワーフ等の人間種と呼ばれる者で生活圏を分けられている。

これまで、互いに自身の領土争いに勤しんでいたため、人間種も魔族も互いにイシスを境にして干渉していなかったのだが、今より半世紀程前、突如として北の大地、魔界にて、千年以上空位であった王位に、かつて超絶的な力を持った人間によつて封印された魔王が目覚め、そこに収まった。

その後、自らの圧倒的な力にて、僅か数年で魔界を治めた魔王は、それから一年もしないうちに、人間種を遙かに上回る能力を秘めた貴族級魔族を率いて人間界に侵攻。やはり一年も経たずに、イシス周辺の国家を制圧。奴隷国家と名づけ、支配した。

このままでは人間界が魔族に支配されるのは時間の問題と見た当時の人間界の王族達は、各国の優秀な魔術師を集め、長年人間界と魔界を分けていたイシスを媒体とした巨大な結界を展開。大勢の優秀な魔術師を失いながらも、貴族級魔族以上の魔族の侵入を防ぐ聖域と呼ばれる結界を生み出した。

それにより、爵位持ちの魔族、ならびに魔王の進行を防ぐことに成功したが、彼らの奴隷である魔獣や、爵位を持たない低級の魔族。そしてイシス周辺国家を魔王代理として治める貴族級魔族の進行は苛烈を極めた。

そして現代。終わりの無い魔族との戦いで疲弊していた人間界の最南端。前線で戦う国々とは違い、巨大な山脈によつて他国との接触が難しい場所にありながら、豊富な資源に溢れ、国民の殆どが現在の世界情勢と比べると裕福な王国。

その名をメビウス王国。後方から魔族との戦争に必要な物資を提供することで、莫大な財産を得ている国だ。

本来なら彼らの広大な土地を狙った国々との衝突があつてもおか

しくないはずなのだが、彼らは魔族が進行する以前より、前述した山脈、アポロンという天然の城壁によって国土を守られたため、未だ戦火を知らない稀少な国だ。

そんなメビウス王国と他国を繋ぐ唯一のラインは、王国が抱える優秀な魔術師達によって製作された膨大な魔力を秘めた魔力炉を用いた巨大転移パスのみである。

これにより他国との貿易からも優位に立ったメビウス王国は繁栄を続け、魔族との戦争が始まった現在、人間界の生命線でもあり、同時に他国の人々が憧れる理想郷である。

そんな王国の王都より離れた場所に生い茂った森林の奥にある女人のみしか入れぬ聖域。そこでメール・リンクキャットは、次代の聖剣の守り手として生を受け、育っていった。

森の奥にある美しい湖の見える湖畔に建てられた大きな屋敷。彼女はそこから見える風景しか外の世界を知らない。

物心ついたころには既に屋敷で生活を行っていた。清き乙女にのみ聖剣を見守る役目が授けられる。今代の守り手であるアイリーンにそう言われ育った彼女は、守り手にふさわしい女性であるため、日々魔術の鍛錬に明け暮れた。

生活に疑問を覚えることは殆ど無かった。ただ、一度でいいから外に出たいなあと思いはしたが、それは叶わぬ夢だと幼いながらに聡い彼女は理解していたし、自分は一生をここで過ごすことになるのだらうと漠然と納得はしていた。

そして幾つもの歳月が流れ、彼女は幼さを未だ残しつつも、屋敷に居る大勢の美しい女性達と比べても一際美しいとさえ思えるほどに可憐な美少女へと成長を遂げた。

歳にして十六。「ようやくやく貴女にお役目を託すことが出来ます」とアイリーンに言われたメールは、己の使命に内心で感動したり、やっぱり外に出られないんだという残念な気持ちを感じたり、色々と感情をぐちゃ混ぜになりながら、継承の儀と呼ばれる守り手の受け継ぎ儀式を行うため、屋敷でも未だ一度も訪れたことのない、聖剣の安置所にまで足を運んだ。

いつも以上に豪華な服を身に纏い、しかしそれに負けず劣らずの美貌を緊張に引き締めた彼女は、初めて聖剣の間へと通され、そこで、初めて己の使命を理解した。

祭壇の如きものの奥、壁に立てかけられたその聖剣は、穢れを知らぬかのように純白だった。

鞘から柄に至るまで全てが白。魔術における六属性を現す六つの輝く宝石を装着した鞘は眩しく、一目見ただけで魂が吸い取られそうになる感覚をメイルは覚えたものだ。

「では、継承の儀を」

「……はい」

立てかけられた聖剣を丁寧に取り取ったアイリーンがメイルの前に立つ。守り手のみに許された神聖なる儀式。これをもって、次代の守り手がメイルとなる瞬間、それは唐突に現れた。

「キヤー——」

絹を裂く女性の悲鳴。直後聞こえてきたのは、メイルがこれまで聞いたこともない野太く寧猛な声、男の声だった。

突然の事態にメイルも、そしてアイリーンも動けない間に、聖剣の間にまで賊は一気に流れ込む。

「何を——」

「ひよー！ 上玉発見！ この女は当たりだらけで最高だぜー！」

現れた賊達はアイリーンとメイルを下卑た視線で舐るように見つめて興奮のあまり狂ったように叫び散らした。

「たまんねえ！ さっさと犯しちまおうぜー！」

「そうだ！ けけけ、先遣隊には美味しいところ取られちゃったしよお！ とりあえずここに居るのは俺らでやっちゃまうべー！」

「おほっ、しかも『目標の剣』までありやがる！ 最高！ これで俺らの勝ちってわけだ！」

「貴方達！ ここは聖剣の眠る神聖な——」

「とりあえずやっちゃまえー！」

「ヒョー——」

アイリーンの言葉になど耳を傾けるつもりなど賊には無かった。

身勝手に各々の欲望を口にしたと思いきや、まるで獣のように賊達が襲い掛かってきた。

だが腐つても、ここまで進行してきた男達か。強化の魔術によって体を強化した賊達の速度は速く、瞬く間に二人との距離を詰めて、その穢れた手を伸ばし――

『火炎球』！』

そのよりも速く魔術の詠唱を終えたアイリーンの手から放たれた炎が、先頭を走っていた男の顔面に直撃した。

「ぎがああああああ!？」

一抱えほどの炎が顔面に炸裂したとなれば、たとえ強化されているとはいえ、いや、強化されているからこそ激痛によって悶えることとなる。一瞬で爆ぜた眼球部分を押しえて地面をのた打ち回る賊の一人、だが賊達は速度を緩めることなく、アイリーんと、その背中で聖剣を抱えて震えるメイルに殺到した。

「ヒャア！ 女あー！」

「クツ……！」

伸ばされた手から逃れるように、アイリーンはメイルの手を持つと自身もまた肉体を強化して飛び退いた。

しかし、男達の情欲に塗れた手は次々と襲い掛かってくる。それを何とか掻い潜って反撃しようとするアイリーンだったが、手を繋いでいたメイルが賊の手に掴まれた。

「ひっ……！」

「捕まえたー！」

そのまま強引に手繰り寄せられたメイルからアイリーンの手が離れる。しまったと思ったときには遅い。聖剣を握ったままだったメイルは容易に組み敷かれ、賊は怯え竦むメイルの表情を見て口元を歪めた。

「げへへ。安心しなお嬢ちゃん。俺あ紳士だからよお、最初は優しくしてやるぜえ」

そう言いながら生臭い舌を突き出して、震えるメイルの頬を舐め上げる。言語に出来ぬ不快感がメイルを襲うが、恐怖で逃げ出したい心

と裏腹に、体は主の命令を無視して微動だしない。

唯一、聖剣を抱きしめた両腕だけはしっかりと握り締めた。これだけが心の拠り所だとばかりに抱えた聖剣だったが、男には今から行う行為にそれは邪魔だったのだろう。苛立たしそうに舌打ちを一つ

「とりあえず邪魔だからよお」

「い、いや……」

「剣とついでに、その綺麗なドレスも捨てちまいなあ！」

「いやあ！」

神聖なる聖剣に垢塗れで土に汚れた手が伸びる。その手から聖剣を守るように体を縮こまらせたメイルは、頭の片隅で自分はやはり聖剣を守るために生まれてきたんだなあとどうでもいいことを思いつつ、今から自分に起こりうる恐ろしい出来事から逃れるように目を瞑った。

「止めなさいー！」

そんなメイルの窮地を救ったのは、賊達から逃れてきたアイリオンだ。愚直な突撃のせいで賊達の手を抜けることが出来ず、掴まれた衣服を引きちぎられながら、それでもメイルの、何より聖剣のために飛び出したアイリオンは、何事かと顔を上げた賊の顔面に、儀礼用に装着した小ぶりのナイフを突き立てた。

「ギヤアアアアア！」

左目に突き立てられたナイフから鮮血が溢れ、激痛に悶える悲鳴が木霊する。初めて見る人間の鮮血と濃厚な香りにメイルが眩暈を起こしていると、アイリオンがその体を抱き起こした。

「メイル。今から貴女を屋敷の外に――」

「ふざけんなよこのクソアマがあ！」

逃がします。

そう言おうとしたアイリオンの言葉は、背中を深く切り裂いた男の片手剣によって遮られた。

「あつ……」

滂沱と流れる鮮血がメイルの体を染め上げる。

真つ赤な血。

命の赤。

鮮血。

死。

連想された最悪に思考を停止させている向こう側。剣を降りぬいた片目にナイフの突き立った男が、憤怒の形相で二人を見ていた。

「クソツッ！ 調子に乗りやがって！」

「ヒヤヒヤヒヤ！ だっせえなジエイン！ 久しぶりの女で頭いつちまったからそこできたばったベンみたいにへマすんだよお！」

「うるせえ！ クソツツタレ。もう我慢できねえ。犯すだけじゃ駄目だ。くたばっても早々に捨ててやらねえ。瀕死のこのクソアマの前でそのガキの目ん玉犯してやる。そんなくらいしねえと気がすまねえ！」

怒りで我を忘れた賊の口走った言葉の意味はあまり理解出来ないが、きつとこれから恐ろしいことが起きるのだろう。

蘇ってきた恐怖にメイルが泣きそうになっていると、その頬をアイリーンの血濡れの右手が撫でた。

「アイリーン、様」

「……聖剣を、託しましたよ、メイル」

その右手が力なく崩れ落ちる刹那、メイルを中心に金色に輝く魔方陣が展開された。

「こいつは……！」

「やべえ！ メビウス王国製の転移パス使いやがった！」

その魔方陣を見て、賊達の顔に初めて焦りの表情が浮かぶ。だが時既に遅し。光の粒子が瞬く間にメイルの体を包み込み、閃光が弾けた後、メイルは屋敷の外に出ていた。

「あ、え……」

何が起きたのかわからずに周囲を見渡すメイル。しかし、緊急で行われた転移では精々屋敷の直ぐ側までの転移しか出来ず、どうしているのかわからず周囲を見渡している間に、慌てて外に出てきた男達と目があってしまった。

「逃がすな！」



その中で一際体格のある男の号令で無数の男達がメイ目掛けて走ってくる。

逃げなくてはいけない。咄嗟に判断したメイは、自身に強化の魔術を施すと、聖剣を頑なに抱きしめたまま森の中へと駆け出した。

どうして。

どうしてなの。

疑問は疾駆する己の脳内を駆け抜ける。背後からは野蛮な男達の不愉快な声。こちらを嬲るようにゆつくりと追い詰めているが、メイには己が追い込まれているという実感は当然なかった。

逃げなくてはいけない。

逃げて、この聖剣を守りきらないといけないから。

「なの、に……！」

どうして涙が溢れて視界が滲むのか。

どうして喉が引きつり鼻が詰まり呼吸が難しくなるのか。

どうしてこの足は今にも崩れ落ちそうなのか。

守り手としてそれなりの訓練を積んできた。もしも正常な思考のままだったら、賊の一人や二人は倒せたはずだ。

そしてそれはアイリーンにも言えることなのだが、実戦というものを知らなかった彼女達では、野蛮でありながらも幾つもの実戦を潜り抜けてきた賊達を前に、本来の実力の半分も発揮することが出来なかった。

だからこうして冷静な思考を奪われ、鈍った思考能力で下した判断の結果、悪戯に魔力と体力を消耗したメイはついに転んでしまう。

「へへへ、もう終わりだな」

そこにリーダー格の男を含めた数人の男が意地悪い笑みを浮かべながら現れた。

「い、いや……！」

「おいおい、そんなに怖がるなよお嬢ちゃん。怖がってもお嬢ちゃんが俺達の玩具になることは変わらないんだからなあ！」

「いや、だ……！」

幾ら魔術が優秀であり、守り手と言われていても、戦いはおろか外

も知らぬ小娘では逃げ切れず、ついには追い詰められる。

そこで彼女の咄嗟の行動が、果たして全ての因果の原因であった。聖剣を媒体とした、異世界からの勇者召喚儀式。

決して独断で使ってはならないと、守り手の間でのみ伝わってきた古から脈々と受け継いだ禁断の魔術。

それは、勇気ある者。

それは、人々の希望となる者。

それは、あらゆる魔を払う光の者。

それこそ勇者。

それこそ、英雄。

そして現在、彼女の目の前には臓腑と血肉で描かれた地獄絵図が広がっていた。

「あ、ひ……」

召喚に応じて呼び出された勇者は、儀式が中途半端であつたためか瀕死のまま呼び出された。

だがそんな状態でありながらも、自身の臓腑を撒き散らしながら、黒髪黒目、黒い着物姿という風変わりな異国の青年は賊達を全て斬り捨ててみせた。

しかし、喜べるだろうか。

いや、喜べるはずが無い。

「う、うえ……」

メールの瞳に涙が浮かび、恐怖で緩んだ股からは暖かな液体が溢れ出た。

怖かった。

何がではなく、世界の全てが彼女には怖かった。

鳥籠の子として育てられてきた半生。そこに現れた外の者は、自分の見知った世界を崩壊させ、全てが無くなってしまう。

唯一あるのは、抱きしめた聖剣のみ。この手に抱いた聖剣だけが彼女の拠り所であり、この死だけに満ちた世界で頼りになるたった一つの確信だからだ。

「逃げ、逃げない、と……」

そしてもう一つ。それは聖剣を託したアイリーンの言葉。

その言葉と聖剣を頼りに、大粒の涙を流しながら立ち上がったメイ  
ルだが、汗と血で塗れた掌は、ずつと聖剣を握り締めたせいで握力を  
失い、立ち上がったときにその手から抜け落ちてしまった。

「あつ……い」

慌てて手を伸ばすが、聖剣はするりと彼女の手を抜けて赤い大地に  
落ちる。

ぐちゃり。

ぺちより。

そんな不快な音を立てて死肉に落ちた聖剣は、そのまま横に倒れ  
て、まるでそれが運命かのように、この惨劇を作り出した瀕死の青年  
の掌に納まった。

瞬間、メイは信じられないものを見る。

「う、あ……」

青年の手に触れた瞬間、津波のように聖剣からあふれ出した聖なる  
魔力か。

否。

青年の状態をいち早く察した聖剣『チート』が能力の一部、『無限魔  
力』と『魔術、スキルの最適使用』を緊急起動させて、回復魔術を自  
動で詠唱したその光景。

ばら撒かれた青年の臓物が、生き物のような蠢いてその腹に収まっ  
ていくというおぞましい光景を見て、言葉を失う。

「う、う……あ」

まるでそれは、死肉で練り上げられたおぞましき害虫でも見ている  
かのようで。

最早、耐えることは出来ない。限界を超えたメイは、泣き喚くこ  
とも出来ず、ついに意識を手放して倒れるのであった。

刀を手にしたのは十を過ぎたころだ。

侍と名乗るには些か遅いのかも知れないが、それまでは百姓の倅として慎ましやかな生活を両親としていた。

だが戦があつた。そこに俺の村が巻き込まれ、生き残つたのは俺だけとなつた。

刀を手にしたのはその頃だ。

さて、食料もなく、頼れる家族も居ないと困つた俺が手にしたのは、道端で悶死していた武士の差していた脇差。アレを一本拝借して、それから当てもなくとりあえずさすらつた。

人を斬つたのは、そう遅くはなかつた。たまたま、俺の手にした脇差がそれなりの業物だつた故、それを奪おうとした山賊を斬り捨てたのが始まりだ。

感慨というものは、あつたか、なかつたか。

腑を裂く、というには稚拙な技量であつたが。

するりと入れて。

するりと殺す。

そこで俺は閃いたのだ。

そうだ。強くなろう。

そんな、懐かしい記憶。

ふと、目覚めた。

「ん？」

パチリと開いた眼を一周。辺りを見渡したところで上半身を起き上がらせる。

「……桃源と語つたが、事実であつたか」

周囲を満たす臓物温もりを肌で感じつつ、件の青年、宗司は、歳のわりに幼いと言われるその顔を軽く一撫でした。

続いて腹部を撫でて、驚愕する。

「なんと……」

背骨まで届かんと思うくらい腹部の裂傷が一切見当たらない。それどころか、あの剣豪との死闘で受けた傷の一切が治っている。着物が心当たりのある傷口の部分に沿って斬られているため、決して夢

幻というわけではないのだろうか。

「狸か狐……化かされたかな」

まるで状況が理解出来ない。

コレは困ったぞと、まるで困った風に見えない表情で軽く口ずさんだ宗司は、一先ず右手にかかっていた装飾のごてごてしていた剣を放り捨てて、柄部分がぼろぼろの刀を拾い、起きたときに察した呼気のほうへと視線を向けた。

寝ているのは、壮絶な光景に意識を手放したメイルである。

「南蛮娘？　というより、こいつら全員、南蛮の者か？」

驚きのあまりわざわざ口に出して確認してみる。生涯の殆どを日の本と呼ばれる島国で暮らしてきた宗司にとって、顔の作りが異なる彼らの顔は見慣れぬものだ。

剣豪との死地を超え、意識を失いかけ、いつの間にか南蛮の者と斬り結んだ。

過程がぶっ飛んでいるよな。なんて宗司は無い頭を捻って考えるが、幾ら考えても何かが分かるわけではない。

とりあえず、この場で唯一の生存者であるメイルを起こすことに決めた宗司は、メイルの体を抱き起こすと、その背中を軽く力を込めて叩いた。

「ッ……！」

「おお、起きたかの。俺は宗司と言う。起き抜けですまぬが、一体ここが何処なのか——」

「きやあああああ！　いや！　いやあああああ！」

宗司に起こされたメイルは、朗らかに語りかけてきた宗司（臍物と血塗れ）を見るや否や、錯乱した状態で暴れだした。

咄嗟に押さえ込もうとした宗司だが、即座にメイルの細腕からは考えられない力を察して距離を取る。気絶したとはいえ時間が然程経っていないため、メイルにかけられた強化の魔術は残ったままだったのだ。

だがそれを知らぬ宗司は、己を遥かに凌駕するメイルの怪力に目を丸くした。

「なんと怪力」

「止めて！ 来ないで！」

「……ともあれ困ったのお」

怪力はさておきだ。

何故だか知らないが怖がられているらしい。肩に乗った小腸の束をそこらに放り捨てながら、どうしたものかと悩む宗司の前で、メイルはいつそう錯乱して尻餅をついたまま号泣する。

最早、言葉にすらなっていない。只喚くだけのメイルを眺めて暫く、「あまり使いたくはないが」と呟くと、喚くメイルを見据え、掲げた指先の人差し指をおもむろに立てると。

「せい」

などと、気の抜けた言葉と共に、メイルを指差した。

「いやああああ、あッ……！」

たったそれだけで、錯乱していたメイルの動きが停止する。どころか、体中の力が抜けて、再び股を濡らす始末だ。

今のは殺気を用いた気当たりと呼ばれる難しい技術だ。本来、達人相手に殺気をぶつけて、自分が斬りつける箇所を惑わす技だが、こうして一般人が相手なら、その生存本能をたたき起こして、一瞬で体の自由を奪うことが出来る。

欠点は体の力が抜けて、大抵の場合股間を濡らすということなのだが。

「すまぬな。女子（おなご）に恥をかかせるとは情けないが、これも一旦落ち着いてもらうためだ」

「う、う……」

「……暫く、声が出ないようにするぞ。その間に俺のことを話す。敵ではないということを知ってもらう。いいな？」

有無を言わさぬ宗司の言葉に、メイルは自由を奪われた内心で喚き散らしていたが、敵意無く真っ直ぐにこちらを見つめてくる宗司の瞳を見ていると、何故か脳内の混乱が少しずつ収まっていくような気がした。

「……さて、先程も述べたが、俺は宗司と言う。字は……こうも汚いと

土に書くわけにも、というかお主、俺の言葉、わかるのか？」

メールの顔を見て、宗司はどうしたものかと唸った。

そう、南蛮だ。何はともあれ異国の少女だ。幾ら学が無くても、人づてに南蛮の人間は日の本言葉ではなく、別の言葉で語るということは聞いている。

これでは語りかけたところで意味がないではないか。

どうしようもなくどうしようもない現状に宗司は困惑にしどろもどろしていたが、突如その視線がメールの奥に向かった。

「五人か、どうやらお主の声でこちらに気づいたようだな」

「ッ!？」

「お?」 反応したということは、俺の言葉がわかるのか」

誰かが近づいていることに目を見開いたメールの表情を見て、とりあえず言葉が通じていることに宗司は安堵した。

だがメールはそれどころではない。この状況で迫る者といえば、間違いないあの賊達だ。

逃げないと。そう思うが、宗司の殺気の影響は抜けず、未だ体は微動だしない。

そうこうしているうちに、草木を掻き分けてぼろぼろの宗司に負けず劣らず不潔な男達が言ったとおりに五人現れた。

「いいッ!？」

「なんじゃこりゃ!」

「嘘だろ、これ、兄貴じゃねえか!？」

「何で兄貴が……」

「それより目の前だ!」

「よお」

宗司は五人の視線が集まったところで、軽く手を上げて会釈した。

だが気軽な宗司と対照的に、対峙する男達は表情を引き締めて片手剣を抜き払い、魔力の輝きで体を満たし肉体を強化した。

あれが、敵だ。

宗司と相對する五人は、本能で目の前の男が自分達の敵であると理解した。

「……話すつもりはない、か」

場を満たす殺気の塊。静かに見渡し、話しあう余地はないと悟る。良きかな。良きかな。

険呑な空気に肩を竦めながら、宗司は隠すことも無い愉悦を目に浮かべ、腰の鞘からその愛刀を見せびらかすように引き抜いた。

賊達の片手剣が、大量生産された粗悪な物に対して、宗司の抜いた日本刀は色香とでも言うべき不思議な魅力を放っていた。

なだらかな弧を描いた刀身。光を反射する鉄の冴え。薄く研がれた刃は周囲の風景に溶けるくらいに鋭い。

賊達の剣が打撃武器にしか見えなくなるくらい、その日本刀はひたすらに斬るということを突き詰めた、芸術品とも呼べる仕上がりである。

息を吞まれる、とはこのことを言うのだろう。刀の色香と、それを操る宗司の放つ色気。性欲の沸かぬ美しさ。絵画を前にした人々のような気持ちだが、この極限状態だというのに賊達の胸に去来した。

「我流、宗司。愛刀は無銘。共に名の無き無頼の剣客」  
傷はどうやら完全に治っているらしい。

動かしても痛まないのを確認した宗司は、こちらに見惚れる賊達に名乗りを上げると、滑るように足を踏み出し、腰構えに刀を寝かせた。

「いぎ、尋常に」

一手。馳走。

宗司はそのまま吹き飛びそうなくらい軽やかに一步を踏み出した。

その初動。強化の魔術で向上した男達の反射神経ならば容易に視認することの可能な踏み込み。

だというのに、見逃した。

否。

見るのに頼るから、宗司の踏み込みを理解しきれなかった。

「あっ」

奇怪と言うほかないだろう。ぼろぼろの袴の下に隠された宗司の足捌きは、体を一切動かさずに一定の速度で前進しているように見える。それだけでも異常だが、その実、不規則に速度を増減させること



で、一定の速度で真っ直ぐ進んでいるのに、どうしてか進んでいないように相手の視界を錯覚させた。

こちらに迫っている。

だが、こちらに迫っていない。

本来は達人を相手にしたとき、敵の間合いを攪乱させて空振りさせるための技術なのだが、進むのに進まないという矛盾する宗司の歩法は、強化によって良くなりすぎた彼らの目にはあまりにも毒となる。

眼球からの情報ではどうしても処理しきれないその動きに、一秒もせずに目を酷使した彼らの脳髄は、激痛をもつて宗司を見るなど訴えてきた。

その隙を逃さず、するりと間合いに到達する。

「奇怪な気を感じるが……」

構えも歪。

呼吸もばらばら。

殺気の出所で動きの所作も丸見え。

そんな彼らに対して宗司が己の技術の一端を見せびらかしたのは、彼の第六感に触れた男達の発する奇怪な気の流れを感じてだ。

似たような気を感じたメールは、先程、見た目からは想像の出来ない怪力を発揮してみせた。

そして不確かな記憶が事実なら、意識を失う直前に戦い、今は回りで骸を晒す男達は、踏み込みの速さだけならば信じられない速度を發揮していた。

「それは、南蛮独自の技術かよ？」

「ひっ!？」

宗司は一番手前に居た男の間合いよりもさらに深く入りこむと、その奈落のように黒い瞳で男の顔を覗きこむ。

恐怖に怯えた男の顔からは何も答えは返ってこない。

仕方ないか。

宗司は嘆息ついでに男の首に刃を突き立てた。

「え?」

「そりゃ」

痛みに叫ぶ暇もなく、目を丸くする男の首筋に刃を刺した宗司は、気楽な掛け声とともに捻るようにして刃を引っこ抜いた。

するとその先に、器用に絡めた頸動脈が現れる。生きるために必要な血を供給する大事な血管。どくどくと血を流す命の糸の動きを刀越しに感じつつ、宗司は顎をしゃくり注意深くその流れを見た。

「え、え？ 痛、いたた、いたたた」

「不可解な氣の流れだが……ふむ、どうやら血の流れは変わらんらしい。こういう場合、脈の流れが異様だったりするのだが。氣の運用とは違うのか？」

「え、ちよ、俺、首、痛い、どうなって……」

「では、死ね」

それを確認出来たら、用済みだ。

痛みはあるが、自分がどうなっているのか分からず慌てふためく男の頸動脈を、宗司は躊躇なく斬り裂いた。

まるで痛んだゴムを裂いたような抵抗の後、半ばから絶たれた血管の切り口から滂沱と流血が始まる。

蛇口の壊れた水道管のようにとめどなく噴出す己の血に塗れ「あー。あー」とか細い悲鳴をあげつつ男が倒れるその間。

裂いた脈から血が流れる刹那の間に、いつの間にか周りに居た三人の首が虚空にむけて飛んでいた。

「……岩を裂く手応えの人肌とはな」

切り捨てた首の感触に宗司は首を捻りつつ、残った一人を静かに見つめた。

「ひ、ひいいいいー！」

「……戦意を失ったか」

片手剣を放り投げ尻餅をついた男を見下ろして、呆れた様子で宗司は肩を落とした。

どうせなら奇怪な氣の運用。つまりは魔術を使った動きを見せてもらいたかったのだが、戦意を失ったというならば仕方ない。

宗司は斬るのが好きなのではなく、戦って斬るのが好きなのだ。

その点で考えれば今の一合は戦いとは言えないだろうが、それはそ

れ。別に好きな斬り方が戦う中であり、それ以外の場所で斬らない道理など何処にも無い。

斬るのだ。

それだけ。

「つまらん。失せろ」

さりとして、無抵抗な弱者を斬り捨てするほど享楽に耽る男ではない。

刀を鞘にしまつて告げた宗司の一言を聞くや否や、生き残った男は尻を向けて涙を流し悲鳴をあげながらその場を後にした。

「……つまらん」

もう少し歯ごたえのある者と戦いたかったものだ。

そこまで考えて苦笑。生きてるだけで御の字なのに、この上早速敵を欲する己の欲の深さには呆れるばかりだ。

「……さて、そろそろ解けているはずだが？」

やるならば相手をしよう。

その背後、殺気の呪縛から抜けてこつそり聖剣を拾ったメールを見ることがなく宗司は告げた。

「ひっ……い」

僅かとはいえ、賊の放つ獣欲とは純度の違う戦意を向けられてメールは再び臓物の海に腰を抜かしてしまう。

ぱちやりでぐちより。不快な感触に再び起き上がったメールは震える足で臓物の海の外へと逃げてから再び腰を抜かして倒れてしまった。

「ハハッ、見ていて飽きぬ女子だな」

生まれたての馬みたいにガクガクなメールの動きを見て、宗司は面白おかしいと声をあげてひとしきり笑うと、逆に声を殺して泣いているメールの側に近寄り、有無を言わさずその体を肩に担ぎ上げた。

「え、ええっ!」

「うむ。やはり気の流れが失われると怪力もなくなるようだな」

突然担がれて慌てふためくメールだが、その抵抗は先程よりも頼りない。混乱のあまり魔術を使うことすら忘れてしまったメールは一

通り暴れると、抵抗が無駄と悟り動くのを止めた。

「すまぬなあ。何せ俺という男は女子の扱いに慣れてない故。さりとて回りくどいやり方はあまり好かん……それで、落ち着いたかの？」

宗司の問いかけにメールは聖剣を抱きしめて力なく頷きを一つ返した。

「あの、ありがとうございます」

思い返せば、本人の意図がどうあれ、宗司が窮地にあつたメールを助けたのは事実である。

そう、窮地だ。

ふとそこで、あまりにも唐突に己の身に降りかかった災厄と、追込まれた窮地の全てが走馬灯のように脳裏を駆け抜ける。

アイリーン。私を庇って死んだ。

他の子もそうだ。私以外、きつと皆。

「う、ひっ……うえ」

「あん？」

黙りこんだかと思えば、今度は再び声を押し殺して泣き出すメールを見て、宗司は困つたものと眉を潜めた。

確かにメールには色々とおつたのだろう。武装された男達に襲われていたのだ。それを考えれば確かに泣きたくなるのも無理は無いが。

だからとて、困っているのは宗司も同じである。そして、宗司という男は、女が泣いているからといって遠慮や配慮が出来るほど器用な男ではなかった。

「とりあずここを出るぞ。こう臭くては堪らんからな」

「う、うう……ひゃい」

「返事が出来るなら良しとしよう。ところでお主、何処か近くに水浴びの出来る場所を知らんかの？ お主も俺も、こう臭くては獣の良き標的となってしまう故」

その問いかけに、メールは言葉ではなく指先で道を示した。

「どうやらこの先に水浴びできる場所があるらしい。」

「では行くか。ほれ、少々揺れるが我慢しろよ」

「あい」

「……大丈夫かのお。こやつ」

これだから女子という生き物は良く分からんのだ。

宗司は内心で溜め息を吐き出すと、示された道のほうへと歩き出す。

或いはそれは奇跡みたいなものだろう。何せ外の世界など知らぬメールだ。それが恐慌状態のまま森の中を走り続け、未だショックから立ち直っていないというのに、正確に水浴びが出来る場所。つまりは湖の方角を示すことが出来たのは。

そしてそれは同時に不運でもあったのだろう。

十人近くの賊を斬り捨て、まあ他には居ないだろうし、居たら居たとして面白そうだからいいやと賊のことを気にしない宗司。

そもそも世間のことなどまるで知らないため、帰巢本能で湖のほうを示してしまったメール。

その行く先にあるのは、当然ながら惨劇の起きた屋敷のある場所か他ならず。

未だそこには、賊の残党が残っているのだということに、二人はこの時全くもって気づくことはなかったのであった。

### 第三話 『借りた力に、意味は無く』

楽な仕事だったと思う。

その日、メビウス王国と他国を遮るアポロン山脈の向こう側のとある国にて、山賊まがいのことをして生計を立てていた小さな傭兵の集まりであるボルデス傭兵団は、得体の知れない不気味な男からとある依頼を受けてメビウス王国に出向いた。

とはいえ、その男の先導を受けての密入国なのだが。そうでなければ自称傭兵を名乗るだけの小汚い山賊である彼らがメビウス王国と他国を繋げる転移パスを使えるわけが無い。

依頼は王国の外れにある聖なる森の奥深くにある魔法剣の奪取。それ以外は好きにしてもいいと言われたので、ボルデス傭兵団は言葉の通り好きなように森の奥に建てられた大きな屋敷を襲撃し、略奪の限りを尽くした。

はつきり言って、屋敷の抵抗は殆ど無かったといってもいい。粗野で知能が足りない彼らだが、腕っ節だけはそれなりだ。実戦経験のまるで足りない屋敷の警備兵やその他侍従などは容易く組み伏せ、思い思いにやりたい放題やっていた。

だがいざ目標の剣を見つけたと思いきや、転移魔法によって屋外への逃走を許してしまう。

しかし折角の脱出の機会を、逃がされた少女は外で呆けてこちらに直ぐ見つかったってしまったって棒に振る。呆気なく見つけたが、折角だし狩りでもするかとリーダーであるボルデスが、逃げた少女を八人の部下を引き連れて追いかけて行って、それから数十分。

今頃、捕まえた少女をめちやくちやにしているんだろうな。そんなことを屋敷に残った部下達が、大広間で今回の『戦利品』を物色しながら思っていると、慌てた様子で少女を捕まえにいった男の一人が血まみれの姿で帰ってきた。

「あ、兄貴がやられた！ 他の奴らも！ 皆死んじまった！」

「は、はあ!?!」

その衝撃の一言にどよめきが賊達の間走る。

「や、やられたって……全員か!？」

「ああ！俺以外全員やられちゃった！ありや化け物だ……！いや、死神に違いねえ……！」

「おい！おい！」

「おしまいだ……もう駄目だ……」

一体何を見たというのか。修羅場はそれなりに潜ってきた男が、怖い話を聞かされた子どものように体を丸めて震えている。

増援が来たのか？

そう思っただけを浮かべる一回は、「ぎやあああああ！」という外で見張りをしている下っ端の声を聞いた。

「ッ!? 来たのか!？」

「ひいひい！」

唯一全てを知っている男が悲鳴をあげるが、その程度で怯むほど彼らは悪党暦は短くない。

むしろ上等だと氣勢を漲らせ、次々と広間に居た男達が外に飛び出していく。

その中、ボルデスの右腕にあたる男、バツズは外に出ると、こんなこともあるかと金で雇っておいた用心棒に声をかけた。

傭兵の用心棒とはなんとも締まらない話だが、こういうことを想定して雇ったのだ。ならば相応に働いてもらわなければ困るというものの。

「へへっ、出番ですぞ旦那」

「……そうか」

のそりと起き上がった用心棒の背丈は異様なまでに高い。それに筋肉質で背が高いバツズと比べても倍ほどは違う背丈。その全身に抜き身の剣のような無骨な輝きを放つ使い込まれたフルプレートアーマーを纏っている。

腰には人間では使うことはおろか持ち上げることすら不可能なほどの剣、否、それは最早鉄の塊を強引に剣の形としたとも言えるべき鉄塊を差し、手には三メートルを超える巨体を隠すタワーシールドを持っている。

曰く、巨人族と人間族のハーフ。巨人の力強さと人間の知恵と魔力。両方の性質を備えた類まれな戦闘者である。

「……命を捨てるか」

フルフェイスのメツトのせいで声が濁っているが、バツズはそう呟いた用心棒の言葉の意味を図り損ねていた。

「そりゃ、どういう意味ですか？」

「濃厚な闘志を感じる……あれでは向かった先から悉く斬り捨てられるな」

視線を屋敷の外に向けた用心棒は、そう言う最早語るまいとばかりに歩き出す。

「ま、待つてくださいえー！」

慌ててその後を追いかけるバツズの静止を無視して、用心棒はこの先に待ち受けているだろう想像を超えた死闘を思い、その大きな掌を強く握りこむのであった。

森を歩く間、泣きじゃくるメールから辛うじて名前を聞き出すことまでは成功した宗司は、一先ずいつまでも耳元で泣かれてはかなわないので、彼なりに気を利かせて色々話を聞かせていた。

その殆どが斬り殺してきた強敵の話ばかりという血なまぐさい話のため、まるでメールの心が晴れることはなかったのだが、とりあえずざつくばらんに半生を語っていた宗司の話がその最後、老剣客との話を終えたところでメールの反応が変わった。

「それから突然この森の中に飛ばされたのだが……お主、理由を知らぬかの？」

「……ごめんなさい」

「ん？ お主に謝られるようなことをされた覚えはないのだがな」

奇怪な話だ。

宗司が首を傾げると、メールは鼻水を啜り、喉を引きつらせながら、宗司の身に起きたことをゆっくりと話し出した。



「ソウジさんを、ここに来たのは私のせいです。本当は禁止されていた異世界より勇者を召喚する魔術を使って、なんの関係もない貴方をここに呼び出して……」

「なるほど。まっ、それは良いとして」

「え？」

「良いと言った。それより気になるのはお主、どうやって俺の体の傷が治ったのか知っているか？　一瞬で治るような傷ではなかったはずなのだがなあ」

「いや、いやいや、ちよつと待ってください！　何の関係もない貴方を勝手に呼び出したんですよ!?　しかも人々の総意ではなくて、私の個人的なわがままで、それを——」

「うっさいのお。耳元で犬のように鳴きおつて。つたく、それに関しなくてはならぬ。所詮、当てなく流浪と流れていた身、お主の言っていることは全くもってよく分らんが、連れ出された程度で怒るほど器量の小さい男ではないつもりだ」

「だけど……」

尚も何かを言い募ろうとするメールに対して、宗司は困ったように頬を掻くと、「ならば俺の傷が治っていることについて教えてくれ。それで許すということはどうだ」そうメールに告げた。

それでも納得できない様子の子のメールだったが、しかし宗司の困った風な笑みを浮かべて、これ以上は逆に迷惑だと悟り、渋々とだが領きを返した。

「……えつと、多分ですけど、ソウジさんの傷が治った理由は、この聖剣『チート』のおかげだと思います」

「聖剣ちいと？」

「はい。これは選ばれた者にのみ使用が許される聖なる剣で、手にしたものはありとあらゆる災厄を払いのける力を入れることになります」

それがこれです。メールは抱きしめていた聖剣を丁寧に宗司へと差し出した。勿論、肩に担がれた状態なので何とも珍妙だが。

「あの時、偶然聖剣の柄がソウジさんに触れて、その能力の一つである

無限魔力と、それを用いた緊急の魔術詠唱によって、ソウジさんの致命傷が回復したというわけです」

「無限魔力？ 魔術詠唱？」

なんだそれは。

疑問を投げかける宗司に、メールは驚きを露にした。

「え、ソウジさん魔術を知らないのですか？」

「知らん。俺が知っているのは棒振りくらいだ。それすら極めたとは言えぬ体たらくよ」

謙遜なのではなく、本当にそう思っているのだろう。メールからすれば、無数の敵をこの細い剣、刀で容易く屠っている姿を見て、彼がとてつもない剣士と思ったのだが。

「説明するよりも、ソウジさんが本当に勇者なら、この聖剣を引き抜けばわかるはずですよ」

魔力を用いて扱う魔術。

そして魔力とは違う生命のエネルギーを使って扱うスキル。

伝説通りなら、聖剣はその二つについて、ありとあらゆる情報を蓄積し、使えるようにしてくれるはずだ。

「……まっ、物は試しと言うしな」

騙されているような気がするが、試してみる価値はあるだろう。宗司からしてみれば、装飾が派手で扱い辛いようにしか見えない聖剣『チート』の柄に手をかける。

すると、掴んだ聖剣から再度激流の如き魔力が溢れ、宗司の脳裏に無数の情報が駆け巡った。

「これは……すていたす？ 何だこれ」

膨大な情報が脳内を圧迫したのは一瞬。宗司は自分の脳裏にステータスを展開してくださいという機会な電波を受信した。

ここまで来たら試してみるか。

担いでいたメールが魔力の嵐で悶えているので一先ず下ろすと、脳裏に映像として見えるという奇妙な感覚に悩みつつ、刻み込まれた情報の通りにステータスを起動させた。

すると、聖剣の切っ先から魔力の光が前方に放たれ、空間に四角い

映像が投射された。

名・宗司。

性・男。

歳・18

称号『聖剣の担い手』

レベル1

HP・260168

MP・150000

筋力・8031

体力・8016

魔攻・8001

魔防・8002

敏捷・8052

幸運・2505

スキル・全派生技可能。習熟レベル100。限界

魔術・全属性使用可能。習熟レベル100。限界

@：・習熟レベルi0tji：@@；l。不可

lp？・習熟レベルjiejie9ju48；@。不可

「これは……」

「ステータス、つまり自分の能力を数値化した図みたいなものです。ソウジさんのように聖剣などの専用の魔法具で見ると、少し難しいですが、これ専用の魔術を使って確かめることができます」

「……己を数値で測る、か。戯けた話だ」

数字で測れる程度の力に何の意味があるというのか。宗司がメイルには聞こえないような小さな声で呟く一方、空間に映し出された宗司のステータスをメイルは食い入るように見ていた。

「凄い……」

「ん？」

その後ろからステータスを覗き込んだ宗司だが、イマイチ平均がどれくらいかわからないので凄いや言われてもピンとこないし、そもそもこの聖剣を握った状態で感じる今の全能感を数値化しているのな

らば、自分の能力ではないため嬉しくもななともなかった。

「これ、凄いのか？」

「凄い、はずです。私もちゃんと見たわけではないですけど、以前習ったとき、王国の優秀な騎士さんでレベルが40で、全能力の平均が1000に届くかくらいですからね」

「ふーん」

「あの、凄いことなんですよ？」

「だが、この聖剣とやらの力だろ？ なら喜ぶ必要もないし、借り物で得た力などに興味はない」

「そうかもしれないけど……それにしても、この読めないものはなんでしょうか」

「知らん。聖剣がトチ狂ったのではないか？」

宗司はそう言うと、右手に掴んだ聖剣を掲げた。

確かに凄まじい剣らしい。もった瞬間、ありとあらゆる全能感が体を満たし、今なら何でも出来るような気さえする。それこそ、空だつて飛べそうな感じだ。

手慰みには丁度いいかもな。

宗司は内心で聖剣をそう評価すると、何の未練もなくあっさりと聖剣を鞘に戻して、メイルに手渡した。

偽りの全能感が消え、唯一無二の己自身の実感が戻ってくる。

まるで体を作り変えられたみたいだと宗司は思った。万能の力を行使するのに相応しい体に作り変えるという聖剣の力。

だが、要らない。

「天地万物に対し、己一つで我を張るからこそ人間だろうに」

「ソウジさん？」

「なんでもない。行くぞ、めいる殿……もう、一人で歩けるかな？」

からかうような宗司の言葉。思った通りではなかったが、何とかメイルがそれなりに元気を取り戻したことに對する安堵はある。

同時に、聖剣を握ったことで得られたこの世界についての情報が、隠しきれない喜びを宗司の内側を満たしていた。

「そうか。強い者が無数と居るのか……」

聖剣が宗司に与えた魔術などの技の数々から予想される戦闘力は想像を絶するものだ。人型の生物が容易く大地を砕き山を割る。そんな超人的技の数々を操る者が無数と存在する世界で、己の培った理はどこまで通用するのか。

愉快、痛烈。

「楽しみだなあ」

見えぬ敵手を思い浮かべて森の中を歩いていく。

そうしてようやく森を抜けたところで、二人は目に広がる澄んだ湖と、その側に建てられた巨大な屋敷が飛び込んできた。

広々とした屋敷の門には、地べたに座り込む不衛生な男が五人。その全ての視線が、おろかにも姿を現した宗司とメールのほうを見た。

「あ……」

そこでようやくメールは己がおかしてしまったミスに気づく。というよりも、これくらい気づいてしかるべきだった。

だが籠の中しか知らない少女にとっての世界とは、やはり籠の中か、もしくはそこから見た外の景色くらいしか存在しない。

結果として、彼女が指し示した道は、折角逃げ出した地獄への道筋であった。

どうしようもなく愚かな自分の行動に、メールは当惑を露にして隣の宗司を見上げる。

怒っているのか。

或いは呆れているのか。

いずれにせよ、良い感情をもたれてはいないはずだ。そう思いながら、それでもせめて謝らなければと決心したメールは、宗司を見上げ、言葉を失った。

「……く、はっ」

内の熱気を吐き出すかのような笑い声。先程まで柔和で優しかった黒い眼差しは冷たい氷に触れたような熱を孕んでおり、その視線は前方でこちらに向けて剣を抜き払った男達に向けられていた。

「ソウジ、さん」

「下がってろ、めいる殿。何、直ぐに終わらせてみせよう」

そう言いながら腰の鞘から刀を抜刀しつつ、宗司はゆっくりと男達目掛けて歩みを始めた。

「あ……い」

そこでメイルは己の手に持った聖剣のことを思い出し、せめてそれを渡そうと宗司に向けて歩き出す。

だがその歩みは一步目を踏み出すことなく、空いた掌を突き出されて留められた。

「要らん。持っておれ」

「で、でも——」

「俺は、俺だ」

宗司は、メイルが言い終わる前に言葉を被せてきた。

その視線が見るのはメイルの抱きかかえる聖剣『チート』だ。

確かに強力であり、自身の傷を癒してくれた素晴らしい武器だとは思う。

だからこそ。

「借り物の力なんぞで、闘争を楽しめるものか」

五体全てに我を通す。宗司にとって闘争とは己の身で行うものであり、決して借り物の力に頼ってはならないのだ。

研鑽した技術。

練磨した経験。

繰り返す度、己を研ぎ澄まし、死地を越えて得たのが今の自分だ。ならば、戦場（いくさば）にそれ以上のものなど不要なり。

「それにな、めいる殿。さつき分かったのだが」

宗司は朗らかな笑みを浮かべつつ一言。

「それ、使わんほうが俺は強い」

「え？」

それは一体どういうことなのか。

そのことを問う前に、宗司は一陣の風となって、屋敷の前の賊達へと突貫した。

## 第四話 『巨人を、斬る』

一つ振るって骸を二つ。

二つ振るって骸を四つ。

三つ振るえば骸は散って。

修羅と踊るこの戦場（いくさば）で、華と散らすは命ばかり。諸行無常と笑うことなく、悪鬼羅刹の外道の地にて、土の色さえ紅に染め上げよう。

故に、斬る。

最後の一人を葬った異世界の斬撃は、敵手の肋を抜け、その臓腑のみを斬り裂き散らす。

「斬られるだけなら、木偶でも良いわ」

鮮血に濡れる空気を螺旋と描き、翻る鋼が血潮の雨を自在に操る男は、そう周囲の骸に吐き捨てた。

「な、んだ、こりゃ……」

「……」

バツズと用心棒。二人が到着したとき、既に賊達は全員細切れに斬り捨てられていた。

首を取られたものはまだいいほうだ。その殆どが腹を大きく裂かれ、溢れ出た臓物をぶちまけて、苦悶の表情を浮かべて死んでいる。

まさに惨劇と呼ぶにふさわしい光景を生み出したのは、血の海に立つ不可思議な衣装、着物を着た異国どころか異世界の剣士、宗司。

「腰を振って力を失ったからそうなる。情欲に飲まれた侍などつまらぬものよ……なあ、その大きなお方も、そう思わぬか？」

宗司の瞳は、既に隣で恐慌するバツズではなく、その隣で不動の大木の如き威圧感を充実させる全身鎧を纏った用心棒に向けられていた。

「……」

用心棒は答えず、代わりとばかりに腰の鞘から剣を抜き払うことで返答した。

一転、バツズは宗司にも負けぬ威圧感を漲らせる用心棒の鬼気に気

おされて、潰れた蛙のような悲鳴をあげながら腰を抜かした。

「良き、気迫よな。この異世界とやらに来てから一日も経たぬというのに、お主のような素晴らしき侍と交わることが出来るとは……悪運ばかりではなく、俺もどうやら運が良いらしい」

既に刀を抜き払っている宗司は、見上げなければならぬほどの巨躯の威圧感を受け流しながらその前に立った。

柳に風とばかりに、遠くで見守っているメイユすらへたり込んでしまふほどの力を気にも留めず、黙して語らぬ用心棒の間合いの一手前で立ち止まる。

「……強化を使え」

フルフェイス越しのためか、何処かぼやけた声を宗司は聞いた。

「生憎と、魔術とやらを知らぬ身……何、退屈はさせん。俺の術理、自慢はせぬが、武士には何かと人気の見世物故」

「私を侮るか」

用心棒の声に不愉快そうな声色が混じる。

確かにここの常識で考えれば、魔術を使わず戦おうという宗司の主張は侮っていると思われても無理はないだろう。

だが、しかし。

「侮る、ね」

常と同じく刀を腰構え。刃を寝かせて、蹴り足を後ろに一步引かせて半身を僅か下げる。

あえてこれより行う動きを悟らせる体勢。それを見せた理由は、この敵手の目を覚ますため。

「戯け、それはこちらの台詞だ」

轟、と死肉の大地を宗司の足が食む。力強い踏み込みの後、一筋の稲光となった宗司が、用心棒の剣の間合いへと入り込んだ。

強化魔術を使わない人間と使った人間。本来ならその性能差は単純に五人分の能力差があるとされている。

それほどまでに強化魔術の恩恵は絶大だ。だが宗司の踏み込みは、恐るべきことに強化された兵士とほぼ五分の速度域にまで達していた。



「ッ!? だが!」

しかし、それはあくまで並みの兵士と五分ということ。幾ら速いとはいえ、所詮は凡俗と同格では、確かに一瞬は用心棒を驚かせるものの、容易く反応されてしまう。

腐った傭兵団に雇われたとはいえ、その実力は折り紙つきだ。巨人の身体能力に、人間の魔術の力を重ね合わせたその力は、巨人族の一撃すら遙かに上回る。

まるで巨大な樹木の壁が高速で叩きつけるかのように、閃光と化した宗司をすら遅いと断ずる神速の一刀は、違うことなく宗司もろとも地面を叩き壊した。

「ひ!」

遠くに居たメールが悲鳴を上げるほどの轟音と振動が発生する。巨大な火薬を弾いたような一撃によって、死肉は吹き飛び、巨大な土埃すら発生した。

巨人の一撃。

技術を嘲笑う単純な力の直撃を受けて生き残れる道理は、ある。

煙幕を突き破って用心棒の左側に回りこんだのは、埃で汚れている以外は無傷の宗司だ。

「ぬっ!?!」

「力任せ。だが、分かっていたら安い一撃よ」

「貴様あ!」

見た目通りの騎士としての誇りがあるのか。己の一撃を嘲笑った宗司を斬り捨てんと真一文字に鉄塊が振るわれる。

しかし、用心棒がその動作に入ったときには、既に宗司はその剣内には存在しない。まるでこれから振るわれる斬撃がわかっているかのように、鉄塊の剣筋の半歩手前に身をおいた宗司。

やはりと言うべきか、大振りの空振りを果たした直後、宗司はその隙を狙って一步を踏み込んだ。

「カー!」

大きく開いたその懐へ、猿叫もかくやとばかりに氣勢を発した宗司が飛び込む。神速には至らずとも、隙を晒した今ならば充分に間合い

を詰めることは可能だ。

そして、間を詰めれば敵手が鋼鉄を武装しようと思わない。ギラリ揺らぐ瞳は嬉々として、妖艶振りまくその愛刀をまずはその無骨な鎧を纏わぬ関節へ。

「はあー！」

だが宗司の目論見は直前で二人の間に立ちふさがった巨大なタワーシールドによって防がれる。

その威容はまさに壁。鋼鉄を重ね合わせ、魔術的に強化されたそのタワーシールドは、見た目以上の頑丈さと取り扱いの良さがある。

「盾だー！」

「否、我が刀よー！」

宗司は己の前に立ちふさがる障害へと刃を解き放った。

斜め下からの、掬い上げ。宗司が特に得意とする一振りには、まるで一切の抵抗もせずに下段から上段までを斬り抜いた。

同時、凜と響く刃鳴りの音色が場を満たす。

斬り捨て御免と歌うことなく、語るに及ばず斬り落とす。

「があー！」

斬撃に僅か遅れ、タワーシールドの下半分が切り裂かれる。

さらに、たまたまその取っ手を握っていた用心棒の左手の薬指と小指が、装着していた手甲ごと切断され、その断面から勢いよく熱血が迸った。

「侮るなと言っただろうが」

「貴様……！」

激痛に悶えた時間があれば、宗司ならばトドメの一撃を放てたはずだ。しかし宗司はそうすることなく、刀を肩に担いで得意げに喉を鳴らし、用心棒が立ち直るのを待った。

「そら、これで終わりか？」

「まだだ……！」

用心棒は切り裂かれた左手に渾身の力を込めた。すると筋肉の収縮によって出血が収まる。巨人族の臂力があってこそ行える荒業を見せれば、最早使えなくなった盾を捨てて、左手を広げ宗司に向けた。

「ん？」

『燃え上がれ紅蓮の鏃』！」

向けられた掌を囲うように、虚空に炎で象られた鋭い矢のようなものが現れる。

魔術。初めて見たその神秘の光景に見とれる暇もなく、用心棒は爪を炎の矢を纏った左腕を引くと、全身を弓に見立てて一直線に拳を振るった。

総勢十にも及ぶ炎の弓矢が、左腕という銃口を越えて宗司目掛けて放たれる。その速度は弾丸にすら迫る勢い。見てから避けるでは間に合わぬ速さと、当たれば人体を貫き、傷口から燃え上がるという凶悪な魔術。

当然、当たってやるほどお人よしではない。魔術の成す神秘を見たときに動き出した宗司は、今まで感じたことの無い奇怪な気の動き、つまりは魔力の流れを長年培ってきた第六感とでも言うべき感覚で捕捉。その射線用心棒の視線の刺さる部分と、放たれる拳の先から鏃の方角を予測し、その間に体を捻りこむ。

触れば死。それを肌で感じるが、しかしそんなの、己の居た世界で対した強敵達との激闘でも同じだった。

直撃すれば死。

その程度、いつものことだ。

「化け物か!？」

「お主ほどではないがな」

人間を超える巨躯と、魔術と呼ばれる術を扱うほうが、よっぽど人間離れしている。いやしかし、それを相手に化け物とまで言わせるならば。

「ふんっ、俺もやはり一匹の修羅か」

望む所だ。

再びの間合い。今度こそその全てを奪い去ると決めた眼差しだったが、見上げた巨躯に流れる魔力の方向を察して、咄嗟に斬撃ではなく後退を選択した。

遅れて、いつの間にか地面に刻み込んだ魔方陣から鉄の槍が幾つも

飛び出す。

強かな奴だ。

一瞬見たところ、宗司から見れば奇妙な凶形である魔方陣は左手の出血で描かれたものである。

小細工、とは笑わない。石にかじりついても勝ちを拾いにいく心意気は嫌いではない。

「まだまだ！ 『五連弾・火球』！」

下がった宗司を追撃するのは巨大な炎の塊が合わせて五つ。やはり見てからでは避けられぬ魔術の冴えだが、放つときには宗司の姿はそこにはない。

そして、放つ間際の機先を取られているため、わかっているでも魔術を放つのを止められない。誰も居ない空間を焦がすだけで終わる炎の弾丸。

その間に円を描くようにして回り込んでくる宗司を見据え、用心棒はその甲冑の下におびただしい量の冷や汗を掻いていた。

わからない。

動きがわかつているのに、まるでわからない。

幻術系の魔術でも使われたかのように、用心棒の強化された反射神経は袴で隠した宗司の不可思議な歩法に惑わされ、先ほどの賊達と同じく目測がわからなくなっていた。

今、奴は自分の右側に回りこむように走っている。

しかし、走っているのに動いていない。

止まっているのだ。

だが動いているのだ。

蜃気楼を追うとはこのことか。減速と加速を連続して行うことで、一定の速度で動いているように見えて、その実不規則に動くという不可解。

分かっているでも、魔術を放ち続けるしかない。連続で放ち続ける炎の弾丸の豪雨。それでも平然と立ち回る宗司の何たるおぞましさか。

異様。

異質。

魔術を使わず、魔術以上をこなす宗司こそ、化け物といわず何と云う。

「理無き者では、例え稲光であろうが当たるわけなし」

「何を!?」

「見え透いているのだ。阿呆」

宗司の目にはこれから用心棒がどう動くかも、それこそ魔術を発動しようとしているんだなあとということも大体見当がついている。

そして、既に同じ魔術ならば、体内を走る魔力を見切ることにより予測は可能だ。

もしも用心棒が宗司に一矢報いたいと思ったのなら、流れを見切られてしまう火球の魔術ではなく、宗司が見たことのない魔術の流れで奇襲をかけるしかない。

それでも、魔力の流れが読まれているため発動の予兆が悟られてしまう現状、当てるのは殆ど不可能なのだが。

「確かにお主は強い。恵まれた体軀、魔術とやらを操る腕前。それに比べて俺といえ、お主と競えるものは何一つないだろう。速さも、膂力も、魔術にいたってはからつきしだ」

「だったら何故貴様は……!」

「無論、狂気」

それがお主に足りぬのだと、宗司は嗤った。

あらゆる全てが用心棒はおろか、これまで斬ってきた賊達にすら劣る宗司。

しかし彼らとは決定的に違うのが一つ。  
理だ。ことわり

刀に身を捧げて得るに至った理。同格、あるいは己以上の強敵との死闘で培った技術。

魔という術に頼らずとも。

人は、狂気で修羅と成る。

「俺は死狂い、達したぞ」

王道で頂に達するには、人の生はあまりに短い。

その儂い生涯の十年を無為に過ごした己が刀を極めるには、まとも

でなんていられなかった。

「だからとて……！」

いよいよ間合いに到達する間際。用心棒は魔術を諦め、もてる全ての魔力を強化の魔術に叩き込んだ。

瞬間、あまりに膨大な魔力によってその巨躯が閃光を放つ。過負荷によって筋肉が悲鳴をあげるが、それすらも今の用心棒には些事であった。

「その意気、買った！」

宗司は走るのを止めると、一足の間合いで用心棒と向かい合う。

大上段に構えられた鉄の塊は、最早小さな家屋を遥かに凌駕する高さで切っ先が存在する。

おそらく、初手の一撃を遥か凌ぐ一閃となるだろう。僅かな間だったが、用心棒は宗司が己の居る場所とは別次元の場所に立っていることだけは理解した。

故に、それに対してあまりに稚拙な我が技量では騙せぬと悟り、ならば悟っても避けられぬ神速を、その願いを鉄塊に注ぐ。

——これだから、撃てば響く大器は堪らんのだ。

生きてきたこれまでの全てを剣に託した用心棒の大上段を見て、宗司は内心でほくそ笑む。

使えぬカスなら容易く葬る。しかし、己の糧となる敵手ならば、その全てを引き出した上で勝利を得るのが極上だ。

そこでふと、老剣客との決闘を思い出して自嘲を一つ。

「いやはや、比べることこそ失礼か……」

それよりも、今はこの相手との目くるめく死闘を楽しもう。

静寂に染まったこのひと時。

互いに自身の死を身近に感じる一瞬。恐怖と興奮が混じりあい、極限の意志が導火線に火を点ける。

命を乗せた、全霊。

用心棒が積み重ねた全てを感じる。生まれ、育み、手に取った鋼と共に駆け抜けた戦場の情景。

一つの人生とは、それだけで強き鋼となる。

魂という練磨された刃の冴えよ。

この修羅場の中で、その煌きを魅せてみる。

そして遂に、どちらかの人生最後のひと時となるだろう静寂は終わりを告げる。

「行くぞー！ 我が渾身、逃げるも受けるもやれるならば成してみよー！」  
勇ましくも吼え滾った用心棒が先手を果たす。

踏み込みの苛烈は極大の震災が起きたかの如く。踏み込みと共にひび割れる大地を見れば、その一步がどれ程の力を込められたものなのか手に取るようにわかるだろう。

——分かっていようが、避けさせぬ！

絶対の自信が用心棒にはあった。或いはこの一撃の後、魔術の過負荷によって動くことも出来なくなるのはわかっていたけれど。

だからこそ、この一撃は神であっても斬り落とす。

恐るべきは戦闘者の執念。あるいは巨人と人間の混血ゆえの強みか。

踏み込みから僅か零秒。つまり瞬く間もなく空気の壁を突き破った巨大な稲光と化した鉄塊が落ちる。

その一撃の冴えだけを見るならば、貴族級魔族の一撃にすら匹敵するだろう恐るべき一閃。

避けようが、風圧で潰れる。

受けようが、諸共潰してみせる。

であれば、生身の宗司に行えることは、只一つ。

「……ッ！」

雷光が落ちる前に、宗司は己の中へ埋没していた。

敵手の一撃は必殺。避けようにもこの間合いでは回避は不可能。ならばどうする。

何をもって、魔術と言う超常的力と、巨人と人間の混血という人間を超えた規格外の力を併せ持つ脅威に抗うのか。

何をもつてもない。

いつだって、宗司が頼るのは己の刃、只一つ。

この刀に託した地獄だけが、宗司の信じた凜と冴える音色なら。

驚異的な見切りが、時間を越えた反応速度を宗司に与えた。その目に映るのは今から放たれ巨人の決死の軌跡。脳天を割り股を引き裂き大地を砕く軌道を完璧に思い描いたところで、全身から力を抜いた。

力を充実させた用心棒とは逆の所業。それは、必死の映像を思い描き、抵抗を諦めたというわけではない。

脱力と呼ばれる技法がある。

力をこめる瞬間まで力を抜き、然るべき後、一気に限界まで引き絞った力とのふり幅によつて、爆発的な力を得る技法だ。

これがあれば、たとえ総合的な力で勝る相手であっても、一瞬であれば打ち勝つことさえ可能となる。

そして、宗司が今行つた脱力は、達人ですら舌を巻くほどの力の抜き加減であつた。

この死地において、全身から力を抜くことのなんと至難なことか。では、達人ですら至難である一連を行つてみせた宗司は何だというのか。

無論、この身、刀であれば。

表情は抜け落ち、まるで握り締めた刀と同じような冷たさが露になる。

生きるつもりは毛頭ない。

望むのは一閃だ。至高と呼ばれるべき、あらゆる全てを斬つて捨てる無双の域。

そこに至るならば、命などは必要ない。

「故に——」

そして、時は動き出す。

音を置いた渾身が落ちてくる。宗司の目では追いきれぬ紫電如き振り下ろし。あらゆるものを叩き潰す破壊の暴風に対し、微動とせず脳天に風圧がかかる直前まで力を抜いた宗司の顔が、薄らと笑みを貼り付けた。

そして、鈴の音色は響き渡る。

凜と歌うは誰の音色。



暴力の極地を斬り伏せたのは、耳に涼しい鋼の歌声。

「斬る」

閃光を超えた宗司の刀は、天高く振りぬかれている。

遅れて、斬り捨てられた鉄塊が、くるくると虚しく空を漂って、その戦いを呆けた様子で見っていたバツズのところに運悪く突き刺さった。

「……無念」

命を賭した刃を容易く斬り裂かれた用心棒は、その反動で破裂した筋肉から溢れ出る出血を鎧の隙間からあふれ出し、最後に血の塊をメットから吐き出すと力なく崩れ落ちた。

地響きを立てて倒れた用心棒を見据え、抵抗がないと察した宗司は刀を鞘に収める。

「魔術、堪能した」

満足げに笑う宗司の声に応える者は存在しない。

死山血河に修羅一人。

己の世界では味わえなかっただろう死闘に満足した宗司はとりあえず、辛うじて意識は保っているものの、また股間を濡らして涙目になっているメールの下へと向かうのであった。

## 第五話 『芽吹き華こそ、散らせし乙女』

「よお、めいる殿。ご無事であったか？ 一応、あの火柱がお主のところに行かぬようには配慮したつもりだがの」

「え、あ、う……だ、大丈夫です」

差し出された掌をおそるおそる握ったメイルは、そのまま宗司に引き起こされた。

目の前には、慣れ親しんだ屋敷の前に作られた本日二度目の惨劇だ。だが立て続けに起きた出来事でむしろ冷静になったメイルは、この光景を見ても特に恐ろしいと思うことはなくなっていた。

「なんだかなあ」

「ん？ どうかしたか」

「いえ……こういうのに慣れて、私、どうしようって」

力なく嘆息するメイルを横目に、知った顔で己の顎を撫でて思案してみせる宗司。

「……とりあえず、お主はこの湖で汚れを流すといい」

「ソウジさんは？」

「俺は残党がいるかもわからんなのでな、屋敷の中を軽く探索する故、待っておれ」

「あの、でしたらこちらを！」

メイルは颯爽と歩き出そうとした宗司に今度こそ聖剣を差し出した。だが聖剣の力に頼るつもりのない宗司としては、渡されても困るだけだ。

しかし、メイルは有無を言わさぬ迫力（大して怖くもないが）で宗司を見つめると、強引にその手の中に聖剣を握らせた。

「守り手とはいえ、所詮私では扱えないのが聖剣です。なので、ソウジさんが持っていてください」

「……まっ、一応預かっておこう」

握っただけで再び体を駆け巡る全能感に表情を曇らせつつ、腰帯に聖剣を差してから宗司は屋敷の方角へと歩き出した。

「ん？」

その時、先程素晴らしい死闘を繰り広げた用心棒の体が僅かに動くのを宗司は見た。死体が反射で死後動くのとは違う。辛うじてではあるが、尚も腕を伸ばすその姿は、未だ戦いの中にとでも言うのか。

「……待ってろ、介錯してやる」

いずれにせよ、長くは無い。

限界を超えた一撃を放った代償に、全身の筋肉と骨が砕けた用心棒は、放っておいても直に死ぬだろう。

だがあの時間を共有した同胞としては、そんな苦しみにも用心棒が数分とはいえ置いていかれるのを見るのは忍びない。

せめて、逝くなら安らかに。宗司は微かに動く用心棒の隣に立ち、腰の鞘から刀を抜こうとして、気づく。

「……ふむ」

腰にはもう一本。自分にはまるで似合わない煌びやかな装飾を施された剣、聖剣チートが携えられている。

確か、この聖剣を使えば俺にも魔術が使えるのであったな。

「そうだな」

折角、この世界で初めて出会った同胞である。

宗司は刀の柄ではなく、穢れを知らない純白の柄に手をかけた。

そうすれば、あの全能感が宗司の体を駆け抜け、膨大な魔力が聖剣より吐き出された。

「えっと……」

宗司は鞘からあつさり聖剣を引き抜くと、軽く肩に担ぎながら脳裏の情報を検索する。選ぶのは魔法の項目、そしてその中で見つけるべき魔法は只一つ。

瀕死の重傷だった自分の怪我すらも治してみせたのだ。

ならば、目の前の好敵手だって、治してみせろ。

『大いなる自愛の歌声よ、罪深き我らの業を払いたまえ』

そして、本来なら回復呪文を極めたごく一部の者しか扱えない最高位の回復魔術が発動する。

聖剣の切っ先から蛍の光のような暖かな閃光が無数に用心棒の鎧

を抜けてその体へと浸透していく。親指大の小さな光だというのに、そこに込められた癒しの力は低級の回復魔術を遥かに上回る。

そんな光が千を遥かに超えて、遂には用心棒の巨軀を丸ごと覆い隠してしまふ。

死んでいないなら確実に治すとさえ歌われている脅威の魔術を容易く詠唱し、発動してみせたのは流石聖剣と言うべきか。幻想的な光景に宗司が「おお」と感嘆の声をあげていると、光は徐々に収束していき、遂には全て用心棒の体の中へと染み渡って消えていった。

全てが終わるのを見届けた宗司は、そつとメツトの側に耳を寄せ

る。

聞こえるのは微かだが穏やかな吐息。

「……魔術とは便利だなあ」  
改めて魔術の素晴らしさを再確認した宗司は、やはり何の躊躇いもなく鞘に聖剣を収めて、漲っていた全能感を手放した。

途端に己自身の力が戻ってくるが、聖剣を持っているときと持っていないときの能力値の落差に、宗司は少々不快感を覚えた。

「やはり、無駄な力は好かぬ」

あらゆる面で聖剣を持った宗司は持っていない宗司を上回る。

だが、所詮は与えられた力。宗司が本来使うべき力を超えた能力は、どんなに使えようともやはり手に余ってしまうのだ。

「……はあ」

だが今はそのことを考えている時ではない。疲れた風に溜め息をついた宗司はさっさと屋敷の中に入り込み——思ったとおりの光景に鼻を鳴らした。

「ふん、やるだけやって後は殺すか。大方、金銭以外は運べぬと踏んだところだろう」

屋敷に入って直ぐ出る大きな広間。豪勢な絵画や装飾が無数と施されたその場所には、屋敷から集められた価値のある物と、無残にも賊達によって剽られた後に殺されたらしい女達の骸が無数と転がっていた。

残っているのは血の香りに混じった情欲の残り香。下らん行為の

末路としては大概なものだと思う。

「……やはり、めいる殿に水浴びをさせておいて正解だったな」

このような光景を見せてしまったら、精神が壊れてしまうかもしれない。人の死骸には慣れてはいる宗司ですら、犯され続けた後に殺されてしまった女達を見て平静ではいられない。

静かに両手を合わせて黙祷を数秒捧げると、「すまぬ」と一言謝罪してから、金目の物をかき集められた麻袋を一つ掴んで外に出ようとして、その途中で動きを止めた。

「……出ろ。居るのは分かっている」

「ひっ……」

宗司の鋭い殺気を受けて物陰から現れたのは、先程逃がした男だった。

やはりこちらと戦うつもりはないらしい。涙を流して恐怖に怯え、震えるだけの哀れな姿に、溜め息を一つ。

「情欲に支配された人以下の獣に成り下がり、そして牙も失い畜生下へと成り果てる……だがその命、まだ使い道はあるな」

「な、なにを……」

「案ずるな。お主の得意な処女散らしをやってもらうだけだよ」

宗司は静かに男へと近づくと、悲鳴をあげることも出来ない男に向けて、その冷たい掌をゆつくりと差し向けた。

――  
メイル・リンクキャットは箱入り娘の立派なお嬢様である。

聖剣の守り手として、一通りの魔術や剣術を習い、世間のことについても知識として蓄えているが、所詮は全て生気の通わぬ無感動なものではない。

生まれてからこれまで、女性に囲まれて過ごしてきた少女。外への憧憬を僅か抱く以外は、ほぼ無知と呼んでもいい彼女は、そういう意味では宗司以上にこの世界について無知なのかもしれない。

だからこそ、恐怖が一周して通り過ぎた現在、彼女は状況を理解で

きていないために平静を取り戻していた。

「ふんふふん」

汚れたドレスを脱ぎ捨てて、一糸纏わぬ姿でメイルは湖で体を洗っている。疲労は蓄積していたが、こうやって体を清めるだけでその疲れも落ちていくようであった。

鼻歌を歌いながら、ふとメイルは自分が今外に居るのだということ思い出した。これまでは外といえば屋敷の中にある広場くらいで、それ以外の場所は一切知らない。

とはいえずつと屋敷から見えてきた湖のせいか、外に出ているという気分はあまりなかった。いや、現実感がないのだろう。箱入り娘が体験するには、この二時間程度で起きた出来事はあまりにも濃厚だった。

身近な者の死。

慣れ親しんだ世界の崩壊。

そして、臆物乱舞。

特に最後のほうは衝撃的過ぎて膀胱が三回も決壊しているのだが、そこに羞恥を覚えるほど彼女は世間というものを知らなかった。

何せ、今彼女の前にある屋敷の中で、慣れ親しんだ人々が死んでいるというのに、普通は鼻歌を歌いながら水浴びなど出来ないだろう。

螺子が外れているのか。或いは元から『そういう人間』なのか。

いずれにせよ、メイルは宗司の考えとは違って、死という事柄に対して何かを思うことはなかった。

もしくは、この短時間で経験した膨大の死が、彼女の感性を――

「あ、ソウジさーん！」

体を洗っていたメイルは、屋敷から麻袋と糸の切れた人形のように動かない賊の一人を運び出してきた宗司に手を振った。

宗司も軽く手を振って応えようとして、ギョツと目を見開く。

全裸である。

南蛮娘の全裸である。

水を弾く白い肌。肉感的で情欲を煽るような体つきだが、腰は綺麗なくびれを描いており、遠目からでもメリハリがはつきりと分かるほ

どだ。特に、ツンと突き出た大きな乳房が眩しく、手を振るたびにゆっさゆっさと揺れる様は圧巻である。

普通なら男性に裸を見られれば羞恥に悲鳴の一つでもあげようものだが、本人に自覚はないとはいえ、メイルはむしろ宗司に見せ付けるようにしていた。

「呆れたというか何と言うか……年頃の女子だろうに」

それか、ここで女子の裸は見せても問題ないというのか。

ここに着てから一番の衝撃に頭を悩ませていると、そんな宗司の様子を見たメイルは、体でも悪いのだろうかと不安げな表情を浮かべながら湖より出て宗司に歩み寄った。

勿論、全裸である。隠すことなど一切せず、子犬のように宗司へと迫れば、当然その大きな二つの果実は揺れるばかりであり、幾ら性欲よりも戦闘欲が圧倒的な戦闘民族である宗司とはいえ、目を奪われるのは仕方なかった。

「どうしました？ 怪我しました？」

「なんでもない。己の修行不足に呆れたところだ」

小首を傾げるメイルを見て、ちよつとした衝撃から立ち直った宗司は疲れたように頭を振ると、麻袋を地面に下ろし、そこに入っていた暖かそうなマントを一枚取り出してメイルの体に被せた。

「ここではどうかわからんが、あまり俺の前で裸でうろつくな」

「あ、すみません。見苦しかったですよね」

「いや、見苦しいというよりはむしろ……」

「むしろ？」

「なんでもない！ それより、この麻袋に服らしきものが入っている。さっさと着替えてこい！」

顔を僅かに赤く染めつつ、宗司はそう言い放ちメイルから背を向けた。

特に何か言うこともないのか、メイルはいそいそと麻袋漁って、自分に見合った服を取り出して着替えだす。

その衣擦れの音を聞きながら、宗司はもう片方の手に掴んだ男を自分の目の前に放り投げた。

「お主はそこで出番を待っている……さて」

続いて宗司は未だ意識を失ったままの用心棒の側へと寄った。

呼吸の仕方から、怪我は治っているなど把握する。だがいつまでも眠ってもらっていないのは困るので、一先ず起こすことにした。

「しかし、これ、どうやって外せばいいの……」

全身に纏った甲冑は宗司の見たことのない鎧だ。賊達の皮鎧もそうだったが、この鉄製の鎧ではどうやって脱がせばいいのかわからない。

「勝手に斬ったら、拙いよな」

盾と剣。戦士に必要な獲物を二つとも斬り裂いておいて今更な話かもしれないが、だからこそただ起こすためだけに鎧を裂くのは気が引ける。

ならば、ここは一つ手間のかからぬ方法を取るとしよう。

宗司はそこらへんに落ちていた片手剣を拾うと、軽く手に馴染ませるように数度振った。

強化の魔術を前提に考えられている片手剣は、見た目に反して随分と重い。これでは千も振るえば腕が棒となるだろうなど、むしろ練習用としてもってこいだと思いつつ、宗司は用心棒の背中を跨いで、切っ先を下に向けた状態で、両手で掴んだ片手剣を振り上げた。

狙いは背中的一点。気絶した者を起こすのに必要な衝撃を与えるべく、宗司はそのまま片手剣をその背中に突き立てた。

しかし、本来なら鳴り響くはずの鉄と鉄がぶつかり合う甲高い音色は響かない。代わりに鎧に触れた切っ先は突き刺さることもなく、その衝撃の全てを、鎧を通して用心棒の肉体へと伝えた。

『徹し』と呼ばれる、衝撃を任意の場所へと流す技術だ。それによって鎧には傷一つつけずに、生み出した力の全てが用心棒の体へ炸裂する。

一瞬、その体が跳ね上がる。全身を駆け抜ける力の波によって揺さぶられた意識は、狙い通り用心棒の意識を呼び覚ました。

「……ん」

「よお、目が覚めたか」



用心棒の顔に回り込んだ宗司は、僅かに起き上がったその顔に人懐っこい笑顔を向けた。

朦朧としながら、用心棒はまず体の動きを確認して、あの戦いの過負荷で受けた影響が全て完治しているのに気づく。

あれは、夢幻だったのか。いや、周囲の景観と、何より目の前に居るこの男が、あれが嘘ではなかったことを証明している。

「そうか……負けたうえに生き恥すら晒すとは……」

「ハハハッ、そう落ち込むなよ、剛の者。人間、死ぬよりは生きていたほうが良いに決まっているだろに」

気にするなど気楽に言っただけのける宗司だが、言われる側としては複雑な心境だ。

「それとも何か？ 折角、俺と言う男を知ったのに、知って直ぐに散るのが良きことなのか？」

「随分と自信があるのだな」

「然り。何せ、俺はお主よりも強い。そして俺は俺より強い相手を知ったとき、いつも至福に満ちていた故。やはり、自身より強き者が居るとするのはこの上ない至福よ。……それを斬り捨てることも含めてな」

自分が素晴らしいと思うことは相手も素晴らしいと思ってくれるはずだ。

あながち間違っていないのだが、何処かずれた宗司の言い分に用心棒はメットの奥で微笑を浮かべると、体を起き上がらせ宗司と向かい合った。

そして、纏っていたメットを外して素顔を晒し宗司を見る。

「ともあれ、生き抜いた奇跡には感謝しよう。改めて名乗らせてくれ、私はクロナ・クロルキスという。強き者よ、よければ貴方の名を聞かせてくれぬだろうか」

その素顔を見て、先程に続き二度目の衝撃が宗司を襲った。

「お、女……だと」

邪魔にならない程度に切りそろえられた、亜麻色の柔らかな髪。スツと通った鼻筋と切れ長な鋭い茶色の瞳。醸し出す雰囲気はパツ

と見ると美形の男性に見えるが、人間という者を良く知る宗司は、その顔を見ただけでクロナが女性なのだと看破した。

本来ならどんなに取り繕っても宗司の眼力なら見抜けたはずだが、見慣れぬ西洋甲冑と、人の倍はある体躯と、類まれな怪力の一撃を見て、男なのだとすつかり決め付けていたのだ。

驚愕のあまり名乗りを忘れて思わず女なのかと口走った宗司だが、普通は失礼なその言葉に、むしろクロナは楽しげな笑みを浮かべさえた。

「ハハッ、初見で私を女と見抜くとは流石。どうにも見た目が不細工なせいかな、いつも男性と間違われるのでね」

「……そ、そうか」

まさか、異世界に来て驚くのが強敵ではなく女子相手とは。

再度、自己嫌悪に頭を抱えそうになる宗司だったが、それをこらえて改めて名乗りを返した。

「俺は宗司という。姓はない、ただの宗司だ。よろしく頼むぞ、くろな殿」

「ソージ……そうか、わかったソージ。助けていただいたことは素直に感謝する」

クロナは深く一礼をして感謝の意を示すが、「しかし」と頭を上げた直後、難しい顔で着替えに手こずっているメールの方を見た。

「彼女が果たして私の回復を許すのか？ 言い訳になるが、雇われて奴らの用心棒を引き受けただけで、屋敷の襲撃に直接関わってはいないものの、私も屋敷の襲撃に手を貸したようなものだ」

「さてな。個人的に言わせてもらえば、お主は強くて面白いが、めいる殿は弱くてつまらん。はつきり言って、めいる殿が復讐に身を燃やし、くろな殿を害するのであれば、心境的には、俺はお主に助太刀するよ」

「心境的には？」

「実は、めいる殿には命を救われておる。これを反故したなら、俺は修羅ではなく只の外道と成り果てるだろうよ」

状況が複雑とはいえ、宗司が今こうして生きているのは、メールが

宗司を召喚したからに他ならない。困った風に表情を曇らせる宗司に、納得したとクロナは頷いた。

「なるほどな。ならば問題はないのではないか？ 私を救ったのも彼女なのだろうか？」

「いや、それはちよつと違うというか……ん？ そう、なのか？」

「なんだかはつきりしないな」

宗司の話から推測すれば、彼が魔術を扱えない以上、必然、クロナを救ったのはメイルということになる。

だが宗司としては素直に自分が治したといっているのかわからなかった。確かに聖剣を使って治療を施したのは宗司だが、この聖剣を自分に渡したのはメイルであり、そもそも聖剣の力は自分の力ではない。しかし、治療をしたのは己なのだ。

「……この聖剣とやらの力のおかげだ。俺は何もしたらんよ」

このままでは考えが堂々巡りだと思った宗司は、考えるのを止めて腰に差した聖剣を指差した。

「聖剣？ ふむ、高位の回復魔術でも使える魔法具なのか？」

「いや、何と云うのだろう。これは俺も未だ眉唾なのだが、この聖剣とやらはありとあらゆる魔術を行使し出来るようになるうえ、使い手を劇的に強くする効果があるようなのだ」

宗司は論より証拠だと、とりあえず聖剣をその白塗りの鞘から引き抜いた。

再度、自身を満たす全能感。そしてクロナの肉眼でも確認できるくらいに膨大な魔力が聖剣より溢れ出して来る。

「どうだ？」

「……なるほど。これは凄いな」

今まで見たこともないような魔力の嵐を目にして、クロナは額に冷や汗を掻きつつ辛うじて返事をした。

宗司はその様子を見て充分だろうと察して、聖剣を鞘に仕舞う。するとあれほど荒れ狂っていた魔力の嵐は一瞬にして霧散した。

「幽霊に化かされた気分だ」

「だろう？ だが、これはあまり好かん。確かに強くなれる。全てが

行えるようになる。しかし、つまらん」

本当に、つまらない。これならまだ、刀の一本でもあったほうが良いというものだ。

「聖剣か。俺のような者にはなく、それこそ坊主にでも渡したほうが、よっぽど役に立つだろうに」

この聖剣に登録された回復魔術を用いれば、死人以外なら治すことは容易だろう。そう考えると、自分が持っているのはやはり見た目的にも中身的にも不釣り合いすぎる。

「なら、私に一度貸してくれないか？ その、少しばかり、魅力的だ。勿論、貴方に対してどうこうするつもりはないのだが……」

冷めた目つきで聖剣を見下ろす宗司に、クロナは恐る恐ると言った様子でそんな提案をしてきた。

理由など聞くまでもない。宗司は特に未練も無い様子であっさり聖剣をクロナに差し出した。

「ほれ。使え」

まるで小銭でも貸すかのような気軽さで聖剣を貸し出してくる宗司に、クロナは思わず苦笑いを浮かべていた。

「……いや、提案した私が言うのもアレだが、いいのか？」

「構わん。もし使えたのならやるし、それを使ってまた俺に挑もうというなら——是非もない」

むしろそれを望んでいるとばかりの冷笑を浮かべる宗司に、クロナは背筋が凍るような寒気を覚えた。

先程の一戦でも感じたが、この男の狂気性というのは、クロナが出会ってきたどの狂人にも当てはまらないものだ。

単なる戦闘狂と括るにはあまりにも異常すぎる。そう思いつつも、クロナは差し出された聖剣を汗の滲んだ掌で受け取った。

「……ん？」

だが、いざ引き抜こうとしたところで、聖剣はまるで癒着したかのように鞘から抜けなかった。

何度も力を込めて引き抜こうとするが、やはりどうやってもクロナの力では引き抜くことが出来ない。

「どういふことだ?」

「さあ?」

互いに目を合わせて首を傾げる。

だが、どうやらクロナでは使えないということらしい。少々残念な気もするが、クロナは宗司に聖剣を返した。

「……要らないんだがなあ」

「いやいや、あの魔力量が使えらるならとっておいて損はないだろう」

本当にこの男は聖剣を必要としていないらしい。その事実呆れるべきか感心すべきか迷っていた所で、ようやく服を着替え終えたメイルが宗司の元へ駆け寄ってきた。

「ソウジさん、着替え終わりました」

着ているのはフリルがふんだんにあしらわれた動きにくそうなドレスである。足元まで完全に隠れており、スカート部分は地面についていて、うっかり転んでもおかしくない。

歩く姿すら危なっかしいメイルは、宗司の隣に来たところで、ようやくその側に居るクロナの存在に気づいた。

「貴女は……ソウジさんと戦っていた」

「……クロナ・クロルキスという」

「メイル・リンクキャットです」

襲撃に加担したという思いがあるためか表情の暗いクロナに対して、メイルは警戒心を瞳に浮かべながらも、一礼をして自己紹介をした。

「……」

「……」

案の定、それ以上言葉が続くことなく痛い沈黙が流れる。

こういうときどうしたらいいのか分からない宗司としてもこの沈黙は耐えがたい。だがいつまでも睨めっこをしているわけにもいかない。宗司はわざとらしく咳払いを一つして二人の視線を集めた。

「まああれだ。めいる殿、お主としては何かと色々言いたいだろうが、くろな殿はこの通り真(まこと)強き者でな。それに、お主の住んで

いた屋敷を直接襲った賊達とは違い、ただその護衛を頼まれただけで、襲撃には関わっていないのだ。そこで俺としてはただ死なせてしまふのは惜しいと感じて、勝手に聖剣を使って治療を施したのであってだな。よければ見逃してやって欲しいのだが」

「……そういうことでしたか」

メイルは弁解するような宗司の言葉を聞いて、改めてクロナの顔を真っ直ぐに見上げた。

その真剣な瞳に見据えられ、逸らすわけにはいかないと悟ったクロナもまた真摯な態度でメイルを見返す。

それがどの程度続いただろうか。不意にメイルは視線を切った。

「……覚悟は出来ている。ソージに拾われた命だ。君が復讐を果たしたいというのなら、この身を捧げるくらいしよう」

「おい、くろな殿——」

「いえ、いいんです」

小さく頬を緩めて、メイルは頭を振った。そして、言葉を選ぶようにゆっくりと口を開く。

「だって、ソウジさんが……聖剣が選んだ勇者様が生かすことを選んだのなら、守り手である私が横から口を挟むのは無礼です」

「……だが、しかし」

「だが、しかし、ですよ。私は聖剣の守り手です。何もかもなくなっちゃったから、それしかないんです」

だから、いいのだと。

憎むべき相手が居る。しかし、その激情に駆られて復讐を行えば、聖剣の守り手という、己の生涯そのものを砕いてしまうことになるから。

「だから、いいんです。私の意志より、勇者様の意志こそ優先されます。いえ、それも違いますね。私は、私であるために、貴女を許したいと、心から願うのです」

「メイル……君は」

クロナはまるで聖人の如きメイルの言葉に、感無量と言った風に言葉を詰まらせた。

同時に、何故こんな愚かなことを受けてしまったのだろうかという後悔が胸中を埋め尽くす。しかし、そんなクロナの悔恨すら許すのだと、メイルは慈愛に満ちた笑顔を浮かべる。

愚かではあるが、美しい意志だ。罪を憎んで人を憎まず。聖剣という神聖なる魔法具の守り手として美しい心を見せたメイル。

その素晴らしい心に、心よりの賞賛を――

「……そういうわけにもいかんのだろ」

くだらん『茶番』だ。

そう吐き捨てて、冷や水をぶっ掛けるように、宗司はさつきから放置していた賊の最後の生き残りを引つつかんでメイルの前に放り投げた。

「え？」

「憎しみを溜めるのは毒だ。ならば、応報せよと語る霊への鎮魂として、骸を一つ晒すよりないだろう」

「でも、この人死んで――」

そこでメイルは、横たわる男がまだ生きているのを確認した。

先程、宗司が麻袋と共に引つ張ってきたときは、死体を運んでどうするつもりなのだろうと思っただくらい動かなかったが、良く見ればその全身に冷や汗を滲ませ、僅かにだが震えてさえいる。

何故？ と視線を宗司に再び向けたメイルの瞳には、隠しきれない動揺と、その裏に隠された――

「ソウジ、さん」

何かを訴えようとしたメイルだったが、二の句は宗司の言葉に遮られた。

「賊の残党が居るのはくろな殿との戦いの間に分かっていたからな……処女を散らすうえ、何れ己すら燃やし尽くす復讐の炎を鎮火するには、この畜生も役に立つ」

そう言って、宗司はそこらへんに落ちていた片手剣を掴むとメイルに差し出した。

剣と宗司、両者を何度も見返して困惑を露にするメイル。だが、宗司は問答無用とばかりに剣をメイルの胸に押し付けると、続いて開け

放たれた屋敷の扉を指差した。

「見ろ」

「あ……」

遠目からだが、メイルは扉の先で横たわる無数の死骸を見つけた。その骸はいつも見慣れた誰かのもので、ああ、きつとそれは、彼女がその短い生涯を共にすごした、家族の如き人々の――

「う、あ……あ」

メイルは唐突に蘇ってきた『死』という現実に出すことも出来ず、継るように宗司を見た。

しかし宗司の目は冷たい。ただ寄る辺を探す少女の手を払いのけ、その手に冷たい鋼だけに乗せる。

そして、告げるのだ。

「斬れ」

「い、あ……」

「でなければお主……地に足をつけることなく、ただ奈落へと沈むだけだぞ？」

綺麗事で何が解決するのだろうか。

応報するのだ。

理不尽に犯された家族のために。

理不尽に殺された恩人のために。

高潔な意志や、慈愛の心などまやかに過ぎぬ。

ただ理不尽に対する応報を成すことこそが、真実なのだ。

「人を斬り続け、恨みを背中に背負った俺だからこそ言うぞ。親しき者が殺されて尚、何かを言い訳に憎しみに蓋をするでは、その身は直ぐに腐り落ちるだけとなる」

「で、でも……だったら何で、ソウジさんは、クロナさんを庇って……」

そうだ。宗司の言うことが正しいなら、何故宗司はメイルの応報を手助けするといいいながら、その一端を担っているクロナを庇っているのだろうか。

それに対して、宗司は間髪いれずに返答する。それはメイルが言葉を失うには充分すぎる理不尽だった。



「別に、もうこの際だから言うがな。『今の』お主とくろな殿、俺にとつて必要となるのは迷うことなく、くろな殿だ……故に、もしお主がくろな殿に応報するなら斬り捨てるつもりだった。だが、お主は俺の恩人ゆえ、可能な限り殺したくなかったのな……うん、それだけだ」  
「それ、だけ」  
「ああ。それだけだ。お主は愉快的な女子だが……邪魔なら殺す。それだけだ」

もし説得が出来ないなら、殺すつもりだ。そう言われてメールは息を呑んだ。

宗司の言っていることは滅茶苦茶だ。応報は必然と語りながら、応報するなら返り討ちにするとも言っている。

いや、それは宗司の中では正しく成り立っているのだろう。正論を知りながら、正論など知らぬと語る、ただそれだけの話なのだから。

「そんな、そんなのって……!」

あまりにも理不尽ではないか。

そう叫ぼうとしたメールは「然り、理不尽だ」と頷く宗司の続く言葉に捕らわれた。

「だが、それはお主が弱いせいだ。因果応報が世の常ならば、弱肉強食もまた真理。どんなに叫ぼうと、成すべき力がないのなら、それは戯言となんら変わらない」

何せ、宗司はそう言った手合いを幾人も斬り殺してきた。

そうやって、今の自分を確立させた。

故に男は侍で、たった一匹の修羅なのだ。

「敵(かたき)と叫び、故にと吼える。だがそれら全てが弱いがために叶わなかったから、俺はこうして立っている。応報という真理すら、強さという絶対には響かんのよ」

「わた、私、は……!」

「俺に出来る譲歩はここまでだ。その畜生はくれてやる。だが、くろな殿は俺がいたくぞ。『今の』お主になどは、くれてやらん」

「……私は物ではないのだが、いやまあ、今更いいのだがな」

背後で辟易しているクロナはさておき、これで今日何度目になるか

分からない理不尽の到来にメイルは体を震わせた。

だが、何かを掴もうにもその手にあるのは冷たい鋼が一つだけ。頼れる者は何処にもない。

誰も。

助けない。

そうだったのは、誰のせいだ？

「……」

不意に、涙目でメイルを見上げる賊と、視線が交差した。

「あ……」

哀れな瞳だ。頼むから助けてくれと懇願する賊の真摯な思いが、何も言わなかったって伝わってくる。

同情を誘い、そして、出来ることなら助けてあげてあげべきではないかと思う。たとえ相手が敵であろうと、そう、自分は聖剣の守り手という、穢れ無き乙女なのだから。

ならば、どんなに憎くても、どんな相手だろうと、許してあげても一度やり直す機会をあげるべきではないかと――

——そうして自分を偽っても、この胸に宿した憤怒の炎を偽るなんて、出来ないのに。

瞬間、体の震えは止まった。涙で光っていた瞳からも色は失われ、いつの間にか抱きしめるのではなく両手でしっかりと柄を握り、メイルは賊に向かって一歩を踏み出す。

「首を落とせ。死ねば仏と言うが……させて、素人が首を落とすという苦行、これを受ければ罰に充分、畜生だろうと仏になるだろう」

宗司はその様子からすべてを察すると、助言も早々にメイルの肩に軽く手を乗せてから数歩距離を空けた。クロナもその鬼気たる雰囲気を感じたのだろう。宗司に習って距離を取り、メイルと賊の様子を見守った。

「……」

「ん……！ んう……！」

賊は今から己に起こるだろう惨劇を思い浮かべ、宗司の殺気で縛られながら、微々たる動きで体をよじり、必死にメイルから距離を取る

うと抗う。

その姿が、余計にメイルの心を冷たくする。

ちらりと見るのは屋敷の内部。服を着ているものから、衣服を全て破かれたうえに犯され殺された侍従達の姿。

連想するのは、自分を庇って死したアイリーンの姿。

真つ赤な血潮。

いのちのあか。

おまえらが、ころした。

「えい」

躊躇いはなかった。決意は一瞬で、いつの間にか殺意の矛先は解放された

いつそ気楽なくらいの掛け声とともに、メイルはもがく賊の脹脛に剣を突き立てる。

肉を裂く不快感は特になかった。それより、肉を割った剣が骨に当たって掌を痺れさせたことのほうが不愉快だった。

斬り割った傷口から、アイリーンや侍従と同じ赤い血が流れるのを見る。

悪も、流す血は同じなのか。いや、そんなこと、ソウジさんが斬ったのを見てわかっていたはず。

どんな良い人も。

どんな悪い人も。

斬って覗くのは、生暖かい熱血と、ぬめりと張り付く、臓腑のみ。

「んー！ んー！」

「うごかないで」

悶絶する賊を黙らせるべく、剣を引き抜き反対側の脹脛に突き刺す。今度は骨の表面をなぞるように剣がすべり、逸れた切っ先は大地に突き刺さった。

「ソウジさん。これって」

「うむ、まあ最初なんてそんなもんだ。気にせず好きなように刃を振るえ」

「はい」

「んー！」

躊躇はいつの間になくなっていった。

いや、或いは最初からそうだったのか。

怖い怖いと泣き叫びつつ、意識を失ってみせたけど。

でも、本当に怖いと感じていただろうか？

「えい、えい」

メイルは一心不乱に賊の足を突き刺し続ける。普通ならシヨツク死でもしそうなものだが、宗司の殺気による束縛が、微妙な力加減で意識を繋いでいるのが賊には災いした。

意識を失おうにも、体を束縛する殺気のせいで意識を失うことすら出来ない。

助けてくれ。

そう叫ぼうにも、声も出ない。

「んー！」

「……ソージ、やはり私が口を挟むことではないが。これでは只の拷問だ」

「いんや、これで良い。つまらん童に興味は無いが……ククツ、処女を散らさねば、人の本質など分からぬものだよ。しかし流石は屋敷の中にいた処女を無数と散らした畜生よな。花散らし、新たな種を生み出すのは得意というわけだ」

「ソージ……貴方はまさか……」

一閃ごとに目の色を失っていくメイルを見て、賊への皮肉混じりに面白そうに喉を鳴らす宗司を見て、クロナは何となくではあるものの、宗司が何故このようなことをメイルにさせているのかわかったような気がした。

だがその目論見に気づいても、クロナには止める権利はなく、そもそも、既に遅い。

「やあ」

やる気の無い掛け声とともに、一応それなりに整った一振りで、遂に賊の足が両方ともに千切れ飛んだ。

その時点で賊の命は風前の灯だ。骨を絶つという重労働で流れた

汗と体にかかった血を拭いつつ、メイルは今にも死にそうな賊の姿に気づく。

弱弱しい姿だ。自分達を襲ったときは、こうなるとすら思っていなかっただろうに。

だが、宗司の言葉を借りれば因果応報なのだ。こうなるべくして然るべきなのだ。

ならば、蓋をした憎しみを吐き出すことに、何の躊躇いがあるだろう。

「あ、あああああああ！」

「始まったか」

宗司は突如叫び声を上げたメイルを見て一層笑みを深くする。

それでいい。そのまま黒い汚泥の如き憎しみを吐き出してしまえばいい。

かつて、俺もそうだった。

村を焼かれ、無心で手にした一本の刀。理不尽に抗うべく本能で手にした鋼にて、襲い掛かってきた山賊を斬り伏せたあの時。

殺した。

斬って、殺した。

表面には出なかつた激情を、殺人という手段で洗い流した。

そして、強くなろうと決めたのだ。

「お前が！ お前があああああ！」

「あ。あ。あ……」

隙間風のような細かい声を出す賊の首に、とうとう振りかぶった剣が叩きつけられた。

しかし、幾ら重量がある剣と、訓練していた少女の一撃とはいえ、所詮は箱入り娘の初物。一撃で両断とはいかず、半ばにも達することなく首の骨に阻まれて、悪戯に流血が溢れ出るだけだ。

「わあああああああ！」

既に両足を切り捨てた片手剣の刃の部分は殆ど使い物にならない。にも関わらず、メイルは何度も何度も剣を振り上げ、振り下ろす。

怒りのせいか狙いが定まらず、時には賊の肩を砕いてはいるが、そ

れでも徐々に賊の首に剣が食い込んでいき、斬るというよりは砕くような形で、後一撃のところまで首を絶つことが出来た。

「ふうー！・ふうー！」

獣のような荒い息を繰り返しながら、焦点の合わない瞳で既に事切れた賊をメイルは見下ろす。

だが最早、生きていようが死んでいようが関係なかった。家族を殺された激情は百を超えた振り下ろしの中で注がれ、今、憎しみを吐き出し尽くした少女の脳裏にあるのは一点の事柄のみ。

斬るのだ。

あの首を斬るのだと。

只それだけに、腐心する。斬撃のみに、心は奪われ、墜ちていく。

「良い。俺が思っていた以上の逸材ではないか」

狂気の果てに、人は修羅と化す。

最早、勇者の意志を尊重し、憎むべき敵（かたき）すら許そうとまでした高潔な意思は何処にも無い。

あるのは狂気。

真つ直ぐと伸びた、狂気。

宗司は、この一閃の後生まれるだろう一匹の修羅へと、祝福の言葉を一つ送った。

「おめでとう。めいる殿」

「あああああああツツ！」

流血の華が咲き誇り、辺り一帯に散り散りと消えていく。氣勢とは裏腹に、あまりにも呆気なく千切れとんだ賊の首が振りぬかれた剣の衝撃で僅かに飛んで、血潮の海に埋没した。

死山血河に新た生まれた命の華。

その華を浴びながら虚ろと化した眼で空を見上げるメイルは、自分が取り返しのつかない何かを喪失してしまったのだと、呆けてはいるが、見上げる青空のように澄み切った心の中で思うのであった。

## 第六話 『こんな僕は、聞いてない』

困難な任務であり、さらに言えば納得のいかない任務だった。

人間界の北方、魔族との死闘を日夜繰り広げる最前線に位置する国であるノートン帝国。そこでも激戦区と呼ばれる領土で、無数の戦場を駆け抜けた歴戦の騎士であるロンド・リングルは、ある日不可解な任務を上層部より言い渡された。

曰く、メビウス王国の保有する魔法剣を奪取してくるというものだ。

手渡された資料によると、今より千年以上前、現代に復活した魔王は当時封印したとされる伝説の剣こそ、その魔法剣らしい。

鞘から柄に至る全てが、穢れを知らない白色の剣。魔術で扱う全ての属性の色を宿した宝石をちりばめられ、まさに豪華絢爛とも呼ぶべきその剣。

聖剣チート。

ロンドに託されたのはその聖剣を奪取してくるというものだった。だが協力者はメビウス王国側から引き抜き、そのまま王国にスパイとして潜ませた魔術師が一人のみ。その者と協力して、あくまで秘密裏に聖剣を入手しろということであった。

帝国側からは金銭以外の援助は一切ない。増援はスパイが一人のみで、後は全てロンドの采配に託すということ。

確かにロンドは度重なる戦場を潜り抜けた猛者だ。低級魔族が相手でも足止めくらいはする技量は持っているし、積み重ねた経験から得た戦術の幅は広い。

だがそれはあくまで前線での話。隠密など彼は一切したことはないため、何をしたらいいのかわからない。

——それほど、人類は追い詰められているということだろう。

隠密に不慣れなロンドに託し、戦力をそれ以上割くことが出来ないくらいまで、限界はきている。

当然ながら、メビウス王国側と交渉を試みるべきでは？とも訴えたロンドだが、そのくらいは帝国も既に行っていたらしい。

しかしメビウス王国は聖剣なんて知らぬとすつ呆けたのはおろか、あまり妄言ばかり吐くと支援を止めるとまで言ってきたということだ。

ならば残された手段は奪取のみ。そしてそれが王国に気づかれぬように、あくまで間接的に聖剣を奪うことしか方法は残っていない。眉唾な話ではあるが、もし話が事実なら、ロンドとしても聖剣は意地でも手に入れたいものだ。そして、ロンドを含め、帝国もそんな藁にも縋るような話に望みを託すしかないほどまでの所に来ている。

遠くないうちに、帝国の前線は瓦解して、魔族によつて支配されるのは見えている。

時は一刻だつて残されていない。故に、様々な疑問や不満は飲み込んで、ロンドは单身メビウス王国に眠る聖剣奪取の任務を果たすことにした。

その過程で苦勞したのは、こちらの意図に気づくことのないくらいに頭が悪く、しかし最低限以上の戦力を有する者達の確保だ。

スパイからの報告で、どうやら聖剣の安置所は森の奥にあり、しかもご大層に聖域と名づけたそこは、最低限の女性兵士以外の戦力がなしいということだ。さらに、相手は戦場などまるで知らないぬるま湯で訓練してきた兵士、であれば、そこそこの戦力があれば充分だとロンドは結論した。

そして選んだのが、それなりの規模があり、全員が兵士崩れで魔術もそれなりに使えるボルデス傭兵団だった。

嬉しい誤算だったのは、彼らが自主的に用心棒を雇つて戦力を補充していたところにある。しかもあまり物事に興味がなさそうな傭兵だったのは幸いした。

そして、いざ決行の日は訪れる。

スパイが開いた転移パスを通して王国に不法入国したロンド達とボルデス傭兵団一行は、一目につかないルートで王都の離れにある聖域を目指した。

幸いだつたのは、予めスパイが極秘裏に繋いでいた転移パスを複数使うことで、一日も経たずに聖域にまで辿り着けたことだ。



それから、ロンドは念には念を入れ、後のことをボルデス傭兵団に任せ、自らは遠くの物を見ることが出来るという魔法具を用いて、スパイ、スニークス・アンロットと名乗った魔術師と共に様子を確かめた。

どうか、作戦が無事に終わるようにと、そう思いながらこの成り行きを見守っていた二人は、信じられない結末を目撃することになる。

聖剣を媒体とした勇者召喚。そして、その勇者によるあまりにも一方的な殺戮劇場。

斬ってはぶちまけ、斬ってはぶちまけで、遂には傭兵団が雇った切り札である用心棒すら下してしまった。

「馬鹿な……」

全てを見届けたロンドの呟きは、スニークスの気持ちでもあった。資料だけでしか分からなかった聖剣が実在し、そしてそれを用いる勇者の魔力が膨大であることは分かった。それは素直に感謝しよう、魔王を滅ぼす剣が存在したことは、入手できなかったとはいえ喜ぼう。

だが、あれはなんだ。

聖剣の力はおろか、魔術すら使用せずに、魔術を使う傭兵達をあっという間に切り捨てたあの男は何なのだ。

特別な魔術も、ましてや手にした剣が特別な魔法具というわけではない。だというのに、あの男は魔術ですら困難な動きをしてみせた。

さらに言えば、男が下したあの用心棒。戦いぶりを見て思い出したが、もしや一年前に突如姿を消した巨人と人間のハーフの傭兵、下級魔族と一对一の決闘の末に打ち破った女騎士、『魔族殺し』のクロナ・クロルキスではないか。

「なんだよ、あいつは……」

隣で同じものを目撃したスニークスは、その全てを認めたくない一心で遠見の魔法具を解除した。

ロンドが歴戦の勇士なら、スニークスはまさに温室育ちのお坊ちゃまといった感じだ。どうにも最初に出会ったときから何かとこちら

を見下すような発言を繰り返しており、妙に聖剣の奪取にこだわる、あまり友好的にはなれないような男である。

だがそんなお坊ちやまも、いや、戦いを知らないお坊ちやまだからこそ、遠見越しに見たあの異常を見て当惑している。無理もないだろう。生粋の戦闘者であるロンドですら、あの戦闘は魂を奪われ、実際に対峙しているわけでもないのに恐怖を覚えたのだから。

そして鏡に映されていた映像は途絶え、魔法具には同じ恐怖を浮かべたロンドのスニークスの顔が映る。

「どう、どうするんだよ!?」 ぼ、僕の聖剣はどうなんだよ!」

あからさまな動揺を露にするスニークス。ただ目の前で行われたそれを認めるわけにもいかず慌てるだけの彼の様子を見て、逆にロンドは落ち着きを取り戻した。

「……一先ず、遠見の鏡で様子を見よう。幾ら最年少で王宮付きの魔術師となったお前と組んだとしても——あれには絶対に勝てん」

見たことはないが、おそらくあの男は貴族級魔族に匹敵するほどの化け物だ。いや、あまり考えたくないが、勇者として召喚された以上、もしくは魔王と同じ——

「ふざけるな! 折角ここまで来たんだ! あの聖剣を手に入れて、僕が英雄になってみせるチャンスが来たっていうのに、諦められるか!」

「落ち着けアンロツト。むしろ戦う必要などは存在しないだろう? あの聖剣を守っていた少女の説得は難しいだろうが、それさえ出来れば聖剣を用いるあの男を担ぎ上げ、人類の反撃が……」

「うるさいなあああ! 君らの正論なんざどうでもいいんだよ!」  
ロンドの冷静な説得に対して、スニークスは子どものように喚き散らす。

「つつーかよお、そもそも君らに聖剣渡すつもりなんかこつちにはねえんだよ!」

「何——」

『抉れ、鉄の矛先よ!』

瞬間、困惑するロンドの体を無数の鉄の槍が刺し貫いた。

普段なら詠唱を聞いた瞬間に回避が出来たはずだが、あの常識を粉碎するレベルの以上な戦闘を見せ付けられ、当惑した思考では回避することが出来なかったのだ。

腹を貫いた無数の槍は、どれも重要な臓腑を幾つも貫いている。致命傷。

最早、どう足掻いても死は免れない。

「が、はっ!？」

「ヒヤハハ！　　ったく、聖剣を手に入れたらぶっ殺すつもりだったが予定変更だ！　　もう君達なんていらぬ、この天才魔術師のスニークス・アンロット様一人で充分なんだ！」

「お、まえ……」

血を吐き出しながら、ロンドは先程繰り広げられた戦いで常識を粉碎されたスニークスの狂乱を見つめる。

あれはそれほどまでに非常識な戦いだった。それこそ、見る者の正気など紙のように引き裂くくらいに衝撃的だ。

「やってやる……！　　そうさ、あんな奴、どうせ聖剣を使って上手くやったインチキ野郎だ……！　　だったら僕の魔術であいつの聖剣を奪って、僕が勇者になれば……」

「く、そ……」

錯乱したスニークスの声を聞きながら、最後についた悪態はきつと己に向けて。

最初から、話し合いを持って聖剣を譲ってもらえるように頼めば、このような結末にはならなかったのだろうか。

己のことしか考えない傭兵団。自国を容易く裏切るようならまない魔術師。

人間種のためと思いながら、人間種のことなど微塵も考えていない者達を使った全て。

ならば、最初からこの末路は決まっていたのだろう。

そうして、最後まで己の不甲斐なさを呪いながら、戦いの名誉ではなく、不意打ち、しかも口外できぬような恥ずべき任務の中で、歴戦の勇士であるロンドの命は終わるのであった。

1  
全ては宗司の思い通りということなのか。クロナは見事メールに  
仇討ちを行わせた宗司が、メールの傍に歩み寄り、何かを語りかける  
のを遠めに見ながらそんなことを思った。

きっと、敵である自分すら許そうとしたあの少女にとって良からぬ  
ことを吹き込んでいるに違いない。付き合いと呼べるほど宗司と接  
したわけではないが、あの男が決してまともな人間でないということ  
は、それこそ肌身で知っているから。

だからと言って、干渉するつもりは一切ないのだが。

クロナも言ってしまうえば自己中心的な性格だ。いや、これは宗司に  
も言えることだが、己の中に律した法によつてのみクロナは動いてい  
る。故に、己を遥かに上回る剣客であり、命の恩人でもある宗司には  
命を捧げるつもりであるし、一方で敵である己を許してくれたメール  
には一定以上の敬意をもっている。

単純にこの場合、命の恩人である宗司のほうを優先したというだけ  
だ。結局、方向性が違うだけで、宗司も自分も似たようなものだな  
とか思っていると、折角着替えたドレスを血まみれにしたメールを連  
れた宗司が、爽やかな笑顔を浮かべながら歩いてきた。

「待たせたな、くろな殿。いやはや、少々めいる殿と今後の話をしてい  
てな」

「今後の話?」

「うむ。一先ず皆を埋めてやったら、そのままここを離れて王都とや  
らに行こうという形になった」

ということとはメビウス王国の王都で間違いないだろう。クロナは  
ここに来る前に確認した地図を思い浮かべ、現在地と王都との距離を  
考えて一つ頷いた。

「確かここから王都までは歩けば一週間とかからないはずだ……とな  
ると、私とソージ達はここで別れたほうがいいな」

「と、言うത്?」

「恥ずかしい話だが、私は不法入国で来ていてね。しかもこの見た目

だ。情報の伝わらない小さな村ならともかく、王都となれば間違いない。外国の者は入国許可証の掲示が必要になってくるだろう……私ではこっそり入ることも出来ないし、まあ、捕まるだろうな」

「むう、そういうものなのか……どうすればいい、めいる殿」

「え、えつと……私もそこらへん良く分からないんですけど」

「というか……君は大丈夫なのか？」

「え？」

クロナの心配の声に、メールは不思議そうに首を傾げる。

その様子は、あの凄まじい処刑を行った少女のものとは思えないほど普通だ。無理をして平静を装っているというわけでもないようにすら見える。

「あー……君は、その……人を斬つたのだぞ？」

「あ、はい、まあ今は恨んでませんよ。それですネソウジさん。とりあえず屋敷に王国のことについての資料があるので、そちらを調べるのがいいかと」

「となると、吊つてからとなるな……書物を調べるとなると最低でも二日は欲しい所だが……くろな殿はそれでよいかな？」

「……うん」

あまりにも簡単に流されてしまったせいでちよつと虚しい気分になったが、とりあえず本人が気にしていないならいいだろう。

おそろくだが、斬つた後に宗司が耳打ちした言葉によって、何かしら『やられた』のだろう。

立派な洗脳であるのだが、冷静に考えればこんな惨劇を経験したのだ。まともでいるほうが精神に異常をきたしたかもしれない。

「クロナさん？」

「ん？ ああ、すまない。大丈夫だ」

思案していたせいで表情が鋭くなっていたのだろう。それを見てこちらを心配してきたメールに愛想笑いを浮かべたクロナは、そこで宗司が居ないことに気づいた。

何処に行ったのだろうかと思えば、宗司はふらりとぶちまけ死体の乱雑するところへ歩み寄り、一人ひとり首を持ち上げて丁寧に斬り飛ば

していた。

「……あれは？」

「あれはって、もう、さつき話したじゃないですか。ソウジさんのところだと首を斬って綺麗に洗って弔うらしいんです。死ねば皆ほとけ？　って言っていましたけど、ほとけってなんなんですかね？」

「さあ、彼の宗教……いや、あの男が神を信じるとは思えんが」

「あはは、ソウジさんだったら神様居たら喜んでぶっ殺しにいきそうですね」

「……君、そんなキャラだったっけ？」

「はい？」

「いや、いいや……うん、なんか私、疲れちゃった。ほんのちよつとね」  
「もう、クロナさんのほうがキャラ変になってますよ」

元氣出してくださいとメールは朗らかに告げると、手を振る宗司の元へ血濡れのドレスを引きずって駆け寄った。

笑顔で首を受け渡しする二人の様子を見ながら、何で私はここまで冷静なんだろうなあと遠い目をしていれば、両腕に首を抱えたメールが笑顔で駆け寄ってきた。

「クロナさん！　早速私洗ってきますね！」

「ああ……いや、ちよつと待ってくれメール」

「なんですか」

メールを呼び止めたクロナは、「直ぐ戻る」と告げて屋敷のほうへと歩き、扉の横においてあった魔術の刻印が刻まれた袋を持ってきた。

「そのドレス。勿体無いから私が動きやすいよう仕立て直そうと思うのだが、どうかな？」

そう言いながら袋、見た目以上に大量の道具が入る魔法具の一つ『腹ペコ胃袋の口』に手をつ込み、中から裁縫道具の一式を取り出した。

クロナの体軀から見るとあまりにも小さすぎるが、出された裁縫道具は使い込まれ、しかも丁寧に手入れもされて年季が入っている代物だ。余程使ってきたのが道具を見ただけでもわかった。

メールはクロナのそんな提案に持っていた首を地べたに置くと、喜

色満面と言った様子で頷きを返した。

「ホントですか!?! わー、クロナさんありがとうございます!」

「……流石に首洗い続けるのは面倒だからなあ」

「何か言いました?」

「ハハツ、気にするな。それより着替えて——」

「よいしょつと」

着替えてくるといい。

そう言い終わるよりも前に、メールは着るときとは裏腹にあつという間に全てを脱ぎ捨てて再度その裸体を晒した。

その早業に唾然するクロナはおろか、遠目からそれを目撃した宗司も回収していた首を落とすほどの驚愕を露にする。

「あ、そういえばソウジさん私の裸嫌いだったんだ」

だが二人の驚愕も他所に、メールは思い出したように麻袋から先程のマントを取り出すと体に羽織った。

そして、再度置いておいた首を拾い上げると「では、よろしくお願いますね」と告げて、そのまま一人湖にまで駆け出した。

「……なんだ、あれは」

「ああ、やっぱりここでも全裸になるのはおかしかったか。やはり同性であつてもあれは驚くよなあ」

「なんだ、あの胸は……! なんだ! あの胸は!」

「そっちか!」

鎧を纏った己の胸の部分に手を当てて激情するクロナと、その反応に驚く宗司。

だがいつまでも驚いているわけにもいかず、湖に入って首を洗うメイルを眺めながらドレスを動きやすいようにスカート部分を直し始めたクロナ。宗司は残った首の半分をメールのところに、もう半分を自分のところに持つてきて、適当な賊の服の切れ端を洗った布で首を丁寧に磨き始めた。

「ところでソージ」

「なんだ?」

嬉々として人斬りをしていたというのに、弔う姿を見ればそれは真

剣そのものだ。だがそれでもクロナは宗司に聞かなければならないことがあった。

「貴方は、メールをどうするつもりなんだ？」

「俺を殺させる」

「は？」

間髪入れずに返ってきた返答に目を丸くさせていると、宗司はクロナを見上げると、唇の端を吊り上げた。

「お主も見ただろう？ あの前首を斬り落とした最後の一振り……あれは、美しかった」

「……悔しいが、それは認めよう」

そのときを思い出して耽る宗司の言葉に、クロナは渋々ながらも同意をした。

確かに最後の一闪は末恐ろしい何かを感じた。

動きは稚拙。

呼吸はばらばら。

足腰も入ってなく、只腕の振りだけ使った稚拙な一撃。

宗司ほどではないが、武に身をおいているクロナから見ればあまりにも矮小で取るに足らない一撃だった。

なのに、飲まれかけた。

あの最後の渾身。首を斬るという一心に奪われかけた。

「意志在る鋼に刃在り……一年ほど師事を受けたお方の言葉でな。意志というものは、それぞれのものが鋭利な刃物なのだ。技巧や体力など二の次だ。どれだけ己を刃と成すか、武の、いや、あらゆる全ての理ことわりに通じる真理だと俺は思う」

「己を刃に……」

「ああ。そして、あの瞬間のみならば……くろな殿はめいる殿に劣るだろうなあ」

言ってしまうえば戦いを知らない小娘以下と言われているクロナだが、不思議と悔しいという思いは浮かばなかった。

それはきつと、あの時のメールの意志が、己を制した宗司が最後に放った一撃に近い何かであると悟ったからか。



「そして、心の刃とは凶器である。凶器は転じて狂気と成し、経てして狂気は死に狂い、果ての奈落で真理の闇と落ち続ける……その過程で闇に心を惑わさずにいられるかどうか、修羅道と外道を分ける一線であろう」

「だとすると、貴方はどうなのかな？」

クロナの意地の悪い質問に、宗司は困ったように眉を寄せながら嘆息を一つ。

「さてな。所業を思えば外道だが、至ると悟ったのは修羅の道……俺も奈落を落ちている道半ばの者。果てに立たねば、この業の闇では道の名などは分からぬよ」

だから一人でも強き者を食らい、至らなければならぬのだ。

宗司はそう語ると、一心に首を洗う裸マント状態のメイルを見た。

「最初は少々ぼけた女子かと思ったのだがな。あれは完全に『脳髓の螺子がぶっ飛んだ狂人』だ。資格といえば、充分だろう」

「では、私はどうなんだい？」

「お主は武人だ。少々まどろんでいただけで、根っこは只の正道者よ」  
「それはどうも……で？ 貴方は彼女を育て、そして己の糧にすると決めたんだね？」

率直な物言いに、宗司もやはり率直な言葉を返した。

「うむ。垣間見た命の煌きは素晴らしかった。故に、俺を殺せるところまでめいる殿は極めさせてみせよう」

だがしかし、宗司はそう言うと、何かを思い出したように含み笑いを浮かべた。

「ソージ？」

「ククツ……いや、これは盲点だったよなあと思つてな」

そう、あまりにも簡単なことだったのだ。

己と比肩する者が何処にも居ない。

「最初から己で育てればよかったのだな、こういうのは」  
ないならば作ればいい。

仮にもし己の目が曇っていて、思ったところにまで育たなくても。それでも、ある程度は斬りがいのある者には成長するはずだから。

「今から楽しみだなあ」

「私は今から不安で仕方ないがね」

どうやら、とんでもない男に特大の貸しを作ってしまったらしい。

針でドレスを縫いながらそんなことを思ったクロナは、疲れた風に溜め息を漏らし。

ちらりと、だが鋭い視線を森の奥へと走らせた。

「それで？」

「まっ、一先ず斬ればいいだろ」

直後、宗司は落ちていた片手剣を拾い上げ、脱力を用いた高速の投擲で森の奥に片手剣を投げつけた。

木々をすり抜けた片手剣は、そのまま木に突き立つのではなく、微妙に周囲の風景を歪ませていた虚空に突き立った。

「ぎゃあああああ！ 痛い痛い！ 痛いよおおお！」

遅れて発生した悲鳴を聞いて、メイルが驚いた様子で振り返る。

その間に宗司とクロナの二人は立ち上がると、魔術によって周囲の風景へ姿を隠していたが、右肩を片手剣で貫かれた痛みで魔術を解いてしまった男が転がり出てきた。

対して二人は静かな戦意を漲らせると、作業は一旦置いておいて、紫電の勢いで間合いを詰めた。

「あああああ、あ、あ……あ？」

涙と鼻水、そして止まらぬ流血で体を濡らしていた男は、あつという間に間合いを詰めてきた二人を見上げ、痛みに悲鳴をあげることすら忘れてしまった。

何せ目の前には、紅蓮のように燃え盛る威圧感を発するクロナと、それすら飲み込むほどの冷気の如き殺気を視線に込めた宗司が居る。

「あ、ひ、い……」

僕、死んだ。

幾ら馬鹿でも、己のおかれた状況だけは理解できたらしい。

こうして、抵抗はおろか、見せ場すら見せ付けることも出来ず、スニークス・アンロットは二人の規格外を前に詰みをかけられたのであった。

## 第七話 『後悔なんて、死んでもせんよ』

スニークス・アンロットとはある貴族が平民の女の間で作った子どもだ。その貴族がそれなりに情に厚いこともあり、迎え入れられることはなかったが、定期的に二人が生きていくだけには充分以上の金銭を与えてくれたため、スニークスは同世代の平民に比べて、いや、むしろ木っ端の貴族よりも裕福な暮らしが出来ていた。

美味しい食事に、優秀な家庭教師による勉学の師事、同世代からは人気があり、子ども達の中では崇拜の対象であった。

その当時から少々己のことについて無自覚な自惚れを覚えていた彼だが、その自惚れに拍車をかけたのが魔術の才能であった。

貴族の血が入っているおかげなのか、或いは彼独特の才能なのかは分からない。ともかく、類まれな魔術の才を開花させた彼は、若干十歳で、平民としては異例の王宮つきの魔術師として召抱えられた。

それからの彼はともかく有頂天だったといってもいい。表面上は優雅に振舞いながら、内心では周囲の人間を劣等種と小馬鹿にしていたし、自分に見合う女性は王族の姫君のいずれかしか居ないか思っていた。

青春時代にかかる麻疹の如き自己肥大の顕示欲。それをこじらせた結果、二十歳となった現在でも子どももの幼稚な精神構造のままというふうしようもない男が彼であった。

だがその魔術の腕は確かであり、その魔術によって王宮の図書館の奥、王族のみが入ることを許された秘蔵されている禁書を含めた蔵書のある部屋の封印をこっそり解除して閲覧することで、より魔術の腕を磨くようになった。

結果、彼は勇者の存在と聖剣と呼ばれる規格外の魔法具の存在を知る。

——これこそまさに、僕に相応しい剣ではないか！

文字通りその場で小躍りしたスニークスだったが、問題はこの聖剣とその保管場所を知るのが、代々聖剣の守り手として選ばれた幾人かの女性と王族のみであり、それ以外は誰も存在を知らないのだ。

これではもし自分が意気揚々と聖剣を手に入れても、何故それを得たのかと王族に糾弾されてしまう。下には強いが上にはめつぽう弱い男でもあるスニークスとしては、何とかして王族に感づかれないう形で、あくまでも偶然を装って聖剣を手に入れる方法が必要であった。

そして彼は王国にも秘密の諸外国との交流を行い、遂に魔族の最前線である落ちかけの帝国の協力を取り付ける。

これで役者は整った。後は彼らが派遣した賊達を屋敷で暴れさせ、彼らが森を出たところで、偶然を装って通りかかった設定の自分が颯爽と彼らを倒し、聖剣を入手すればいい。

帝国側の兵士も一人派遣されたが、これは後ではいけないところで殺せばいいだろう。

などと、所々穴だらけだが、何を思ったのかこの計画を完璧だと確信したスニークスは遂に後一步のところまで聖剣に近づいたのだが

現在、目の前にあるはずの聖剣との距離は、絶望的なまでに遠かった。

「さて……この小僧。どうするか」

聖剣を入手する最大にして最悪の壁、宗司は顎をさすりながら、値踏みするようにスニークスを見た。

その視線、立ち振る舞いからは隙など見出せない。呼吸すら鋭い宗司を見るだけで、現実から目を背けることでやる気を奮い立たせただけのスニークスの気を削ぐには十分だった。

しかし、未だスニークスは戦う気力を失ったわけではない。

（畜生。後ちよつとなんだ。あいつから聖剣さえ奪えれば、こんな奴ら！）

二人にはばればれだが、スニークスは痛みで呻き声をあげながら、宗司の腰に携えられた聖剣を盗み見た。

世界中の美を固めて作り上げたような白銀の鞘と柄。鞘自体にも美しい金の細工が施されており、まさに勇者と呼ばれる英雄に相応しい剣に違いない。

あれさえあれば僕も伝説の英雄なんだ。

後僅か。それだけで世界の全てが自分の物になるというのに――

「ほれ、くれてやる」

その思いを察した宗司は、何の躊躇いもなく聖剣をスニークスの前に放り投げた。

「へ？」

「俺はそれ要らんからな。使えるならくれてやる」

スニークスは一瞬、宗司が言っていることが分からなくなった。

今、くれてやると言ったのか。

魔王すら封印してみせた伝説の聖剣を、何の躊躇もなく手放した？

「う、う」

「早く拾え。でない回収するぞ」

「うわああああああああ！」

スニークスはあらゆる思考を手放して、再び聖剣を拾おうとした宗司の手を遮るように聖剣に覆いかぶさった。

その際右肩に刺さった剣がさらに深く突き刺さり、骨をごりごりと削るが気にもならなかった。

「う、ひ、ひひひ……こ、これは僕のもんだあ」

「……なあくろな殿、こいつは誰だ？」

「大方、私を雇った傭兵団を雇った大本と言ったところかな。この夕イミングで現れるとしたらそれくらいしかないだろう」

「ふむ。そういうもんかの」

「ふひやあああああ！」

スニークスは二人が話している隙を狙って、聖剣を片手に抱えて、地べたを舐めるようにして距離を取った。

意外な逃げ足の早さに二人が「おお」などと感嘆していると、スニークスは唾液をだらだらと流しながら、焦点の合わない瞳で二人を睨み、聖剣を片手にゆっくりと立ち上がった。

「ぐ、おおおお！」

「さつきから叫んでばかりで五月蠅いのお」

宗司がぼやく前で、強引に右肩に突き刺さった剣を引き抜くスニークス。乱雑に引き抜いたせい、傷口が広がってさらに多量の血液が

あふれ出す。だがスニークスは虚ろな笑みを浮かべながら、体から溢れ出るほのかな光、魔力を吐き出して詠唱を始めた。

『癒せ、慈愛の腕よ』

詠唱の後、スニークスの左手が温かな輝きを放った。

性根が阿呆だろうが、魔術の腕は確か。魔術を知るクロナが感心するほどの魔術の冴えを見せたスニークスは、その左手を傷口へとあてがった。

「ぐ、う……！　だ、だが、これで回復すれば……！　急げ、急ぐんだ……！」

「しかしメイルは豪胆なのか単なる鈍感なのか……」

「あれは天然だな。普通、これくらい叫び声が聞こえれば近づいてきてもおかしくないだろうに……一度振り返ってそれきりだ。どうやら余程首洗いが気に入ったらしい」

「よ、よし！　ふは、ふはははは！　この馬鹿が！　僕に聖剣を渡すどころか、回復させるまで待つとはな！　何か算段があるようだが、聖剣を手に入れたこの僕は最早、そんな小手先なんて超越するほどの力があるんだよお！」

「というかソージ、乙女の肌をじろじろ眺めるな」

「やはり、ここでも全裸はいかんかったか……正直、ちよつと眼福だったんだがなあ。礼儀ならば仕方ない」

一人燃え上がるスニークスから視線を逸らすどころか背中すら向けて、宗司とクロナは鼻歌を歌いながら裸マントで首を洗うメイルの後姿を眺めて言葉を交わしていた。

眼中にすらない。

「というか、興味すらもたれていない。

「ふ、ぎ、け、る、なあああああ！」

「だから五月蠅いと何度も——」

「うおおおおお！　聖剣よ！　我が力に応えたまえええええいいいい！！」

「聞いてもおらんか……」

あきれ果てる宗司の前で、スニークスは聖剣の柄を握り締めると、

なんだか大仰な叫び声をあげながら力を込めて引き抜こうとするが、当然の如く聖剣はスニークスの呼び声などに応えるわけがなかった。

「え!? ちょー! なんで!?!」

「ソージ、やはりあの剣、君にしか扱えないのではないか?」

「はあ……いや、本当に要らないのだが」

宗司としては、スニークスが聖剣を扱うことが出来れば、厄介払い出来るうえにあの聖剣と戦えるという一石二鳥の展開だったのだが。

どうやらそう上手くはいかないようだ。暫くは聖剣を掴んで得られた情報を元に、脳内で聖剣の機能を最大限に使える敵手との仮想決闘を楽しむしかない。

ちなみに、聖剣を手に入れて現在までに片手間で繰り広げた仮想決闘の戦績は九十七勝八敗。

尚、これは生身の聖剣の機能を全て使える相手の戦績ではなく、当然生身の宗司が聖剣を打ち負かした戦績である。

つまり、宗司であっても聖剣の使い手であれば、地理的な条件が合えば百戦つて五、六回は勝利を収める可能性があるのだ。

恐るべきは、聖剣チートの万能なる力か。

或いは生身で聖剣を圧倒する宗司の戦闘力か。

いずれにせよ、聖剣を使えないのなら意味がない。宗司はつまらなそうにスニークスへと視線を戻すと、腰の鞆に手をかけた。

「いや、まだだ!」

「ん?」

「お前が聖剣の使い手なら、お前を殺せば聖剣が手に入る!」

錯乱した状態の偽りの戦意ながら、スニークスは己を奮い立たせて宗司の前に立つ。

阿呆とはいえ矜持の成す意志か。そのメツキのような頼りない心を、しかし宗司は良しとした。

「なら、俺を殺してみろ……だがな」

宗司は言うが早くスニークスの意識を縫うような形で間合いを詰めると、こちらに気づく前に聖剣を奪い去った。

「あぁ?」

「さて、と」

宗司は容易く奪い去った聖剣の柄を握りこむと、一気に抜き払った。

瞬間、聖剣を中心に天を衝き穿つほどの魔力の嵐が吹き荒れた。

——あれはまだ全力ではなかったのか!?

クロナは眩いばかりの魔力の光に目を焦がしながら、魔族すら遙かに凌駕する魔力量に戦慄した。

聖剣は宗司の戦う意志を受けてその力を解放している。何てことはない。これまで宗司が聖剣を扱っていたときは、彼が戦闘態勢に入っていなかったため、聖剣はその機能を最低限に留めていただけなのだ。

唯一、聖剣から受ける情報でその全てを理解していた宗司だけが平然と立っている。その身を包むのは万能の力だ。

その気になれば全てを破壊し、或いは全てを救済することができるとすら思える力。

「ほれ」

それを容易く手放して、宗司は抜き身の聖剣を、恐怖にとうとう屈したスニークスの足元へと投げた。

「なにを!？」

「いやな。お主が抜けなかったとき思ったのだが、俺が抜いて他人に使わせたらどうなのかとふと思うてな」

「だからとてソージ。あの魔力量は……!」

「だからとてだよ、くろな殿。……だろ?」

宗司は震えが走るほどの冷たい笑みを浮かべ「めいる殿を頼む」と告げてクロナを下がらせた。

問答無用であり、そして抗うことが出来ない。これは自分が一度、宗司に敗北しているからなのか。いや、それ以上に底知れない宗司の異常性を察したからか。

「分かった……私はメールと屋敷のほうに待機しよう」

クロナは応じるがままゆっくりと後退しながらメールの元へと行った。



だが宗司は既にクロナを見ていない。視線を注ぐのは聖剣を前に混乱をあらわにするスニークスのみだ。

「ほら、使えよ。折角こっちでお膳立てしたのだ……少しは楽しませろよ?」

「う、ひ……」

あの恐るべき力をなんら躊躇なく投げ捨て、あまつさえ敵対者である自分にわざわざ使わせようとするその精神は、精神的に凡人でしかない彼にはわからないものであった。

恐怖。そして困惑。

この男は一体何を求めているのだろうか。そんなことを思うのも束の間、直ぐに宗司がただ慢心しているだけだと無理やり納得して、聖剣へと手を伸ばす。

「こ、後悔するなよ」

「後悔なんぞ、死んでもせんよ」

あくまで挑発し続ける宗司を、隠しきれない怯えを孕んだ瞳で睨みながら、スニークスは白銀に輝く美しい聖剣の柄に手をかけた。

## 第八話 『勇者（傀儡）を、斬る』

全能感とはどのような状態だろうか。

——無論、今のこの僕の状態だ。

聖剣を握り締めた瞬間、圧倒的という言葉ですら足りぬほどの膨大な魔力が体中を駆け巡ったのを悟り、スニークスは先程までの絶望から一転、万能の力に滾る己を天に誇るように胸を張って立ち上がった。

「ふふふふ、はははははははは！ 全く愚かなことをしたよ君は！ いやはや、確かにこの力を有すれば自惚れる気も分かるがね。まさか聖剣の力を己の力と過信して僕に手渡すとは！ くはは！ ここまで僕を虚仮にした人間は君が初めてだが、今となつてはその嘲りが悲鳴に変わるのを思えば、笑いすら漏れてくるよ！」

「……」

「どうした!?! 今更になつて僕の力に恐れをなしたか!」

そう言つて、スニークスは挨拶代わりとばかりに聖剣を虚空に向けて一振りした。

だがただ虚空を切り裂いただけではない。滂沱と溢れる魔力が刃の軌跡に沿って魔力の刃を成し、宗司目掛けて疾風の勢いで放たれる。

これはスキルと呼ばれる魔術とは別の詠唱を必要としない固有の技術だ。古い言い方だと魔闘技と呼ばれていたが、ステータスが導入されてからはスキルと呼び名は統一されている。

その中で剣術スキルの初歩に当たるのが今スニークスが放った『スラッシュ』と呼ばれるスキルだ。術者の魔力を刃の軌跡に沿って飛ぶ斬撃として敵手に放つことが可能なこのスキルは本来、斬撃の十分の一程度の威力でしか放てない牽制用のスキルである。

しかし今宗司目掛けて解放されたスラッシュは、習熟度が限界に到達しているため、斬撃の十倍の威力と速度という規格外と化していた。

さらに聖剣の力で底上げされた戦闘力との相乗効果によって、ス

ラッシュの斬撃は宗司はおろかクロナの巨躯すら超えるほどの規模となる。

「……ふん」

しかし、閃光と放たれたスラッシュは宗司に当たることなく、その背後にあつた屋敷を両断し遙か彼方まで大断層を刻むだけに終わった。

軌道を予測した結果、自分にはぎりぎり影響が及ばないところで放たれるのを宗司は悟ったから動くことはなかった。

故にどんなに破壊力があろうと、当たらないなら眉を潜める必要すらない。鼻を鳴らして腰の刀を抜き払った宗司は、こちらのことなど無視して哄笑するスニークスを静かに見据えた。

「ヒヤヒヤヒヤ！ す、凄いぞ！ 高々スキルの一つを使っただけでこの威力！ しかも上級スキルすら使い放題ときた！ これだよ！ 僕に相応しい力だよ！」

「……所詮、畜生か」

宗司は呆れた風に肩を竦めると、スニークスが気づくくらい大袈裟に前に一歩踏み出した。

そこでようやく宗司が刀を構えていることに気づいたスニークスは、喜悦を孕んだ瞳で、今や格下となった宗司を見下した。

「おいおい、まさか君、今の僕と戦おうっていうのかい？ はははは！ 慈悲深い僕としては、抵抗しないなら楽に殺してやってもいいと思っっているのだがね？」

「……」

「もしくはそうだなあ。あそこで暢気に何かしてる裸マントの変態女を僕が相手している間は逃がしてやってもいいんだぜ？ 勿論、飽きたらあの女もぶっ殺して逃げた君を丁寧に殺してやるがね！」

「……」

「今更己の過ちを後悔してだんまりかい？ 馬鹿が！ 聖剣の力に酔って油断しまくったあげく、どうせ自分以外に使えないだろうと聖剣を手放した君が愚かなだけさ！ 残念ながら今や聖剣は僕を選んだ！ そうさ！ 僕こそが英雄！ 僕こそが勇者！ 僕こそが——」

「一先ず目を覚ませ」

瞬間、スニークスの右腕が吹き飛んだ。

「え?」

「つたく、あまりにも長口上すぎて飽きたわ」

だから斬った。

あらゆる能力が限界値に到達したスニークス。そんな化け物の意識の隙を容易く縫って間合いを詰めた宗司の斬撃は、やはり容易く聖剣を掴んでいない右腕を根元から断ち斬った。

それだけ。

たったそれだけの、異常な術理。

「ぎゃあああああああああああ!」

「……お主、実はわざと道化となっていないか?」

斬られたのを知覚したのと同時、決壊した堤防から溢れ出る水の如く切り口から噴出す熱血。自ら流れる血潮の赤に濡れながら、スニークスは激痛に悶え地べたを転がりまわった。

「ギャアアアアア! あああああ! うわああああああ、あ、あ?」

「ほう……これで俺も助かったのか?」

激痛に悶絶していたスニークスは、右腕の感触が戻ったのに目を瞬かせた。

同時に痛みも全てなくなっている。慌てて右腕を掲げれば、そこには無傷の腕が傷口の跡もなく綺麗に繋がっていた。

これが聖剣の能力である自動詠唱の力だ。使用者の窮地には自動で魔術を詠唱しピンチを離脱させる。それによつてたとえ使用者が動けない状態でも、動かせる状態まで数分もかからずに治すことが可能である。

今回は宗司という規格外の脅威を前に、斬られた腕を直接繋げるのではなく、瞬時に肩から新たな右腕を再生させてみせたというところだ。

無論、人間の肩からもりもり腕が生えてくる光景はとても正視に堪えるものではないが、宗司は興味深そうに全てを見届けた。

「びっ… どうするっ?」

スニークスは頭上で刀を構えている宗司のその一言に、慌てて体を起き上がらせ距離を取った。

一步で十メートルを容易く超える距離を広げた臂力は大したものだが、最早スニークスの顔からは聖剣を手にしたことによる余裕や、宗司に対する嘲りの感情は全て失われていた。

その顔に浮かぶのは未知の化け物に対する恐怖だ。それを聖剣を手にしたというちっぽけな矜持で押さえつけ、辛うじて宗司と対峙している。

「な、なんなんだよお前は！」

「我流。宗司。これは無銘の刀。お主が今持っている聖剣とは違い、変哲もなき鋼よ」

「う、嘘だ。そんなの……」

咄嗟に否定の言葉が出たが、それは直ぐに聖剣の搭載する魔術の一つである解析魔術によって覆る。

解析の結果、宗司の持つ刀に特殊な魔術の痕跡は見られない。それどころか、刀を操る宗司すら、魔術を使用している痕跡がなかった。

では先程の一連は何だと言うのか。音速の一撃すら見切る目と、鋼を遥かに凌ぐ硬さを得た肉体を乗り越え、容易く己の右腕を切断したアレはなんだ。

何が起きている。

何をされている。

何が。

何を。

「ふざけるなああああ！ 聖剣を手にした僕が！ 負けるわけないだろお！」

脳裏を駆け抜ける様々な疑問を振り払って、スニークスは魔術を発動しようとして——いつの間にか目の前から宗司が居なくなっていることに気づく。

「遅い」

だが気づいた時にはすべては終わっている。やはり動揺している間の隙を見切り、間合いを詰めた宗司は、呆けた様子でこちらに視線

を向けるスニークスの上半身と下半身を泣き別れにする勢いで真一文字に刀を振るった。

だがそれに対してスニークスは、否、聖剣は反応する。スキル自動詠唱で、動かない体を魔力で強制的に動かすスキル『マリオネットダンス』を発動してスニークスを下がらせた。

しかし、一歩が遅かったのか。下がったスニークスが着地すると、その衝撃で浅く斬られた腹部から、思い出したかのように臓物の一部が溢れ出した。

「ぎ、ひ？」

痛みよりも、己の腸が出たことへの嫌悪感に当惑する暇もない。さらに間合いを詰めた宗司が上段より縦一闪。回避できぬと悟った聖剣は、回復を置いて聖剣の刃で宗司の一撃を受け止めた。

「はは、口惜しいが、今の俺ではやはりお主は斬れぬようだな、ちいと！」

「痛、痛い！ お腹！ お腹が！」

「だが所詮は道具。担い手を斬れば意味なしよ！」

「やめ！ ギャあ！ 痛い！ 痛iiiiiiii！」

宗司とスニークスの両者が呼気すら感じる間合いで火花を散らす。

一瞬で己の間合いを取った宗司は、聖剣にスキルと魔術を使用させる暇すら与えずに怒涛と刃を振るう。

しかし聖剣もさるもの。生物の目を騙す宗司の技量を、無機物ならではの機械的な判断能力で対応し、刃を防ぐどころか返しの一撃すら何度か織り交せてさえた。

だがやはり剣技の間では宗司が一步どころか段飛ばしで圧倒している。聖剣が一を放つ前に、宗司の斬撃は速度で決定的に劣りながら十を返し、さらにはその内の三を確実にスニークスの肉体へと斬りつける。

最早、聖剣の使い手となったと『勘違いしていた』スニークスは、聖剣に操られる肉で出来た人形でしかない。美麗な顔を斬り傷から溢れる鮮血と涙と鼻水でぐしゃぐしゃに歪め、腕の肉を斬られて骨が覗き、眼球を一つ抉られ、腹から出た腸をずたずたに斬り裂かれながら

も、彼は引くことも出来ずに聖剣の傀儡として戦うしか出来なかった。

彼にとっては最悪なことに、自動詠唱にて唱えられたスキル『自動回復』によって、再生と破壊を幾度も繰り返すこととなる。本来なら宗司がそうであったように数秒で致命傷すら回復するスキルだが、それすら上回る宗司の技量によって、徐々にだが確実に死への道筋を辿っていた。

当然、その道筋は回復効果と相俟って永遠とさえ思えるほどの長さで化してはいるが。

「助けて！ 誰かあああ！ 助けてくれえええええ！」

死という救いすら聖剣を握るスニークスには訪れない。

悲痛な叫びに応えるのは冷たい鋼のみ。再度防御を突き抜けて顔面に縦に割った刃は、綺麗な曲線を描いていた鼻を二つに割り、優雅な笑みを象っていた唇も上下二つではなく四つに分断した。

ぱつくりと分かれた鼻からとめどなく流れる鮮血は、だが二秒もせずに強引な癒着を果たす。だが聖剣をもつてしても回復に裂く余力はないのか。繋がった鼻筋と唇は歪に姿を変えてしまっていた。

その間にも死闘は加速していく。術理の限界を極めた宗司が優勢に見えるが、その実、一撃で戦況を変える力を有する聖剣が相手では一瞬たりとも気を緩める暇すらなかった。

肌を焼く暴風。体を突き抜ける鋼の重さ。上手く流れを読まねば、規格外の臂力より放たれる風の余波だけで自分は吹き飛び、敗北するだろう。

宗司はスニークスの周囲を回りながら刀を振るう。クロナの戦いで見せた緩急の動きは健在だ。たとえ無機物の思考であっても、やはり宗司の奇怪な歩法は完全には捕らえられないらしい。一秒前に宗司が居たところを虚しく裂いているのがいい証拠だ。

だが確実に修正してきている。

宗司は着物の端がはずたずたに引き裂かれるのを感じ、刻一刻と迫る聖剣の牙を夢想し冷や汗を流した。

これだ。

これなのだ。

脳内で思い描いた聖剣との戦いとは違う生の実感。現実ゆえの差異、想像を超えるからこそその現実。

そこに浸るからこそ、己もまたより一段と鋼に磨きを掛けられるというものだ。

「いいぞ、いいぞ、ちいと！ この修羅場にて！ 言葉でなく真の刃まことであるお主と斬りあえる至福に感謝しよう！」

「もうやだああああ！ やだよおおおお！ ママああああああ！」  
「滾るぞー！ もつとだ！ まだまだ終わらせるものかよ！」

周囲の景観すら一変させる聖剣の脅力に震えながら、宗司の顔に浮かぶのは隠し切れない喜悅の笑み。

止めるつもりなど何処にもない。

この冴え渡る死地の只中、今はひたすら強敵と語らう刹那の狂気に身を委ねよう。

聖剣チート。世界を滅ぼす魔王から人類を守るべく神より与えられたとされるこの魔法具の正体を知る者は、その剣に何度も滅ぼされてきた魔王以外には最早存在しない。

無限の魔力。全ての魔術とスキル。そして担い手の能力値を限界まで引き上げるこの恐るべき力を、何故メビウス王国は魔王の復活に伴う人類の窮地に対して、これまで解き放つことをしなかつたのか疑問に思うはずだ。

何せ、担い手の召喚は、聖剣そのものを媒体にするだけで容易く行えるものであり、その力をもっと早くから使っていれば、今日の人類の窮地をもう少しマシなものにできたはずだ。

いまだ、メビウス王国自体が魔王の脅威に晒されていないから。それも理由の一つとしてあげられるだろう。だが、スニークスが見つけた王国の禁書に記されている通り、魔王を倒す絶対的な手段としてある以上、他に方法がないのなら、何れ世界が魔王に飲み込まれる前に



聖剣を使うのは必然であるはずだ。

そもそも今は世界各国の魔術師が命を賭して展開した結界によって、魔界と人間界を隔てる結界が張られ、辛うじて均衡が保たれているが、もしこの結界が展開されるのがもう少し遅かったら、メビウス王国は容易く魔族達の手によって飲み込まれていただろう。

そんな危うい状況にありながら、メビウス王国が頑なに聖剣チート存在を秘匿し、そして担い手たる勇者を召喚しなかった理由は、一つ。

単純な話だ。聖剣は、魔王よりも危険だからである。

たったそれだけの単純明快。その真実を、宗司達はその体で体感することになる。

「あー。あー」

戦いは熾烈を極めていた。果たして開始よりどの程度の時間が流れただろうか。度重なる剣戟。宗司が放つ斬撃の激痛に耐えかね、肉体の傷はある程度回復してはいるが、ついに目を虚ろにさせて、口から唾液と血液のブレンドした液体を流し、その精神が壊れるほどまでスニークスがなる程度の時間は流れていた。

だが、腹から漏れた大腸から、食した残飯と血液、そして股から糞尿を垂れ流すまで自我を失ったスニークスの動きは、恐るべき速度と精度を維持している。一切乱れることなき聖剣の切っ先を見据え、宗司は声を出すことなく、その力に感嘆していた。

——ここからだ。

高揚する精神とは裏腹に、あくまで冷徹に斬撃を繰り返す宗司は、ぼろぼろになった着物を靡かせて、大上段から振り下ろされる一閃を巧みに背後へ回りこんで回避する。

虚空を斬る刃。だがそれだけに終わらず、威力を増した聖剣の一太刀は、その直線上にあった大地と木々を、魔力のこもった閃光でなぎ払った。

今や、両者の立つ周囲の光景は、戦う当初とは様変わりしている。

まるで百万の軍勢がぶつかり合ったかのように崩壊した周囲の光景の中、しかし宗司は傷ひとつ負うことなく、チートの成す脅威から

逃れ、返しの一撃を放っていた。

対して、聖剣は振りぬいた勢いに抗うことなく、前方に転がることでその切っ先から逃げる。

しかし浅く斬られた背中中は確か。そこから溢れる熱血を意にも返さず、転がりながら距離を取ろうとした聖剣に宗司は追いつがった。

「逃がす……ッ!?!」

宗司はスニークスの体を流れる魔力の流れを見切り、反射的に刃を振るった。

紫電の斬撃は、予想通り宗司目掛けて放たれた炎の矢を斬って散らす。僅か止められた歩み、それだけで充分だと、聖剣はスニークスを媒体に、虚空に幾つもの魔法陣を敷いた。

炎の矢。

氷の剣。

草の鞭。

風の弾丸。

属性をふんだんに使った魔術の顕現。出し惜しみせぬと一斉に放たれた魔術郡は、やはり宗司の歩法によつてあらぬ方向へ放たれて虚しく散った。

「目に頼るとそうなる……!」

聖剣が予測した宗司の回避行動は、全て宗司が歩法で騙した偽りの動きだ。一步も動かずに無機物たる聖剣を騙してみせた宗司は、それを誇るでもなく、あらゆる魔術が降り注ぐ世界を、一直線に駆け抜ける。

無詠唱で放てる魔術では宗司を捉えることは不可能だ。

それを悟ったのか。聖剣は魔術への魔力供給を止めて、全てを肉体の強化へと叩き込む。

白い光を纏ったスニークスもまた、迎え撃つと宗司へ飛び掛った。速度はやはり聖剣が上、刹那も経たずに間合いへ辿り着いた両者の機先を制したのは、速度で劣っているはずの宗司だった。

聖剣が予測した間合いに入るタイミングを僅かにずらし、先んじて間を詰め一閃を放る。袈裟に抜いた煌きは、意をずらされた聖剣の反

応を超えて、はみ出た臓腑ごと腕と肺を裂いた。

「ッ!？」

しかし、鋭利過ぎる切っ先が逆に手を損じる。

見事な切り口の断面を、聖剣は直接魔力で繋ぎ合わせ、そのまま瞬時に癒着させる。この土壇場で、聖剣もまた新たに生み出した技法にて宗司に追いつがろうと技を練っていた。

成長する最強。

チートの名は伊達ではない。敵手の巧みを知り、それを元に己の技を巧みと扱う術を洗練とさせているのだ。

そして、斬られたはずの腕を即座に回復させて力を取り戻したスニークスの手は、斬撃後の隙を晒す宗司の首へと走った。

稲光の如き刺突は、それでもやはり空を裂く。

宗司の顔の横を抜けた刃は直撃しなかったが、巻き起こった風の刃は、宗司の耳を二つに裂き、頬にも浅い裂傷を与えた。

「良くぞ、斬った」

宗司は痛みに怯むことなく、そのままスニークスの懐へ入り込むと、お返しとばかりに渾身の刺突を心臓へ突き立てた。

肋を割り、心の臓を裂く刃。今更だが、ドラゴンの鱗を凌ぐスニークスの体を容易に貫いた宗司の刃は、それだけでは終わることはなかった。

「徹せー!」

踏み込んだ足に力を込め、突き立てた刀を掴む右手を捻るようにして押し込む。

捻りによって生み出された螺旋の力。それは小規模な竜巻となつてスニークスの胸部で破裂した。

徹し。クロナを起こした時にも使用した、力を任意の場所に伝えるこの技を応用することで、一点に収束する刺突の力を、全方位に拡散させる術。

当たれば内側から爆発するという一撃は、鋼を超える硬さを誇るスニークスの肉体には殆ど電波しない。

しかし宗司の狙いは破壊ではない。そも、今のスニークスは心臓を

吹っ飛ばしたとしても、聖剣の力で強引に動くことは可能だろう。

狙いは一つ。浸透させた力による、肉体の誤作動だ。

「あ、が」

全身の血流に乗せられた宗司の徹しは、霊的な力である魔力の通る体を狂わせる。

一瞬、強化された肉体の魔術が解け、柔らかな人体の手応えが宗司の手に伝わってきた。

「シッー」

これならば、無理をする必要もない。

呼吸を一つ吐き出して、強化魔術が再び構成される前に、宗司は突き立てた刀を真上に振るった。

胸から脳天までが見事二つに分かれる。中心線から割れたスニークスは絶命したはずだ。

「……おいおい」

宗司は振りぬいた刀の向こう側、噴出する流血に視界を赤く染めながら苦笑した。

割れた肉体が重力にしたがってずれる瞬間、聖剣より走った魔力が、即死したスニークスの傷口を癒着させる。

さらには、破壊された心臓を復元し、雷の魔術を用いた心臓マッサージを行ってさえた。

「うぐぐぐぐぐぐぐ！ あがががががががが！」

体に流れた電流で再起した心臓。意識を取り戻した——精神はぶっ壊れている——スニークスが、電流のショックで小刻みに震えながら、それでも動く手で反撃の一振りを返した。

今まさに死んだ身だというのに、その一撃は熾烈を極める。やはり回避してみせた宗司だったが、冷や汗を流さずにはいらなかった。

「……これでも死なない、か」

心臓を抉られ、脳みそが機能を停止した一瞬、いまだ体に残された臓腑が僅か機能していた。そしてそれは聖剣にとって生きているのと同義だったため回復したという話だろう。

どうやらこれを殺しきるには、聖剣を掴んだ手を直接斬り飛ばす

か、一瞬で肉体を消滅させるしか方法がないらしい。

前者は、何度も試しているものの、それこそ心臓と脳みそが斬られるとしても、聖剣を掴んだ腕は庇っているため、難しい。

後者は、そもそもそんなこと、普通の人間が相手でも出来るわけがない。

「となると、腕ごと斬るしかないか」

出来ることなら、聖剣を斬り裂ける力が己にあれば、それをしたというのに。

残念ながら、ドラゴンの鱗並みの強度を誇るスニークスの肌を容易に斬る宗司であっても、聖剣は斬れない。

己の稚拙に呆れるほかあるまい。宗司は内心で恥を覚えながら、そんな己の油断を振り払い、スニークスの背後へと回り込んで刀を振り上げた。

苛烈を極める戦いの中、極大の嵐を眺めるといふ暴挙を行っているのは、結局逃げそびれてしまったクロナとメイルである。

最初は、屋敷を吹き飛ばした聖剣の一撃に呆けて逃げる機を逸したために戦々恐々としていた二人だったが、とあることに気づいてからは二人とも注意は向けているものの、すっかり観戦ムードとなっていた。

「クロナさん。あの人、遂に叫ばなくなりましたね」

「十分程度とはいえ、斬殺と復活を繰り返しているようなものだからな。私だってあんなことになったら正気を保つ自信はない。というか、あんな状況になるなんて考えたくもない」

「死にたくても死ねないって嫌ですね。私の読んだ御伽噺で不老不死を願う悪党とかいましたけど、この光景見たら諦めるんじゃないでしょうか」

「そうだなあ……あれを見ると、死ねるっていうのは救いだっていうのを身に染みてわかるよ」

普通なら死ぬはずの傷をスニークスは何度、いや、何百繰り返した  
だろうか。臓腑を抉られショック死。血液を流しすぎて失血死。心  
臓を抉られ即死。脳天割られて死亡。

そのたびに強引に蘇生させられて戦わされるスニークスの精神が  
吹っ飛ぶのは仕方ないはずだ。

「だがねメール。普通、あんな力を行使して、あんなにも一方的に斬ら  
れ続けるなんていうのはありえないからね。そこは間違えないよう  
に」

「あ、はい」

「わかってるのかなあ」

戦闘の余波からメールを守りつつ、クロナは食い入るように宗司の  
戦いを見守るメールを、何とも複雑な心境で見下ろした。

「しかし……あんな規格外と渡りあいながら、こつちを気遣う余裕ま  
であるとはな……」

聖剣の一撃は、余波だけであらゆる物を吹き飛ばしている。

だというのに、距離があるとはいえ、二人の戦いが視認できるとこ  
ろに居る二人が、荒れ狂っているとはいえ、突風程度の風しか受けて  
いないのは、つまりそういうことだ。

宗司は一撃でも受ければ己が死ぬかもしれない戦いで、わざわざこ  
ちらに聖剣の余波が来ないような立ち位置を維持しながら戦ってい  
る。

殺しても死なないうえに、一撃で家屋を破砕する一撃を無数と放つ  
化け物を相手に、こちらを気遣う余裕があるというのは、最早驚きす  
ら通り越してしまう。

「本当に、君は一体何者なんだ……」

あれは、生身の人間の皮を被った別の生き物ではないのだろうか。

これで何度目になるか分からぬ背後を取った宗司の刀がスニーク  
スの背中を大きく抉るのを身ながら、クロナは考えても仕方ないよう  
なことを考えるのであった。

聖剣の一撃を遙かに凌ぐ閃光の一太刀は、スニークスの背中を大きく切り裂く。肩甲骨を抜け、背骨を両断されたスニークスの体は、普通はそのまま倒れるはずなのだが、今や聖剣の操り人形となった彼の動きは鈍らない。

魔力の糸で強引に動かされた肉体。人体の稼動域を超え、腰を百八十度回転させるといふ荒業でこちらに向き直ったスニークスは、下半身がちぎれるのすらお構いなしの再度刃を解き放った。

「ッ!？」

流石の宗司もこれには驚愕する。肉と骨の碎ける音を風切の音で掻き消して、真一文字に走る聖剣を、辛うじて地べたに寝転ぶようにして逃れる。

「ぐ、お……!？」

直撃は回避した。

だというのに、発生した風圧で体が持っていかれそうになるのを、地面に刀を突き立て、四肢を地べたに食い込ませることで耐え凌ぐ。

——応手を誤った!？」

ここまで、あくまでも担い手を壊さないように戦ってきた聖剣が、ここにきて担い手を壊すことも躊躇わずに攻勢を仕掛けてきた。何とか反応してみせたが、人間の域を超えた凶手は、流石の宗司でも予想外でしかない。

結果、スニークスの上半身と下半身は、自らの動きによって捻り切られ、瞬きの内に上半身が大地に落ちるだろうが、ツケの代償は明らかに宗司のほうが大きい。

四肢で這う宗司が見上げた先、背中に向けられた切っ先は惑うことなく動きを止めた宗司へと襲い掛かる。

その初動で発生した風圧だけで、宗司の体が軋みを上げた。幾ら超人的な能力を誇ろうが、所詮聖剣を扱わない宗司の身体能力は、強化魔術を扱う只の人間よりもある程度上というだけしかない。

それでも驚異的だが、宗司の能力と聖剣の能力は、単純に地を這う

虫とドラゴン程の差が存在する。

当たれば死、ではない。

当たらなくても、宗司は死ぬ。

聖剣が振りぬかれるよりも早く、このままでは風圧だけで宗司は挽き肉となるだろう。

体を押しつぶそうとする風の圧力の中、このままでは凄惨な死しか宗司には残されていない。

だというのに宗司の口元に貼り付けられた笑みは変わらない。むしろ、この窮地を待っていたとばかりに、零秒後の死を間近、宗司の瞳は歓喜に揺らいだ。

刹那、聖剣の切っ先が一ミリほど動いた瞬間、スニークスの体は虚空に舞った。

「……見えたぞ。ちいと」

地に刺した刀を抜き、切っ先が動くよりも早くその腹でスニークスの上半身を吹き飛ばすことで死地から脱した宗司は、腹からねじれた臓腑を撒き散らして地べたを転がったスニークスを、否、聖剣を静かに見据える。

立ち上がった宗司の口元からは一筋の血が流れていた。

僅か一ミリ。されど一ミリ。それによって発生した風圧は、宗司の肋骨を一本へし折り、肺に突き立てる程度の威力は発生させたらしい。

——背骨が折れなかっただけ、僥倖だな。

上手く行えない呼吸を、呼吸の間隔を長くすることで誤魔化しつつ宗司は嘯く。

下半身を引きちぎって、ようやく骨の一本。

どちらが恐ろしいかといえ、やはりこの剣客だった。

確かに聖剣は恐ろしい。

目的遂行のためなら、担い手の意思を無視して全てを実行しようとする無機物ゆえの思考。それらを支える数多の能力。

千人の力自慢を容易く超える膂力。

ドラゴンの吐く炎すら耐え切る硬度。



瀕死の重傷すら直ぐに回復させる治癒能力。

そしてこの戦いでは出す暇もなかったが、町一つを容易になぎ払う魔術の数々。

どれをとつても宗司では届かない。

あらゆる全てが宗司を遥かに上回っている。

「底が見えたぞ、ちいと」

だというのに、宗司はその聖剣の底知れぬ全てを見切ったと言いつ放った。

両手を投げ出して、遂に動くことを止めた聖剣を見て言った。

肉体の回復は始まっている。漏れた臓腑を収納し、千切れた断面から新たな肉と骨を魔力で生み出しながら、そのままなら一分もせず回復するだろう。

対して、このまま回復を待ち、戦いが始まれば、宗司は肺を一つ潰された状態で再度万全の聖剣を打倒しなければならぬ。

しかし宗司は待った。全快せねば目的を果たすのは不可能だと悟り、無駄な抵抗をせず、治癒に全ての力を注いでいる聖剣の回復を只静かに待った。

「いやはや、俺も幾多の力自慢と仕合ってきたが、お主以上の力自慢は後にも先にも会ったことはなかったぞ……」

「いー。あー。あー」

返ってくるのは、精神が崩壊したスニークスの呻き声ばかりだ。だが当然宗司はそんなスニークスではなく、言葉を返さぬ聖剣に語りかけているのであり、返事は期待していなかった。

「俺の頭に刻まれたお主の魔術も考慮すれば……ふむ、まさに一騎当千。否、破軍破国の猛者とでも言うべき傑物よな」

そう、聖剣を賞賛し、

「だが、遅い」

宗司は膝まで回復した聖剣を見下ろし、言った。

「そして、拙い」

スニークスが、聖剣が回復を終えて立ち上がる。その動きは機敏であり、問答するつもりもないのか、万全を取り戻した両腕で柄を握り

締め、放出できる限界まで魔力を放出した。

空を突き抜けるのでは、と思えるほどに肥大した魔力。聖剣とはいえ、それを束ねるには僅かな時間が必要なのか。動き出そうとはしないその姿を眺め、宗司もまた刀を大上段に掲げた。

「来い。前言を撤回するつもりはないのでな」

——たとえ稲光であろうと、理なき一撃に当たることではない。

クロナとの戦いで語った言葉は決して嘘ではない。

そしてそれが聖剣の限界だ。

理とは、業だ。人間が、人間を殺すというためだけに練り上げた術理。技術ではなく、技術の中に込められた信念。

それがお前にはない。

聖剣チート。

お前は所詮——

「歪すぎる」

人が刀を扱うから刀は刀であり、刀が人を扱うなど、それは本末転倒なのだから。

そして遂に、練り上げられた魔力が聖剣に集い、至高を極めた最上級のスキルが解放される。

歴史上、魔王を除き二人しか扱う者が出なかった究極が一。

最上級スキル『神魔千撃』。

初期スキルである『スラッシュ』と同じでありながら、その破壊力はこめた魔力の百倍にまで破壊力を引き上げた光の閃光を千、一つに束ねて放つという恐るべき技である。一発ならばあらゆる攻撃を無効化する魔術『絶対硬式』すら、複数の斬撃という特性上、一瞬で無力と化す、まさに必殺の一撃。

しかも習熟度を極めたため、その破壊力たるや、歴代の『神魔千撃』の使い手を遥か上回り、千を超え、万に達する光を束ねて、解き放たれる。

振るえば即殺。

逃れようにも光の如き速度を前に、逃れる術も存在しない。それほどの規格外。

それほど恐るべき。

それほど故に、その程度。

「やあ」

目を焦がす閃光を見るまでもない。宗司はもう、聖剣の底を見抜いたから。

剣が人を刀とするのではない。

人が鋼を刀と化するのだ。

理を告げる。今こそ、この身に刻まれた術理の全てを解き放とう。

あの老剣客との死闘で極まった己の全てを、魅せてやろう。

賊との戦いでは、瀕死であるため出せなかった。

クロナとの戦いでは、出すに足るとは思えなかった。

だがお前なら良いだろう。

歪であり、稚拙であれど、それ以外の全てが究極へ達したお前ならば、良いだろう。

我が理。

刀が人を刀と成すのではなく、人が人として刀と成る真理の極み。

心鉄合わさる金剛に、この一振りは重なって。

「斬ろうかな」

天意が授けた聖なる剣を。

我欲が編んだ刀で絶つ。

加速した思考。時の止まったような世界を宗司の体が跳ねた。脱力からの力み。解き放たれる力の桁は、想像を上回る神速を宗司に与える。

それは最早、人間の形をした刀だった。そして愚直に標的へと走る矢でもあり、突き立てられた槍でもあった。そしてそれは、すなわち鋼と同義であった。

聖剣より放たれる光は、確かに光速に匹敵するだろう。だが、それを放つ両腕は、決して光速へとは届かない。

宗司はそれを超えるだけでよかった。己の肉体を全て行使し、涅槃寂静の時、宗司の速度は聖剣の速度を上回る。

閃光の切っ先は放たれる間近。天の光に劣らぬ明かりに総身を照

らし、宗司の体が疾駆する。

天の月如き光に吼える、暗く冷たい鉄の冴え。

鈍く光る淡い波紋に思いを乗せて、神魔を絶つ必殺へ、只人たる身が衝き上げた。

そして、時は再び刻み出す。

「聖剣ちいと……」

放たれるはずだった『神魔千撃』は、放つ直前を見切った宗司の刃に両肘を切り裂かれ、その威力を正面にではなく、振り上げた背後、あらぬ方向に解放される。

網膜を焼く閃光の中、一時的に視界を潰された宗司は、それでも己の肌を感じた熱血の温もりに悦を浮かべ、内の高揚とは裏腹に、重く冷たい音色で告げた。

「俺の、勝ちだ」

両腕を奪われ、己の血の海にようやく倒れることが出来たスニークスの背後。放たれた『神魔千撃』によって勝ち名乗りは掻き消される。

遙か彼方へ消え去った万の劍群を確かに感じて、魔力も持たぬ無力な人間でしかない宗司は、究極の一振りの最強すらも乗り越える。

轟音に震える世界。破滅の光は、消えぬ大断層を大地に刻む。

その破壊の中、宗司の耳は、確かに響いた凜と冴える鈴の音色を捉えていた。

## 第九話 『夜風がとつても、寒いよなつて』

「で、どうします?」

スニークス、聖剣との戦いの後、何食わぬ顔で全ての骸の供養を終えると、既に日は落ち、星空が空一面に広がっていた。

満天の星空の下。荒地と化した屋敷の跡地で、灯した火を囲み、湖から取ってきた焼き魚をほおぼりながらメイルがそんなことを言っていた。

「どうする? と言うと?」

「やだなーソウジさん。今後の予定ですつてば。屋敷も吹っ飛んでしまいましたし、ここにいつまでも居る必要ないじゃないですか」

メイルは大地に突き立てた聖剣に背中を預け、軽く力を抜いた。戦いの後、担い手の死亡によって機能を停止した聖剣は、今は鞘に収まり静かなものである。一度抜けば周囲の景観を容易く変える剣も、こうなれば只の硬いだけの剣でしかない。

クロナとしては多少聖剣に思うところがあったが、本来の担い手である宗司と、守り手であるメイルが気にしてない以上、気にする必要もないといった具合である。そんなわけで、最早三人の中であまり気になる物ではなくなった聖剣に付随していただだけのスニークスなど、戦いで死んだ単なる賊Aと同じ意味しなくなっていた。

ゆえに今の三人が考えるのは今後の予定だけである。クロナが仕立てたふりふりしていて可愛らしいドレス風の旅に耐えうる装束という、何とも珍妙な服を身に纏っているメイルの問いに、宗司は「とりあえず賑やかなところに行きたいなあ」と呟いた。

「賑わっているとなると、やはり王都かな?」

「でも、王都はクロナさんに入れないんでしょう?」

「そうなんだが……まあ、あまり長く滞在しないというなら、外で待つくらいは問題ないさ」

「それなら少し行っても良いかの? 個人的に異世界とやらの国がどういったところなのか気になるのだ」

かつての世界でも、修行がてら色々なところを巡ってきた宗司であ

る。それが世界が違うとなれば、折角だし見ておきたいというのが本音だ。

それに屋敷が全壊した以上、王都で色々と情報を集めて今後の指針とするのがいいだろう。

「だが、地図はどうしたのか……」

「あ、それならさつきクロナさんに袋に隠してもらったとき、地図見つけましたよ」

最もなクロナの疑問に、メイルは何故か谷間部分に入れていた一枚の紙を取り出した。

「……うん、ありがとう」

「あれ？　どうして表情暗いんですかクロナさん」

「何でもないよこのおっぱい！　……さておき、地図があるのはありがたいな。おっぱ——メイル、君はここが何処にあるかわかるかい？」

「それくらいなら一応教わりましたし……ここですね」

メイルが指し示した一点は、王都からの距離を見ればそこまで離れていない。神聖とされ立ち入りを禁じられているこの森を抜ければ直ぐのところには王都はあるようだ。

精々、歩いて数時間と言うところか。案外、王都から近いところだなと思つたクロナは、何となく星の位置を頼りに方角を確かめ——表情を凍りつかせた。

「どうしました？」

メイルが不安げにクロナの顔を覗きこむ。そしてその視線がある一点に注がれているのを見て、メイルは地図と王都、そして星空を確かめて。

「うわ……やば」

クロナ程ではないものの、その表情に焦りの色を浮かべた。

そうなれば取り残された宗司は困つたものである。あらぬ方向を見つめて固まる二人を不思議に思い、「おい、どうしたというのだ」と問いかけた。

だが宗司の質問に二人は答えることはない。夜闇の一点を眺めな

がら、クロナは静かにメイルに問いかけた。

「……なあメイル」

「……何ですかクロナさん」

「……この地図、曖昧だったりは？」

「……まさかあ。メビウス王国の魔術師が総出で作り上げたので精度は完璧ですよ、はい」

「……いや、でも、なあ」

「……考えすぎですよクロナさん。幾らなんでも、ねえ？」

「なあお主ら、俺を置いて勝手に進めるなよ。寂しいだろ、おい」

拗ねたように唇を尖らせつつ、宗司もとりあえず二人と同じ方向を見て、

「あつ」

と、珍しく呆けたように口を開いた。

その視線の先にあるのは、広大な森を文字通り吹き飛ばした聖剣の最後の一撃によって刻まれた『神魔千撃』の破壊の跡。

本来なら一点に収束して放たれる万の斬撃は、宗司によって妨害されたために『拡散するような形で』森の木々を根こそぎ吹き飛ばして広がっている。

その破壊の跡は、ついさつき三人で「うわー、地平線まで続いてますよ」「ハハハッ、これが何処まで続いているのか見物だなあ」「意外に海を越える程度には続いているかもしれないな」「まっさかー。流石にそこまではないでしょー」なんて軽く話しをしていたのだが。

「……普通、あんな規模の魔力が放たれたら、流石にこの国の魔術師なら感知するよな？」

ふと呟いたクロナの言葉に、メイルはヒクリと口を歪めた。

「い、いや、それは確かに……王都周辺は敵の襲来を予知するため、色々な魔術的防護策を取っているとは聞きましたけど……いやいや、もしかしたらソウジさんの聖剣使って戦ったあの人、服装が宮廷魔術師の正装でしたから、一時的にジャミング仕掛けて魔力探知させないくらい……」

「それでも、幾ら優秀な魔術師がジャミングを仕掛けたとして……」

精々転移を誤魔化すくらいではないか？ 第一、聖剣の魔力クラスになれば、何かしら気づいて、この聖剣を知る者が王都に居れば、即座に非常事態だと察して兵を出すくらいは——」

「ですけど、もしかしたら今日は王様がどっかに行っていて、聖剣を知らない人ばかりで、今は状況を調べようとしているだけかも。それに何もまだ、そのアレを防げるほどの魔術障壁で何とか——」

「つまりだ」

必死に何かを誤魔化そうとするクロナとマイルの不毛な議論を宗司は遮った。

だが何となく状況を察した宗司の表情もやや暗い。それもそうだ。幾ら人を無数と斬ってきた修羅だとはいえ、もし——

「聖剣の最後の一撃が……王都とやらに、直撃したのかもしれないのか？」

予想が当たれば、気まずいとかそういう問題ではないのだから。

聖剣の一撃は、軽く放った最下級のスキルである『スラッシュ』ですら、巨大な屋敷を吹き飛ばすほどであった。

では、『スラッシュ』を遥かに上回る最上級スキル『神魔千撃』を、聖剣が出力全開の本気で放った場合、その威力はどの程度のものだろう。

ちなみに、宗司は台風の目とも言わべき場所に居たため、一時的な失明以外の被害は受けなかったが、背後に居ただけのクロナは、メイプルを賊の集めた財が入った皮袋に入れて懐に隠し、強化の魔術を全開にしてその破壊の余波の余波のそのまた余波とでも言うべきものから身を守るくらいには必死になった。

百戦錬磨のクロナをして、余波の余波のそのまた余波で全力を出さねば吹き飛びかねないほどの威力。

その破壊がもたらす被害はどれほどだろうか。

ましてや軸線上にあった物など——

「……」

「……」

「……」



三人は脳裏に描いた最悪を思い、互いに視線を合わせると言葉を失った。

痛いまでの沈黙が流れる。もし仮にこの予想が当たった場合、聖剣の一撃によって王都はよくて半壊、最悪――

おもむろに、宗司は焼きあがった魚を掲げた。破壊の爪痕の間に魚を掲げ、あえて視線を逸らすようにして掲げて見せた。

「食うか」

「ああ、食おう」

「そうですね。食べましょう」

とりあえず、お腹が減ったし食事を続けよう。

何となく気まずい雰囲気の中、黙々と食べる三人を、炎は暖かく照らし出す。

破壊の跡から吹き抜ける風は、出来るだけ気にしないようにしたが、それでも肌に当たる夜風がどうにも寒いなあと、三人は思うのであった。

その日、王都メビウスはお抱えの優秀な兵士、魔術師、そして王族もろとも消滅した。

これを皮切りに国を二分する熾烈な争いが始まるのだが。それはまた、別のお話である。

## 幕間 『その狂気が、歪を呼んだ』

よくある話だが、とある存在に対するカウンターと言うのは、カウンター存在と同程度の危険を孕んでいる可能性を秘めている。

現代社会で言うなら、核爆弾の脅威に対する核爆弾と言った具合のものだ。少々意味合いは違うだろうが、危険物に対抗するには、同等の危険物の存在が必要とされているのはひとつの事実である。無論、カウンターというのは決して、力に対する力のみというわけではないのだが、やはり力に対しては力をあてがうのが自然であろう。

では、魔王に対する聖剣はどうだろうか。人を守るために神が天より地上へ授けたとされる破邪の剣。

だがこれは、宗司との激闘の末、守るべき民の存在する王都を、文字通りの焦土と化してしまった。

力は所詮、力でしかない。担い手によって如何様にもその色合いを変える。それこそ、神にも悪魔にも、どちらにでもなりえるのだ。

だが本来、聖剣より呼ばれる勇者。担い手は、心身共に善なる者が呼ばれるのが基本だ。担い手によって色合いを変えるなら、担い手そのものを選別してしまえばいい。結果、これまでの聖剣チートを担う勇者は、人々を率い、魔王を倒すという使命に燃える者ばかりが選ばれた。

——さらに言えば、聖剣を使わなければ脆弱な存在ということも、挙げられる。

例え義憤に燃えるような善良な人間であっても、聖剣という力に溺れないという保障は存在しないのだ。

ゆえに、聖剣の勇者は聖剣を持たない場合、容易く葬られるような存在が選ばれる。

この世界の存在ではないからこそ身分の弱い異世界。その中でも争いに疎く、平和に漬かってきたような善良な人間。

これぞ本来の勇者だ。万が一のときは暗殺が容易な善良たる小市

民。

魔王のカウンターたる聖剣を扱う勇者は、いざとなつたら恐るべき聖剣の力を封じることが可能な制御装置という役割でしかない。

だから、メビウス王国が感じていた不安は杞憂でしかなかった。

善良なる人間が呼ばれやすいように、かつての王族が作り上げた清らかな乙女でのみ構成された聖域で召喚していれば、いつも通りに只の無力な正義漢が呼ばれるだけですんだはずだった。

だが今回は違った。聖域は砕かれ、邪なる存在によって蹂躪された乙女が無意識に詠唱した召喚魔術は、善良なる一般市民ではなく、恐るべき修羅を呼んだ。

聖剣を生身で凌駕する剣客、宗司。この男が呼ばれたことによつて、カウンターの制御装置は崩壊する。

その結果が、召喚一日目にして、メビウス王国の王都消滅という悲劇だ。事故とはいえ、聖剣の力が守るべき人々に向けられたというのは事実。

最早、聖剣は魔王と同じ脅威と成り果てた。

では、もう誰も止めることは出来ないのだろうか。運良く聖剣と魔王が共倒れするという偶然を期待するしかないのか。

否。

それは違う。

聖剣チートの恐るべきが、メビウス王国のみにだけ伝わってきたと誰が思うだろうか。

その恐ろしき力の全てを知る者は魔王のみだが、カウンターのカウンターが存在しないと、誰が言った。

人類を脅かす魔王。

魔王を脅かす聖剣。

そして、聖剣を脅かす切り札は——存在する。

メビウス王国の最南端に存在する未開の森林地帯の奥地。歴史の闇に隠れ、魔王と勇者の戦いを人知れず見守り続けた者が存在する。

人類の試練たる魔王。

人類の導き手たる勇者。

それらを授けた唯一神『クトウア』を信奉する者達こそ、彼ら『聖火教』である。

聖火教自体は別に珍しい存在ではない。何処の国も聖火教の協会を置いているし、世界最大の宗教として広く人々の間に浸透している。

例外として、魔族達は聖火教なんて糞以下のカスで、魔王こそこの世界の神だと叫んでいるが、それは一先ず置いておこう。

その巨大宗教の中でも一部の者しか存在を知らないのが、メビウス王国の最南端に築かれた支部。埋もれた歴史の真実を知る第十八課『エンド』と呼ばれる、本来は存在しない支部だ。

「何と言うことだ……鮮血に染まった聖女。光なき青ざめた騎士。漆黒に誘われた影……神聖を断つ悪鬼がこれら全てを……おお」

メビウス王国の一面に作られた聖教都市『アルファ』に建てられた本部ほどではないとはいえ、世界を見渡しても五指には入るような立派な教会。屋根の上に唯一神、金色に輝く巨大な狼を模した偶像を置いた礼拝堂の奥、唯一神の偶像の下で膝をついた第十八課『エンド』魔術師にして司祭でもあるヒエラ・リトは、恐るべき天啓に身を震わせた。

世界に点在する古代魔術の名残。全てを繋げることで世界の情勢の把握や、未来予知すら可能なその魔術を定期的に使用し、世界を、そして魔王と聖剣の行く末を見守っていたのがヒエラの使命だった。

そして今日もまた、魔王の現在と聖剣の現在、その二つを見定めるだけのはずだったのだが、突如として繋ぎ合わさった世界中の古代魔術の因子が、ヒエラにおぞましい未来予想図を見せ付けたのだ。

「最早、一刻の猶予すらない……封じられた聖槍を……」

聖剣の暴走。

危機の一つとして予想されながら、それはありえないとされてきた最悪の具現。古代魔術が見せたものが嘘ではないのならば、聖火教は、人類を救済する彼らの取るべき手段は只一つ。

「神よ……これも貴方のもたらす試練だというのですか……」

聖剣チートの制御装置が機能しなくなった、そのときにのみ使われることを許された禁断の武装。

神より賜れたもう一つの聖なる剣。破邪の銀色で編まれた神聖は、ヒエラの頭上、唯一神の偶像の口に啞えられた状態で厳かな雰囲気醸し出している。

「聖槍ジム……おお、その威光を世界に示すことを許したまえ」

恭しく頭を垂れるその先で、暴走する聖剣を抑えるという目的で練り上げられた聖なる槍は、いつそ不気味なまでの沈黙を保っている。

だがその不気味さすら神々しい物と錯覚するヒエラは、聞こえもしない許しを耳に響かせ、肅々と外で待つ信徒の下へと踵を返す。

「急ぐとしよう。我らの祈りで、邪なる魔王と歪められる聖剣を正す神の使徒を呼び出すのだ！」

聖剣と同じく、聖槍もまた、異世界より呼び出す人間——彼らとしてみれば、天界より賜わされる聖なる使徒の手でしか扱うことは出来ない。

故の召喚。

故の祈願。

世界を正しい道へと戻すために、ヒエラを含めた第十八課、唯一神に全てを捧げた狂信者は、儀式のために動き出す。

敗北は決まっている。

だからこそ、その運命を打ち砕く切り札を欲するのだ。

境界より分けられた奥。年中雪が降り続けている極北の大地ニブルヘイム。人間はおろか、並大抵の魔獣ですら生き抜くのは困難なその土地のさらに奥地に、魔王が住む城は存在する。

この世の邪悪を纏め上げたような暗黒の居城は、降り続ける豪雪をその漆黒の城壁で弾き、白に立つ暗黒の一点としての禍々しい存在感をあふれ出していた。

その魔王城には現在、貴族級とも呼ばれる上級魔族から選ばぬかれた精鋭。魔王四天王の四体と、城主にして魔界の支配者である魔王のみが存在していた。

魔王の世話役も含めたその他の者は、既に一ヶ月以上も前に魔王城から離れ、最寄の町まで『避難』していた。

唯一残るのを許されたのは、彼らのみ。かれこれ一ヶ月の間、世話役に代わって魔王の衣食住をしてきた四人は、つい先程魔王の放った念話によって謁見の間に向かっていた。

「掃除の途中だったのになあ……」

そう軽くぼやいたのは、その幼い見た目と、見る者を一瞬で魅了する美貌から『幼麗』の二つ名を与えられた幼女、アフロディア・リア・ツアラトストウアだ。

長寿で知れる魔族は、その成長は遅い。百歳でようやく人間でいう成人の見た目に追いつき、普通の魔族は五百年。上位の魔族では数千年も生き続けるとされ、年季の入った魔族ほど実力がある。

そんな中、彼女の年齢は僅か十歳。生まれてからまだ十年しか経っていないにも関わらず、並みいる魔族を押しやって、遂には四天王の座にまで君臨した恐るべき神童だ。

だが、頭巾を頭に巻いて箒とちり取りを手に持ったその姿からは、まさに歳相応の少女のような印象しか受けない。とはいえ、歳相応の少女にして、目も眩む美しさと愛らしさを併せ持っているのだから、まさに冗談のような存在にしか思えないだろう。

「滅多なことを言うなりア。そもそも、我らは本来小間使いとして使われるような者ではないし、魔王様の招集を洩るような立場にもない」

そう返したのは、顔に無数の古傷がある筋骨隆々の男、属性魔術を纏った拳であらゆる敵を粉碎してきたことから『魔拳』の二つ名を与えられた武人。四天王では最も古株であることから、まとめ役でもある男、ヴィンセント・ヒツツアだ。

魔王封印後の群雄割拠の時代、派閥争いを絶えず行っていたために代替わりを何度もしてきた四天王において、歴代でも特に異端と言わ

れる今代の四天王を上手く纏めてきていた。

魔王が居ない混迷時は、群雄割拠の魔界の半分を治めていたことから、その手腕は文句のつけようもない。魔王が復活してからは、その右手として活躍をしてきた。

そんな男の右手は今、拳を象るのではなく、お玉が握られている。アフロディアが本日の掃除当番だったのに対し、彼は今日の食事当番だったからだ。

魔族四天王、一騎のみで現在の人族連合を壊滅出来るべき強手達も、今のその姿からは想像も出来ないだろう。

だが魔王城周辺に四天王以外誰も居ないため、彼らがこうして雑事を行わなければならなかったのだ。

「……ですけどヴィン様あ。他の二人のほうがそこらへんだめだめな気がするんですけど。どうなんですかね?」

『無双』と『異能』か……確かにこのような雑務。我々が行うことではないのは確かなのだ……」

「だからって魔王様の命令無視して好き勝手に周囲の魔獣狩ってるのもアレですよー。まあおかげでお肉には困らないんですけど、にひひ」

召集された当初は、日替わり分担制で魔王の世話をを行うというものだったのだが、ヴィンセントとアフロディアを除いた二人は、「そんなのお前らがやれ」と言って、自分達は好き放題にこの極寒の気象にも耐えうる魔獣を狩るという名目で外で好き勝手にしていた。

一応定期的に食料を運んでいるのだが、それ以外はこちらのことなど気にも留めていない様子だった。

「アタシは魔王様のギンギンな魔力を浴びられるだけで楽しいので、他の奴らがどうしてようが関係ないんですけどね」

「そうか……それならばいい。実は俺もそうだから……正直、あいつらはどうでもいい。むしろ、四天王の面汚しだ」

「にひひ。いけないんだー」

アフロディアは歳相応の悪戯つ子の笑みを浮かべた。

実際、彼女はよくやっている。普通なら親元で甘えたい年頃だとい

うのに、文句の一つも言わず、むしろ進んで雑務をこなすのもそうだが、最年少の四天王という重圧にも負けずによく頑張っている。

——だからこそ、不気味なのだが。

笑顔の裏側で、この早熟の天才が何を思っているのか。歴戦の勇士たるヴィンセントですらその本性は掴みきれていない。

だからと言って、他の二人みたいに単なる暴力馬鹿だと困る。力こそ正義。暴力こそ至上とまで豪語するような阿呆だ。悲しいことに、それが力のある魔族の基本的な思想であり、アフロディアやヴィンセントのように、力があり、かつ思慮深い魔族は少数だけだ。

「……さて、では行くでしょう」

ヴィンセントとアフロディアは、謁見の間に通じる巨大な扉を前にして、互いに持っていたお玉や掃除用具を虚空に描いた召還魔法陣にしまい込んだ。

そしてその体を魔力の光が包み込み、互いに正装へと着替えを終える。アフロディアは黒を基調とした、魔術的にも物理的にも堅牢な防御能力のあるドレス。ヴィンセントはニブルヘイムに生息するドラゴンの鱗で作られた鎧。

正装にして戦装飾に身を包むと、二人は先程までの気楽な空気を一転、表情を引き締める。

「四天王が一人、『魔拳』のヴィンセント・ヒッツア」

「同じく、『幼麗』のアフロディア・リア・ツアラトストウアです」

扉の向こう側。扉越しにも感じる膨大で濃厚な魔力は、いつ感じてもなれるようなものではない。

これぞ魔族の頂点と納得のいく魔力の猛りは、熱を帯びているようで何処までも冷たい。外で吹雪く豪雪すら温く感じるような冷気にして、マグマのような熱気。その二つを併せ持つ桁違いの力。

しかし流石は四天王とでも言うべきか。表情は固くとも、決して怯えたりすることなく返事の言葉を粛々と待っていた。

「……入れ」

返ってきたのは何処までも重苦しい声。

「行くぞリア」



「はい」

ヴァインセントはゆっくりと扉を開く。さて、今度はどんな無理難題を吹っかけてくるのやら。この一ヶ月、雑務とは別に、様々な希少な魔法具を用意させられてきたが、今回もまた何か言われるのだろうか。そんなことを思いながら扉を開いた先。

むせ返るような血の臭いに、目を見開いた。

「……待っていたぞ。我が忠臣」

「コレは……」

「うわー……グロ」

邪悪という雰囲気の塊であった謁見の間であったが、今やその光景は邪悪というよりも醜悪という具合となっていた。

広々とした謁見の間。その中央にぶちまけられた肉片と臓腑。

吹き飛んだ四肢がそこらに転がっているのを確認したところで、ヴァインセントとアフロディアは、その残骸に見覚えがあることに気づいた。

「アレってラムとシアじゃないですかねヴァイン様？」

「……これは、どういうことでしょうか？」

その死体の正体は、四天王が残りの二人。

『無双』のラムール・ダント、『異能』のシアン・デイノット。

魔族でも並び立つ者が存在しない四天王の二人の死骸が、まるで只の生ゴミのように散らばっていた。

「教えていただきたい……魔王様」

ヴァインセントは死骸の向こう側。玉座に座る暗黒の塊とでも言うべき化け物に語りかけた。

男とも女とも取れる中性的な顔立ちの美しい魔族だ。一方で、老人のようでもあり、老婆のようでもあり、逞しい男性でありながら、扇情的な女性。無邪気な少年で、純心無垢な少女のようにも見える。

見ようによつてはどのようにも見える不思議な存在だ。まるで見る者の願望を映し出す鏡のようですらある。

そんな不思議な存在こそ、現代に甦った『魔王』クラウドディア・ザ・ウロボロス。魔族にとつての神であり、人類にとつての天敵。全ての

魔を統べる者だ。

「試験を行っていた」

「試験？」

「そうだ」

クラウディアは、しわがれていながら、部屋全体に透き通る美しい声で答えた。その冷たい視線の向かう先は、無様に死骸を晒したかつての四天王。

直ぐに興味を失ったように視線を切ったクラウディアは、納得がいかないといった様子の子のヴィンセントに小さな笑みを浮かべた。

「そう目くじらを立てるな。お前に睨まれると、私は生きた心地がないのだ」

「……………」冗談を」

「この糞袋共は、頭の足りぬ糞袋だった。手を焼かせたのは知っているぞ？ 任せるばかりで悪かったな、ヴィン」

「……………」いえ」

ヴィンセントは静かに膝をつき頭を垂れた。

確かにこの二人が扱い辛く、正直面倒極まりなかったのは事実だった。力が足りずとも、もつと頭の回るような人材が欲しい。そう常日頃思っていたのだが――

「しかし、そういうことならば魔王様の手を煩わせるまでもなく、この私に一言言ってくださいれば――」

「いや、良い。言っただろ？ 試験だ」

「試験、ですか」

「ああ。この二匹の糞袋は、糞は糞でもなまじ力のある糞だったからな。大事な試験の試金石として使ったのだ」

「……………」魔王様の役に立ったのなら、彼らも喜んでいるでしょう」

「そういうには、最後の断末魔は私を呪うものだったが……………」ククッ、呪詛にこそ誉れあり。その恨みつらみこそ我が力なれば、それもまた喜びの一つか」

クラウディアは声を押し殺して笑うと、「さておき、ようやくだ」そう言っただけで表情を引き締めた。

「長きに及び続いた我らと糞袋以下たる人類との戦い。そしてその度に我が崇高な目的、人類抹殺を邪魔してきた忌々しい糞鉄、聖剣チートとそれを扱う勇者に、幾度辛酸をなめさせられたか」

「……前回のときは、後一步のところでありましたゆえ」

「え？ そうなんですか？」

前回の勇者との戦い。そのとき、ヴィンセントは四天王には届かぬ単なる魔族の一体でしかなかった。

そのため、おめおめと生き延びたのだが、彼もまた勇者と魔王の最終決戦のときは、その現場を目撃した数少ない生き証人の一体である。

世界の才知を極めた勇者に対して、魔王は能力で劣りながら、魔王にのみ許された唯一のスキルを駆使して互角に渡り合っていた。

「だが、結局負けた。前回も、その前も、そのまた前も、さらに前も……それが天意とばかりに、私は幾度となく敗北の屈辱に塗れ、長い眠りについた」

いつもだ。

いつも、後一步のところまで敗北する。確かに聖剣は強い。魔族を統べるクラウドディアの能力を上回る戦闘力は、ただそれだけで圧倒的だ。

だがクラウドディアには常に共に戦う魔族の仲間が居た。勇者が率いるような矮小たる糞以下の脆弱な存在を遥かに凌ぐ雄雄しき戦士達が支えてくれた。

しかし負ける。

絶対に、どんなに追い詰めてもふざけたような奇跡の前に敗北する。

それに不自然さを覚えるようになったのは、いつからだろうか。

「しかし、今度は違う」

クラウドディアは笑う。重ね続けた敗北の向こう側、見出したたった一つの光明が、この敗北し続ける運命にあった魔王に逆転の一手を与えたのだ。

「そもそもが間違いだったのだ。あれをこの世界の存在だと思って

戦っていたのが前提として破綻していた」

「魔王様？」

「ヴァイン、リア。お前達はこの冊子を知っているか？」

怪訝な表情を浮かべるヴァインセントとアフロディアの前方に魔法陣が描かれ、中から一冊の小説が現れる。

タイトルは『勇者フレイの冒険』という、かつて平和だったころの人間界で流行った物語だ。その名の通り、勇者フレイが冒険して、道中の様々な問題や、強大な敵を倒すといったものである。

「コレが何か？」

「お前達、この小説に書かれた主人公を殺すにはどうすればいいと思う？」

疑問はいつそう深まるばかりである。只でさえ馴染みのない人間界の小説に現れる主人公を倒すとはどういったことなのか。

こちらを試しているのか？ そんな疑問を脳裏でヴァインセントが巡らせるその隣、神童に恥じぬ勢いで一気に小説を速読したアフロディアは、元気よく片手を挙げた。

「はいはい！ にひひ。私いいですか？」

「よし。言え、リア」

「私じゃ無理です。勝てません。と言うか、魔王様も勝てないんじゃないですか？ にひひ」

即答だった。しかもこともあろうかクラウディアでも勝てないと言っただけのアフロディアの発言に、ヴァインセントは怒鳴ることもなく呆け。

「ハハハッ、そうだな。私もこの作品の主人公には勝てないよ」

考えなくても侮辱ともとれるアフロディアの発言に、クラウディアは腹を抱えて笑い返していた。

どちらもヴァインセントの常識からすれば目を疑う光景。それに目を丸くしているヴァインセントに、笑いすぎて涙目になったクラウディアは「全く、年をとりすぎて頭が固くなったのではないか？」と優しく語り掛ける。

その言葉に羞恥で顔を赤くするヴァインセントだったが、残った二人

は特に気にした素振りも見せなかった。

「ヴイン。お前もその物語を読めば分かる。幾ら私でも、物語の最初から最後まで、既存のあらゆる攻撃をすべて受け付けないという設定の化け物に勝てるわけがないのだから」

「ならば、どうして魔王様は私達に勝つ方法を聞いたのですか？ 感想を聞きたかっただけとか？」

「そうではないよりア。いや、まあこのつまらん駄作の感想を語り合うのも面白いとは思いますが……あるのだよ。このとんでもな主役を殺す方法がな」

そう言ったクラウドディアは、二人の手にあつた小説を魔力の縄で掴むと、そのまま虚空に放り投げた。

「燃えろ」

瞬間、魔王に睨まれた小説は青白い炎に飲み込まれて灰も残らず全焼する。

それを見届けたクラウドディアは、「こうやって殺す」と得意げに言った。

「えつと……それ、反則ですよね？」

流石のアフロディアもこれは予想外だったのか。何とも言いがたい微妙な表情でそう呟いた。

今クラウドディアが行つたのは、つまりは「紙上では最強かもしれないが、所詮は紙の上の最強でしかない」といったやり方だ。

不正で、反則。

「他にも、この物語の続きを自分で描き、主人公よりも強い登場人物を作つてこの主人公を殺す物語を書くというのもありだな」

「……えーつと、つまり、どういうことですかね？」

話が全く見えてこない。そう暗に言ってきたアフロディアに、クラウドディアは神妙な面持ちで頷きを一つ返した。

「はつきり言おう。私を何度も滅ぼしてきた聖剣。アレはまさに、今私が言ったのと同じようなことをこの世界で行っている」

「にひひ……それ、マジっすか？」

「私はこの手の嘘は嫌いだ……少々遠まわしな言い方になったが纏め

ると簡単だ。この世界を一つの物語として見た場合、聖剣は物語に一筆を加える力があるというだけの話になる」

だから聖剣は圧倒的な力を担い手に与えるのだ。まるで、担い手そのものの力を書き換えるかのように。

この世界における最強であるクラウディアを越える力を与え、単純な力のごり押しで圧倒することが可能な、恐るべき兵器。

それが聖剣チート。これこそ、長い年月の果て、幾多の敗北を経てクラウディアが悟った真実であった。

「じゃあ、それが事実ならば……この世界に存在する全ての者が聖剣の前に屈するということではないのですか？」

「無論、そこまで単純な話ではないがな。あれがもし本当にそういった存在なら、もっと簡単に私を滅ぼせるだろうし、そもそも、私を倒せても、殺しきることが出来ないというのはおかしい話だ」

おそらくだが、まだあの聖剣にはなんらかのカラクリが秘められていると見て間違いないだろう。

しかしそれを知ったところで意味はない。何故なら事実として、聖剣はその名の通りこの世界を不正に書き換える力を有している。ならば、この世界の理に縛られている我々では、どんなに強くなろうとも、聖剣を超えることは出来ないのだ。

「ゆえに、私は一つの賭けに出ることにした」

そして、私は賭けに勝ったのだと、ぶちまけられた四天王の死骸を見下して、笑う。

ヴァインセントとアフロディアはそこでようやく気づいた。いや、気づかされたというべきか。

「……リア。私の背中に」

「う、うん……」

謁見の間に満ちる魔王の魔力。

それに紛れるようにして『何かがいる』。

「安心しろヴァイン、リア。お前らを処断するつもりなど私にはないよ。そこでぶちまけた糞袋と比べるまでもなく、お前らは優秀で、忠義に厚いからな」

クラウドディアはそう言うが、二人としては気が気ではない。

何せクラウドディアの背後、それはまるで闇夜で息を潜める獣のような存在感を放ち、ヴィンセントとアフロディア、四天王に選ばれた強者すら威圧する空気を漲らせているのだから。

戦慄する二人を前に、クラウドディアは静かに笑う。底冷えするような邪悪な笑みで、瞳に確信を漲らせ。

「気づけば簡単、というわけではなかったのだが……我が体に刻まれた聖剣の残滓。数えるのも馬鹿らしいかつての傷を束ねたことで、この世界の理から外れた存在を……私は引き当てた」

自分では勝てないと、屈辱ながら悟った今回。故に早急に張り巡らせた思考の末に編み出した結論は只一つ。

聖剣の主が、異世界と呼ばれるこの世界とは違う場所より来た者ということとは知っていた。

ならば、それしか手段はないのだ。

聖剣がこの世界の理を支配する規格外なら、この世界の理を越えた規格外を己もまた手にすればいい。

「必要なのは、理を超えた剣を断つ牙なり」

戦慄して声を詰まらせる二人の前で、クラウドディアはその掌から魔力を放出した。

まるでのたうつ蛇のように揺らめく漆黒の魔力は、虚空に召喚陣を描き出す。

そこから現れたのは一振りの剣。聖剣チートとは違い、漆黒に染め上げられたその剣は、遙か昔より、クラウドディアが勇者との死闘と共に潜り抜けてきた彼女の愛剣だ。

だが今のクラウドディアの目は、そんな己の腕とも言えるような愛剣に冷めた眼差しを送るばかり。

「最早、この剣は不要だ」

そして、クラウドディアは長年連れ添ってきた愛剣を、躊躇なく右手で掴み、紙くずのように握りつぶした。

ヴィンセントが驚愕に目を瞬かせる中、剣で傷つき、鮮血を滴らせる右手をそのまま、クラウドディアは恭しくその手を掲げる。

「何せ、私は聖剣すら凌駕する……絶対の剣を手に入れたのだからな」  
ゴミのように散乱した四天王の成れの果て。

それを一瞬で生み出した至高の剣。聖剣と幾度となく死闘を繰り広げたからこそクラウディアにはわかるのだ。

己が引き当てた剣は、聖剣すらも凌駕するのだと。

「では、紹介しよう」

そして魔王クラウディアは切り札を臣下に披露する。今度こそ必勝を望んで手に入れた漆黒の剣、それは――。



## 幕間『どいつもこいつも、修羅外道』

それはあまりにも正気を疑うような光景であった。

「我が主よ！ 偉大なる神よ！ 今理解しました。異教の悪魔を滅ぼすために生を受けたと思つたこの命！ 違つたのですね！ すべてはここで！ 迷える子羊達を導くことこそが主の思い！ そして私に託された崇高なる使命！」

「あ、が、が得j儀にm l qをえにお」

「おお！ 何たる慈悲！ 何たる奇跡！ 無限に溢れるばかりの主への愛が、さらに満ち溢れるのを今私は感じています！ 絶頂！ まさにこれ絶頂う！」

メビウス王国南端。聖火教の秘密教会にして第十八課エンドの拠点。世界を影から見守つてきた聖火教の暗部にして最大の切り札とされるエンドは、単純な戦闘力も現在の人類の水準で最高値とされる兵士を遥かに凌ぐような存在が無数に在籍している。

魔術、体術。このどちらにも長け、かつ唯一神に対する狂信的な信仰を持つている彼らの力は恐ろしいほどだ。それこそ、魔族との戦いで疲弊している国家の一つや二つくらいなら、それなりの被害は出さだろうが、彼らだけで制圧することが可能なくらいだ。

そんな狂信者達が根城とする秘密の支部。この世で最も恐ろしく、あるいは安全な要塞如き場。

今、そこは地獄と化していた。

巖かな雰囲気醸し出していた聖域は、無数の魔術によって戦場の跡地のようになっていた。大地は抉れ、教会は砕け、神聖な世界は、破壊の嵐でひたすらに蹂躪されつくしている。

だというのに、一目で分かるほどの争いの形跡の中に死骸は何処にも存在しない。それもそのはず、壊れかけの教会の前、そこには第十八課の面々が膝をついてぶつぶつと何かを呟きながら祈りを捧げていたのだから。

そしてその祈りの向けられる先、そこに女が立っていた。

「素晴らしい！ 神の意思を感じる！ これぞ愛！ 純粹なる愛！

主が我らに施す無限を超える尽きることない泉の如き愛！ その愛がこの手に今！ 確かな実感としてええええええ！」

「きおjへあぬいhがうph!?!」

「神いいいいいい！」

黒い司祭服を着た女が、今こそが人生の最盛期と言わんばかりの笑みを浮かべながら、目の前で膝をついている男、第十八課の司祭であるヒエラ・リトの頭に両手を添えていた。

美しい女性だ。黄金のように輝く長い髪をなびかせ、宝石のように澄んだ大きく青い瞳には歓喜の色を、新雪の雪の如く穢れない白い肌は今まさに感じている絶頂に真つ赤に染め上げ、美しい旋律を奏でる瑞々しい唇からは、情欲に濡れた熱い吐息を漏らしている。

それは遠くから見れば、さながら天使のような美しい女性の手で敬虔たる信者がまるで信託でも受けているかのようにも見えた。

だが、実情はまるで違う。

女のその握れば容易く折れてしまいそうな白い指のすべてが、頭蓋骨を貫いてヒエラの脳髓に直接触れているという悍ましい光景だった。

「我が神より賜ったこの手で！ 迷える子羊たる貴方に救いの手を！

あああああ！ いい！ たまらない！ 主の代行者として彼らを救うという任を託されたこの時、この瞬間！ 何物にも勝る使命感と至福で！ 私はもう今にも天に召されるような心地良さあ！ 感じますか?! 感じますよ！ 愛の愛の愛のおおお！ 絶好調！」

女はそう叫びながら、頭蓋骨に突っ込んだ指を微妙に動かす。その度にヒエラが白目を剥いた状態で奇声を発し体を震わせた。

救いの手とはよく言ったものである。どういった理屈か分からないが、女は脳髓を直接刺激することで物理的に改心させているのであった。

「さあ目覚めなさい！ 新たな信徒、貴方もまた、真の救いによって生まれ変わるのです！」

「いじうふあえvんづうえたbふおあえrじおgでうあ!!!」

「そうね、ええそうよそうなの！ その祈りが神への供物！ 神への愛！ 大いなる愛！ 救いの言葉を共に授かりましょう！」

そして数分も関わらずに改心は終わる。ヒエラの最後の絶叫に合わせて、女もまた全身を震わせて背中を仰け反る。

瞬間、静まったヒエラの頭から優しく指を引き抜いた女は、真つ赤に染まった指を指揮者の如く振るいながら、懐より取り出した針と糸をヒエラの頭に走らせると傷口を塞いだ。

施術——救済は完了した。女は先程までの狂気的なテンションが嘘だったかのように、陽だまりのように優しく、物静かな雰囲気ヒエラに語りかける。

「これで貴方も主の声が聞こえるようになりました」

「あり、ありりり、がとうござざざ、ありがとう、ござあああいます」

「ええ、共に主の慈悲に膝を折り、祈りを捧げましょう」

「はあいいー！」

何処か虚ろな目をしながら嬉しそうに笑うヒエラに、それ以上の慈愛に満ちた笑みを浮かべて、女は異教から目覚め、真の救いを悟ったヒエラを招き入れる。

「主は寛大です。本来ならば糞以下の役にも立たない下劣な畜生にして、見つけたら即座に四肢を切り裂き股を抉り脳髓を圧搾すべき異教徒であっても、救いに目覚めれば優しく受け入れてくれるのです。そう！ これぞ真の愛！ 我が神こそ世界の導！ そうです！ 救いは今ここに！ 主はここにおられるのだ！ おお神よ！ 我が神よおおお！」

女は、ヒエラと同じく虚ろな目で笑みを浮かべながら祈りを捧げるかつての第十八課の面々の間を歩きながら、赤く染まった手を大きく広げる。

狂信に酔いしれる女神。美貌を狂気に染め、全身を混沌で練り上げた悪徳の外道。

ああ嘆かわしきはファービュラスの人々か。

この日、人族を守る最後の砦が人知れず落ちたのだ。

「主よ、我らに救いを！」

『主よ、我らに救いを』

女の声に合わせて主への祈りを捧げる第十八課の面々に、かつての唯一神への信仰心などは欠片も残っていない。

あるのは新たに授けられた神の名。混沌を是とする邪悪の神こそ、彼らの神。

「我が頭上に黒の栄光を今！」

それを成した女は笑う。全ての元凶となった生ける災厄は、己こそ絶対であると疑うことのない眼差しを空に向けた。

——聖槍を媒体とした神の使徒の召喚。それは確かに、神の使徒を名乗る天使のような女性を賜った。

だが女性は傷ついていた。まるでつい先程まで戦いを繰り広げていたかのように、放っておけばそのまま死に至るような傷を無数と抱えていた。

ゆえに、彼らは慌てて、召喚の媒体にして、使徒にのみ振るうことの許された聖槍ジムを女の手上添える。

使徒ならばこれで生き抜くはずだ。当然のようにそう思った狂信者達の前で、女性の傷は見る見るうちに癒され、女性はそのまま目を覚ます。

神の使徒が現れた。その歓喜に叫ぶ狂信者達は、そこで決定的なミスを犯す。初めは召喚による動揺もなく、受け答えも温和で、まさに天使のように慈愛に満ちた女性は、たった一言、居並ぶ信者の一人が呟いた一言によって豹変した。

『唯一神クトゥアの使徒に敬意を』

その一言にあわせて頭を垂れた一同。その敬意を受け取った女性は、これまで浮かべていた笑顔を一瞬で凍結させた。

——後のことは、この惨状が全てを物語っている。

女性は素手でその場に居た信者を一撃で昏睡させた。あまりの早業に反応する暇もない。瞬く間に魔術を使うこともなくその場を制圧した女性は、辛うじて逃げ出した信者の一人を追うように外へ飛び出すと、外で待機していた信者達を見つけ、一言だけ言った。

『今日の私は気分が良い。喜びなさい、腐れ異教徒共』

そして惨劇は始まった。異世界人ならば見慣れていないはずの魔術にすらあつきりと対応し、この世界でも指折りの戦闘力を秘めた狂信者達を一人ひとり丁寧に気絶させていった。

世界有数の実力者達を相手に、殺すことなく素手で制圧した彼女の次の行動は一つ。一人ひとり丁寧に救いの手を差し伸べ、真実の神に触れさせたのだ。

「嬉しい。私は今とても嬉しい。邪教に狂ったとはいえ、やはり傷ついた私を癒してくれた貴方達なら、きっと私の言葉に耳を傾けてくれると！ いえ、主の言葉を聞き届けると信じていました！ おお！素晴らしいきは我が主！」

天空を見上げた女性は感極まった表情で宣言する。

「主の忠実なる下僕！ この私、ナイル・アジフに全てお任せを！ この異郷の土地にて、主の教えを広く広く！ 迷える者達に授けましよう！」

異世界。そこで邪神として恐れられた邪悪の神を信奉した一つの宗教があつた。

本来なら潰すまでもない小さな新興宗教。しかしその伝道師を語る女、ナイル・アジフは、徐々にだが確実に、無視のできない存在へとなっていた。

極上の美貌に付随したカリスマなどはあくまで余分にしか過ぎない。その真の脅威は、銃弾を生身で見切り、素手で鋼鉄を引きちぎることの出来る圧倒的な身体能力を存分に引き出す卓越した武術と、脳髓を直接刺激することで人間を洗脳する技術。これをもつて着々と信徒を増やしていった彼女に、時の巨大宗教は、掃除屋とも呼ばれる恐るべき暗殺部隊を差し向ける。

その結果、一向に出来ない報告に業を煮やした巨大宗教の幹部が新たな人員を派遣すると、そこには暗殺部隊の死骸だけが残されていたという。

ナイルの姿はそこにはなかった。その後、彼女の姿を見ることはなくなつたため、死亡したのだらうとして彼女は歴史の闇に消えたのだが。

その狂気は世界を飛び越え、異界の土地にて復活を果たす。

「では行きましょう！ 我が同胞達よ！ 我らが黒き無貌の神であられる『にやる』の下、世界に救済をもたらすのです！」

こうして、救済という名の災厄を撒き散らす悪鬼は異世界の土地に現れる。狂信者の手によつて呼ばれた最悪の狂信者。地べたに転がっている聖槍ジムのことなど眼中にも止めぬその狂った眼は、今度こそ世界に神の威光を示すために新たな一步を踏み出すための準備を始めるのであった。

クラウドディアの背後から、それはにじみ出るように現れた。

漆黒の主たるクラウドディアと並び立っているにも関わらず、一際異彩を放つ黒を纏ったそれは――。

「人間、さん？」

アフロディアは、己の目を疑った。

先の口ぶりからして、クラウドディアは新たな魔剣でも手に入れたのかと思っただが、現れたのは鋼鉄ではなく生身。しかも魔族ではなく、その男の放つ臭いは、どう考えても人間のそれだったのだから。

だが本来ならそのことにいの一に憤りを見せるはずであるヴェンセントは、アフロディアとは違う驚きに打ち震えていた。

（気づかなかつただと？ 幾ら魔王様の魔力が溢れているとはいえ……この俺が、こんなにも冷たい殺気に違和感すら覚えられなかったのか!?!）

無礼にもクラウドディアの隣に立ち、こちらに無遠慮な視線と冷ややかな殺気をぶつける人間。こちらを試すような気配に冷や汗が流れる。背後のアフロディアにいたっては、ようやく男の放つ異常さに気づいたのか。小刻みに体を震わしてさえた。

正体不明の何か。唯一確かなのは、この視線の主こそ、目の前で死骸を晒すかつての四天王を惨殺した何かだということ。それだけは一瞬で理解することが出来た。

「ッ……」

「むぬぬ」

ヴァインセントとアフロディアの二人が警戒する中、男は先程は放ってきた冷たい殺気の主とは思えないほど、存在感を希薄なものにして、クラウドディアの前に一步踏み出した。

奇怪な服装をしている。黒装束の内側には鉄の帷子を纏い、腰の黒い帯には二本の小さな短刀を携えていた。

顔は黒の頭巾で覆われているため見ることは出来ないが、骨格から男のそれだとは何となく判断は出来る。

何よりも、この男は人間だった。

「紹介しよう……彼が私の新たな剣にして、今日からお前らの同僚となった——」

「抜け忍、八つ鳥だ」

男はクラウドディアが言うよりも早く己の名を告げた。

無礼だと叫ぼうという気はヴァインセントには起きなかった。そうするには、男の声はまるで鋭利な刃物のように鋭く胸を抉り、喉を詰まらせてしまったのだから。

そんなヴァインセントの視線を気にも留めず、男はクラウドディアに視線を向けて、一つ提案を持ちかける。

「だがしかし、里を抜けた俺にはその名は意味がない……そこで、こんな俺を拾ってくれた主様に頼みがある」

「ほう？ 言ってみろ」

「俺を縛る名をくれ。強きを求め、強きと競い、強きと相打った俺が、涅槃を超えて辿り着いたこの地。奇怪な術を駆使する強者をくれる主様に、俺は縛られたいのだ」

「それはそれは……良い心がけだ」

クラウドディアは表向きこそ余裕の笑みを浮かべていたが、内心ではその言葉を聞いて狂喜乱舞の心地だった。

世界の理に縛られない存在の召喚。それは同時に、己を殺すかもしれない存在を呼ぶということに他ならない。

だからこそこの一ヶ月、細心の注意を払って準備を行ってきた。そ

して、わざわざ召喚の際には四天王の中で最も己に忠義を誓っている二人を残し、もう二人はあえて外に出してから召喚に赴いた。

忠義の者を召喚する。クラウディアは只それだけを願って異世界よりの使者を召喚する。そして己に刻まれた傷口を媒体として現れたそれは、まるで傷を媒体にしたせいとでも言わんばかりに傷ついていた。

瀕死の重傷。数秒もすれば死ぬだろうその男を前に、咄嗟に回復魔術を行ったのは殆ど奇跡だった。咄嗟とはいえ、魔王の膨大な魔力と卓越した魔術によつて息を吹き返した男。正直、ここで戦闘になることも考えていたクラウディアの前で、男は忠義を誓うように深く頭を下げてみせた。

『主が俺を救ってくれたのだな。感謝する』

『分かるのか?』

『見れば分かる。だが、俺には返す術がない』

『……ならば、お前の力を私にくれ』

『承知』

そんな、いつそ清清しい気分になるくらい淡白なやり取りの後、クラウディアは試しにと、使い物にならない四天王の二人を呼び出して早速ぶつかり合わせたのだが。

結果は、クラウディアをして目を疑うようなものとなった。魔力を用いずに、四天王はおろかクラウディアすら探知すら出来ない気配遮断。その後、鋼鉄を凌ぐ硬度を標準的に備える魔族の肉と骨を、魔術もスキルも行使することなく両断した短刀の冴え。四天王の一人がようやく姿を捉えて攻撃を当てたと思ったら、吹き飛んだのは何故か仲間である四天王であったという理解の範疇を超えた幻術。

全てが圧倒的だった。まさに、この世の理に縛られぬ存在であった。

何より、この身を持ってしても勝てぬと、クラウディアは本能で悟ったから。

「では、今日からお前はヤツドリではなく……八で、鳥——ハットリ。ハットリというのはどうだ?」



「承知……抜け忍となり、素晴らしき我が怨敵、佐助を殺し目的を失った名には未練などない——我が名はハットリ。主への忠義と共にその名をこの胸に刻むとしよう」

そのような化け物が、確かな忠誠を己に捧げている。

最早、この男が居れば聖剣など恐れることもあるまい。遂に手に入れた決定的なカードの力に身震いをしながら、クラウドは早急にあの忌々しい結界を解除する方法を模索すべく行動を開始するのであった。

もしも、聖剣より召喚された勇者が平凡ならば、このような状況にはならなかっただろう。仮に聖剣の力に溺れる凡人が召喚されることで、聖槍を使うことになったとしても、聖槍は別の正義漢を使徒として選び、魔王の召喚は単なる凡人の、しかも己の弱点を無駄に増やすような頭の痛い召喚にとどまったはずだ。

そして、この世界はいつもと同じように、破滅からの再生を繰り返すこととなったはずだ。

だがしかし、前例は生まれてしまった。

窮地の中、混沌に支配された感情のままに召喚を行った結果、異世界より呼び出された修羅。正義でも、悪でもない。只、己のみを信仰する人の域を超えた何かは現れる。

これに対する形で彼らは異世界の大地に降り立つ。

魔王に対する聖剣。

聖剣に対する聖槍。

それと同じようにカウンターは、召喚された。

召喚されてしまった。

異世界に呼び出された、己の技の冴えのみを追い求める侍に呼応して現れた異端は二つ。

巨大宗教に、その圧倒的な精神力と、類まれな武力とカリスマ、そして人知を超えた狂気の洗脳術で、遂には一つの小国家を完全な支配

下に治め、その後、世界最強の暗殺部隊と相打つことで死したと思われた邪教の狂信者。

歴史の裏で数々の歴史の転換期をその手でもたらしたが、その後、里を抜け、只ひたすらに強敵との死闘を繰り返し続け、遂には史上最強と語られた忍を下し、そのまま消息を絶った忍。

皮肉なことに、世界の理の極限に位置する存在の制御装置でしかない彼らは、制御装置の域を超えて、法則を捻じ曲げる異端として君臨する。

魔力など知らぬ。

魔術など知らぬ。

そもそも借り物の力など不要。

あるのは培った己の才覚と肉体、只それのみ。

いずれもが、人として武の頂を極めた者達。

聖剣の担い手？ 否、彼の者は居並ぶ達人を斬り捨てた孤高の侍。

宗司。

聖槍の使徒？ 否、彼の者は混沌なりし無貌の神の狂信者。ナイ

ル・アジフ。

魔王の用いる魔剣？ 否、彼の者は闇の世界の中で、黒よりも黒きと恐れられた忍者。ハットリ。

そして――。

とある悪夢を紹介しよう。

そこは、地獄の末路とも呼ぶべき場所だ。

宗司がメイルに召喚された臓腑と死体で汚染された場。既に彼らが立ち去って一週間以上経ってしまったそこは、野生動物によって食い荒らされた野盗の腐りきった肉がそこら中に転がっている。

目も当てられぬ光景。集まるのは腐肉に引き寄せられた蛆か蠅か。人などが近づきようもないそこには本来誰も居ないはずだ。だがしかし、乱雑に死体が積み上げられて出来た山が小さく蠢き、その後、這い出るように腐肉で染まった腕が飛び出した。

さながら腐肉より産まれ出るように、死体を割って何かがつくりと現れる。

ようやくと這う這うの体で死体より抜け出した何かは、べちやりと無様に地面へと顔面から倒れ込んだ。

数秒後、ゆつくりと静かに顔を上げる。  
恐るべき、顔が上がる。

「い、う、い、う、え、お、ううあい」

絞り出すような声は、およそ生命力というものからかけ離れた断末魔の如きものだった。

それは腐臭を発する蛆の沸いた腐肉の海より生み出されたかのようになり上がる。

それは男であった。

それは女であった。

正しくそれは人間であった。

「……いう」

それは暫く半身を起こした状態でそのまま惚けていた。

それはズルリと腐肉より立ち上がると、足取りも覚束ない状態で右に左に体を揺らす。

腐肉の海で目を覚ますという状況に当惑しているのか。

見知らぬ場所であることに困惑しているのか。

否。

どうでもいい。

そんなことは、どうでもいい。

それはいつの間にか右手に掴んでいた鞆に収まった刀の柄にゆつくりと手を添えた。

そして、それはゆつくりと――。

「おい、誰かが居るぞー！」

直後、木々の合間より鎧の擦れる音がそれのところ近くに近づいてきた。

現れたのはメビウス王都の崩壊より辛くも逃れた王族直下の兵士達だ。聖剣の異変を察して派遣された彼らはそして、周囲を搜索していてこの常軌を逸した光景に遭遇してしまった。

「な、なんだお前はー！」

「貴様、ここで何をしている！ その手の武器はなんだ!?!」

「まさかこいつが王都を破壊した――!」

「気を付けろ！ 総員抜刀！」

兵士達がそれに対して警戒の色を露わにする。

だが臨戦態勢に入ったはずの兵士達は、それが彼らへと視線を向けた瞬間に思考を停止させた。

「初めまして」

腐臭と腐肉で作り上げられたようなそれが、先程までの醜態が嘘のようにはつきりとした口調で声を発した。

見れば、いつの間にかふらついていた体の揺れは止まり、一本筋の通った立ち姿である。

若い、年の頃は二十を過ぎた程度であろうか。

その姿だけを見れば、この世界では珍しい黒い短髪が多少目を引く程度の没個性的存在でしかない。あえてそれ以外の特徴を挙げるなら、中性的な顔立ちのためパツと見ただけでは男女のどちらか判断出来ないところだろうか。

それ以外に特徴は存在しない。擦れ違えば一瞬目を引いた後にすぐ記憶から忘我されるだけの存在である。

だが、兵士達はその眼を見た瞬間に全てを忘我してしてしまった。没個性的な見た目とは裏腹に、そこだけくり抜いたような眼球を見て、恐怖よりも先に己の存在すらも忘れてしまった。

それは、この世に存在する最悪の汚物で練り上げられた、数多の芸術品を駄作に貶める希代の芸術品の如き眼だった。

それは、歴史上最高峰の天才達が最高峰の素材を用いて作った、見るに堪えられない糞尿以下の駄作の如き眼だった。

それは、光すら通さない漆黒の如き眼であった。

それは、そういう悪夢だった。

「あ、あ、あ……」

兵士達は動けない。

理性よりも先に本能が屈した。その後、理性がこれ以上の思考は無駄だと人間らしい知性を彼らから奪い去った。

そんな彼らを一瞥したそれは、無表情で頷くと。

「驚くのも、無理ありません」

申し訳なさそうに リーン 斬る。

「だって俺は、この様ですから」

ああ恐るべき鈴の音よ。

「斬るのです」

お前だけが、真実だ。

剣術、体術、忍術。

それぞれが別の極みを迎えた化け物の技の冴えは、異界の地を舞台に晒されることになる。

その時は、きっと彼らが考えるよりも近いだろう。

運命はきつと、彼らを戦いの舞台に引きずり上げることになるはずだ。

理由なんてそれこそ、あまりにも分かりやすい事実がたった一つ。

何せこいつら、どいつもこいつも——修羅外道。

## 第十話 『新たな土地へ、行く前に』

振って、斬るだけのことだ。

だから別に複雑なことを考えることはない。

何、幾らお主の持つそれが歴史を重ねた芸術品の如き剣だとしても、握って振るえば所詮は棒切れ。

気にすることはないのだ。

ん？ ああ、気にしていたのはどうやって振ればいい、ということか。

だがお主、剣を振るうのは初めてではないだろ？

ならば、これまで教わったとおりに振るればいい。型を真似て、黙々と振るえばいい。

不満そうだな。くくくつ、何、教えぬというわけではないよ。

そうさなあ。

打つのではなく、斬るように振るえ。

それが分かったら、次に進むとしよう。

「では、始めるぞ」

「は、はいー」

そこらへんで拾った木切れを片手に構える宗司と対するのは、鞘に収まった聖剣をしっかりと両手で構えるメイルである。勿論、鞘に収まっているため聖剣はあの恐ろしい力を一切発揮していない。

とはいえ、手にする得物の質はあまりにも違う。だというのに、対峙する両者の姿の差はあまりにも明確だ。

宗司のほうは構えてすらいないが、全身から程よく力が抜けている、一方のメイルはがちがちに緊張してしまっている。

これでは相手にすらならないだろうと、野営と食事の準備をしながらクロナは思った。

あの衝撃的な出会いから既に一週間ほどの時が過ぎている。現在は森からこそ泥のように周囲に身がばれないように逃げ出してから、

メビウス王国と他国を分かつ巨大山脈アポロンを目指して北上していた。

どうやら王都壊滅の報は随分と知れ渡っているらしく、昨日補給のために立ち寄った村では、こちらが旅人だということもあってか、随分と王都のことについて聞かれたものである。

(……直接的な犯人ではないが、正直気分は良くはないな)

稽古という名の、宗司による一方的なしごきを眺めながら、クロナは少々陰の差した表情で昨日のことを思い出す。

今更悩んでも意味ないことなのは分かっているが、それでもやはり気になるものは気になるのである。

(だがまあ、あの二人を……特に、ソージのことを見ていると、幾分気が紛れるのだが)

王都壊滅の一端を担ったと言っても過言ではない宗司とはいえ、この一週間、王都壊滅で不安がる人々を見ても、特に気にした様子もなかった。

それも、メイルに私刑を任せるときに語った言葉が彼の本心だからだろう。

恨みを買ったのだ。

己のために、無数の屍を積み重ねてきた宗司だからこそ、今更その屍の数が百も千も、それこそ億を超えたところで代わりはないのかもしれない。

修羅であり、所業を外道と己を語った。

故に謝罪もしよう。悼みもしよう。

だが、決して気落ちはしないのだ。

「歪だな……尤も、そんな男に興味を持って付いていつている私もメイルも、似たようなものか」

あの狂気に魅せられたから、あの男に付いていこうと決めたのだ。

そう一人思うクロナの前で、何度目になるか分からない一撃がメイルの頭を強かに打った。

「痛っ！」

「そら、また一本だ。もつと初動に意識を向けろ。お主にも見えるよ



うに加減しているのだ。だが剣先だけを見るな。腕だけを捉えるな。周囲を俯瞰し、相手の呼吸を見て察せ」

「はい……………」

「まずは目で敵の全身を見ろ。それが出来たら耳で捉えろ。最終的に五感で見極め…………果ての六感にこそ理（ことわり）がある故」

「はい！」

「では、参れ」

誘われるがまま、メイルは強化の魔術によって向上した身体能力の赴くままに突撃し、子どもの腕よりも柔いはずの木切れに、聖剣の一撃を容易くいなされた。

意外なことだが、一週間前から朝と夜に一時間ほど行われるようになったこの鍛錬は、クロナから見ても感心するほどのものだった。

言葉こそ難解だが、宗司そのものの動きがメイルにとって最適な練習となっている。手の握り、目の動き、呼吸、足運び。どれもが既存の剣術とは異質だが、だからこそそれがどれだけ恐ろしく、驚異的なものなのかが良く分かる。

クロナやメイルが習うような剣術を含めたあらゆる武術は、当然なこととして魔術とスキルという存在が前提に置かれている。

さらに言えば、底辺と上位の身体能力に比喻でもなくドラゴンと蟻ほどの差があるため、下手な小細工より破壊力を求めるのに重きを置いている。

というよりも、それしか求めていないといったほうがいいか。より速く、より強く、それだけを求めたこの世界の者の力は、知恵がついた獣とそう大差はないだろう。

そんな世界の武術を修めたクロナからすると、宗司の繊細な動きは新鮮であり、勉強になる。

「…………全く、羨ましいものだ」

分かっているのかいないのか。見る見る内に宗司の手ほどきで作り変えられていくメイルに、クロナは武人として嫉妬を禁じえなかった。

だが宗司の技を修めるには、クロナはあまりにも超人的になりすぎ

たし、己の『色』を濃くしすぎた。

未だ技というものに疎く、実戦もせず、箱入りだったためにこの世界の常識にも疎いメイルだからこそ、宗司の手ほどきはさらに真価を發揮しているのか。

本人も気づかぬところで、ゆつくりとだが確実にメイルの剣捌きはこの世界では異質なものに変容していく。

同時に、彼女自身の心も変容していくようにすら思えて、クロナは野営の準備をせつせとこなしながら、言いようの無い暗い気持ちを胸に沈殿させ。

「まっ、どうでもいいんだが」

そんなことが気にもならない大らかさがクロナにはある。得体の知れない不安に苛まれるより、今は今夜の食事に集中することにしよう。

「はあー」

気合というには可憐な氣勢をあげてメイルは宗司に幾度目かの突撃を行う。

強化を用いた踏み込みは熾烈だ。土を踏み砕く勢いで飛び出すと、鞘に収まったままとはいえ、それでも鈍器として十分な性能を持つ聖剣が大上段から力強く振るわれる。

対して、宗司は手に持った棒切れを聖剣の刀身の横に添えると、力の流れに逆らわずに横へと逸らす。それはそのままメイルの体の流れを逸らし、結果として体を崩されたメイルは大きくよろめいた。

しかしメイルは踏み込んだ両足に力を注ぎこみ倒れるのは防ぐ。原理は分からないが、力をそらされるのはこれでもう何度と分からないくらいにやられている。

来ると分かっていたれば対処は可能だ。持ちこたえたメイルは振りぬいた聖剣を腰を回して袈裟に振り上げる。

至近距離からの一閃は、一步後ろへと退いた宗司の顔を掠め、前髪を幾つか散らすだけに終わった。

「……………ふむ」

発生した突風に髪を靡かせながら、こちらを見上げるメイルを面白

そうに見下ろす宗司。

「どうやら筋はいいらしい。」

逸らされた流れに不恰好ながら再び乗り、即座に切り返したのは見事だ。勿論、宗司であればメールの体がよろめいた瞬間に一撃を見舞うことは可能だったが、そんな無粋は稽古には不要。

「では、続いてこうしよう。」

宗司は反撃の一手を放ち、体を大きく開いたメールの額目掛けて杖を突き出す。

見えるようには加減した。だが体を流され、強引に反撃に転じた今のメールは全ての動きが一瞬だが硬直した状態だ。

見えるのに、避けられない。

迫り来る切っ先に対処する術もない。なまじ見える分恐怖は増すというもので、額にぶつかる刹那、目を閉じた瞬間にかすかな痛みが額に発生した。

「そら、一本だ」

「……むう」

強化された肉体のため痛みはないが、それでも肌に残る痺れに顔を顰めつつメールは尻をついた状態で宗司を見上げた。

棒切れを肩に担いだ宗司は口元に小さな笑みを浮かべながら、左手をメールに差し出した。

「メールがその手を握り返すと、まるで下から押し上げられるようにめいるの体が持ち上がる。」

「今のも……」

「うむ。力の流れを操ったものだな。お主が足と手に力を込めたのを見計らって、そこに加えるように俺の力を流した」

結果、体が浮き上がったような錯覚を与えたというわけだ。

「流すというのは、重要だ」

宗司はメールの手を離すと、担いだ棒切れを構えてメールに見えるよう上から下にゆっくりと振り下ろす。

流れるような剣捌きというのがあるが、言葉通りの意味で振るわれる宗司の素振りには、見るだけで心が奪われる。

「他者の流れを知るのは難しいだろうが、まずは己の力の流れを知るところから始めろ。どの部位を使って腕を持ち上げ、振り下ろすのか。そのとき足はどうか、腰はどうか、目の動きは、呼吸はどうなっているか……漠然と振るうな。一手の意味を理解し、噛み締めろ」

「はい！」

「その点、先程の一連は良かったぞ。分かっていたとはいえ、流された体がどうなっているのか理解し、反撃に転じた。逆らわぬこともよしと知れ。抗うのではなく、乗りこなすのだ。強引に己を律しようとするなよ?」

「はい！」

「よし、では今日はここまで。くろな殿が飯の支度を終えるまで素振りをしていろ」

宗司はそう言い残すと、言われたとおり真剣な表情で素振りを始めた。メールから視線を切ると、野営の準備を進めるクロナの下へと行った。

「……どうだい? 鍛錬は順調かな?」

「見た通りだよ。まあ元の筋が良いのだろう。何より素直なのは良い。言われたことを理解し、愚直に取り込む姿は良いものだ」

離れた場所で聖剣を振るうメールを眺めながら宗司は語る。クロナは焚き火で沸かした湯を入れた木製のコップを宗司に手渡すと、その隣にゆっくりと腰を下ろした。

「そうだな。私から見ても彼女の稽古へのひたむきな姿勢は好ましい」

「だがな。そう言うと、クロナは冷たい眼差しで湯を飲む宗司を見下ろした。」

「どうしてあそこまで豹変したのか……きっかけは分かるが、些か異常すぎるのは事実だ」

「豹変という?」

「とぼけないで欲しい。長い付き合いではないが、彼女が好んで人斬りの技術を会得しようとするような子ではなかったのは貴方も分かっているはずだ」

宗司に誑かされたとはいえ、恨みを押し殺して許すという心を持っていた少女だ。

それが今では嬉々として殺すためだけの稽古に励んでいる。

その豹変のきっかけはあった。

だが、それにしたって変わりすぎではないだろうか。

「元より才気があったのだろう」

宗司の返事に、クロナは眉を潜める。

「剣術の、ということか？」

「いや、剣術の才で言うならお主のほうが上だろう。筋は良いが、そこまです。大成はせん。そんなことは直ぐに分かる」

「では……」

「無論、狂気」

いつか、クロナと宗司が戦ったときにも言つてのけたのと同じ言葉を宗司は繰り返した。

「奴は達するのに最も必要な才覚、心の狂気を備えている。コレばかりは鍛錬でも鍛えられない」

狂気こそ闘争に必要な才覚だ。その他の才覚など、あればラッキー程度の才覚でしかないのだから。

「強くなるのに才などいらぬ。心が狂氣的ならば、強くなるべくあらゆる手段を欲することが出来るのだ」

「……だが、才による限界は——」

「その限界を超えるのに必要なのもまた狂気。狂わずに限界を超えられるものか。狂気こそが人を凶器と変える……とはいえ、こればかりは後天的には手にはいらぬからな。くろな殿はくろな殿にしか達せぬ強さを極めればいい」

「その言い方だと、私には狂気の才が無いように見える」

「前にも言ったろ。お主は惑っていたが、根は全うだな。それに、狂気になれる才覚が無いことを残念がるのは筋違いだ」

「何？」

「お主、あんなのになりたいのか？ お主から見て豹変したと言えるような存在になったためいる殿みたい、一瞬で失われた大切な物を、

一瞬で不要と斬り捨てるのが羨ましいのか？」

クロナはその言葉を聞きながらメールを見た。

愚直に聖剣を振る姿は、既にあの惨劇を経験した風には思えないくらい普通だ。

普通すぎて、気持ち悪くなるくらいには、普通だ。

ひたすら聖剣を振るい、言われたとおりに何処が動いているのか自分なりに考え、また振るう。

そうして強くなっていくことに喜びを覚えている。

強くなる。

それだけ。

もう、家族のように思っていた者達の死のことなんて、忘れてしまったかのようだった。

「……な？」

宗司はクロナの心境を察したように意地悪く笑った。

どうだと言わんばかりに。

あんな様になるのが羨ましいのかと。

「……それは確かに——気持ち悪い」

お前も含め、狂いすぎだ。

そう吐き捨てながら、それでもこの二人、特に宗司が放つ奇妙な魅力から逃れられない己に呆れたように、クロナは小さく溜め息をついたのであった。

現在、宗司達は王都消失の報にざわめくメビウス王国内をのんびりと回っている最中であつた。

所業を考えればさつさと王国より逃げ出したほうがいいのだろう。現にクロナとメールは揃ってそう言ったのだが、これに対して宗司は何を今更と言った様子で「別にばれようがばれまいがやったことには変わらないのだ。ならばいつそ堂々と漫遊するのもいいだろう」と平然と言つてのけたのである。

実際の当事者と言っても過言ではない宗司がそう言うのであれば、クロナもメールも返す言葉はない。心境的にはこの国に居るのはいいたたまれないのだが、そこはやはり人間。慣れというのは恐ろしいもので、一週間を過ぎた現在、多少のもどかしさや申し訳なきはあるが、クロナもメールも立ち寄り寄る村々で聞く王国の行く末を案ずる人々の声を聞いても特に何かを感じるといったことは薄れていった。

とはいえいつまでもこの国に留まる必要も無い。彼らの、というよりも宗司の目的としては北の激戦区に赴き、魔王を相手に刃を合わせることなのだから。

だからといって聖剣を使った転移によって一直線というのも無粋である。旅はのんびり、道楽とは良く言ったもので、宗司達はメビウス王国と他国を繋ぐ転移パスが存在する町ラインに到着していた。

「ここが他国とのパスの一つ、か……」

あらゆる人々で賑わう町の様子を眺めながら感慨深そうに呟くクロナの隣、メールと宗司も同じくその活気溢れる町に目を丸くしていた。

これまで立ち寄った村の全ての土地を集めた以上にも見える広大な町は、入り口の巨大な壁を越えた内側は見渡す限りの人で一杯だった。

すし詰め状態とでも言うべきか。ラインへと入った三人は、動くスペースもないため、早々に街道の端へと追いやられてしまったほどだ。

活気に溢れ、喧騒に満ちている。ちらほらクロナと同じ巨人族のハーフや猫耳や犬耳を生やした亜人まで、あらゆる人間種がそこには多く見られた。

「こいつは凄いのお。俺も殿様のお膝元には幾つか足を運んだものだが、こうも賑やかなのは早々お目にかかったことがないわ」

「えつと……確かメビウス王国と他国を繋ぐ最上級光属性魔術『テレポテーション』、通称転移パスは、この町を含めてメビウス王国に五百程存在していて、ここにはその内の三割近くの転移パスが繋がっているらしいです。主に他国との流通の橋渡し、そして有事の際の避難経

路としてもここは使われているらしいです」

「なるほど、道理で活力に溢れている」

「……と言うわけでもなさそうだな」

宗司は人々の流れにそつと視線を移す。道行く人々は確かに商人などが多いが、その殆どが不満げな、或いは不安そうな表情を浮かべているのに気づいた。

「王都陥落……どうやら影響は既に出始めているらしい」

コロナもそのことに気づいたのか、表情を僅かに歪めながらそう返す。メールは首を傾げて「まあ仕方ないですよね？」と阿呆のように口を開けていた。

「いや、仕方ないですむ話ではないとは思いますが……悩んでも意味なし、か」

「うむ。今更、王都壊滅の犯人だと名乗りを挙げたところでどうにかなる問題ではあるまい。ここは静かに死した者達に黙祷でも捧げればよいだろう。成仏しろよ」

「うん。それを貴方が言うのはどうかと思うぞ。そこだけはね」

「ははは、くろな殿は手厳しいなあ」

面白い冗談を聞いたように朗らかな笑みを浮かべる宗司。

冗談ではないんだけどね。とは言えず、辟易しつつもコロナは再度人の流れと、彼らの話の内容に耳を傾けた。

「大方、王都壊滅の影響で流通が色々なところで止まっていたりしているみたいだな……なるほど、そのせいでこの街道が殆ど敷き詰め状態にまでなっていたのか」

「おかげで入るときもすんなり行けたのは僥倖だがな。本来なら取締りを強化したいところではあるだろうが……そもそも頭脳たる王都との連絡が途絶えているのだ。混乱のせいで取り締まりも定まらず、混乱の結果町に人が溢れかえったというところかの」

そう結論した宗司は、隣で人の波に目を回しているメールの腰に腕を回すと樽でも担ぐように肩に乗せてコロナを見上げた。

「済まぬがくろな殿、俺たちを担いだままで一先ずお主も入れそうなた茶屋か何かを探してくれるかの？ どうにも俺とめいるではこの人



ごみを掻き分けるのは、ちと面倒だ」

「了解したよ……さ、捕まってくれ」

「そら来た」

宗司が差し出されたクロナの掌を握り返すと、そのまま自分の肩のほうに二人を乗せると歩き出した。

「おお、これはまた面白い」

「わー！ 自分で歩くよりもずっと早い！」

「あまりはしゃがないでくれよ？ 耳元で騒がれるとくすぐったいだ」

むず痒さに頬を僅か朱に染めつつ、クロナは肩に乗せた二人を落とさないように人ごみの中を注意深く歩いていく。

流石は巨人のハーフといったところか。しかも漆黒の全身鎧を身に纏っていることもあり、道行く人々も押しつぶされないように道を譲っている。その度に「すまない。おっと、ごめんよ」等と一々言うクロナの律儀さに宗司は笑みを浮かべていたが、ふと高くなった視線を遠くにまで向けた。

街道の奥にはこの町で何よりも巨大な建物がある。周囲を取り囲む壁よりも頭一つ高い巨大な塔の周りに無数の建物が張り付いているような建築物だ。しかも途中から幾つか追加したのか、塔の外部に増設された小屋のようなものが幾つもあり、凸凹したどうにも珍妙な物に宗司には見えた。

「アレは……」

「メビウス王国における最大の転移パスの設置ポイントであるライン。その転移パスの全てを管理しているのがあの建物、正式名称『メビウス王国製第四転移門群』通称『とってつけ塔』です。この通称は、見た目通りのあの外見、巨大な塔に建物を強引にとってつけたことが所以らしいですね。元は数箇所の転移パスがあるだけの小さなポイントだったのですが、魔脈、または龍脈と呼ばれる大地に流れる魔力が集中するポイントというのが分かってから増設を繰り返して今の形になったそうです。現在メビウス王国における転移パスの内のおよそ三割、正確には百三十九にも及ぶ数の転移パスがあります。とは

いえこれら全てが同じ規模の転移パスというわけではなく、旅行、輸送、避難用などなど、各種用途に分かれており、それらを効率よく運用するために現在の塔の形になったそうです。民衆からはとってつけ塔とは言われていますが、あの形には高度な魔術的要素が絡んでおり、増設一つとっても、魔脈の流れを崩さないように細心の注意を払って行っているため、本来なら千は容易に築いても問題ない魔力量があるにも関わらず、建設より百年以上経った現在でもその有用性に反して遅々として工事が進まないのは――」

「つまり凄いのだな」

「はいー」

メイルは煩わしそうに解説をぶった切った宗司に嬉しそうに頷きを返した。

一から作り上げ、遂には天高くにまで届きそうなその偉容は、まさに先人達が築き上げた英知の結晶だ。

百年前から築いていると言ったか。

宗司がとってつけ塔を注視すれば、外観が古いものから新しいものまで幾つもの増改築の跡が見られた。

「月日を重ねた寺にも儼かなものを感じるが……魔的なものを孕んだあの建物の雰囲気はまた違うな」

「魔力自体は高濃度にならない限り人体への影響は殆どないからね。だがそこにある人の念とでも言うものに影響されて魔力そのものが変質することはあるらしい。貴方が感じたのもそれかもしれないな……少し見てみるかい？」

クロナの返事に「うむ」と応じた宗司は、クロナの肩に乗ったままとってつけ塔のほうへ向かう。

人ごみを掻き分けて暫く、宗司達の耳に賑やかさとは違った喧騒がとってつけ塔のほうから聞こえてきた

「いつになったら転移パスは使えるんだ！」

「あっちからの商品はいつ届くのさ！」

「すみません！ 現在、転移パスは諸事情により使用が許可されていませんー！」

「だったらせめてその諸事情とやらを教えろ！」

「それは……」

「おい！ 王都が壊滅したという件とやっぱり関係があるんだろ！」

「申し訳ありません！ 早急に使用できるようにしますので——」

とつてつけ塔の前、入場門は現在閉鎖され、その前に数えられないくらいの人々が押しかけて門の向こう側に立つ、とつてつけ塔の関係者らしき人物と口論を繰り返していた。

どうやら何かしらの理由があつて現在は転移パスが使用できない状況らしい。「何日ここに居座らせるつもりだ！」と叫ぶ者も居ることから、どうやら少なくともここ数日前から転移パスが使えない状況らしい。

その喧騒を暫く見ていた宗司達は、そそくさと踵を返すと何とも微妙な表情を浮かべた。

「まあ、予想の範囲だな」

クロナがそう言うが、しかし三人の表情はやはり優れない。彼女が言うとおりに、もしかしたら転移パスが使えないのではというのはこの道中で考えていたことだ。

何せ、王都が消滅したのだ。他国ならば、(王都が一夜どころか一瞬で吹っ飛ぶというケースがあるとは思えないが)メビウス王国と違い情報伝達の齟齬があるため、王都より離れたここラインに情報が行き届くのはもう暫くかかっただろうし、対策となればさらに遅くなっただろう。

だがメビウス王国には王国全域に張り巡らされた転移パスを用いた情報伝達網が形成されている。これを用いれば異変に気づいた誰かが他の有力な貴族に情報を連絡。他国とは違い直ぐに何かしらの対応が行えるだろう。

そして、王都消滅が何かしらの魔術——メビウス王国の優秀な術師なら、既に王都を壊滅させたのが『神魔千殺』だと気づいているかも知れない——が原因だと察したなら、犯人を逃がさないために国外逃亡が出来る転移パスを一時的に止めるということはしそうなものである。

尤も、王都を一瞬で消滅させるような存在を潜在的に王国内にとど

めようとするのは下策と取る者も居るだろうが、そこは王都を消滅させた者がその後目立った破壊活動をしていないこと等など、その他の理由によって転移パスの停止が決定されたのだろう。

「もちろん理由は考えられるが……いざとなればちいとで転移すればいいだろ」

三人の中、直ぐに表情を元ののほほんとしたものに戻した宗司はそう二人に言った。

確かにこのことについては考えても仕方が無いことではある。迷惑をかけたことは申し訳なく思うが、だからと言って贖罪する方法もないのもまた事実。

一先ずは宿に入って、明日、改めて今後について話し合うことにしよう。

宗司の提案に二人も同意すると、未だ慌しいとってつけ塔から踵を返し、宗司とメールを乗せたクロナは宿を探すために歩き出すのであった。

第十一話 『はじめましてと、聖女が笑う（嗤う）』

予想した通り、クロナと同じく巨人族ハーフといった種族も幾人か見られたこの町には、彼ら専用の宿屋があった。

とはいえそこはクロナ達のような大柄な者のみが使える宿屋らしく、日もそろそろ傾く頃あいということで、明日の朝に宗司達がクロナのところを訪れるという形で一旦解散することとなった。クロナは久しぶりにベッドで寝れることが嬉しいのか、早々に宿屋に入ってしまったというのが解散の本当の理由なのだが。それはさておき、残された宗司とメイルはといえば、早束手近な宿屋に入ってそのまま晩飯にありつくことにした。

やはり流通の起点ということもあつてか、出される料理の質は上等だ。テーブルの上に並べられた見慣れぬ料理の数々を見て、宗司は「ほう」と感心してみせた。

この世界に来てから今まで、食事といえば干し肉やその場で狩った野性の獣の肉や山菜を混ぜ合わせたスープだったが、今宗司の前にある料理はどれも見るだけでも楽しめるものだ。

無論、味も濃厚。かつての世界ではここまで味の濃いものは早々食べられるものではなかったため、口に運ぶために宗司は目を白黒させて舌鼓を打った。

「これは美味しいのお。少々臭いがきついが……ふむ、いいものだ」

宗司はスプーンに掬ったシチューを興味深そうに眺めて呟く。

「私としてはソウジさんとの鍛錬の後に食べる干し肉とかのほうが好きですけど……こういう食事もあるんです」

そんなことを言いながらもメイルはスプーンを休めることなくテーブルの上の食事を次々と口に運んでいる。

「人の好みにとやかくは言わんがな。ともあれ、こうも賑やかなところでの食事というのは久方ぶりではある」

宗司達が居るテーブルの他にも、宿屋兼居酒屋としても機能しているこの店は、夕方を待つことなく人で込み入り始めている。

メイルは気づいていないが、宗司はここに居る殆どの者がこちらに視線を向けているのに気づいた。隠す気もなく遠慮なしに見る者からなるべくこちらに気づかれぬようにちらちらと見てくる者までばらばらだが、そのどれもが好奇の色に染まっている。

それもそのはずで、クロナによって旅に耐えられるよう仕立て直されたとはいえ、ドレスにしか見えない服を平然と着こなし、背中には穢れを知らない聖剣を背負ったメイルは、どこかの貴族の娘に見える。そして宗司はといえばこれまたクロナによって仕立て直された着物姿というここでは見慣れぬ異国の服装に、腰にはやはり見慣れぬ日本刀が一本。

好奇の視線に晒されるのは当然だ。メイルは気にしていないようだが、こういった視線をずっと浴びていては宗司にとってはむず痒い。

だが好奇の視線も暫くすれば無くなるものだ。混雑してきた酒場内は直ぐに賑わいだし、隅っこで食事をしている二人のことなど気にするものなど直ぐに居なくなってしまう。

気分良く食事を続けるメイルを、親が子を見るような心境で穏やかに眺めつつも、宗司は周囲の会話に耳を傾ける。

「しかし参ったよな」

「ああ、王都壊滅つてのは眉唾だが……もう四日も転移パスが使えねえとなると、いよいよもってやってやつか？」

「北の戦線も冬の前にまた退いて新たに戦線構築をするらしい。噂が本当だとしたら、まだそれなりにマシな南側の国も危ないだろう。知り合いの知り合いにそういうのに詳しい先生が居るみたいだが、帝国が瓦解すれば後は雪崩のようにメビウス王国外の国家群は魔族側に潰されるってよ。噂通りなら、メビウス王国も潰れるんじゃないのか？」

「学者先生はどうも悲観的な意見だな……まあ、そうなっちゃうのも無理はねえ。長引く戦争でこっちの資源はぎりぎり、メビウス王国を

中心とした南国連合の供給で北の戦線は辛うじて維持出来ただけだしな。これでイシスの大結界がどんなに頑張っても十年後には自然に決壊するってんだ」

「……つたく、こうなりや自棄酒だ」

(どうやら思った以上にこの国の外は大変みたいだな)

聖剣暴発がトドメにならなければいいのだが。とも思うのだが、多分トドメになっているだろう。

ままならぬものだなあと思いながらスープを一掬いしていると、先程の商人達が再度語りだした。

「それよりも……お前はどうする?」

「どうするって?」

「とぼけるなよ。アポロン山脈の手前にあるガイア大樹海にあるっていう放棄された転移パスさ」

「ああ……ライン建設よりも前に一度作られてそのまま破棄されたパスだったけか? でもあそこはアポロン超えてそのまま居ついた蛮族が大量に居るだろ。何とか住み分け出来ているから樹海に入らなければ安心とはいえ、入ったら最後、傭兵団雇っても突破は無理だろうよ」

「だよなあ……やっぱ現実的にはここで待つか、もしくは他のところに移動するしかねえよな」

宗司は二人の会話を聞きつつ他の会話に耳を澄ますと、どうやら破棄された転移パスの話題で持ちきりのようだ。

その間に、そこで暮らしているという蛮族——ナイというらしい——がアポロン山脈とメビウス王国の間に広がるガイア樹海を与える代わりに、侵入者を迎撃するようにといういわば番人の役割を与えられているということを知った。

聞けば聞くほど、幾らパスが使えず帰ることが出来ないとはいえ、アポロン山脈を越えるのはともかく、破棄された当時そのままに残されているため、使える可能性の高いガイア大樹海の転移パスを使わないのかという理由が分かる。

ナイは排他的であり、王国からの使節団以外の人間は見つけ次第問

答無用で殺しにかかってくることに。しかも殺した敵は人間だろうがなんだろうが食ってしまうとも言われており、まさに蛮族に相応しく、人間の皮を被った魔族のようなものらしい。

「ふむふむ」

「ソウジさん？」

メイルはお腹が満たされようやく人心地ついたところで、宗司が口元に小さな笑みを象っていることに気づいた。

きつとご飯が美味しかったんだろうなあ。

嬉しそうな宗司を見てそう思うメイルに、宗司は小さく喉を鳴らすと一言。

「予定が決まった。早くても明後日にはここを出るぞ」

「結構早急ですね。まあ聖剣もありますし、ある程度の食料と水さえあれば問題ないとは思いますが……直ぐに転移するのですか？」

メイルの問いかけに宗司は首を横に振った。

「いや、聖剣は使わんよ。その前に少々散策がてら、修行でも良いかと思ってるな」

「修行ですか？」

「俺も、お前も、くろな殿もな。話を聞いたら、さっさと行くとしよう」  
一人で勝手に納得している宗司に、メイルは首を傾げるばかりだ。

だがそんなこと、稽古してもらっている最中にはいつも難解な言い方をする宗司である。今更、この人が何を思っているのか一々詮索するのも面倒というもの。

翌日、そのせいでクロナがこれで幾度目になるか分からないほど頭を悩ませることになるのだが、今はそんなことより食後のデザートのほうが気になるメイルであった。

豊富な資源を独占しているにも関わらず、激化する魔族との戦争には物資提供以外は一切かかわらないメビウス王国。これに対して当然、周囲の国家はいい気分にはならないが、それでもメビウス王国に



対して何かしらの報復をしないのは、他国とメビウス王国を分かつ巨大な山脈、アポロン山脈があるからだと思われる。それが人々の間に広まっている共通認識だ。

だが正確にはそれは真実ではない。アポロン山脈は確かに、雲をたやすく突き抜けるほどの巨大な山脈で、転移以外での移動は難しいというのもあるが、問題なのはアポロン山脈を越えた後、広大なガイア大樹海と、そこに住む原住民——メビウス王国と盟約を交わした戦闘民族のせいである。

盟約の内容は、侵入者は問答無用で殺しつくせ。

転移パスが構築されてから今に至るまで、ただそれだけを守り続けた恐るべき戦闘民族を、それを知る者達は畏怖を込めて蛮族と呼んだ。

「そういうわけで、大樹海とやらに行くとするぞ」

久しぶりのベッドを満喫した翌日、朝も早くから宗司に叩き起こされたクロナは、とびつきりの良い笑顔でそんなことをのたまった宗司に、全力の拳を振り下ろしていた。

だが怒りの拳は虚しく空を裂くばかり。当たれば人間の顔面などトマトのように弾くことが出来る拳は、宗司の耳元を僅か掠めるに終わった。

「危ないではないか」

「君が！ 危ないことを！ しようとしてるんだよ！」

クロナは語気を強めてそう叫んだ。

だが宗司は実にどうでもよさそうに頷きをひとつ返すばかりである。

駄目だ。こいつとメールを野放しした自分が間違っていた。

内心で後悔をするがもう遅い。既に宗司は行く気満々であり、この様子ではどう言おうが決して意見を曲げることはないだろう。

「……それで、メールの許可はとったのだろうか？」

「うむ。めいるのことは気にせんでもよい。奴にも良い経験になるだろう」

「はい！ 修行ですよ！」

クロナは宗司の隣で目を輝かせているメイルを見て頭を抱えた。純真無垢な笑顔は、つまるところ状況を殆ど理解できていないということを示しているようなものである。

「……既に知っているとは思うが、大樹海にいるという蛮族は問答無用で侵入者を殺す危険な存在であることよりも、アポロン山脈を越えたとしても、彼らが居るから進軍は出来ないと周辺国家に言わしめる程の戦闘力を誇っているところにあるんだぞ？」

最早、説得は殆ど不可能だと悟ったクロナだが、それでも助言を告げるものの、宗司はむしろ嬉々とした笑みを一層深めるばかりだ。

「だとしたら好都合というものだ。有象無象を斬るのはつまらんですが、敵が武士であるならば仕合える喜びがあるというもの」

「喜びですね。そうみたいですよクロナさん」

「……うん」

泣きたい。

宗司とメイルが浮かべる笑顔とは対照的に今にも泣き崩れそうになるクロナ。だがそれも一分程で葛藤を終えていた。

つまるところ、ヤケクソというものである。

「……まあいいさ。私の命は君達に救われた物。であれば、その決定に一々文句をつけるのも野暮というものか」

「はははっ、そう言わずに今後もお主の意見はほしいところよ。勿論――」

「聞き入れるかどうかは別、と言ったところか？」

「そういうものさ」

宗司はそう言う二人に背を向けた。

「とはいえ何も今日出発するというわけではない。お主の了承も得られたからな、出立は明日にするとしよう」

「ソウジさんは何処に？」

「何、俺は一人で散策でもする。お主達はのんびりと準備をしておれ……ではな」

メイルの問いに宗司は振り返ることなく答えると、そのまま人ごみの中へとまぎれていった。

驚くことに人の影に隠れたと思った瞬間には、宗司はクロナの知覚を騙してそのまま姿をくらましていた。

その絶技にメイルは気付くことはなく宗司の姿を探すだけだが、クロナは新たな驚きを覚える。

「全く、もう驚くことはないと思っただが……君には驚かされるばかりだ」。

「クロナさん？」

「何でもない……さて、折角女の子だけになれたんだ。今日は一日私と街を散策しないかい？」

「はいー」

二つ返事で答えるメイルに笑顔を浮かべつつ、クロナはおそらく宗司が消えていっただろう方角を見据えた。

「……頼むから、トラブルだけは勘弁してくれよ」

そう願うばかりではあったが、果たしてあの男が一人でうろついで、問題を起こすことなく平穩無事に一日を過ごせるようには思えないクロナなのであった。

別に一人になった理由は特にならない。あえて理由を挙げるならば、ここ暫くは一人で何処かをうろつくなど出来なかったので、久しぶりに一人になりたかったというところか。

血はしつかり流しクロナの手で仕立て直されたとはいえ、宗司の着物姿と腰に見慣れぬ剣、刀を差した姿は人々の視線を否応なく集める。

だがそこは王都を壊滅させても平然とその話を聞けるだけの猛者。視線程度など何処吹く風と露店を冷やかしたりしつつ、宗司は久しぶりの一人を満喫していた。

「しかし、処変われば品も変わると良く言ったものだな……まあ、酒は何処で飲もうが味は違えど酔えるのは良いことだ」

露店で適当に選んだ串焼きと酒を口に運びつつその味に舌鼓を打

つ。

さて、次はどの店に入るとしようか。宗司は何か目新しい物を探して周囲を見渡ししていると、不意に殺気にも似た気配を敏感に覚えた。

「ほお」

好奇心の赴くまま、人ごみの間を縫うようにして殺気元へと向かっていった宗司が見たのは、花が咲くような温かい笑顔を浮かべている修道服らしきものを纏った美しい女性を数人の男が囲っているところであった。

どうやら道の隅の目立たないところに押し込んで、騒ぎにならないようにしているところを見ると、あの男達は『そういうこと』をやりなれているのだろう。

これは面白いところに遭遇したものだ。宗司は内心躍らせつつ、一方的に女性を威圧し続けている男達の一人の肩を叩いた。

「あん？　なんだテメエ？」

振り返った男達は、いずれも細見の宗司と比べると一回り以上巨大な肉体を誇っている。人相の悪さも相まって、上から見下ろしてくる威圧感は常人なら萎縮してしまうほどのものがある。

だが所詮は常人が驚く程度。それにそもそも、宗司の目的は『この男達ではないのだ』。

「ちと退いてくれ。俺はその女子に用があるだけだな。お主達には興味ないのだ」

「ああ？　それはこっちのセリフだゼクソガキ。変なのは服だけじゃなくて、その目ん玉と脳味噌もか？」

「生憎と異国の風土には慣れてなくてな。だが、人の善意を無碍にするのは良くないぞ？　なあ、お主もそう思わぬか？」

宗司は男達にはなくて、その背後で優しく微笑んでいる女性へと問いかけた。

「……………ふふ」

女性は問いかけには答えずにただ笑うだけだ。

だがあからさまに無視された男達は黙っているわけにもいかない。顔を真っ赤に染めた男の一人が、問答無用と宗司目掛けて拳を振り上

げ――

「……まったく、俺は雑魚を相手にして要らぬ面倒を起こすのは嫌なのだ」

そう言っただけ息を吐き出した宗司の両腕は組まれたままだ。

だが、宗司目掛けて拳を振り上げた男の動きはその状態で止まっている。よく見ればその顔は赤ではなくいつの間にか青ざめており、その顔はおろか全身から滂沱と冷や汗を流しだしていた。

それはその男だけではなく、周りの男達も同じである。全員が顔を青ざめさせて、両腕を組んでいるだけの宗司から目を逸らすことも出来ずに硬直していた。

「この程度の圧で動けなくなる雑魚はどうでもいい……さて」

賊やメールに使用した殺気を用いた金縛り。宗司はそれをその場の者達『全員』にぶつけていた。

男達が動けなくなったところで、改めて問いを投げかけられた女性は笑顔を崩すことなく佇んだままだ。だが女性はゆっくりと一歩踏み出すと、その進路上にいた男の隣を抜けて宗司の前に立った。

「危ないところをありがとうございました」

女性はそう言うと、誰もが見惚れるくらい美しい笑顔で宗司へ一礼をした。

繰り返すが、とても美しい女性だ。背丈は宗司と同じくらいか、この世界の特殊な例を除き（クロナのような巨人族のハーフ等）随分と背が高いが、可愛いというよりも彫刻品のような美しさを誇るこの女性にはさらに一回り大きく見えた。

修道服に包まれた肢体は程よく肉がついており、芸術品のような美しさと別に、男を惑わす色香にも溢れている。

それが食虫植物から香る甘い匂いとも知らずに男達はこの女性の魅力にやられたのだろう。だが宗司は女性の修道服を越してもわかる豊満な体よりも、その手足に目を奪われていた。

「やはりな……あの殺気、お主のものだったのだろうか？」

「はっっっ」

「……まあ、良い」

宗司は不思議そうに小首を傾げる女性の掌に視線を移した。

これ以上ないと言えるほど完成された美しさを持つ女性だったが、だからこそその掌は一際異彩を放っていた。

別にこれといって異常があるわけではない。誰が見ても傷一つない白い指先だ。

しかし香るのだ。

堪らなく臭うのだ。

「俺は宗司という。良ければお主の名前も教えていただけぬだろうか？」

「これはごく丁寧にありがとうございます。私は偉大なる神——にやるに仕える忠実なる僕の一人」

女性はそう言うと、吐き気をもよおすほど濃密な死の臭いをまき散らす掌を宗司に向けて改めて微笑みを浮かべた。

「ナイル・アジフと言います。よろしくお願いしますね、ソオジさん」

## 第十二話 『聖女を、斬る（と、どうなるか）』

かつて世界最大の宗教団体である聖火教の暗部であった第十八課『エンド』の本部は、今やそのかつての面影を一切残していなかった。厳かな雰囲気のある教会は根本から作り直され、今は漆黒に燃え上がる三つの赤い目が、唯一神と呼ばれたクトウアの祭壇に捧げられていた。

教会内部にはコールドタールを直接ぶちまけて塗りたいくらいな壁で覆われており、唯一の光源は壁に備えられた魔法具から吐き出される小さな炎だけである。

そこはまさに暗黒の支配する恐怖の壺。

だがその中心で一人両手を組んで祈りを捧げる女は、この狂気の光景に居て、尚金色に輝く美しさを損なってはいなかった。

その女こそ、ナイル・アジフ。魔族を亡ぼす力を有する第十八課の信者を、一人残さず混沌の使徒へと作り変えた女である。

「……今日も一日、黒の混沌を私に」

ナイルは祈りの最後にいつもそう呟いている。これは彼女の日課であり、常日頃自分達を遥か彼方より嘲笑しているだろう偉大なる神へ捧げる崇高な祈りだ。

いつか、世界全てが混沌に溢れることを彼女は誰よりも願っている。

そして朝早くより行われる礼拝を終えたナイルは、教会の外へ出た。

そこには既に支度を終えた第十八課の面々、そして今や混沌の神『にやる』を信奉する完全無欠の狂信者へと生まれ変わった彼らが、ナイルが出てくるのを待っていた。

「おはようございますナイル様」

その先頭に立っていたヒエラ・リトが皆を代表してナイルの前に立つと恭しく一礼した。彼らがかつて信奉していた神に捧げるそれよりも深い祈りに、ナイルは花のような笑顔に小さな困惑の色を浮かべ

る。

「ヒエラさん。何度も言いましたが、我々は所詮偉大なるにやるの足元にひれ伏すだけの下僕です。敬称など付けず、同じ祈りを共にする者として気軽に接してください」

「ですが、ここに居る全員が貴女の手によって真なる救済に目覚めたのは事実。偉大なるにやるが現世に降ろした奇跡である貴女は、やはり我々にとっては偉大なる求道者であるのです。まさに神の使徒、いと尊き混沌の御方よ！」

そう言い切ったヒエラの背後で、十八課の面々の全員が同意だと頷いた。

「全く……困ってしまうわ」

ナイルは彼らの熱い眼差しに頬を朱に染めて苦笑を一つ。

だが彼らが真の神に目覚めた必然が自分の手で行われたのも事実。そういう意味での敬意をどうして無碍に出来ようか。喜びと戸惑いを半分ずつ感じながら、ナイルは改めて彼らのことを見渡した。

「では、皆さん。改めて話すまでも無いことですが、今この世界は素晴らしき混沌に満ちています」

そして笑顔で告げるのだ。

「北の大地では今も悲鳴と怨嗟に満ちた争いが続けられ、その一方で至福に満ちた人々が居ます。これは素晴らしい。善だけではない。悪だけではない。等しく混ざって混沌と呼ばれる北の大地の現状は……今は手を出す必要はないでしょう。少々、悪側に偏っていると言えますが」

彼女の語る混沌とは言ってしまうえばバランスである。

何も彼女は殺戮こそが神の教えであると言っているわけではない。

一善一悪。

等しく合わさり、これぞ混沌。

永遠に続く破滅と再生こそが、偉大なるにやるの遊戯場であるこの世界に必要なものだと言っている。

たったそれだけ。

それだけの、異常な狂気。



「ですが、私は悲しい」

そう言うと、ナイルの両目から涙が流れた。聖女が流す尊い悲哀に、第十八課の面々も泣きそうな顔でその続きを待つ。

「この国だけ、何故平和などという善に溢れているのでしょうか。穏やかな笑顔に幸せな家庭、気の合う友人との団欒に外敵の存在しない平和！ 例えそれが後数年もすれば瓦解するようなものだとしても！

何故！ そのような平和が！ 平和だけが許されるというのか！  
あああああ！ おかしい！ おかしいでしょ!？」

途中から語気を強くし鼻息荒くナイルは語る。髪を振り乱し叫ぶ様は、さながら鬼か悪魔のごとく鬼気迫るものがあった。

だが映像が切り替わるように突如としてナイルの怒りは収まり、常の優しい笑顔がそこに戻った。

「しかし、そんな糞以下の平穩に、先日一石が投げられたのは皆様も知っての通りです」

「聖剣……!」

「憎らしき怨敵、邪神クトウアの勇者……!」

口々に憎しみ混じりの言葉が呟かれる。それをナイルは片手を挙げて止めると、「確かに、私をこの地に呼び出した偉大なる我が神のもたらした聖槍、ジムと敵対する存在なのは事実です」そうナイルは語った。

勿論、ナイルが今言った聖槍ジムを授けたのが彼女の神、つまりにやるであるというのは事実ではない。だがそういう風に彼女達の中で事実を書き換えられ、今や事実は事実ではなくなり、聖なる槍は混沌の神がもたらした邪槍へと貶められていた。

閑話休題。

ナイルはおもむろに取り出したジムを地面に突き立てると、晴天のように晴れ渡る笑顔を浮かべた。

「ですが、聖剣は王都を襲撃しました」

その言葉に沸き立つ第十八課を再度抑えながら、それでもナイルも彼らの気持ちは良くわかるのだろう。こみ上げる喜びを噛みしめつつ、聖剣によつて焼かれただろろう王都に満ちる怨嗟を想像し体を震わ

した。

「素晴らしい！ きつと、確実に、間違いなくう！ 聖剣の勇者は我が混沌の信者に違いありません！ 彼はきつと憤ったのでしよう。自分が邪神に弄ばれる屈辱に！ 自分が平和しかない世界に呼び出された絶望に！ 故に！ だからこそ！ 聖剣をあえて使うという意趣返しによってこの平穏ばかりのクソツタレ以下のゴミ国家にぶちまけたのです！」

混沌を。

正義と悪の成す美しい二重螺旋の混沌を。

希望と絶望をかき混ぜた世界を描くために。

「おおー！」

「うおおお！」

「やったー！」

「偉大なるにやるの下僕に黒の英知を！」

最早、爆発したように歓喜する彼らをナイルは止めようとは思わなかった。むしろ、にやるの教えを知り、この綺麗なだけの国に塗られた漆黒を喜ぶ彼らの気持ちに共感し、神の真理は全てを救済するのだと改めて確信した。

「そこで！ 私は行きます！」

未だざわつき収まらぬ狂信者の群れにナイルは宣誓した。

「この世界に新たな混沌を作り出した偉大なる勇者に会い、彼を神の御許に迎え入れましょう！」

その宣誓に狂信者は喝采をもって賛同をした。

おお、大いなる混沌の神よ。

偉大なる黒に混沌あれ。

万雷の祈りにナイルは目を閉じて酔いしれる。数分程その熱気を堪能したナイルは再度片手を挙げて彼らを沈めた。

「ではその後のことについてはお任せいたします……ヒエラさん」

「はい。お任せくださいナイル様。偉大なるにやるより与えられ使命、我らの命に代えても成し遂げてみせます」

そう言つてヒエラが懐より取り出したのは革袋だ。その口を開い

て取り出したのは何かの粉末を包んだ紙であった。

ナイルはそれを受け取ると、紙を破り中身を確認した。

中身は乾燥させた各種の薬草の粉末。ナイルはそれを一つまみすると舌に乗せてじつくりと味わった。

「素晴らしい。こちらの薬草の知識は足りなかったため些か苦勞しましたが……これなら私が自ら手を差し伸べなくても、誰もが真の神を見ることが出来るようになるでしょう。この短期間で良くぞこれ程の物を作りました」

「いえ、これもナイル様の冴えわたる頭脳があつてこそ。我らの知識を数日で吸収し、さらにはジムから学習した魔術知識を組み合わせたこと、感服いたしました」

「ふふ、そう褒めても何も出ませんよ。まあ改めて確かめなくても、効果のほどは既に確認済みではありましたが」

そう言いつつナイルが移した視線の先、教会の隣に足跡で作り出した小屋からは、僅かな呻き声が幾つも聞こえてきた。

良く聞けば、それは彼女達が信奉するにやるの名を延々と呼び続けている声だった。例えば何かしらの手段を用いて理性を無くさせたかのようなのである。

ああ、偉大なる神を讃える声が幾つも聞こえる。

哀れなる迷い子は、混沌に飲まれることでさらなる迷いの果てに狂気へと至るだろう。

今はそうして神の名を呼び続けるだけでいい。だがいつかきつと、彼らも混沌の意味と狂気の真理に気付き、その時こそ真の同胞となるだろう。

その時がとても楽しみだ。

そこまで夢想したナイルは、脱線した思考を戻すようにヒエラに視線を戻すと、優しく微笑みかけた。

「では後のことは頼みますよヒエラ」

「はい。偉大なるにやるの名の下に、我ら一同、布教に努めます」

ヒエラは皆を代表してナイルに深々と一礼すると同時に、彼らは蜘蛛の子を散らすように四方に走って行った。

「世は泰平。ですがそれでは神の望む世界には程遠い」

ナイルは地面に突き立てたジムを引き抜くと、聖剣と対をなす聖槍にのみ備えられた機能を解放した。

掲げたジムの矛先より一筋の光が真っ直ぐに伸びる。これこそジムに搭載されている、聖剣を感知する機能だ。

「……一先ず、北、ですか」

現在ジムと繋がった状態にあるナイルは、聖剣がどの位置にあるのかは光を辿らずともある程度は把握出来る。

それによれば国境付近に聖剣は在るのがわかった。

普通なら今から追いつくのは至難である。しかし、ナイルの持つ聖槍は、その至難を容易に行える程の能力を秘めていた。

「では、転移魔術とやらで私も早速向かうといたしましうか」

ジムより発生した膨大な魔力が、虚空に人一人程の巨大な魔法陣を描く。それは空間を隔てた場所にすら移動を可能とする転移魔術の術式。

聖剣と同じく、ジムもまた所有者に膨大な魔力と魔術の知識、そして身体能力を与えるのは同じである。

だがナイルからすればその程度はあくまでおまけであり、むしろこの無駄な全能感あまり好きに慣れないし。

はつきり言つて、彼女の大好きな闘争を行うには、弱すぎる。

「おっと、これは不敬ですね……いやいや、我が神はそれはそれは腹黒い。この程度の力が私にはお似合いだろうと言っているのですよう」

偽りの全能感。

とるに足りぬ不要な力だが、これもまた神の与える享樂であれば。ならば、この不便も喜んで享受しよう。

ナイルは敬虔な信者らしく肃々とした立ち振る舞いで、ジムによって作り出した魔法陣へと入り込むのであった。

ラインの街は転移パスが使えないものの、そこまでの混乱は見られ

なかった。むしろ、転移パスがしばらく使えないのを見て、商人達は運ぶはずだった商品を手で売りさばき始めたのもあり、常よりも活気に溢れている程だ。

だがそんな街のにぎやかさとは裏腹に、今露店通りの片隅は背筋が凍りつくほどの冷たい空気が充満していた。

恐ろしい死の寒さの中心に立つのは二人。

異世界の侍、宗司と、同じく異世界の狂信者、ナイル・アジフ。

まるで運命の必然とでも言わんばかりの出会い、満たされた空気を他所に、二人共朗らかな笑みを浮かべた穏やかなものであった。

「ない、か……あい分かった。では、ない殿。これもまた何かの縁、こちらこそよろしく頼む」

宗司もまたナイルの笑顔に吊られて微笑みを返すが、決して差し出されたその手を握ろうとはしない。

同じくナイルもまた、宗司の斬撃が届く一歩手前で立つばかりで、決してその圏内に入ろうとはしていなかった。

そのまま二人は暫く微笑みと視線を交差させるが、先に折れたのは手を降ろしたナイルのほうであった。

「さて自己紹介も済んだところでソオジさん。助けていただいたお礼に何かお礼をしたいのですが……良ければついてきてはいただけないでしょうか？ 近くに美味しそうな料理を出すお店があるのでですよ」

ナイルの提案に、宗司は是非もないと頷きを一つ。警戒心などまるでないと云った面持ちでナイルへと一歩を踏み出した。

「そういうことなら礼を受けることにしよう」

「……でしたら付いてきてください。ああ、そちらの方々はどうしますか？」

「所詮は取るに足りぬ奴らだ。斬るのも面倒ならば、捨て置くのが一番だろう」

未だ金縛りから抜け出せずにいる男達を一瞥した宗司は、言葉の通りに男達に背を向けてナイルの隣に並び立つ。

それが何を意味しているのか、この短い会合で宗司は十分理解して

いたし、当然ナイルも同じことを理解しているだろう。

「ええ、ソオジ様の仰る通りだと思います……本当に、ね？」

「……食えぬ女子おなごだ」

ナイルの底なしの暗黒の如き瞳を横目に小さくつぶやいた宗司は、そのまま歩き出した背を追った。

見慣れぬ異国の服装と異国の顔立ちをした宗司と、誰もが見惚れる美しい修道女といったナイル。並んで歩けば人の視線を嫌でも集めてしまうが、宗司がそうであったようにナイルも全く気にした素振りをみせていなかった。

いや、宗司はナイルが己とは少々違うのだろうとすぐに察した。自分は視線を気にしないが、ナイルは視線を当然のものと受け入れている。

「注目されるのに慣れておるのだな……見慣れぬ服装だが、お主、芸人か何かか？」

「残念ながら違いますよ。私は神に仕える敬虔な信者の一人でしかありません。ただ、私は救済を求める人々の眼差しを受け入れているだけですよ」

「神の信者か。確か南蛮の者に神がどうかのがあったが……仏教とはまた違うものであったかの？ いや失敬、国も違えば習慣も変わる。この国ではそういうものなのだろう」

「それもまた違いますわ。いえ、この場合は二つの意味ですが。私の国では頭を剃る必要はないですし、そもそもこの国に来て一月も経っていないのです」

「ほお、そいつは奇遇だな。俺もこの国に来て同じく一月も経っていないのだ」

「まあ、それは本当に奇遇です。それでソオジ様は聞きなれぬ名前と服装をしていらつしやるのですね」

「旅の連れにはこっちの服を着ろと言われているのだがな。如何せんこの国の服は動きが見え透いてしまい良くない」

「例えば、足の動きとかででしょうか。貴方の足運びはとても綺麗、けれど、服も合わさり動きの機先が捉えづらい」

やれやれと溜息をつく宗司の足元にナイルは視線を移してそう言った。

「目ざといな。何だ、お主も何かしら武を齧っておるのかの？」

「嗜む程度には。ソオジさんと比べたらまだまだです」

「はっ、良く言うわ」

隣に立つナイルの歩く姿を見ながら宗司は鼻を鳴らした。

これははつきり言って自慢だが、宗司は自分の体捌きには自信がある。普通に歩くだけでも動きの『起こり』を悟らせるようなことはさせず、いざ戦いとなれば相手の目を欺くことすら技量に差があれば可能だ。

そんな自慢の体捌きをナイルは横目で見るだけで何となくではあるが程度見切っているのが分かった。軽く仕掛けてみたが、ナイルの目はしつかりと宗司の影を追っていることから確実だろう。

こいつは強いだろうな。

そんな確信を覚えたのは宗司だけではなくナイルも同じだった。

一切油断を見せない立ち姿に、興味をそそられる。

強い。

どの程度強いかと言えば、少なくとも殺すとなれば相討ちは覚悟しなければならぬだろうと思う程度には強い。

「ふふっ」

「どうした？」

「いえ、悪い癖です」

「……何となくだが、おそらく俺と同じことを考えているのだろ」

つつい、強い人を見るとどうすれば斬れる―殺せる―のかに腐心してしまう。

そんな己にナイルと宗司、共に自嘲しつつ、とりとめのない会話をして数分もすれば目的の店に辿り着くのであった。

転移パスが使えないという現状のせいもあるが、ナイルが言う通り店自体の評判がいいのだろう。賑わう店内は見渡す限り人ばかりで、二人が座れるようなスペースは何処にもないように見えた。

「どうするっ？」

宗司が問いかけると、ナイルは手近のテーブルを囲っていた一団に迷いなく向かっていき、二、三、何か話すと懐から数枚の金貨を取り出してそのうちの一人に手渡した。

するとたちまち笑顔になった一団はすんなりとテーブルを離れて店を後にする。

「どうぞ、席が空きましたわ」

その背中を目で追っていた宗司に、ナイルが語り掛けた。

声に応じて振り返り、笑みを崩さぬナイルに宗司は意地悪い嘲笑で応じた。

「僧にしては俗なやり口だな。ありがたい言葉とやらは使わんのかのう?」

「ふふつ、説法で語れる真理を悟らせるには時間も無ければ、殆どの人には学もない。このような場ではわかりやすい対価が一番楽ですし……私は、貴方とゆっくりとお話出来る場所が早く欲しかった」

「おや? 感謝の席だと聞いたのだがな」

「言葉の綾です。感謝の気持ちも当然ながらありますよ」

それこそ信じられないがな。

宗司は内心でそうぼやきつつ、ナイルの対面の椅子に腰かけた。

「では改めて……先程はありがとうございました。おかげ様で悪漢に乱暴されなくてすみましたよ」

「そういうのは止めろ。まったく、分かりやすい殺気をぶつけたのは、お主も俺がそれなりだと悟ったからだろう?」

「……ええ。貴方がこの街に訪れたのを見ていましたから。とても大きく綺麗な女性の肩に乗っていたので、とても目立っていましたよ」

「ああ、そういうことか」

いくら人ごみがあったとはいえ、クロナの肩に乗っていたとなれば目立っただろう。その時にこちらに目を付けたということか。

宗司がそう考えている間に、ナイルはさっさと注文を済ませていた。

「こちらで適当に決めましたが、よろしかったですか?」

「すまぬな」



「お気になさらず、何か考えている様子でしたから……さておき、今更  
誤魔化す必要も無いので言いますけれど、私はある目的のためこの街  
に訪れました。その時、偶然見つけた貴方に惹かれて、本日はこうし  
て一芝居打ったというところですよ」

「単刀直入だな。だがお主の目的とやらを置いてこうして道草を  
食ってよかったのか？」

「そこはお気になさらず。そう、私の目的は既に達成されましたから  
「何？」

訝しげにナイルを見据える宗司は、どうということだと問いかけよう  
と口を開き、それよりも早くナイルは言葉を発していた。

「転移パスが使えない理由を、ご存じでしょうか？」

その瞬間、宗司が剣呑な雰囲気を感じた。

だがナイルはその刺すような気配に感じながら、笑みを崩すこと  
なく言葉を続ける。

「先日、といっても一週間は既に経過していますが、王都を襲った未曾  
有の大災害。原因は不明である、というのが巷の噂ですが、実際は既  
に調査は行われており、今回の事件は恐るべき魔術、あるいはスキル  
によって行われた犯行だとされています」

「それで？」

「私、犯行現場には先日訪れていまして。荒れ果てた大地を見ればそ  
こで戦争の如き何か起きたのはすぐに分かりました。そしてその  
ような惨状の跡に、簡素ながらお墓が幾つも作られている……となれ  
ば、その戦場を作り出した何かが生きている可能性は高いと私は判断  
しました」

吐き出される殺気は充満の一途を辿っている。沈黙を保ちながら、  
刀のように鋭利な殺気を放つ宗司と、笑顔からにじみ出る殺気を隠そ  
うともしないナイル。互いに殺気を制御して眼前の相手しか感づか  
ないように仕向けているが、両者間でぶつかり合う気配は流石に隠  
すことは出来ず、料理を届けた店員が得体のしれない気配を感じて顔  
を青ざめさせていた。

切っ掛けがあればすぐにでも両者の殺気は爆発する。

だが周囲の人間は巧妙に隠された殺気の正体を把握できず、只いきなり店内が冷たくなったような感じに首をかしげるばかりだ。

「もしも、生きていたなら、どうするつもりだ？」

宗司は既にいつでも抜刀出来るように刀の鯉口を切った。

返答によつては、斬る。

場所など関係ない。

むしろ、周りなどどうだっていい。

この距離ならば、俺は、斬る。

その、有無を言わさぬ鋼鉄の意志を前に、ナイルは一層笑みを深くし。

「素敵ですわ、ソオジさん」

その言葉を皮切りに、二人は互いの前に引かれた死線を踏み越える。

二人の達人による踏み込みの衝撃で天井高くテーブルが飛び上る中、互いが自慢とする必殺を解き放つ。

音を裂く刃。

音を貫く拳。

そして、ナイルの小さな拳は、その見た目に似合わぬ速度と力をもつて宗司の顔面に炸裂する。

躲す余裕などなかった。

予想以上。

あるいは、予想通り。

だからこそ、同時に振りぬいた刃がナイルの胴を真っ二つにした手ごたえに宗司は歓喜する。

ナイルも同じく歓喜の笑みを浮かべながら、裂かれた腹より溢れた臓物と血潮を床にぶちまけ、宗司も弾けた脳漿を四方八方にまき散らした。

——ここに、必殺の応手は結実する。

それはあまりにも呆気なく、だが何よりも壮絶な死闘の結果。

宗司とナイル、この戦いは両者の想像通りに絶命という形で決するのであった。

——そんな妄想はここまでにして。

「……では、乾杯といくか」

「ええ、そうですね」

互いが思い描いた夢を言葉にせずとも共有して、今は手にしたグラスを合わせる。

「けどいつか。」

「ここではない、何処かで、ね？」

「うむ。遠くない今に向けて」

「いずれ斬る。」

「乾杯」

言霊ごと、グラスの中身を二人は飲み干した。

### 第十三話 『異教徒を、正す』

——まあ、こんなものかの。

グツと一息でグラスの中身を呑み終えた宗司は、同じく対面で酒を飲み干したナイルへ気楽な笑みを浮かべた。

互いにテーブルを挟んだ間合いで、僅かだが隣で観察したナイルの実力を考えられる最悪を想定した場合の決着の形。両者即死で終わるだろうなあと考えている宗司は、粘性を帯びた濁流の如き殺気を叩きつけてくるナイルの全身を改めて観察する。

まあ想像するのはただだからいいだろう。何せ相手は極上の極上なのだ。宗司は不敵に笑うナイルを見てそう思った。

露出している外見に騙されがちだが、ほぼ全身を包む修道服の内側は鍛え上げられており、単純な身体能力だけならば宗司を遥かに凌ぐことだろう。

女神のような笑みを浮かべながら、文字通り指先一つで生物を抹殺出来るナイルの力を感じて、宗司は沸き上がる歓喜を抑えるのに苦労した。

さて、どう出るべきか。

戦うか、戦わぬか。

今はまだとそう告げたが。

しかして相手は二度と出会えぬかもしれない極上の強者。

今はまだ、だと？

いや、戦った方が楽しいだろう。

後はまあ、なるようになればいい。

全身を包むナイルの殺気に呼応して、宗司は邪悪に笑みを象る。そして、最早この場に人が居ることも忘れ、腰の刀に手を伸ばし——。

「やだ、濡れちゃった」

火照った頬の熱を冷ますようにナイルは唇から熱い吐息を漏らし、情欲に塗れた視線を宗司へと向けた。

「あ？」

殺意から一転、男女問わずに劣情を誘うようなナイルの仕草と視線の熱さに宗司が目を丸くさせる。

そうしている間に、ナイルは吐息を荒げ頬を紅潮させ、歓喜で震える己の身体を両腕で抱き締めて必至に抑え込んでいた。

目には色に狂った情婦の如き熱がこもっており、見つめられるだけでそのまましゃぶりつきたくなるような眼差しが宗司に向けられた。

直接向けられていないにも関わらず、男女問わずに周囲の人間が魅せられる程の色香。

それを冷静に見抜いた宗司は、だからこそ混乱のあまり己が目を疑った。

——こいつ、もしや……。

「ここで発情……!?!」

色んな意味で戦慄する宗司の言葉を受けて、とうとう体を抑えることが出来なくなったナイルが、口から唾液を滴らせながら欲望をぶちまけた。

「いい！ 素晴らしい！ 何て素敵なのでしょう！ ふふふ、やはり貴方は私が思っていた通りの逸材でした。惜しむとすれば想像していた美しき乙女ではなく男であったことでしょうが、まあこの際貴方が連れてきた雄々しい乙女と可憐な乙女が居るので問題はないでしょうし、貴方もよく見れば線が細く女性的な雰囲気があるとさえするので見方を変えればまるで！ まるで、問題がない！」

「お、おい？」

「何より、貴方から放たれる殺気の美しさ！ まるで処女の血が如く芳醇な香り！ 絶妙なスメルう！ ふふふ、あまりにも香るものだから、不覚にも股ぐらがちよつと濡れてしまいましたでしたが全くどうしてくれるんですかね、んふふふ、うふふふふー！」

「お……おう、それはすまぬ」

何だ。

何だ、これは。

毒気を抜かれたというよりも、別な毒気で上書きされたと言ったほ

うがいいか。周囲の者は男女問わずに扇情的に頬を染めて吐息熱く興奮しているナイルを見て頬を染めているが、宗司からすればただの変態の痴態を見せられて困っていた。

若干、その姿に引いていた。

何せ、殺気を浴びて喜悦を出すどころか、性的興奮を覚えて発情して、しかも勝手に突き抜けているのである。

白状すると、ドン引きであった。

「いえいえ、お気になさらず！　しかし思った通り、いや、思った以上の混沌と出会えたこの奇跡！　やはり我が偉大なる神、黒の英知、無貌の三つ目たるにやるの導きに感謝せねば！」

だが目を爛々と輝かせ、手を組んで祈りを捧げるナイルは宗司の評価などまるで気付いていない。興奮のあまり周囲の目もお構いなしと言った様子だ。

「……まあ、見ていて飽きぬがな」

どうやら、珍妙な女子に俺は縁があるらしい。

飽きることなく延々とやると呼ばれる神の名を呼び、祈り続けるナイルの姿を見ながら、宗司は運ばれてきた料理を食べ始めるのであった。

「にやるよ！　貴方の導きにこのナイル、感謝感激であります！」

「つたく、せめてうるさいのは……む、本当に美味しいな」

どうやら、長い休日になりそうだ。

一人、盛り上がるナイルを出来るだけ視界に入れないように心がけながら、宗司はそんなことを思っただけ小さく溜息をつくのであった。

当然と言うべきか、白昼堂々と痴態を晒したナイルのせいで料理に集中できるはずも無く、宗司はさっさと料理を食べ終えると、己の痴態に羞恥で顔を染めて俯いたまま黙り込んでいたナイルを連れて、逃げるように外へと出て行った。

「すみません……」

「いや……」

「でも、ソオジさんが魅力的なものもいけないのですからね？ あれ程濃厚な殺気を受けて興奮しない女の子なんていないのですから」

殺気で発情する女はいないし、そもそもお主は女の子などという可愛らしい存在でも、年齢でもないだろうが。

ナイルのぼやきにそう突っ込みを入れようとして、喉元まで出てきた言葉を無理矢理飲み干す。

「……ともかく、おかげでろくに話が出来なかったのだ。やるにしろ、話すにしろ、どうやら俺とお主では人が多いところはいけぬらしいな」

「では、一度街の外に出ましようか？ 食べられなかった食事の方は露店で買って、お外で食べればよいですし。ふふ、今日は良い天気ですから、日の下で食事をとるのも一興です」

「まっ、その意見には同感だな。食えなかったのはお主の責任だが」

「意外に根に持つほうですか？」

「罪の在処を明確にしてるだけだよ」

話が決めれば行動は迅速に。

目についた露店で適当な物を幾つか購入した二人は、そのままラインの大通りを抜けて脇道より奥へと入っていった。

先程は日の下で食べるのもいいだろうと言いながら、入ったのは日が届かない路地裏というのに些か思うところもあるが、先頭を歩くナイルにいざなわれるがまま宗司はその背中を追っていく。

「さて、ここら辺でよろしいですかね」

立ち止まった二人が辿り着いたのは、細い路地を抜けた小さな広場だった。大通りの賑やかさとは裏腹に、そこは随分と前から人の手入れが入っていないのだろう。荒れ果てた状態で放置され、見渡せば幾人かの浮浪者が座り込んでいるのが見えた。

「光の指す闇、とでも言いましょうか。どんなに賑やかな街でも、光の届かぬ、いや、光が強ければ強い程、このような闇が浮き彫りになるというものです」

「お主としてはそんな現状が嘆かわしいとでも？」

「まさか」

宗司の野次にナイルは淡々と返事した。

「我が神の望むのが混沌ならば、光と闇の混ざったこの街は、まあ及第点をあげてもよいです。個人的にはもう少し殺伐としている方が好みなのですが……それも、ソオジさんのおかげで上手く導くことが出来るでしょう」

「俺のおかげとな……ああ、そういうことか」

「その後の発情で忘れていたが、そうなる直前に自分が王都を崩壊させた犯人だとナイルが当たりを付けていると言っていたことを宗司は思い出した。

「ええ、ですが私の予想は、結果は当たっているでしょうが、過程の部分は外れてしまいました」

「とうとうっ」

「当初、情報を仕入れ現地を見たときは、おそらく邪神の眷属になるとに憤った私の同胞がその力を利用してその場に居た者を虐殺し、次いでに力の全てを王都目掛けて放ったのではないかと思いました」

「それは酔狂だの」

「ですが、聖剣を所有する貴方を遠目で見かけた時、それは違うのだと確信しました」

ナイルは語りながら途中で購入した安物の布を広場の隅に綺麗に広げると、ゆっくりと腰を下ろした。

足を揃えて座るナイルの前に立つ宗司は、こちらを見上げてくるその瞳を真つ向から見返す。邪悪に淀んだ瞳が怪しく輝く様が、どのようなものでもないくらい宗司の闘争本能を擽った。

「ソオジさん、貴方、聖剣の勇者を下しましたね」

問いかけのようで、それは断言であった。

「ああ、俺が聖剣とやらを……正確には聖剣を使っている奴を斬り伏せた」

応じる宗司の方も躊躇うことなく素直に答える。

疑問は幾つかあるのは事実だ。

どうやって聖剣と自分の戦いを察したのか。そもそも聖剣の存在



を何故知っているのか。そしてどうやってこの短期間で自分達を発見出来たのか。

それら一切の疑問をあえて放置して、宗司は堂々と答えた。

そんな宗司の振舞に、ナイルは見惚れるくらいの笑顔で返した。

「ありがとうございます。自分で言うのも変な話ですが、私のような胡散臭い人間のお話に正直に答えてくれるとは思っていませんでした」

「気にするな。そもそも俺が聖剣を下したことも、その結果起きた惨劇のことも、別に隠すつもりなどなかったからな。勿論、むやみやたらと風潮するつもりもなかったが」

肩を竦めつつ、宗司もナイルの隣に座って、露店で買った串焼きの一つを取り出して頬張った。

塩だけの味付けだが中々に美味い。確か無駄に長い名前の肉だったよなあと記憶をたどっていると、隣のナイルが肩を震わして笑みを堪えていた。

「何か可笑しいかの？」

「そういうわけではないですが……ふふ、まあこの話は置いておきましょう。それよりも、いつまでも公平ではないのは失礼ですし、どうして貴方という答えに私が辿り着いたのか、そのことについて話しましょう」

ナイルはそう言うと、おもむろに己の胸に掌を乗せた。

「むっ?」

宗司は胸に乗せられたナイルの掌から淡い輝きが漏れ出した。

それは徐々に輝きを増していき、目を細める程の輝きになった時、ナイルはその光を掴みとって一気に引き抜いた。

「おお」

奇術を見た時のような驚きに目を丸くする宗司の視線は、頭上に掲げられたナイルの掌に握られている一本の槍へ注がれた。

美しい金色の紋様が刻まれた白色の槍は、その矛先まで純白だ。穢れなきその槍は、平服したくなるような神々しさすら感じる。現に広場にいた浮浪者の全員が、遠目からでもわかる槍の美しさに言葉を失

い、静かに頭を垂れている。

「聖槍ジムと言います。ソオジさんが持つ冗談みたいな名前の聖剣、チートを律するために我が神が私を呼ぶための媒体として遣わした聖遺物です」

「……ちいとを律する？」

「はい。細かい説明は省きますが、このジムはチートの在る場所を即座に見つけ、さらにはチートの機能を外部から完全に掌握、そして所有者から使用権限をなく奪することが出来ます」

「ややこしいのお」

「つまり、貴方の持つ聖剣の力はこのジムの前では無力ということですよ」

「そうか、それは凄い」

「あまり驚かないのですね」

「まあ、便利ではあるが、移動手段としては便利過ぎて使う気になれんし、傷薬には無駄にでかくてかさばる。そもそも、あれを持つと俺が俺では無くなるようで好きではないのだ……今のお主みたいに」

「……気付いていましたか」

宗司の指摘を受けてナイルは肩を竦めると、召喚したジムをゴミでも放るように虚空へ投げ捨てた。

そのまま地面に落下するように見えたジムは、淡い光に包まれると地面に触れるより早く粒子となって消え去る。その残光を目で追いながら、ナイルはつまらなそうに唇をすぼめた。

「我が神も、気まぐれが過ぎるといふものです。貴方の言う通り、移動手段としてや治療代わりとしては最適ですが……弱くなるのが唯一の難点でしょうか。いえ、それもまた偉大なるにやるの命であればこそ納得は出来ませんが」

そう言いつつも内心の不満はあるのだろう。あからさまに不機嫌な様子を見せるナイルの横顔を見て、宗司は小さく口許を緩めた。

「つたく、仏のように見せかけて、一転して殺人鬼かと思えば色魔と来て、そして今は童の如き振舞を見せる。果たしてどれがお主の本質な

のかの」

「そんなの、どれも私ですわ」

「どれも本質だと?」

「我が神と同じく、私も無数の貌を持つています。まあ、女性なんて殆ど全員幾つもの貌を持つているものでしょうが……」

子どもが拗ねたような様子から一転、仮面を付け替えるように笑みを浮かべたナイルは、下から覗きこむように宗司の顔を見た。

「むしろ私は、貴方の本質の方が気になります」

「お主程楽しいものではないよ」

「ですが、ここでは珍しい服装に剣を携えていますよね……まるで、この世界の人間には思えないくらいに」

「ないる殿?」

「ねえソオジさん。貴方は、魔術を使えますか?」

意味深なナイルの言葉に宗司が眉をひそめるのも束の間、ナイルが矢継ぎ早に重ねた言葉に宗司は苦笑した。

「生憎と、俺は魔術とやらの縁がない生活をしていてな。出来ることは棒振り程度の寂しい男よ……だが、これで負けるつもりはないがな」

別に隠すことでもないだろう。含みを持たせたナイルの言葉に素直な答えを返した。

己を卑下するようで、宗司の言葉には自信が満ち溢れている。重ねた修羅場の数で得られた力を疑うこともしないその言葉と、曇りなき瞳。

「本当に、意地悪な人」

その素直さに何を思ったのか、笑みをより深くしたナイルは体ごと宗司のほうへと詰め寄った。

互いの瞳に反射する己の顔が分かる程の至近距離。少しでも詰めれば口づけが出来そうだが、宗司は一切動じることなく、小首を傾げて甘く熱い吐息を漏らすナイルを見た。

「お主、やはり本質は色情魔か何かか?」

「いいえ……いや、そうですね」

「ん？」

「先程はああ言いましたが……ええ、私の本質はきつと只一つ。混沌の戒律ですら制御しきれない——」

その言葉の続きを告げる直前、宗司とナイルは示し合わせたようにその場から飛び退いと、二人の居た場所に錆びついた剣が振り下ろされた。

見れば、先程からこちらを遠巻きに見ていた浮浪者の一人が血走った眼差しで宗司とナイルを見つめている。

「どうやら長く話しすぎたみたいですね」

「というよりも、でかい餌を見せびらかしたせいだろうよ」

広場の中央まで引いた二人は背中合わせに立つと、周囲に目を走らせた。

「クソ！ 絶対に逃がすんじゃないぞ！」

「わ、悪く思うなよ。金目の物を見せびらかすお前らが悪いんだ」

「へへ、お、女、柔らかそうな、女だ……！」

その周囲を取り囲むのは浮浪者の群れだ。どうやら周りから金の匂いでも嗅ぎつけたのか、当初居た人数よりも数が随分と増えている。そしてそれぞれがただの木材から先程のように錆びついた片手剣、木の先端に石を付けた即席の槍などなど、多種多様の武器をもって宗司達に狙いを定めていた。

見慣れぬ服装と剣、刀を持つ宗司と、絶世の美女であり聖槍ジムという素人でもわかる程希少な武器を持つナイル。浮浪者から見ればまさに鴨が葱を背負って来たように見えたことだろう。

だが、その考えは誤りだ。

「興は乗らんが……火の粉とあれば払うまでだな」

目先の欲に目が眩み戦力差を理解出来ない浮浪者と言えど、戦うつもりであれば宗司は一切の容赦をしない。

さっさと斬り捨ててしまおうか。

周囲を見渡し、一瞬で決着するだろうと判断した宗司は静かに刀へと手をかけて、その手にナイルの掌が重ねられた。

「ないる殿？」

「混沌とはつまり公平で平等ということでもあります」

宗司の動きを制したナイルは、振り向きざまに宗司へと笑いかけて一歩踏み出した。

瞬間、ナイルを中心にして発生した冷気の如き殺気に反応した浮浪者達が、本能的にナイルを中心とした円陣を組む。

「今日は私ばかりがソオジさんのことを聞きすぎました」

宗司はナイルからみなぎる殺気が、浮浪者が絶望的な戦力差に気付かぬ程度に抑えられていることに瞬時に気付く。そんな宗司の視線に背筋を震わせながら、ナイルは友を抱きしめるかのようにその両手を広げた。

「ならばその分、ソオジさんには私のことを知ってもらう必要があるのです！」

「……いや、まあ結構アレなところまで知ったというか知らされたというか——」

「あるのです！」

「お、おう」

有無を言わさぬナイルの言葉に、宗司は何を言っても無駄かと悟って数歩分距離をとった。

「では、俺が教えた分のお主を……見せてもらうよ、ないる殿」

「ええ、たつぷりと——」

「いただきますいいい！」

ナイルが言い終わる前に、宗司の背後に居た浮浪者の一人が宗司目掛けて飛び出した。

落ちぶれても異世界の住人とも言うべきか。強化の魔術が使えなくとも、宗司が居た世界の間人よりも数段高い身体能力の疾走はそれなりの速度だ。

だが宗司は振り返るところか指一本すら動かさない。

その視線は真っ直ぐに。

一瞬にして邪悪に歪んだ表情を浮かべるナイルへと向けられていた。

そして、惨劇は始まる。

「ぐい!?!」

「たっぷりと、私を堪能してください」

いつの間にか宗司の隣まで踏み込んだナイルの右手が、木を削っただけの木刀を振りかざした状態で止まってしまった浮浪者の腹部に突き立っていた。

一体、どのような力が働いているというのか。手首まで深々と突き刺さった右手をナイルはおもむろにぐりぐりと回すと、何が起こったのか理解できていない浮浪者に笑みを一つ。

「貴方も、ね?」

一気に右手を引き抜けば、その手に握り締められた腸が勢いよく引きずり出された。

「うえ!?!」

「共に、神へ祈りを捧げましょう」

痛みよりも驚愕が先に来た浮浪者の見つめる先、空いている左手で木刀を弾いたナイルは、得物を手放したその両手に右手の腸を走らせて器用に拘束してみせた。

己の腸で拘束されているという事実を目をつむれば、胸の前で手を組むその姿はさながら、祈りの姿勢に見えるだろう。

だが当然、周囲の人間がその姿を見て思ったのは、人間という物体を使ったおぞましい造形物、悪魔への供物そのものであった。

「え、う、え? お、おれの、これ、おれの?」

「素晴らしい。とっても可愛いわ」

「おれのちようで、むすんでる?」

「そう、とっても素敵な腸結びね。では、神へ膝を折りなさい」

ナイルはそういうと、体を一切揺らすことなく右足で浮浪者の膝を薙ぎ払った。

すると、未だ当惑から抜け出せていない浮浪者の膝が本来なら折れない方向へと折れ曲がり、ナイルが言った通りに祈りを捧げる殉教者が『文字通り膝を折る姿勢となる』。

だがその時には事実を理解した浮浪者は、知覚した激痛に耐えかねて、この世の終わりを見たような表情を浮かべたまま絶命していた。

まさに悪魔の所業。一瞬にして人間が人間ではなくなる工程を見せつけられ、冷静でいられる人間など殆ど存在するわけがない。

唯一、冷静でいた宗司は、その一連の行動に魔術は一切使用されていないことを見抜いていた。その残酷性には眉をひそめるが、手慣れた様子で人間を『解体する』その手腕は、予想した通りの力をナイルが持っているのだと宗司に確信させた。

「……ああ、また一人、哀れな子羊に真実の信仰への気付きを与えることが出来ました。さあ先に神の御許に行き、混沌の壩で絶望と幸福に酔いしれなさい」

ナイルは悶死した浮浪者の顔を見て恍惚としていた。心の底から自分が素晴らしいことをしたのだと信じて疑わないその瞳こそ、狂信者たるものの証。

無数とある貌の中、唯一無二の真実。  
黒を信仰する混沌の使徒よ。

「ひ、あ」

「う、ううう」

「なんだよ……なんだよこれえ!?!」

その全てを見て、ようやく浮浪者達の濁った眼もナイルという規格外の持つ狂気と、それに見合った破格の力を理解した。

だがしかし、気付いた時にはもう遅い。

ぎよろりと周囲を見つめたナイルの視線。そこに込められた邪悪な殺気によって、彼らの足は地面と一体化したかのように動かなくなってしまうた。

最早、彼らに出来ることはただ一つ。

神へ救いを求めることだけ。

「助けて、クトゥア様……」

この地獄から我らを救いたまえ。

その場に居た誰もが抱いている祈りを代弁した一言が、ナイルの耳を打った。

「あ?」

瞬間、ナイルの顔から笑みが失われる。

宗司と共に居た間に見せていた笑顔はそこにはなかった。

「今、何て言った？」

あるのは純然たる殺意のみ。

その殺気によって、金縛りで動けないはずだった浮浪者達の全身が恐怖によつて震えだした。

笑顔の仮面は剥がれ、そこから覗きこむのは混沌とした殺意。

その殺意を見た宗司だけが、その場で唯一歪なまでの笑みを浮かべていた。

「クトゥア？ 何ですかそれ、違うでしょそれ、ありえないでしょそれ。今この場に在るのは邪神などへの信仰ではなく、混沌を是とする唯一無二の神、黒の英知にやるですよ？ そんなのも分からないのですか？ そんなことも理解していませんか？ ふざけるな、ふざけるなふざけるなよ！ 優しくしてやれば付けあがつてえ！ 汚い見た目通りに脳髓から精子の一粒まで腐りきった異教徒だとおお!?」

殺意に飲まれたナイルは髪を振り乱して絶叫する。その姿は絶世の美女であることを考慮しても、見るに堪えぬ気持ち悪さと邪悪に満ち満ちていた。

「優しく逝けると思うなよ異教徒共！ お前達に与えられるのは恐怖と苦痛を超越した究極の邪だ！ 我が神の怒りを思い知れ！ 我が神へ行った侮辱を後悔しろ！ お前らは大いなる黒に抱かれるまでもなく！ 我が手によつて人類としての尊厳を徹底的に奪い去り！死ぬことが人生最大の幸福だったと思えるような地獄を直接味わせてあげるからさああああ！」

瞳孔の開ききつた眼をぎよろぎよろと周囲に向けながら、憤怒の限りを込めた二つの拳を強く形作る。

地獄ですら生温い。

異教徒に与えるのは、死も許さない最悪のみ。

だがそれも束の間、突如動きを止めたナイルは、晴れやかな笑顔を浮かべて空を仰いだ。その瞳は何もない虚空に向けられている。

しかし、ナイルの瞳は確かにその姿を捉えていた。



「お！ おお！ なんとという、なんとという慈悲！ ええ！ ええ！ 分かります！ 分かりますよお！ 救いを与えるのですね！ 真なる救済を授けるのですね！ 慈悲！ これが混沌の慈悲！ 今、私の頭に直接、我が神が貴方達を救済せよとお告げを！ おお！ おおおお！ 来た来た来た来た来た来たああああ！」

声高らかに叫ぶナイルは既に正気ではない。

これこそ混沌。人間が持つ根源の最悪であり、そして、只人では自覚することも出来ぬ異常の在り方。

信仰という狂気。

その混沌を、神の代行とする修羅外道よ。

「神が今！ 私に語り掛けてくれました！」

ナイル・アジフ。

混沌を信仰する、恐るべき狂信者による小さなミサは開かれる。

「私のこの手で！ 貴方達を救ってみせよと！ 神があああああ！ 言っているううううう！」

救いという名の一方的な殺戮は、哀れなる子羊達がその手によつて食らいつくされ、その断末魔が途絶えるまで続く。

そして地獄が始まった。

人間が解体されていく。

「ひい！ く、来るなああああ？!!」

「静粛に。ただ、祈りなさい」

まず動けなくなった男に歩み寄ったナイルは、先程と同じく浮浪者の腹から幾つかの臓腑を奪った。その異常に絶叫をあげようとした口に彼の臓腑を突っ込んで口を抑える。

「うわああああ!!」

「ふふ、元気ですね。ええ、骨も太くて意外に健康みたい」

そして続いて逃げ出そうとした男が突如倒れた。どういふことかと振り返った男は、笑顔を浮かべるナイルの手に掴まれたいくつかの白い骨と、ぐにやぐにやになった自分の両手両足を見て絶望の表情を浮かべた。

「あひひ、夢だ。これは夢に違いない。ふへ、へへへへ」

その光景を見た男の一人が表情を歪めて狂ったように笑いだした。だがナイルは安易な発狂を許さない。悶えるだけの二人は放置し、そのこめかみをゾプリと指で貫いた。

「あひやひや、ひひやひや——痛い痛い!!?? た、たすけてええええ!!??」

「駄目ですよ。ちゃあんと神へ祈らないと、ね?」

懇願などは届かない。

救いなども存在しない。

狂っても正気に戻される。

あるのは只一つの現実のみ。

ナイル・アジフが飽きるまで玩具とされる最悪の現実。

「さあ救済に抱かれなさい! 我が神は、貴方達の絶叫を供物として受け入れると決めました! つまりいいいい!!」

——永遠に死に続けろよ、異教徒共。

絶叫は続く。

死を乞うても許されない。

路地裏の広場は今、狂信者を主役とした狂気の舞台へと変わったのだった。

## 第十四話 『いざ、山登り』

「とまあそういう流れで、今日よりこいつも共に行動することになった」

チンピラに絡まれていた修道女とご飯を食べに行ったら発情されて、場所を移して浮浪者を葬りました。

「まあ、分かっていたというか……うん、知ってた」

話を聞いても特に驚くことも無ければ、ちよつとだけ納得している自分に言いようのないやるせなさを覚える。だが一々驚くのも阿保らしいので、宗司の先日の行動を簡潔に聞いたクロナは、疲労混じりの溜息を吐き出すだけに終わった。

「初めまして。私はナイル・アジフ。偉大なるにやるに仕える者です」

「……私はクロナ・クロルキスだ。こちらこそ、よろしく頼むアジフ。」  
自由行動の翌日、宗司が昨日言っていた通り、朝早くから街の入り口で集まったクロナは、遅れてやってきた宗司の隣に立つ美貌の修道女、ナイル・アジフを見てそう呟いた。

見た目はまるで問題ない。いや、絶世の美女であるというのはそれだけで驚きであり、異世界が産んだ人斬りマシンである宗司が連れてくるというのはそれだけで異常と言えば異常である。

しかしクロナの武芸者としての長年の勘は、この女性——ナイル・アジフが見た通りの只の美女ではないと警告を発していた。

だがそんなクロナとは対照的に、メイルは警戒心などまるで見せず  
にナイルに近寄って会釈した。

「初めましてアジフさん！ 私、メイル・リンクキャットって言います  
！」

「これはごく丁寧にどうもありがとうございます。さて……」

笑顔のメイルと未だ警戒の強いクロナを見比べて、ナイルは恭しく  
一礼を返す。

「かしこまらずに、私のことはナイルで良いですよお二方。その代わり  
というのも失礼でしょうが、私もメイルちゃん、クロナさんと呼び

ますから」

「えへへー、ちゃん付けで呼ばれるの初めてです」

「そうなのかしら？ うふふ、嬉しいわ。メールちゃんの初めて、私が貰ったのね。ちよつと申し訳ないくらい」

「そんなことないですよー。アジフ……ナイルさんみたいな人にそう呼ばれると、お姉ちゃんが出来たみたいで嬉しいです」

「うふふ、でしたら私のことはナイルお姉ちゃんと呼んでも構わないのですよ？」

「えへへ、でもそう言われちゃうとちよつと恥ずかしいです」

「そう？ 恥ずかしさなんて気にすることなんてないのに。そうだわ！ 折角知り合えたのですし、今夜はクロナさんも誘って三人でねっちよりぐつちより、共に混沌の渦へ……ふふふ、くひ、ふふふ」

「どうかしました？」

「どうにかしそうなだけだから心配しないで。うふふ……くひ」

だんだんと危ない方向に二人の会話は進んでいく。だがナイルの毒牙に全く気付かないメイルは、意味深な笑みを浮かべるナイルの顔を見て首をかしげるばかりだ。

というか、さりげなく私にまでアプローチかけてこないでくれないかなあ。

すんなりと打ち解けあつたメイルとナイルから一步離れたところで、クロナはちらちらとこちらを伺うナイルに愛想笑いを浮かべながら、宗司の隣に立った。

「で？」

「言つたろ？ 飯食つて少しばかり武を見せ合つて意気投合したと」

「短い、詳しく話せ」

「阿吽とはいかんかの？」

「ああ？」

「……うん、分かつた分かつた。ちゃんと話す。だからそう怖い顔するな」

真上からぎよろりと目を剥いて宗司を見下ろすクロナの威圧感に押されたわけではないが、いい加減我儘が過ぎているのは何となくわ

かっている宗司だったので、肩を竦めつつも昨日のことについて話し始めた。

「別に先程語ったことに付け足すことは殆どないぞ？ あの気性故、少々面倒な女子だが、根っこの部分で意気投合してな。あれよあれよと酒と飯が進み、気付けば一晩ともにすごしたというわけだ。ああ、無論色のある話ではないぞ？」

「それは分かった。でもどうして彼女が私達の旅に同伴するような空気になるっているんだい？」

「ああ単純な話でな。ないる殿は聖剣の存在を感じて俺達を追っていらしい」

さりげなく言った宗司の言葉だが、聖剣の存在を知っているという言葉はクロナには聞き捨てならないことであつた。

「何？ では、王国側の追手ということなのか？」

「いえ、それは誤解があります」

いつの間にかメイを胸元に抱きかかえたナイルが、警戒心をさらに強めるクロナと、のほほんとした宗司の間に割って入ってきた。その体から滲み出る雰囲気は決して温和なものではなく、見る者が震え上がるような歪んだ喜悦を湛えている。

「私は王国側の追手として断罪しに来たのではなく、むしろソオジ様が行った悪行を称えに来たのですよ」

「悪行を、称えに、だと？」

「ええ、だって……この国は、平和すぎますわ」

そう言つて笑うナイルの目に真正面から見据えられたクロナは、全身から溢れだす冷や汗を止められなかった。

彼女はあくまで自然体だ。だが笑みの種類を全く変えることなく、纏う空気を変質させるだけで印象を真逆にさせるナイルのそれは、クロナをして怖気を感じずにはいられなかった。

「何、を……」

「何て平和なのかしら。これではおかしいと思いませんか？ ええ、きつとおかしいです。だって世界の全ては混沌のままに。我が神は平和もましてや惨劇だけの世界も認めない。善悪合わさり混沌とし

た世界。善性の停滞も悪行の停滞もいらぬ。常に人を渦巻く善悪の混沌こそ我が教義我が使命。おお偉大なる神黒の英知真なる混沌無貌の君、全てはにやるの望むがまま我が身命はひたすら黒に、神よ、神よ、偉大なる神よ！」

「こいつ、は……」

瞳だけをぎよろぎよろと動かしつつ、別人になったかのように何かを口走るナイルの目は既にクロナを見ていない。

それは最早、敬虔な信者の姿とは程遠い。

盲信。

否、狂信。

神に仕える、それだけの化け物がそこには立っていた。

「な？　面白いだろ」

戦慄するクロナを軽く小突いて、宗司はナイルの奇行を見ながら喉を鳴らした。

「……成程、君と意気投合するわけだ」

メイルを抱きしめてぶつぶつと狂ったように何事かを呟くナイルの姿は、あまり言葉を重ねない宗司とは違ったように見える。

だが、宗司が言ったようにこの二人は根っこが似ているのだ。その一片を垣間見て、恐怖を覚えるのは人間らしい感情だろう。

少なくとも自分はナイルの奇行を笑って見ていられる宗司や、ナイルの胸元でむず痒そうにしているだけのメイルのようにはなれない。

だからこそ、自分はこの連中と共に居るべきなのかもしれない。ぼんやりとはしているが、覚悟とも取れる何かをクロナが胸に刻んでいると、正気を取り戻したナイルが軽く両手を合わせた。

「さて、ご挨拶もお済になったところで早速行くとしましょう！」

「そのことだが……ナイルはこれから私達が行く場所について知っているのか？」

「ええ、確かここよりさらに北の樹海を越えて、そこに廃棄されているという転移パスを使用するのですよね？　先日、ソオジさんから明日の予定は聞いておきました」

「そういうことだ。安心しろくろな殿」

「……うん、そうした説明をどうして私の時だけ省くのかは気になるけど、それならいいんだ」

それを信頼と取るか。単純に面倒くさいと思っただけなのか。きつと後者だろう。

それでも今後のことを思えば、宗司の大雑把なところについては色々話し合うべきだろう。恨みがましい視線を宗司に向けるが、やはり全く動じることのない背中を見て、クロナは投げやり気味に肩がっくりと落とすのであった。

メビウス王国と他国を隔てる、雲を貫く巨大な山脈、アポロン。人の手が殆ど入っていないこの巨大山脈には、依然の魔王復活の際に放たれた魔獣の子孫が無数と存在している。さらに尤も小さなもので全長五千メートルを超える山の過酷な環境は、放たれた魔獣を長い年月を経させて進化させており、一般人は知らないことだが、危険な魔獣だと現在人間界に進行している魔族の力を超える個体も存在する。

当然、全体的な能力の平均も高く、アポロン山脈に居る魔獣を適当に一匹連れてくるだけで、鍛えられた兵士の一個小隊を容易く葬れる程だ。

それほど危険な魔獣が多数存在しながら、何故これまで周辺国家への被害が報告されてこなかった理由は大きく分けて二つある。

まずはメビウス王国の外、アポロン山脈の北方にある国家群だが、こちらは単純にアポロン山脈と北の国家群の間の大地の実りが少ないということにある。それでも数年に一度はアポロン山脈より魔獣が下りてくるがあり、その都度、異変を察した国が兵士を派遣することで対処していた。

それも生存競争に敗北し、仕方なく北方に下りた魔獣なので、戦闘力などはアポロン山脈内でも下の方にあたる。だがそれでも毎回多数の負傷者や死者が出ている。数年に一度とはいえ危険な任務であり、現在、魔王復活による魔族の進行のせいもあってか、アポロン山

脈より下りてくる魔獣は頭の痛い悩みであった。

だがそれでも北の国家群は楽なほうであることを知っている人間はそう多くない。大多数はメビウス王国側には魔獣が下りてきていないと考えているのだが、実際はまるで違うものだ。

アポロン山脈の恐ろしい魔獣は、北とは違い年に幾度もメビウス王国側に降りてきている。

その最たる理由が、広大な大樹海、ガイアであった。

過酷な環境出るアポロン山脈とは違い、豊富な自然に満ち溢れており、魔獣達はその自然を食って生きているのだ。

その中には当然、さらなる食料を求めて南下してくる個体も少なくはない。しかし、メビウス王国にはこれまで、魔獣による甚大なる被害が起きたという報告は一切無かった。

何故なら、南下してくる魔獣は、それがどんなに強くあろうとも、決してある一定のラインを超えたことが無いからだ。

ガイア大樹海。アポロン山脈とメビウス王国を分けるようにして広がっているこの樹海にて、魔獣の進軍を人知れず阻止している者達。

それが、商人達が蛮族として恐れる森の守護者。古の時代、メビウス王国と盟約を交わした原住民族カリス。

前回の魔王戦争より今に至るまで、大樹海に入ってきた人間を問答無用で葬ってきた彼らの正体を知る者は少ない。何せ、カリスという部族名すら、知っている人間は殆ど居ないくらいなのだ。

謎に包まれた部族、カリス。だが、彼らが居るからこそ魔獣の脅威からメビウス王国は今日までの平和を保つことが出来ていた。

つまり、メビウス王国が魔獣の被害を受けない理由は単純明快。

圧倒的な力を誇るアポロン山脈の魔獣も、彼らにとっては狩猟対象でしかないということに他ならない。

魔族に匹敵する力を誇る魔獣を狩猟して生きている戦闘民族達。宗司達が今から行く場所とは、そんな恐ろしい者や魔獣が大量にいる危険な場所なのである。

だがその最悪な事実を、箱入り娘であったメイルや、そもそもメビ



ウス王国とは無縁だったクロナ、何より異世界から来たばかりの宗司とナイルがそこまで深く知っているわけがなかった。

「しかし、らいんを出たらすぐにも大樹海とやらが見えると思っておったのだが、そうでもないのだな」

ラインの街を出て暫く、既に街の影すら見えなくなってきた宗司は、街を出てからずっと見えていたアポロン山脈の威容を眺めながらそんなことを呟いた。

一応道は整備されているものの、ラインから大樹海を繋ぐ道はこれまで歩いてきた道に比べて随分と酷いものだ。時折道そのものが緑に飲まれて消えている部分もあり、今歩いているところも殆ど獣道に近い。

「これでも大樹海とやらではないのだろうか?」

宗司の何度目になるかわからない質問にメイルは取り出した地図を見ながら頷いた。

「地図的にも距離はまだありますし、屋敷の授業で見せてもらった大樹海の写真ともここら辺の光景は違いますから、まだだと思えますよ。ここはまだ大樹海手前の小さな丘が幾つも在るコースですから」「先は長いということかの」

「そうでもないですよ。この調子なら夕刻には大樹海のところまで行けるはずですよ」

「やはり先は長いではないか……まあそういうことならのんびり行こう。お主も疲れたら遠慮なく言うのだぞ」

「分かりました、ソウジさん」

朝早くから街を出ていき、現在はまだ太陽が頂点にようやく来たところである。ここからさらに数時間以上もこの獣道を歩くかと思うと、放浪の旅をしてきた宗司でも若干辟易するというものである。

無論、それは他の二人にも言えたのか、言った本人であるメイルと、先頭を歩くクロナも精神的な疲労で肩を落としていた。

唯一旅の当初から変わらないのと言えば、列の最後尾を歩くナイルくらいのものである。

朝、四人分の暫くの食料を分配しようとしたところで、「勝手に付い

ていく私が全て持ちますよ」と彼女自ら提案し、問答無用で人数分の荷物を担いだナイルは、今に至るまで食料等の入ったリュックにその他小物を多数しまった皮の袋を幾つもぶら下げた状態で平然と歩いている。

強化魔術を使った一般人でも彼女が今担いでいる荷物を持ったまま同じ時間歩けば疲弊しても可笑しくはない程だ。だがナイルはまるで堪えた様子も無く、それどころか美しい旋律を紡いでいる始末。「元氣だなあお主は。疲れはせんのか？」

「ええ大丈夫です。とはいえ旅というのは初めてですからね、気付かぬ内に疲れているかもしれないかもしれませんが。特にこのような未開の土地は、私の居た場所では一部のところ位しかなかったものですし」

「ほお、旅をしたことが無かったのか？」

「巡教はありますけどね。それも基本は同志の運転する車や飛行機でしたし」

「車に、飛行機？ 何だそれは」

「ん？ ああ、すみません。ソオジさんも、貴女方も知らないことでしたか。まあ戯言と聞き流してください」

ナイルは愛想笑いを一つ。それ以上語るつもりはないのか、「ともかく私はとても楽しいのでお気づかないく」そう締めくくって再び歌を口ずさみ始めた。

中身はともかくとして、超一級品の美貌を誇る彼女の歌声もまた超一級品。周囲の自然に溶けるような声ながら、耳に入ってすんなりと染み込む美しい声。その響きを背中に受けながら、宗司は前を行くクロナの隣に立った。

「そう言えばお主、刀を新調したのだな？」

「あのさ、それよりも二人にしたように疲れたのか聞かないのかい？」  
「阿呆、お主の中で一番体は強いのだ、心配する意味がないだろ」

お前は何を言っているのだ。そう目で訴えてくる宗司にクロナは何度目になるかわからないやるせなさに肩を落とした。

だがクロナの複雑な乙女心など当然どうでもいい宗司は、その腰に携えられた新品の剣を軽く小突いた。

「ふむ、それなりに詰まっているようだな。中々、お主の背丈を考慮しても、強靱な物に違いない」

「ラインの街というよりも、メビウス王国の質の良さでも言うべきかな。以前の大剣よりも良い物が手に入ったよ。とはいえ、まだ手に慣れていないのでこれから暫くは素振りですらすさ」

「だったらどうだ？ 素振りもつまらぬだろうし、俺と一手軽くやらんか？」

「魅力的な提案だが、そんな時間があれば今はメイルに使ってやってくれ。彼女のここ暫くの成長ぶりは目を見張るが……まだメビウス王国の外に行くには不安が残る」

外とはつまり、魔族との戦争状態にある国家群のことだ。普通の整備された道でも、頻繁に魔獣の出現報告があり、常に周囲を警戒せねばいけないようなところでは、今のメイルは頼りないとクロナは思う。

勿論、宗司と自分、そして実力は未知数だが、宗司と意気投合するほどならば実力は申し分ないだろう。ナイルが居れば、余程の自体が無い限りメイルに危害が及ぶことは無いだろう。

いや、むしろこの男が居るからこそ危険であるとみるべきか。にやけた顔の裏側で何を考えているかわからない宗司を横目にクロナは考える。

そんなクロナの不安を払うように、宗司は朗らかに笑って返事をした。

「案ずるでない。そもそも、お主の不安はまるで見当違いだぞ？」

「どういうことだ？」

「どうもこうも、俺達は仲間ではない。俺にとってお主達がいずれ最高のところで斬る相手であるように、ないる殿は内心上手く隠しているが、いつ俺達を殺すかしつかり考えておる。お主もそうだ。お主のそれは仲間意識ではなく、単純に命を救われたことへの恩義によるものだ……でなければ、俺達のような気狂いにお主のような正道者が付き合うわけがない」

「……メイルはどうなんだい？ 彼女こそ、私達を仲間だと思ってい

るようだが？ 特に君に対しては師匠としての敬意を払っているように見える」

クロナは宗司に指摘された自分がここに居る理由には返事をせず、話を逸らすようにメールの話題を投げかけた。

宗司も意図的か、あるいは無意識に話を逸らしたクロナを特に追求するつもりは無かった。何れ馴れ合いの関係ではないと悟るだろうし、もしかしたらわかったうえであえて目を逸らしているだけかもしれないのだ。

ならば一先ずは、その生温い不安をまずは払うことにしよう。

「確かにめいるは俺に敬意を払っている。稽古をしているときも素直であり、俺の教えをしつかり身につけようと努力している。それは無論、お主に対してもめいるは同じことを思っているだろうよ」

「だったら……」

「昔話をしよう」

クロナの言葉を遮って、宗司は地べたに視線を向けて口を開いた。

「俺の数多く居た師匠のうちの一人の話だ」

「君の、師匠……」

「そうだ。とはいえ、殆どは技を盗んでその試し斬りでさっさと斬り捨てていたので、真の意味で師匠と言えるのは二人……その内の一人だ」

まるでその下にある深淵を覗きこむように、地べたに向けた視線は動かない。一瞬、宗司は後ろで歩いているメールとナイルの様子を伺った。

どうやら二人は仲好く談笑しているらしい。別に聞かれて困るといふわけではなかったが、今、この話をメールに聞かれるのも面倒だと宗司は思っていた。

「さて、どこから話したのか……その男と出会ったのは、俺が先生と呼んでいた師匠がそいつとの決闘に挑み……呆気なく殺された時のことだ」

今でも鮮明に思い出せる。

降り注ぐ雨に消えていく命の赤。

地べたに伏して死んだ男に涙を流して寄り添う己。  
そして――。

「光を飲み込む奈落の如き黒い瞳が印象的な、美しい吐しゃ物で練り上げられたような男だった。あるいは醜悪な美貌、あるいは汚らわしい宝石……飾る言葉はそんなものだった」

不意に口をついて出た言葉の矛盾にクロナは首を傾げた。

「つまり、汚いのに綺麗で、綺麗なのに汚い人間だということか？ 何だそれは」

「ああそうだ。何だそれはと言いたくなる……なんて様だと、俺は思ったよ。あんなにも不気味で、神々しくて、理解の彼方に居る存在が、同じ人間だという事実には怖くなった」

どの程度昔の話だかわからないが、クロナは宗司程の男が恐怖を覚えたという相手を想像して、それこそ復活した魔王なんて目でもない化け物ではないかと勝手に考えた。

だが即座に、その言葉に新たな疑問を覚える。

「人間？」

「ああ、人間だ。むしろ、アレ以上に人間らしい人間を見たことが無いくらい……どうしようもないくらい人間だったせいで気持ち悪い人間だったよ」

宗司の語る言葉をクロナはいまいち理解できていなかった。だが宗司も理解してもらおうとは思わなかったのか。それ以上疑問に対する答えを言わずに話を続けた。

「先生を殺したそいつに、俺はその場で呆気なく斬られるはずだった。だがまあ先生のおかげかは知らんが、運よく生かされた俺は、なし崩し的にその男と行動を共にすることにしたよ」

思えば奇妙な関係であったと思う。

師を殺された弟子が、殺した相手を師と仰ぎ。

師を殺した男が、その弟子を己の弟子とする。

「ともかく、俺は強くなりたかった。先生を殺された怒りもあったのだろう。強くなって、強くなって、いつかこの男を斬って捨てるのだと、その想いを喜怒哀楽を浮かべる顔の裏側にしまい込んで日々を過

「ごしたよ……結局、一年程共に居て、いつの間にか別れてしまったがな」

「……」

「今のめいるはあの時の俺と同じだ。確かに賊を一人斬って怒りは収まっただろう。だが無力を嘆いた。強さを欲した。原因はどうあれ、その果てに強さを追い求める形へ至った。ならば、自覚してるかは知らんが、あいつはいつかその日が来れば、躊躇なく俺やお主に挑み、その刃で斬り伏せようとするだろう」

強くなる。

明確な理由はどうあれ、その思いは根っこに宿ったはずだ。ならばメールにとつて、宗司達は強くなるための餌でしかなく、必要無くなれば文字通り斬って捨てる。

それが分かかっていて、だからこそ楽しいのだが。宗司はその日を通して内心ほくそ笑んだ。だが心境穏やかでないクロナは、どう返しているのか分からず、咄嗟に口を開いていた。

「と、ところでソージ。その、君の二人目の師匠とは結局どうなったんだい？ 別れた後は、見つけられたのか？」

「いや、見つけることは終ぞ叶わなかった。しかし俺の意志は変わらんよ。強くなって、いつか斬るのだと。もつとも、今の俺では一手届くかどうかといったところだろうがな」

出会ってからの一年。

たった一年だったが、斬撃と言う在り方に終わったその男を、宗司は今でも覚えている。

斬るのだと。

刀を片手に、それ以外興味ない、いや、全ての解答がそこに至るような男のことを。

「……君にそこまで言わせるとはね、余程高名な人だったのかな？」

「そうでもない。世間的にはむしろ、怪談の一つ程度にしか思われていなかったのではないか？ まああんな人間が居る事実等、怪談にでもして誤魔化さなければ話にならないという気持ちもわからんでもないが……俺も、結局奴の名前は知らないからな」

だが、あの男を指す名称は知っている。

なんて様だと恐れられたアレを、無限にある人間の可能性を極めた男を呼ぶとき、恐れを込めて告げられたその渾名を。

「修羅外道……」

「なんか言ったか？」

「いや……何でもないよ」

最早、この異世界の土地では意味の無いことだ。

宗司はそれを最後に会話を締めくくると、落とした視線を前に向けた。

ちょうど丘の頂上に辿り着いたのか。眼下には広大な森林がある。

ガイア大樹海。侵入者を必ず殺す、恐るべき蛮族が住処としているらしい未開の奥地。

今は、ここをどう抜けるかを考えよう。

宗司は唇を歪めながら、背筋を走る闘争の予感に身悶えするのであった。

## 第十五話 『貴女の後ろは、私が守るから』

メイルが言っていた通り、日が真っ赤に燃える頃には宗司達はガイア大樹海の前に辿り着いていた。

丘の上から見えた時は随分近くに感じたが、道の都合上何度も迂回することになり、時間がかかったというわけだ。

「やれやれと言ったところかの。ちと疲れてしまったわ」

肉体よりも精神的な疲労が積もったせいだろう。見えているのに辿り着かないストレスに宗司も含めてそれなりの疲労を一同は感じていた。

だが別に気にする程のことではないのは事実である。むしろ、ようやく目的地の前に辿り着いて、宗司は己の中の疲労が吹き飛んでいくのを感じていた。

大樹海という名に相応しく、入り口らしきところから広がる樹木は、そのどれもがクロナの背丈すら容易に超えている。そんな木々が所狭しと生えているのだから驚きだ。

これではクロナでは通るのは難しいかもしれない。そんな心配をする宗司を他所に、クロナは地面に屈むと、掌より淡い輝き、魔力を放出した。

『先を行く者の光をここに』

言語を通して紡がれた魔術はクロナの目に収束する。すると、クロナの目から流れ落ちるようにして、小さな光の球体が現れて虚空に浮遊した。

「それは？」

「遠見の魔術と呼ばれる視力に影響する魔術の一種だよ。これは光を中心にした周囲の景色を術者の視界に繋げる、旅人には必須の魔術さ。今から行くのは大樹海と呼ばれる場所だからね。一応、昨日商人から色々聞き出して廃棄された転移パスの場所はある程度分かっているが、確認しておくに越したことはないだろ？」

「確かにな。迷子になっは話にならん」



「よし、では、始めよう」

クロナは浮遊する発光体が己の視界に繋がったのを確認すると、魔力で編んだ糸を使って大樹海の奥へと光を放った。

「……驚いたな」

「どうかしたか？」

「いや、遠見の魔術を行って先を見たのだが、鬱蒼とした目の前の木々は飾りだ。奥は私はおろか、純正の巨人も容易に動ける道が幾つもあるように見える」

クロナが見たのは、幾重にもある獣道の数々だ。だがそれと同時に、ある一定のラインからこちら側にかけて、広い獣道が途切れていることにも気づいた。

一体、何故途切れている？

その疑問を解決するため、クロナは魔術で作り出した光を獣道の途切れているラインから向こう側へと侵入させ。

その瞬間、繋がっていたラインが強制的に切断された。

「ッ!?!」

クロナが目を見張る。それを見た宗司とナイルは反射的に戦闘態勢へと移行し、メールも慌てた様子で鞘に収まった聖剣を両手で構えた。

「やられたー!」

「何をだ!?!」

荒々しく問いかける宗司の言葉に、クロナは苦渋の表情で答えた。

「遠見の魔術の媒体が強制的に切断……おそらく結界か何かで大樹海の一定のラインから先を遮っているのだろう。もしこれが単純に探索系の魔術を妨害するただけの類ならましだが……」

「お話を聞いた限りだと、そんなに優しい相手ではないはずですよね？ ふふ、きつと今頃、侵入者を察知して、排除するために動き出しているかもしれないわ」

そんなことを嬉々として語るナイルに突っ込む余裕はクロナには無い。

宗司が言ったように根っこが正道者であるクロナとしては、己の安

直な行いで要らぬトラブルを巻き起こしたかもしれないということに申し訳なさを感じていた。

同時に焦りもある。

何よりもこの身を焦がす己への憤り。

私はまた誤ったのか。

「私は……！」

「クロナさん」

己への憤りを口にしようとしたクロナの鎧を、メイルは軽く聖剣の先で小突いた。

その衝撃で我に返ったクロナが隣のメイルを見下ろせば、見る者を落ち着かせる微笑みが返ってきた。

「何を思っているのかは知りませんが、今は落ち着いたほうがいいんじゃないですか？」

唇を目一杯吊り上げて笑うメイルの手は、よく見れば小刻みに震えている。

どういった震えなのかは本人にしか分からない。

だがクロナはそれを、無理に強がってでもこちらを安心させようとするメイルの気遣いだと思った。

そう、思ったのだ。

「……ああ、すまない。もう大丈夫だ」

深呼吸を一つ行い、クロナは心を落ち着かせて腰の鞘から特注の大剣を引き抜いた。

遠見の魔術を破られただけであり、もしかしたら何もないかもしれない。しかし宗司達は先程まで夕焼けに染まった美しい樹海が、今や血に染まった不気味の森に見えていた。

こういう時の勘は嫌になる程よく当たるものだ。

冷静になった思考で己へ皮肉を飛ばしたクロナは、冷静になったからこそ分かっているものの、それでも一応、義務として前に立つ宗司の背中に問うことにした。

「……それで、我らが大将はどうするおつもりだい？」

皮肉交じりの言葉に宗司が何を感じたのか、背中しか見えないクロ

ナには分からない。

だが、言葉よりも雄弁に、宗司は腰の鞘から走らせた鉄の鋭利を天高くかざすことで答えて見せた。

「知れたこと。さつきまで只の木々の集まりだったのが……今では魑魅魍魎の広げた口のような邪悪を放っておる」

いや、宗司の顔を見なくても、クロナには容易に何を思っているのか想像出来た。

それはきつと己を追い抜いて宗司の隣に立ったナイルの横顔を、邪悪に歪んだその笑みを見たからで。

「ッ……」

何故かクロナは、隣に立つメールを見ようとは思わなかった。

見てはいけないと、本能的に思ってしまった。

「でしたら、お話は早いですわ。ええ、こんなにも鬼気としてたら……くひ！ 今にも叫びたくなるくらい嬉々としてしまうじゃないですか！」

ナイルの狂気は、その場を満たす全てを代弁していた。

ああ、恐ろしきは大樹海の恐ろしさではない。

クロナは産毛が泡立つように逆立っていくのを感じた。それは隠し切れない生存本能の発露。大樹海で待っている蛮族すら霞むであろう二匹の獣が放つ殺気に怯えたせい。

だからクロナは前に進まなかった。前に進めば、己を躊躇なく噛み殺すと察したから。

なのに前に進んだメールを、クロナは無意識に視界の外へと追いやっていた。

「ねえソウジさん」

クロナを追い抜き二人の隣に立ったメールは、先程クロナを心配したときと全く同じ笑みを浮かべて宗司を見た。

一瞬、その笑みにナイルが目を見開いたのは何を思ったからか。さらにその直後、歓喜に震えながらメールを観察するのはどういふことなのか。

クロナにはきつと分からない。

分かつてはいけない、狂気がある。

「これから修行ですよ。でも私、何をしたらいいのですか？」

冷静になったようで、超えてはいけない一線から目を逸らし、無意識に葛藤するクロナなどまるで眼中にはない。先程の心配が嘘だったかのように師事を乞うメールに、宗司は内心の嬉しさをかみ殺しつつ、この理想的な弟子に助言を一つ与えることにした。

「何、簡単なことだ。お主はお主が使える全てを使って、これより先を生き残れ」

「私の、全て……」

「ああ、木の根っこに齧りついてでも、生きるのだ……おそらくこの感じは——」

「とつても素敵な戦場、ですわね？」

「先を言うなよ、馬鹿者が」

「これはこれは、お株を奪って申し訳ありませんわ」

「つたく……」

ともかく、行くとしよう。

軽口を叩きあつたところで、宗司達は殺気を充満させるガイア大樹海へと足を踏み入れる。

躊躇など一切無かった。

戸惑いなんて、どこにも無かった。

これより向かう場所が戦場で在ると分かっていながら、相手が何人いるかも分からず、何処から狙われるのかもわからないというのに、迷っていないかった。

迷っていない。

その事実と、吐き出される殺気によって、クロナはようやく冷静ではなく正気に戻った心地だった。

何だ、これは。

勝手にちよつかいをかけて、もしかしたら立ち去らせるために殺気を出しているだけの相手を、さらに挑発するように武器を構えて踏み込んでいくそれは。

これでは只の——。

「只の、侵略ではないか……！」

咄嗟に剣を構えはしたが、そもそも自分達がここを訪れなければ何の問題も無かった話だというのに。

少なからず宗司達に毒されていた思考が、皮肉にもその殺気を受けたことで取り戻されていた。だからこそ、クロナは自分達が今、何をしようとしているのか理解し、歯噛みする。

確かにラインの転移パスは使えないが、こちらには聖剣という反則技があり、事実、宗司は聖剣を使えばメビウス王国の外へ出ることは可能だとも言っていた。

なにあえて立ち入った者を全て生かして返さないとはいえ、立ち入らなければ無害であるはずの蛮族を悪戯に刺激している。

これの何処にも正義は無い。

本来なら行つてはいけない行為のはずなのに。

「君達は……分かってるんだな」

思考が麻痺していたクロナは今に至つてようやく気付くという愚かを犯したが、おそらく、いや、確実に宗司達は気付いていたはずだ。

今、自分達が何をしようとして、その結果、何かが起きるかもしれないということも。

だがしかし、クロナにそれを糾弾する資格があるかと言えば、それもきつと、嘘になる。

「……どのみち、王都を滅ぼした邪悪ということは、事実だからな」

最早、自分が正道を語る資格はない。

その事実虚しさや憤りを覚え、それでもクロナは先を行く三人を追つて大樹海へと足を踏み入れる。

嬉々として得物を構え前に行く宗司の背中はずぐそこに

「ああ、畜生……」

きつと、君が言っていたことは正しいよ。

狂気の才を、残念がるなど愚かしかった。

何より、仲間だと思ふことこそ、愚かの極み。

最早、目を背けることなど出来ない。唯一普通だと思つていたメイルだつて、先程見せた震えはきつと――。

「私ですら怯える殺気に武者震いするのか……あの年代の、人を殺して半月も経っていないような少女が……！」

少し前まで蝶よ花よと箱庭で育ってきた少女が、今や笑顔で戦場への道を進んでいる。

狂っている。

こんなのは、狂いすぎている。

懂れなんて、覚えるわけがない。

「やはり私は……」

あの日、魔族を斬り殺した日から。

何度だって、間違えている。

本当に愚かなのは自分だ。

今もきつと間違っていると分かっているのに。

それでも今は、邪悪を是とする修羅達の背中を追って突き進むしか道は無いのだと、クロナは思うのであった。

踏み出せば、戦士としての経験から、心の迷いはふり払われた。それでも前を行く宗司達に遅れたという思いのあるクロナは、その巨体に見合わぬ軽快な動きで木々の合間を縫うようにその後を追った。

既に起こったことを事前にごうにか出来たかどうかについては、今は考える時ではない。それよりも遠見の魔術をかき消した結界の正体と、その後すぐに立ち込めた殺気について考える方がいいだろう。

「イシスにかかる結界と似たやつとみるか。確か上級魔術に索敵系の魔術を妨害、逆探知が可能なものがあつたような……」

「だとしたら光属性の上級魔術、聖域ですね」

口に出していた思考の返答が返ってきたことにクロナが驚いて声の方向に視線を移した。

隣ではいつの間にかナイルが並走している。見た感じ強化の魔術も使っていないはずなのに、強化魔術を使っているクロナに並走しているとところや、戦闘態勢に入っているクロナに気付かれずいつの間

か隣まで接近していることなど気になるが、それもすぐに思考の外へ追いやった。

今はそのことを考える時ではない。クロナはナイルの言った魔術を聞いて、己の記憶にある魔術を洗い出した。

「……イシスの結界を知る者に話を聞いた時、確かそんな魔術のことを言っていたな。成程、上級魔術なら話は早い」

「ええ、貴女の使った遠見の魔術程度なら、聖域は一瞬で遮断しますからね」

「迂闊だったのは謝罪する……それよりナイル、宗司とメイルは？」

ナイルは背負ったままの荷物を肩越しに指さして、呆れた風に鼻を鳴らした。

「ご覧のとおり、荷物を背負った私では彼らについていくことが出来ず、置いてけぼりですよ」

その見え透いた嘘にクロナは呆れを通り越して笑いがこみあげてくるのを感じた。宗司一人ならともかく、強化した自分の動きに並走出来るナイルが、メイルにすら置いていかれるというのはおかしな話だからだ。

「……まあ、そういうことにおこう。どうやら随分と距離を離されたようだから、少し速度を……」

「その必要はないみたいですよ？」

「何？」

どういふことかナイルに問いかけようとして、クロナは首筋を焼く冷たい殺気に反射的に振り返り、握っていた大剣を袈裟に振るった。

クロナを狙っていた矢がその剛剣によつて虚空で碎け散る。薙いだ勢いで発生した暴風はさながら台風のように凶悪だが、その風を斬り裂いて、さらに無数の矢がクロナを襲った。

「影から……そこそと……！」

姿の見えない敵手の攻撃への苛立ちと、先程から積もっていた憤り。その二つを相手への怒りとして体現させた刃は、矢が大剣の圏内に入った瞬間に落としていた。

握りには未だ違和感があるが、感触は上々。とんだ試し斬りになっ

だが、確かな手ごたえにクロナは領きを一つすると、矢の飛んできた方向に切っ先を突きつけた。

「無礼は承知！ 非礼も心得ている！ しかしそちらに戦士の矜持があるなら、正々堂々姿を現し刃をかぎせ！ 卑怯卑劣の言われは覚悟している！ だがせめてこの鬪争にのみ、私は王道を突き進むことを約束しよう！ この言葉！ 偽り無しと思うた者より前に出よ！」

威風堂々。その騎士としての姿に相応しい堂々とした名乗りは、まさに宗司が語った正道者の正しい在り方だろう。

しかし叫ぶ言葉への返事は、さらに数を増した矢によって行われた。

「そうか……！ ……これが返答なのだな！」

クロナは苦渋の表情で立て続けに襲い掛かる矢を斬り捨てた。

やはり虫のいい提案だったのだろう。当然だ、自分達は彼らの領域を犯した侵略者。それに対しての行いがこれならば、それを卑怯とは言えないだろう。

しかし、クロナはそれでも尚己の王道を掲げるのだ。

「だが騎士の誇りに賭けて、先の言葉は撤回せぬ！」

叫ぶ間にも矢の猛攻は熾烈を極めていく。最早、豪雨となった弓やの洗礼に、クロナは怯むことなく大剣を巧みと操り真つ向から迎え撃った。

せめてそれだけが彼女に出来る彼らへの誠意。

王道を叫ぶことだけが、彼女に出来る唯一無二の信念の通し方ならば。

「我が名はクロナ・クロルキス！」

三度目の弓矢の怒濤を超えたクロナは、大剣を力強く大地に突き立てて名乗りをあげた。轟音と共に大地が揺れ、周囲の木々が巨人の脅力に恐れをなしたように震えだす。

それが彼女の在り方。圧倒的な力と、清々しいまでの戦いを望む高潔さこそ。

「この首！ 名を上げたければ前に出て取ってみせろ！」

魔族と人族の戦場で先頭を走り続けた女騎士の持つ強さ。



だがその輝きをもつてしても、この大樹海を支配する戦闘民族が返すのは、黒々とした冷たい殺意の雨だった。

「ツ……い・それが答えならば、無理矢理にでも前へ出すぞ！」

さらに物量を増す矢の数は、流石のクロナも今度こそ一撃二撃は覚悟するほど。しかし決して臆することなく大剣を引き抜き振り上げた直後、その前に影が一つ躍り出た。

「ナイル!？」

「素敵な口上、震えましたよ」

瞬間、背中の荷物を下ろしたナイルは、片手で豪快に荷物を振り回してみせた。

まるで子どもが駄々をこねるようでありながら、クロナはナイルが振り回す荷物に降り注ぐ矢が絡めとられていくのを見た。

それどころか、弾かれた矢が他の矢にぶつかり、軌道を逸らされた矢がさらに他の矢を、といった具合で連鎖反応を起こす。

気付けば木々を縫って迫ってきた視界を覆い尽くす程の矢は、全てクロナとナイルの周囲に突き刺さるだけに終わった。

「なんと、見事な……」

その絶技に思わずクロナの口は賞賛を漏らしていた。ナイルはそれに笑みを一つ背中越しに送って答える。

刹那、その隙を狙ったように、一本の矢がナイルの首筋へ飛んできた。

「ッ!？」

注意を促す暇も無かった。緑色に塗りつぶされた矢は、周囲の自然に紛れているせいで気付くのに遅れてしまったのだ。当然、クロナの方を振り返っているナイルに見えているはずがない。

既に回避は不可能。強化されているせいか、弾丸の速度に匹敵する矢はナイルの首を貫いて――。

次の瞬間、近くの木から人影が一つ落ちてきた。

「え?」

人影が大地に落ちてきた音に反応したクロナは、すぐに矢が突き立ったはずのナイルを見た。

「趣向としては……ええ、私、こういうの大好きですわ」

片手を虚空にかざしたナイルが、落ちてきた人影へ微笑みを向けた。

落ちてきたのはおそらく魔獣のものであろう皮で作られた皮鎧を纏った奇妙な化粧をした男だ。

これがこの付近に住んでいるという蛮族なのだろうか。遠目で観察していたクロナは、男の額に深々と矢が突き刺さっているのに気付いた。

「まさか、さっきの……」

「小手先の技ですわ。クロナさんの素晴らしい剛の太刀に比べればまだまだ」

そう言つて人差し指を数度曲げる仕草をするナイルを見て、クロナはこの女が今何をしてみせたのかに気付き、戦慄した。

目前まで迫つてきた音速の矢を指先で弾いて一回転させ、その尻を弾いて矢を放つた男の額に突き立てたのだ。

言葉にすると冗談にしか聞こえない人外の技の冴えに息を飲んでみると、いつの間にか周囲を囲っていた気配が静かに姿を現した。

いずれも先程落ちてきた男と似たような装備をした男女だ。不可思議な化粧を施された彼らの表情からは感情は一切伺えない。さながら侵入者に反応して襲い掛かる獰猛なハチの如く、そこにあるのは明確な殺意のみ。

そんな殺意の塊の数がおよそ三十、そのいずれも熟練の兵士ですら届かぬ技量を誇っていることをナイルとクロナは見ただけで理解した。

「あら、熱烈な歓迎ですこと」

「……これを見越して残ってくれたのか。感謝しよう、ナイル」

「いえいえ、遅れただけですわ」

「ふっ……わかった。そういうことでいいのだな」

「はい、そういうことでいいのです」

何故ナイルが遅れた自分を待ってくれたのか、周囲を取り囲む蛮族、カリスの者達を見て理解した。

間違いなく、彼らはこの数ならクロナを殺せると判断したのだろう。そして事実、もしもクロナが一人だったならば、三十人のカリスのハンターによって成す術なく殺されていたかもしれない。

しかし、彼らは姿を隠して矢を射るといふアドバンテージを捨ててまで姿を晒した。その理由はきつと、背中合わせで立っている、自分の半分の背丈もない美貌の修道女のため。

「だから、後ろは気にしないでくださいな」

その軽くつまめば簡単に折れそうなナイルの細くて白い指から、ゴキリと骨が鳴る音が幾つも響いた。さながらそれは今から砕ける生贄達の骨を先に教えているかのようであり、ゆっくりと握りこまれた二つの拳からは、これまで吸ってきた多量の血が臭ってきたようにクロナは感じた。

「貴女の後ろは、私が守るから」

「そいつは随分……頼もしい」

自分に向けられていないと分かっている、背筋が凍るようなナイルの殺気にクロナの額から冷や汗が流れた。

最早、祈りの時間は与えない。

夕暮れはすぎ、暗黒の時間は訪れようとしている。

「さあ、我が神へ全てを捧げなさい」

今宵、最初の惨劇を始めよう。

嗤う狂信者へ向けて、生贄と定められた森の守護者達は、尚も冷静を保ったままに襲い掛かっていくのだった。

## 第十六話 『めいる、がんばる』

宗司によって己の世界を崩されてからこれまで、メイルは愚直に宗司の言葉に従って鍛錬に励んできた。

宗司の言葉は難解であり理解するまで時間がかかるし、剣を交えて行う稽古はいつも痛くて辛くて泣きそうになるけれど、別にそのことに対して疑問があるわけではない。

だがメイルは宗司のおかげで自分が以前よりも強くなっていると思う。だから宗司の言葉はどんなものでも頑張って理解しようと思いがけてきた。

(生き残るってどういうことだろう)

先程、ナイルが「この調子で走っていると疲れてしまうので、クロナさんに拾ってもらいますわ」と言って離れてから、宗司の背中に付き従って走るメイルはずっとその言葉について考えていた。

自分に使える全てを使い、木の根に齧りついてでも生き残る。

言葉通りに考えればいいのかと思うのだが、捻くれものの宗司のことだ、きつと裏があるのだろうとメイルは思っていた。

「そう根を詰めるでない。よく考えるのはお主の良いところだが、戦場で思考ばかりに能力を裂くのは短所にもなりえる。考えず、直感いくさばに身を任すも良しと知れ」

そんなメイルのことは見ることもなく察した宗司の助言に、メイルは小さくない照れくささを感じて、赤く染まった頬を軽く搔いた。

「なんか、ごめんなさい」

「気にするな。初めての殺しは一人でこなした。しかし戦場というのはちと特殊でな、こればかりは慣れた者が近くで色々教えるのが一番手っ取り早いというもの……戦場には独特の匂いがあり、無数の闘争によって生じる流れが幾つも存在する。全てを感じ取れとは言わん。まずは生き残り、『こういうものなのだ』と肌で知れ」

こういうものとは、どういうことなのだろうか。

相変わらず難解な言い回しにメイルは再び思考の渦に入りかけるが、それもすぐに目の前に広がる開けた空間に飛び出したことで戻っ

てくることが出来た。

「ここは……」

今まで走ってきた場所から一転、ここだけぽっかりと穴が空いたように四方数十メートルはあるかという広場だ。

「誘導と言うわけだな」

宗司は広場の周囲に視線を巡らせながら、面白そうに喉を鳴らした。

周囲一帯から気配はしない。しかし、逆に気配を完璧に殺しているために生まれているぽっかりと空いた空間を宗司は把握して、そこに誰かが居るのだろうと瞬時に察した。

獣を狩るだけならそれでいいだろう。しかし、気配を殺すという技術だけでは、その間を見切る感覚を持つ宗司相手では些か以上に不足している。

「誘導ってどういうことですか？」

メールも宗司が広場に踏み込まないと、その視線が周囲に散ったのを見て、警戒心を強めながら問いかけた。

良い兆候だ。宗司は素直にそう思う。自分の力だけでは足りぬから、宗司という指針をもって知ろうとするのはこの場では最適解である。

「……正しくは誘導ではなく、幾つか存在する道を闇雲に走ればここに到達するといった話ただけだな。乱雑に見えながらその実、ここまでの道は全て指向性をもたせられていたというわけだ」

広大なガイア大樹海だが、人が侵入するとその経路はかなり制限される。その中の幾つかの道を、さりげなくこの広場に行けるよう仕向けていたのだろう。

おそらく、ラインを出てからの道すらも全て誘導されていたものなのかも知れない。用意周到な罫は全て、今周囲を取り囲む者達、この大樹海を住処とする戦闘民族カリスが侵入者を殺すためだけに作り出したもの。

そう思うと、歓喜が後から湧いてくる心地になるものだ。

「ということとは、ソウジさんはわかっていてあえて道に乗ったのです

か？」

「そういうことになる」

「でも、どうしてそんな危険な方を？」

「道楽ついでの鍛錬だよ」

宗司はメールの問いに気軽に答えると、やはり同じく気楽な感じで広場の中央に向けて歩みだした。

その背中にメールは真剣な表情で周囲を警戒しながらついていく。夕暮れは既に過ぎ、周囲は暗闇が支配し始めていた。視界を照らすのは満点の星空と蒼く輝く三日月ばかり。

その光を照り返す鈍い鋼の煌めきを誇示する宗司は、周囲を見渡して口を開いた。

「俺がお主らに気付いていることも、気配を完全に殺す程の技量を持つお主らならわかつているだろ？ まっ、だからといって姿を晒せというつもりは——」

宗司の真正面から矢が幾つも襲い掛かる。

その一切を造作も無く斬り払って、挑発するように鼻を鳴らした。

「——毛頭ないがな」

嘲るように、肩を竦める。

確かに速度は目を見張るものがある。しかも放った瞬間も気配を完全に殺しているのだから恐れ入る。

「しかし、これで俺を殺せると思っっているなら……少々、不愉快だのお」

この世界の住人は、総じて身体能力で宗司を遙か上回っている。

そこから放たれる数々の技の冴えは、掠るだけでも致命は必至だろう。しかもそこに加わる魔術やスキルといった異端の技は、対応するのも少々面倒だ。だが、あくまで威力のみに特化したこの世界の技は、宗司、そしてナイルからすれば幼子が振るう鈍のように、危なくはあるが恐れる程のものではない。

魔という術に溺れすぎ、業の冴えを失った者達。

宗司がこの世界での少ない戦闘で得た答えはそれだ。

「俺を獣と勘違いするなよ？ 獣と同じく牙もあり、爪もあるが……」

俺には業が一つある」

半生を注いだ武の冴えが、魔という超常に劣るはずなどはない。

その自信を全身から漲らせる宗司は、返答代わりの矢の洗礼を軌跡すら見えない斬撃で全て斬って捨てた。

「めいる！ 言葉を忘れておらぬな!？」

「根っこ！ ばりばり齧ります！」

「その意気だぞ我が弟子よ！」

背中越しの元気な声に宗司は破顔一笑すると、見上げた夜空の星々に重なるように、無数の点が伸びていった。

つられて見上げたメイルは、その正体——、広場全域を埋め尽くすだろう数の矢の雨に気付き目を見張る。

猶予など何処にもない。

思考する暇なんてもつてのほか。

「う、うわあああああ！」

戦争が始まったのだ。

迫りくる死の奔流に抗うように叫ぶメイルは、広場の隅目掛けて走り出した宗司の背中へ、生き残るために必死で追従を始めた。

風を操る魔術によって、天高く上った矢は矢じりを真下に向けて、弾丸のように螺旋の回転をしながら降り注ぐ。狙いは宗司とメイルが居る広場の全て。狙いを定めるのではなく、避ける隙間を与えぬためのやり方だ。

本来は巨大魔獣の全身へダメージを与えるために行う手法であるため、人間二人に使うにはあり得ない規模であろう。

だがそれをさせたのが宗司の技量であり、結果としてとぼつちりを食らう形になったメイルからすれば、まさに生きた心地等しない数秒間が始まったのである。

「わわわわわ!？」

「聖剣の腹で頭と体は守れ！」

混乱するメイルに櫛を飛ばしながら、宗司はメイルに当たる矢も含めて、己に降り注ぐ矢の全てを一刀の元斬り捨てた。

木製で出来た篋の部分は当然、鋼鉄で出来た鏃すらも問題なく斬つ

たところで、二人の周囲に矢が突き刺さる音が幾つも響き渡った。

一つ一つは小さいが、数十メートルもある広場一帯に重なればそれなりの騒音。戦場特有の音色に懐かしさを覚える宗司と、明確な死の音色に喉を引きつらせるメイルは対照的だ。

だが宗司はメイルに何か助言をしようとは思っていないかった。

どうせこの娘のことだから直ぐにでも慣れる。歪な信頼にメイルがどう応えるのかは分からないが、喚き散らす元気があるなら問題ないだろう。

「こ、こわ!?! ソウジさん! 今、私死にしましたよね!?!」

「阿呆、ちゃんと生きておるから心配するな」

「ホントだ! まだ生きてる!」

「……慣れるの、早いのお」

いつまでも死の恐怖に涙するよりは遥かにマシではなるが、今度は気分が高揚しすぎて可笑しくなっている。

こいつに限っては先に明鏡止水でも至らせたほうが良いかもしれない。

続いて前面より宗司の全身を飲み込む程の矢数を、刀の圏内に入った瞬間斬り落としつつ、一瞬もこちらの背中から目を離さないメイルの今後の育成方針を思考する。

「まっ、これも余裕か」

焦る程の相手ではないのは事実。敵の隠れた樹木の一角に迫った宗司は、地を駆ける勢いをそのままに、人の胴五つ分はあるだろう樹木を一刀した。

豆腐でも斬るように巨大樹木を斜めに斬れば、当然重力に従って斜めに木は傾いた。

その時、宗司が斬った樹木の影より四つの影が落ちてきた。

「来たか、蛮族……!」

蛮族——カリスの面々は弓を肩にかけ、腰より引き抜いた鉞のような刃を構えて宗司とメイルの周囲に降り立つ。

あの状態から器用にこちらを取り囲む動きはさながら曲芸師か何かか。それよりも腰構えで刀を構える宗司の背中、緊張を漲らすメイル



ルの様子の方が面白いと思った。

「気を抜け。流れを見定めろ」

「は、はいー!」

「では、瞬き数回分持たせろよ!」

「え!?!」

言うや否や、宗司はメイルの背中より離れて真正面のカリスのハンター目掛けて飛びかかった。その動きに呼応して宗司へと走り出した数は三つ。

内、メイルの真正面の男は、当然のようにメイルへと襲い掛かってきた。

「い!?!」

メイルの目から見れば、男の動きは体を吹き抜ける突風のようなだった。

つまり、全くもって目で捉えられない。洗練された動きで、地を這う蛇のようにメイルの懐へと飛び込んできた男は、何か告げるでもなく問答無用で右手の鉈を突き出した。

先程の矢の襲撃があったせいかわ、聖剣の腹を前に向けて構えていたおかげで、反射的に動かしした聖剣は辛うじて鉈の刺突に掠ることが出来た。

しかし力で圧倒されているメイルでは防ぐこともいなすことも出来ず、抵抗虚しく両手より弾かれた聖剣を抜けて、それでも僅かに逸らされた鉈の刃が右肩を深々と抉った。

「ぎゃ!?!」

「……死ね」

激痛で咄嗟に傷口を庇ったメイルへ、無言を貫いていた男が流れるままに鉈を振り下ろす。

男の言葉は真実だ。何の抵抗も出来ずにメイルの命へその刃は届くだろう。

だが、メイルが考えているのは宗司の言葉だけだった。

生き残る。

根っこを齧る。

そういえばさつき、気を抜いて流れを見定めると彼は言っていた。「つまり？」

力を抜けばいいのだろうか。

確実な死の間際、メイルは真剣にそのことに疑問を走らせ、とりあえず力を抜いて前のめりに倒れた。

「ぬっ？」

「お、死んでない」

自然に倒れたメイルの体は、放たれた鉞の軌跡を搔い潜り、男の胸元に顔から突っ込む。

力を抜いたら死ななかった。

殆ど運の要素が占めていたが、少なくともメイルからすれば宗司の言った言葉通り、気を抜いたら僅かだけれど生き延びた。

だがこれまで。

次の男の一手に抵抗できるわけも無く、返しの刃で今度こそメイルの命は――。

視界を染める真っ赤な色。

「よし、瞬き数回分、生き延びたな」

見上げれば、男の首は無くなって、その切り口より夜空に向けて多量の真紅が迸っていた。

メイルが流血で染まった視界で振り返れば、既に襲い掛かってきたハンター四人を葬った宗司が満足げに見ていた。

それは純粹に弟子の成長を喜ぶ師の顔。

間違はなく、戦場で浮かべていいものではない。

「へへ、ありがとうございますー！」

しかし、喜ぶことが悪いわけではないだろう。

メイルは痛む肩を抑えながら振り返る。痛みで浮かんだ涙は、敵手の首より流れる血潮で全て洗い流されていた。

そして返される真紅の笑顔。

それは決して素晴らしいものではない。幸運が呼んだ奇跡的な生存で、彼女が意図して手にした結果の末ではなく、誇れるものではないけれど。

だからこそ、美しい。

狂気に浸りし破顔一笑。宗司もまた、メイルの見せる狂気的一端に清々しい喜びを湛えたのだった。

「その意気やよし、っと」

だが、メイルの笑みにいつまでも見惚れている時間は無い。その間にも放たれた矢を片手間に斬った宗司は、夜に照らされる淡い燐光を敏感に察知した。

魔力の輝きと、擦れる木々のざわめきに隠れて紡がれる詠唱が、幾多の魔術となつて空を飛んだ。

それがどういったものか確認する必要などない。分かりやすい質量。黒光りする円形こそ。

「でかい泥団子!？」

「しかも無数でデカいとなると……壮観だのお」

「そんな呑気な——」

「ほれ下がれ」

「ぎゃー!」

宗司に襟首を掴まれて後ろに投げられたメイルは、天を埋め尽くす泥団子の猛威に絶叫した。

矢の代わりに人間一人の見込める程の巨大な土の塊が降り注ぐ。単純明快な質量の脅威に対して、真正面から刃を構えた宗司は、手近の巨大泥団子から真つ二つに斬り捨てた。

中心から別れた泥団子は二人の間に着弾する。震える大地はそれだけで十分な破壊力を十二分に伝えてきた。

「ちっ……面倒で面妖な」

魔術の妙には慣れたつもりが、こうも非常識だと呆れるしかない。

その間にも一気呵成と飛んでくる泥団子の砲撃に宗司は舌打ち。再度、直撃するものだけ斬ったところで、斬り伏せた死体に目を送った宗司は、突如頭に閃いた明暗に口を緩めた。

「めいる! 後ろに下がれ! 森に紛ればおそらく直撃は大丈夫なはずだ!」

「ソウジさんは!？」

「鷹の爪を見せつける！」

そう言つて、宗司は手近の死体の横に落ちていた弓矢を掴みとると、その場で矢を一本番え、泥団子砲撃の隙間から、魔力の輝きへと狙いを定めた。

先程までは大体の位置しかわからなかったが、これで明確な位置が文字通り目に見えた。

強化を前提としているためか弦が重い。並の力自慢では引くことも叶わず、宗司であっても限界まで引き絞るのは難しいだろう。

だが足りない力は、聖剣の速度すら凌ぐ脱力の応用にて補つてみせる。

急激な虚脱からの最高の力みによつて得られる一瞬の出力上昇で弦を引き絞つた宗司は、限界まで弓を反らすと同時に矢から指を離した。

「……シッ！」

浅く吐いた呼気と共に、泥団子の間を縫つて宗司の放つた矢が魔力の一角に突き刺さる。当たったかどうかは一目瞭然。微かに見える魔力の輝きが消えうせたのを確認した宗司は、立て続けに矢の在る限り流れるように、森に潜むカリスのハンター達へ弓矢を掃射した。

一閃。

一閃。

一つも撃ち漏らすことなく命中の矢はハンター達を葬っていく。しかも、その間にも迫る泥団子を斬ることもなく、微かに空いている隙間を縫つて前進しながらだ。

「す、すごい……」

その動きに、ここが戦場であることも忘れてマイルは見惚れていた。

自分に語つた通り、あれが流れを見切るということなのだろう。直撃しそうな泥団子を髪や服に擦らせる程ぎりぎりで見切り、躲し、止まることなく矢を放ち、その全てを当てていく。

技術に裏打ちされた必殺と絶対回避。さながら広場と言う舞台と相まって、宗司が見事な演舞を見せているかのようだった。

刀のように美しく、刀のように恐ろしい。

冷え冷えする様を眺めるメイルは、泥団子の掃射が終わってから数秒ほとしてようやく気付く程呆けていた。

慌てて気を引き締める。呆けている時間は無いと宗司は言っていた。ならば今自分がすることは、生き残るために最善を尽くすこと。

どうすればいい。自分では宗司と違って周囲に敵がいるかどうかなんて分からない。ここならば泥団子や矢の掃射はある程度凌げるが、夜闇と草木が相まって視界を完全に潰されたこの状況、奇襲を受ければ即死は確実。

生き残るためにはどうすればいい。

そのために、宗司と離れたこの場所は危険すぎる。

「ソウジさん！」

気付けば反対側まで走っていた宗司の下へメイルは走り出した。姿を晒す危険はあるが、このまま待っていたとしても相手がこちらの方が御しやすいと思って、襲い掛かる危険だっているのだ。

宗司が来るのを待つか、宗司の下へ走るか、メイルは後者を選択した。

だがそれは勿論悪手。初めての戦場で冷静でいられるわけがなく、メイルは最も安直な手段に縋ってしまったのだ。

一応の安全を確保したからこそ宗司はメイルを置いて前に飛び出したのである。

決して、そこから飛び出してついて来いとは言っていないのだ。

「めいる!？」

だから、己を呼ぶ声に振り返った宗司はメイルの愚行に目を見開いた。

しかしそんなことは知らないメイルは、不細工ながらも狙われる表面積を小さくするため、体を丸めて地面を這うように走り、体の前面は聖剣でカバーした。それでも心もとなく、広場に踏み出した瞬間は生きた心地がしない。

宗司は、反射的に手にした弓矢を引き絞り、焦りからか広場に漏れてきた敵意を頼りに残った矢の全てを出し惜しみせず放つてその愚

行を援護した。

それでも全てを射抜けるわけではない。メイルを狙う必殺の矢の数々が降り注ぐのを見て、宗司は歯噛みしつつも再度広場へ戻るために踵を返す。

そんな宗司を阻む形で、付近に控えていたハンター達が一斉に降り立った。

「邪魔を……い！」

無言で襲い掛かる彼らを、宗司は虫を払うように一閃して散らす。それによりハンターが稼げたのは僅か数秒。しかし、メイルを矢が襲うには十分な時間。

「めいるー！ 伏せろおー！」

宗司の咆哮に反射的に反応したメイルは、走るのを止めて倒れるように地面に伏せると、言われた言葉を思い出し、聖剣を頭上にかざして頭と背中の一部を隠した。

だが、決して全てを隠せているわけではない。

二度の奇跡は起こることなく、聖剣では隠せずに露出したメイルの体を、ハンター達が放った矢が幾つも貫いて大地に縫い付けた。

「ぎ、あああああああ!？」

仮に魔術で強化されていなかったら、突き立った部分の周囲の肉と骨が爆ぜる程の威力の矢が十本近く、隠せなかった両腕と両足、そして背中部分に鏃は深々と突き刺さっている。何とか繋がっているが、体を走る痛みは想像を絶するはずだ。

四肢を挽かれるような痛みの中、握った聖剣を手放さなかったのはメイルの強固な精神故か。だがいつまでももつものではなく、気を抜けば意識何て簡単に吹き飛ぶだろう。

間違えた。

間違えてしまった。

あの場面はあそこで待つのが最善だった。

痛みで霞む意識を繋げるのは、選択を誤った後悔とそれに付随した己への憤りだ。

たった一度、上手く切り抜けただけで調子に乗った愚かがこの無様

である。

悔しさから血が出る程歯を食いしばって意識を保ち、メイルは無慈悲にも放たれた追撃の矢を睨むことしか出来ず。

「それ以上は、やらせるものかよ……！」

その窮地を、僅かに息を弾ませる宗司が救ってみせた。

やはり圧倒的なその剣速と歩法の鋭さ。一秒も経たず広場の中央に戻った宗司の背中を見上げるメイルは、痛みではなく申し訳なさから目じりに涙を浮かべた。

「ソ、ウジ、さん。私……ごめ、な、さ」

「話は後だ……待てと言わなかった俺の落ち度もあるな」

短い戦いの中で、自分だけなら容易く葬れる相手であると判断した余裕。そこから生まれた慢心がメイルの今の惨状の一端だ。

自分が優位だと分かると遊びたくなるのは悪い癖だな。

先の聖剣戦の時と同じで、自分だけがいいと考えていると周囲が被害を受けるということ。

折角の逸材をこんなところで手放すわけにもいかないだろう。

メイルの見せた狂気の一端は、宗司からすればいずれ極上へとなるものだ。

さながら、漬けたばかりの漬物だがな。

食べるにはまだ早い。宗司はそこまで考えて、再び余計なことを考えていることに気づき、内心で小さく己を詰った。

「だが、ある程度奴らの強さを掴めたの事実……おい、めいる。生きてるか？」

「な、なんとか……でも、つう……ごめんささい、両腕と両足、すつごい痛くて動かないです」

「気にするな。行動の是非を素人に問うのも野暮というもの……むしろその傷で刀を離さぬ気概を俺は買うぞ」

宗司がメイルを庇っているのを好機と見たか。今度は矢と泥団子の相乗攻撃が話してある間にも降り注ぐ。

一刀で斬るだけでは最早足りない。刃の圏内に入るものから全て粉々に斬り捨てつつ、宗司は痛みの中で疑問を浮かべるメイルへと振

り返り。

「とうわけでお主、ここから先は一人で頑張れ」

「え?」

今も投下されている矢と巨大泥団子の豪雨よりもさらに強烈な爆弾発言に、メイルは痛みも忘れて言葉を詰まらせるのだった。



## 第十七話 『理解出来ない、才覚を』

砕けた泥団子と突き立つ矢の列。土のみが広がっていたその広場は、ものの十分程度で軍隊が激突し合ったような環境に様変わりしていた。

だがそこで起きていた戦いの火も、今は森の奥地へと鋼の音と共に遠くなっている。

剣戟は遠い。

その音の遠さが、宗司と己の今も広がり続けている明確な差であるとメイルは思った。

「……………あ」

倒れ伏すメイルの周囲だけは、空間ごと切り抜かれたように矢も泥団子の破片すら落ちていない。綺麗な円がそこだけ描かれた場所で指一つ動かさないメイルは、辛うじて残る意識の中、油断なくこちらに接近する影を耳で捉えた。

後は一人で何とかしろと言った宗司は、広場の周囲を満たしていたカリスのハンターを引き連れて森の奥に消えている。彼らも宗司こそが最大の脅威と悟ったのか、その兵力の半数以上をそこに向けたのだ。

だが未だ残ったカリスのハンターの一部が、こうして確実に侵入者を葬るためメイルのところに来てきた。

たったそれだけの話。

絶望的な話だ。

だがメイルの虚ろな瞳は、遠く奏でられる剣戟のほうへだけ向けられている。明確な死が迫っているというのに、どうしてかメイルはその調が気になって仕方なかったから。

「ソウジさん……………」

生き残れと言った。

ありとあらゆる全てを使って生き残れと宗司は言った。

「……生きる」

四肢には矢が突き刺さっている。

激痛は絶え間なく、指先を動かすだけで全身を刺されたような痛みが駆け抜ける。

「生きる、かあ」

だがメイルは痛みを押し殺し、痛み顔に顔を歪めながらもゆっくりと体を起こした。

土に縫い付けられた腕と脚は強引に引っこ抜く。貫通した傷口を刺さった矢が擦る痛みは筆舌し難い。

だが、痛みはもう、知っている。

「生きるんだ」

屋敷で起きた惨劇。

己を育ててくれた者達の死。

肉体の痛みよりも遥かに過酷な心の裂傷。

喪失より生まれる激痛を、メイル・リンクキャットは知っている。

「生き残れって、言われた」

泥団子の残骸に潜むカリスのハンター達は臨戦態勢に入っている。その手に握った弓矢はいつでも対象を射抜く用意が出来ていた。

起き上がり、立ち上がったところで意味は無い。

カリスのハンター一人相手ですら、幸運を手繰り寄せても瞬きの間生き残るしか出来なかった少女に何かが出来るわけがない。

さらに、カリスのハンターは相手が手負いで、しかも己よりはるかに弱い相手でも、決して油断しない者達しか存在していなかった。

影に潜んでいたハンターの一人が矢を放つ。

銃弾の速度すら超える矢は、螺旋を描きながら真っ直ぐに飛び——  
違うことなくメイルの心臓を貫通した。

「ぐ、は……」

背から入った矢が胸を突き抜け反対側にあった残骸に半ばまで刺さる程の破壊力。抵抗する間もない。一瞬で心臓を壊されたメイルの目が裏返し、その口から血を吐き出しながら前のめりに倒れこみ。

「は……ははは」

メイルは大地に触れるその直前で足を踏み出した。

その光景に影に潜んでいたハンター達に動揺の色が僅かに滲む。心臓を確実に潰したにも関わらず、生きているのだ。自然の摂理に反する異常を見ては、百戦錬磨のハンターと言えど混乱するのは無理も無い。

そんな彼らの動揺を肌で感じる。聖剣を握った手の甲で口の血をぬぐったメイルは、次の瞬間、常軌を逸した魔力をその体から解放した。

夜の世界に昼が生まれたと見間違える規模の魔力。天高く伸びる白色の魔力量は底など見えず、一人一人が扱える量を遥かに逸脱している。

『「大いなる慈愛の歌声よ、罪深き我らの業を払いたまえ」』

その魔力を片手間に操ったメイルが口ずさんだ詠唱は、回復系の最上位に当たる究極の魔術の一。

空高く伸びた魔力の全てがメイルの小さな体に凝縮していき、あらゆる怪我も病も回復する魔術は、体に突き刺さった矢を体から引きはがし、空いた穴を瞬時に回復させた。

「うん。完璧」

メイルは手の握りを確かめるように拳を作りこみ強く握りこむと、『抜き身の聖剣』を両手で構えた。

「根っこ、齧らせてもらいます」

宗司は居なくなる直前に、メイルの聖剣の封印を解放してからその場を後にしていた。

鞘の封印さえ解放すれば、正式な担い手でも聖剣が使えるのはスニークスとの戦いで証明済みである。それは聖剣の守り手として選ばれたメイルも同じであり、仮初の主に選ばれた今のメイルは、宗司とスニークスが感じたのと同じ全能感で体が満たされていた。

最早、この力があればカリスのハンターと言えど恐れるに足りない。聖剣の加護を得たメイルの力を感じて、周囲の影の動揺と警戒が強まっていくのをメイルは察した。

「でも……これじゃ、足りないんだ」

周囲に気を張りながら、メイルは聖剣と力を得たことで、ようやく頂すら見えなかった宗司がどれほどの領域に居るのか理解した。

メイルという小さな物差しでは測れなかったものが、聖剣という宗司と戦える力をもった武装を得ることで悟る。

宗司の力はこの世の理を逸脱する何かだ。

今のメイルでは決して届くことのない神如き領域に立つ、修羅だ。

「足りないから……足りないよ」

聖剣では足りない。

聖剣ではこれ以上は望めない。

どんなに聖剣を巧みに扱えたとしても、変わることのない力ではいずれ地力の限界が訪れることをメイルは分かったから。

「だから、強くならないと」

聖剣では届かない領域に立つ方法は、一つ。

「私が、強くならなきゃいけないんだ」

覚悟を一つ。小さな一歩。

しかし嬉々とし地獄へ勇め。

吸い込まれるように飛びかかってくるハンター達を見据え、メイルは感じるままに足を踏み出した。

例えば宗司に届かないとしても、聖剣より得られる力と、刻み込まれた技量が合わさることで得られるものは桁違いだ。メイルを囲むように飛びかかったハンター達、まず真正面から来た男との距離を瞬きの間もなく埋める。

反応させる暇すら与えない。上段より一直線に振りぬいた聖剣は、空気を裂くよりも容易くハンターの体を真っ二つに斬り裂いた。

「駄目だ……！」

常人では届かない力の発露。

だがメイルの顔に浮かぶのは苦渋。

「これは、私の力じゃない……！」

身体に纏わりつく、全能感という違和感。今なら、宗司が聖剣を苦手とした理由が文字通り身に染みて分かった。

聖剣によって作り変えられた肉体は、脳髓に刻まれた技術を元に最

適の動きを選択し、担い手に行わせる。

そこにメイが練り上げた力は存在しない。全てが最高最適、この世界における限界を極めた技の冴えは、それゆえに違和感が付きまとうのだ。

欲しいのは自分だけの力と強さ。

借り物の全能ではなく、己の血と他者の血で積み上げた理<sup>ことわり</sup>。

「だから……」

背後より迫る弓矢を知覚し、振り返ることなく体捌きで躲したメイは、聖剣よりさらなる魔力を放出して、己の体に纏わりつかせた。

さらなる力の発露にハンター達がいつそうの警戒と、魔力の網を使った連絡で援軍を要請する。

だがそれは違う。膨大な魔力を纏うメイが再度動き出した時、ハンター達は別の意味で小さくない驚愕を見せた。

「はあー」

一番傍にいたハンターへと踏み込むメイの動きがあまりにも『遅い』。

あの踏み込みと上段からの一閃が幻でもあったように、逆に困惑してしまふほどメイの動きからは速度と臂力が失われていた。

当然、稚拙な動きからの一撃ではハンターを捉えることは出来ない。容易に躲された動きに合わせて振りぬかれた鉈は、当然の如くメイの鎖骨を砕き、そのまま地面にたたき伏せた。

静寂。

何が起きたのか理解できないハンター達が、それでも警戒をしながらメイから数歩離れた場所で様子を伺う中、跳ねるように起き上がったメイは再度、稚拙な動きで聖剣を手に飛びかかった。

「一回目ええええー」

「ッ!?!」

鎖骨を砕かれ、肺腑も裂かれたはずのメイの肉体の傷は完全に癒えている。聖剣より常時肉体にかかる回復魔術によって、スニークスがそうだったように、メイもまた即死程度であれば一秒も待たずに復活出来るのだ。

だがスニークスと違うのは、メイルはメイルの意志で聖剣を握り、その膨大な魔力を用いて、あろうことか『己の体に状態異常魔術を使用している』ことにあった。

「やああああー！」

その結果、メイルの肉体は聖剣を使用する前の己の状態と同じところまで低下した。聖剣よりの加護は回復能力のみ、それ以外を全て省いた今のメイルは、殆ど不死身に近い肉体を持っただけの少女でしかなかった。

だから、二度目の太刀も掻い潜られ、返す刃はその上半身と下半身を分断する。

「二回、目……！」

しかし、己の体が真つ二つにされるといふ、その事実を認識するだけでショック死しそうな致命傷を受けながら、口より血を吐き出しつつもメイルは嬉しそうに笑ってみせた。

これでいい。

これがいい。

どこまでも不自由で、聖剣を使わなければ、自分の実力なんてこの程度。

この無様が己。嘲笑されるべき現在から、メイル・リンクキャットを始めよう。

「生き延びて、根っこ齧って……でも、流れを読まないといけないから、全能感はいらないの」

宗司の言葉を実践するためにメイルが行き着いた答えがこれだった。

生き残る。

そして、戦場の流れを感じる。

そのためにありとあらゆる方法を使用する。

「これで私は……何度でも戦える」

実戦に勝る経験は何処にもない。

弱いばかりの自分のまま、圧倒的な強者との絶望的な戦いをいつまでも行えることが、メイルは嬉しくて嬉しくて堪らなかった。

「奇怪な……！ 撃ち殺せ！」

死んでも死なず、死んでも笑う。

狂ったようなメイルへの嫌悪を隠すことなく、ハンターの一人が号令を下せば、即座に無数の矢がメイルに降り注いだ。

「は、はははははー！」

メイルは宗司がしていたように、矢の雨に存在する流れを見切り、その流れに乗るため、逃げることなく踏み出した。

宗司が何を言っていたのかよく考えろ。

これまでの稽古で培った全てを使つて解答を弾きだせ。

「ぎ、いがあああああああ!？」

稚拙な眼で見つけた隙に体を滑らせる。そして感じるままに刃を振るつたメイルは、それが必然であるように数本矢を弾いたところで、その全身に矢を浴びて絶叫をあげた。

だが、刺さつたところから回復によつて矢は体から落ちていく。その回復箇所を再度矢が突き刺さり、そして激痛が矢じりで貫かれる脳髓を刺激した。

繰り返される絶命と蘇生。

それでも尚、メイルは聖剣に操られることなく、己の意志で剣を振るい続ける。

「はは、痛っ、は、痛い、あはは！ 痛っ！ あははははは痛ははははは痛いよおおおお！」

血か涙か分からぬものを、再生を繰り返す瞳から流して、メイルは愚直に聖剣を振るつた。

どんなに体を貫かれても、それだけは手放さない。死と生が駆け抜ける中、生き残るために必要な力、今の彼女にとつての木の根っこである聖剣を、齧りついてでも放すつもりは無かった。

何せ、死ぬつもりはない。

だが、折角の機会を聖剣で台無しにするのは嫌だ。

痛みでぐちゃぐちゃになる思考の片隅で、我儘ばかりの己の思考を自嘲しつつ、次第にその刃が降り注ぐ矢の数は増え、見出した隙に滑り込ませた肉体が貫れる頻度が減っていく。

それは聖剣という常識外れの武装の加護があるからこそその成長だった。

命を賭した実戦に勝るものはない。

そして、死線をくぐることで得られる経験値は鍛錬のそれを遥かに上回る。

だがそこに付きまとう死という絶対にして最悪のリスクが今のメイルには極限まで薄まっていた。

とはいえ、常人なら何度も即死する痛みを繰り返せば、スニークスがそうだったように十回もせずには廃人になるのは間違いない。

しかし、メイルは痛みの中で笑っていた。

決して笑みを絶やすことなく、己の意志で体を動かし続けていた。

そして、死線を越えて、死線に沈む肉体は覚醒を果たす。

「見えるー！」

降り注ぐ矢の中にメイルだけに見える線が描かれる。その軌跡にそって体を動かし、線上の矢だけを弾いていけば、即死の一撃を逃れられるのが分かってきた。

推測は予感に。

予感は確信に。

今、自分の目に映る軌跡こそ宗司の語るものだと知ったメイルは、こみ上げる喜びに全身を震わせた。

「私、分かってきた！ 私分かってきたの！ 分かるよ流れ！ 見えるよ流れ！ これがソウジさんの言ってた流れがぎぎや痛あああ!?!」

歓喜に飲まれた瞬間、腹部を大きくえぐられた。

情けない。油断するとは甘い証拠だと、メイルは気を引き締めて再度視界に線を描き出す。

それだけではなく、その線を辿る体捌きも、無意識ながら徐々に練磨されていっていた。最初は不恰好な動きが、余分を削がれた舞踏の動きへと進化していく。

さながら蛹から蝶へと羽化したように、今のメイルの進化は劇的であつた。



「凄い！　これ凄いよ！　流石ソウジさんの言っていた通り！」

矢を弾き、地を走り、歓喜に震えて次を定める。

これでは足りない。

まだ足りない。

もつと寄越せ。

この身を高める、死を寄越せ。

「百二十九回だ！」

瞳孔まで開かれたその瞳が、ぎよろりと遠くに立ち並ぶカリスのハンター達へと向けられた。

「貴方達のおかげで百二十九回死んだからここまで来たの！　だから早く私を死なせてよう！　もつと知らない技を見せてよう！　何度も死ぬから！　何度だって死んでみせるから！　私、全部死んできつと必ず強くなるから！」

だから次を。

さらなる痛みを。

終わらぬ死線を私に寄越せ。

欲するままに嗤う少女——覚醒を始めた新たなる修羅の狂騒には、感情の见えないカリス達ですら、無意識に一步引かせる凄味があつた。

だが彼らの見せるその恐怖は、今のメールからすれば失望でしかない。

「何？　駄目だよ。早く私に百三十回目を頂戴！」

メールの求めにハンター達は応じない。死んでも死なず、死なせば強くなり、そして死なすと嗤う怪物を前に、何をすればいいのだろうか。

だがそれは今のメールには関係ない。超え続けた死地が与える高揚感と、強くなっているという実感。

それを与えてくれる相手がまだ無数といえるというのに、どうして我慢できるというのか。

「そつちがその気なら、無理矢理にでも私を殺させるから！」

言葉としては滅茶苦茶ながら、メールは己の言動を疑うことなくハ

ンター達へと走り出した。

その動きは余分を削られ速くなっていた。猫のような俊敏さで軽々と飛ぶように駆け抜けるメイルを見て、ハンター達も覚悟を決め、腰の鞘から各々鉈を引き抜いて迎撃の構えをみせた。

「あは、はー」

その意志に喜びを。再び己を殺すだろう敵の群れの只中へ、メイルは迷うことなく飛び込み、手近の者へと聖剣を振りぬいた。

——まずは己の流れを見極めろ。

そう言った宗司の言葉を噛みしめる。

漠然と振るうな。

歓喜の中で、思考はあくまで鋭敏に。聖剣を握る腕だけではない、肩、胴、腰、膝、爪先まで、腕より連動する全ての部位を感じ、どう動いているのかを感じ取る。

——そうすれば、ほら。

「はああー」

全身をぶつけるような斬撃が、ハンターが掲げた鉈と火花を散らす。先と違って躲されるようなことはなかった。防がざるを得ない速度と力がそこには乗っていた。

当然、聖剣が与える全能感から放つ斬撃にはまるで届かない。だがしかし、己の力で放った己だけの斬撃の価値は、仮初の力と比べるまでもなくあった。

これが今の私の斬撃。

これが私の鋼。

「これが、私の全部！」

喜びも束の間、メイルは胸部の激痛と共に、こみ上げる熱血を口から吐き出した。

振り返るまでもなく、胸より突き出した鉈は背後より襲い掛かったハンターの物。斬撃に酔うあまり、また周囲の流れを読むことを怠ったツケ。

メイルは痛みよりも己への恥で顔を歪めつつ、鏢迫り合いながらそのまま前に踏み出して突き刺さった鉈を引き抜くと、目の前のハン

ターが鉈に力を加えた瞬間、聖剣を握る手から力を抜いた。

——流れに逆らうのではなく、乗ることも良しと知れ。

宗司の助言通り、見切った流れを受け流すように逸らせば、無理に力を込めたせいでそのまま前のめりになったハンターに隙が生じる。そこを逃さない。

目敏く隙を捉えたメイルは、抜いた力をそのまま力に転換させ、ハンターの首を聖剣で薙ぎ払った。

確かな手ごたえは、あの日、死にたくないと懇願した賊を斬った時と同じ。

肉を裂き、骨を断つ。

命を斬り取る、本物の斬り応え。

「あはっ」

強化された肉体も意味をなさない。振りぬかれた聖剣はハンターの首を斬り飛ばし、痛みすら感じさせる暇も与えず、その命を終わらせた。

「やつ……!?!」

やった。と言おうとして、真っ直ぐに走ってきた二人のハンターが放つ斬撃がメイルの体を切り刻む。

「ぎあああああ!?!」

どれだけ経験しても、死ぬほどの痛みを受けて悲鳴を堪えることは出来ない。だが、絶叫しながら動くことは止めずに、追撃の刃を聖剣で流し、受け止め、吹き飛ばす。

己だけに腐心すると、周囲の流れを見誤る。

周囲の流ればかりを見れば、己のことが疎かとなる。

己を見据え、周囲を読む。

両方やらなければならぬというのが、ここまで難しいとは思わなかった。

だが、これなのだ。

「は、っははは」

喜ぶ暇も無かった。

周囲には未だ十を超えるハンターの群れ。そのいずれもが、メイル

へと冷たい殺気をぶつけてきているから。

だが、絶望はしなかった。

何せ、止められないのだ。

「もつと」

この衝動は止めたくないのだ。

「もつと」

欲するままに、貪り尽くすまで止められないから。

「もつと、もつと」

それは、メイルの心の奥底に最初から眠っていた才覚。

武の才覚ではない。

魔の才覚ではない。

足りぬ才を補い余って、人の域を逸脱させるその才覚こそ――。

「私、強くなりたいの」

だから殺せ<sup>死ね</sup>。

狂い咲く修羅の花。

理解出来ない才覚を、狂気と人は蔑んだ。

――

そこに辿り着いたクロナは、言葉を失っていた。

開けた広場には泥と矢の残骸、そして無数の死体がゴミ同然に散らばっている。

だがクロナはそんなものではなく、広場の中央に立つ者に目を奪われた。

全身が血で真っ赤に染め、手にした美しい剣からも鮮血を滴らせ、それでも二本足でしっかりと大地に立つそれを見た。

「……」

それは空を見上げていた。遙か遠くに浮かぶ、怖いくらいに冷たい三日月を、欲しい駄菓子を眺める童のように見つめていた。

見上げる視線は何を思うのか。ふと、手にした鋼を抛り捨てて、その周囲を満たす死骸の一つから鉋を奪い取り、それは三日月に鋼を向

ける。

「うん、聖剣無くても大丈夫……だけど」

少女の形をした何かは、その手に掴んだ己だけの答えに浸る。

これは自分だけの物。

誰のでもなく、自分だけが手に入れた、極みへ続く道ならば。

「もつともつと、強くなりたいなあ」

いつか、あの空に浮かぶ月すら斬り裂けるまで。

死骸に満ちた空間で月明かりを受けて嗤う修羅の様を、クロナは近

づくことも出来ずに眺める。

いつまでも、いつまでも。

遠く鳴り響く剣戟が終わるまで、クロナはそこから動くことすら出来なかつた。

## 第十八話 『連鎖する、狂気の骸』

カリスのハンター三十人程度との戦闘が始まってものの数分、たったそれだけでクロナとナイルの周囲には無数の死体が積み重なるという結果に終わった。

戦場跡の如く、死体以外にも周囲には突き立った矢や魔術によって刻まれた破壊の跡が幾つも残っており、その戦闘の凄まじさを物語っていた。

「…………ふう」

呼吸を一つ吐きながら、辺りを警戒しつつクロナは腰の鞘に大剣を納めた。

その体に纏った鋼鉄の鎧には、ハンターの放った矢や鉞での斬撃によって幾つかの裂傷と窪みが出来ているものの、クロナ自身はほぼ無傷と言っている。

だがクロナは決してこの勝利が己の手柄ではないことは分かっている。

「お疲れ様ですクロナさん。いやあ、彼らはかなりの強敵でしたわね」その勝利の要因となった協力者、ナイル・アジフは近くの木の根元に放っておいた荷物を背に担ぎ直すと、全く疲労した様子も見せずクロナを労った。

クロナと違って見た目にも戦闘前と殆ど変化はない。

唯一戦闘前と違うのは、その両手がカリス達の血で真っ赤に染まっていることくらいか。

「…………この、化け物が」

クロナの口が思わずついた悪態を咎める者はいないだろう。

何せナイルが行ったのは、宗司と同じくクロナの常識を崩壊させる異端の数々であった。

強化の魔術を使った人体は、使っていない時と比べてその能力は雲泥の差がある。小さな子どもですら、強化を使えば強化を使わぬ同年代の子どもに密度のある固い木刀で殴られたとしても、かなり痛い

だろうが、骨が折れることはないだろう。

初心者が使用してもそれほどの劇的な向上を見せる強化の魔術は、熟練者になればさらなる効果が望めるほどだ。クロナ程ならば、使用すれば大剣の一撃で地面にクレーターを作ることもすら容易である。

そしてカリスの使用していた強化も、熟練者のそれに匹敵していた。少なくともクロナの知る優秀な兵士の水準を超える程の精度であり、その肉体は鋼鉄の強度に匹敵するだろう。

そんな鉄壁の肉体を、武器も使わぬ生身の人間の素手が貫き、潰し、引きちぎっていく光景は、宗司という前例を知らなければ目を疑ったことだろう。

彼女もまた、己が届かぬ超常の存在。生身で魔を凌ぐ異端の化け物。

狂気の者。

ナイルは警戒心剥き出しで睨んでくるクロナの視線を受けても、決して笑みを崩すことはなかった。

「酷い言われよう……と、返すのも芸がないというもの。そう目くじらを立てないでくださいいな。私から見れば、魔術などという技こそ、それはそれは化け物染みていて恐ろしいのです。所詮、手癖が悪いだけのはしたない乙女ですのぞ」

「……ソージと似たようなことを言うのだな」

「棒振りが得意だともっ」

「聞いたのかい？」

「あの人ならそう言いそうだと思っただけです」

ナイルは指先から滴る血を軽く払うと、背負った荷物から取り出した刀の手入れようのボロ布で両手の血を拭い去った。

「さて、周囲には気配は無し……いい感じにソオジさんの方に彼らは集まっているようですね」

今も戦っている宗司達の居る方向に視線を向けると、微かに聞こえてくる鬨争の地鳴りに気分よく目を細めて酔いしれた。

大いに暴れてくれているだろう。しかもマイルという、現状では足手まといにしかならない枷があるため、こちらとは違ってハンターを

狩るには暫く時間がかかるはずだ。

幾ら宗司でも、枷が嵌った状態で一気に葬れる程、カリスというこの一帯を支配する先住民の力は低くない。

「……しかし、冷徹に人を招き入れる狡猾さを持ちながら、やり方は随分と優しかったですね」

「どういふことだい？」

クロナの問いかけに、ナイルは周囲に着弾した魔術——宗司達が受けたのと同じく、巨大質量の泥団子が弾けた一角を指さした。

「私達を殺すならもつと違う魔術があつたはずです。例えば周囲一帯を炎で取り囲み、延焼範囲を抑制することなど魔術であれば容易いことでしょう」

「炎の魔術を使えないというのは？」

「それも答えの一つかもしれませんが。ですが、魔術が生活に密着している以上、料理にしる松明にしる、何かしらで火を使うのは知恵のある人間が生活していれば当然のこと。少なくとも、彼らが話に聞いた通り他文化との交流を持たないのであれば、彼らが使う鉈は自前で作つたということ……ここでは、火を使わずに鉄を扱う方法があるのですか？」

「いや、魔法具等の一部の物品はともかく、普通の鉄ならば火を使つて精錬するのが普通だ」

「でしたら、彼らが火を扱うのはほぼ確実でしょう。なのに、我々を殺すのに最適な火攻めという手段を使わなかつた……あそこまでの矢を風の魔術で操れる者達です。このような樹海であれば火事の一つや二つ、彼らが生きてきた歴史で起きていても可笑しくない。ならば風の魔術で鎮火を促す方法や、それを応用した火攻めを使わないのは、やはり優しいと言わざるをえないでしょう」

ナイルの推論は納得が出来るものだ。クロナもその意見に反対するつもりはないが、それにしても何故そんなことを彼女は気にしているというのだろうか。

「言い換えれば不自然とでも言えるでしょう。あんな方法ではなくて、もつと適切な方法があつたはず。ですが彼らはまるで我々がどの



ような対処をするのか見定めているようにも見えた。矢が通じなければ白兵戦、白兵戦も通じなければ魔術、魔術も通じなければ矢と白兵戦と魔術を全て使って襲い掛かる……それにしても、魔術に至っては最低限のものしか使用しなかった」

言われてみれば不思議である。

確かに戦闘の最中、クロナも言いようのない『もどかしさ』を感じてはいた。

「何よりも疑問なのは……クロナさんをぎりぎり殺せる戦力しかこちらに投入しなかったことでしょう」

カリス一人ひとりの戦力を実際に戦うことで把握したナイルは、気配を殺してクロナに合流した己が居なかった場合、勝敗はほぼ五分五分だっただろうと予測を立てていた。

「……それは、確かに疑問ではあるな」

クロナもそれは分かっていた。だがそれも、ナイルという圧倒的な化け物が気配を殺すでなく、周囲の自然に気配を溶け込ませてこちらに合流したおかげで、勝負の行方は一気にこちら側に傾いたのだが。「あの数は流石に偶然とは言えないでしょう。ほぼ間違いない、聖域の効果によってクロナさんの能力を把握した彼らは、貴女が一人になった隙を見計らって同等程度の戦力を投入した……普通、確実を求めるならこの倍は投入するのが普通です。実際、遠くの喧騒を聞く限り、彼らの戦力はまだまだ十分にあるはずですね。先行するソオジさん達に感づかれずこちらに戦力を送れたのも、この森にある転移パスのおかげだと考えれば不自然ではない。故に余計、戦力配分を五分にした違和感が残るといふもの」

「だが、奴らは君が私に合流してから姿を見せただろうか？ 君の予測が正しいなら、すぐにでも戦力の大本……拠点Aとでも呼ぼうか。そこに連絡を取って戦力追加を即座に送ってもいいものだ」

「それは私も思いました。ですがクロナさんとの勝敗が五分になる戦力が、私が介入することでのどのように変動するかで……実力が未知数な私の能力を把握するつもりだったのかもしれない。まあこの推測も、拠点Aが転移を使用した戦力の供給、および情報伝達を担ってい

るのならば、という仮定の話ですが」

だがもしも事実だった場合、今周囲で骸を晒すカリスのハンターは、己が捨石になることを分かっている戦いを挑んできたということになる。

まるで己の意志の無い蟻が群がってきているのだと考えたクロナの背筋を嫌な汗が流れた。

ならば彼らは一体なんだというのか。思考を巡らせるクロナだったが、パンつと手を鳴らす乾いた音が彼女の思考を強引に中断させた。

「まっ、私から言っておいてあれですが、悩んでも仕方ないことです。私達は既に敵陣深く突入した。敵の戦力は未知数、実力は上々、対して我らはメイルちゃんという足枷はあるものの、個の戦力は彼ら一人ひとりを遥かに上回っている。ですが、人数があまりにも少なく、居場所も既に知られています」

「……行くしかない、ということか」

「そういうことになります」

覚悟を決めて気を引き締めるクロナとは逆に、ナイルはリラックスした心地で弾むように一歩踏み出した。

「では、私はこれで失礼しますね」

「ナイル……?」

クロナが声の方向に視線を向けるが、最初から存在していなかったかのようにそこにはナイルの姿が消えていた。

出てきた時と同じで、消える時も唐突な奴だ。

文句の一言でも言いたい気分であったが、先程言ったように今は前に進んで宗司達と合流するのが先決だろう。

疑問は幾つもある。

その中でも特に疑問なのは、ナイルがわざわざ相手の奇妙な動きをこちらに教えたことなのだが、クロナは思考を振り払うように駆け出すのであった。

ナイル・アジフという人間は嘘つきである。

しかも只の嘘つきではなく、常日頃語る嘘の中に、相手が信じるようなさりげない嘘を混ぜることで、重要な真実を有耶無耶にするのが大好きであるという筋金入りの捻くれ者だ。

「さて、ある程度のヒントは与えましたが……ここから見物ですね」  
ヒントを与えすぎてクロナに若干違和感を持たれただろうが、胡散臭さは最初から見せつけた通り、違和感は違和感のまままで終わるとナイルは結論した。

尤も、彼女にあんなにもあから様な助言をしたのは、クロナが気付くか気付かないか、そのスリルを味わい尽くすためだけだったというのが理由の大半を占めているのだが。

「しかしこうも上手くいくとは。やはりソオジさんにはやるのもたらしした使徒に違いないのでしょうか」

出会う前は、『どうやってガイア大樹海に件の勇者を行かせるか悩んでいたものである』。あの手この手で進路を変更させ、最悪の場合には脳髓を直接弄ってガイア大樹海に赴かせることも視野に入れていたが、最初からガイア大樹海に行く決めていたのは、ナイルが考えた中でも最高の展開だ。

「彼ら……ソオジさんならばカリスを狩りつくすのにそう時間はかからないでしょう。ふふ、まあ私自ら手を下しても良かったのですが、余興を行うというのは人生を充実させるというものです。ねえ？」

族長さん」

「はい、仰る通りでございます。偉大なるにやるの使徒ナイル様」  
「ヒエラもそうでしたが、かしこまらずともよろしいものを」

困った素振りを見せつつ、ナイルは己の隣で片膝をつくカリスの族長の頭に洗礼を与えるように掌を乗せた。

同時、頭を鷲掴みにした指先が何の抵抗もなくその頭蓋骨へと沈みこんだ。

「お、お、お、お、ナイル様の御手が我が額を汚染していくのが分かります……！」

「気になさらず、私からのちよつとしたご褒美ですから。本来ならすぐにも神の御許へ行く榮譽を与えられるはずだったのを、こうして手間を取らせているのです。神より授かりし我が御手で、少しでも神を感じていただくのは当然の権利ですわ」

愛撫するように族長の脳味噌を弄りながら、ナイルは視線の先に立っている巨大な石造りの門を見上げた。

全体に刻まれた術式は、現行の転移パスへと通じる道を繋げるもの。これこそ、ガイア大樹海に存在する廃棄されたとされる転移パスだ。

「まあ私としては、ソオジ様という混沌に挑み、命を散らせる権利を得られるというのはそれだけでご褒美のようなものですが……ふむ、やはり彼の太刀筋は魅力的です」

転移パスの機能を使用した遠見の魔術によって、ナイルの周囲に、宗司、メイル、クロナが今何をしているのかが空間に転写されて今も映像を見せている。その中で一際目立つ宗司の動きに、ナイルは熱い吐息をついて酔いしれた。

「美しい。想像通りに、想像以上……まさにこの世界において、私と同じ神の代行者として誘われただけのことはありませんね」

だが、まだだ。

ナイルは柔らかな脳の感触を楽しみながら喉を鳴らす。

「力を見せなさい。意を見せなさい。五臓六腑を吐き出して、あらゆる全てを晒すのです。その果てに、貴方が真の代行者ならば、きっと、神の試練を乗り越えられることでしょう」

全ては最初から、彼女が事前に計画をしていた通り運ばれている。

ナイルは初めから嘘を幾度もついて、自分が嘘つきであると彼らに意識させた。あるいは本気かどうか分からない冗談を言うような、本意の分からない女だと思われることだろう。

だからこそ、彼女はすんなりと彼らを騙すことが出来た。

ガイア大樹海に戦闘民族カリス。

そんなこと、彼女は最初から『知っていた』。

それどころか、事前に族長を洗脳さえしていたのだ。

その理由は彼女を召喚した第十八課エンドの面々。『世界の裏側の歴史』を記録し続けた彼らから、ナイルは事前に最低限の知識としてメビウス王国の成り立ちから、現在までの全てを知ることが出来た。そして、カリスがメビウス王国との盟約により、アポロン山脈より下りてくる魔獣と、国を滅ぼせる程の恐ろしい魔獣がアポロン山脈に生息しているという真実を民に教えないため、立ち入る侵入者を問答無用で狩りつくさせ、絶対に侵入させないようにしてきたことも、彼女は知っている。

だがそれは混沌を求める彼女からすれば目の上のたん瘤だった。魔獣という分かりやすい脅威があれば、容易く転覆しかけのメビウス王国に決定打を与えることが可能だろう。そしてそのうえで、エンドの面々を使つて信者を増やし、善悪等しく入り乱れた完全なる混沌へ近づけていくのだ。

だから彼女は王都を葬った勇者に会うよりも早く、ジムを使つてカリスの本拠地へ秘密裏に転移を果たし、族長を洗脳して配下に治めた。

本来なら洗脳などはせず、一人ひとり殺戮しつくすことも考えたのだが、族長から聞いたカリスの人数はナイルが殺すには人数が多く、少々手間がかかると彼女は感じたからだ。

そこで思いついたのは、聖剣の勇者とカリスをぶつけ合うというもの。その時は未知数であった聖剣の勇者の実力を知り、真に代行者足りうるかカリスを使つて試練を阿多会えることにしたのだ。

カリスという民族が、族長を頂点とした絶対なる縦社会になつていたのも功を成した。おかげで全員を洗脳する必要なく、試練に相応しく、族長を介して戦力を小分けに、宗司という男を味わい尽くすためにナイルは戦いを見守ることが出来ていた。

「私は嘘つきですが、知つた分だけ知つてもらおうというのは嘘ではないですわ。ですから、見せた分だけ、見せてください」

浮浪者を倒した時言った通り、自分は宗司にたつぷりと己の技を見せつけた。

だから次は自分の番だ。彼女の頭からはすっかり、宗司への質問の

見返りとして己の技を見せたという事実は消え去っている。

そのうえで、自分が見せた以上にこちらが宗司の技を知ったとしても、それはカリスの実力が高かったための不可抗力になるだろうと、ナイルは勝手に納得していた。

あくまで利己的。

どこまでも自己中心的。

だからこそ、彼女は己の内心に気付いていないのだ。

その笑顔の裏の奥——宗司という恐るべき剣客を見た瞬間に感じた脅威を払拭するために、食い入るように彼の实力を見定めているのだという事実を。

狂信者という一面の、彼女の本質とはやはり離れている。

その真実は宗司と同じく、強者を葬るために全霊を注ぐ修羅のそれ。

敵を知り。

知り尽くし。

そしていつか、必ず殺す。絶対に殺す。死んでも、殺し尽くす。

「さて……では最終試験の準備に移るとしましょう」

ナイルは一端中継を止めて族長の頭から指を抜くと、族長が両手で恭しく持っていたボロボロの布を見下ろした。

道端の隅っこを探せばありそうな程汚らしいその布は、しかし隠し切れない膨大な魔力と、周囲の空気を浄化していく清浄な力を滲ませていた。

その雰囲気はまさに神が授けた神秘のオーラ。見た目の汚れとは裏腹に、聖なる物としての力を十二分に漲らせているそれこそ、カリスがこの大樹海で人間の侵入を拒んでいる本当の理由。

聖剣と聖槍と同じく、人の目より隠された究極の一。

「聖骸布ハック、か」

聖骸布ハック。クトゥアがその身に直接纏っていたとされる伝承がある、『世界改変能力』を持つ聖装系統が一つだった。

見るだけで人々の心を穏やかにするそれを見るナイルの目に浮かぶのは、隠し切れないまでの嫌悪と苛立ち。邪神の供物など見るに堪

えぬと言った様子でありながら、それでも彼女がこれを手にしたのは、たった一つの目的のため。

「全く、チートと言いいこのハックと言いい……邪神のセンスにはほとほと呆れるほかありませんわ。その点、我が神のもたらした聖槍ジムの気の利いた皮肉よ。まさに下らぬ名前を嘲笑うにやるの息吹が……つと、今は神を賛美する時間ではありませんでしたね」

エンドに伝わる伝承によれば、聖剣（それと聖槍もだったが、その記述はナイルもエンドの面々も意図的に削除した）が暴走した場合、世界を正しい形に戻すため、神の纏った衣によつて世界を包み込むとされている。

「喜びなさい忌まわしき道具よ。我が手によつて、真の神に仕える最後のチャンスを貴様にくれてやる」

そんな伝承などナイルにはどうでもよかつた。

彼女がこの聖骸布に期待することはたつた一つ。

「邪神が油断したため、その隙を逃すことなく、神は聖剣より代行者足りえる逸材をこの世界に寄越しました……ならば、このボロ布もまた、新たな逸材を呼ぶに違いない」

先見の目を持ち、暗躍を得意としながら、ナイルは彼女が信奉する神と同じく、全てをかき乱す喜びのためなら理路整然としていない論理すら振りかざし、それを成し遂げようとする。

それも当然だ。この女に、正気など最初から存在していないのだから。

「つまりい！ 神はどちらが混沌の代行者に相応しいか試練を与えよと私に言っているのです！ おお！ ソオジさんという逸材ですら神にはまだ足りぬというのか！ ええ！ でしたら呼びましょう！ もう一人の代行候補を呼んでみせましょう！」

全ては混沌の使者の掌の上。血濡れの両手を夜空にかざし、ナイル・アジフは思う通りにことが運び、想像通りの狂気が生まれているこの場を自分がコントロールしている事実に打ち震えた。

「さあ呼びなさい族長！ 貴方の穢れたその血にて！ 真の奇跡を起こすのです！」

「はいいいいい！ 全ては混沌の導くままあああああ！」

族長は焦点の合わぬ目で空を仰ぎ、唾液をまき散らしながら、血の滴る頭に聖骸布をあてがった。

その真下の大地に巨大な魔法陣が描かれる。一秒だって同じ形を維持せず、あらゆる術式と陣を刻み続けるそれこそ、世界の外に在る適格者を呼ぶ門。

『世界の改変者！ 敬虔なる神の使徒よ！ 闇に染まる世界を光で染め上げよ！』

そして魔力の込められた詠唱は、門を開く鍵である。夜へ叫ぶ宣誓と同時に、族長を囲っていた魔法陣が昼の太陽如き閃光を周囲に放出した。

流石のナイルも思わず目を瞑り掌で光を遮る。目を開けることも出来ぬ光量は、数秒程してから徐々に収まっていき。

代わりにその場を満たしていくのは、芳醇なまでの血の香り。

収まっていく光の中、ようやく見られる程に収まってきた光の中を見たナイルは、感嘆の溜息をついた。



## 第十九話 『血濡れの騎士に、気を付けろ』

——血濡れの騎士に気を付けろ。

——見ればたちまち命を吸われ、終わらぬ苦しみ味わうぞ。

——血濡れの騎士を見つけるな。

——見ればたちまち血を吸われ、黒い鎧の染みになる。

——血濡れの騎士に気を付けろ。

——暗い夜闇を斬り裂いて。

——無くした中身を追い求め。

——伽藍の体を満たそうと、良いも悪いも関係なしに、今宵も誰かの血を啜る。

——血濡れの騎士に見つかるな。

——死にたくなければ、見つかるな。

時は未だに甲冑を着た騎士が戦場で活躍をしていた頃まで遡る。

その当時、西欧のある一帯の国々では、とある化け物によって上も下も関係なく、誰もが震える夜を過ごしていた。

その話が世俗や貴族社会に広まったのは数年前、国家間での小競り合いから派生した大国同士の平原での激突の時だった。

血で染まった全身鎧を纏った二槍を操る謎の騎士。騎士と言うには馬にも乗っておらず、只見た目だけは騎士然としていたそれは、敵味方入り乱れる戦場で、敵味方関係なく前線で暴れまわり——結果、二つの大国は保有する兵力を大幅に失うことになる。

まるで触れる者全てを飲み込む暗闇のようなそれは、激突の後半、その存在に感づいた二か国の兵士が異例の共闘を行ったにもかかわらず、鎧に触れることなく散っていったという。

一騎当千を越え、一騎当国とでも言うべき活躍をしながら、両国に被害をもたらしたことで、怪物と呼ばれるようになった謎の騎士。

以降もあらゆる戦場に現れては、その全てで敵味方の区別なく、戦場に在る命を虚無の闇へと飲み込んでいった。

初めは只の噂だったのが、戦場に現れる怪物の姿を目撃する者が次々に増えていくにつれ、話は尾ひれも背びれもついて、今では戦場で死んだ亡霊が騎士の形をして現れたなどと言われる始末。

だがそれは決して間違いというわけではないことを彼らは知らない。

しかし騎士の正体などどうでもいいのだ。

鮮血で濡れた騎士。森に潜む名前の無い怪物。

必要な事実は、この騎士がたった一人で大国を相手出来る恐るべき手練れであるということのみ。結果、騎士を打倒するために結託した両大国とその他周辺国家は、騎士の潜むとされる森に選りすぐりの精鋭を投入することになった。

「血濡れの騎士……！ 貴様は……！」

その結果は、紅蓮に染まる森で無数と骸を晒す兵士の数々を見れば言わずともわかるだろう。怪物を葬るために集められた軍勢、千。いずれも各国では一騎当千と呼ばれた強者達も、今や生き残りは傷つき疲弊した数十人を残すだけとなっていた。

先頭に立つのは代表として選ばれた大国の騎士。今回の軍勢の中でも特に秀でた実力を誇る彼も、今は肘より先が失われた左腕の傷口を庇いながら、崖の上に立つ漆黒の騎士を睨むばかりだった。

森の切れ目である崖の下は、底すら見えない溪谷となっている。多数の犠牲を払いながら、彼らはようやく、森に潜む騎士をここまで追い詰めた。

そのために、どれほどの犠牲が生まれただろうか。

敵もまた極限の状況に立たされていた。

血濡れの騎士と呼ばれたその体には、幾つもの矢や槍が突き立っている。疲労も限界を越えようとしているのか、荒々しく上下する肩は、目に見えて限界が近いことを知らせていた。

だが、そこまで追い詰めるのに、千の騎士は数十にまで減らされた。たかが一体の怪物に、選りすぐりの騎士達は全滅寸前まで追い詰められてしまった。

この様で、何が精鋭と誇れよう。

眼前の怪物に比べたら、一騎当千もそこらの兵士も、等しく意味の無い雑魚に過ぎないというのだろうか。

「……無意味」

騎士はそんな彼らの努力を嘲るようにそう言い放った。追い詰められている事実を知らながら、それでも尚、未だ戦う余裕のある血濡れの騎士に、誰もが返す言葉を持っていない。

事実として、絶望的な差が両者にはあり、人間を超越した力を持つ怪物は、さながら神話に語られる怪異そのものと誰かが呟いたものだ。

勝てるわけがない。

倒せるわけがない。

自分達は、怪物を葬る英雄にはなれないのだ。

「だからとて……！ 散った命に報いるために、引くわけにはいかんのだ！」

失った左腕の傷口を布で縛った男は、腰の鞘より王より賜った剣を引き抜いた。絶望にありながら、決して怯むことは無い。天高く掲げる剣こそ、その証明。炎に照り返す刀身は、その背後で疲労と痛みで呻く精鋭騎士達を導く光となった。

そう、諦めるわけにはいかない。

ここで諦めたら、何のためにここまで戦ってきたのだろうか。

諦めたらそれこそ怪物が言うように、本当に無意味になってしまうではないか。

「そうだ！」

「我ら、貴様を葬るために、この命を散らすと決めた身なれば！」

「臆することなく前を向く！ 怪物とて、我らの覚悟を無意味と呼ばせはせんぞ！」

次々にあがる騎士達の咆哮を背に受けて、男は掲げた切っ先を崖に立つ災厄へと向けた。

「最早、後顧の憂いなし！ いざ行かん！ 進軍せよ！」

男の号令を受けて、傷だらけの騎士達が最後の特攻を仕掛ける。策などはない。彼らを突き動かすのは、前へ前へこの身を押し出す灼

熱の思いだけ。

その熱を束ねて、虚無の具現となりし怪物を埋め尽くすしか、道は無い。

「……熱い」

血濡れの騎士は、熱波となつて襲い掛かる彼らを感じて、か細い声で呟いた。

刹那、雄々しく叫んで飛びかかつて来た男の一人が、血濡れの騎士が放つ神速の刺突を真正面から受けて絶命した。

貫通ではない。胸に刺さつた槍は、纏つていた鎧を容易く貫いて、振りながら突き抜けた切っ先の周囲の肉と鎧がはじけ飛ぶ程。結果、胸部に巨大な風穴が空くという常識外れの魔技は、体中に槍と矢を受け、疲労困憊にある人間が放てるものとは思えない。

やはり、怪物。

人間では届かない領域にそいつは立っている。

「怯むなあああー！」

最初に号令を発した男も、周囲の騎士の波に加わつて血濡れの騎士へその刃を放つた。それに呼応して、幾人もの兵士が手に持った槍や剣を血濡れの騎士目掛けて振り、突き、薙ぐ。

そのまま押し潰さんと迫る人の壁、剣と槍の剣山。さらに怪我はしているがそのどれもが一騎当千を誇つた者の太刀、幾ら鋼鉄を纏おうとも、それごと断ち切る鋭さと、血濡れの騎士には劣るものの、常人では反応すら出来ない速度で迫る。

「……」

だが、その全てが血濡れの騎士には届かない。

二槍を巧みに操つて、血濡れの騎士は全ての攻撃をいなし、崩し、弾き、あるいは躲す。

「……ッ！」

だが騎士達もそれはここまでの戦いで重々承知。怒涛と走らせた初手が受けきれられるのと同様、いつの間にか血濡れの騎士の左右に回り込んでいた者が、視界外から槍を突き出した。

ただでさえフルフェイスの仮面を装着しているため視界が悪い騎

士にとって、音も無く放たれたこの一撃は知覚すら叶わない。

さらには、決死の覚悟と、卑怯と知りながらあえてそれをした彼らの決意。壮絶を極めた意志を込められた矛先は、練り上げられた技量と相まって、空気の壁すら貫く究極へ到達する。

——これで、終わりだ！

回避も迎撃も、そも、突きさされるその刹那まで知覚させるつもりはない。

「……まだ、熱い」

だが血濡れの騎士は、視線すら送ることなく左右から迫ってきた槍を、放たれる前から分かっていたかのように、事前に体を逸らすことで躲してみせた。

「なっ……」

「……無念ッ」

己の全てを捧げた技を、赤子のそれと同じように抜けられた騎士は、驚愕と苦渋の表情を浮かべながら、返す槍にてその脳天を破砕されて絶命する。

「これが……！」

まただ。

また、本来なら避けられない一撃を抜けられた。

戦いが始まった当初は、その物量にて回避できない隙間を作ることでも何とか攻撃を加えていたが、数が減ってきてからは、あらゆる方向からの攻撃も、僅かな隙間さえあれば血濡れの騎士は回避していた。

まるで、背中に目があるかのように。

そんな思考をリーダーの男がしている間にも、最後の特攻に全てを賭け騎士達が次々と散っていく。

この怪物と戦い、この最後まで生き残ってきた彼らは、精鋭の中でも選りすぐり。誰もがその名を知る偉大な男達だというのに。

勝てると思っていた。

今も勝てると思っている。

だがこれは何だと言うのだ。

男も憧れた偉大なる英雄達が、雑兵の如く死んでいる。

この光景は何なのだ。

まさに、血濡れの騎士が漲らせる虚無に引きずられるように、誰もかれもが無意味と断じられ死していく。

「ぐ……う、ああああああああ！」

消えていく憧れを見ることに耐え兼ね、男は、男も含めた誰もが吼え滾った。

怪物め！

森に潜む血濡れの騎士め！

戦場（いくさば）の戒律も知らず。

騎士装束をまといながら、騎士の在り方すらも知らず。

一切合財を食い散らかし、血を吸うばかりの怪物が！

「貴様を！ 認められるものかああああああ！」

それは、あらゆる感情を燃やした男の執念だったのかもしれない。

あるいは、怪物と言えど、疲労によって隙が出来ていたからかもしれない。

だがいずれにせよ、激情を焦がし、散っていく仲間の流す真紅を踏みしめ、喉元より飛び出す全てを乗せた男の刃は、血濡れの騎士に体を貫かれながらもその腹に突き刺さる。

そして、体ごと飛びかかった男に続くように、残った騎士の全てが血濡れの騎士へと群がった。

その様は英雄には程遠く、腹を空かせた乞食が道端の生ごみに群がるような醜悪なる光景。

誰もかれもが死んでいく。

誰もかれもが消えていく。

謳われる通り、血濡れの騎士を見つけた者は、有象無象も関係なく、ただ骸を晒すだけ。

だがそれでも、彼らは届いた。

一つの肉の塊となった男達の勢いに押され、血濡れの騎士は崖を踏み外して奈落へと落ちていく。

この高さならば、たとえ怪物と言えど死ぬしか道は無いだろう。

「……ようやく、熱いのが消えた」

だが、己の死を前にしてすら、血濡れの騎士は己の周囲で滾っていた熱を散らせたことへの喜びすら感じていなかった。

そして、彼らの身を挺した特攻は結実した。

だがその最後を見届ける者は何処にもいない。

残されたのは紅蓮に彩られた森と、その一帯に散らばった騎士達の醜悪な死骸のみ。

誰もそこには存在しない。

どこにも何も、居やしない。

まさに、血濡れの騎士が謳われる通り、周辺国家より集められた選りすぐりの騎士達は、怪物を谷底へ落とす代償に、その命を全て無意味に散らしたのであった。

そう、無意味だったのだ。

男達の決意も、死を賭した特攻も、全てが全て無価値で無意味。いたずらにその命を散らせただけの、不毛な行いに他ならない。

何故ならば――。

「……素晴らし〜」

世界に満ちる光がそこにあるというのに、感じたのは空間ごと削り取られたような虚無。

その空間だけぽっかりと穴が空いたかのような違和感をそのまま引き連れて、光の中からそれはゆっくりと現れた。

「……光」

その手に持つのは、長大な鉄——身長程の槍が、左右それぞれ一本握られている。

そして右手の槍の先端には、恍惚とした笑みを浮かべる、首だけになった族長がぶら下がっていた。

「光は、要らない……」

鋼鉄に遮られた声はくぐもっていて男か女かも分からない。

クロナと同じく、全身鎧を纏ったそれは、見ただけならば騎士と言えればいいのだろうか。だが高潔なイメージがある騎士と、眼前のそのイメージは真逆のものであった。

虚無を纏ったその姿。

槍と矢を受けて流れる血潮と、それ以上に体に浴びた、あらゆる命の鮮血で黒く染まった鎧の騎士。

「その、光も……」

消して見せよう。

見ただけならば、まるで傷の影響など見て取れない騎士だったが、それでも腹部に刺さった剣はその命に届いたのか。目の前のナイルに槍突き出そうとしたところで、仰向けに倒れてそのまま動かなくなった。

「どうやら、私と同じみたいです」

ナイルは、騎士の壮絶な戦いの跡を見て、己もここに転移される直前のことを思い出して邪悪に微笑む。

「やはり素晴らしい！ 混沌の代行者である故、その直前までもまた混沌を振りまいていたということですね！ ふはははは！ まさにソオジさんの最終試練に相応しい！ 相応しい逸材に違いありません！」

一通り高笑いしたところで、ナイルは己の胸部に右手を乗せてそこから聖槍ジムを召喚して、今にも死にそうな騎士に矛先を突きつけた。

「故に、戦え。混沌を担うために、いつまでも何処までも戦い続けていくのです！」

ジムより与えられる無限の魔力がナイルの体より溢れだす。その魔力を己の体を操るように巧みに束ねたナイルは、その全てを騎士に向けて放出した。

『大いなる慈愛の歌声よ、罪深き我らの業を払いたまえ』

瀕死の人間ですら瞬時に回復させる最高位の回復魔術が発動する。蛍の放つ輝きのように小さな光の粒が騎士の体に入り込むと、その全身が全て光に包まれた。



その光より、突き刺さっていた槍や矢が吐き出されるように騎士の体より落ちていく。さらに、穴だらけの鎧すらも癒しの光は修復した。

だが、最高位の回復魔術ですら、その鎧が吸ってきた数千を超える人々の生血で彩られた漆黒は消すことは出来ない。光が消えた後、むせ返る程の血の香りだけがそこに残っているのを感じて、ナイルは感極まったように体を震わせた。

「ああ、美しい……貴女がこれまで築き上げた骸の数と、それにより生まれる怒号と悲哀、そして立ち上がる者達が掲げる穢れなき正義！そして、その正義すら飲み干す貴女の姿が目には浮かぶ！」

その全てを思い描いて至福に酔ったナイルだったが、気絶していた騎士の指先が動いたのを見て、妄想を止めて優雅に一礼を一つ。

「では、後はめくるめく。ソオジさんと至福の時に酔いしれてくださいな」

ナイルはそう言つて、音も無く森の中へと消えていった。

後に残されたのは、ゆつくりと体を起こした騎士と、その手に握られた槍に貫かれた族長の首と、泣き別れた胴体だけ。

「……」

騎士はナイルが消えた方向に顔を向けたが、それを追おうとはしなかった。鋼鉄で見えないが、ナイルに興味すらなかったのだろうか。

いや、あるいは逃げたところで――。

「あつちに、沢山」

騎士は遠くより感じる気配へ体を向けると、ゆつくりと立ち上がった。そこで、思い出したかのように右手の槍に突き立った族長と、もろとも貫かれた聖骸布を軽く薙いで放り捨てる。

吹き飛んだ首には興味は無いのか。そのまま歩き去ろうとした騎士は、ふとそこで立ち止まり、穴の空いた聖骸布を左手の槍を地べたに突き刺して拾い上げた。

「暖かいのは、要らない」

槍に付着した血を拭い去って綺麗にすると、今度こそ騎士はその場を後にする。血をぬぐわれて捨てられた聖骸布は、風になびいて森の

奥へと消え去っていった。

「全部、要らない」

それしか知らないと、全てを意味無しと断ずる虚無を纏った騎士が行く。その先に待つ混沌とした戦場すらも、手にした二槍で虚無へと帰すべく、翻した矛先は月の光すら斬り裂くのがあった。

## 第二十話 『騎士を、斬る』

月光の下、静けさに飲まれた夜の闇。先程まで響き渡っていた闘争の喧騒はいつの間にか失われていた。

それどころか、鬱蒼としていただけの森林は、今や美しい緑を覆い尽くす臍物の肉林へと変貌している。

メイルと離れて、足の赴くまま森を駆け抜けた宗司が斬り伏せた骸の数、数百。王国との盟約より数百年以上、大樹海をあらゆる存在から、それこそ人間では抗いような存在である魔族からすら死守していた最強の戦闘民族の群れを、傷一つなく斬って捨てた。

辺りにぶちまけられているのは彼らの死骸だ。屈強な戦士達は誰もが一刀の元に無残と斬り捨てられている。月明かりと星明り。今宵の雲一つなき空の下、木々より微かに漏れる輝きを、散乱する臍腑の数々は、不気味に照り返していた。

未だ熱のある臍腑からあがる蒸気は命の訴える最後の残滓か。修羅の描く酒池肉林。この世界に呼び出されてすぐに作り上げたのよりも遙か凄惨な光景は、宗司が思い描く珠玉の極地のはずだった。

だが既に宗司の思考は強者とのめくるめく死闘への歓喜から冷めている。いや、正確には冷まさせられたとでも言うべきか。

「近い……」

宗司の眼が見据える先は、肉を纏った草木の向こう側。この場に立ち込める濃厚な死の香りを全てかき消す程の恐ろしい気配のため。

いや、それは最早気配ではない。というよりも、気配がないからこそ気配を感じ取れたという奇妙な感覚であった。

言うなればそれは無だった。

何もかも飲み込む虚無が、周囲の命をかき消しながら迫ってくるような奇妙な感覚。

死も。

生も。

あらゆる全てが無価値と断ずるようなそれは、何も感じ取れないことで周囲に生まれた奇妙な空間をそのまま引き連れて、宗司の目の前に現れた。

「……」

先程まで感じていた虚無感とは対照的に、現れたそれは宗司に巨大な城のような印象を与えた。否、頭からつま先まで纏った乾いた血で塗装された漆黒の全身鎧は、まさに城であり、これまで吸ってきた命がどれほどなのかをまざまざと語っている。

両手には宗司の背丈ほどもある戦傷が無数と残った槍が一つずつ握られていた。その切っ先には今まさに吸ってきたのだろう。真新しい血の赤が薄らと残っている。

間違いなく、殺人者。

宗司は知らぬが、国を裏切りし黒騎士という名がその殺人者には似合っている。

前に立つだけでも総毛立ち、一目散に逃げ出したくなるような騎士は、その虚無の全てを眼前の宗司へと向けていた。

だというのに、宗司は朗らかな笑顔を浮かべて虚無と相對する。

「月光、月下、星の下に強者が立つ赤色の大地。良い夜だ。お主もそう思わぬか？」

「……」

「返事は無し、か……」

それは残念だ。

そう呟こうとした刹那、宗司の耳元を風が吹き抜けた。

返答代わりに放たれた神速の刺突。風切り音が後に聞こえる程の一撃を放ったのは、鈍重な鎧を身に纏った騎士のものだ。

「？」

だからこそ、宗司の首を貫くはずの一撃が空を裂いたことに騎士は首を傾げた。

その疑問に、宗司は笑みを一つ返すことで答えた。

「見誤ったな、阿呆」

確かに恐ろしい刺突だったが、意の分かり切った一撃を躲すことな

ど容易い。

宗司は顔の横の柄を刀の腹で勢いよく叩くと、その勢いのままに名も知らぬ騎士へと突撃した。

柄を弾かれ懐に穴が空いている。狙いはその一点、地を這うようにしながら疾駆する宗司の影は、夜闇と相まって目視も難しいだろう。

そして眼前の騎士の視線は宗司を見ていなかった。その意を察した宗司はそのまま懐へと飛び込んで——直感に動かされるがまま、上半身を強引に後方へと仰け反らせた。

「うおっ！」

顔の上を突風が駆け抜け、驚きの声が漏れる。振るわれたのは左手の槍。苦し紛れでもなく、完全にこちらの影を捉えていた薙ぎ払いに宗司は疑問を浮かべるも、即座に槍を掴む手を矛先に詰めて切っ先をこちら目掛けて振りかざした騎士の手練れに感嘆し、疑問は回避と共に払う。

仰け反った状態から右手の刀を大地に突き立て、そこを支点に体を持ち上げつつ、刀の反対側へと飛ぶ。脱力を用いた高速の体捌き、ついでに左足を振り下ろされた槍の柄に叩き込み、騎士の切っ先を僅かに逸らした。

着物を掠めて刺突が突き抜ける。そこまでしてようやく掻い潜った騎士一撃、その結果、宗司は着地の時己が背を向けている不利に苦笑した。

——あるいは、見誤ったのは俺の方か。

一瞬の油断も許されない緊迫した超接近戦でそんな余分を考える。だが余分ではない。

いや、余分か。

雑念であり、しかし余分があるとは余地がある。

余地があるならその分回せ。

斬ることに腐心せよ。

そう思う今こそ余分とみるべきか。

ともかく動け。

くるくる回る思考をそのまま刀に宿す。宗司は地面に突き刺した

刀を引き抜き、反転しながら背後の騎士へと斬りかかる。

それよりも一瞬早く放たれていた矛先と刀がぶつかり合い、衝撃に火花が散った。薄暗い月明かりの中、一瞬だけ明確に照らされる両者の視線が交差した。

一方は笑みを。

一方は乾いた血で塗装された鉄仮面で伺えず。

だがともに握った鋼に殺意を乗せた修羅達。間髪入れずに弾き合った得物を構え直し、二つの影が僅かに指す月明かりの下で重なった。

音が無数と重なっていく。

それに合わせて最初は無数とあった火花も、徐々に両者の間に同時にいくつも飛び散った。

加速している。

宗司と騎士。互いに今出会ったばかりの二人は、今や同一の物体となったかのように重なり合い、絡み合うように剣戟を重ねていた。

——強い。

どちらともなく、互いに同じことを瞬時に悟る。

二槍の奇怪な槍術を扱う騎士は、その長大なリーチだけでなく、柄の握りを振るうたびに微妙に変えることで間合いを騙し、さらに懐に迫られようが容易に応じてみせている。

刀一本の宗司は、慣れぬ二槍を巧みに受け流しながら、それでも独自の歩法による間合いの錯覚を駆使して槍を搔い潜り、幾度かその鎧に傷をつけていた。

速さは鎧を纏わぬ分宗司が有利。そして得物の巧みも宗司に有利。

その差は僅かに過ぎないが、いずれ決定的な差となって両者の間にある天秤を傾くはずだ。

傾くはずである。

しかし、これはどういうことなのだろうか。

「抜けぬか……い！」

未だ鎧を浅く斬るのみで、己の斬撃が一撃も届いていない事実。宗司は歯噛みする。

そう、宗司が思っていたのとは違い、火花が百を遙か超えて二百を遠くに置いた時を経て尚、両者の天秤は拮抗していた。

——間違いない。

その間に宗司はようやく騎士に感じていたものと、この斬り合いで浮かんだ新たな疑問の二つの答えに気付いた。

果たしてどの程度の時間が過ぎ去ったか。両者互いに渾身を込めた一撃が弾き合い、刀と槍を手元に引き寄せ構えつつ、一步の空間が二人の間に生まれた。

一呼吸。

落ち着いて。

言葉を一つ挟む間を。

「……お主、魔術を使っておらん？」

短くない激突の中で、宗司は眼前の敵がこの世界の人間の誰もが使用していた魔術を一切使用していないことに気付いた。

それはつまり、聖剣という世界最強の力を誇る規格外を生身で制した宗司に、相手もまた同じく魔術を使わぬ単純な生身で拮抗しているということに他ならない。

だがそのことに驚くことはない。何せ宗司が確認したかったのは魔術の有無ではなく、別のこと。

「魔、術……魔術……？」

仮面越しでくぐもっているが、初めて聞こえた声に疑問がさらに一つ増える。それはさておき、宗司はそこでようやく合点した。

「成程、お主も此処に呼ばれた口か？」

聖剣に呼び出された宗司。

聖槍に呼び出されたナイル。

それと同じく、この騎士も同じような何かに呼ばれたのなら納得いった。

しかし騎士はそんな宗司の問いかけには答えず、明後日の方角を見ながらぶつぶつと何事かを呟くばかりだ。

「魔術……そうだ、魔術、私に……魔術……皆のため、魔術……奇跡を……きせき……でもみんなしんで……きせきが、まじゆつみたいなき

せきが！」

「ちつ、気狂いか」

どうやら疑問が氷解する代わりに、触れてはいけない部分に触れてしまったらしい。ぶつぶつと繰り返し「まじゆつ、きせき、みんな、ひとり」と呟いている騎士を眺めていると、突如騎士は持っていた槍を二本とも落として己の頭を抱えた。

「ああああああ！ いやだ！ ひどりはいやだ！ こわい！ さみしい！ たすけて！ こんないやなの！ なんでみんなしんでしまったの!?! わたしをおいでしんでしまったの!?!」

苦悶しながら両膝をつく。先程まで華麗な槍捌きを見せていた騎士が、今はまるで親を見失った幼子のように取り乱している。

「おとうさま！ おかあさま！ せんせい！ みんな！ どこ？

ねえどこ？ わたしはよいこでいます！ がんばってころしました！ いっぱいいっぱい！ あたかいかいものをなかつたことにして！

あいてしていたわ！ わたしはみんなをあいつていたの！

ああああああ!! さむい！ さむいよ！ たすけて！ ぐらいの！ だれか！ だれでもいいからああああああ！ ——皆、要らないわ」

だが宗司はあまりにも分かりやすい隙を見せているはずの騎士に踏み込めずにいた。いや、醜態をさらす相手に斬りかかるのも阿保らしいと思っているのも事実だが、宗司はそれ以上に、醜態をさらして尚、その騎士に一切の隙が見えない事実によって踏み出せずにいた。

「気狂い……いや、正気で至れる境地ではない、か」

己もまた、狂気の果てに今の極地に到達した。

であれば、魔法というこの世界固有の力を使わずに自分と拮抗した眼前の騎士もまた、正気ではなかったのだろう。

だから達した。

故に、その醜態もまた騎士の強さの一つであった。

「何も見えないの。暗いわ。冷たいわ。だからねえ、そこにいらっしやる？」

不意に、騎士はそう言うのと被っていた鉄仮面を静かに取り外した。



そして宗司が感じていた疑問がさらに一つ完全に解けることになる。

「……成程な。盲目だったか」

鉄仮面の内側にあった眼は、両目ともに額から頬に走る痛々しい傷跡によって完全につぶれていた。

だがそれでも、月明かりに濡れる漆黒の髪は神秘的で、陶器のようになめらかで白い肌と相まってその美貌は決して損なわれてはいなかった。

最早、その見た目から騎士が『少女である』ということへの驚きは宗司には特にならない。クロナから始まり、ナイルという極限の暴力を体現した女を見た後では、今更似たような女が現れたところで感じるものはなかった。

しかし、年の頃は鎧のせいで勘違いしていたが、宗司よりも幼く見える。

ふと、自分がこの少女と同じ頃、果たしてここまでの武力を得ていたかと考えて、苦笑する。

「そんなことはどうでもよいか」

あの老剣客がそうであったように、生涯一度の殺し合いで、年がどうこうと言うのは愚かなことである。

宗司がそう思っていると、少女は閉じたままの眼で空を見上げた。まるで今は失われた光を追い求めるような行為は、美しくも儂くあったが、それ以上に最初に感じたあの虚無感が全てをぶち壊しにしていた。

「素敵な貴方、綺麗な貴方、優しい貴方、暖かい貴方、愛しい貴方、卑しい私」

少女はそう言いながら、両手に持った鉄仮面を無造作に林へと投げ捨てた。最早、己を隠す仮面など不要とでも言うように、はたまた、己を繋いでいた鎖を自ら断ち切るように。

「ああ、貴方が光なのね？」

改めて握りしめた二つの槍が、少女の虚無に引きずられるように存在感を失っていく。

それは盲目の少女騎士が生み出した狂気の産物。視覚というハンデを負いながら、否、視覚を失ったことで得た極限の一つ。

最後の疑問が氷解するのを、宗司は感じた。

「私を優しく抱きしめて」

「ああ、つまりお主……」

「愛していると囁いて」

「見えぬ代わりに……」

「——でも要らないわ」

「俺より先が、見えるのだな」

「私は『くらやみ』が欲しいだけなの」

そう告げて、少女はまるで暗黒の如き無貌の表情のままに宗司目掛けて踏み込んだ。

同時、雷光と見間違う刺突が二つ宗司へと走る。宗司は一つを弾き、一つは躲しつつ、再び始まった音速領域の剣戟の間、少女が持つ恐るべき能力に喜悦を浮かべる。

速度も、術理も、先を見られているならば通じる道理は何処にもない。

全てにおいて宗司に劣りながら、宗司と互角に渡り合えるその正体。それは、暗黒より生れ出た、あらゆる全てを見通す眼。

それが、心眼。

呼吸を聞き、風に触れ、血潮を嗅ぎ、鉄の味を知る、潰れた視覚以外の感覚を全て鋭敏にした結果、少女の知覚領域は目に頼る者達よりも遙かに優れた領域に到達していた。

失われた視覚以外が異様に発達したことによって少女が得たその力。それは見切りという一点のみが宗司を上回ることによって、宗司の技量と拮抗状態を作り出しているのだ。

無論、少女の技量も決して侮れるものではない。

心眼のみならず、僅か十五、六程度の年齢でありながら練り上げられた武力は一騎当千を超える領域へと至っている。年齢を考慮するならば、その才覚は宗司という天才から見ても遙か天上。極上の中の極上と言ってもよい究極を彼女は秘めていることだろう。

ならば、今は惜しいのか。

斬るに値するが、まだ先に至る可能性があるのではないか。

だとすれば、ここで斬るのは早計だろうか。

要らぬ思考が沸々と剣戟の合間に加速する。

斬って。

斬られて。

そも、この敵手を俺は斬れるのか？

「まあ、斬れたなら斬るのだろう」

ゆるりと断つのだ。

宗司はそう結論付けてから、思考の全てをこの敵手へと注ぎ込み、いつそう苛烈な斬撃を振るった。

しかして今、鉄仮面を外した少女の耳は、仮面越しではなく直接宗司の息遣いや足音、刀の風切り音に、脈打つ心臓の鼓動まで正確に捉えることで完全なものに至っている。その領域は、己の全存在を闘争に変換した宗司の力をもってして、完全に斬り崩すことの叶わぬ鉄壁へと化していた。

懐に入り込めない。心眼が完全となった少女の見切りは、宗司の歩法も刃の神速も全てを見切り、適切な応手を返している。

だからこそ斬りがいがあるというものだ。

「試しに工夫するぞ」

宗司は自ら後方に飛び退く。当然、その分だけ詰めてくる少女目掛けて、強烈な殺気を叩きつけた。

メールや賊を拘束したものは違う。常人ならそれだけで心臓が止まる程の強烈な殺気は、上段よりの斬撃というイメージを描くことよって、実際に宗司が上段から斬りかかる映像を相手に錯覚させるほど。

殺気を用いた宗司の奥義。とはいえ互角の技量相手なら普通は通用しないが、盲目の騎士ならば、他の感覚が鋭敏になっている分効果が十分望めるはずだ。

それだけではなく、宗司は上段よりの意をそのままに体は下段よりの掬い上げを試みる。意と動を切り離す。これもまた奥義の一手。

培った極地を二つ。試しと言いつつ、その実必殺の一閃を前に——  
少女はそれが当然とばかりに、下段よりの閃きに槍を合わせた。

「ッ!」

「嘘つき」

目を剥く宗司と、薄ら笑う少女は対照的。虚実を完全に見抜かれた。技巧を崩された衝撃に僅かな驚愕。

それは明確な隙。

見誤った、そう思った時には肩が熱を帯びていた。

鋼鉄は走っている。矛先が宗司の肩を浅く切り裂いている。

捉われた。

見抜かれた。

代償に痛み、焦り。

崩れた体に迫る二槍の冴え。

これは——

死ぬ。

「ッ！ おお！」

瞬間、加速した槍捌きを、宗司はらしくもなく己を奮い立たせる雄叫びをあげて迎えた。

左肩の鈍痛が脳に響く。だが今は無視。好機を逃さず畳み掛けてくる少女の攻勢をしのぐ。

繰り返し視界に走る点の軌跡。槍というのはその特性上、距離を離れたところからの刺突が特に凶悪である。

何よりも恐ろしいのは刺突とは視界には点としてしか映らないということ。これが袈裟斬りなのであれば視界に移るのは線であり、予測は遥かに容易なのだ。

例えば宗司が操る刃が、九の斬撃に刺突が一程度の間隔で振るわれているとするならば、少女のそれは一の斬撃に刺突が九。長大なりーチと無数の点を織り交ぜたそれは、さながら真正面から降り注ぐ豪雨とでもいべきか。

「っ……っ！」

機先を制され、流れを奪われた。

自覚はあれど、一度傾いた形勢を立て直すことは難しい。それでも必死に刀一つで豪雨を凌ぐ宗司の周囲を千の火花が彩る。照る顔には笑みではなく歪み。花乱れる虚空を楽しむことなど、死線に立たされた己には全くない。

余裕なし。

さつきとはまるで違う。

全く、こうなるならもつと早くに雑念を捨てれば良いものを。

そう考えるこれもまた雑念。

つまり余裕。

ならばまだまだいけるだろ。

己の余分を削いでいき、果てに待つ一本の刀へと成り果てられるはずだ。

「面白い……い！」

苦悶は消えて再度の笑み。情けなき己の思考を嘲笑い、宗司は突き出される矛に刃の腹を添えて、赤子の腕力と変わらぬ力をそこに注いだ。

小さな誤差。しかし小石の如き異物で逸らされた鋼は、宗司の纏う着物を浅く裂いて彼方を突いた。

極限状態。窮地を超えて死地にある身。

だからこそ、再度刹那の賭けに身を投じる。

逸らすというにはあまりにも危険。力の入れ方が僅かでも足りず、注ぐべき支点を少しでも違えたら、矛先は宗司の肩を貫きえぐったはずだ。

しかしあえて必要なぎりぎりの力で宗司は槍を逸らした。その効果は、無言で攻勢を続ける少女の虚無に、小さな戸惑いが生まれたのを察したことで身を結ぶ。

「活路、見えた……い！」

心眼が相手では、宗司が会得した体捌きに斬撃などの流れは全て見抜かれてしまう。現に宗司は気付いていないが、心臓の音までも鋭敏に感じ取っている少女の知覚は、かつての世界はおろか、この世界で

も比する者はいない程鋭い。

だから、極限まで力は薄くする。風に流される綿毛の如く儂く、川に流離う木端の如く緩やかに。

己を無くせ。

虚無たる敵手を斬るために、その直前まで無感にすら己を投じろ。

そしてその心眼、斬って捨てる。

それでも、心から吐き出される喜びが濃くなり続けるのを抑えることが出来るとは思わなかったけれど。

その歓喜は、斬って捨てる瞬間まで大切に秘めておこう。

「光……い・まだ光！・消えて、消えてよ！・消えないわ！・消えてよおおおおお!!?」

突き出す殺意が悉く空を裂く手ごたえに、少女の声に苛立ちが混ざってきた。見た目相応の精神性。いや、それ以上に幼いせいか。

だがまだまだ。

斬り捨てるには仕込みが足りない。

「行くぞー！」

言霊通り切っ先を向けて突きに構えて突撃を示す。対して少女は羽ばたく直前の鳥の如く両腕を左右に大きく広げた。

まるで魔的な怪鳥。鋭い爪を翻すその様に戦慄と、それ以上の歓喜を胸から足の先へ。引き絞った弓に番えた矢に己を見立てて宗司は飛び出した。

だが幾ら宗司の踏み込みが苛烈であろうと、少女の心眼はその直前の起こりを見抜き、広げた槍を動きに合わせて振るうのは容易かつた。

左右同時の薙ぎ払い。宗司の頭と膝を狙った少女の槍は、さながら閉じられる獣の口内か。

逃れるには。

いや、突き破るには、何がいる？

「楽しいな、おい」

宗司の全身から力が抜ける。踏み込みの活力をそのまま全て零にしたような急激なふり幅。脱力の応用、限界間際の力を一瞬で零にす

ることで、その肉体はまるで羽毛のように軽やかな物へと変わる。

槍から発生する突風。その流れを力抜けた肉体で鋭敏に察した宗司の体が傾いた。崩れ落ちるようによろめいた勢いのまま、宗司は搾りかす程度に残った力を爪先から破裂させ、虚空に舞う。

そして槍の軌跡の合間に体は滑り込んだ。肉を弾くことなく空ぶった鋼鉄の上顎と下顎。何とか体を崩すことなく持ちこたえただけでも賞賛出来るが、しかし今度は少女こそ隙を晒すことになる。

虚脱のせいか瞳からも光が失われていた宗司の瞳がその隙に光を見出した。ぎらりと光る両眼に浮かぶのは好機を手にした喜び。この敵手の裏をかけたことへの興奮。

着地。

同時、槍を構え直そうとする少女へと、脱力の極みが飛んだ。

「二手」

十全からの零。

そして零から再び十全へ。

繰り返し行われた脱力に肉が悲鳴をあげたが、その程度の些事は無視した。

「馳走」

槍が放たれるよりも早い。少女はその心眼故に、己の迎撃がこれより来る斬撃に間に合わぬことを察した。

袈裟に振るわれる神速。夜を行く鋼鉄の流星を予感した直後、少女はその左肩を刃の軌跡に強引に重ねた。

本来は剣の一撃すら受け止める血濡れの鎧は、宗司という斬鉄の業を前にあまりにも頼りない。

しかし、少女は肩の鎧に刀が斬りこまれる瞬間に、宗司がしてきたように全身の力を抜きさった。

その効果は劇的とまでは言わない。付け焼刃の脱力では、風に巻かれるように敵手の攻撃を抜ける宗司の領域には至らない。

容易に鉄を裂いた刀が、生身の肩の肉に斬りこむのが分かる。

筋繊維が断裂し、毛細血管が千切れ、骨まで突き立つそこまで見

だがそこまで。刀の勢いに引つ張られて、軌跡の流れにそって少女の体が回転した。

その結果、左腕を切り捨てるはずだった刃は骨に浅く斬りこんだところで、鮮血を引き連れ虚空に抜ける。

いなされた。

驚きは特にならない。この敵手ならそこまで出来ると宗司はわかっていた。

「がっ!?!」

直後、宗司の腹部に鈍痛が生まれ、そのまま背後に吹き飛ばされてしまった。

見れば、腹部に突き立っていたのは槍の石突き。回転の勢いを殺すことなく、そのまま少女は反撃に転じていたのだ。

「痛ッ……」

咄嗟に自身も後方に飛ぶことで衝撃を緩和したが、それでも宗司は地面を二転三転するほどの痛烈な一撃を受けてしまった。

見事、と賞賛すべきか。

または己の未熟を嗤うべきか。

考えるな。

己を研ぎ澄まし続けろ。

石突きを受けた部分に右手をそつとあてがい痛みの度合いを確認しつつ、宗司は油断なく、痛みに口許を歪めている少女へ視線を向けた。

見れば、刀で斬りつけた鎧部分から新たな鮮血がにじみ出ている。微妙に左腕の動きが悪いのは決して見間違いでも虚実でもないだろう。

確実に性能を貶める程の一撃を与えることには成功した。

「……尤も、肉斬り代わりに骨砕かれと言ったところだろうか」

宗司もまた、腹部の痛みによって万全に動ける状態ではなくなったことを自覚している。

だがまだ致命的と言うほどではない。互いに刃を握れている。足は動く。なにより爛々と輝く闘志が決して損なわれていない。



だから斬る。

必ず斬る。

そう言葉にせず刀を構えることで告げる宗司を前に、同じく槍を構え直した少女は小さくない困惑を無表情の裏側に滲ませていた。

痛み分け。

「いや、俺の方が、一歩行ってるか」

天秤は徐々に傾き始めている。先は一手とれた喜びから一撃を受けたが、次からは確実に追い詰めていこう。

決意を新たに、鋼に意志を。

精錬された殺気をいえきしゆを刻む鋭利とする宗司。対して少女は己が追い詰められている事実を前に、果たして何を思うのか——  
「要らない。欲しいの。こんなの要らない。貴方が嫌い。暖かい貴方が好きよ。大っ嫌い」

左肩が痛い。

この痛みは果たして何時以来のものだろうか。

あの騎士の群れから受けた傷とも違う、炙られるような痛みの波を感じる。

痛いのは要らない。

熱くなつて、温かいのを思い出すから

そう思いをさせて、そう言えばまだ数年しか経過していないんだなと少女は過去を思い出した。

この眼を奪われたあの日。

あの日、全ての光を奪われてからこれまで、ずっと一人で来る日も来る日も研鑽と生存を重ね続けた日々。

痛いのは知っている。

痛みが何をもたらすのかも知っている。

体の痛みより、喪失によつてもたらされる心の痛みを少女は知っている。

だが痛いのだ。

とてもとても、泣いちやうくらいに痛いのだ。

臓腑の臭いでむせ返りそうなこの場で、死臭漂うこの場で、どうし

ようもないくらい泣きたくなつて。

じくじく痛む。

じゆくじゆく痛む。

かつて、太陽の下に曝け出した肌が感じたあの熱と同じ温かさに似ているような気がしたから。

「要らないわ。光がこの手から無くなって冷たくなるくらいなら、初めから要らないの。愛しい貴方、綺麗な貴方、要らない貴方」

無感である。

虚無である。

あらゆる一切を全て散らし、この暗がりと同じ暗黒を作り出すことだけが少女の願い。

「阿呆、何も要らぬと欲さずにいて、何を楽しみに人斬りが出来るのだ？ 欲して欲張り、そして斬るのが人の業だろうが」

そんな少女の可憐な願いを、宗司という修羅は一刀の元に斬り捨てた。

再度、激突する両者。放たれる斬撃のどれもが、これまで少女が生きた短い生涯で頂点に立つ鋭さ。

己の全力を振り絞っても突き崩せぬ化け物。

どうして。

そう願う程、宗司の強さは化け物染みた少女をして恐ろしかった。

火花が散る度に気圧される己がいる。

化け物なのか。

こんなに強い存在がこの世には居たのか。

「いやだ」

全てを無へとするために、自分はまだここでは『死にたくない』。

だが偶然の果てに激突した相手は、確実に自分の首へとその刃を近づけつつある。脳裏を掠める確かな終末。宗司という光は、少女の『くらやみ』を確実に削いでいる。

宗司と少女の奏でる極限の闘争は尚も苛烈する。

それは鋼を用いた近接戦闘における究極に違いなかった。誰もが息を飲むような絶技の応酬。しかし観客はその場を満たす死骸とぶ

ちまけられた臓腑のみ。

次第に宗司の体に矛先でえぐられた傷が増えていく。幾ら宗司と言えど、力を限りなく薄めた状態で達人の槍を凌ぎ切れるわけではない。少女の槍は宗司の体を鮮血で斑に染め始めていた。

一方、それ以上に少女の鎧も斬鉄によつて破損していた。それも血を纏う宗司とは違い、その損傷は未だ鎧部分のみ。

それだけ見るなら、宗司が押されているようにも見えるだろう。だが決してその戦いは見た通りの形勢ではない。少女の鎧につけられた爪痕は深くなつており、遠くない激突の果て、少女の肉体は――

「ッ!？」

「今度は、骨砕きはさせんよ」

懐に飛び込んだ宗司の斬撃から飛び退いた少女は、己の左肩よりさらなる熱が生まれるのに言葉なく驚愕した。

弾け飛ぶ鎧の一部と噴き出す鮮血。重厚な鎧とは裏腹に、内側から覗くのは少女らしい細見の肢体。鎖帷子ごと断たれた左腕の鎧は完全に機能を奪われた。

咄嗟に邪魔となつた肘より先の鎧も剥ぎ取りつつ構え直すと、その時には宗司はまたもや眼前まで迫っていた。

「お主相手に準備を待つ余裕は見せん」

いつか聖剣と戦つたときは、その全力を見るために回復を待つたのとは違う。

同格、いやその才覚を考慮すれば格上の敵に対して、宗司にだって余裕があるわけがないのだ。

大上段からの一刀。いなされつつも下段より膝斬り。

浅く斬られる関節部の鎧を犠牲に返しの刺突。

放たれた槍の柄に宗司は掌を添え悟られぬ程の力で軌道を逸らす。

槍は毛髪を幾つか奪い去りこめかみの皮を裂くも外された。

応手、片手持ちの刀を胴目掛けて振るう。

痛みを少女は感じた。

熱血が腹部から滲み出た。

堪らず再度の後退。

胸部の鎧が落ち、外気に触れた体が熱と冷気を帯びる。

「せいー！」

宗司は少女より落ちた鎧の残骸を蹴り飛ばした。

強烈な蹴撃で吹き飛んだ鎧は一直線に少女へと飛んだ。まるで投石器から放たれたように走る鎧の弾丸も、少女の技量であれば弾くはおろか斬り捨てるのは容易。

当然、ぶつかる前に切り裂かれたが、一息つく間を奪われた。

宗司の狙いはそこだ。流れはこちらに傾いている。ならば、間を置かれて再度流れを取り戻させるわけにはいかない。

刀を腰構えに鎧を蹴ったと同時に飛びかかった宗司は、真正面からではなく少女の左側に回り込むように走った。

傷ついた左腕は右腕と比べて些か以上に精細に欠ける。確実に斬り捨てるという思いがあるが故、痛んだ箇所を狙うのは当然。

「まさか、卑怯とは言えないな」

「う、あ……いー！」

鈍い銀色が走る。真一文字に振るった宗司の斬撃を槍の柄で強引に少女は受け止めた。鉄製の槍をたわませて刃の衝撃を受け流すも、それでもその刀身が柄の半分ほどまで斬りこみをいれる。

押し込めば斬れる。

だが宗司は咄嗟に刃を引きもどした。

あのままでは切り口に挟まったまま捕らわれる予感がした。察知は早く、引きもどしたのは正解か。

いや、一呼吸置かれた。

誤った。

押し込むべきだった。

今更。

前を見る。

来る。

「消えて、消えちゃえ、消えろよ、消えろおおおー！」

少女が絶叫をあげながら左右の槍を回転させて、勢いのついた石突きが宗司の頭頂部を狙う。

心眼を持つ少女の見切りは、情けないが宗司では及ばない。それでも培った技量が体を咄嗟に動かし、その頬の皮に石突きは掠るだけに留まった。

それでも頬の半分程の皮膚が千切られ、外気に触れた頬肉より命の真紅が溢れる。痛みは殆どない。顔を剥がされたような激痛があるはずだが、その程度は無視出来た。

石突きが宗司の皮膚と着物の一部を道連れに大地へ突き立つ。柄に切れ込みが入っていたせいか、地面に突き立った瞬間鉄製の槍が半ばから折れ曲がった。

これで得物は一つ潰した。

宗司は反撃に転じようとして、反対側の槍が視界の隅で煌めいたのを見た。

胸目掛けての薙ぎ払い。気付いたころには既に激突する直前。

宗司は刀身が欠けるのも構わずに初めて全力の受けに回った。しかし音速を突き破った鋼鉄の柄は、刀越しに衝撃を宗司の肉体へと伝えた。

受けた腕の肉が千切れ、骨が軋む。歯を食いしばって全身を駆け抜ける痛みを飲み干して、大地に両足の跡を引きずりながらも受けきる。

流れに乗って飛び退くことは出来ない。

ここで無理をしてでも止めなければ、再度流れは少女のほうへと傾くという直感が働いていた。

それは少女もまた同じく思っていることだった。

か細くも確かに存在する勝利の糸を手繰り寄せる。そのためには、己もまたここで無茶無帽を行う必要があったと悟ったから。

「あああああー」

力を込めた左腕の傷口から出血が増える。構わずに刀と競り合った槍へ力を注ぎ、宗司の体をもろとも薙ぎ払った。

その状況で、宗司の体が再び力を失う。タイミングはこの瞬間、勝ちを急ぐあまり強引さを見せたところで、脱力によって槍を捌く。

刀身を這うように流れた柄が火花を散らしながら横薙ぎに走った。

だが吹き飛ぶはずだった宗司の体はその下、まるで限界まで潰されたバネのように屈んだ姿で、今度こそ完全に覗かせた懐目掛けて宗司は踏み込みを果たす。

心眼であろうがなかろうが回避は出来ない。

互いに時間の止まった世界の中、緩やかと動く宗司の手が掴む鋼は、臨んだ強者の肉を斬る歓喜に悶えているかのようで――

「もらったぞ」

「ッ!？」

月光に揺らぐ鋼が空気を裂く。それは違うことなく、今度こそ少女の肉体へと吸い込まれた。

真つ赤な血潮が滂沱と舞う。

決定的な決着の形、流線描く鮮血は、勝者たる宗司を祝福する清水の如く降り注いだ。

そして、極限の死闘の末に盲目の騎士を斬ることが出来た己を誇り

「あ?」

見上げた視線の先。

閉じられていた少女の目が見開かれた瞬間、宗司は己の敗北を否応なしに悟るのであった。

## 第二十一話 『我が虚無は、無感を是とする』

周囲を美しい緑に囲まれ、実りのころになれば自然の恵みが沢山とれる小さな王国の王都、その城下町は常に賑わっており、そこに住む誰もが穏やかな時間を過ごしている。長い歴史を持ちながら手入れが行き届いた城から覗く景色は、温かい光に満ち溢れたものであった。

そこは幸福の土台の上に作り上げられた楽園のような世界。

その国の姫であるアン・サルソンにとつてはそれが世界の全てであり、彼女は生まれた頃より幸福を享受し、幸福こそが普通という恵まれた世界で成長してきていた。

そんな彼女は、毎日変わることもなく、だが何度繰り返そうが飽きることなんてまるでない日々を満喫していた。

朝は国王である優しく威厳のある父と、美しく聡明で何よりも愛情に溢れた母と共に食事をする。朝から元気なアンのことを両親はいつも可愛がっており、両親から受ける愛情を感じられるこの一時は、一日の始まりを告げる大事な時間だ。

それから王族として必要な勉強に励むが、家庭教師の先生はいつもアンの手を取って導いてくれるような素晴らしい先生であり、決して苦痛に感じたことはなかった。勉強の他にも、無理を言つて剣の稽古を少しだけ。お姫様がはしたくないですよと言いつつも、丁寧に教えてくれる先生のことアンは大好きだった。

だけど、お昼だけは少し特別。怒られたり困らせたりするのはわかってはいるけれど、アンは隙を見つけては兵士の詰所に行って、年上の騎士達の鍛錬する姿を眺めたり、一緒にお昼をこっそり食べたりする。先生に見つかるかと王族としてそういうのはいけないと怒られるが、アンはこの優しい世界を守るために日夜鍛錬に明け暮れる騎士達が好きだったし、騎士達も純粹無垢な好意を向けてくる彼女のためにいつそう鍛錬に励んでいた。それが分かっているから先生も本気で怒るわけにもいかず、毎度困らせているのだが、アンは懲りずに何度も兵士の詰所に通っていた。

そして夜はまた父と母と共に今日一日のことを沢山話すのだ。アンが話す一日の出来事を、二人はどんなに疲れていても笑顔で聞いてくれて、自分のお話で笑顔になってくれるのがアンにはとても嬉しかった。

そんな日々が毎日続くのが、アンの世界だった。世界は幸福で完結されており、たまのトラブルも振り返ってみれば笑い飛ばせる昔話になるような、そういった日常の繰り返し。

それが終わったのはまさに一瞬のことであった。

「お父様！ お母様！」

「姫！ こちらに早く！」

「いやー！ お父様とお母様が！」

アンの目の前で、生まれた時からの幸福の証、白色の美しい城が紅蓮に染まっている。

城下町もまた、燃え広がる炎によって儂くも消えていた。

それは幸福の終わり。いつまでも続くと思っていた少女幻想は、その目の外より襲ってきた邪悪によって蹂躪されていた。

「いやー！ いやああああー！」

喚き散らすアンを片腕に抱きしめながら、城より落ち延びた騎士は憤怒と悲痛でぐしゃぐしゃになった顔を鉄仮面の内側に隠し、敵国の追手から逃れるべく城下町を走り抜ける。

その周囲を取り囲む騎士達も気持ちは同じだった。残された手勢は十にも届かず、抵抗も出来ずに逃げるしか出来ない敗戦の兵は、馬を鞭打ち守るべき城に背を向けて走る。

本来なら彼らも城と運命を共にするつもりだった。

だがそれを止めたのは彼らの王。国の至宝である姫だけでも逃そうと騎士達に命じたから。

「う、うう……どうして！ どうしてこんな！」

しかし騎士達の内心を知ろうが知るまいが、アンは叫ばずにはいらなかった。ここに残っていれば、敵国に捕縛された父と母と同じ末路を辿るかもしれないと分かっている。

分かっているながら、吐き出される絶望は止まらなかった。



「こんなのいや……」

紅蓮に染まる街並みとは裏腹に、アンは震えるくらいの冷たさを感じていた。

温かいのが奪われていく。

何もかも奪われていく。

抱き締めていた幸せが多いほど、喪失の絶望が色濃く体を貫くのだ。

「冷たいのは、嫌なの……」

か細く漏れる声すらも、ヘドロのように広がり続ける紅蓮に飲まれ、虚しく散るばかり。

アンは知らなかったことだが、近年、周辺国家に覇を唱えていた帝国による他国への侵略は留まることを知らず、中小国家の一つではないアンの国は、その侵略の片手間程度の扱いで滅ぼされることになった。

果たして紅蓮に飲み込まれた祖国を見て彼女は何を思ったのだろうか。

城より眺められる幸せの象徴が食い尽くされ、生ごみのように踏みじられる様は何を彼女に与えたのか。

いや、手にしたものなどそれこそ何もないという実感だけか。

少なくとも彼女は家族を、国を失った。

だが彼女が奪われたのはそれだけではないのだ。

「逃がすな！ 一人も逃がすな！」

「くっ……もう追手が」

城下町をあと少しで抜けるといったところで、待ち構えていた兵士達が、闘争しようとする騎士達へ弓矢を構え、警告も無しに放った。

避ける隙もなく降り注ぐ矢の雨は、僅かな手勢しかない騎士達を葬るには十分以上。しかし彼らの意地か、アンを抱く騎士を守るように前に割り込んだ三人の騎士によって、殆どの矢がアンに届くことはなかった。

だがどれだけ意地を見せようが限界はある。一身に矢を受けた前の騎士の一人が力尽きたその隙を縫う形で走った矢は、迫る絶望を唾

然と見ることにしか出来なかったアンの額から頬まで一直線に走り抜け、その右目から光を奪い去ってしまった。

「ぎゃああああああああ！」

「姫!? クソ……! クソおとおおお！」

最早、騎士達に残されたのは姫を守るという王命だけだった。

だがそれすらも守れない。

国の至宝を守れずに、その片目から永遠に光を奪わせるという愚かを許してしまった。

その絶望は如何程だろう。堪え切れずに罵詈雑言を吐き出して、騎士達は滾る怒りをそのままに、矢が幾ら突き刺さろうが怯むことなく眼前の兵の群れに飛び込んだ。

その後のことをアンは知らない。

ただ、痛みに呻く中、彼女を最後まで守っていた騎士が馬を降りて、紅蓮に消えていくところだけを最後に、アンの意識は闇に沈んでしまった。

気付けば、彼女は森の中に居た。

「……お父様、お母様」

彼女が乗っていた馬は既に息絶えていた。その拍子に背中から放り出されたアンは、未だ血を流す眼を抑えながらゆっくりと立ち上がる。

夜の闇はアンの小さな体を痛めつける。がくがくと震える身体、纏わりつく冷気は貪るようにアンの体温を奪い去る。

寒かった。

泣きたいくらい、寒かった。

「寒い……冷たいの……」

零れる声に返ってくる言葉はない。

何も無かった。

全てを奪われて、少女に残されたのは何も無いという虚無感と——  
いつまでも眼に残る、紅蓮の光景。

「嫌……嫌……こんなのもう嫌……」

左目から涙を。

右目からは血涙を。

滴る液体を地面に落とし、アンはいつまでも視界からぬぐえない光景から目を逸らそうと瞼を閉じる。

だが紅蓮は消えない。

熱さを奪い冷たさを与える熱量がいつまでも消えない。

「熱いのは、要らない」

アンは倒れ伏す馬に突き立った矢を一本引き抜く。

躊躇いは無かった。矢じりを自分の顔に向けると、ただ網膜に焼き付いた紅蓮を消すためだけに、最後に残った光すら自らの手で消し去る。

「もう、冷たくは、なりたくないの……」

両目に走る痛みよりも、暗黒に閉ざされた視界からもたらされる虚無に、アンはようやく安堵の笑みを浮かべることが出来たのだった。

そして、少女は光を失った。

そんな彼女に残されたものなんて何も無い。

そして、何も無いからこそ、何もかも消し去ろうとした。

アンに残された行動理念はそれだけだ。

復讐心でもない。ましてや義憤でもなく、ただ、たまに來るフラッシュバックを消し去るために、あらゆる熱を消し去るだけの哀れなる少女に成り果ててしまった。

ただ幸せしか知らなかった彼女が幸せを奪われたことで、何もかも無くなったという事実は、つまるところ残された記憶以外何も無いという存在に彼女を作り上げただけ。

ただそれだけならば良かっただろう。

それだけならば、亡国の姫はその悲劇的な物語の迎える結末のまま、悲惨な最期を迎えるだけに終わつたはずだ。

しかし、何もかも失った少女は、盲目というハンデを得たことにより武の極地へと目覚める。

何故、という疑問に意味はない。

その過程にだって、それこそ意味は存在しない。

天才というのはそういった存在だ。天才が天才性を発揮する切っ掛けなど、常人には計り知れぬことであり、一人に一人どころか、千年に一人という才覚は、全てを失って覚醒した。

恐るべきは、いつも見ていた騎士の鍛錬風景と、先生から受けた基礎の手ほどきだけを頼りに、その武を練り上げたことにある。

天賦の才すら凡夫に落とす天才は、そうして一年も経たずに達人の境地を超える。

そして、虚無という形になった亡国の姫君は、有象無象関係なく、ありとあらゆる存在を無に帰す化け物へと変化した。

アン・サルソン。幸福より虚無に落ちただけの哀れなる少女。

未だ十五になったばかりの歳で修羅に至る才覚を手にした天才。

こと才覚という一点だけならば、宗司はおろか修羅外道と恐れられる狂気すら上回るものを秘めていた。

だがそれでも彼女には一つだけ足りないものがあつた。

それは強敵。

一騎当千すら雑魚としてしまう彼女に比肩、凌駕するほどの強敵。

そう、『完結』して然るべきだった才覚は、己を引き上げる存在が居なかつたために、虚無という形を是としながら、未だ感情豊かな当たり前の人間であり続けた。

過去の記憶に苛まれるだけの哀れな姫君でしかなかつたはずだつた。

しかし。

それも、もう終わり。

(死んじゃうの?)

スローモーションで流れる身体。裂かれた胸より迸る流血の軌跡を他人事のように感じ取りながら、アンは静かに自分がここで死ぬということを理解した。

嫌だなあという気持ちはあつた。

全てを無にしたいと思ひながら、その実まだ己が無に帰ることだけは嫌だつた。

全くもつて己の度し難さに辟易してしまふ。

でもそれも終わり。

終わりなのだ。

(死んじゃうんだ、私)

一騎当千で構成された軍勢ですら、自分を追い詰め、死の間際に至らせながら、決して明確なまでの死の気配を与えてはくれなかったというのに。

宗司。

宗司と名乗ったこの男。

この男は、たった一人で自分の死にまで刃を届かせた。

(この人、温かいなあ)

無にし切れない熱を持った男。その熱は例えるなら、冷たすぎる鋼鉄の内側に込められた熱気に似ていた。

鋭く、固く、淫らで、狂おしい。

目は見えなくても、強いことが、温かいことがわかる。

世界が全て暗闇に覆われて、それでも体に纏わりつく熱をひたすら無くし続けた日々で、唯一奪い取ることも出来ず、逆にこちらの熱を奪ってしまった男。

そんな男に斬られてしまった。

仕方がないと思える程に、己を終わらせる一閃に魅せられた。

感じたのは尊敬か。

あるいは畏怖か。

少なくとも、好意はないなあ。

(やっと、終われる)

いずれにせよ、その一閃は冷たいだけの少女を終わらせるに至る。斬撃の刹那、傷口よりこぼれる命の熱を覚え、アンは安堵した。

祖国と家族を失ってからは、死んでいるだけの人生だったと思う。

その人生も、何処とも知れぬ土地で、聞きなれぬ名前の男に斬り捨てられて終わり。

なんてことはない。己もまた、意味の無い生涯を綴っていたというだけの話。

強かった。その強さは異次元的で、最早アンでは逆立ちしても勝ち

の目が見えなくて、だからこの男になら殺されてもいいかなと思えるほど。

そして終わりの間近、宗司への心からの賞賛と、人生の幕切れへと至る安堵に身を包まれ、アンは静かに本当の虚無へと沈んでいき——ぞぷりと、深淵が指先に触れたのを感じた。

それこそが最悪の切っ掛けとなる。

(ここが、おわり?)

それは死を受け入れたアンをして困惑してしまうようなことだった。

終わると悟ったその刹那。

終わる場所に至ったその瞬間。

ここより先が存在しない世界へ、アン・サルソンは『到達してしまっ  
た』。

「あ?」

宗司は、アンの変化に気付いて素っ頓狂な声をあげた。

変質は一瞬だった。奈落に手が触れた瞬間、アンは己が立つべき場所の存在を明確に悟り、己が体現すべき『解答』をつかみ取ったのだ。ならば、死すらも、意味は無く。

「ここが、私の終わり」

刹那、開かないはずの目がぎよろりと開く。

その視線と交差した時、宗司をもってして怖気が走る体を抑えることが出来なかった。

それは奈落だった。

光を灯さぬのではなく、光を飲み込み消してしまう暗黒物質の如き眼だった。

決してそれは、アンの目が物理的に機能していないからというわけではない。

その漆黒は、もっと根源的な暗黒だった。

例えるなら、腐臭を放つ粘着質な黒色の何かを瞳の形に固めたような気持ち悪さと、瞳の形に加工した宝石のような美しさがその瞳には内包されていた。

まさしく虚無。

色濃くではなく、あらゆる色を飲み干す純粹なる黒。

汚泥たる美麗。

美しき腐敗物。

矛盾する評価を強引に成立させるそれを見て――。

『君を、斬る』

あの男が、脳裏を掠めた。

「ッ!？」

本能の赴くまま、宗司は全力で飛び退いた。そして、着地と同時に片膝について苦痛に顔を歪める。

抑えた胸部からは、熱血があふれ出していた。

「ッ……捉えられたか」

まるで意趣返しとばかりに先程斬ったところと同じ部位が裂かれている。袈裟に斬られた宗司だったが、それでも飛び退くのが辛うじて間に合ったおかげで、何とか重傷程度で済んだ。

致命傷ではない。そのことが御の字と思える程、アンが今放った槍の煌めきは驚嘆に値した。

アンは天高く伸ばした槍をそのままに、半ばから折れた槍のほうを投げ捨てた。

同時に、アンが纏っていた鎧が剥がれるようにして外れ、地面へと落ちる。勝手に外れたように見えるそれは、よく見れば留め具の部分が鋭利な何かで切り裂かれた跡があった。

――俺を斬った一瞬で、自分の鎧まで斬り捨てたのか。

戦慄するより他はない。宗司は内心に浮かんだ恐怖を飲み込みつつ、ゆっくりと立ち上がりながらアンを睨んだ。

素肌 напрямую 鎖帷子と皮のズボンのみの姿となったアンは、見えるはずのない眼で宗司の瞳を見返している。

事実、彼女の目は今も暗黒に閉ざされたままだ。しかし、暗黒という視界が彼女にとって正しいなら、暗黒の中で視線を合わせることも当たり前のことであった。

当然だ。

だって、全ては無なのだから。

何も見えないというのは当たり前で、そこに視線を合わせることだって当たり前。

それだけの話だ。

そう思う少女の思考は、常軌を逸している。

だが最早、理解の外にある常識が、彼女にとって当たり前と化していた。

「そっか、私は、終わったのね。斬り捨てられて、終わったのかわ」  
語る言葉は変わらない。

だがそこに込められた意志が全く感じられないというのが恐ろしかった。

先程までののは、言ってしまうえば少女らしい我儘な感情が少しだけだけが見えていて、虚無のような在り方の中に、確かな感情の起伏が何度も浮かび上がっていた、

だというのに。

今や、少女の言葉には何も無い。

狂おしいくらい、少女からは何も感じられなかった。

「くくっ、死に際で開眼とは……ふざけるなよ」

宗司は歓喜と恐怖、二つの思いで震える指先に力を込めつつ悪態をつく。

「無が全てなの」

アンは、否、かつてアンと呼ばれていた人間が、周囲の全てを飲み込むような眼差しで宗司を見た。

それがどういった存在なのかを宗司は知っている。

かつて、宗司は『終わった』人間に出会ったことがあるから。だから、宗司が会った男とは別の場所ではあるものの、今のアンがあの男と同じく『終わった』ということを理解する。



「意味は無いの。もう、何もかも、意味が無いと分かったの」

その姿は、踏みにじられた生ごみのように見るに堪えぬ醜き様で、吐き気をもよおし、今すぐにでも目を背けたくなる程、不気味で歪で気持ち悪い。

「だって全ては無に帰るから」

しかし、月光に映える少女の姿は目を奪われる程美しく、娼婦の如き艶めかしい色気と、赤子のような愛おしさを覚える気持ち良さがあつた。

成立しない感情を成立させる、あり得ない矛盾存在。

手にした答えを体現するだけの存在は、こどもも矛盾を孕めるのか。

気持ち悪さと気持ち良さを差し置いて、その矛盾が宗司には恐ろしくて堪らなかつた。

「……お主、それは一体——」

それは人間の終わり。無限の可能性を秘めた人間を極めた果ての姿。

これが真実だ。

スキル。

魔術。

ステータス。

ありとあらゆる手段を用いて成長に制限を掛けたのはそれを恐れたため。

この世界で何としてでも人間を生ませないようにした理由。

人間。

悍ましき二本足の異形。

人そのものが恐れるくらい、人間の秘めた力は悍ましく、何よりも透明で。

その果てに至るといふ悪夢が、今日の前に現れた。

天才が天才の肉体をむさぼり食らって登りつめた、決して至ってはいけない人間の可能性の完結。

虚無という道の果て、己の命を斬り捨てられたことによって手にした究極の無。あらゆる全てが無に至るといふ最悪。

その奈落こそ、少女の手にした唯一無二の答え<sup>愛</sup>ならば。  
「なんて様だよ」

嫌悪感<sup>ご</sup>こと吐き捨てる。

その虚無に、修羅外道と呼ばれた男<sup>女</sup>が完全に重なったのを、宗司は  
見た。

## 第二十二話 『しゅらば、ちる』

そして、勝者と敗者の天秤は逆転した。

そも、天秤自体が無くなっているこの場で、果たして勝者や敗者の括りに何の意味があるだろう。

「そう。私は無感だった」

夢冷めれば無感の冷徹。

故、この冷徹は鋼のような硬質の手触りがするのだろう。

肉を断たれ、血潮に飲まれ、それでも熱血すら即座に冷やす現実を自覚したとき、その身は可能性の終焉へと至る。

アンが立つのはそこだ。

そこがアンの立つべき冷たい場所。

修羅場だ。

この無感の冷徹こそが、誰もが臨んだ修羅場に違いない。

「貴方の斬撃を経て、私は無感を終と見定めることが出来た」

それは、最早言語を超越した有り様を晒していた。

纏った鋼鉄を剥がされたその内側に眠っていたのは、鎧よりも圧倒的な力強さの鉄如き体。最早、宗司をして斬撃は不可能と悟らせてしまうほどの圧倒的な生身の肉体。

汚物のように美しく。

宝石のように汚らわしい。

そこに在るのは、そういった『何か』であった。

故に、宗司は短くない己の生涯を振り返り、即座に結論を出す。

「勝ち目無し、か」

勝てるわけがない。

勝てる見込みが見つからない。

こんな様を晒す人間に、そんな様に至れぬ己の刃が届く姿が微塵も思いつかなかった。

だからこそ、宗司は口許に隠し切れぬ笑みが浮かべる。

「つまらん欲だ。この敵手を前に勝ち目を望む……くくつ、己の欲深さに笑いしか出てこんわ」

敗北が待っている。

だというのにあるわけもない勝ち目を見つけようとしていた。つまり己は、負けると分かっているながら勝利へと続くか細い火を灯そうとあがいていたのだ。

それが楽しい。

無を前にした恐怖を凌駕して、絶対強者を前にした興奮があった、死地にあつて死を超えんとする宗司の精神性は最早常軌を逸している。

だがこれこそ臨んだ死合だった。無に飲まれるという心胆冷える絶望の終わりが待っていても、アンと同じく宗司も望んだ修羅場なら。

「羨ましいぞ目無し。お主、終わりに至ったのだな」

「終わり……そう、私の肉体は終わったの。これが、私の至った無感の終末。人間の終わり、可能性の完結」

「無、それがお主の可能性の極みか……俺もな、短い間だが今のお主と似たような男に師事を受けた身。故に今のお主がどの程度の極地に居るのかは、なんとなくわかるよ」

「そう」

「そうだと、名も知らぬ女子よ」

人間が、人間の在り方を突き詰めた先に在る可能性の帰結。本来なら無限に存在する人間の可能性を突き詰めるに至った恐ろしき天才。

修羅外道。

宗司はかつてそう呼ばれていた恐ろしい侍のことを脳裏に浮かべていた。

「華やかな吐しゃ物。醜悪な美貌。相反するそれを内包した者を指して……なんて様だという言葉以外、誰も彼もが言うべきことを失う。そういった様さ」

形容が出来ない人間の形をした『何か』。

理解できぬそれを、人は畏怖を込めてなんて様だと罵倒し、軽蔑し、そして恐怖した。

だがそれは違うのだ。

宗司はそれが誰よりも人間であることを理解していたから、声を大にしてお前こそが人間なのだと呼べるのだ。

誰よりも人間の可能性を極めた者を、人間と言わずになんと言えらうだろう。

しかし、人は己の中の『何か』を見せられて、正気でいられる訳もない。

「誰もが持っている矛盾する混沌。それをまざまざと見せつけられれば、誰もが認めたくない」と否定する。己の中の混沌を見せつけられて良い気になれるわけがないからな」

だが宗司は違う。宗司はそんな虚無も己にあると肯定するから、言葉に出来ない有り様を晒す敵手を前に立っていられる。

だから薄らと浮かべた笑みはそのままに、究極へと到達した修羅に向けて己の鋼を突きつけた。

「今の俺では負ける」

そこは間違いない。

宗司は、今の宗司では。ただの人間でしかない宗司では、この終わりに至った修羅に勝つ見込みなど何処にもない。

それでも宗司は今と言った。

「何、やってみれば分かることよな」

この相手を前に、勝てる可能性など何処にもないけれど。

宗司はいつもと変わらぬ口調のまま、いつもと変わらぬ歩調で虚無の権化へと突貫した。

「おおおー！」

己を奮い立たせるために声を張り上げながら、痛む体を押し放つのは得意の腰構えよりの振り上げ。

「そう、それでも戦うのね……」

アンは、何も映さぬ無表情のまま、飛びかかる宗司を迎え入れた。その姿に総毛立つ。目の前にぼっかりと暗い穴が生まれたかのような恐ろしさがあった。

だが宗司は己のそんな恐怖を斬り捨てた。

恐怖など捨てろ。

痛みは度外視せよ。  
そも立場は対等だ。

「故に……」

斬――

「意味なんて、どこにも無いのに」

零より放つ十の出力。

圧倒的ふり幅より放たれた最速の斬撃は、アンの矛先に容易く受け止められていた。

「ッ!？」

「驚く意味も無いわ」

目を張る宗司は、斬りかかった刀に込めたあらゆる力が全て消えていることに戦慄した。

まるでこの騎士の放つ虚無の雰囲気にでも飲まれたかのようにすら思えたが、宗司は即座にその超絶を察する。

完全に威力を吸収された。

槍の突き立つ地面に小さな罅割れが走っているのは、おそらく宗司の放った斬撃を全て地面に逃がして散らしたからこそ。

だからと言って、そう簡単に散らされる程、生温い斬撃ではなかったはず。

「悩むことも、斬ることも、何もかも意味は無いの。だって、全部意味無いんだから」

アンはそう呟きながら、柄に叩きつけられた刃を、赤子を捻るように容易く絡めとった。すると宗司の体から力が全て抜け去り、膝より体が崩れ落ちる。

――意を完全に乗っ取られた!？」

槍を用いた合気によって、宗司の刃を伝って肉体の主導権を一時的に奪い去ったのだ。それに気付いた直後、アンは無表情のまま崩れ落ちた宗司目掛けて振り下ろした。

だが宗司は間一髪で全身の力を取り戻し、半身になって槍から逃れる。それでも躲しきれなかった矛先が胸を裂いた。

咄嗟に宗司は後ろに飛んだ。しかし追撃はない。それすらも無意

味とでも言いたいのか、宗司は注意深くアンへと刃を向けながら、己の傷の具合を確認した。

二つ目の傷は一つ目よりもまだ浅い。しかし重症がさらにひどくなったことには変わららず、ぐらりと揺らぐ体は精神ではどうにも出来ない。

ならば、宗司によつて致命傷を受けたはずのアンが動けるのはどういった理屈だというのか。

「死して、屍……最早、お主は骸と言うか」

命を斬り捨てられ、残ったのは真の無感に至ったその身一つ。

生きる屍。終わりに至った虚無の修羅。

決して技量が上がったわけではないというのに、恐ろしく強くなったのは、彼女が持つ心眼が宗司の斬撃を経てより高次元の領域に到達したせいかもしれない。

無感故、全てを飲み干す虚無の型。

己を斬った二つの斬撃。あれはまさに宗司が放つそれと、得物が違うだけで瓜二つと言つてもよかつた。

完全に技を奪われている。宗司の斬撃を経て極まった心眼は、相手が放つ技の予測だけではなく、その技そのものを完全に己の物にすることを可能としていた。

それはつまり、宗司が放つ技にどう対応すればいいかも手に取るようにわかるということ。

たつた、一合。

アンが無という解答に至つてからたつた一合だけで、宗司の持つ全ては暴かれ、そして全てが意味無しと断じられた。

「堪らんな」

正直、強がりだ。

全てを理解したことによる絶望は宗司の肩に重くのしかかつている。

己を暴かれ、そのうえで意味無しと断ぜられる恐怖が伝播したせいで、声にもつた震えまで隠せる自信はなかつたけれど、宗司は無理矢理笑みを浮かべてみせた。

わかっていたはずだ。

この様を晒す者を僅かな間とはいえ見ていた宗司は、こうなることが分かっていた。

斬るのだ。

全て、斬るから、斬っていく。

だから俺は、斬り続ける。

そう言っつて、その言葉通りになんでも斬ってみせたあの人がそうだったように、この少女は有象無象の例外なく無にしてしまうのだろう。

培った技量を容易く奪いさり、それらを平然と扱い、平然と防いでみせる。

その者にとつて最も大切な何かを、積み上げた全てを、この少女は平然と見抜いて、平然と意味無しと告げてくる。

辛くないと言えば嘘になる。

悔しくないと言えば嘘になる。

己の人生を意味無しと断ぜられて、黙っていられる人間がいるはずがないのだから。

「まあ、お主は天才よな」

だが、賞賛するほかないだろう。

宗司すら凡夫に落ちる程の才覚を持つ少女だからこそ、無という終わりに行き着いたのだから。

だがそのことを考える暇はない。気付けば宗司の体は闇を舞う蝙蝠の如くアンへと飛びかかっていた。

そして、一方的な戦いは始まった。

火花は全く虚空に咲かない。

逸らすのは不可能と悟り、全ての矛先を体捌きのみで宗司が回避しているというのもある。だがそれ以上に恐ろしいのは、不動の状態で宗司の斬撃を受け止めているアンの槍が、火花を散らすどころか鉄の弾く乾いた音すら響かせていないことであつた。

宗司の振るう斬撃が、虚無に飲まれているように見える。

触れ合わせるのは先のことと考えて一瞬、それでも膝から抜けそう



になる力を留まらせ放つ刃は柄にぶつかる。だがぶつかり合う度、アンの槍は宗司の意志を無視してその力を虚無に散らす。

それどころか、放った斬撃の全てに込めた力とともに、鍛錬で培った『理』すら、アンの槍は宗司から奪いさり、一合ごとにその槍は宗司の斬撃に迫っていた。

己の全てを失っていく。

己の全てを奪われていく。

この虚無と斬り合うということとはそういうことなのだ。理屈も抜きに宗司は理解した。

それはとても怖いことに違いない。

自分が自分では無くなるというのは、あるいは死よりも恐ろしいことなのかもしれない。

だが理解したうえで宗司は刃を振るう。

そも、失うことへの恐れなどいつものこと。

死ぬのは怖い。

痛いのは怖い。

辛いのは怖い。

逃げたいくらい怖い。

それでも。

「はっ……！」

胸元を擦る矛先に体を冷たくしながら、いつだって怖さを超える歓喜が心を突き動かす。

吐き出した熱血によって体が冷たくなる以上に、宗司の心は猛り狂って燃えていた。

「はっ……！」

一意専心とはいかない。胸中を苛むのはいつだって複雑怪奇な感情で、宗司の刃はそうやって手に入れた雑念だらけの刀だから。

強くなりたい。

斬って証明したい。

童のように刀で楽しみ、刀で悲しむ。一喜一憂を共にした鋼があるから、虚無を前にしても宗司は飛べるのだ。

「くくく、はははははは！ あーはっはっはっはっはっ！」

いつの間にか宗司は無邪気に笑っていた。己の斬撃は一度として通らず、先程から自身には裂傷が幾つも刻まれて、今にも崩れ落ちそうなくらいだというのに笑った。

あまりにも奇怪なその姿だが、虚無に終わった少女にはそれでもまるで響かない。

笑ったからどうだというのか。

そんなの全部。

「意味無いのに」

その言葉通り、戦いは白熱とは逆の方向へと突き進む。

交差する斬撃の数々は虚しく沈むだけに終わっていた。どれもこれも技の神髄。戦いに関わる者ならば、誰もが羨むような技をぶつけ合っているというのに、きつとその戦いを誰かが見たなら、感動とは無縁のことを思うはずだ。

こんなにも冷たい。

美しくもありながら不気味である。

まるで夜空に輝く星々を見上げるかのように、そのまま吸い寄せられてしまうような不安ばかりがその場を満たしていた。

その中で宗司は笑いながら刀を振るい続ける。

冷気が満ち、その冷気すら無へと帰っていく世界で、ただ一人熱気を込めた鋼を握って走る。

一閃ごとにその鋭利が衰えているとしても、前に進むことだけは変えられない。変えたくない。

だから行くのだ。

持てる熱量の全てを注いで、加速せよ。

正確無比な槍の軌道を掻い潜った瞬間、宗司は瞳に覚悟の炎を灯して勝負を仕掛けた。

「ん？」

アンはその時、宗司から放たれる違和感のようなものに気付く。直後、強制的に世界の時間が遅くなり、限りなくゼロ秒に近づいた時の中、宗司とアンの肉体だけは自由に動いた。

傷つき、崩れそうならば、いつそ崩してしまえばいい。宗司は必死に留まっていた両足から順に全身から力を抜き去った。

完全に零となった力を意志と変えて、宗司は己の内部に練り上げる。全身よりかき集めたなけなしの全霊。この身が吐き出せる最大の刹那。

感じた余分を全て削ぎ。

心と鋼を重ね合わせ、紡ぎ合わせた一本の刃へとなろう。

「……行くぞ」

我欲で編んだ刀にて、虚無の終すら斬り開かん。

そして宗司は、己が手にした極みの扉を再び自ら解放した。

急激な緩みから一氣に限界まで向上した力の流れに耐えきれず、裂傷より血が噴き出すのも構わない。

その心中にあるのはたった一つの無垢な思い。  
斬る。

鮮血の衣を纏った宗司の覚悟を悟ったアンは——それすら無意味と断ずるように、表情一つ変えはしない。

それも構わない。

練り上げるのは乾坤一擲。究極の一振りのみがあればいい。

「いやあああああああ！」

喉より振り絞った猿叫によって大気が震えた。それは一時的にだがアンの耳にすら干渉して機能を剥奪する。

——今！

疾走するのはここしかない。零より振り絞った十を、宗司は体の傷を無視して渾身を解き放った。

神速を超えて、速度すら断つ絶速へ至る。かつて、老剣客を斬り伏せ、聖剣の至高すら超えた刃。

これをもつて、虚無すら斬り裂き極みを示す。

そして、放った斬撃の軌跡を感じる暇すらもアンに与えず、宗司の渾身はその首元へと吸い込まれ——途中で止まってしまうのだった。

「ッ……」

「無駄」

刀と首の間に割り込んだのは冷たい矛先。その切っ先に僅か斬りこみを与えただけで、宗司の至高はアンの虚無に飲み干された。

アンの表情は変わらない。これまで飲み干せたはずの宗司の技が、一瞬とはいえ己の虚無を超えて矛先に小さな傷を与えたところで、彼女の虚無は揺るがない。

故に、それはあまりにも無感動に。

手首を支点に槍が一回転した。何とかその動きに反応して宗司は刃を引き戻すが、全てを使い果たしたために、宗司の体は大きく揺らぎ――

何の言葉もなく、回転させた槍の石突きが、宗司の左肩に炸裂した。

「ぐ、お……」

肉と骨が混ざり合い、ぐしゃりと音を立てて碎け散る。弾けた血管と突き出た骨、裂けた肉より着物に滲む命の赤色。

衝撃は完全には殺しきれなかった。

だがこれでも槍の威力を殆ど殺しきった結果だ。本来なら直撃と同時に宗司の肉体は粉と散っていただろう。

しかし、致命傷。

木偶のように吹き飛んだ宗司は、遂に動くことも出来ずに地べたを転がって崩れ落ちた。

「……」

アンは石突きについた血と肉と着物を振り払うと、一步一步ゆつくりと宗司へと歩み寄る。

心音と呼吸は小さく、呻き声には血反吐が混ざり、絶え間なく出血している身体の傷は放っておいても宗司を殺す。

殆ど死んでいる。

だが、まだ死んでいない。

「本当に、不思議」

アンは自然とそう呟いていた。

意味が無い。

何もかも存在する価値も無い。

だからこそ、小さな疑問があった。

「どうして貴方は、まだ在ろうとしているの？」

「……ばれて、いたか」

どうやら死んだふりをして近づいたところを斬る、というわけにはいかないらしい。

宗司は真つ赤に染まった口許を拭いながら、刀を支えにゆつくりと立ち上がった。

「……血が、止まりかけてる」

「とある道場で、習った……あ、浅知恵、よ。呼吸の、流れと、闘志によつて……血の巡りを、抑える、な」

呼吸と自己暗示によつて、肉体の動きを操作する秘技。これによつて辛うじて命を長らえているが、宗司は刀を支えにしなければ立って、朦朧とした視界では常の見切りも行えない。

アンが軽く突きを放てば宗司は死ぬ。

他ならぬ宗司自身が、もう打つ手が無いことを悟っていた。

手に入れた究極ですら、この虚無に小さな傷を与えることしか出来なかった。

もう何も無い。

研鑽の限りは意味無く終わった。

それでも足掻く。

尚も足掻く。

「無駄なのに」

「意地が、あるからなあ」

残されたのは、剣客としての矜持だけだった。

万策尽きて、立っているのに必死で。

どうしようもなく、負けてしまっているけれど。

いや。

いやいや。

それも違うなあ。

「そも、俺は、勝つ」

アンは歩みを止めない。

宗司の言は聞く価値も無く、彼女がなすべきことはひたすらに、あ

らゆる全てを無へと帰すだけならば。

それでも、宗司は告げるのだ。

見つけた勝機。

矛先に刻んだ僅かな裂傷はつまり――

「俺の、鋼は……お主に、届いた、ゆえに……！」

ならば、動けないなどとは言っていられない。

斬れるのだ。

斬って、散らせることが出来るのだ。

あの虚無を斬って、開くことが出来るなら、這ってでも斬るしかないだろう。

「十二だ」

宗司は言葉に出来ない感情を一切表に出すことなく、ひたすらに歓喜のみを口から吐き出すように告げた。

「その無感……俺の鋼で、十二の斬り合いの間に……斬り伏せる」

それは決して瞬殺を誓う言葉ではないし、己を鼓舞するための言葉でもない。

単純な話、虚無が己の究極を食らい尽くす数がその程度だと、先程の剣戟で悟っただけの話。

無論、切り結べたところで勝てるわけがない。

もしかしなくても十二も持たないかもしれない。

いや、確実にもたないだろう。

左肩は潰され、ついでに肋骨も何本か砕けて肺が一つ潰れている。

せつかくの活路も、動けなければどうしようもない。

そも、勝機を見出しただけで、負けるという想いはこの瞬間も変わってはいないけれど。

「言霊だがな。しかし、口だけならば……俺の勝ちだ」

口にするだけならこんなにも容易く。

後に行うだけで済む。

では、己に残された十二の斬撃を、心行くまで楽しむとしよう。

最早、問答は不要だった。宗司は全身の力を抜き去ると、己の思考を限界まで加速させた。

残された十二撃。放つのは心鉄極まる我が金剛。

「お主が至った終わりと、俺が至った、斬撃」

死して散るのはどちらか一人。

無論、負けを悟った己とて、理解は別に納得出来ているわけがない。

「どちらが上か……」

決めようではないか。

そう告げる前に、アンは静かに答えた。

「そんなこと、どうでもいい」

上も下も関係ない。

勝利も敗北もどうでもいい。

無という解答に至ったアンの言葉。対して宗司は空気にでもなっ

たように脱力させた肉体に全ての力を注ぎ込んだ。

その顔に浮かんでいるのは、宗司がここで初めて浮かべた感情。

それは怒りだった。

「どうでもいいわけ、ないだろうが……!」

刀は人を斬るためにある。

活人などとは無縁。殺すために、何人も斬り殺して、何人でも斬り

捨てるために存在する。

決して無意味などではない。

何せこの刀はきつと。

「お主を斬るために、俺はこの鋼を練り上げたに、違いない……!」

まだ見ぬ強敵と斬り結ぶために鍛錬を続けた。いくつもの殺し合

い、死線を越えて、いつか、きつといつかはと、遠くにぼやけている

強さの頂を求めて歩き続けた。

なら、眼前のこの騎士は、それなのだろう。

最果てとはつまり、先が無いということ。

つまり、無。

虚無こそ頂点の極み。

「だから、そんなことを言うなよ」

泣きそうな声色で語る宗司は、動かぬ左手は力無く垂れ下がったまま、右手の刀を肩に担いで、食指で垂れる唾液に赤色を滲ませながら

口許を歪めた。

「これからお主を……俺が、斬るのだから」

斬るという意味がある。

それは、真理であり。

意味が無いなんて、言わせたくなかった。

「いざ、尋常に」

支えが無くなった足元はまるで泥に浸かっているかのようにあやふやで動きづらい。一步踏み出すのすら全霊を注ぐ程に苦勞する。

この様で残り十二撃のうち幾つ放てることやら。

そこまで考えて、宗司は今度こそ思考の一切を破棄した。

「勝負」

時間の感覚が引き伸ばされる世界に再び宗司は突入する。その氣配を敏感に感じ取ったアンもまた、同じく時間から外れた世界に入り込んだ。

だが宗司が目指すべきは敵手でありながら違うところにある。

もつと深く。

もつと真理へ。

未だ奥で眠っている己の才覚を引きずり出せ。

「ッ……！」

初手、踏み込んだのは宗司。踏み抜いた大地から巻き上がる土と砂が虚空に散るより早く、アンの槍の圈内へと入り込み、体を独楽のように回転させながら刀を一文字に放った。

足りぬ射程を補うために、柄のぎりぎりを掴んで放つ宗司の妙手は、少しでも距離が狂うことで相手を惑わすことも視野に入れてい

る。しかし小手先は容易く見抜かれ、あの火花すら散らせぬ槍に刀は受け止められた。

だがこれまでと違い弾かれあつた互いの得物は火花を散らす。刀と己を同一とする宗司の牙は、この瞬きのみアンの虚無にすら突き立てられる牙となっていた。

それでも受けられた。



稲光に勝る閃光すら、届かない。

むしろ、受けられた衝撃で内側から痛みが爆発して、人間らしい感情があふれ出す体たらく。

死にたくない。

辛い。

楽しい。

死ぬには良い夜。

混ざり合う感情の渦に飲まれそうになって、宗司はさらに己を律する。

雑念は捨てろ。

歯を食いしばれ。

でも怖い。

だけど逃げたい。

それでも楽しい。

いつまでも続けたい。

そんな思いを全て捨てて、余分を削いだ鋼たれ。

「ぐ、おおおおお！」

今度は迷わずにそのまま押し込んだ刃が、アンの力で強引に押し返された。

互いに重傷とはいえ、ダメージは宗司の方が多い。体力的に劣っているせいか、均衡を保つことが出来ずに弾かれ、空いた胴に刺突が迫った。

時間は未だ引き伸ばされている。それなのにアンの放った突きは目視の領域を容易に突破していた。

相手もまた尋常ではない異端。

常軌を逸した尖爪を前に、覚悟を決めて前を向く。

躲すことは出来ない。

その分の体力は全て斬撃に回せ。

「オォー！」

宗司は矛先目掛けて刀を振りぬいた。上段より重ね合わせた槍と刀が互いに弾けあい、一際巨大な火花を咲かせる。

踏み止まるアンとは違い、塵芥のように宗司の体は後退する。

熱血は再度噴き出した。

量が少ないのは、術理のおかげではなく、もう体に血が残されてはいないから。

まあ考える必要はないだろう。

それこそ、言葉を借りるなら『意味が無いこと』だ。

「カアッ！」

浮いた体を立て直して、暗くなつていく視界を気合いで広げて前に出る。アンも既に構え直しており、微動もせず立っ様は、未だ虚無に立っていることを示していた。

神速へ至った宗司を上回り、アンの槍は空気を割り進む。斬り捨てられる大気すらも飲み干し、矛先に真空が生まれた。

これも応じる他ない。出し惜しみなく、練り上げた力を刃へと伝達。鋼と化す全身をもつてして虚無の矛へと拮抗を果たせ。

下段より昇竜の如く上げた刃は辛うじて矛との相殺を完了した。

しかし代償はあまりにも大きい。

激突の直後、三度目の激痛と共に矛と合わせた刀身が一部欠けた。それはまるで同一となった主の身と同じで、刀も敵手の虚無に飲まれているかのようで。

——苦しいか。

物言わぬ鋼に心で語り掛ける。

——むしろ、狂おしいだろう。

さも、それが当然だと宗司は言い直す。

何故なら宗司と刀は同じ存在だ。宗司の思いは刀と同義であり、この刹那だけ、二つ合わさり刃を成すから。

——なら、刀の本分を共に果たすでしょう。

吐き出す吐息に熱量は少ない。心胆冷え切り、青くなつた唇はそのうえについでと出した鮮血で化粧した。

——せめて死ぬにしても、綺麗な首を晒したいものだ。

良き死に化粧が整ったという思い、そこでまた下らぬ思考を次々と飛ばす己に苦笑。

捨てる。

思考を捨てて、鋼に至れ。

「づぎだ……い！」

喉に残った血の塊で濁った声のまま、宗司は雑念まみれの己を削りながら、四手目を指す。

既にアンの矛はこの心鉄極まった金剛すら吸収し始めているが、特に問題は感じなかった。

後、何回刀を振れるのだろうか。

雑念の中、その思考だけは根っこにあった。

揺らがない。

揺らぎようがない。

鋼は折れど、決して柔らかくはならないから。

だから雑念は捨てよ。

この鋼鉄にのみ腐心するのだ。

その鋼鉄の意志を感じ取るアンは、全く響くところのみせない宗司の在り方に奇妙な違和感を覚え始めていた。

何故、この男は意味の無いことを繰り返すのだろう。

結果は覆しようがない。そもそも、結果が覆ったところでアンには最早意味の無いこと。

そこで死ぬのも意味が無いからどうでもいい。

ここで相手を無に帰すのも当然だからどうでもいい。

ただ、そんな当たり前なことに対して、この男が見せる揺るがない意志は何だというのか。

四撃目もまたアンの方が早い。一撃ごとに宗司の斬撃は離され始めており、彼女もまた、残り八撃も合わせればその次で宗司を無に帰すことが出来ると確信していた。

さらに、それよりも早く宗司が自壊してしまうという可能性も察している。

いずれにせよ宗司はアンの矛によって命を失う。そして存在が消滅し、ここでまた一つ新たな虚無が生まれ、アンは己が得た解答を示すことが出来るのだ。

そのことを相手も分かっているはずだ。

重ねた剣戟の数だけ、アンと宗司の間には奇妙な信頼関係は生まれ、ある種の友情と言ってもいい絆が形作られているから、言葉を介さずとも分かっているだろう。

勿論、今のアンにとってはどうでもいいことではあるから、あえて宗司の考えを分かろうとはしないが。

故に宗司の行動はまさに意味無しと言ってもいい。

突き進む敗北を知りながら、己の勝利を信じて愚直に走る様。

無様と言うべき、浅ましき醜態。

「……関係無い」

思考の間に、八度目の衝突は終わった。

残りは四つ。それによりアンは宗司の手にした極みの斬撃すら吸収し、意味無しとして宗司もろとも斬り伏せることになる。

もうすぐ終わる。

そう思った矢先、激突の衝撃で後退した宗司の体が大きく揺らいで膝が折れた。

だが別段驚きはない。宗司の極みを全て飲み干すのが先か、その前に宗司が倒れるか、どちらが早いかの差でしかなかったから。

そして、予想を違うこともなく、宗司の体は大地に崩れる。

美しい月光に照らされた血濡れの肢体は、それでも握りしめた刀だけは落とさぬままに。宗司は押し寄せる微睡みに身を任せ、その視界は暗黒に染め上げた。

いつか斬ると思った頂点にまるで届かなかった。

結局、見苦しく足掻くことしか出来なかった自分を嘲笑いながら。

このまま無様に、死に絶える。

「ああ……だが」

こんな終わりも、悪くない。

その最後、綴じゆく瞳に浮かぶ三日月は、泣きたいくらいに遠かった。

## 第二十三話 『故に、斬る』

俺の刀の原初はいつだっただろうか。

そんなことを、最後に思う。

ああ、ここに来てすぐに見た夢の景色の話ではない。

あれは切っ掛けであり、始まりではあったが、道を得た原初の一步  
と言うわけではなつた。

俺の刀。

突き詰めた鋼の先に手にした、俺だけの刃。

心と鋼を合わせられると思えた感激の瞬間は、そう、遡ると数年前  
になる。

遡る。

遡っていく。

記憶は遠く、滲んでいた原風景に、再び俺は当時の俺に意識を重ね  
ていく。

あれはそう、今宵の月にすら勝る程、刀のように美しく、肌を斬り  
裂くような冷たい三日月の下でのことだった。

「お主は、筋が良いな」

刀を振るうのが楽しくて仕方なかった当時、虚空に描いた敵手の幻  
影に向けて一人真剣を振るっていた時、その様子を傍で見っていたこの  
世でたった一人、俺が先生と呼んだ人はそんなことを言ったのだ。

だが俺は当時も変わらずひねくれていたもので、褒められた嬉しさを  
誤魔化すように鼻を擦りつつ疑問を投げかけていた。

「そうでしょうか？ いや、先生にそう言っていただけなのは誉では  
ありませんが……唐突に何故？」

「唐突でも無いし、何故と疑問を挟まれるようなことでもない。お主  
は筋が良い。それだけの話だ」

「しかし先生、単に筋が良いと褒められるだけではむず痒いだけであ  
りません。良ければ俺の何処が良いのか教えていただければ、それ以外

は劣ったところということだ。稽古にも励みがでるといふもの」

素直に褒められたことを受け入れろとも思わなくもないが、しかしそんなひねくれが功を成して一步目を踏み出せたのだから、当時の童だった俺にも感謝する点もあるだろう。

先生は俺の言い分にちよつとだけ口許を歪め、そつと遠くを見据えた。

「お主は、月を斬るように飛ぶ」

「月を？」

「ああ、いつかお主は羽毛のように軽やかに飛んで行って、空の星々を斬れるのではないかといつも思うのだ」

先生の視線を追った先、見上げた空に浮かぶのは刃のように鋭い三日月。

あれを俺は斬れるというのか。ならば言われた通り俺が羽になって飛べるなら、未だ重みを感じるこの肉を削げばいいのだろうか。

そう答えた俺の返事が面白かったのか、いつそう笑みを深くした先生は静かに首を左右に振った。

「肉を削ぐ必要はない……そうだな。まずはその手に持っている刀と同じになってみるといい」

「刀と同じ？」

「そうさ」

先生は嬉しそうに頷くと、腰に差した刀を抜きはらい、天高く掲げた。

人を斬る。それだけのために作られた鋼は、美しい。

まるで夜に溶けるような薄い刀身だというのに、確かな重みを感じる鈍色を示す鋼の美麗に見惚れ、熱のこもった吐息が漏れたのを覚えている。

「心と鋼を統一するのだ。己は鋼で、鋼は己、その果てに至る金剛こそ、極まった真の刀である」

「それは、極意でしょうか？」

「そうでもあるし、そうでもない」

だが真実ではあるのだ。

先生は誇らしげに刀を見上げながら言った。

「しかしそれだけでは届かない。刀になっただけでは正しくはない。それは何故だとお主は思う？」

「うーん……」

俺は両腕を組んでしばらく唸って、ふと得意げに先生と同じく刀を天高く掲げてみせた。

「刀だけでは人を斬れません！ 人が刀を使うから、刀は人を斬れるのではないでしょう！ つまり、そこには人が居ない……あれ？」

でも先生は己を鋼とすることで刀になるって……」

「そういうことだ。己を鋼にした時点で、自身は人ではなくただ一本の刀となる……だがそこには人間が居ない。極まった金剛を振るうために必要な人が足りぬ。刀になる過程で削ぎ落した余分が何処にもないからな」

「ですが、己とはつまり人です。鋼が己なら、逆に鋼もまた人になるのではないでしょうか？」

「違うな。己が鋼になったとしても、鋼は何処まで行っても所詮は鋼。そこには鋼以外に何も無い」

そう返されてしまって、まるでトンチを聞かされている気分になって頭がぐちゃぐちゃになってしまう。

では正しさとは何なのだろう。

刀と化した後、何をもって正しさを成すのだろうか。

「だからお主は筋が良い」

頭を悩ませている俺に、先生は再び最初に掛けてくれた言葉を繰り返した。

「拙者には見つけれなかったその先へお主なら行けるような気がするのだ。手に鈍らを抱えたまま、月を斬り裂く狂気の真髄へな」

「狂気の、真髄……」

「人だけでは至れぬ。鋼だけでも至れぬ。真の意味で合わさるとはつまり、合わせて練った真なる鋼を、欲を極めた人が扱うことで至れるもの。これぞ、我が流派に伝わる心鉄金剛、その真実だと拙者は思うのだ。だからな宗司、お主は一心に刃となるだけではなく、きつとそ

んな極みの中で、決して一つどころに留まらぬようなところがある。それこそ、羽毛のように風の吹くままあつちこつちと、まるで我儘ばかりの子どものようなな」

強くなりたい。

痛いのは嫌だ。

楽しく遊びたい。

辛いのは怖い。

斬って斬られて斬り続ける。

斬りたくも斬られたくもない。

技の冴えを極めたい。

技を極めるのは面倒くさい。

相反する雑念だらけでいつまでも子ども染みた俺だから、そういう部分が、筋が良いのだと先生は笑った。

「無邪気とはつまり、我欲であり、それは雑念だらけの低俗な在り方だ。決して誇れるものではなく、真つ当な人を目指すなら律すべきことだろう」

「……」

「だが、杵に嵌めたものや、余分を削いだ純粹で至れるところなど、所詮は商人が集めるような小奇麗なだけの物でしかないよ」

だから雑念で無邪気に汚れているお主が真、面白い。

何度も頷く先生の傍ら、ふと自分が雑念だらけで低俗な奴だと言われていることに気付いた俺は目を吊り上げて唾を飛ばした。

「結局のところ俺を貶しているのではないですか！」

そう叫べば、悪戯がばれた小僧のように嫌らしく笑った先生。ああ畜生、いくら原初の尊さと言え、いつもこの面だけは苛立ちが腹の底から沸き上がり、当時の怒りが体を満たすようだ。

「ハッハッハッ！ ばれてしもうたか！ お主はいつもいつも拙者を楽しませてくれるのお！」

「ぐぬぬ！ ええい！ 真面目に聞いた俺が阿呆か！ 勝負だ先生！

この苛立ち、刀をもって拭かせてもらいまする！」

「よおし、今宵最後の稽古じゃ！ 遠慮せずにかかってまいれ！」



「うおお！ 死ねええ！」

「うお危ねっ!? 真剣では無く木刀を使い！ この馬鹿弟子があ  
！」

当然、童だった俺は苛立ちを隠すことも飲み込むことも出来ず、刀  
片手に先生へと突撃する。

そして最後は体よくあしらわれたかつての光景。

しかしそれこそ俺が俺の至る道を察した確かな原初であり、怒りと  
は裏腹に軽やかと飛び出した俺は、結局途中から笑いながら先生と斬  
り結んだのだ。

そんな今にして思うことがある。

鳥は当たり前のように空を飛ぶ。そしてその当たり前をこなす一  
方で、巣を作ったり餌を探したりと生きるための雑念を四方八方へ飛  
ばすのだ。

ならば、刀が斬るのは当たり前で、だからと言って刀の在り方を認  
めるあまり、全てがそこから派生するのではそれこそ意味が無い。

斬る当たり前。

それとは別にあらゆる雑念を持つ。

斬るといふ鋼。

雑念という人。

合わせて至る金剛こそが先生の言った真実であり。

——ああ。そうか。

「そういうこと、だったのだな」

音も無き世界で、いつの間にか得心の声は漏れ出ていた。

束の間の微睡みから目覚めれば、目の前に何て様だとしか言いよう  
のない姿を晒す、人間の可能性を極めた修羅が立っている。

だがそれは所詮、人間が至る可能性の一端を修めたに過ぎないこと  
を俺は思い出した。

雑念は無数と存在する。

あらゆる我欲に終わりは存在し、それら全てを極めずに、何を完結  
したと言えようか。

だからこそ人間の可能性は無限大なのである。であれば高々その

うちの一つの可能性を極めた末に、その完結に飲まれたこの女の何処に究極があるというのか。

そういうことだ。

そこでようやく、現実の己を改めて認識する。

つまり、俺が死にそうになっているという現実。

これは困った。

折角、さらなる一步目が踏み出せそうだというのに。

いや。

踏み出せるはずだ。

一先ず喜び勇んで新たな一步。

きつと、語られた理は既にこの手に宿っていた。

心鉄極まることに腐心した我が生涯、その過程で重ねた雑念の数々。それこそが何よりも大切で、決して斬り捨ててはいけなかったというのに。

明鏡止水では至れない。

狂気が、捻じれてかき混ぜられた悟りなら、そもそも俺は何て回り道をしていたのだろう。

雑念を消して、余分を削いだ鋼になる必要はない。

俺が立つのは無垢の逆、汚らしい垢で塗り固められた下賤の在り方ならば。

あの日、稽古の後に俺に語り掛けてくれた先生の言葉を思い出せ。

「宗司、お主なら修羅外道と言われている男が極めた斬撃に届く天賦の才がある。だが忘れるな、そこはお主の終わりではない。お主に至るのはその向こう側、人間では入れぬ極地、人が練った鋼の真理……つまり、修羅道であることを」

その言葉を、忘れてはならない。

至るのは我欲の果て。

我欲が生んだ鋼の極み。

我欲同士が合わさる金剛。

そんなもの、いつもこの手にあった。

だとしたら、俺は何て遠回りをしていたのだろう。

余分を捨ててはならない。鋼鉄を振るうに必要な我欲を抱えてこそ、人は刀と共に唯一無二へと至るのだ。

それが極み。

合わさる鋼を担う人。

なら今こそあの誓いを果たす時だろう。あのご老人との戦いで指一本届いた真理の門の奥地へ、今ならきつと行けるから。

虚無などと言う、先生が語った真理の真逆に行く愚かに見せつけてやろう。

それでもお主には感謝がある。

無という完結を見せてくれたからこそ、俺はようやくそこに気付くことが出来たから。

ではまずは、その喜びを鉄に込め。

感謝の代わりに。

「お主を、斬ろう」

## 第二十四話 『胸の鼓動は、聞こえているか?』

宗司が突然消えた。

そして、アンの体は熱を帯びた。

そう簡潔に述べざるを得ないほど、その異常は唐突だった。

「え?」

何が起きたのかわからず当惑を露わにするアンの目の前、膝が折れ崩れ落ちようとしていたはずの宗司が刀を振りきった状態で立っていた。

「浅かったが……」

血の詰まった喉を震わして、口から赤色の泡を吹きながら宗司は言った。

顔色は青を通り越して白に近い。だがその顔は清々しく、子どもが浮かべるような無垢な笑顔に満ちていた。

振った刃に滲ませているのはアンの血潮。それを見て、ようやくアンは己の胸を焼くような熱が、己の出血によるものだと理解した。

「なん、で……」

疑問は、再度飛来した刃を咄嗟に受け止めたことで斬り飛ばされた。

互いの刃が花散らし、甲高い音色を響かせる。

両者の一撃は再び拮抗状態に戻っていた。宗司の刃が息を吹き返している。それどころか、初手に放った全霊の一撃すら凌ぐ程の速度と切れ味がその斬撃には秘められていた。

その劇的な変化に、虚無という答えに行き着いたアンですら僅かではあるが困惑を覚えていた。

速いうえに、重い。

何よりも鋭く、熱い。

「貴方は……」

「俺は、俺だ」

血の塊を飲み下して、宗司はアンの疑問に真っ直ぐと答えた。

同時に放った袈裟の一撃は、アンが咄嗟に両手で槍を握って受け止めて尚、その両膝が崩れる程の威力がある。

「この狂気が、俺の証だ」

「ッー」

アンは両腕にかかる重さと、宗司の底知れぬ圧力に今度こそ動揺を露わにした。

「それが……！ 何だっっていうの!?!」

体中が切り刻まれ、左肩を潰され、熱血は殆ど失い、足元は今もふらつき押せば倒れそうな程に弱弱い。

ならば、この重さは何だ。

何が、この満身創痍の男に力を与えているというのだ。

意味が分からない。

全てに意味が無いからこそ、宗司の覚醒はアンには理解出来なかった。

「そこがお主の、限界だ……!」

競り合いを力任せに弾かれ、たたらを踏みつつ後ろに引いた宗司を襲う神速。額を射抜く虚無の魔弾を紙一重で躲しつつ、宗司は力の乗らない足を必死に動かした。

刀を振り上げるのも億劫だ。だがそれは決して重いからではなく、体が羽毛のように軽くなったせいで、刀が煩わしく感じるせい。

力は乗らないというが、力は要らなかつた。

何せ今は、空気の重さすら感じ取れる。

それでも未だ肉の檻に囚われている己を内心笑いつつ、疾風の如くアンの矛と交差する。

「全て意味無しと断じたお主の完結程度で……俺の狂気を凌げるものかよー!」

「狂気? 狂気なんて!」

これまでは不動のアンに宗司が斬りかかるといふ構図だったのが、いつの間にか両者の足は血肉の大地を踊り始めていた。

足を動かし最適の立ち位置を探らなければ届かない。全て意味無

しと断ずる一方で戦闘者としての理性がアンの体を突き動かしていた。

手探りでありながら、博打を打つように身を晒して勝機を模索しなければならぬほど、互いに体の裂傷によって斬り結べる時間は少なくなっていた。

幕切れは近い。だが永遠のような無限の刹那がそこにはあった。

「何もかも意味が無いのに！ どうしてそんな熱をいつまでも大切にしているの!?!」

「決まっている！ 俺の熱は俺の雑念！ そしてこの刀の冷徹と合わせる熱量こそ鋼の真実！ 刀の極み！ 終わりなど無き修羅道をお主如きに譲るわけがないだろうが！」

空間ごと削るような無数の刺突の隙間を縫うように走る。手数では左肩の使えぬ今は及ばない。

その分、一刀に込めた思いの丈をもって、敵手の牙に宗司の鋼は追いつがるのだ。

「ぐう!」

最早、宗司の斬撃は容易に受け止められる代物ではない。鎧を捨て身軽になったことが幸いしたのか、縦一閃と走る煌めきを辛うじて後ろに飛んで逃れようとする。しかしよけきれずにその頬が大きく裂けた。

その程度である。頬が裂けたところで戦闘に支障はない。宗司から見て左側に飛んだアンは、着地の衝撃をそのまま槍へと伝播させて全力の刺突を振るった。

稲光を超え、対象を無へと帰す意志に満ちた虚無の閃光の予測は放たれる前より。射線を捉えた宗司は、放たれるより早く身を反らし、その胸を擦るように矛先が突き抜ける。

余波だけで着物もろとも肉が抉れる。

返す刀で腕を裂いた。

だが払われた槍の先が腹を浅く裂く。

応じて一刀、胸部に三つめの爪痕を刻んだ。

「無駄を！ するなあああ！」

「そいつは無理の難題だなあ！」

迸る両者の鮮血。

その足元で踏み躪られた骸より溢れる冷血。

その場を満たすありとあらゆる肉より吐き出された真紅が混ざり合い、空気すら血色に染まって真つ赤な霧が生まれていた。

作り出される地獄。

散った肉と潰れた臓物で満たされた大地を遠慮なしに踏み抜きつ、一閃ごとに宗司とアンの体に新たな傷が刻まれた。

互いに防御は無視している。残された体力がそうせざるを得ない状況に二人を追い込んでいた。

何故、死なない。

命を無くすという真実を拒否し続ける。

アンの胸中を満たすのは常人には理解不能は常識であり、その常識に至ったがため、彼女の疑問は宗司に斬られる度に増大する。

だが宗司は違う。

この斬り合いを存分に楽しんでいた。

先程までも楽しんでいたが、意味合いは随分と違う。

勝ちたいと思う。

負けるとも思う。

楽しいと思う。

痛くて逃げたいとも思う。

そしてアンと同じく、こんなことに意味が無いとも思っていた。

そんな全てを肯定する。斬り合いでいつも浮かんでいたあらゆる雑念を捨て、己を一つの刀へとするのではない。そうした諸々を全て許容して、だから楽しいのだと宗司は腕を振るい続ける。

これぞ一つの武の真髄だった。完結という人の可能性ではなく、人が膨大な年月を尽くして練り上げた珠玉の技。

今や宗司はあらゆる感情を用いて刀を振るっていた。

勝つ意志を込めて振るう刃は迷いなく走る。

負ける確信で振るう刃は腰の引けた情けない軌跡を描き。

楽しいという喜悦で振るう刃は術理を無視しながらも鋭い線をな

ぞり。

逃げ出したいと願う体はいつの間にか飛びずさっていた。

その他、全ての感情を用いた一刀が花開くようにアンの心眼を染め上げた。

たった一振りに込められた全てが、錯綜する宗司の念が真実の虚像となつてアンの虚無を錯乱させる。

あらゆる感情を限界まで発露して込めた一刀。

それは剣士の奥義たる明鏡止水とは真逆の領域。

雑念ばかりを込められし、狂い狂った狂気の極み。

「捨てても軽くなりません」

この身に刻んだ想いを、欲するままに体に巻き付け。

「抱えて進めば、軽くなるのだ」

疾走するこの身に纏わりつく雑念が、只の棒切れを刀とする。

弧を描く刀と線を走る槍。火花と共に互いの得物の鉄が欠け、粒子と散った鋼の残滓は空から落ちた星屑のよう。その激突の手ごたえに、宗司はようやく眼前の虚無に己の刀が追いついたのを悟る。

後はこの虚無、超えるのみ。

だが時間は殆ど残されていない。

肉体に蓄積された疲労と裂傷。その分流れた血潮の量は致命的。

眩暈がする。

腕と足が上がらない。

呼吸も苦しく、痛みすら遠い。

油断すれば意識なんて木端よりも呆気なく吹き飛びそう。

それだけではなく、宗司とアン、両者と同じく、二人が使う得物にもまた限界は訪れようとしていた。

軋みをあげる互いの鋼。ぶつけるたびに削られていく刃も、その命を削っている。

それは、積み上げた積木がいつかは瓦解するかのように危うい均衡。

だが、限界と見定めた十二撃は遙か以前に過ぎ去っていた。

閃光と連なる刃。



響く旋律に似た鋼鉄の軋み。

場内の熱気を模した血潮と臓腑の臭い。

結末は残り数秒か。

しかし、際限なく引き伸ばされる刹那の時は数秒を数時間に変え、今も一秒は彼岸に消える。

永遠はここにあった。

一切を飲もうとする虚無を切り開こうとする宗司の手にした心鉄の極みと、狂気を飲まんと疾駆するアンの狂気が作り上げる、二人が望んだ修羅場がある。

そこに終わりなんて無い。

終わりと言う無すらも無いという矛盾。だがアンの虚無は終わり無き終わりすら肯定した。

そうか。

つまりこの男はそうなのだ。

「あはっ」

永遠に終わらない終わりが始まったのだ。

虚無という解答に目覚めて僅かな時間。世界が在るといふ事実と、世界は無いものだと言った自分の解答との矛盾に苛まれ、この解答を与えてくれた宗司と戦うことで紛らわせた己の思い。

それが昇華されていく。

終わりがあった。

今やこの場には終わりしか存在しない。

無という存在の一つの解答がここにはあった。

それを知って笑わずにいられようか。

笑うことに意味は無いけれど。

しかし、この場そのものが無の極地なら、この場で何をしようとするかは自由。

何もかも虚無。ここにはアンの全てが在る。

無いことが在る至福は、それだけで奇跡だった。

「世界が、虚無になっている……」

故に、終と定めた完結に、飲まれた世界を是とするか。

「そう思うのは、お主の勝手だ」

アンの歓喜を、それこそ意味無しと宗司は嗤った。  
決着は迫る。

全てを飲み干す人間大の暗黒天体と化したアンの槍捌きは、宗司の体を引きずり込もうとその規模を増す。

この世に存在するありとあらゆる全てが、その槍の範囲に踏み込めば瞬きすら持たずに消滅する程の破壊と速度の乱気流。では、そこに飛び込み尚も生きながらえ斬り合い続ける宗司は、既に人間の領域を逸脱したのか。

否、宗司は何処までも人間でしかない。傷つき痛んだ体を押し、折れかけの鋼を頼りにするだけの只の人間だ。

だから、乱れ咲く虚無の必殺にだって突入する。

必殺を超えて、我が必殺を。

お主を斬るために、俺は死地を疾駆する。

だが足りない。まだ後一步。必要なのは終わりの先。

槍の薙ぎ払いに鋼鉄を叩き込む。何度目の必殺をこれで弾いたか。

アンの目に驚きはない。宗司もまた同じだった。

終わらない。

決着に、届かない。

だが斬るのを止めない。

それしか知らぬと二人は笑い、千を超えた斬撃は刹那の隙間に鳴り響く。

「もう少し……」

「ああ、もう少し、だな」

両者共に永遠の存続を望んだのか。それとも永遠の終わりを望んだのか。

でも、もう少し。

この言葉だけは、重なった。

重なった言葉は見えない糸となって絡み合い、二人の距離を締め、突き出した刃が交差し互いの体に突き立つ。

血潮の雨。

致命傷に重なる致命的。

それはつまり――

死が、迫っている。

「が、は……」

「う、あ……」

そして終わりは始まった。

腹部を貫通した刃の切れ味によって、引き伸ばされた世界の時間は元に戻る。

互いに虚ろな眼差しで、腹に刺さった鋼を支えに立っているだけという現状。

余力は無かった。

永遠に続くと思われたあの刹那に至った術も、今の二人ではもう一度入ることは出来ない。

放っておいても互いに死ぬのが目に見えている。

だが。

それでも。

それ故に。

鋼を握る掌が、燃えるくらいに熱かった。

「あああああああああ！」

「おおおおおおお！」

腹より同時に引き抜いた得物を手に、一歩引いた両者が吼え滾った。

全身を引き絞り、互いに防御を一切無視して敵手へ放つ一撃に全霊を注ぎ込む。

そして、虚無に至った刺突と我欲で編まれた斬撃が、この戦いで一際強烈な踏み込みと共に放たれる。

激突し合った互いの鋼。

弾けた火花もこれまでで最大。

そして――。

宗司は、笑った。

その時、限界を超えた互いの鋼が砕け散ったのを見て、両者ともに

終わりを悟る。

二人よりも先に、その相棒は極限を超えた死闘に耐えきれなかったのだ。

刀と槍の残骸が混ざり合い、血潮の霧に反射する。

その煌めきに照らされながら、二人は手に残った残骸を互いの心臓目掛けて突き出した。

半ばで折れた刀と槍が再度激突し、今度こそ衝撃に耐えきれず、完全に砕け散る。

柄を握った掌は内側で砕けた鋼によってずたずたに引き裂かれた。だが二人は迷わず血濡れの手を虚空に伸ばし、辛うじて刃の形を残していた断片を同時に握り締めた。当然、断片とはいえ抜き身の刃を素手で掴んだせいでさらに傷口は深くなる。

先手を取ったのは宗司だ。懐に飛び込んでアンの腹に刃を突き立てる。そして深々と刺さった刃をさらに回転させようとしたところで、宗司は己の背中に異物感を覚えた。

振り下ろされたアンの刃が肩甲骨を砕いて肺腑を突く。貫かれたのが潰れた方の肺だったのは僥倖か。

構わず腹に刺した刃を握じりこんだ宗司が刃を手放すと、踏み込んだ爪先を支点に体を回転させた。

足先から膝を経て、腰、肩、肘へ。距離を用いず、全身駆動のバネを用いて力を溜めた宗司は、肥大した力を掌底に注ぎ、刃の尻に叩き込む。

火薬を弾かれた弾丸のように、刃は勢いよくアンの腹から背中へと抜けた。

だがアンは宗司の背中に突き立てた刃から手を放さない。それどころかより力が込められてズブズブと刃は肉へと沈んでいる。

「ぐ……があー！」

肺より逆流した血液を鼻と口から流しつつ、顔を上げた宗司は刃を掴むアンの腕目掛けて拳を叩き込んだ。肘に炸裂した拳は本来曲がらぬ方向に肘を折り曲げ、肉より骨が突き出る程。

結果、物理的に力が入らなくなったアンの掌は強引に刃から引きは

がされる。その勢いで背中より引き抜かれた刃を、宗司の右手は見ることもなく感じ取った。

「ひ、ひひ……い」

アンは歪んだ笑みを浮かべ、骨の突き出た腕を振りかざす。尖った骨の先はそれだけでも凶器。笑みの正体は、宗司を葬る確実な武器を手にした歓喜からか。

少なくとも、彼女には躊躇いなど微塵もない。

この敵手を葬るため、不細工で醜い矛すら、今は愛おしいのだから。筋肉を締めて骨を固定すると、アンは体ごと倒れこむように宗司の首へ腕を突き出した。

己の虚無そのものを叩きつけてくる恐怖。歪んだ笑みに込められた無感の歓喜はすぐそこに、対して宗司が感じたのは、背後に在る確かな冷徹、冷たい刃。

舞う鋼の息吹。

眼前には凶兆の化身。

迷わず伸ばした掌は——意志なき鋼を手繰り寄せた。

だが、遅い。

「これでえええええー」

ぬめる矛先は、宗司の首筋に触れ、その皮膚を貫くところまで到達する。

宗司という究極の我欲を終わらせられる歓喜にアンは叫んだ。無防備な背中を向ける宗司の首をこの切っ先で貫ける幸福に笑い、見えぬ視界に血濡れの終わりを夢想する。

その光景を、宗司もまた同じく思い描いていた。

首を貫かれ、死ぬ。

分かっている。

分かっているけれど。

「こんなにも……」

己の死が迫っているというのに、宗司の瞳は握り締めた鉄の欠片に反射する、理想と描いた斬撃と同じ軌跡を描く三日月に奪われていた。

死闘の果て。

死線の間際。

死地の終わり。

そこはきつと、至ってはならない修羅場なのに。

修羅場に零れる月光は、舞い散る花びらのように美しかった。

世界はそこで停止する。

時よ止まれと願うほど美しさに魅せられた、涅槃寂靜より短き時の間。

溢れ出る感情は限界を容易に超えて——さあ、終の先へと踏み出そう。

我欲の極みは無感を抜けて、一人の修羅が、鳥のように羽ばたいていく。

練り上げた思いの丈を小さな鋼に纏わりつかせれば、体はいつの間にか動いていた。

既にアンの虚無は首筋に触れていて、今から動いても意味は無いかもしれないのに。

しかし宗司に迷いはなかった。

理由も無く、確信も無い。

だけど、この刃は今こそ月すら断つのだと思えたから。

刃を掴んだその腕は、空に浮かぶ三日月をなぞる様に虚空を走り——

「月が、綺麗だ……」

りーん、と。

いつか、どこかで聞いた音色が、木霊した。

か細く漏れたのは、偽りの無い真実の一閃。

初めて聞いた音色なのに、どこか懐かしい響きの歌声。

透明で、静寂に酔い、風に溶けるような美しい旋律。

刀の奏でる鈴の音色。

凜と冴える、鋼の調。

「……名も知らぬ武士よ」

斬り飛ばされたアンの腕が虚空を舞う。閃光と疾駆した斬撃は、今

宵、最速で最短の軌道を飛び、少女が手にした唯一無二の解答を斬り払っていた。

それなのに、茫然と己の腕が失われた事実を悟ったアンは、総身を走る結末の予感に嬉しそうな笑みを一つ。

腕を広げて虚空を仰ぐ。

まるで、聖母のように美しく、悪魔の誘いのように汚らわしく。

あるいはこの結末に、感謝するように。

宗司は流線形を描く鮮血の尾を引いたままの刃を構え直し、抱き締めるようにアンの胸へと飛び込んだ。

ぞぶりと胸部を抜け、骨を斬り裂き、心を突く。

明確な死。

先程とは打って変わって、至高と呼ぶには稚拙な一撃だったけれど。

この斬撃もまた、己が手にしたたった一つの――。

「俺は我流……否、彼<sup>ひが</sup>我<sup>が</sup>一刀流、宗司」

我流を誇る男が抱く、いつか師より告げられた秘奥を名乗る。

彼我一刀流奥義、心鉄金剛。

無垢の刀に極まり注ぐ、我欲の生き様ここに煌めき。

——虚無の終わりを、斬り捨てる。

「この死合……俺の、勝ちだ」

宗司は無邪気な笑みに、寂しさを少し混ぜて、結末の至福に酔いれる。

その笑顔を盲目の少女は見ることは出来ないけれど。

「素敵な貴方。愛しい貴方」

嬉しそうに笑う宗司の姿が彼女の目に鮮明に描かれたのはきつと、紛れもない真実のはずだから。

「貴方のおかげで……」

私は『無になれた』。

言葉無き声こそ、終わりの音色。

眠る様に瞼を綴じた少女は安堵の笑みを最後に浮かべ、それすらもまた、夜に溶けて無に消えた。

むせる程の血の香りと、暖かくて柔らかな何かの感触を感じる。地獄にしては心地よい。そんなことを思った宗司は、とりあえず綴じていた瞼をゆつくりと開いた。

「……めいる、か」

「おはようございます。あれ？　こんばんはかな？　まあいいや、はい、ソウジさん。メールですよ」

視線の先の少女、メール・リンクキャットは、乾いた血の張り付いた顔で宗司に微笑んだ。

後頭部に感じる感触と間近のメールを見て、宗司は己が膝枕をされている状況に自嘲を一つ。

無防備を晒しすぎたものだ。

未だ微睡んでいる意識を何とか繋ぎつつ、浴びるように受けた矢と斬撃によって、最早服としての機能は最低限しか保っていないメールの服と、そこにこびりついた血の量を見て喉を鳴らす。

「何だお主。随分とやられたようだのお」

「三百八十九回死にました。ソウジさんが聖剣を残してくれなかったら、色々と駄目だったはずですよ」

「だが、言いつけは守ったようだな？」

「はい。根っこ齧って流れを読みました」

「その流れ、忘れるなよ？」

「大丈夫です。聖剣放しても、私の手にちゃんと残ってくれましたから……それで、強くなりましたって思いました。今回は聖剣に頼りっぱなしになっちゃいましたけど、でも次からは自分だけであの死線を越えて、強くなるうって思えたから……それって、とっても素敵なことですよね」

誇らしげに語るメールに、それならばいいと宗司は満足した。



体は随分と軽い。見れば、右手にはしっかりと聖剣が握られている。

「あの日と同じだな。また、お主には命を救われたようだ」

「ちよつと違いますけどね。私、今度は自分の意志でソウジさんを助けることが出来ました」

「後悔してるか？」

「後悔なんてしませんよ。ううん、したくないです」

「なら、良い……」

宗司はこの世界に來た時のことを思い出す。

初めて出会ったあの日。まだ一月も経っていないのに、随分と昔に感じるのはどうしてだろうか。

散乱する死体と、充満する血の香り。そして鬱蒼とした森の中。

状況は同じだ。違うのは、メールの心の在り方だけ。

初めて出会った時は、偶然だった。

なら今回自分を助けたメールの必然には、何が込められているのだろうか。

「あほらしい」

どうでもいいことだ。

宗司は疲労で重くなつた上半身を起き上がらせると、握っていた聖剣を地面に突き刺して手放した。

そんなことよりも、もっと大事なことがあるだろう。

偽りの全能感が消えさせる。宗司が手にした極みを汚す邪魔が無くなれば、この手に残るのは――

「まだ、この手にある」

鋼と人が合わさり至る真理は、刀を失った今も己の掌に。虚無の完結を超えた己の修羅が、隠し切れない喜びとなって胸の内からこみ上げてくる。

「だが、まだまだだ」

不意に見上げた空の三日月はそれでも遠い。

しかし、差すらも分からなかったかつてと違い、今は己と三日月の差がどれほど離れているのか分かるまでは、近づくことが出来た。

修羅外道。

あの男の至った極みは、アンのそれとは違う。同じ終わりでありながら、アンは戦いの最中入ったばかりの初心者だったのに対して、あの男は手にした完結に浸り尽くして、完結を十全に扱える程のもの。人間の可能性の底は見た。

だが、可能性の底を惜しげも無く操る男は、尚も超えられぬ頂に。

「……それでも俺は、いつかあの三日月も」

斬って捨てる。

童のように無邪気な心地で語る宗司は、飽きることなく夜空を見上げ続ける。

「……はい、私もきつと」

その隣で、同じように夜空に思いをはせるマイルもまた、胸に宿した原初の願い。強くなるという渴望を空に託すのだ。

そして、修羅場の終わりの静寂に、死闘を制した修羅二匹。極めた武力を一人誇り、狂気の月夜で血潮に浸る。

——胸の鼓動は、聞こえているか？

今はその手の我欲も忘れ、熱く冷たい儂さに酔え。

## エピローグ 『風の吹くまま、 気の向くまま』

——そうして、自分はまた間違えたまま、ただ全てが終わった光景を見ることしか出来なかった。

「……」

暗い森を進む。気を緩めればたちまち崩れ落ちそうな体を無理矢理押しして、クロナは一人、粘着質な何かの混じった大地を、己に刻み込むように気を払って歩いていった。

進路を考える必要はなかった。何せ鼻をくすぐる血の香りと、月明かりに薄らと照らされている死骸で彩られた道を辿るだけでいいのだから。

クロナは既に戦意を喪失していた。まだ残党が居る可能性もあるというのに、刃は収めて、周囲を警戒することも忘れ、浮浪者のように呆けた様子で歩くばかり。

「……」

何だと言うのだろうか。

この光景をどう表現すればいいのだろうか。

煉獄と呼ぶか、地獄と呼ぶか。

「いや、修羅場だ」

修羅が躍った後の祭り。修羅場の跡地を己は辿っているのだ。

それを自覚した瞬間、堪え切れずに両膝をついたクロナは、胸に溜った不快感もろとも嘔吐した。

血の臭いは慣れている。

死体の姿も見知っている。

だが、この結果に至った原因と過程がクロナの心の許容量を容易に超えたのだ。

ここには正義が無い。

己の欲求を満たすためだけに森を蹂躪しつくした彼らの行いは、断じて正義と呼び、王道と呼ばれるものとは真逆を行くものだった。狂気が織りなす修羅の道。

描き出された結末は、宗司が言ったように、王道を行くべきクロナには耐えきれない。

「……何を、今更」

口許から滴る唾液を拭うのも忘れて、クロナはうつむいたまま自嘲した。

そう、今更過ぎる話だ。宗司と一戦を交えた己は、宗司がどういった存在だったか知っていた。

知りながら、付いていったはずだ。

風の吹くまま飛ぶ綿毛のように、思うまま進む宗司がもたらす悲劇を知っている。

戦いを純粹に楽しむ修羅だから、そのせいでこの国の王都は消滅したのだ。

ならば、そんな男が戦いを求めて歩めば、こんなことになるのは分かり切っていたはずだろう。

「だが……私は」

分かっている、見ようとしなかった。

宗司に命を救われた恩がある。

宗司という規格外がもたらす強さを知りたいという好奇心がある。

宗司という迷いを知らぬ男に付いていけば、いつまでも間違え続けている自分を正せるという予感があった。

だから、見逃した。

その結果、また間違えるという本末転倒を起こしながら。

何度だって、繰り返す。

「……行こう」

クロナはこのままではいつまでも思考の渦に飲まれると思い、口許の唾液を拭いさると、重たい体を引きずるように歩みを再開した。

そして、どれほど歩いただろうか。

血の臭いを抜けた先、僅かに開けた広場の中心にある、クロナですら見上げる程の巨大な石造りの門の前に、三つの人影をクロナは見つけた。

暗がりでも見誤ることはない。顔面蒼白のクロナとは対照的に朗

らかと会話しているのは、宗司、メイル、ナイルの三人であった。

「あ、クロナさんだ！ おーい！ こつちですよー！」

クロナに気付いたメイルが両手を精一杯振りながら笑っている。その笑顔に、どうしようもない嫌悪感を覚えてしまいながらも、クロナは取り繕うように乾いた笑みを浮かべつつ、片手を挙げて応じてみせた。

「丁度よかった。くろな殿、この奇怪な門が転移ばすとやらだそうだぞ。ないる殿がどうやら見つけてくれたらしい」

「とはいえ、道中、少々蛮族の皆様方に苦戦してしまい、このままでは死んでしまいそうになりましたけど……戦いの喧騒を聞きつけて助太刀してくれたソオジさんとメイルちゃんのおかげで助かりました」  
「お主はよくぞまあ平然と嘘をつけるのお。一人でも楽勝だったろうに」

「買いかぶりすぎですわよソオジさん」

「まっ、そういうことにしておこう……喧騒に俺らが気付けたことも含めて、な」

意味深な宗司の言葉にナイルは決して笑みを崩すことなく黙したままだ。そんな二人を見比べて難しそうに眉をひそめるメイルがシニールではあるが、その状況に至る過程を知るクロナは一人、言い様のない疎外感を覚えていた。

——考えるな。

それが誤りだと分かっているが、クロナは己に言い聞かせるように心中で呟いた。

「……それで、これを使ってメビウス王国の外へ行くのだろうか？」  
「そうなのだがな。その前にこれの処理をどうしようかと話していたのだ」

クロナの問いかけに答えた宗司は、手に持っていた穴の空いた布——アン・サルソンを召喚した際に、召喚者である族長もろとも貫かれた聖骸布ハックを丸めて、クロナの胸元に投げた。

言うよりも早く、反射的にハックを手に取ったクロナは、聖骸布よりもたらされる情報量に一瞬眩暈を起こしながら、それがどういった

代物なのかを瞬時に理解した。

「これは……」

「まあ同じと言っても、予め決められた力を授ける聖剣とは随分と違いますけどね」

メイルの言う通り、確かに聖骸布ハックは聖剣や聖槍とは違った能力を秘めている。二つと違って、聖骸布には聖剣や聖槍のような能力は搭載されていない。

だがその能力は聖剣と聖槍と比較して尚、恐るべき力を秘めていると言っても過言ではなかった。

「世界、改変能力？　馬鹿な……こんなものが、あつていいのか……!？」

使用者の思った通りに世界の在り方自体を改変させる。

たったそれだけの恐ろしい力がハックにはあった。

「だが……いや、そんなことが許されるはずが……しかし……」

お気楽な感じでどうすべきか悩む三人とは違い、聖骸布の秘めた力が示す一つの事実クロナは戦慄を禁じ得なかった。

聖骸布ハック。世界改変能力を秘めた聖装系統の装備が三つ目。

世界を象る根源的な原則を思うが儘に改変するということは、今、この場でクロナが聖骸布を使用することで、彼女の思うままの世界が生まれるということだ。

言わば、この世を作ったとされる唯一神クトウアと同じことを許されるということ。

それは人が持つには過ぎた力であることは間違いなかった。

「俺としては何に使おうがどうでもよいのだがのお……正直、どうでもよくはあるが、だからとて放置して勝手に使われるのも面倒だ」

「私も同意見ですけど、どうすればいいんですかね？　私、馬鹿なのでどうすればいいのかとか分かりませんよ」

「でしたら私が……と、言いたいところですが、あのような布きれを使って世界を無理矢理操るというのもつまら……許せないというもの。何かを変えるのは己の手であるべきですし、ソオジさんの言う通りうっかり誰かに使われるというのも釈然としませんわ」

クロナは分かっていたとはいえ、聖骸布の力を知ったうえで使われたら面倒といった程度の認識しかない三人の考えに、最早笑いしか出てこない。

この三人を常識で括ろうとしたのが愚かだと言うべきか。

何より、こんな化け物共を理解できると思っっている己に――

「……ッ」

不意に、クロナは一步後ろに下がった。

瞬間、宗司とナイルの視線が一瞬だけクロナに向けられ、クロナの全身が泡立った。

間違うはずがない。今、確実に己に殺気が向けられたことをクロナは悟った。たった一步下がっただけで、まるでクロナの内心を見切ったかのように、眼前の化け物は殺気でこちらを制したのだ。

それでもクロナは脳裏を過った考えを止めることが出来なかった。

これさえあれば、こいつらをこの世から――

「無理ですよ、クロナさん」

視線を向けることなく、ナイルは笑ったままクロナの考えを制した。

「そうだぞくろな殿。それ、穴空いているから本来の使い道も出来ぬ上、後一回分しか使用出来ぬ」

応じた宗司の言葉を聞いて、クロナは握り締めた聖骸布に意識をさらに注ぎ込み、風穴が空いた結果、その能力で改変出来るのが、元の能力と比べると雀の涙程もないことを悟る。

尤も、穴が空いていたからこそ、本来の使用者であったアン以外の人間が触れただけで、その機能を扱えるようになったのだが。

いずれにせよ、聖骸布を使用してクロナが思った行動を実践することは不可能であったということになる。

「あ……う……」

己の邪な考えを見抜かれ、殺されるのではないかという絶望と、この化け物共を葬れる唯一無二の力が使えなかったという絶望。二つ合わさったクロナは喉より引きつった声を漏らしつつ、さらに数歩後ずさる。

だがクロナの思いに反して、ナイルと宗司はクロナに何かしようとする素振りは見せず、むしろいいことを閃いたとばかりに会心の笑みを浮かべた。

「そうですね！　クロナさんが聖骸布を持つというのはどうでしょう？」

「うむ。俺もそう思ったところだ。ははは、くろな殿ならよくわからん使い方や不用意な使用はせぬだろう。めいる、お主もそれでよいな？」

「はい！　ソウジさんの言う通りでいいですよ！」

三人が揃って、能力が遥かに弱まったとはいえ使い様では今も尚危険な力を秘めた聖骸布をクロナに譲ることを問題としていない。しかも、宗司とナイルは、クロナが脳裏に浮かべた考えを察したうえで、そう言い切ったのだ。

それが、どういうことなのか分からない程、クロナは鈍くはない。——私であれば取るに足りぬというか……！

今の聖骸布を使われたところで『クロナ程度なら問題は無い』。害意が有ろうと無かろうと、宗司とナイルにとってクロナはそういった存在なのだ。

反射的に顔を俯かせたクロナの表情は、言外の屈辱に歪み切っていた。

そして、それが分かっているながら何の反論も出来ない己が嫌だった。

分かっている。

分かっているながら、踏み出せない。

だからこそなのだろうか、クロナは俯いていたため見えなかったが、宗司とナイルがクロナを見る瞳に、小さくない落胆の色が浮かんでいた。



「……まっ、ともかくこれで聖骸布とやらの処理は終わりとしよう。それで？ この転移ぱすとやらはすぐにでも起動するのかなの？」

門を軽く小突いて宗司が言うのと、隣に並んだナイルが「ええ、どうやら山脈の反対側にある門に通じているようですね」と返した。

その言葉にメイルが不思議そうに首を傾げてみせる。

「どうしてナイルさん、この門が何処に繋がってるのか知ってるんですか？」

「え？ あ、ふふふ、ほら、門に術式が刻まれているじゃないですか。それを今軽く読んで何となくの場所を予測しただけですよ」

「あ、そういうことですか。てつきりこの転移パスが何処に繋がってるのか最初から知ってるんじゃないかと思いましたがよ。ほら、転移パスの術式って複雑すぎて専門家以外は解読出来ないって聞いてましたし。凄いですねナイルさんって」

「ふ、ふふふ、ええ、そうなんですよメイルちゃん。もっと褒めてもいいのよ？」

「お主、口が若干引きつって——」

「ラブリースマイル！」

「……まあ、どうでもいいわ」

両目を見開き叫ぶナイルを横目に呆れ混じりの溜息を吐き出しつつ、宗司は咳払いを一つすると前に一步出て三人の方に振り返った。「話は少々脱線したが、今宵は存分に楽しめた。個人的な話だが、この大樹海に来て俺は新たな境地を得ることが叶い、当初の目的であっためいるの良き稽古にもなった。今だから話すが、最初の一回でほぼ十割方死ぬと思っていたが、何、人間やってみれば案外……また話がそれたな」

このままでは長話になってしまいうだろう。宗司は再度咳払いをして一端間を置いた。

「夜も更けた。月下で舞えたことに感謝しつつ、では新天地へと赴くことにしようか……ないる殿」

「はい、任せました」

言われるがまま前に出たナイルが転移パスに手をかざした。

「では、こちらで操作しますので、三人はパスの中へ」

ナイルに促されて宗司達は転移パスの前に立った。未だ閉じたままのその門は、当然裏側に何かあるわけではない。

しかし、三人が門に立ったのを見計らって己の胸より聖槍を取り出したナイルが、膨大という言葉ですら足りぬ程の魔力を容易に操って転移パスに注ぐと、自動で閉ざされていた門がゆつくりと開き始めた。

開いた門の奥に広がる風景は鬱蒼とした森林ではない。眩いばかりの白い閃光が開いた門より溢れだすのを見て、三人は堪らず目を細めた。

「……よし、これで転移パスは繋がりました。後はここを通ればメビウス王国の外へと晴れて脱出となりますよ」

「脱出って……まあ、間違えてませんけど」

王都崩壊の責があるのを分かっているため、若干引きつった笑みを浮かべつつメイルが投げやりに応じた。

だがいつまでも過去に囚われるのも阿保らしいというものだ。メイルは後悔も早々に、何ら迷う素振りも見せずに転移パスから溢れる光の中へと踏み出して、その場から居なくなつた。

どうやら無事転移が完了したのだろう。光に消えていったメイルを見送って、宗司は未だ動揺を隠しきれないクロナの足を軽く小突いた。

「すまぬ、先に行っていてくれ」

「……分かった」

言われるがままという言葉そのままに、クロナが憔悴しきつた表情で転移パスを潜り抜ける。大柄な彼女すらも転移パスは容易に飲み込んで、そのままクロナの気配は光の中へ消え去っていった。

そして後に残るのは、宗司とナイルの二人のみ。

光を背にして振り返った宗司は、目を細めることなく真っ直ぐに己を見つめるナイルに鋭い視線を向けた。

「言いたいことは？」

「ここでお別れですね」

あらゆることを含んだ宗司の問いかけに対してのナイルの返答は気楽なものだ。

まるで動じた様子がない。少なくとも表面上はそう見えるナイルを見て、宗司は溜息と共に毒気が体より消えていくのを感じた。

「……まっ、お主が言わぬならそれでいい」

「あら？」

「つたく、そういうのは……それで？　ここまでで、いいのかなの？」

短い付き合いではあるが、この女が思った以上に頑固であり、己の欲求に忠実な人間だということとはよくわかった。

だから言わないのだろう。

言わない方が、面白いから、言わないのだ。

その全てを納得したうえで、宗司は改めて問いかける。

それならそれでいい。

そういった態度を崩さない宗司に、背筋を駆け抜ける興奮を抑えられた己がナイルのは誇らしかった。

「……私の目的はあくまで聖剣の担い手がどういった存在なのかを見極めることでしたからね」

「では、お眼鏡には適ったのかの？」

「それはもう十二分に。貴方なら、私が何かするまでもなく、きつと素敵な混沌を世界にばら撒くことでしよう」

「そう言いながら、素知らぬ顔で俺を釈迦の掌に乗せるといわけか」  
「そんな低俗な邪神で例えられるのは些か不愉快ですが、確かに貴方に対して黙してばかりの今の私にはそう言われても仕方ないところがあるのは事実……安心してください。全ては偉大なるにやるに嘲笑われるだけのこと。貴方も、そして私も。その中でどれだけにやるを楽しませることが出来るか、それだけの話です」

困ったように目尻を落としつつ、ナイルはにやるの加護を受け止めようともするように、その両手を広げてみせた。

「だからこそ、ここでお別れというわけです。にやるをより楽しませるために、程よく混沌に陥っているこの国の外は貴方が、そして貴方が撒いた混沌の種を、私がこの地で育みますわ」

「……好きにしろ」

「うふふ、初めての共同作業ですわね」

「好きにしろ……!」

ナイルが相手だと精神的な疲労が積み重なる。痛くも無い頭が痛むような感覚に額を抑えつつ、宗司は最早それ以上語ろうとはしない。ナイルに背を向けて転移パスに入ろうとして、立ち止まった。

「ああ、最後に一つ」

「はい?」

背を向けたまま、宗司は隠すことない殺気を漲らせた。

そして邪悪に口許を歪め、宗司とナイル、最後に問答をもう一度。

「次に会ったら?」

宗司は気軽に問いかけて。

ナイルは無邪気に微笑んだ。

「殺してあげる」

間髪入れず、響く声。

その心地よい感覚に、宗司は楽しそうに喉を鳴らして。

「俺もお主を、斬るとしよう」

——これだから、修羅場というのは面白い。

唾う宗司のその背中、死に倒れるまで狂い踊れと、蒼褪めた月光は降り注ぐ。

恐れも不安も、今は無い。

風の吹くまま、気の向くまま——。

次の修羅場へ、赴こう。

【血まみれのぼーいみーつがーる】完

## 人物設定・世界観設定

### 幻想世界ファアービュラス

正しくはイシスを分けた南北二つの大地を合わせてファアービュラス大陸と言うのだが、未だ海に向こう側との交流がないため、世界と一つに括って呼んでいる。幻想と呼ばれる所以は、この世界そのものが、神が見ている夢の如きものだからという宗教的な理由。なので、魔族側では混沌世界ファアービュラスと呼びかたが違う。

大陸の中央に海と見間違うほどに巨大で広大な川、イシスが流れており、それを中心にして、北の領土を魔界、南の領土を人間界と呼ぶ。この二つの領土は、かれこれ千年にも及ぶ長い間、同種族同士で領土争いを繰り返していたため、互いに一方の土地への興味はなかったのだが、近年復活した魔王によって魔界は統一。宿願である人間界を支配し、人類種を滅ぼすために侵攻を開始した。

現在はイシスを媒体にして展開された結界によって魔族側の侵攻は抑えられたが、最前線で活躍し人間界の一部の領土を奪い取り、そのまま先任指揮官として人間界に残った魔族達との熾烈な争いは今尚続いている。

### 魔獣

本来は知恵のある人類種や魔族、その他精霊などしか持たない魔力という力を持った獣のこと。知能指数は低く、上位のものでも獣となんら変わらない知能しかない魔獣も居るが、中にはそれなりに知恵を働かせる種族も居る。

魔力を持つているだけで魔術を扱えるわけではないのだが、固有のスキルを使用し、人類種や魔族種を見つければ直ぐに襲い掛かってくるほど凶暴なため、見つけ次第駆除することが好ましい。その皮や骨などはそれなりの武器として加工される。

人類種、魔族種、それぞれに友好的な魔獣も存在する。

## 魔族

人類種にとつての天敵にして、恐るべき戦闘力を秘めた化け物。分類としては、最下級、下級、中級、上級と分かれている。

とはいえ、人類側と魔族側、両方にとつて最下級の魔族は魔獣と同位のものであるという認識がある。というのも、最下級の魔族は下級の魔族と比べて能力に雲泥の差があり、下級魔族以上の魔族達に奴隷として使われるか、或いは食用として食われる最下級魔族も存在する。そのため、最下級魔族に関しては人類種でも充分に対処が可能であるため、一般的な認識だと、最下級魔族も含めて魔獣と一括りされている。

だが下級以上の魔族になると、その戦闘力の桁は別次元と評するくらい比べ物にならないものとなる。その戦闘力は、人族の軍隊を投入してようやく下級魔族一体を撃退出来るレベル。

しかし下級と中級の戦闘力の差は最下級と下級程の絶望的な開きはないため、個体数で上回っている人類は敗走を繰り返しながらも、何とか前線を維持して踏みとどまっていることが出来ている。

最後に上級魔族は個体数自体が数えるほどしか存在しないものの、その力は下級魔族を遥かに凌ぎ、単体で人類種の国家を落とす力を内包している。その中で特に選ばれた存在を四天王と呼び、魔王の側近として影に日向に活躍をしているとのこと。

以下は、分かりやすい魔族の最大レベル表。あくまで平均なので、これに当てはまらない者も例外として存在する。

最下級魔族	レベル1～20
下級魔族	150～300
中級魔族	300～400
上級魔族	500～700

## 人類種

人間及び人間に友好的な亜人種の総称。特に階級分けはない。魔

族も同じことではあるが、種族ごとに能力にばらつきがあり、その寿命も種族によつてはまちまち。一長一短ではあるが、あえて人類種における上級魔族に当たる存在をあげるなら、ハイエルフと呼ばれるエルフの始祖族だろう。

全体的に下級魔族との戦闘力の差が大きいが、魔族にはない仲間意識や個の多さでもって、地力で上回っている魔族の侵攻に抗っている。

大体最大レベルが70を超えればエースと一般的に呼ばれるものである。ちなみにクロナは人類種の中でもトップクラスに君臨する強者。

### ステータス。

その人の能力、つまりは才能を数値として変換したもの。正確には能力解析魔法の一つで数値化されたものである。

とはいえ完全に数値通りというわけではなく、実際には小数点以下は切り捨てて表示されているため、正しい意味で同一の数値をもつ存在は皆無である。あくまで才能や技術等をデータに強引に置き換えただものであり、その人物がどういった人物なのかを簡単に見ることが出来る指針程度の感覚で見たほうがいい。

生まれ持った才覚により、最大レベルや基礎ステータス及びステータスの上昇率等が決まっている。なので、最大レベルが同じでも、能力値に開きや、習得できるスキルや魔術にばらつきがある。

よつてレベル差があつてもステータスで負けているということもしばしばあるので、一概にレベルの差がそのまま能力の差になるというわけではない。

とはいえ、レベル30、70、100、200、300と、節目ごとにステータスの上昇具合が著しく変化するため、最大レベルが高ければ高いほど、才能があるときみなされる。その他、称号によつて能力に+補正や固有スキルがつく。

基本的にレベルアップという現象によつて能力は上がるが、それと

は別に通常の鍛錬でも上下する。なので、例えば同じレベル1でも、ステータス上同一の能力を持つ者が一年間鍛えぬいた者と一年間引きこもっていた者で分かれた場合、その能力差にはかなりの開きが生まれる。特にレベルが一定を超えた者だと、鍛錬によってそのステータスは同一レベルでも全く違うものになる。とはいえ、レベル上昇の恩恵に比べると、只の鍛錬で得られる能力上昇率は微々たるもの。

必要な経験値にも当然だが差があり、早熟型や晩成型などがあつたりする。経験値の習得方法は様々であり、日々の雑務から勉強にいたるまで、全てが経験値として蓄積される。だが一番の経験値は、やはり戦闘によって相手を倒すことのものであり、必然的に兵士などのレベルは一般人と比べて高いものである。一説では戦闘によって殺した相手の命を吸っているため、先頭が最も経験値を稼げるとされているが、詳細は不明である。

尤も、中には戦闘に一切関わっていないにも関わらずレベルが高い者も居るため、決して戦闘のみがレベルアップの近道というわけではない。

レベルアップとは言ってしまうと『生まれ変わる』ものであり、鍛えることで得られる力とは違い、変化が劇的である。そのため、レベルアップすると体が軽くなりすぎるといふ変調が起きるため、上がった直後は体のバランスが合わずに、人によっては歩くのに苦労するといった事例もある。その事例の多くは、成長度合いが加速する30レベル以上から。

スキル、魔術も表記されているが、コレはあくまで対象のスキルや魔術を強引に平均化したものであり、同じステータス表記でも、それぞれ得意とするスキルや魔術はばらばらである。

一説ではレベルとは唯一神クトウアが授けた力であると言われ、節目ごとの劇的な成長は、神の祝福とさえ言われている。

名称解説。

HP



ヒットポイントの略。ダメージを受け続けてこれが0になると瀕死、あるいは死亡状態。0になつたとしても、処置が適切なら復活することもある。

MP

マジックポイントの略。スキル、魔術を使用するとき消費する。魔力と呼ばれている。

筋力

物理攻撃に影響。この値が高いほど、素手や武器を用いた攻撃とスキルの威力が向上する。

体力

物理防御力に影響。この値が高いほど、敵からの攻撃やスキルの威力を軽減することが出来る。

魔攻

魔術攻撃に影響。この値が高いほど、魔術の威力が上がる。補助魔術や回復魔術にも補正がかかる。

魔防

魔術防御力に影響。この値が高いほど、敵の魔術の威力を軽減できる。また、種族（アンデッド、ヴァンパイア系）によっては光属性に当たる回復魔術への抵抗値にも影響。

敏捷

回避、命中、クリティカル率などに影響。動体視力とか上がる、体が軽くなって動きが早くなるなど。

幸運

レベルでは上がらない。持って生まれた数値固定。高いほど、「懐にお守りが入っていなかったら死んでいた……」「援軍だ！ 援軍が来たぞー！」「宝くじ当たったお！ 当たったお！」「みたいな確率が高くなる。多分。

スキル

ふとした拍子に目覚めるため、神の祝福の一つと言われており、どのようなスキルを閃くことが出来るのかは体系化されている。欲しいスキルがあるならば、習得条件を確認し、それを満たせば自動的に

習得可能。

スキルと言っても各種色々であり、戦闘系スキルから、生産系スキルや料理系スキル、マイナーなものだと放屁スキルやドリる(鼻くそ)スキルなどと、それこそ多種多様とある。

レベルやステータス、もしくは必要なスキルを習得しているか、どのような修練をしたか等がスキル習得の条件である。とはいえ、料理や鍛冶など、レベルやステータス等関係なく覚えられるスキルも多いので、戦闘系でない限りは、基本的に日常生活を送っているだけでスキルを得ることが出来る。

基本として、スキル取得の条件を満たしていれば、修練のうちに関きによって覚えるか、実際にそのスキルを使う者から教えてもらうか、神より授けられたとされる『スキルブック』と呼ばれる魔法具を用いて習得が可能である。

上記のように、スキルは各種多量に、それこそ把握しきれないほど存在しているため、ステータス表記では様々な系統別にして纏められており、細かいスキル詳細は本人でも全てを把握していないということが多い。

※※※※※

この人物紹介兼ステータス表記並びに物語本編の描写では、各種戦闘系スキルや得意とするスキルのみをステータスに表記しています。よって、ステータスに全基礎スキルや全中級スキル等と書かれていても、それはあくまで戦闘系スキルの中でもメジャーな物であるだけで、全てを修めたということではないので注意。

※※※※※

固有スキル

レベルやステータスなどの条件を揃えることが出来るなら、それこそ誰にでも習得が可能なスキルとは違い、特定の条件を満たさなければ得られない特別なスキル。これに関してのみは、聖剣であっても習得は出来ないものが幾つか存在する(例、後述する魔王が保有する固有スキル等)。基本的に通常のスキルよりも強力なものが多いが、取得条件が分かっている固有スキルは少なく、会得した本人すらもどう

やって取得したのか分からないものが多い。

## 魔術

炎、水、風、土、光、闇の六属性あり、基礎、中級、上級、最上級まで存在する。スキルと同じく多種多様な魔術が存在するが、スキルと違って魔術はMPを必ず消費しなければ使用することが出来ないことと、勉強による習得が可能なため、現在の能力では使用できない魔術も、習得するだけならば可能というのが特徴としてあげられる。さらに魔術は、属性別に様々な呪文が存在しているため、ステータスに表記されている数値は、対象が修めている属性魔術の呪文の数とそれら一つひとつの習熟レベルの総計で平均値を算出している。よってステータス表記上の魔術の習熟レベルはかなり曖昧で、一つの目安程度にしかない。

例えば二人の人間が同じ全基礎属性魔術『習熟レベル5』だとしても、戦闘補助の魔術が得意な魔術師や破壊系の魔術が得意な魔術師が居る。よって、大まかな系統別で纏めたステータス表記だけではその者が得意とする魔術は正しく判断できない。

また、スキルとは違った習得条件が存在する。MP、つまりは魔力が必要あり、詠唱を正しく理解したうえで、各種属性を司る精霊と契約を結ぶことで、初めて使用が可能となる。人によっては炎属性魔術しか使えないが、最上級炎魔術まで使用出来る者も居る。

あくまで簡単な分類の仕方だが、スキルは肉体依存、魔術は知能依存と覚えておくと分かりやすい。尤も大まかな分類方法であり、全てのスキルが肉体依存ではないし、魔術もまたそうである。

## ※※※※※

スキルと同じく、こちらもステータス表記上では戦闘系スキルのみを表記されています。

## ※※※※※

## 習熟レベル

スキル、及び魔術をどれ程使いこなしているかの指針のようなもの。対象となるスキルや魔術を使い続けることでレベルは上がる。

MP消費型のスキルや魔術では、レベルが上がるほど、そのスキル

や魔術の威力が上昇、消費MPが減少、または特殊な効果が付加されたりする。その他スキルや魔術の場合、たとえば料理スキルならば料理が美味くなる、回復魔術ならHPの回復量が増え、喪失した腕を生やすことが可能になる、ドリル（鼻くそ）スキルなら鼻を傷つけず、より深くまで鼻くそを掘り当てることが出来るなど、習熟レベルはそれぞれのスキルや魔術によって何の効果が上昇するかが変わってくる。確かなのは、基本的に習熟レベルが上がることによって、より魔術やスキルが洗練されるということである。

ただし、中には呪いのようなスキルや魔術、使用により自身に悪影響を与えるものなども存在し、この場合、習熟レベルが上がると呪いの効果や悪影響もより深度を増す。そのため、一概に習熟レベルが高ければ良いというものではない。

習熟レベルは基本的に1から100まであり、それぞれレベル5程あればそのスキルや魔術が人並みに扱えると判断してもよい。例外として、現在の自分では使えないのに習得のみしている状態のスキルや魔術は習熟レベル0として表記される。

※※※※※

本編における習熟レベルの表記では、対象の系統スキルをある程度以上修めている場合、それらをまとめて全○○スキル、または全○○属性魔術と書いているが、この場合の習熟レベルはあくまで対象のスキル及び魔術の習熟レベルの平均値であり、例えば全基礎属性魔術『習熟レベル5』と書かれている場合、全ての基礎属性魔術の習熟レベルが5であるというわけではなく、あくまで習熟レベルの平均値が5ということである。

※※※※※

称号

固有スキルと同じく、ある条件を満たすことで得ることが出来る。これはそのまま本人の二つ名として呼ばれることが多く、クロナの『魔族殺し』もこれに当たる。ステータスに+補正を与えるものから、固有スキルを複数与えるものまで、基本的に持つていればそれだけで

優秀であるという榮譽のため、持っている者はそれだけで羨望の眼差しを集めることが出来る。

以上を踏まえて、以降では平均的な人間の一般市民、兵士、魔術師等のステータスと、作中の登場人物のステータスを表記する。※一章終了時のステータスとキャラ詳細を載せています。

市民（成人男性）

称号無し

レベル3（最大レベル25）

HP・70

MP・20

筋力・10

体力・10

魔攻・5

魔防・10

敏捷・5

幸運・10

スキル

無し

魔術

基礎炎属性魔術・強化『習熟レベル1』

一般兵士

称号無し

レベル10（最大レベル25）

HP・120

MP・50

筋力・30  
体力・30  
魔攻・15  
魔防・20  
敏捷・20  
幸運・10  
スキル

基礎スキル

スラッシュ『習熟レベル5』

タックル『習熟レベル5』

パリィ『習熟レベル5』

魔術

基礎炎属性魔術・強化『習熟レベル5』

一般魔術師

称号無し

レベル10 (最大レベル25)

HP・80

MP・200

筋力・15

体力・15

魔攻・40

魔防・35

敏捷・15

幸運・10

スキル

基礎スキル・瞑想『習熟レベル5』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル5』

王国近衛騎士

称号無し

レベル・40 (最大レベル75)

HP・1000

MP・500

筋力・200

体力・180

魔攻・150

魔防・200

敏捷・220

幸運・10

スキル

全基礎スキル『習熟レベル20』

各種中級スキル『習熟レベル5』

魔術

各種基礎属性魔術『習熟レベル8』

宮殿魔術師

称号無し

レベル・40 (最大レベル75)

HP・500

MP・1300

筋力・100

体力・90

魔攻・340

魔防・300

敏捷・100

幸運・10

スキル

各種基礎スキル『習熟レベル10』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル20』

各種中級属性魔術『習熟レベル5』

召喚された勇者

称号『聖剣の担い手』

レベル・1 (最大レベル1) ※異世界人のためレベルは上がらない。

HP・50 (抜刀状態+260000。戦闘時+455000)

MP・0 (抜刀状態+150000。戦闘時+∞)

筋力・5 (抜刀状態+80000。戦闘時+25500)

体力・5 (抜刀状態+80000。戦闘時+25500)

魔攻・1 (抜刀状態+80000。戦闘時+25500)

魔防・1 (抜刀状態+80000。戦闘時+25500)

敏捷・5 (抜刀状態+80000。戦闘時+25500)

幸運・10 (+2500)

スキル

無し (全スキル『習熟レベル100』使用可能)

魔術

無し (全属性魔術『習熟レベル100』使用可能)

称号『聖剣の担い手』

聖剣チートを媒体にして世界の壁を越えて召喚された勇者に与えられる栄誉ある称号。聖剣を封じる鞘の術式を本来の条件を省いて解除、および再封印することが出来る。

※( )は聖剣使用時の+補正。抜刀のみのときと戦闘時で違うのは、セーフティーみたいなもの。いずれにせよほとんどの魔族は軽く



凌ぐ。

メイル・リンクキャット

レベル57 (最大レベル192)

HP・940

MP・820

筋力・110

体力・90

魔攻・51

魔防・81

敏捷・570

幸運・197

スキル

剣術『習熟レベル52』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル3』

以下、ステータス表記上はバグのため閲覧不可

称号『法則矛盾』

詳細・狂気の果てに手に入れた、世界の限界を超えた者に与えられる忌み名。幻想世界ファークラスにおいて、絶対に排除しなければならぬ異端者の烙印でもある。何故ならば、この称号を得た者は人間だからだ。

習熟レベルの限界突破が可能となる。

見切り『習熟レベル108』

詳細・常時発動スキル。対象の動きを予測することが出来る。習熟レベルが100になると、その予測は最早未来予知の領域にまで到達する。

限界突破したため、閲覧不可能になった。現在のメイルの領域にな

ると、見据えた未来を取捨選択することがある程度可能になる。

詳細・裸マントヒロイン。無自覚な露出狂。修羅乙女（初級）。

最大レベルからも分かるとおり、この世界の標準を遥かに超えた能力を秘めている。とはいえ、生ぬるい聖域での訓練や勉強に明け暮れたため、習熟レベルも含めて全体的なレベルはかなり低い。温和で優しく、使命感に燃える少女だったが、宗司の手によって色々螺子が吹っ飛んでしまう。元々素質があつたのだろうとは宗司の弁。

宗司に目を付けられたため、今後は彼と同じくステータスで実力を測るのは無駄になる可能性は高く、実際、僅かな間に数百の死を経験するという狂気の結果、この世界の限界を超える存在となる。

何より胸がでかいから強い。おっぱいマント。

クロナ・クロルキス

称号『魔族殺し（下級）』

レベル254（最大レベル622）

HP・86431

MP・4032

筋力・3699

体力・3131

魔攻・631

魔防・1011

敏捷・1811

幸運・9

スキル

全基礎スキル『習熟レベル68』

各種中級スキル『習熟レベル51』

上級スキル

『王刀万来』『習熟レベル21』

最上級スキル

『破邪装飾』『習熟レベル7』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル42』

称号『魔族殺し（下級）』

詳細・下級の魔族を一对一で殺してみせた戦士に授けられる称号。筋力、体力に常時+1000、敏捷に常時+500を付加する。

詳細・乳無しデカ女。虚乳。鉄壁もとい絶壁。でかいのに小さい。イケメン女騎士。

半巨人と言われる種族で、人間と巨人の長所を取り入れた女傑。とはいえ、元から魔術の才能がなかったため、ステータスにはかなり偏りがある。お堅い騎士のようでありながら、案外緩い一面を持つ。趣味は裁縫。可愛い。でも乳はない。

数年前、敗走することとなった人族連合の殿として残り、人族を追い詰めていた下級魔族と激突。これを一騎打ちの末に殺すという輝かしい戦歴を持つ。その後、人族連合の旗頭として常に前線で戦い続けるが、突如姿をくらまして現在に至る。

前線ではクロナが居なくなつたことの混乱を落ち着かせるために、彼女が深手を負って後方で療養中と誤魔化している。

スニークス・アンロット

称号無し

レベル61（最大レベル141）

HP・672

MP・2011

筋力・199

体力・174

魔攻・521

魔防・480

敏捷・222

幸運・1

スキル

全基礎スキル『習熟レベル10』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル36』

各種中級属性魔術『習熟レベル18』

詳細・全ての元凶。

クラウドディア・ザ・ウロボロス

称号『囚われし奇跡』（災厄の魔王）

レベル1000（最大レベル——）

HP・440653

MP・455000

筋力・23432

体力・22018

魔攻・25500

魔防・23117

敏捷・24144

幸運・1211

スキル

全基礎スキル『習熟レベル100』

全中級スキル『習熟レベル100』

全上級スキル『習熟レベル96』

全最上級スキル『習熟レベル87』

魔術

全属性魔術『習熟レベル100』

称号『囚われし奇跡』

固有スキル『救済の業』、『呪いの方程式』を与え、他の固有スキルを全て封印する。

クラウディアやその他の人物がステータスを見た場合、称号は『災厄の魔王』と表記され、固有スキルも『救済の業』の一部表記以外の閲覧が不可能となる。

称号『災厄の魔王』

世界に破滅をもたらす魔を統べる王に与えられる称号。固有スキル『救済の業』を与える。

固有スキル

『救済の業』

あらゆるスキル、魔術の威力が1.5倍になる。HPが0になった場合、異界に転移させられ千年の眠りにつく代わりに復活が可能。

※以下、閲覧不可※

聖装系統の武器使用者は、クラウディアと戦う場合に限り、全能力値が1.5倍になる。

『呪いの方程式』

世界の強制力。レベルが1000以上にならず、ある一定の数まで人類種の数減らすと、人類種への敵意が大幅に抑制される。

『輪廻創世』

使用不可。

『喝采する天地』

使用不可。

『慈悲の女神』

使用不可。

詳細・イケメン女子。世界の奴隷。見失った英知と無垢。

この世界で他に比肩するものが居ない能力を誇る魔王。人類種にとっての絶対的な天敵であり、魔族と魔獣にとつての神の如き存在。一度敵と見定めた者には容赦がないし、普段から凜々しいため何処か近寄り辛い雰囲気があるものの、気に入った者にはとことん甘い。おばあちゃんや孫に向けたレベル以上に甘い。

人類種を糞袋以下と言つて毛嫌いしている割に、召喚したハットリ

のことは気に入っている。これは単純に、彼が異世界からの人間、つまりこの世界の人類種でないことが起因している。

そんなこんなで色々と訳ありだが、ぶっちゃけ設定として公開した時点で殆ど物語には関係ないので、彼女の裏設定は作者の単なる趣味。ごめんね☆

アフロディア・リア・ツアラトストウラ

称号『天意』

レベル678 (最大レベル1000)

HP・160412

MP・171123

筋力・12009

体力・11690

魔攻・14136

魔防・13871

敏捷・17182

幸運・900

スキル

全基礎スキル『習熟レベル100』

各種中級スキル『習熟レベル80』

各種上級スキル『習熟レベル32』

最上級スキル

『龍砲』『習熟レベル21』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル100』

各種中級属性魔術『習熟レベル100』

各種上級属性魔術『習熟レベル82』

最上級炎属性魔術『習熟レベル41』

称号『天意』

世界に選ばれた英雄の資質。固有スキル『世界の因子』と『未知の追求』を得る。

固有スキル

『世界の因子』

レベル上昇に必要な経験値が八割減する。

『未知の追求』

習得していないスキルの習得確立および、習熟レベルの上昇率が上昇する。

詳細・エロロリ。

十歳。見た目が十歳とかではなく、正真正銘生まれてから十年しかたっていない。だがその恐るべき天才ぶりで、四天王まで上り詰めた。

見た目とは裏腹に、子どもらしい純真無垢なところはほぼ皆無で、便秘レベルで腹黒い。一方で子どもらしいところもあり、笑みで本心を隠した彼女の性格は、その短い生涯がいかに過酷なものであったかを物語っている。

ヴインセント・ヒツア

称号『魔拳』

レベル761 (最大レベル772)

HP・200412

MP・121123

筋力・16044

体力・15999

魔攻・12002

魔防・11605

敏捷・20772

幸運・200

スキル

全基礎スキル 『習熟レベル100』

各種中級スキル 『習熟レベル100』

各種上級スキル 『習熟レベル71』

最上級スキル

『四天撃』 『習熟レベル100』

『黄龍拳』 『習熟レベル100』

魔術

全基礎属性魔術 『習熟レベル100』

各種中級属性魔術 『習熟レベル65』

各種上級属性魔術 『習熟レベル21』

称号 『魔拳』

『四天撃』と『黄龍拳』を極めた者に授けられる称号。HPが最大の1割を切った時、HP、MP、幸運を除いた全能力を+3000し、クリティカル率を30%上昇させる。

詳細・古株。単純に強い。

千年前に行われた魔王と勇者の戦いの頃から生きている歴戦の勇士。常に争いが耐えない魔界において、再度魔王が復活するまでの間、魔界全土の三割をその手中で治めていた上位魔族の最高位。魔王を除いて聖剣を知っているほぼ唯一の存在であった。

現在は復活した魔王の右腕として、様々な雑務から政務に至るまで、幅広く行っている。実質的な魔界のトップ。

ヒエラ・リト

称号 『狂信者』

レベル・569 (最大レベル731)

HP・129120

MP・185521

筋力・9024

体力・8654



魔攻・13112

魔防・7234

敏捷・6512

幸運・129

スキル

全基礎スキル『習熟レベル100』

各種中級スキル『習熟レベル100』

各種上級スキル『習熟レベル41』

最上級スキル

『聖宣』『習熟レベル54』

魔術

全基礎属性魔術『習熟レベル100』

全中級属性魔術『習熟レベル100』

各種上級属性魔術『習熟レベル52』

各種最上級属性魔術『習熟レベル21』

称号『狂信者』※剥奪

詳細・聖火教を狂信し続けた果てに行き着いた境地。主の教えを己の命よりも遙か上位に置き、そのためならば自らの命すら差し出すことも厭わない。常時全能値に+500の補正がかかり、さらに自身にかけられる精神支配系の魔術やスキルへの抵抗力が上がる。

※称号使用条件を満たせなくなったために剥奪されました。

称号『狂信者』

詳細・我が神よ。黒き英知を宿した究極の混沌よ。大いなるその力の足元にへりくだる哀れな我らにどうか災厄の救済を与えたまえ。常時、精神支配状態となる。

詳細・聖火教の禁忌にして切り札。第十八課『エンド』に所属する神父の一人。人類種どころか魔族を含めても最上位の戦闘力を持っている。ほかのエンドに所属する者達も同等か、あるいは彼以上の実力者も存在するが、彼らは自らが世界に干渉することなく、今まで歴史の影で暗躍し続けた。

その目的は聖剣と魔王の戦いの記録であり、彼らの本拠地にはこれまで行われてきた聖剣と魔王の戦いの歴史が残されている。

ヒエラは此度の魔族と人類種の戦争を、魔術を用いた観察と報告し、予言を行って他の信者を用いて勇者に信託として予言を授け、その旅路を支える役割を担っていた。

だが聖剣解放における最初の予言にて、恐るべき存在が召喚されることを察知。慌ててその存在、宗司がもたらすだろう混沌を抑えるべく聖槍を媒体とした使徒の召喚を行うが、それこそが予言に記された混沌の一翼を生み出す結果になることに気付いたのは、脳みそを直接弄られて発狂させられる瞬間であった。

現在は色々な意味で生まれ変わり、第十八課の他のメンバーとともに、ナイル・アジフと彼女が信奉する偉大なる『にやる』の教えを広く知らしめるために暗躍を開始する。

## 宗司

称号 『聖剣の担い手』

レベル・1 (最大レベル1)

HP・168

MP・0

筋力・31

体力・16

魔攻・1

魔防・2

敏捷・52

幸運・5

スキル

無し

魔術

無し

称号『聖剣の担い手』

詳細・聖剣チートを媒体にして世界の壁を越えて召喚された勇者に与えられる栄誉ある称号。聖剣を封じる鞆の術式を本来の条件を省いて解除、および再封印することが出来る。

以下、ステータス表記上はバグのため閲覧不可

見切り『習熟レベル10983』

詳細・常時発動スキル。対象の動きを予測することが出来る。習熟レベルが100になると、その予測は最早未来予知の領域にまで到達する。

宗司の領域になると、予測した対象の動きを己の思うままに誘導することが可能。

剣術『習熟レベル11021』

詳細・常時発動スキル。剣を用いた攻撃の威力が上昇し、速度にも補正がつく。大体習熟レベル80程あれば、ファアービュラスにおける剣術の達人として畏敬を集めることが出来る。習熟レベル100になれば、自身のレベルが1だとしても、刀で鋼鉄を切り裂くことが可能になる程。

宗司の領域になると、剣の性能以上の力を容易く引き出し、鋼鉄を凌ぐドラゴンの鱗すら紙のように斬り裂ける。

心鉄金剛『習熟レベル1』

詳細・常時発動スキル。ファアービュラスには存在しないスキルのためバグ表記。老剣客との死闘の果てに辿り着いた剣の極み。凜と冴える鈴の音色にして、終わりの向こう側。

肉体の極みではなく、心の極み。

完結【斬】『習熟レベル0』

詳細・常時発動スキル。ファアービュラスには存在しないスキルのためバグ表記。素養あり。人間が辿り着いてはならない狂気の最果て。あるいは可能性を完了させた人間の有り様。

宗司の世界でも至ったのは歴史上ただ一人、修羅と呼ばれた男のみ。

詳細・修羅外道。ハラキリ侍。

異世界より召喚された勇者だったが、聖剣の加護は不要だと斬り捨てた侍。

能力的には強化魔術を使用した一般兵と生身で互角かやや上の速度を誇る程度の能力しかなく、スキルも魔術も使用できないが、その能力はステータスの概念を超えた領域に存在する。

聖剣を持ったときに一部がバグ表記を起こしていたのは、宗司の扱う剣術その他の能力をスキル表記しようと試みた結果、それが幻想世界「ファアービュラス」内における魔術では再現不可能であったため、そのような表記になった。

これはあくまで余談だが、宗司が居た日の本という島国は、当然ではあるが現代の日本とは似て非なるものである。大きな違いとしては、侍や忍者などが常軌を逸した戦闘力を携えていたこと、これに尽きる。

さらにどうでもいいが、宗司が飛ばされた後の時代。世界を巻き込んだ大戦で最強の陸戦兵器は『SAMURAI』と呼ばれ、銃弾と砲撃を掻い潜って刀片手に迫り来るその姿は前線の兵士達に恐れられた。なんちゃって。

※聖剣所持時の補正は上記の勇者と同じ

ナイル・アジフ

称号『聖槍の使徒』

レベル・1（最大レベル1）

HP・368

MP・0

筋力・109

体力・96

魔攻・1

魔防・1

敏捷・34

幸運・4hgq7※最大値を超えているためバグ表記。数値に換算すると49927。歩けば金塊を拾え、昼寝をすれば豪邸が手に入る。そういった数値。

スキル

無し

魔術

無し

称号『聖槍の使徒』

聖槍に選ばれた、世界を正す使徒。聖槍にかけられた封印を本来の手順を無視して解除、および再封印すること、そして聖剣チートを強制封印することが可能。

以下、ステータス表記上はバグのため閲覧不可項目。

見切り『習熟レベル10082』

詳細は上記と同じ

体術『習熟レベル12203』

詳細・常時発動スキル。己の肉体を用いた攻撃の威力が上昇し、防御力や速度にも補正がつく。習熟レベル100になれば、自身のレベルが1でも巨大な岩を破碎するほどの力を扱えるほどになる。

ナイルの領域になると、肉体の性能を遥かに超えた力を容易く引き出し、鋼鉄を凌ぐドラゴンの皮膚を粘土でも裂くように千切ることが出来る。

医術『習熟レベル711』

詳細・常時発動スキル。医者としての知識や技術。回復魔術やスキルに補正がつく。

ナイルの領域になると、医療器具を使わずに人体をいじくりまわして治すことも可能。裏を返せば指先だけで人体を面白おかしく破壊する術に長けているということになる。

混沌にして神聖なる黒の英知を宿した偉大な神『にやる』の忠実なる下僕である私の崇高なる使命はあらゆる人々に狂い狂える祈りの在り方を与えることにより我が神の御許へと至る道を切り開く世界世界せかいせかいえふおえいwjro9も4『習熟レベル∞』

詳細・常時発動スキル。幻想世界ファアービュラスには存在しないスキルのためバグ表記。

本来なら意味のないスキルのはずだが、レベルが限界を超えて明後日の方向に突き抜けた結果、あらゆる精神支配を一切受け付けない精神性を構築するに至った。この世界においては、精神支配系魔術やスキルを全て受け付けない。

我は混沌にあるべき骸なり【習熟レベル49913】

詳細・常時発動スキル。ファアービュラスには存在しないためバグ表記。戦乱を望み、殺戮を渴望し、自ら絶望を欲する異端の心理。幸運にマイナス補正がかかる。

完結【殺】『習熟レベル0』

詳細・常時発動スキル。ファアービュラスには存在しないスキルのためバグ表記。素養あり。人間が辿り着いてはならない狂気の最果て。あるいは可能性を完了させた人間の有り様。

宗司達の世界でも至ったのは歴史上ただ一人、修羅と呼ばれた男のみ。

詳細・サイコロズ狂信者。

世界的に有名な巨大宗教はおろか、一時的に世界を恐怖のどん底に追い込んだマジキチ美女。混沌の神『にやる』を信仰し、その信徒を増やすためにあらゆる手段を用いた。そのかいてもあってか、彼女は一つの独裁小国家をその手中に収めることに成功している。

今では世界を震撼させたテロリストとして有名であり、某合衆国は個人に対して『核弾頭』の使用に踏み切る直前という異常事態にまで追い詰められた程、ナイルの保有する能力は危険であった。

その圧倒的なカリスマを前提とした人身掌握術や物理的な洗脳術も脅威だが、何よりも彼女を危険だと言わしめる力は、その身を取り巻く狂信者達を使うことや圧倒的カリスマではなく、『彼女自身の身体能力のみで国家に匹敵する』程の力を有していることであった。

結果、その力で某合衆国が送り込んだ特殊部隊の精鋭達を瞬く間に

素手で殲滅して、その報復のために幾人かの戦力を率いて自ら某合衆国に殴り込みを仕掛けた。

そんな彼女がもたらした大事件こそ、『11. 11』テロであり、彼女の用いる特殊な武術を修めた狂信者と彼女自身が合衆国首都で起こしたこの大規模テロ事件によつて、一時的に首都機能は停止してしまふことになる。

前代未聞の素手による国家の制圧により、合衆国の機能は停止。あわや世界が彼女の手の内に落ちる直前のところで、遂に巨大宗教が隠していた切り札が投入される。首都制圧の結果、部下を失い、自身もそこそこに疲弊した彼女を相手に、同じく超人的な力を有する暗殺部隊は善戦をし、相打ちとなつて果てることになった。

と言うのが彼女のバックストーリー。本編では書くとだれるのでかなり省略しました。

八つ鳥（ハットリ）

称号『魔王の心臓』

レベル・1（最大レベル1）

HP・120

MP・0

筋力・21

体力・11

魔攻・1

魔防・1

敏捷・74

幸運・8

スキル

無し

魔術

無し

### 称号『魔王の心臓』

詳細・魔王クラウディア・ザ・ウロボロスの血肉を契約として召喚されたことにより、その体と魔術的なリンクが繋がった。魔王のMP及びそのスキルと魔術が使用可能。許可があれば、その能力を含めた全てを使用することが可能である。ただし、魔王の存在とつながっているため、この称号の持ち主が受けたダメージはそのまま魔王にも与えられる。

以下、ステータス表記上はバグのため閲覧不可

見切り『習熟レベル10211』

詳細は上記と同じ。

体術『習熟レベル4213』

詳細は上記と同じ。

忍術『習熟レベル8241』

詳細・常時発動スキル。幻想世界ファアービュラスには存在しないスキルのためバグ表記。忍独自の体術であり、体術より派生したスキルとなる。素手の攻撃や刀剣類を用いた攻撃の威力が上昇し、防御や速度にも補正がかかる。さらに魔力を使用せず、魔力消費スキルや魔術に匹敵する技が扱えるようになる。

完結【戦】『習熟レベル0』

詳細・常時発動スキル。ファアービュラスには存在しないスキルのためバグ表記。素養あり。人間が辿り着いてはならない狂気の最果て。あるいは可能性を完了させた人間の有り様。

宗司達の世界でも会得したのは歴史上ただ一人、修羅と呼ばれた男のみ。

詳細・戦国の世が生んだ狂気のSHINOBI

時は宗司が生まれるより数十年前。戦国真っ只中の日の本にて、時の武将達が重宝した影の者、その名を忍。暗殺、諜報、護衛など、あらゆる任務を忠実にこなす超人集団の中で異端の者が生まれた。

その名こそ八つ鳥。日の本最大の忍の里の一角、伊賀の里で生まれ



たこの男は、主君に仕えるのが当然である忍にありながら、只ひたすらに強者を、強さを求める異端であった。

個のいらぬ忍にあり、個の欲を追い求める八つ鳥。強く、己を強くと求めていった男は、いつしか異端の存在である忍の中であって尚、異端と呼ばれるようになる。そして、遂に組織の中の群れの一つであることに耐え切れなくなった男は、里を抜け出し、北へ南へ東へ西へ。裏切り者を抹殺するために里から送られてくる刺客を葬りながら、強者と聞けば何処にでも現れ、その異常なる体術を持ってあらゆる者を抹殺していった。

そんな彼の狂気を抑えるべく、伊賀の里は歴代で最優と言われた男、佐助を刺客として送り込む。

異端の中の異端である八つ鳥。

現代最強の忍、佐助。

常軌を逸した体術を用いた両者の戦いは極限を超える。その戦いの終わりより暫く、一向に帰らぬ佐助の足跡を辿り、彼が残した手がかりを頼りに伊賀の里の者が出向いた先にあったのは、首の無くなった佐助の死骸だけだった。

その後、八つ鳥の姿を見た者はおらず、伊賀の里は里の汚点として、彼に関する資料の一切を全て抹消し、八つ鳥という忍が居たという事実はこの世から存在しなくなった。

というのが八つ鳥のバックストーリー。やはり長くなるので本編では割愛。

アン・サルソン

称号 『世界の変革者』

レベル・1 (最大レベル1)

HP・440

MP・0

筋力・117

体力・101

魔攻・1

魔防・1

敏捷・14

幸運・1

スキル

無し

魔術

無し

称号『世界の改変者』

詳細・聖骸布ハックによって呼び出された世界の改変を許された者、あるいは世界の町立を行う神の代行者。聖骸布ハックの使用が唯一許可される。

以下、ステータス表記上はバグのため閲覧不可

見切り『習熟レベル2011』

詳細は上記と同じ。

心眼『習熟レベル6219』

詳細・常時発動スキル。見切りの上位互換スキル。習熟レベルが50もあれば目に頼らずとも周囲の全てを草木一本に至るまで探知することが出来る。

アンの領域になると、習熟レベル12000クラスの見切りと同じ程度の精度を周囲一キロ全てに発揮できる。

槍術『習熟レベル7022』

詳細・常時発動スキル。槍を用いた攻撃の威力が上昇し、速度にも補正がつく。大体習熟レベル80程あれば、ファータビュラスにおける槍術の達人として畏敬を集めることが出来る。習熟レベル100になれば、自身のレベルが1だとしても、槍で鋼鉄を切り裂くことが可能になる程。

アンの領域になると、槍の性能以上の力を容易く引き出し、鋼鉄を凌ぐドラゴンの鱗すら同じ薄さの木材を突くように貫ける。

鉄壁『習熟レベル10014』

詳細・常時発動スキル。武装を用いた場合の防御力が上昇する。大  
体習熟レベル50程で、武装の性能を全て引き出すことが出来る。習  
熟レベル100になれば、自身のレベルが1だとしても、盾や鎧で大  
砲程度なら防ぐことが出来る。

アンの領域になると、防御だけでなく攻撃の威力も飛躍的に上昇  
し、鋼鉄を凌ぐドラゴンの鱗を、枯れ枝を折るように砕き、ドラゴン  
の吐く炎のブレスを何の魔術的加工の施されていない鎧で受けきる  
ことが出来る。

完結【無】『習熟レベル1』

詳細・常時発動スキル。ファアービュラスには存在しないスキルのた  
めバグ表記。素養あり。人間が辿り着いてはならない狂気の最果て。  
あるいは可能性を完了させた人間の有り様。

宗司との戦いで命まで届く一撃を受けた瞬間、生命にとって最も大  
切な己の命を喪失するという領域に至ったことで開眼した。

宗司達の世界でも会得したのは歴史上ただ一人、修羅と呼ばれた男  
のみ。アンはその領域の一端に至っただけであり、修羅の到達した解  
答はさらに奥深くに存在する。

詳細・聖骸布ハックによって呼び出された、乾いた鮮血で漆黒に染  
まった全身鎧をまとった盲目の騎士。中世の時代、小国の王族として  
蝶よ花よと何不自由なく育てられたが、大国の襲撃によって祖国と己  
の両目を失ってしまう。

そしてその目を境に虚無であるという己の在り方を肯定。あらゆる  
全てを無に帰すべく、あらゆる戦地に赴き、敵も味方もなく殺戮の  
限りを尽くしていき、鮮血で真っ赤に染まった姿から『血濡れの騎士』  
と呼ばれ、あらゆる国の人々を震え上がらせた。

だがそんなアンを恐れた人々は遂に結託。周辺国家が連合を組ん  
で、たった一人の化け物を討伐すべく襲い掛かる。千を超える軍勢を  
相手に劣性に追い込まれていくアンはそれすらも圧倒したが、遂に周  
辺国家より選り抜かれた精鋭たちの決死の特攻によって、そのまま崖

の下の暗黒へと落下していった。

というのがアンのバックストーリー。ちなみに年齢は14歳だったりする。才覚だけならば作中に存在する全たと比べても圧倒的であった。

それ故に虚無という解答に完結してしまったのは不幸と言うしかないだろう。

### 修羅外道

称号『修羅外道』

レベル・1 (最大レベル1)

HP・107

MP・0

筋力・47

体力・11

魔攻・1

魔防・1

敏捷・140

幸運・40

スキル

無し

魔術

無し

称号『修羅外道』

詳細・誰もかれもが畏怖と込め罵り蔑む男の名。最早その本名を知る者は居らず、ただ修羅と呼ばれるだけの人間がそこにいる。

以下、ステータス表記上はバグのため閲覧不可

見切り『習熟レベル14228』

詳細は上記と同じ。

完結【斬】『習熟レベル100』

詳細・あらゆる物質から実体の無い存在、そして精神や魂といった

ものまで斬ることが出来る。本来なら無限大にあるはずの可能性を持つ人間、その可能性の一つである斬撃を極めた果てにある『おわり』の領域。

——我が斬撃は無感に至り、この終わる場こそが、修羅場なり。

※宗司達、異世界より来訪した人間のスキルは、あくまでファアービュラス基準に置き換えた場合の数値であり、実際はただのバグでしかなく、彼らのスキルはファアービュラスのスキルとは違った使用がされている。よって、スキルより得られる補正効果や、習熟レベルの上昇方法などがファアービュラスのそれとは随分と異なる。

## 第二章【変えられず、ごーいんぐまいうえい】 第一話『地獄よ踊れ、災禍はここへ』

血潮が空を染める。

肉が地面を彩り、大きく抉れた大地にぶちまけられた臓腑は、さらなる破壊によつて再度抉られ、飛び散る全ては砂塵か肉片か分からぬ程。

怨嗟の体現、ここに極まり、兵士達はそれでも尚と命を投げ出し愚直を犯す。

——だからここは、地獄なのだ。

「怯むな！ 進め進めえ！」

絶え間なく周囲で響き渡る轟音と肌を焦がす熱波を浴びながら、手入れも殆ど出来ていない武器を片手に兵士達が駆けていた。

目指す先には巨大な城壁が走破を試みる兵士達の前に立ち塞がっている。

魔術的な防御を施された鋼鉄の盾は、例え巨人であろうと通さない堅牢さと強さを誇っている。それだけではなく、行く手を阻む幾多の攻性防御網が兵士達の前進を遅滞させ、その間に城壁の向こう側より降り注ぐ鋼鉄と魔術の洗礼が絶叫と血潮を戦地の至る所にばら撒かせていた。

「まだか、まだ抜けられんのか!？」

その様子を後方に設営された本部より遠見の魔術で見ていた将軍、ノード・ビタンスは忌々し気に見ていた。

一ヶ月前までは美しい自然が広がっていた草原地帯は、度重なる戦闘の余波によつて地表が剥き出しとなった状態だ。攻城用の大規模な魔術を幾つも解き放ち、絶え間なく兵士達の進軍にて踏み荒らされた結果である。

だがそこまでして未だに城壁はおろか、城壁に至る道程すら攻略出来ていない。

「気合いを入れろ！ ここを奪われたままでは人類に未来はないのだ

ぞ!？」

「いずれ城壁の魔術砲撃も底をつく！ 自然回復される前に絶え間なく攻め続けて血路を拓け！」

「ですがその前に我が軍が！」

将官の怒声が通信用の水晶より響いてくるが、それで戦線が有利に働くことなど断じてない。だが、分かっているながらも彼らは叫ばずにはいられなかった。

何せ彼らが挑んでいる難攻不落の城壁こそ、かつては北部戦線の中継地点にして、本来なら魔族に対する人族連合の最終防衛ライン、アイアス城塞。

数万の兵士を一年以上は戦わせることが出来る大量の物資に、自給自足のエリアまで確保された広大な都市の周囲は、各国の優秀な魔術師の手によって施された魔術防壁が幾重にも施された堅牢な城壁によって囲まれている。上空から攻めようにも透明な障壁とドラゴンにすらダメージを与える魔術兵器が常に周囲を睨んでいるために突破は難しい。

だが地表から攻めようにも、今行われているように周辺を取り囲むようにして散布された大量の魔術地雷の数々と、城壁そのものより放たれる絨毯爆撃の如き魔術によって、城壁に近づくことすら出来ないのだ。

「ヘイム卿の率いる四軍が壊滅！ 並びに三軍、八軍もこれ以上の戦闘は——」

「それでも進め！ ここで止まってはこれまでの犠牲すらも無に帰すことになるのだぞ！」

魔術による砲撃の音に紛れて聞こえる報告に、己がどんな理不尽を強いているのか分かっていながらも命じるしかない。そして報告を受けた兵士もそれが分かっているのか、絞り出すようにして「……行きます」と言って、その数秒後、水晶に響いていた音が消えた。

「クソー！ クソー！ クソが！」

そこでついに我慢が出来なくなったのか、ノードは机を力任せに叩き折った。

あまりの威力に砕けた木片が地面にめり込むほどだったが、ノードの激情はその程度では決して収まらない。

「人類最後の砦が人類を脅かす最悪の悪魔となる！　こんな馬鹿げたことがあっていいのか！　クトウアは我々を見捨てたど!?　このまま魔族共に滅ぼされてしまえばいいというのか！」

血走った眼で崩壊していく戦線を遠見の水晶より見ながら、ノードは人類の慢心が招いたこの悲惨な戦場を嘆いていた。

事の発端は今より一ヶ月程前、現在でも情報規制によって一部の者しか知らないが、突如として発生した謎の広域殲滅魔術と思わしき魔術により、メビウス王国の首都が一瞬にして消滅したことに始まる。

これによって物資の流通が一時的にだが停滞することが危惧され、補給線としても機能していたアイアス城塞から各地に向けた物資の供給が開始された。

だがそれによって、本来なら魔族ですら攻めることが敵わないアイアス城塞内部に、魔族の侵入を許すことになる。

そして、一度内部への侵入を許してしまえば、基礎能力で違う魔族と人族では相手になるはずもなく、城塞内部は一夜にして制圧。だが悲劇はこれでは終わらなかった。

あろうことか、城主が命惜しさにアイアス城塞の機能を魔族に開示してしまったのである。これにより一夜にして城塞の制圧、そして機能の掌握まで果たした魔族は、自身の軍勢を城塞に招き入れ、完全なる難攻不落の拠点を手に入れることとなった。

急造とはいえ敵の侵入を容易に許す杜撰な補給ライン、命惜しさに城塞を明け渡す無能な将、そんな将に全機能を委託していた人族軍の怠慢。

一つひとつはまだ取り返しがつく。だが全てが見事に重なったこの悲劇は、まさしく人族という存在の無能さを示すだけの喜劇ですらあった。

そして、そんな喜劇の尻拭いのために、真に勇気ある人族の兵士達が次々と骸を晒して乾いた地べたを潤わせていた。

だからこそ、ここは地獄。



あるいは、これより開かれる地獄へと通じる門。

誰もがここを切っ掛けに、人類はさらなる窮地に追い込まれる。確信に満ちた思いは、ノードだけではなく、戦場に人類の誰もが考えていた。

「だからこそ……！　だからこそ……！　……！」

ここで何としてもアイアス城塞を奪還しなければ、後に待つのは魔族による一方的な蹂躪だ。そうなれば、イシスに展開した結界まで前線を押し返すどころか、雪崩れ込む化け物によって全てが崩壊する。

しかし、そんなノードの思いも虚しく、水晶を通じて伝わる戦線の情報は一秒ごとに悪化していた。

「将軍……！　これでは……！」

「……」

辛うじて最後まで言わずに言葉を飲み込んだ将官の言いたいことは分かっている。

最早、意地ではどうすることも出来ない。このままでは——この時点で、人類側の損耗は致命的なものを受けている。

そして今ここで退かなければ、体勢を立て直すことすら出来ずに攻勢に打って出てくる魔族を迎撃する陣すら構築できずに突破されるだけだ。

もう時間は残されていない。

今すぐに撤退を告げるべきだと分かっている。

「だが、退いて、どうする？」

擦り切れたノードの呟きに、将官の誰もがやはり返す言葉を持っていなかった。

ここで退けば、まだ防衛を出来る最低限の戦力は残る。だがそれはあくまで最低限、虚しい延命処置でしかない。何より、アイアス城塞の魔術は、大地の龍脈より魔力を汲み取ることによつて、消耗した迎撃魔術等を一週間もあれば完全に使い果たした状態から回復することが出来る。

そうなれば、仮に再び城塞攻略を行えたとしても、今回よりも少ない戦力で万全に戻ったアイアス城塞に挑まねばならないのだ。

可能か不可能かなど、戦略等を知らない素人でも分かることだ。ここで撤退すれば、もう二度と城塞を奪還することは出来なくなる。

「どうすれば、いい？」

今ここで起死回生を信じてこの場での全滅か生存かの二択を選ぶか。

あるいは、死ぬことが分かっているながら延命のために撤退するか。刻一刻と時間の砂は零れ落ちていく。だが、その肩に人類の明日を背負わされたノードは、喘ぐように口を震わせ、いずれにせよ最悪の二択の選択肢を告げようとして――。

「ッ！ 魔術砲撃が――」

「なっ……」

天幕を照らし出すのは魔術の輝き。天幕ごと周囲一帯を覆い尽くす消滅の一振りは、ノードを含めたその場の将官全てが何かしらの行動を行う前に、暴虐的な光の柱によって全てを薙ぎ払う。

これにより司令部を失った人類軍は、当然ながらぎりぎりですべて保っていた戦線を維持することが出来ずに瓦解を果たし、一転して攻勢に躍り出た魔王軍によって一方的な撤退戦を行うことになる。

こうして第二次にして最後となるアイアス城塞攻略戦は人類軍の大敗によって決着を迎えた。

迎えるはずであった。

その戦場はどこか慣れ親しんだ匂いに包まれていた。

血と臓腑と土砂の混じった火薬の匂い。

口より吸いこんだ空気にすら弾力を感じられるような、舌に重さを覚える匂いの塊を、体中に吸い込んで、ほうつと一息。

「だが如何せん、こころも騒音が響くとなると風情に欠けるといいうものか」

男は、自分の後方へ我先にと走る兵士達を見て小さく嘆息した。

誰もが死にもの狂いで走っているせいか、まるで大海原で発生した大波のようにすら感じる。少し視線を走らせれば、転倒したところを上から踏み潰されて圧死した兵士もちらほらと見えていた。

だが一度立ち止まればたちまち潰されてしまうような人の波の中、男は平然と彼らとは真逆の方向を見据えて、散歩でもしているかのよう歩いていた。

まるで男が一人だけ周囲の風景から切り取られたかのように、その動きは優雅で、平凡であり、だからこそ異常そのもの。

戦場にありながら、敗走する兵士に囲まれながら、襲い掛かる魑魅魍魎の圧力を肌で感じながら、悠然と前を行くその歩みには迷いはない。

ただ前に。

進める足は躊躇なく。

そして遂に男は兵士の波を超えて、魔獣と言われる魔族の先兵達と激突し——一瞬にして男に殺到した全てをただの肉塊へと斬り捨てた。

「うむ。やはり手に馴染むが……ちよつと自己主張強すぎんか？ そりゃ斬るだけだから分かんなくてもないが、もつと、なあ？」

そう言う男の手には、いつの間にか剣が握られていた。

剣は男の言葉に不満を訴えるように鈴のような音色を奏でる。その子ども染みだした仕草が楽しくて、男は喉を鳴らして目尻を緩めた。

まるで意志を持っているかのようなその剣は、意志を持つような素振りを見せるが故か、その形状も剣と呼ぶにはあまりにも奇怪な見た目であった。標準的な両刃で肉厚な片手剣とは違い、男の剣は長さこそ片手剣と同じくらいだが、その刀身は薄く、片刃であり、真っ直ぐにはなく薄い弧を描く。

それは剣ではなく、刀と呼ばれる切断端末であった。

刀を扱う男の服装も珍妙そのもの。戦場にありながら鎧を一切纏わず、一枚の布を腰の帯で縛っただけにしか見えない漆黒の衣類。

そして男はこの世界ではあまり見ない異国の顔立ちと、珍しい漆黒の髪と瞳の持ち主でもあった。

敗走の軍に置いて異端である男は、見た目も得物も全てが異端。だからこそ、魔獣を一撫でする様は当然の如くとも言うべきか。

男は歩みを止めない。

いつしか兵士の波ではなく、魔獣の嵐に飲み込まれながら、男の周囲こそ台風の様子が如く、あらゆる一切を寄せ付けずに刀の範囲には骸で出来た円が続く。

あるいは、男こそが台風そのもの。全てを引き寄せ、全てを薙ぎ払う。そこに一切の優劣はなく、男に巻き込まれた全ては、斬撃の暴風に引き裂かれ、血肉を撒き散らし無意味な絶命を果たすのみ。

「では、試し切りも早々に……」

その間に数百を超えた骸のことなど関心すら寄せず、必死に男の進撃を防ごうとする魔獣の壁を斬り捨て続けた先。いつしか男を取り囲むだけで突撃してこなくなった魔獣達の向こうに立ち塞がる威圧感へと男は視線を向けた。

そのいずれも魔獣などとは比べ物にならない力を隠そうとせず、只一人戦線を超えて現れた男の視線を真っ向から睨み返している。

魔獣と違いどことなく人間に近いとはいえ、炎のような赤熱の肌の者、八つの腕にそれぞれ違う武器を持つ者、上半身は人間に近いが、下半身が巨大な蜘蛛のような者、その他、数十にも及ぶ異形の者達こそ、たった一騎でも現れれば人類軍の木端兵士を殺戮しつくす当千の猛者、魔族。

男が観察するように、魔族もまた男を観察するように物理的な圧すら伴う視線を向けていた。

「良きかな、良きかな」

そこで初めて男は笑った。ここに至るまでどこか退屈さすら感じさせた表情が一転、矮小な人間では一体相手でも勝ち目の薄い魔族を無数と見据えて笑う様はやはり異端の見た目に相応しき対応か。

「蟻の如く逃げ惑う阿呆共、脳天が足りずただ死ぬためだけに食らいついてくる獣、だがそこを抜ければなんとまあ……強者共が雁首揃えて俺を見ているこの至福よ」

「……名乗りな、人間」

周囲の風景すら歪ませる熱を発する赤い肌の魔族が男に問いかける。そこには決して相手を侮るような雰囲気はないが、強者特有の傲慢を感じさせるものがあつた。

しかし男は特に気にした様子も見せず、むしろ恥ずかしそうに頬を軽く指で搔いて苦笑する。

「……これは失礼した。決闘ならいざ知らず、戦場での名乗りなど悠長なものを考えるなどなかつたものでな」

だがそれが礼儀となれば応じよう。

言つて、男は手にした刀を魔族達に突きつけた。

「俺の名は宗司。宴の駄賃にお主らの首……貰い受ける」

「ハッ！ 人間如きが粹がつてよお！」

「おもしれえええ！ やつてみせろやあああ！」

「雑兵を蹴散らしたところで、我らも蹴散らせると自惚れたかあ?」

宗司の挑発に対して、魔族達の誰もが咆哮に乗せた激烈なる魔力を持って答える。一体一体が人類側の兵士を千単位で滅ぼす、文字通りの一騎当千。

そのような化け物が徒党を組んで迫りくる中、宗司はゆっくりと瞼を綴じて呼吸を整えると。

「では……」

——斬るとしよう。

陽光、下る日差しに照らす鈍ら。かざした殺意を童心に振るわせて、超常を頂く二人の修羅よ。赴くままの闘争を、一心不乱に貪り尽くせ。

## 第二話 『幕間・忍者出立』

魔王の直轄領にして極北の大地、ニブルヘイム。常に雪が降り積もるこの極寒の地は、魔族のような、生物としての能力値が高い存在でない限り生きることすら難しい。

弱者には一切の生存権利すら認められず、強者であろうと明日の糧となる弱肉強食を体現した世界。当然、人間のような弱小種族等、生きるどころか踏み入れることすら不可能な土地に、極寒の吹雪すら凍てつかせる冷酷なる殺意の担い手は突如として現れた。

魔王城の城下町。暮らしている者が全て魔王に忠誠を誓った精鋭の兵士達。いずれもイシスの結界を超えられるような弱小魔族とは違い、もしもこの内の一騎でも完全武装で人間界に現れれば、人類に対する最悪の脅威となる程の存在だ。

「ぐ、うお……」

「ぬ、う……」

だが、城下町の中央広場。魔族達の決闘場となっているそこには、そんな一騎当千の猛者達が苦悶の声をあげながら誰も彼も蹲っていた。

「……魔族、面白いものだ」

その中でただ一人平然と立つのは、目元以外を漆黒の衣装で隠した珍妙な姿をした人間。彼こそこの城下町に現れた殺意の担い手、そして人間の身でありながら魔王の懐刀となった異世界よりの来訪者、ハットリだった。

「うひゃー、分かっちゃいたけどハットリ君ってば強すぎない？ アタシ、何が起きたのか分からなかったんだけど、ヴィン様は見えた？」  
「分かっただけで聞くなりア……人間、しかも魔術すら使えない無能、というだけではないと分かっただけはいたが、俺の目ですら影を追うのがやっとだった」

そんなハットリに、現在は二人となっている四天王の二人、アフロディアとヴィンセントが、口調の違いこそあれど、互いに引きつった

ような笑みを浮かべながら近づいた。

「あ、それでも一応見えてるんだ。やっぱ、ヴァイン様もアレ、わりかし魔族辞めてね？ フツー、見えないって」

「戯けるな……それよりハットリ殿、一応聞くが、怪我はないかな？」  
「問題ない。しかしヴァインセント、俺が貴方を呼び捨てて、年長者の貴方が俺に殿と付けて呼ぶのは心苦しいのだ。そろそろハットリと呼び捨ててもらえないだろうか？」

「そうもいくまい。今や貴方は四天王である我々よりも上の階級、魔王様の半身とすら呼べる立場にあるお方。本来なら気軽な口調で応じるのも慎むところを、こうして砕けた口調で接しているのだ。私の魔王様への忠義も察して、ここで妥協してもらえると嬉しい」

「敵わないな。忠義を出されては俺は弱い」

「ヴァイン様はお堅いんだからー。でも安心してねハットリ君！ その代わりにアタシが沢山イチャイチャしてあげるからー」

「お前はむしろもう少し俺に遠慮してくれ」

言うやいなや、アフロディアは猫のようにハットリの背中に飛びつくと、そのまま器用に肩まで登り、肩車の状態でべったりとハットリの頭をその小さな両手で抱き締めた。傍で「お前こそもつと慎みを持って……」とヴァインセントが掌で顔を覆って嘆くものの、何処吹く風で頬ずりすらする始末である。

「だからさあハットリ君。早く新しい忍術をアタシに教えてちょうだい」  
「いっ」

「あのな、教えてほしいのなら、まずは変わり身をちゃんと覚えからにして。お前は筋がいいが、そのせいで次を次をとせつつく悪い部分が目立つんだ。神童なのは分かるが、基礎をおろそかにしてはいずれ忍術そのものに己を食い殺されることになるぞ？」

「ちえ。もうだいぶ出来るようになったと思うんだけどなあ」

「あれでか？ 里の童でも今のお前よりは巧みだぞ？」

「ひっどいなあ。アタシもまだ子どもだよー？」

「成熟を歳月で語れるなら、老害などという言葉は生まれなかっただろうよ。理由は聞かないが、お前の在り方を童と同列で見るとは俺

には出来ない」

「ふーん……アタシのこと、大人って扱ってくれるんだ、ハットリ君はさ」

「何を嬉しそうに言っている。そうでなければ今頃お前は俺の首を薙いでいるだろうに」

「あはは、君のそういうところアタシ大好き。益々惚れちゃった♪」

「もつと胸と背を盛ってから出直せ、俺はチビガキには興味がない」

「言ったそばから子ども扱い!? うわああん！ ハットリ君の意地悪う！ 知らない！ 死ね！」

その幼い見た目からは考えられない膨大な魔力がアフロディアの体から噴き出す。だが有言実行を果たす前に、アフロディアが抱きかかえていたはずのハットリの首は人間の胴回り程の厚さの木片へと変わっていた。

「お前程度に殺される程、俺は軟弱ではないよ」

「むう……これでアフロディアちゃん記念すべき百回目の暗殺失敗……！」

「精進しろ。俺を殺すなら今のままでは百年程度では足りぬぞ」

「百年たったらハットリ君寿命で……あー、そういや魔王様の魔力とリンクしてるから死なないのか。もうこれほほ魔族じゃん」

「全く、主殿には感謝しているが、死んでも死ねぬというのは難儀なものだと俺は思うよ」

いつの間にかアフロディアの背後に回り込んでいたハットリに二人は驚くことはもうない。当初は原理すら分からない忍術という存在に戸惑ったものの、それが原理を悟らせない超常の技術だと分かっていたからは驚くほうが馬鹿らしいと悟ったからだ。

「ではリアはさておき……ハットリ殿、今後の予定について聞いてもよろしいか？」

「そうだなヴェンセント。俺も今後を詰めたかと思っていた」

「えー、二人してスルーってひどーい！ リアちゃん泣いちゃうよー！」

「黙れ。……一先ず、俺はこれからイシスの大結界とやらを抜けよう



と思う」

その言葉に、蹲っていた魔族兵はおろか、先程までおちやらけていたアフロディアすらも目を見開いてハットリのほうを見た。

「正気？ アレは聖装を人間にもたらした墮神クトウアの呪いの一つ。魔王様ですら解除出来ない最悪の結果だよ？」

「ハットリ殿はここに来たばかりで知らないだろうが、この魔王領がさらなる極寒に閉ざされたのもアレの影響なのだ。天候すら捻じ曲げて我らを苦しめるだけの忌々しき魔。そしてアレは強靱な魔族であればある程戒めを強くする。魔王様を初め、ここに在る我らは近づくだけで消耗する代物だ」

二人の言葉にハットリは頷く。無論、彼もそのことについては重々承知していた。

「知っている。だがヴィンセント、忘れているだろうが……俺は魔力もスキルも、そもそもレベルすら存在しない人間だぞ？」

「まさか、貴方は……」

目を剥くヴィンセントに、ハットリは黒頭巾の下で笑みを作りながら頷いた。

「そうだ。俺はこれから単身で……人間界とやらの踏み入り、聖装の勇者とやらの面を拝みに行く」

「それは危険すぎる！」

ヴィンセントはハットリのあまりにも無謀な発言に声を荒げた。

確かにハットリの実力は、数合わせとはいえ仮にも四天王と呼ばれた魔族の二人を鎧袖一触し、今も魔王軍の精鋭を呼気すら乱さずに殺さぬ加減すらして倒してみせた。

だがそれでも、ヴィンセントは知っている。かつての勇者と魔王の激闘を見届けた生き証人の一人として、聖剣の担い手がどのような怪物かということ。

「幾ら貴方が人間の限界を超えた未知の力を持ち、そして魔王様との契約によりその力を行使する権限を持っているからとはいえ、アレは！ アレと対峙すれば最悪の結果すら招きかねん！」

「だからこそだよヴィンセント。いずれは対峙する相手だ。ならばど

の程度が見定めておく必要があるだろう?」

「ならば結界を超えられる魔族にでも頼んで——」

「生憎と、俺は自分で感じたものしか信じぬ性質なのだ。……それに、安心してほしいヴィンセント」

黒頭巾で隠されたハットリの表情は分からない。だがヴィンセントは、唯一覗くその瞳に秘められた感情——氷のように冷たい戦意に射抜かれて、先程までの激情すら忘れて絶句した。

「聖剣を抜かねば戦えないような賊なら、戦う前に殺す。俺にはそれが容易に出来るからな……しかし」

「もしも勇者とやらが聖剣に頼らずとも戦える猛者であるならば——」。

ハットリは頭巾の上からでもはつきりと分かる笑みを湛えた。

「ああ、殺そう。どのみち殺す。いずれは殺す。幾度と殺す。必ず、殺す。俺の敵なら、俺の全てを使って殺すまで殺す。それが俺の……忍びの戦だ」

夫に尽くす妻の如き献身にて。己が全てを賭して殺し尽くせる相手を、ハットリは雪に隠れた空の向こう側へと柄にもなく願うのであった。

### 第三話 『掃き溜めの街』

正直なところ、棒振りが幾ら上手くとも強くなったりはせん。

無論、俺は兜割りを容易に出来る技量だが、お主は魔法を使わなければいいところ傷をつけるのが関の山であろう。

だが刃の冴え等そこまで気にすることはない。

何故なら、兜を割れずとも人を斬ることは出来るからだ。

尤も、ここでは強化の魔法を使えば誰もが鉄に等しき硬度を得るのだが。そこはまあお主も強化を扱えるという点で気にする必要はないか。

さて、少々話が逸れたが、俺が言いたいの人は人を斬れるだけの巧みさえあれば、それ以上に棒振りの冴えを極める必要などあまりないということだ。

それよりも重要なのは……うむ、その通り。

お主の言う通り、防御にある。

斬るだけならば猿でもできる。

殴るだけなら獣でも容易い。

噛みつきに至っては犬のほうが巧みだ。

では人間である俺達は何をすればよいのだろうか？

技とは何か？

それは守。

技量とはつまるところ防御と同義なのだ。

攻撃なんぞ、敵手の技を掻い潜り、必要なだけの一撃を与える技を叩き込める程度で良い。そこで必要になるのが目だ。

目。

つまり見。

お主も以前の戦いで目がどれだけ重要なのかは分かったろう？  
場の流れを読み、そこに己を合わせるには、流れを読む目こそ肝となる。

よく見よ。

よく捉えよ。

そしていずれ、目だけではなくお主は全てをもつて流れを知ることになる。

初めは目より。

続いて耳で。

そして肌に至り、果てとなれば鼻と舌も流れを感じ取れるようになる。

そのために目を養え。つまりは相手の目を読み取れ。

「視線に気づき、込められた意をくみ取り、流れに乗りながら己の流れに相手を飲み込む。そこに武の始まりがあると知れ」

「はいー」

「良い返事だ。とはいえお主は門を開いてすらいない、未だ門の前にようやく立ったただけだ。慢心油断は捨て去って、俺を殺すつもりでかかってこい。……では、今宵の稽古を始める。参れ、めいる」

宗司がそう言つて手にした木の棒を軽く振ると、鞘に収まった聖剣を握つたメイルは地面から弾かれたように宗司目掛けて踏み込んだ。

その足は蛮族との死闘をした前とは明らかに違う。無駄なく体を動かすことで得られた速度は、宗司をして目を剥く程の速さだ。

「やあああー」

小細工は無用。メイルは上段に振りかぶつた聖剣を目にも留まらぬ速さで宗司の頭に振るつた。

大氣の壁すら突破しかねない一撃は、見ってから避けるは熟練の兵士ですら難しい。だが予めメイルの動きを読んでいた宗司は、聖剣ではなくその柄を握るメイルの掌に木の棒を添えると、まるで鍵を開けるように棒を振じつてその指の間に棒を突き入れた。

「それ」

そんな気楽な掛け声が響く前、木の棒でメイルの指を絡め取つた宗司は、捉えた指先に細やかな力を通して流れを崩す。瞬間、真っ直ぐと走っていた聖剣は、メイルの掌から離れ、上段の勢いをそのままに明後日の方向に飛んでいった。

「ッ!?!」

だがメイルはそこで動きを止めない。すつぽ抜けた聖剣を無視して、指に絡まった木の棒を強化されたその手で強く握りこむ。

このまま宗司の得物を粉碎し、さらに懐に踏み込む。そう一瞬の間に動きを組み立てたが、メイルの視界は突然天地が逆さになってしまっていた。

木の棒を握られた瞬間、その力を利用して宗司が行った合気は見事に決まる。ぐるりと体が半回転したメイルは、何が起きたのか理解できないまま脳天より地面に激突した。

「痛っ!？」

「ここまで、だのお」

受け身も取れずに地面に落ちたメイルの眼前に宗司が木の棒の切っ先を突きつける。それに気づいたメイルは、「また負けたあ」と四肢を地面に放り投げた。

「ちえ、力押しじゃやっぱ無理でしたか」

「発想としては良いと思うぞ。既に俺とお主では単純な腕力で赤子と大人以上の差があるからな。だがせめて聖剣程の力が無ければ俺を驚かすことすら出来んぞ」

「聖剣って……ああ、あの時の戦いですか。私じゃあんな一振りで国を吹っ飛ばす力なんて一生かかっても無理ですし……他の方法考えないと」

「はははっ、まっ、つまるところ精進あるのみということだ。修行せよ修行」

快活に笑って木の棒で自身の肩を叩く宗司に、メイルは口をとがらせて「ちえ、分かりました」と僅かばかりの不満を乗せて答えた。

あの戦いから数日、暫くは旅路をのんびり楽しむために稽古は控えていたが、今夜になってようやく宗司との試合が叶ったメイル。しかし結果はこれまでとまるで変わることなく、宗司をその場から動かすことすらも出来なかった。

「身に染みみましたよ。防御ってやっぱり重要ですね」

「それを知りたいから力押しを行ったのだろう？　だがこれで分かったつもりになるなよメイル。今見せたのはあくまでも見せ札であり、

武の極みにはまるで届かぬ兎戯でしかない。片手間で覚えた戯れ程度  
の技よ」

「……そこまではれちゃってましたか」

「俺を騙くらかすなら、もっと巧みを得てからだな」

精進あるのみだ。

宗司がそう言い終わると、少し離れた場所で野営の準備をしていた  
クロナが、横に置いてある鎧を剣の鞘で軽く叩いて宗司達を呼んだ。

「晩飯の準備が出来たぞー！」

「わーい！」

猫のように軽やかなステップでメイルは胃を刺激する香りへと駆  
けてゆく。

「つたく、昔の俺を思い出すよ」

そのメイルの後ろ姿にかつての己を重ねた宗司は、柄にもない自分  
の思考を嘲るように鼻を鳴らしてみせた。そう考えると、多少過去の  
己に恥ずかしさを覚えなくもないが、苦笑を交えることで恥辱は臍腑  
まで飲み干した。

「……先生も、似たような気分だったのか」

見上げれば、幼き時分の己が見たのと同じ空。

あの日と同じ空を、あの日追いつきたいと思った人と同じ立場から  
見る。

弟子であった己が、今は人に何かを教える師としてここに居る。己  
の我欲を満たすために手に入れた技を、託すように教えていくのは柄  
にもなく楽しくも感じていた。

それでもあの日と心は変わらず、いずれ月光を斬って落とすと誓っ  
た願いはここに。

もしかしたら先生も今の自分と同じく――。

「下らんな」

――感傷に浸るなど、らしくないことをした。

世界が変われど変わらぬ景色から視線を戻し、笑顔で手を振る愛弟  
子の元へと宗司は歩き出すのであった。

アポロン山脈より隔てられたメビウス王国とその他国家の格差は、ある商人が「天国と地獄だ」と言った程、その他国家の生活水準は極めて劣悪なものである。

それは単純に魔物による被害がその他国家では常習化していることから分かるだろう。メビウス王国では久しく見ていない魔物も、アポロン山脈を超えた先では比較的安全な街道ですら時折襲撃がある程である。

それにより国家間はおろか村と村の交易すらも場所によっては難しくなっており、魔族との最前線となっているノートン帝国より最も離れたアポロン山脈に隣接する国家でも、近年廃村が増えている現状だ。

だが人とはどんな劣悪な環境でも逞しく生き抜くものである。

メビウス王国を除き最も戦場より遠い国家、コロナ王国。この王国の首都より西に馬で二日程の距離を走ったところにある街は、まさに混沌と化した現代を象徴するような発展を遂げた街であった。

名をアバド流通街。困窮する世界の中、法を無視した悪徳によって肥大し、今や名だけとなった王国を影より操るこの街は、富裕層と貧民層の格差がはつきりとしていた。

街の中心部となる流通市場。墓場から武器、裏に隠れば違法である人身売買すらされているこの流通市場を基本に、カジノから売春街、高級料理店やホテル、果ては依存性の強い薬の露店等、アバドの中心区はある部分ではメビウス王国以上の物が取り揃えられている。故にと言えばいいのだろうか、ほとんどがコロナ王国はおろか周辺諸国の貴族や富豪、そして商人やならず者等の利権が渦巻く混沌とした市場である。

そしてその中心区を西に少し離れれば、表向きは他国への武器防具、そして魔法具の生産を行っている工業区となっている。ここでは中心区でばら撒かれる金を元に無数の商人等がそれぞれ様々な物品を生産しているのだが、表向きと述べた通り、実際は違法な魔法具や

人身売買で出される奴隷が収容されている施設が設置されていた。まさに取り締まり対象のオンパレードだが、あらゆる利権や裏取引が横行しており、結果として臭い物に蓋といった状態となっている。日夜絶え間なく稼働して、さらには重要な魔法具の数々を作っていることもあり、ある意味では中心区以上にアバド流通街の心臓部で、工業区には警護の兵士達が目を光らせている。

そんな工業区の反対側にあるのが、貧民街と呼ばれるアバドを象徴するもう一つの街だ。

そこでは人族と魔族の戦いから逃げてきた兵士を中心として、アバドでの生存競争に負けた者達によるコミュニティが出来ている。

所謂、負け犬と呼ばれる者達が、アバド流通街より離れることも出ずに街の外に築き上げたコミュニティが貧民街と呼ばれる場所だ。

徐々に追い詰められる人族の現状から目を逸らし、人同士で潰し合い、騙し合い、敗残者を肥溜めに捨てて放置する。

人の悪意と弱さで作られた悪徳の街。

そこが宗司達の辿り着いた新天地であった。

「見たこともねえ。他を当たりな」

「うむ、邪魔をしたな主人」

これで十軒目。今回も良い返事を得られなかった宗司は、店の外で待っていたメールとクロナにやや疲れた表情を見せた。

「やっぱ駄目でしたか、刀。出来るなら私も一本欲しいんですけどね」  
「こう言ってはあれだが私は好かないな。切れ味は良さそうだが、耐久性が低く見える」

「くろな殿は見た通りに力が規格外だからな。耐久性を重視するのも分かるが、俺やめいるのよ。奴は鋭さのほうが好きなのよ」

メールとクロナの意見を聞きながら、宗司は手元の紙に描いた刀を見て頭を掻いた。

「何にせよ、得物が無いのは些か不便だ」



宗司達一行がアバド流通街に寄ったのは、食料の補給とは別に、先日の戦いで失われた宗司の武器、刀を手に入れるためであった。

とはいえ、この世界に置いての武器と言えば、クロナの持っているような頑丈さを主に置いた両手剣などが基本だ。しかも、只でさえ強化と言う魔術が日常に普及しているのである。日常で使う鎌や包丁などは問題ないが、宗司の居た世界に比べてこの世界の武器は遥かに重い。

一応、カリスとの戦いで頂戴した鉈を代用の武器として宗司は持っているが、その重量は片手で扱うと体ごと持っていかれそうな程だ。「まあソウジさんの絵が上手いとはいえ、絵だけじゃ分からないっていうのもあるんじゃないですかね？」

意外なほどに上手い宗司の描いた刀の絵を横から覗きこんだメイルに宗司とクロナも頷きを一つ。

「確かになあ。だが片刃で僅かに反りがあるというのもそうだが、何よりも重量について語るのが一々面倒だ」

「いやソージ。君が面倒臭がつてどうするんだ」

「とはいえな……。ふむ、郷に入れば郷に従うとも言おうし、ここは一つこの世界の刃に慣れるというのも良いかもしれん」

使うのであればなるべく重量の軽い武器。理想としては刀であるべきだ。

その一方で、最早刀に執着する必要はないという事実が、宗司に刀以外の剣を持つ選択肢を考えさせていた。

心鉄金剛。明鏡止水とは真逆の、我欲を極限まで膨れ上がらせた領域に入る奥義。虚無に至った修羅との死闘の果てに手にした極みは、あらゆる武器であろうと発揮することは可能だ。そもそも、心鉄金剛そのものは武器の扱い方というよりは体捌きの側面が強いので使う得物が槍であろうが弓であろうが問題ない。

それでも、やはり己の中の理を扱うに相応しいのは日本刀だろう。

なので、こうして諦めきれずに自作の絵を片手にクロナの肩に乗りながら流通街にあるあらゆる武器屋を風潰しに探しているというわけだ。その一方、武器屋で自分の手に合うような武器も見ているのだ

が、これと言った物は得られず。

「……邪魔するぞ」

遂に十二軒目。クロナでは少々動きづらい路地に入ったところにひっそりと開いていた武器屋。クロナを店の外に待たせて、待っているのが暇すぎると言って付いてきたメールと共に店に入った宗司は、これまでとは違う光景に少々目を丸くした。

「わあ……変なのばっかだ」

メールが口にした通り、そこに置いてあった武器はどれもがこれまでの武器屋に置いてあったものとは違っていた。

籠手に刃を装着した物。

槍の矛先と柄が何故か鎖で繋がっている物。

刃に無数の凹凸ある物。

中には鉄仮面の頭頂部に無数の針が突き出ているというよくわからない物まで、いずれも珍品と呼んでいい謎の武器が数多く揃っていた。

「ほお、まさに見世物市だ」

「これ！ これ見てくださいよソウジさん！」

無数の針が付いた肩当てを付けたメールが姿見を見て興奮しているのを置いておき、宗司は早速カウンターで肘をついてこちらを見ている店主へと刀の絵を差し出した。

「店主。すまぬがこのような武器を知らぬかの？」

「……いや、俺も珍しい武器を揃えているがそれは初めて見るな」

「そうか……。いや、すまぬ、時間を取ったな」

絵を再び懐に仕舞った宗司は、僅かに芽吹きかけた希望が潰されたことへの落胆に肩を竦めた。

だがいつまでも未練たらしく刀に依存するのも良くないのかもしれない。あるいはいい切っ掛けなのだろうと宗司は己に言い聞かせると、折角なので目を輝かせて武器を見るメールと共に展示されている武器を眺めることにした。

「ほう……軽めの武器も揃えているのだな。うん、感触も悪くない」

試しに刃渡り二十センチ程度の肉厚の短剣を手にとった宗司は、存

外悪くない握りの感覚と軽さに僅か目を開いた。

「ウチは腕利きの鍛冶屋を抱えていてね。まっ、ご覧のとおり珍妙な武器ばかりだが、軽さとは裏腹に頑丈さも切れ味も握り心地もそこらの武器とはまるで違うのさ」

宗司の感想に気を良くした店主の言に「鍛冶屋？」と宗司が聞き返す。

「ああそうさ。とはいえこれがまた変な奴でなあ。金は要らないから武器を置いてくれっていう奴で、まっ、おかげで俺は仕入れの金も要らねえつてもんでこうして普通なら置かないような珍妙な物を無数と置けるってわけよ」

おかげで表では店出すのが難しくなったがな。そう言って高笑いする店主に吊られて目尻を緩めた宗司は、握った短剣を鞘より抜き払って顔の前に掲げた。

粗悪な量産品とは違って、歪みの無い真っ直ぐな刀身である。剣先が二股になっているのと、柄の先に剣山のような物が付いているのが珍妙ではあるが、宗司はこの短剣の綺麗な刀身に感嘆した。

## 第四話 『これをきつと老害という』

「……人殺しの鋼か」

呟きは気分よく語る店主といつの間にか相槌を打って笑っているメイルの声にかき消された。

だが周囲の喧騒を気にも留めず、宗司はこの短剣を生み出した鍛冶師の人物像を思い描く。

人を殺した者が、人を殺すために打った鋼。己の子を愛するよう  
に、これを含めたここにある武器を生み出した鍛冶師は刃を打ったの  
だろう。

どうか立派に人を殺してくれるように。

どうか無事に人を殺せるように。

どうか最期まで人を殺し続けられるように。

親が子を想うように生み出された武器の数々は、改めて見れば、珍  
妙な個性を出そうと考えた末のことなのだろうと分かる。

それでありながら、担い手に迷惑が掛からないように武器としての  
長所を引き出すように心がけているのも感じ取れた。

(尤も、天然かつ阿呆なのも事実だろうな)

どう考えても熟慮の末に明後日の方向に突き抜けた失敗作もある  
のだが、そこはちよつとした茶目つ気とみるべきだろう。誰しも失敗  
はあるのだ。タダで渡している以上、店主も特にそこを突っ込むのも  
野暮と考えたからこそ、こうして失敗作も展示されているのだろう  
が。

「しかし、気に入った」

宗司はかざした短剣を数度その場で振るって会心の笑みを湛えた。

作った者の気質はどうあれ、これまで廻った武器屋に並んでいた武  
器と比べても頭一つ抜けた出来栄えかつ、宗司の手にも良く馴染む武  
器に出会えたことは嬉しいことだ。

「店主、こいつを貰うぞ」

腰帯に付けた革袋より金貨を数枚取り出して店主の前に置く。値段の数倍以上の金額を出されたことに目を疑う店主を他所に、宗司は「これでは足りんか？」と告げて、店主が慌てて首を振ったのを見て短剣を改めて腰帯に差した。

「では貰っていく。釣銭は要らん、楽しめた駄賃と思ってくれ」

言うだけ言って颯爽と体を翻した宗司はそのまま店を後にしようとして、ふと体を止めて振り返った。

「ところで店主、最後に一つ聞きたいのだが」

「あ、は、はい。どうぞ」

「これを作った鍛冶師、何処に住んでいるのか知らぬのかの？」

「いえそれは……すみません。いつも顔までフードで隠して殆どなにも言わずに武器だけ置いて消えて行くんで、場所も名前も知らないでさあ……ああでも、あれだ。时期的にそろそろ入荷に来るころですぜ？」

「ほう、それは真か」

「へい、とはいえ最近は魔族との戦争もより物騒となってきたもんですし、来るかどうかは……」

その時、店の入り口にある来店を知らせるベルが鳴った。

「……店主、邪魔をする」

次いで室内に響いたのは、風鈴のように涼やかな声ながら、しわがれた老練なる音色。フードを目元まで深々と被ったその老人と思しき人物は、宗司とメールの間に割り込んで店主の前に立った。

そして、背中に背負っていた重そうなりユツクを乱暴に降ろすと、今度は慎重に、赤子でも抱くようにして幾つかの刀剣を取り出した。「ほお……」

並べられた刀剣に宗司が思わず感嘆する。

どれも装飾が意味不明で、見栄などを気にする形だけの武士ならば手に取ることもすらないだろう。

だが宗司は、そしてメールもこの刀剣達が見栄えだけの奇妙な物ではないことを即座に見抜いていた。

殺してください。

どうか、私を使って殺してください。

立派に殺してみせます。きつときつと、誰よりも殺し尽くしてみせます。

「魔剣、妖剣の類か」

執念すら感じる刀剣から発せられる思いの丈を汲み取り、宗司の口許に笑みが浮かんだ。

その様子をフードの下より老人が静かに見つめる。だが数秒もせず視線を切ると、老人は店主へと視線を戻した。

「今日はこの子達だ。頼む」

「お、おう。いつもどうもできあ」

「では、また来る」

「まあ、待たれよご老人」

用は済んだと足早に去ろうとする老人の背中に宗司は声をかける。しかし老人は一切こちらの声に反応すらせずに、そのまま扉を開けて出て行くこうとした。

全く、これだから老人は頑なで困る。

「そう慌てるなよ。古い先短いとはいえ、急いでとは緩やかな隠居すら楽しめ……」

宗司は嘆息しながら、扉を開いた老人の背に一足で近寄り、その肩を掴み――。

「俺に、触れるな」

死に触れたのだと理解した。

「ッ……」

咄嗟に屈んだのは半ば直感でしかなかった。遅れてその背後に置いてあった店の家財が、まるで鋭利な刃物で切断されたように斜めに崩れる。

突然のことに店主が当惑を露わにした。何が起きたのか理解すら出来ていない。

それはメールも同じ、彼女すらも何が起きたのかと動揺を僅かに見せ、だが即座にこれが命の取り合いだと悟った直後、戦闘状態に意識を切り替え、宗司の名を叫ぼうと口を開き――。

その時すでに、宗司の意は那由他を知覚する域へ走っていた。

「ソ——」

そして、時は遅延する。

「ウ——」

間延びする意識領域。

「ジ——」

一秒が十秒へ。

「ぎ——」

十秒を百秒へ。

「ん——」

百を裁断した果てに、無限の刹那を是と成して、メイルがこちらを呼ぶまでの間に、宗司は極地を物としていた。

だが、宗司は己の生み出した絶対不可侵の領域に、老人の冷めた眼光の輝きが乗り込んでいることを即座に察する。

「運が悪かったな、若造」

音速すら遅くなる領域で、本来聞こえるはずのない声が宗司には聞こえる。

時間にして刹那。

油断と言うにはあまりにも短き時の隙。

驕り、不用意に間合いへと入り込んだ宗司への嘲笑を一つ、必殺を再び紐解かんと老人が腕を上げた。

故に宗司もまた笑う。

「それはこちらの語り文句よ、ご隠居殿」

それは、自分を間合いに入れて未だに動きを見せない老人への忠告。

瞬間、互いが互いに慢心を捨てる。

メイルが意識を切り替えるその僅かな間、共に告げられないはずの意を告げたと同時に、出会うべくして出会った強者同士の戦いは幕を開けた。

——こちらが一手、遅れるか。

故に宗司は状況の不利を悟る。

この時まで動けずにいた己の油断を嘲笑う。

それ以上に、この刹那までその実力を隠し通してみせた目の前の強者への歓喜に、宗司は悶えた。

抜き払った短剣は未だ己の手に完全に馴染んだわけではない。だがその程度の誤差は問題なく、宗司は一手目を避けたことで晒した己の隙にねじ込まれる相手の殺気を右に飛ぶことで避けきった。

——斬撃か？

肌を撫でる殺気の軌跡は視覚でははつきりと見えない。それでも確かに己の横を抜けた何かが、カウンターもろ共驚愕の表情を浮かべた店主を左右に切断したのを気配で察する。

——メールは……：戯けが、切り替えが遅すぎる。

「うわああああ!!!」

遅れて、ようやく意識の高速化を終えたメールが、悲鳴のような咆哮と共に手近にあった武器を握り締めて勢いよく老人へと投擲した。

切り替えの遅さは情けないが、その後の行動は完璧と言っている。ただ腕を使って投げるのではなく、床を踏みしめ、腰を回し、肩、肘、そして手首。さらには頭部の捻りを用いることで全身を丸ごと叩き込むように投げた鋼鉄は鉄板ですら容易く貫くだろう。

しかし老人はその必殺を一瞥するだけで細切れに寸断する。

絶技、と賞賛するほかあるまい。太刀筋が一切見えず、殺気でしか全容を理解出来ない。

そこまでの応酬で実に一秒にも満たぬ間。そこで膠着に陥った状況を誰もが察して、宗司達の思考速度は世界と同じ流れに戻った。

「面白いなあ」

轟音を立てて崩れ落ちる家財と血しぶきと臓腑を丸ごと溢れさせて左右に崩れた店主の半身を背後に、宗司は嬉しそうに喉を鳴らす。

「うっわ、ソウジさん、店主の人死んじゃいました」

「阿呆、それはいいから目の前に集中しろ。俺が抑えねばお主、この語らいで死んだぞ」

「分かってて声かけただけです。えへへ、ちょっと楽しくなってきましたよ。恐くて泣きたいです。ていうかホントだったらもう八回は



私死んでましたよね？」

「良い心がけと認識だ。以後は助けん、だから死ぬな。それと十二回だ、もつと読め」

「はいっ！ 死にたくないのだから読み切ります！」

右手に鞘に収まった聖剣チート、そして左手に先端が三つ又になった奇怪な長剣を掴んだメイルは老人へと鋭い視線を向ける。

気力は充実していた。

威勢良く返事をした。口許は笑みを象っている。

だが、背中を、頬を、全身から流れる冷や汗が止まらない。

背筋をチリチリと焦がすこの焦燥感をメイルは先の蛮族との戦いで何度となく経験していた。

これは死の気配だ。しかも、今の自分では抗うことすら出来ない。

その証拠に見ろ。己が周囲に張り巡らされた死線の数々を。

(……やばいなあ。一步も動けないです)

この世界における限界点を越えたメイルの見切り。レベルに換算して100を超えたそれを持つてして覗いた老人の攻撃圏は、恐ろしいことに宗司とメイルはおろかこの武器屋を丸ごと収めていた。

下手に動いた瞬間に理解も追いつかないまま切断された店主のようになるのは明白。いや、宗司が前に立って老人に気を当てていなければ今頃自分も何が起きたか分からないまま死んでいただろう。

「さてご老人……俺の浅慮も大概だが、肩に触れただけでこれとはお主も癩癩が過ぎるのではないかな？」

「……そうか。強いな、お前」

「話を聞いておらん。まあいい……気が変わった。お主がこれらの作り手なら俺の刀を作ってもらおうと思っていたが、ここに至っては是非も無し」

宗司の纏っていた気配がより鋭く尖っていく。研ぎ澄まされた刃を人の身のまま、未だ全容の分からない敵手へと手にした鋼鉄をもつてして――。

「斬る」

直後、宗司目掛けて無数の殺気が飛来した。

先程から放たれ続けている見えない斬撃は脅威、驚嘆するほかない。

しかし芸が分かれば容易いと、宗司は直感の赴くままに迫る殺気の間へと己の身を滑り込ませた。

「ッ……」

風が鳴る。

風が断つ。

快刀乱麻に剣戟一つ、狭間で踊る宗司が健在である事実フードの下で老人が唇を噛む。

「うわああああ!」

その背後、無数と駆け抜ける見えない斬撃を前にメイルは悲鳴をあげながら聖剣を盾にして身を屈め、同時に戦慄する。

自分では気配を察するまでは出来ても、見ることも、ましてや回避することすら出来ない必殺の雨を、宗司は鼻歌混じりに捌いていた。決して容易いものではない。現に宗司の体には幾つもの傷が生まれ、血の雫が踊りを彩るように空を舞っている。

だが宗司は止まらない。追い詰められることすら是として、恍惚と死線に佇み——ついにその手に握った鋼鉄が虚空の何かと火花を散らした。

「ちっ……」

「見えた」

舌打ちする老人と対照的な宗司が舞踏を止めてその場にとどまり刃を振るい続ける。その度に響く鋼鉄の残響と室内を照らす火花こそ、宗司が老人の刃を見切った証。

「余興としては楽しめたぞ」

「……」

「薄刃の群れとでも言おうか?」

「死ねよクズ」

「その反応、どうやら合っているとみたく」

宗司は忌々し気に口を歪ませる老人の周囲を俯瞰する。

よく見れば、光に僅か反射する透明な布らしき物が無数と老人の周

囲を漂っているのが見えた。だがそれはただの布ではない。

極限まで薄く、薄く、薄く薄まった鋼鉄。

数にして五十に及ぶ見えない刀身が老人を守るようにその周りに展開されていた。

「ガキが知った風にはぎきやがつて」

「なら試してみよ。嘲りと侮ったが最期、そのそつ首を斬り捨てる」

「ケツ、その前にお前の首をその汚えケツに突っ込んでやるよ」

互いに軽口を交わしながら、油断なく間合いを図る。

だが既に宗司は老人の実力をほぼ見切っていた。

揺らぐ程に薄い刃でありながら、店主もろともカウンターを両断し、メールの投げた長剣を一瞬にして寸断する切れ味は脅威だ。

武器だけではない。担い手である老人の有する技量も達人の領域に至っているのは間違いないだろう。

しかし、それだけだ。

「抜かせよ、老体」

既に生半可な達人であれば容易に斬り捨てる域へと、あの盲目の騎士との死闘を経た宗司は到達している。

「来い。ここより先はお主の死線だ」

真実を告げ、短剣を両手で握り切つ先を向けた。

誇張もない現実は相対してはいないはずのメールにすら死を予感させる冷たい殺意の発露。実際に相対している老人であれば、本人の技量も相まって宗司が嘘を告げていないことなど既に悟っているだろう。

だが老人の表情は己の死を前にしても変わらない。相変わらず何処かふてぶてしさすら感じるフードの下で何を思ったのか。

不意に、その眼が宗司の向けた短剣へと向けられ――。

「オイオイ、お前それ俺のアンジエちゃんを使つてんのか!？」

先程までの嫌悪感が嘘のように晴れて、殺気を放つ宗司に無防備な状態で近づき握っていた短剣に無遠慮に手を這わせた。その掌が当然のように浅く裂けて鮮血が刃の表面を滴るが、老人はそんなことを気にせずに興奮したままだ。

「うお！　すげえすげえ！　お前！　これ、お前！　触れただけで斬れちまうじゃねえか！　ああ畜生！　何だよお前！　百どころか二百、いやそれ以上に性能引き出しやがって！　作り手冥利に尽きるつてもんだがこれやられちゃダメで作った剣つてことも分かんねえじゃねえか！　つーか相思相愛すぎて作り手的には嬉しいような悲しいような娘を大事にしてくれよって感じだぞ！　ありがとうクソツタレ！　この武器たらし野郎が！」

「しかし……カァーツ、こいつぁホントに驚きだぜ！　俺の娘に相応しい奴を探しているんな場所で達人とか抜かしやがる短小インポをぶっ殺してきたがお前程の化け物は初めてだ！　これまでの短小と違って俺の娘と最高の野外ファックを決めたお前を褒めてやる！　ところで流派は？　西の騎剣とは違うな、どちらかという東の武剣辺りに近いが……ああもういい！　それよりもお前、どっちかと言うと重めの剣には不慣れだろ？　ああいい！　いいぞ！　言わなくてもいい！　分かつてる！　見た感じ重心の置き方は完璧だが、慣れないうというより久しぶりって感じの振り方だったからな！　普段はもつと軽めの剣、長さはこのくらいだな？　そうだな？　よしっ！　あー、それに暗器の類もそつなくこなせるとみた！　肉付きがこつちの筋肉ばつかのチンカスとは違って無駄なく整ってるからな！　マラに頼ってテクを磨いてねえインキンとはそこが違うねえ！　そこでこの娘、今さっきお前にもかましてやった俺のお気に入りのおーズちゃんなんかどうだ？　へへへ、すげえだろこれ、眼に見えない状態まで細くした鉄だがよ、この細い刀身もさらに細い鉄の集合体なんだけ。使い勝手としては風魔術を応用してよお、これでよがりまくる様はご覧の通り、ここの店主のフニャチンが最高のイキ顔キメてるどころから……ってこいつぁ俺の魔術に合わせた俺用だから駄目だよな！　わはは！　悪い悪い！　だったら一から作り直していくほうがいいと思うがどうだい？　いやいい、答えはいい！　俺はアンジエをここまでたらしこんで、いつでも股広げるメスにまで変えちゃったクソヤロウなお前をとことん気に入った！　俺の娘をファックした奴

でここまで気に入ったのはお前が初めてだ！　ありがたく思えよ！  
よし！　とりあえずこんなちんけなところで話すのは止めだ！  
お前さんっていう最高の担い手が現れた以上、こんな湿気た場所で俺の大事な娘達を……ってああああああああ！　ごめんよスファーナ！　勘違いした馬鹿剣士に汚されたと勘違いした怒りで我を忘れて斬り捨てちまってよお！　ちゃんと帰ったら鍛え直してやるからなあ！」

先程メールが投げて細切れにした長剣の残骸をかき集めて男泣きする老人には、先程までの達人然とした空気は存在しない。

一体、何がどうなつてこうなったのやら。この置いていかれる感覚はナイルに覚えたものに近いかもしれない。

「……何にせよ、闘争の空気ではない、か」

「え？　これ、今斬つちや駄目？　駄目？」

「いや、流石にこれは駄目だろ」

「よっしゃあ！　それじゃ俺の娘達と金目の物を……ちつ、何だよこいつ、俺の大事な娘達を並べてたつてのにしよっぱい金しかねえじゃねえか！　このクソツタレの玉無し野郎が！　地獄で魔獣共にケツをファックされて最低十回、いや千回は死んで出直しな！　ペツ！　生きてても死んでも使い物にならねえインポデブが！　来世は生ゴミに生まれ変われよ！」

刀剣を回収しながら金銭を略奪し、左右に分断された店主の亡骸をガスガスと踏みつけて唾を吐き捨てる姿は、老人というよりは癩癩を起した童か畜生染みた盗人にしか見えない。

これが先程まで己と斬り結んだ達人だというのだから恐れ入る。

「例えるなら、そうさな……」

——まるでこの男は山の天気のようにだ。

宗司は吐き出す場所を見失った闘志を溜息に乘せて吐き出しながら、そんなことを思うのであった。

## 第五話 『心鉄』

崩壊した店を後にした宗司達は、老人に誘われるがまま、今は貧民街を歩いていた。

流通街がアバドの光であるなら、ここはまさしくアバドの闇。幼子すら光を失った昏い瞳で世界を見据えている中を、喜色満面の老人を先頭に、見慣れぬ者が見れば布一枚しか羽織っていないように見える宗司と、何処かのお姫様のようなドレスを纏ったメイルが共に歩いている様子は貧民街の住民ですら近づけない異様な集団であった。

「そういえば自己紹介が遅れたな。俺は世界中で噂の魔剣職人、泣く子はぶつ殺す男、ダン・ダーレンなんだ。それでも抱かれない職人第一位に選ばれる確信があるほどの美男子だぜ。惚れるなよ？」

あの豹変から一転して、このダンという男は道中も途切れることなく延々としゃべり続けていた。最初に感じた冷たさは欠片も無く、確かに職人氣質とでも言うべき自己中心的な喧しい男だ。

だがあの冷たい一面もダンという男の真実であることは、鋼を合わせたあの語らいで理解している。

冷徹にして激情。陰陽に通じる太極の如きものなのか、はたまたただの大馬鹿者か。

「気狂いには違いあるまい」

「つてわけで二十歳になった俺は口だけで腕は屑だった親方の四肢をぶった切った後に炉に突っ込んで言ったわけよ、テメエのちいせえナニはその湿気た炉にお似合いだってな。わざわざ炉に運んでやった俺の優しさが——ん？ 何か言ったか武器たらし」

「何でもない。ところでダン殿、お主の工房にはいつほど……」

「おお！ ようやく着いたぜ武器たらしとオツパイチビ！ ここが俺の工房だ！ 遠慮なく上がってくれい！」

宗司の言葉を待たず、ダンが指さした先には一軒の小屋が建っていた——ちなみに武器たらしとは宗司のことで、オツパイチビとはメイルのことである。自己紹介したがどうやら名前を覚える気はないよう

だ。

「これは余談だが、メイルは「この人、クロナさんのこと胸無しデカ女とか言いそうですよね」と言ったので、宗司は「お主それ本人には言うなよ、頼むから本当に」と頼んだりしている――

貧民街にあるボロボロの小屋よりは多少外観は整っているが、それでも流通街に建っている家屋と比べるとボロ小屋当然である。

しかし、そんな宗司とメイルの感想も中に入った瞬間に改まることとなる。

「これは……」

「うわあ……」

ダンに続いて小屋へと入った二人が見たのは、外観からは考えられない程に整理整頓されたまさしく工房と呼ばれる一室だった。

特性毎に分けられた鉄のインゴット。百種を超えて保管されている薬の数々。鉄を打つのに使う鎚すらも種類が分けられている。

何よりも目を引いたのが、部屋の奥に鎮座する、遠くでも感じられる程の熱気を放つ炉であった。今も轟々と赤熱している炉の周囲には幾つもの魔法陣で囲われ、常に炉の熱が途切れないように調整されていた。

他に家財と言った物は存在しない。ひたすらに人殺しの鋼鉄を生み出すためだけに特化した空間。ここだからこそ、宗司はダンが作り出した武器の数々に、執念にも似た念を感じ取れたのだとようやく理解した。

「凄まじいな。門外故に詳しくは分からぬが、ここにお主がかける意志は汲み取れる」

「そりゃありがとよ。まあ俺の工房を見て何も分からねえクソだったら眼球とケツに溶けた鉄流し込むがよ、ガハハッ！」

「ねえソウジさん。やっぱこの人馬鹿なんじゃないですか？ 気にいらなかったら殺すとかどんだけぶっ飛んでるんだって話ですよ。しかも冗談じゃなくて本気で言ってますし。今の内に斬るときませんか？」

「それは言わぬお約束というやつだぞ、めいる。後、斬るのは無しだ」

「というか斬っておかないかと平然と提案するお主にだけは言われたくはないだろう。という言葉はグツと喉元で抑え込み、三人は部屋の片隅に申し訳程度に置かれたシーツの上にそれぞれ腰を下ろした。当然だが客人に対して茶の一杯も出さず、ダンはその場に置かれていたいくつかの武器を宗司達の前に並べてみせた。

「いずれも先程の武器屋に並べられていたのと同じく珍妙な武器ばかりだが、やはり量産された武器とは違う作り手の執念というものが滲み出ている。」

「で、早速だがお前の剣を俺は作りてえ。情けねえ話だがよお。これまで作った愛娘達が駄目だとは言わねえが、お前に相応しいと断言は出来ねえんだ。何せ、俺が基本として作ってるのは使う奴がどんなにかスでも、末永く敵を斬って千切ってぶっ潰す物だからだ。勿論、それでもこの世界にいる剣士気取りのゲロ程度ならいくら使っても十分に輝いてくれるが……お前のような一流、いや、超一流以上のグレートファツキン一流レベルだと、どうしてもお前に合わせた一振りではねえといけねえ」

「故にこれらは相応しくねえと、ダンは一列の武器を纏めて横に退かした。」

「そこでだ、お前、どんな武器が欲しい」

「これだ」

「こいつは……ああ、そういうやつか。なるほどね。細身で薄い刀身、鋭さに特化させた剣ってやつか。これならお前のその整った身体の原因もわかるつてもんだ」

「宗司は懐に入れていた刀の絵をダンに見せる。絵を受け取ったダンには眉間に皺を寄せながら何かしら考え込むと、唐突に片手から魔力を放出して、工房の隅に置いてあった鉄のインゴットに魔力を注ぎ込んだ。」

「直後、まるで内部から沸騰するかのようインゴットの表面が蠢いたかと思えば、勢いよくその姿を変えていき、瞬く間に宗司が渡した絵と寸分変わらぬ一振りの刀が生まれた。」

「二先ず象りした。雛だがどうだい？」



「……驚いた。魔法というのは何でもありなのだな」

「こんなんは大道芸みてえで、試し作り以外に使えねえ代物よ。だつていうのに最近の鍛冶師つてのはこういつた鍛冶魔法ばっかやりやがって、実際に鉄を打つやり方を忘れちまうフニヤチン野郎しか……と、俺の愚痴はどうでもいいか。それで？ 実際に持つてみてどうだ？」

ふわりと宙を飛んでダンの手に収まった刀を受け取った宗司は、まだそれほど経っていいないにも関わらず久方振りの感触に思わず頬を綻ばせた。

「悪くない。だが刀身部分に重さが偏りすぎているな」

「それでもだいぶ軽めにしたんだが……ああ、そういやアンタ強化魔法を使つてなかったな。だとしたら今の半分、いや、もつと軽くしても問題ねえか……」

宗司の手から刀を返してもらうと、ダンはずいぶん魔力を通して刀の刀身を波打たせる。

「持ち手のほうに重心を置いたぜ」

「先程よりも良いな。だがこの偏り、刀身の強度が不安になる」

「そこは安心しろ。今は見てくれしか出来てねえが、完成品にするなら芯の部分にローズちゃんと同じ合わせ鋼鉄を使うつもりだ」

「ろーず？ ああ、あの見えない剣か」

「アレと同じ作りの芯なら折れる心配はねえ……そうさな、一先ず試作してえから暫くここに泊まれ。どうやら俺にとつても初物の美少女みてえだ。最高のメスに仕上げてえから直ぐにお前の反応が欲しい」

そう語りながら、既にダンはずいぶん火を入れているとインゴットと槌を手に錬鉄の作業へと入った。

有無を言わさぬとばかりのその背中中は、先程の店内での死闘以上の鬼気迫る雰囲気を感じている。むしろこれこそが本来のダンの姿なのだろう。汚い言葉ばかりを吐き出していた口は閉じ、ただ無言で鉄を打ち、理想とする一振りのためだけに全ての心血を注いでいる。

「……ふむ。そういうわけだ、めいる。お主はくろな殿の所に戻って

俺が暫く戻れないと伝えに行ってくれ」

「分かりました。確かに、これ以上私が居たら邪魔ですもんね」

宗司と同じく、メイもダンの雰囲気を感じ取ったのだろう。駄々をこねるでもなく素直に宗司の言うことを聞くと、ダンと宗司に一礼をしてその場を去った。

後に残るのは、高温に熱されてきた室内に男が二人と鉄を打つ音ばかり。

「くくっ……」

額から大粒の汗を一つ流して、宗司は抑えきれない笑みを一つ漏らした。

この世界に来てからというもの、剣聖すら霞むほどの強者との連戦と自分と同等かそれ以上の人物との出会い。メイという理想の強敵となり得る存在を弟子と出来たこと。

そして修羅外道と呼ばれる男とは別種の極み、心鉄金剛へと至れたこと。

それからのこの危険だが信念のある職人との出会いだ。まるで天が自分を祝福してくれているかのようなめぐりあわせを思えば、笑わずにはいられないというもの。

「ああ、本当に楽しいなあ」

めくるめく素晴らしき修羅場を思い、宗司は鋼鉄の響く音色に身を任せるのであった。

## 第六話 『腐敗した性根』

喧騒の只中を掻き分けて歩くメイルは、すっかりアバドを楽しんでいた。その頭には既にクロナとの合流の件は頭にはない。

転移門の時は王都崩壊の件があつたために、緊張からあまり楽しめなかつたのだ。こうして一人になると、文字通りの箱入り娘であつたメイルはすっかり露店巡りをハマってしまった。

「うん、美味しい！ このお肉、売つてた人も何の肉かは知らないって言つてたけど、悪くないなあ！ あ、お兄さん！ そのよくわからないフルーツ一つくださいな！」

路銀に關してはメビウス王国より持ち込んだ物が有り余る程にある。そのお金を躊躇なく使つて食事をしていたメイルは、動きやすいとはいえ見事な装飾を施されたドレスを着て、背中には見た目だけは完璧な聖剣チートを背負っているため、良くも悪くも衆目を集めていた。

メビウス王国とは違い、荒くれ者の多いアバド流通街ではメイルのようなお嬢様は間違いなく存在しない。だからこそ世間知らずのお嬢様を騙して浚つてしまおうかと考える者も少なからずいた。

そう、露店の品物を貪るメイルの傍に人ごみに紛れて近寄り、彼女の懐から金銭をかすめ取るうとする男も――。

「ぎやああああ?!?!」

瞬間、メイルの背後で右手首を半ばまで切断された男の絶叫が響き渡つた。

「あの一、人のお金を勝手に盗もうとするからですよ？」

激痛で地べたを転げまわる男を見下して、メイルは右手で先程の鍛冶屋から拝借したダンの剣を弄ぶ。

いつの間に腰の得物を抜き払つたのか。閃光の如き早業を見切れた者はこの場にどれほどいるか。

少なくとも、メイルにちよつかいをかけようと様子を伺っていた者の全員が、彼女に手を出すことを諦めたのは事実だ。

世間知らずのあツぱらばーなお嬢様が、実は世間知らずで凄腕の躊

踏なく人をぶった切るあっぱらばーなお嬢様だったのだ。

下手なことをすれば地面で悶える男に次は自分になるかもしれない。

だがそんな哀れな男に声をかけるところか、街中で斬り合いが発生したにも関わらず、誰も衛兵を呼ぼうとする者はいなかった。

そんな周囲の様子を見て、メイルは一つ頷く。

どうやら武器屋が崩落した後に衛兵が誰も来なかったこともそうだったが、ここではこの程度の事件は日常茶飯事なのだろう。

「まっ、運が悪かったね、おにーさん」

「いやー凄いなお嬢さん。素晴らしい腕前じゃないか」

男を放置してその場を後にしようとしたメイルだったが、気だるげな拍手の音を耳にして足を止めた。

その方向に視線を向けると、恰幅が良くメイル以上に派手な衣装を着た男が数人の護衛らしき剣士を引き連れて立っていた。

露骨なまでの胡散臭さにメイルの眼が警戒の色を灯す。

いざとなればさっさと斬り捨ててほとぼりが冷めるまで隠れていればいいだろう。

そんなメイルの剣呑な雰囲気を感じて護衛の剣士達が腰の剣に手をかけるが、恰幅の良い男は片手を挙げてその動きを制した。

「初めましてお嬢ちゃん。私のことはそうだな……気楽にグライドと呼んでくれ」

「……メイル・リンクキャットです。何か御用ですか？ そのおにーさんなら勝手に私の剣にぶつかっただけなので私は悪くないですよ」

「ハハハッ、偶々抜いた剣に偶々伸ばした手が当たったと？ 言い訳にしては今日び子どもでも言わないぞ」

「だったらなんです？ 怪我させたから慰謝料払えとでも？」

「いやいやそんなことは言わんよ。まあ怪我させたのはやりすぎだが——その君、彼を頼んだよ」

グライドは近くの露店の店主に金貨を一つ投げ渡す。それを受け取った店主は喜色満面の笑みを浮かべて盗人をそこから運び出して

いった。

「いいんですか?」

「構わんよ。少なくともこの周辺では私がルールだからね。しかしリンクキヤット君は肝が据わっている。流石は武器屋で大立ち回りをした連中の一人なだけはあるな。ああそれと、君の連れの巨人の戦士、クロナ・クロルキスは既に私の屋敷に招待させてもらった」

既に自分のことはおろか、クロナと宗司のこともグライドは把握しているらしい。

周囲のグライドへと向ける畏敬の念。そして僅かな間にこちらのことを知っていたことから分かる情報網の大きさ。幾らメールが世間知らずとはいえ、ここまでくれば何となくグライドがどの程度の地位に居るのか理解出来た。

「つまり……あれですか? 武器屋を吹っ飛ばした私達をとっ捕まえるにきたと?」

「それは違う。むしろ私はあのダンに入られた君達を大いに買っていると言つてもいい」

「あの魔剣鍛冶師に気に入られるって割と嫌なんですけど……」

「言いたいことは分かる。あれは性根が畜生だからね……だがしかし、彼は替えの効かない天才だ。そんな彼に入られた君達は果たしてどうなのかな?」

「少なくとも私は普通ですよ」

「私から見れば君も恐ろしい天才に見えるがね。それより、どうだい?」

「どう、とは?」

「決まっているだろう。ご招待だよりリンクキヤット君。ようこそアバド流通街へ。歓迎するよ……心からね」

その見た目とは裏腹に優雅な動きで一礼してみせたグライドを数秒見つめ、メールは片手剣を鞘に収めた。

どういう要件かは分からないが、宗司がダンとの魔剣作成が終わるまで動けない以上、暇潰しを何処かでする必要がある。

「メールでいいですよグライドさん。歓迎、心より感謝します」

「ふふつ、ありがとうメイル君。では行こうか、少し離れているが来たばかりの君にここのことを軽く説明するがてら、歩いていくとしようか……お前達、周りを黙らせておけ」

グリイドが護衛に一言告げるやいなや、護衛の兵士は軽く一礼すると周囲の人混みに紛れるようにして消えていった。

例の蛮族との死闘を経て成長したメイルから見ても優れた暗技だ。すっかり気配を感じられなくなった兵士の気配を何とか辿ろうとするが「さあついてきてくれ」と言つて先導し始めたグリイドの言葉を聞いて、今は気配探知を後回しにする。

そんなメイルの様子に気付いたグリイドがふくよかな顎を揺らし、やはり見た目に反して爽やかな笑顔を浮かべた。

「少しは驚いてくれたかな？ 彼らは幼少の頃から私の護衛として育つてきた自慢の護衛だね。直接戦闘では君に劣るだろうが、こうして影より私を守ることに関しては一流なんだ」

「ええ、確かに凄いです。人混みに紛れるところまでは分かったんですけど、そこから先はまるで追えませんでした。よければ一手ご指導してほしいくらいです」

「そういうことなら後で聞いてみよう……それより君から見てこの街はどうだい？」

言われて、メイルは左右に分かれた人々を見渡す。

かつて、一度だけ連れていかれたメビウス王国の王都と同じ程度に賑やかではある。だがアバド流通街は王都のような精錬された活気というよりも、垢に塗れた昏い賑やかさともいう不気味なものを感じていた。

だがその不気味さは今のメイルにとっては心地よい。秩序ではなく力で統率された世界は、強者の道を歩みだしたメイルが立つべき場所でもあるからだ。

「ここだけなら、まだ良いところだと思います」

「ここだけならとは？」

「この露店街を歩く前に貧民街を歩きました。驚きましたよ、人間つてあそこまでゴミみたいな眼つきになれるんですね」

「辛辣だね」

「ですが事実だと思えます。どうしてもあそこに生きている人は、まだ体が動くのに死んだみたいなお顔をしているのか分かりません」

だからこそ、あの人々が気に入らなかった。

メイルはダンの工房へ行く間に歩いた貧民街で、こちらを見る貧民達を思い出す。

誰も彼もが諦めたように暗い顔で、継るような眼差しで自分を見ていた。

助けてくれ。

恵んでくれ。

救ってくれ。

いつそ、殺してくれ。

「ふざけてるんですかね？ どうして動けるのに動かないんですか？」

己の全存在を修羅という塊で砕かれ再構成されたメイル。そんな彼女から見れば、ただ誰かを望むのは人として下劣だと思えなかった。

助けを求めらるならなりふり構わずしがみつけ。

恵みを欲するならもつと哀れに媚びてみる。

救いを望むなら教会でご大層な祈りでも捧げている。

どうしても殺されたいなら——牙を剥いて殺しに来い。

「あそこに居た人の殆どが誰かが動くのだけを欲してました。自分が動くという選択肢が一切なかったんですよ」

「成程。確かに君の言う通りだメイル君。しかし、だからこそ私はあえてこう言おう——君は、随分と恵まれているようだ」

「え？」

メイルが疑問を浮かべるのも束の間、その肉のついた右手でグライダーが遙か遠くの空を指さした。

「断絶魔人戦線ノートン。この指の先、地平線を跨いだ向こう側のノートン帝国がそう呼ばれているのを知っているかい？」

「知らないですけど、それがどうして私が恵まれているという話にな

るんですか?」

「話は最後まで聞き給えメイル君。そこではね、今も尚魔族の侵入を阻むイシスの大結界を奪還すべく、日夜魔族と人族による絶え間ない戦いが続いている」

「だからそれが——」

「貧民街の者はね、その殆どが魔族によつて心を折られた者達なのだよ。いいや、正確には……勝てもしない戦争に人類の敗北を悟つた者と言つたほうがいいか」

メイルの言葉を遮つて、歩みを止めることなくグリイドは淡々と語る。だがその眼には小さな、だがその横顔に、メイルはドロドロに滾る憎悪の塊が浮かんでいるように見えた。

「君はクロナ・クロルキスがかつてノートンの地で『魔族殺し』として謳われていたということを知っているかい?」

「ええ、少しだけです但本人から聞きました」

その実力は宗司との死闘と、旅の間での軽い模擬戦で十分に堪能している。ちなみに、成長したメイルですら未だに一本も取れていない。限界を超えた見切りですら、巨人と人間のハーフであるクロナの強大な身体能力を埋めるには足りないのだ。

だがそれが今更どうしたというのだろうか。そんなメイルの疑問を知つてか知らずかグリイドは言葉を続ける。

「彼女は確かに人族側の戦士としては極限とも言える強者だ。だがね、彼女はあくまで巨人の——魔族側との混血であつたからこそ、純正の魔族に打ち勝つたのであつて、本来、エルフもドワーフもホビツトも、その他大勢の種族や我々ヒューマンを含めて下級の魔族すら打倒できるものではないのだよ」

魔族と人族。性能だけを比べた場合、魔族はあらゆる面で人族を上回る力を秘めている。

空を割り大地を砕く身体能力。可視化される程に膨大な密度の魔力。エルフに匹敵、あるいは凌駕する膨大な寿命。そもそも、レベル毎の成長率と最大レベルですら人族と魔族では雲泥の差がある。

個体数こそ少ないが、たつた一体の下級魔族ですら人族の精鋭を集



めてどうにか撃退できるかといった程だ。

「現状、イシス大結界のおかげで追加の魔族は来ていない。しかし大結界が張られる前にこちらに居た前線貴族と呼ばれる魔族達ですら、未だにクロナ・クロルキスが一体倒しただけで、未だに百体近くもの魔族が現役だ。しかも彼女が滅ぼしたのは前線に出てくる程度に下級の魔族だというのだから笑えん」

それがどう意味か分かるかな？　そう問われてもメイルは頭を振るしか出来ない。

「魔族側は我々へ攻勢に出ようとはしない。必死にイシスを取り戻して、もうすぐ効果が切れようとしている結界を補強しようとする人族を撃退し続けるだけだ。何故ならば北の大陸に居る魔族は……イシス周辺を奴隷国家として治める魔族を遥かに超える力を秘めた怪物ばかりらしい」

そして何よりも、そんな恐るべき魔族達を力で統率した恐るべき魔王、クラウディア・ザ・ウロボロス。

神に等しき力を秘めた魔王が結界超えた瞬間、人類は成す術なく敗北することになる。

「だが現状、攻め入るところか徐々に前線は押し込まれている始末だ。いたずら徒に兵士を失い、敗北と敗走を重ね、気まぐれな魔族の進軍であつという間に領土を取り返すどころか奪われる始末。それなのに、魔族を滅ぼせる強者は現れることなく……勝てるわけでもない相手と死を前提とした戦いを続けていく内に折れていく兵士は少なくなる」

その逃げ続けてきた末路に行き着くのが、メビウス王国を除き前線より最も遠いこの街、アバド流通街なのだ。

「だからこそ君は恵まれているのだよ。確実に迫る死を知らずに、這ってでも戦えと言えるのは地獄を知らないからだ。あのクロナ・クロルキスですら前線を捨ててここに居るのが何よりの証拠だよ……いいかいメイル君、自分の死ではなく種族の死を実感するというのは、想像を絶するものなのさ」

言葉通りに、これはどちらかが滅ぶまで行われる生存競争。そしてその生存競争に敗北すると分かった彼らは最早自分で動くことすら

出来なくなった。

種の敗北を受け入れた者達。

理性はおろか、本能が屈したことによる絶望は筆舌に難い。

だからそんな彼らを知らずに気に入らないと言ったメールが恵まれているのだとグリイドは突きつけたのだ。

「そしてそんな街でどうにか人の尊厳を保つべく私の部下達は日夜力を尽くしているんだ。ほら、辺りを見てくれ」

言われ、改めて周囲を見渡せば人々は苦しいながらも精一杯に人らしい営みを行っていた。

確かに彼らの殆どが現実に打ちのめされた者で、そこから這い上がってこうして働いているのであれば、それはきつと素晴らしいことなのだろう。

「とはいえ恥ずかしいことではあるが、現状では貧民街に居る者全てをどうこうするまでは出来ていないんだがね」

「……ふうん」

だがメールはさして関心を示さなかった。だからどうしたと言った風に視線を切ってグリイドの横を何とも言えない顔で歩くのみだ。

「おや、気を悪くしてしまったかな」

「いえ、まあ自分が恵まれているっていうのは事実です。それを指摘されて気分を悪くすることはないですよ」

本来なら成す術なく死ぬはずだったところを宗司に救われた。

しかし、奇跡的に彼の手によって救われ、その上生きるための力を手にすることも出来た。

それはグリイドの言うこととは違うとはいえ、恵まれているのは事実である。

「それに、私は彼らをどうこう言える程に世間を知っているわけではないです。そう考えれば私の発言は軽率でした」

そうは言うが、その言葉はあまりに空虚で軽薄だ。

経験不足という点では、あるいは宗司以上にメールはこの世界の人を知らないかもしれない。だからグリイドの言い分は聞き、反論もしない。

それと同じく、アバド流通街がどういったところなのかも  
どうでもいい。

だから反省もする。謝罪もする。しかし、心にまるで響かない。

メイルのその心境を察したのか。グリイドは関心の無さそうなメ  
イルの横顔を伺って、そつと微笑んだ。

「まああまり興味がないのであればそれはそれでいいさ。だがそうい  
うわけでね、ここまで言えばもう気付いていると思うが、私はこの街  
を治める町長のような立場の者なんだ」

「そんな貴方が、私みたいな子を招待してどうするおつもりで？」

「勿論それは——」

グリイドが足を止めた先、そこにはこの街で見た中で何よりも巨大  
な屋敷が建っていた。

見上げる程のその屋敷は、かつてメイルが住んでいた屋敷と同等以  
上。だがただの屋敷だったメイルの住処とは違い、この屋敷は見ただ  
けでも感じる魔術的防御が展開されており、さながら小さな城塞のよ  
うな印象を受けた。

そんな自慢の屋敷を背中にして、得意げな笑みを一つ浮かべたグ  
リードの一礼に合わせる形で、堅牢な城門の如き門がゆっくりと開い  
ていった。

「私の屋敷で、君の仲間にお話ししよう。改めてようこそ、メイル・リン  
クキヤット君」

## 第七話 『貴女はだあれ?』

初めから話すと少々ややこしい話になるのだが、昨今の情勢に疎い君達に諸々の事情を語っても意味は無いだろうから簡潔に話そうと思う。

実は先日、アバド流通街とノートン帝国を挟む形で建設された人族の絶対防衛戦の要、アイアス城塞が魔族の手によって奪われた。

人族の誇るあらゆる技術の粋を込めて作られたこの城塞が何故奪われたのかについての詳細は不明だが、奪われたというのは確実らしい。

——まあそれについてははつきり言つて問題ではない。いや、人類全体で見れば問題だが、それをどうにかするのが人族連合の役目だ。そも、我々でどうにかなる問題ではない。

さて、本題はここからだ。

実は数日前のことだが、私の部下が貧民街の一角で魔獣と遭遇したという情報を得た。

このご時世だ、別に魔獣の出現はそう珍しいことではない。

だが出現したのがある程度統率の取れた人型魔獣の群れだったんだ。

おや、眼つきが変わったねクロルキスさん。そう。君が懸念した通りだよ。

周辺で遭遇する魔獣は獣型の存在が多い。何故かという人型の魔獣は全て北のイシス周辺で魔族の配下として人族連合と戦っているからだ。

ああメール君もようやく事の重大さが分かったかい？

そうだ。人型の魔獣が現れたということはつまり、その魔獣を統率する魔族、あるいは高位の魔獣が近辺に居る可能性が高いということだ。

先程言ったアイアス城塞の占拠という情報から考えれば、城塞を占拠した魔族の配下がここまで手を伸ばしてきたと考えるべきである

う。

正直言つて私はこの情報を知った時、困り果てたものだ。確かに私の部下も十分な訓練を積んだ優秀な兵士ではあるが、それでも相手が相手であるからね。下手に突いて全面戦争が始まった場合、どのような想像が出来なかつた。

そんな時、魔族殺しとまで謳われた騎士、クロナ・クロルキスが仲間と共にここに來たと聞いたので、居ても経つても居られずこうして一席を設けたということだ。

嬉しいことに、クロルキスさんの仲間であるメイル君と、ソウジ君という男も、あのダンと互角に渡り合う素晴らしい実力者であるときた。

それでどうだろうか？

君達さえよければ、貧民街に巢食う魔獣の討伐を受けてはくれないだろうか？

無論、報酬は君達の言うだけ与えよう。

では私はこれで失礼するよ、私が居ては相談することも相談出来ないだろうからね。

色よい返事を、期待してるよ。

「分かりました。その依頼、このメイル・リンクキャットにお任せください！」

グライドの屋敷に数多くある部屋の一角。依頼内容を聞き終えたメイルは、特に迷いもせず答えていた。

「そうか、依頼を受けてくれるんだね」

現在では王族でも目に出来ないソファアに腰かけたグライドの対面で、同じくソファアに腰を下ろしたメイルが頷く。

「はい、私も腕試しの機会は欲しかったので願ったり叶ったりです」

「それは頼もしい。流石は魔族殺しの連れ合いだね」

「えっと、グライドさん。一つ質問なんですけど、その魔族殺しっていうのを詳しく聞かせていただけませんか？」

「おや？ 本人から聞かないのかね？」

「んー、あまり本人は話したがらないみたいでして。でもグリイドさんは知っているのでしよう？」

「まあ人並みにだがね。そうだな……巨人部隊とこのことを知っているかい？」

「えーつと……ごめんなさい」

「そうか……正式にはノートン帝国にかつて十八有ったという軍の第八軍なのだがね。巨人部隊というのは彼女が来るまではあくまで巨人の如き怪力自慢ばかりが集められた軍という意味で呼ばれていたのだが、彼女はその軍に属して獅子奮迅の活躍をして、巨人部隊の意味をクロナ・クロルキスの部隊という意味に変えてしまったのだよ。それほどに彼女は人族連合にとって期待の星だった」

今から五年程前のことになる。

十年前より始まった度重なる戦いに次ぐ戦いによってノートン帝国最北端の前線はいつ決壊してもおかしくなかった。

かつては十八あったノートン帝国自慢の軍も半数が無くなり、残りの半数へと吸収されることでどうにか軍としての形を保っているのみ。その他、援軍として各地より送られ続けている人族連合の兵士達も確実に当初の勢いを無くしていた。

それも、イシス大結界へと続く道が開けるどころか、徐々にだが確実に魔族によって領土を奪われていることも影響していたのだろう。今ほどではないが、誰もが色濃い疲労と小さくない絶望に心が折れそうになっていた。

そんな時に巨人部隊に加わったのがクロナであった。

彼女は巨人と人間のハーフという特殊な生まれのおかげか、巨人の膂力と人間の魔力という両方の特性を受け継いだ稀有なる存在であった。

当初は中級魔族でもある巨人族のハーフということで白い目で見られていたが、それも最前線で活躍するクロナの姿を見て一変。一年と経たずに人族連合でも噂される戦士の一人として名を上げた。

「そんな折、定期的に現れる魔族から人族連合の兵士を撤退させるために彼女が殿としてその場に残ったらしい……相手は下級魔族では

あったが、それでもレベルに換算して250を超えていたとのことだ」

下級とはいえ魔族の力は人族でエースと呼ばれる者の最大レベルを遥かに上回る。下級の魔族一体ですら、当時の人族も、そして現在の人族も太刀打ち出来ない災禍だった。

腕の一振りですぐに二桁以上の兵士が吹き飛ばす。

走るだけでその後には死体しか残らず、使う魔術は悲鳴と絶叫すらかき消した。

「先程も話したが、そんな怪物が今も人類圏には百体程、そして大結界の向こう側ではさらに強力な魔族が数えられない程に待ち構えている……いや、それは今関係ないね。ともあれ、彼女は人族が多大な犠牲を払ってどうにか撃退出来る相手と一人対峙して……勝利した」

「どんな、戦いだったんですか？」

「さて、彼女が殿だったからね、詳細を知る者はそれこそ本人しかいないだろう……ただ、撤退する兵士達は、どんなに離れても響き続ける轟音を聞いていたようだよ。まるで天変地異でも起きたかのようなだったらしい」

「……そうですか」

メイルが知るクロナの戦いは、宗司との一戦のみだ。最早、鉄塊としか呼べない両手剣を豪快に振りまわす力強さに、魔術で遠距離攻撃も行う繊細さを兼ね揃えた生粋の騎士。メイル自身も彼女との模擬戦でその実力の一端は感じとっていた。

だが果たしてそれが本当に彼女の實力だったのだろうか？ 宗司との一戦は死闘と呼ぶに相応しい戦いではあった。しかし、前線より逃げるようにして後方に下がった彼女が本当に全ての力を出し尽くせたのか？

魔族殺し。

唯一無二の称号を持つ彼女は本当に、宗司が見た通りの正道を行くだけの者なのか？

「戦いの過程は分からないが、彼女は勝った。それは魔族殺しの称号が示す通りの事実だ……そして、その称号が彼女を追い詰めることに

なっただんたろうね」

「称号が追い詰めたのですか?」

「ああ。およそ人の抗しえない恐るべき魔族を滅ぼした人族の希望。だがねメール君、彼女は人族では最強だったかもしれないが……彼女が倒したのは下級魔族、魔族の尖兵にすぎなかつたんだ」

その後、クロナの出る戦場に現れる魔族は中級以上の魔族が良く確認されるようになった。レベルにして300を超える真正銘の怪物達。それでも歯を食いしばり戦う彼女を失わないために、共に殿として残った兵士がその命を次々に散らせていく。

魔族を倒せる唯一の希望。人族に残された最後の力。種としての生存をクロナに託して消えていく兵士。

だがどんなに足掻いても、下級ですら死闘を繰り広げる程度の実力しかないクロナが中級以上の魔族を滅ぼせるだろうか。

「憶測だがね。彼女はそんな彼らの期待に耐えられなくなったのだろう。そうして彼女は前線より逃げ出し、彼女という希望を失った人族連合は再び絶望に身を投じる……おかげでここ数年でアバド流通街に流れ着く元兵士の数も増えたよ」

そう語り終えたグライドは目の前のテーブルに置かれたグラスを手に取り、中の酒を一気に飲み干した。

「だが、いつまでも逃げ続けることは出来ない。ここに居る者も、そして彼女もね」

「……私には、よくわかりません。戦う相手が居るなら戦えばいいだけじゃないですか」

「やはり君は恵まれているな、メール君」

「皮肉ですか?」

「まさか。むしろ期待しているのだよ。もしかしたらそういう環境で育まれた君こそが、この街に巢食う袋小路の人族を何とかするのはないかとね」

「私は、私以外にどうでもいいです」

「素晴らしいな。尚のこと君が気に入った。クロナ・クロルキスがこの依頼を受ける受けないに関わらず、今回の依頼、私は君に賭けてみ



たいと思うよ」

ではまた明日。楽しみにしているよ。

そんなグライドの言葉を最後に、メイルは一礼をすると振り返ることなく部屋を後にした。

クロナすらも入れるグライドの屋敷で、使用人の案内でどうにかクロナの居る巨人用として用意された客室にメイルは到着した。

そこにある家具はいずれも人間からするとあまりにも巨大だ。

まるで自分が小人にでもなったような気分を味わいながら、メイルはクロナの座る椅子の前のテーブルに乗って、神妙な顔で考え込むクロナを見上げた。

「つてな感じで私はこの依頼を受けることにしたんですけど」

「……魔獣の群れ、か」

「クロナさんは気が乗らないんですか？」

「いや、そういうわけではないのだが……」

そう言って、悔恨するようにクロナはかつての記憶を語り始めた。

それは、かつて戦い続けた前線の記憶。

来る日も来る日も迫る魔獣を薙ぎ払い続け、どうにか前進した先でたった数体の魔族によって撤退を繰り返す日々。

それでも人族連合はイシスの大結界を取り戻すために前へと進み続けるしかなかった。北の大陸から魔族の増援が来てしまえば、半年もしない内に人類は全滅する。いや、現在南の大陸に点在する魔族が本腰を入れて進軍を始めれば人族連合は容易く瓦解してしまう。

そんな地獄だった。その中でクロナは殿として魔族との決闘を行い勝利したことで、人族連合の希望の御旗として担ぎ上げられたことがあった。

「……苦い記憶だよ」

自嘲するように唇を引き攣らせるクロナをメイルは黙して見上げ

る。

「本当は戦っている誰もが分かっていたんだ。どんなに頑張っても、命を投げ打つても、人に待ち受けているのは滅びの未来だということをおね。だが彼らはそんな自分を誤魔化すように私を持ち上げた。そして私もまた自分の諦めを誤魔化すためにいつそう前線で戦い続けたよ」

だが疲れた。

戦い、進み、現れた魔族を抑える殿として戦い、共に残った兵士を犠牲にして辛くも敗走し、ボロボロの自分を魔族を食い止め生き続ける英雄だと囃し立てられる日々。

終わらない。

終われない。

出口は何処だ？

この戦いは、破滅するまで止まれないのか？

「だから逃げたんですか」

そんなクロナの悔恨を、メイルは責めるでも同情するでもなく、淡々とクロナに問いかけていた。

不躰な言い方だったが、クロナは不愉快になることはない。事実として、彼女はその逃避行の結果、メイルの知り合い達を犯し、殺した傭兵の仲間を身落としたのだから。

いや、そうでなくともメイルを責める気など起きなかつただろう。

クロナは逃げた。目を背けて、逃げるしかなかった。

「逃げた、か。そうだな。私はきつと逃げたんだと思う。責任からも、戦いからも……そんな私が今更魔獣と魔族の討伐に向くなどとは、な」

「嫌なら断つてもいいんじゃないですか？ 後は私とソウジさんで勝手にやりますけど」

「いや……大丈夫だ。私もいつまでも逃げているわけにはいかないからな」

これもある意味では運命なのかもしれない。

そう自分に言い聞かせるクロナに「そうですか」と一言返事したメ

イルは「ところで、クロナさんが戦った下級魔族はどういう人だったんですか？」と単純な好奇心で聞いてきた。

その問いにクロナは数秒言葉を詰まらせる。彼女をして死闘というに相応しい戦いを思い出して耽っているのか。

あるいは言葉に出来ない理由があるのか。

「……相手は、おそらく私の先祖にあたる巨人の男だった」

暫くして重い口を開いたクロナは、メイルを見るでもなく遠くに視線を向けながら語り始めた。

「魔族らしい魔族と言えばいいのか。奴らは基本的に強敵と戦うことを望んでいる節があつてな。何故奴等が積極的に人族との戦いに介入しないのかというと、人族程度の弱者を相手にするのはつまらないからという理由なんだ」

「へえ、なんだかそれだけ聞くとソウジさんみたいですな」

「確かにな。あるいはより純粹に闘争というものに重きを置いた種族と言うべきか……さておき、私が戦った巨人もそう言う類の奴でな。人族の殿として残った私以外は気にも留めず、純粹に戦いを楽しんでいるようだった」

思い返せば、圧倒されるだけの戦いだったとクロナは語る。

宗司のように研ぎ澄まされた技に翻弄されるのは違う。単純な性能の差、純粹魔族の秘めた身体能力はクロナですら防戦に回るのが手一杯というレベルのものだった。

「そのうえ、技量の上でもほぼ互角だった。そうなれば後は身体能力の差で追い詰められるばかりでな……今思い返しても、恐ろしい」

「だけど、クロナさんは勝ったんですね？」

「勝った、か」

クロナは自嘲の笑みを浮かべると再度言葉を詰まらせた。

何故言葉に詰まるのか。『魔族殺し』としていう誇るべき二つ名を持つ彼女が語れないようなことなのか。

「私は……いや、これもまた迷い、か。悪い癖だな、いつだって私は迷っている。」

「あの、生意気な言い方ですけど、クロナさんはちよつとばかり迷います」

ぎですよ。ここいらで一つぼつさり全部斬り捨ててこれからどうするのかを決めたほうがいいです」

「そういう君には迷いはないのかい？」

これ幸いと話をすり替えてきたクロナの機微も知らず、メイルは僅か首を傾げて小さく唸った。

「迷い、ですか……」

言われてみて、メイルふと考える。

聖域で宗司を召喚してからここまで、様々な経験を経てここに自分は立っている。その過程、身に着けた経験の意味。

導き出される答えと迷い。

「私は、恐いです」

「怖い？」

「はい、今がいつまで続くんだらうって思うと、恐いんです」

「……そうか」

意外にも思春期によくある悩みだとクロナは思う。

だがクロナは既に知っている。メイル・リンクキャットが年相応の悩みを抱くようなまともな人間ではないことを。

そんなクロナの内心を知らずに、メイルもまた自分の悩みを口にする。

「ソウジさんに剣術を教えてもらって、クロナさんの美味しいごはんを食べながら、三人で笑いあって旅をする。出来ればいつまでも続いてほしいですし、続けたいと願っています」

だが予感があるのだ。

メイルの——芽吹き、花を咲かせようとしている修羅の蕾が感じていた。

「ねえクロナさん。この旅は楽しいですか？」

「ん？ ……ああ、そうだな。色々と言いたいことはあるが、楽しいと言えるはずだ」

「えへへ、私も楽しいです。だってクロナさんとソウジさんが大好きですから」

彼ら二人は、メイルにとって血の繋がらない家族だ。師匠である前

に、兄であり姉でもある。

決して長いとは言えない間の旅であったが、聖域という狭い世界しか知らなかったメールには、彼らこそ無二の存在に違いなかった。

だからこそ、確信があった。

「だけど、私達は殺し合います」

その言葉を、込められた確信こそ、かつて宗司が言っていた言葉と同じであった。

いずれ自分を殺させるのだと、宗司は言った。

あの男はそう言つて、メールはそういう存在になるのだと信じている。

しかし、待つてほしい。

一つだけ訂正しなければならぬことがある。

だからクロナは何を馬鹿などメールの言葉を聞いて思っていた。

「待て、待つてくれメール……こう言つてはアレだが、君達が殺し合うのは百歩譲つて分かる。だが……何故私までもが、君達と殺し合わなければならぬ？」

あの夜の日、クロナは恐るべき三人の修羅と自分の間に引かれた明確な線を実感した。

彼らと自分は違う。戦いという螺旋に疑いもせず飛び込む彼らと、迷うばかりで常に間違える自分は違う存在でしかない。

そんな自分がメールと宗司を相手に殺し合う、だと？

「私は、違う」

お前らとは。

「私は、君達のような」

お前らみたいな――。

「私は、私は……！」

「私は人間。貴女はだあれ？」

メールは動揺を露わにするクロナに妖艶に笑いかけた。

グライドの話を聞いて、そして、こうしてクロナの口から本人の話を聞いて、確信する。

自分は人間。

貴女は迷って。

人と誰かが、ここに居た。

「私達を否定すること以上の理由が、殺し合いに必要ですか？」

いずれきつと、必ずどこかで。

その迷いが晴れた時こそ、私達の旅の終わり。

「ソウジさんは期待してないとか言っていましたけど……私は信じてますからね、クロナさん。大好きですよ」

## 第八話 『魔族、襲来』

翌日、朝食も早々にクロナとメイルの二人は屋敷の中庭でグライドのその護衛の兵士達と相對していた。

残念ながら宗司については今だダンの下から動けずにいるらしい。よって、今回の依頼はクロナとメイルの二人が参加することとなっていた。

だが当然と言えば当然なことに、二人以外にもそれなりに腕が立つ傭兵たちが複数その場には居た。

数にしておよそ百前後、グライド直属の兵士も混ざっているので、質的には問題はないはずだ。

だがそれでも相手が武装した魔族となれば楽観は出来ない。誰もが真剣な表情で壇上に立ったグライドを見ていた。

そんな彼らの視線を一身に受けながら全く動じた様子も見せず、グライドは軽く咳き込むと、メイル達に思いの外よく響く声で話し始めた。

「さて諸君、まずは集まってくれたことに感謝させてほしい。本当にありがとう。ここに居る者達は、アバド流通街では数少ない、戦う意志を秘めた戦士だ。そんな君達ならば此度の魔獣達の件を必ず解決してくれると信じている……だがその前に、まずは現状で知り得た情報を聞いてほしい」

そう言つて、グライドが投影魔術を使つて虚空に巨大な地図を描き出した。それはこのアバド流通街の詳細な地図である。グライドはその地図を用いて説明を始めた。

「魔獣が発見されたのは貧民街の外れ。つい最近新たに作られた貧民達の住居の一角だ。そこで武装された魔獣、オークとゴブリンが発見されたらしい」

オークとゴブリン。両者ともに魔獣としては珍しい部類ではない。それどころかゴブリンに至っては野良でも良く発見されており、時折人里で乱暴を行うことから魔獣というより害獣扱いをされていた。

そしてオークだが、動きは鈍く知能も低いものの、人よりも優れたタフネスと膂力で前線でも尖兵としてよく見受けられる魔獣だ。

どちらも野良で発見された場合は武装した兵士であしらえる程度の力しか持たない。だが一度武装を施されある程度の訓練を積ませると、たちまち苦戦を強いられる恐ろしい難敵と豹変する。最下級魔族と呼ばれているが、その実力は決して油断出来るものではなかった。

「そして——彼らを指揮する魔族の可能性も考慮してくれ」

グライドのもたらした情報に小さくないざわめきが傭兵たちの間に伝播した。

無理もない。ここに集まった者達は、貧民街で助けられるのを待つだけの敗残者よりマシとはいえ、彼らも終わらぬ戦いと魔族の恐ろしさに逃げてきたことには変わらない。

そんな彼らの動揺を受けてグライドは落ち着かせるように声を張り上げた。

「待つてくれ皆。これはあくまで可能性の話でしかない。諸々の事情から考えて出た最悪の結論というだけで決まったわけではない。だが、覚悟だけはしてほしいという話なんだ」

グライドの言葉に動揺が鎮まる。それでもその可能性を知った傭兵たちの表情はこれまで以上に緊張の色が滲み出していた。

「だが安心してほしい。仮に魔族が出てきたとしても、我々には彼女が居る」

そこでグライドは彼らを安心させるために、傭兵たちの背後に立っていたクロナに向けて両腕を広げてみせた。

「知っている者は多いと思うが改めてこちらから紹介させてほしい。五年前に下級魔族との一騎打ちを制した生きる伝説、クロナ・クロルキスだ」

先程のどよめきとは違う明るさの伴った喧騒がその場を静かに満たす。中には本物なのかと疑う者もいたが、それもごく僅かだ。

ほとんどが期待の眼差しでクロナを見上げている。

最早、重圧とも呼べるその眼差しは向けられていないメイルですら



感じ取れる程。

メイルはクロナが前線より逃げ出した理由が理解出来ないが、少なくともこの期待が気持ち悪いものだということとはよくわかった。

ああ確かに、これに晒され続けて勝手に死なれるのは、吐き気がする。

そんな視線の中、クロナは一度視線を落として目を閉じた。だがそれも数秒、覚悟を決めた表情で真っ直ぐに傭兵たちを見渡して、腰に差した鞘より肉厚の両手剣を引き抜いて空へとかざした。

さながら絵画に描かれる英雄の如き所作に傭兵たちの士気が上がっていくのが分かる。そんな彼らへ向けてクロナは歌うように告げた。

「魔族殺しのクロナ・クロルキスだ。諸事情があつて今まで前線より離れていたが、今日、この日を以て再び戦いの場に赴こう！ 今日はその前哨戦だ、我らが剣で魔獣達にその威を示せ！」

宣誓が終わると、傭兵たちの歓喜の声上がるのは同時だった。

「クロナ！ 我らが英雄クロナが帰ってきた！」

「英雄クロナ・クロルキスの帰還だ！ この戦い、俺達なら勝てるぞ！」

「うおおおおお！ 俺はやるぞ！ 伝説と一緒にやってやるぞおおお！」  
一気に色めき立つ傭兵たちが口々にクロナを讃え、戦意を増している。

グライドに扇動される形とはいえ、こうなれば最早クロナも後に引けないのだろう。いや、あるいは先日メイルと話した通り、逃げることを止めて覚悟が決まったのか。

クロナという旗印があれば傭兵たちは力の限り戦うことだろう。今やその戦意は前線の兵士達より高いものとなっている。

戦えるのだ。

今ならば胸を張って、強く荒々しく戦えるのだと、誰もが目を輝かせていて。

「気持ち悪いなあ」

誰かを理由にしなければ戦えない。  
そんな彼らを、メイルは冷めた眼差しで見続けるのであった。

あの日を境に、私の人生は大きく変わった。  
戦うために戦っていた日々の中、やり方はどうあれ魔族を殺した私に、彼らの眼に希望が宿ったのだ。

希望という光。

魔族殺しという証を背負った私を見れば、他者の眼に輝きが灯る。  
一つ一つの明かりは小さなものだ。吹けば容易く消えてしまい、放つておいても無くなる程度のささやかな光。

だがそれが十、百、千と多くなるにつれて、照らすには大きすぎるこの身を鮮明に暴き立てる。

——止めてくれ。

その光から目を背けるように前を向いて剣を振るう。

振るった後に誰かの輝きが何処かで消える。私の身体は大きいけれど、小さな全てを守れる程には大きくない。

だが彼らは希望を絶やささない。しかしそれは希望という言葉が示す前向きな意味合いが込められているわけではなかった。

種族としての絶滅。自身の死を超越した絶望から逃れるために、彼らは死んでも希望にしがみついた。

——止めてくれ。

これまで、多大な犠牲を払ってようやく撃退するしか出来なかった魔族を決闘で打倒した私こそが、魔族に占領されたイシス周辺の土地を奪還する勇者なのだ。

そんな私を慕って様々な者が訪れてきた。

私の活躍で生きながらえた兵士——死んだ。

私の武勇伝を聞いて武器を手にとった少年——死んだ。

私のおかげで半魔の身を誇るようになった女性——死んだ。

私が誇らしいと戦いに加わった巨人の血を受け継ぐ戦士達——死

んだ。

私こそが勇者だと勲章を授けて未来を託してくれた將軍——死んだ。

私を勇者と呼んだ幼子達——死んだ。

死んだ。誰も彼も、魔獣との戦いで、襲撃で、あるいは私が殺した魔族よりも強い魔族から私を逃がすために。

——止めてくれ。

——もう、止めてくれ。

私は皆が思うような素晴らしい騎士ではない。

そんな風に眩い輝きを向けられ、あるいは希望を託される程に強い人ではない。

だから私は逃げたのだ。死んでいった者へ、信じてくれる者へ、唯一の真実すら告げることも出来ずに私は竦み、耐えられず無様に前線から消えた。

その後、風の噂で私が戦いの最中に負傷して現在とはある場所で療養中であると聞いた時は、恐くなった。

——もういいだろう。

——私にこれ以上期待しないでくれ。

逃げた。ひたすらに逃げ続けた。

だがいつまでも付きまとう魔族殺しという名。大きすぎる身体が災いして、誰もが私を見て『もしかして』と思うのだ。

だからもつと遠くへ。私のことなど知らない場所へ。

そして遂に私は遙か南の地で盗賊まがいのことをしていた者達に拾われ、そのままメビウス王国へとたどり着いた。

そこで私はこれまでの逃げ続けた人生にトドメを刺す死神と出会った。

ソージ。

恐るべき剣客。生身で私を下し、万軍を打倒する聖剣すら斬り伏せた修羅。

彼との出会いを経て、私は今こうしてここに居る。

そして再び、クロナ・クロルキスとして希望の光を浴びている。

——止めてくれ。

覚悟が決まったというのに、未だ、心の奥で弱くて醜い私が叫んでいた。

だがもう分かっているはずだ。

メビウス王国は王都が滅び、アイアス城塞が落とされた。

最早、逃げる場所は何処にもない。

故に私は剣を手に前を進む。あの日々と同じく眩しい眼差しに背<sup>目</sup>中<sup>を</sup>を見せて。

戦え。

戦って、戦って。

ああ、それでどうする？

答えは見えず、私は変わらず、流されたままだ。

だが戦おうとしているのはきつと——。

「じゃあ、敵を引っ張り出してきますね」

メールの言葉に我に返った私は「ああ、頼んだ」とこの場で私同様に異彩を放つメールへと返事をした。

旅に耐えられるよう縫い直したとはいえ、武闘会よりも舞踏会が似合うドレスの如き衣装を着て、背中に美しい白銀の剣、聖剣チートを携えたメールはある意味私よりも目立っている。

そんな彼女をここに来る道中で訝しむ傭兵は居たが、私の仲間だと言えば納得した様子を見せ、気付けば魔獣を引っ張り出す先遣部隊の隊長としてメールは任命されていた。

だがメールに気負った様子はない。私程ではないが活躍を期待する傭兵の視線を受けているというのに、その視線など眼中にすらない様子だった。

「クロナさん、大丈夫ですか？」

「すまない。柄にもなく緊張しているようだ」

「止めてくださいよ。緊張のせいであっさり殺されましたとか嫌ですからね私」

からかうようなメールの言葉が私の緊張を解きほぐす。改めて「すまない」と告げて私は抜刀した。

「もう大丈夫だ。私はここで本隊と敵を待つ。上手く誘い出してくれよう。」

「ええ、任せてくださいよ、クロナさん」

まるで散歩に行くような気軽さだった。そしてメイルは腰に差し込んだ鞘から奇妙な装飾を施された二股の剣を抜いて振り返ることなく走り出す。

遅れてその後に付いて行った傭兵達を眺めながら、私は周囲の傭兵に感づかれないようゆっくりと深呼吸を繰り返した。

さあ、久しぶりの戦いだ。

いや、戦いだけならばアポロン山脈やソージとの死闘。そして道中の試合で行っているが、魔獣との、そして魔族殺しとしての私を知っている者との戦いは久しぶりだ。

もう逃げられないから戦うしかない。

戦って、理由はまだ分からないけど、戦うのだ。

それで、どうやって――。

「クロルキスさん！」

思考の海に落ちかけていた私を傭兵の声が引き上げた。

耳を澄ませば聞こえてくる剣戟の奏でる戦いの音色。入り混じった人と魔獣の叫び声が戦いの始まりを知らせていた。

始まった。

覚悟を決めろ――出来ていない――。

今は迷ってなどいられない――迷いが晴れない――。

それでも。

それでもと剣を強く握り締め。

「うるあああああ!!!」

世界全てを震わせるかの如き咆哮と共に戦場と化していた貧民街の一角が爆発した。

轟音を奏でて無数の家屋が吹き飛ぶ。粉塵に紛れて千々と空へ消えていく残骸に紛れて、魔獣と傭兵の血肉と骨が混じったものが幾つも舞っていた。

その一部が遠く待機していた私の手前にベチヨリと不快な音をた

てて落ちる。「ひっ」と声をあげた傭兵が見たのは、着ていた皮鎧ごとミンチになった傭兵の残骸。

「まさかッ……！」

私は幾度と繰り返される爆発と咆哮を聞いて目を剥いた。そして、傭兵達も災厄に見舞われた戦場に居る存在を思い描いて顔を青ざめさせる。

家屋を纏めて吹き飛ばすような一撃を幾度と繰り返す恐るべき敵。それは最早、魔獣の域に非ず。

人族の英雄を纏めて塵芥とする怪異。人知を超えた、魔なる者。

確実に迫りつつある爆音がとうとう私達の姿を隠していた家屋を吹き飛ばして、その威容を露わにした。

「魔族……！」

「ああ？ オイオイ、こんなところにもまだ獲物が居たのかよ！」

傲岸不遜を体現したようなそれは、全長こそ私程ではないが、それでも一般的な兵士と比べて倍の体軀。

筋骨隆々とした赤色の肉体に纏うのは下履きらしきものを一枚だけ。さながら自身の肉体こそが最強の鎧だと誇示しながら、右手と左手に私の腕と同じ太さと長さの鉄塊を掴んで雄々しく立っていた。

そして、その足元には片膝をついた――。

「メエエエイル！」

「ハハッ！ いいねえ、次はテメエが相手かよデカブツの女あー！」

今にも倒れかけのマイルの名をクロナが叫ぶ。その気迫を感じて二本角の男が手にした棍棒を構え直した。

その男こそ、魔族、オーガ。身体能力という点では巨人族すら凌駕すると言われる恐るべき鬼の血族の戦士。かつての戦場で幾度も辛酸を舐めさせられた鬼の戦士の一人が辺境の地に君臨したのだった。

## 第九話 『メール、はりきる』

話は数分程前に戻る。

「へへ、頼んだぜメールの嬢ちゃん」

「クロルキスの仲間だって？ その腕、期待してるぜ」

「なあに、何があってもクロルキスが居れば何とかなるさ」

クロナを置いて走り出した先遣隊の傭兵達の言葉の情けなさに顔が歪みそうになるのをメールはグツと堪える。

走れば一分もしない先に感じる複数の気配。他に貧民街の住民が見つからないことから、この一帯の住民はきつとこの気配の者達に殺されたのだろう。

故にここは戦場。宗司と違って未熟である自負があるメールには、彼が居ない戦場に余裕などない。

簡単に殺され、簡単に殺す。

聖剣も使えない今、メールに残されたのは積み重ねた経験のみ。

「おっ、余裕だね」

知らず笑みを象ったメールを見て傭兵が茶化すように言うが、もうメールには彼らのことなど頭になかった。

余裕からではない。

いつだって手一杯か、手に余る戦いだった。

だから笑うのだ。

たったそれだけのことを、どうしてこの人達は分からないのか。

ささやかな疑問すら彼方に放りだして、傭兵達を置き去りにする形でメールは気配の元へと先行する。

「お、おい!？」

メールを止めようとする傭兵は無視。崩れかけの家屋が並ぶ道を走り抜けたメールは、強化の魔術で増幅した身体能力のまま一足飛びで家屋へ飛び乗った。

一瞬、眼下を見下ろす。そこに居たのは緑色をした幼子程度の小さな魔獣ゴブリンと、分厚い脂肪と筋肉で覆われた醜悪な顔の魔獣オー

クの群れ。

笑みが濃くなる。

剣を掴む手が熱くなる。

「見いつけたあ……！」

戦いの予感に高鳴る心臓が赴くままに。

メイルは集まっていたゴブリンとオークの群れのだ真ん中に飛び降りた。

「■■っ!？」

「■■■■ッ!!」

「ハハッ！ 遅いなあ！」

突如現れた人間に動揺するゴブリンとオーク。メイルはその動揺に突き入れる形で剣の切っ先を手近なゴブリンの首へと突き刺した。

さらに引き抜く勢いで背後のオークの腹を両断。その出っ張った腹より顔面と同じく汚い臓腑が溢れる間に周囲の魔獣を怒涛と切断。

僅か数秒の殺戮舞踏。

御捻り代わりに血の雨を喝采と受けて、ようやく状況を理解して武器を構えた魔獣達へメイルは躊躇いなく踏み込んだ。

その眼に映るのはこれより放たれる魔獣達の動きの軌跡。滂沱と視界を染め上げる死線の数々の間を縫う形で全てを回避する。

斬られる前に敵の全てを避け、逸らし、そして斬る。

単純明快でありながら理解不能な見切りの妙技が魔獣達を撫で斬りし、その命を盛大に散らせた。

「■■■■っ!？」

「■■っ！ ■■■!?!？」

幾ら知性に乏しいとはいえ、この異常事態に魔獣達を動揺が襲った。

しかし、動揺に体を硬直させれば死の結実。違えず魔獣達の急所を一撃で斬り、貫き、絶命の未来へと確定させるメイルの顔には変わらぬ笑みが一つ。

「あははっ！ これじゃあただの試し斬りじゃあないですか!？」

快刀乱麻を断つ。傭兵達が合流するまでの十秒程度の時間で魔獣



達の二割がメイルの凶刃に倒れた。

その勢い傭兵達すら動きを止めて魅入る程の凄まじさ。これまで見た何よりも流麗な太刀筋は、美しき乙女という素材と相まって一種の芸術のようであった。

「ツ……お、俺達もやるぞー！」

「お、おうー！」

とはいえいつまでも見つめているわけではない。メイルが半数を血の海に沈めたあたりでようやく動き出した傭兵達。

メイル一人で半壊したところに傭兵が加われば戦いは決着したのも同義だ。そしてようやく戦い始めようとした傭兵達とメイルによつて戦意を失った魔獣達の戦いが始まる。

「……つまんないや」

思つたよりも大したことがない戦いだつた。

後は全て傭兵に任せてもどうにかなるだろう。稚拙な戦いをする彼らを尻目にメイルは一人離脱しようとして——突如魔獣と傭兵が入り混じる戦場の前にあつた家屋より膨れ上がる気配を察してその場を飛び退いた。

「うるああああああ!!!」

瞬間、家屋もろとも傭兵と魔獣がはじけ飛ぶ。

あまりの威力に痛みはおろか状況すら理解出来ずにその場の半数が一瞬で絶命した。

突然のことに魔獣も人も動きを止める。その中で動いたのは、爆発より歩き出した影と、歓喜の色を瞳に浮かべたメイルのみ。

「あああああああ！ つたくよお、人が折角気持ち良く寝てるつてのにキンキンキンキンとうっせえなあ！ ただでさえめんどくせえ任務だつてんだからせめてぐっすり眠らせてくれよなあ!？」

現れたのは分厚い男であつた。

腕が太い。足が太い。首が太い。存在すらも太い。幾重にも束ねられた鋼鉄のような厚みを感じる赤い肌の男が、ゴキゴキと首を鳴らしながら啞然とする魔獣と傭兵を見下す。

額より鋭く伸びた二本の角は強き男の象徴であつた。事実、彼は闘

争を日常とする種族の中でなお、戦士と呼ばれる英傑。

魔獣と人族などはどちらも木端にしか見えない。彼が生命体として認識するのは己を害する強き戦士のみ。

「まあでもばれたら仕方ねえ。隊長はなるべく秘密裏にやれって言うてたが、ホント、仕方ねえよなあ?」

だが木端とはいえ敵は敵。有象無象であれ戦えるならばそれこそ本能。

「俺はオーガ族が誇り高きガの一人! リグ・ガ・ギガ!」

両手に家の支柱よりも分厚い棍棒を二本構えて宣誓する。

「名を上げてえならかかってこいやあ!」

魔族、オーガ。

レベルに換算して300に迫る怪物の登場。

それが意味することは、抗えぬ死に他ならず――。

「う、うわああああ!!?」

「ひいひいひい!!」

「■■■■つ!」

「■■! ■■■! ■■■■■ああああ!!?」

魔獣と人族。いずれもゴミとしか見ない超越者の殺気を間近に浴びて戦意を保てる者はいない。

傭兵は刻みこまれた種族滅亡の恐怖に負けて。

魔獣は単純に生存本能を駆り立てられて。

どちらも膨大な殺気を受けて、我先とばかりに逃げ出した。

「あ? オイ! テメエらそれでも人族のガかよ! って魔獣共もかあ!」

そのあまりにも情けない姿にリグは一瞬呆気にとられるが、すぐにその鋭い牙の生えた口を壮絶な笑みに変えると。

「それなら、いいさ」

右手が一回り以上隆起する。溢れる魔力がその筋肉をさらに強化することで、その振り上げた右腕に明確な殺戮のイメージを連想させた。

振り上げて、振り下ろす。

単純明快な破壊の渾身に、これだけの意志を乗せられるからこそ、魔族。

どんなに逃げてでも無駄なのだど悟らせるからこそ種族の死。

「まとめて死ねや」

上級スキル『メテオブレイク』。

振り下ろされた棍棒より発生した破壊の乱気流が周囲一帯の家屋もろとも魔獣と傭兵を肉と骨と武器の混ざった生ゴミへと作り変えた。

「ハア……こんななら最初からまとめてぶつ殺せば良かったぜ」

オーガらしい単純明快な思考だ。溜まったゴミを捨てたような爽快感にリグは気分よく鼻を鳴らしながらゆっくりと背後に振り返った。

「で、お嬢ちゃんはどうすんだい？」

「どうする、ですって？」

そこには、たった一つの狂気が立っていた。

これまで様々な強さを魅せられてきた。

宗司の技。

クロナの強さ。

アポロン山脈では手段の恐ろしさ。

だがリグのそれはいずれとも違う。

魔族という化け物の力。

クロナのソレとも違う単純明快な力という強さの塊。

これが魔族。

人族にとつての死神。行ける災禍。殺戮兵士。

だからメイルは笑った。

「そんなの二つに決まってるじゃないですか」

体が歓喜に震える。心臓が早鐘を打ち、血流が加速する。

一方、熱くなる体と逆に心は加速的に冷えていっていた。

死線が引かれている。

見切りではどうにもならない能力の差が、明確な死のイメージをメイルに叩きつける。

なまじ敵の強さが充分分かるため、メイルがリグに感じる死の恐怖は逃げた魔獣や傭兵を遥かに凌ぐものだった。

だが笑う。

笑って、剣を構えて。

「私は新米剣士、メイル・リンクキャット……貴方の敵だ」

宣誓には絶対の確信を。

お前を斬ると、確信だけを信仰して。

「ハハッ！ こりや嬉しいねえ！ まさか前線から逃げたカスしかいねえと場所で、こんな良いガの女とやりあえるなんざなあ!？」

リグもまた小さくも勇ましく戦士の登場に、全身で喜びを露わにした。

だがそこにメイルを見た目で侮るような隙は無い。

強さ、弱さではない。

消し飛ばす木端か、全霊を賭して殺す戦士か。

魔族にとってそれだけの話。

そしてメイルはまさしく戦士に相応しい気概のある女だった。

「この辺境で出会えた勇ましくガの女、メイル・リンクキャット！ 気概だけのガじゃねえところを見せてみな!？」

「ええ、そうね——リグ・ガ・ギガ」

刹那のことだった。

先程までメイルの体を強化していた魔術が消えるのと同時、メイルがリグの視界より消える。

それは強化の魔術で無駄に膨れ上がった身体能力では使えなかった繊細な技の粋。

宗司直伝の歩法によりリグの懐まで潜り込んだメイルが、鋭い袈裟切りを放った。

「オオ!？」

半ば直感で棍棒を軌跡の間に合わせたリグは、鋭い斬撃に驚愕の声を張り上げた。

「まずは一手、つてところかな?」

「ハッ、面白れえ！ 気概も力も！ 俺らに殺される最高の糞袋じゃ

ねえか!？」

その一撃はリグの中——魔族として、人間を殺戮するという本能を刺激するには充分だった。

殺すべき怨敵。魔王が憎み、殲滅すべきと祈り続けた人間。

「殺してやらあー！」

その他一切の感情を削いだ純粹なる殺意を二振りの棍棒に乗せて、リグは薄らと冷たい笑みを浮かべるメールへ果敢と踏み出した。

剛剣が一瞬前までメールが居た場所を拭き飛ばす。風圧だけで崩れた瓦礫が再び吹き飛ばされる程の破壊力だ。

強化魔術を解除した今の状態で掠りでもすればその時点で絶命は必至。だがレベルに換算して限界値である100を超えた今のメールの見切りは、その危険水域すら完全に読み切っていた。

それどころか宗司の歩法によって相手の視界から消え去ってみせる。速度ではなく生物故に逃れられない反射を逆手に取った妙技。宗司レベルではないがリグ相手にも充分通用する技を以て次の一手。

風となつて流れに紛れ、意志ある紫電で敵手を穿つ。

「っー！」

いつの間にかリグの背後へ回り込んだメールが刺突を放つ。膝裏の関節を狙った一撃は過たずリグの皮膚へと突き立ち——皮一枚を裂いたところで弾かれた。

「ッ!？」

「はっはー! しばしっこくても火力がなけりやあなあ!？」

最初の印象通り、鉄を幾重にも重ね合わせたかのような耐久力だ。だというのに、痛痒を微塵も感じさせないリグの動きは見た目以上に素早く機敏。

膝裏の刺突を受けるのと振り返りながら棍棒を振るうのは同時だった。

「受けな! 『スラツシュ』！」

後方に退いて逃れようとするメールを、薙ぎ払われた棍棒の軌道に沿って見えない斬撃が襲う。空間に描かれる死の光景。受ければ受けた腕ごと体が千切れ飛ぶ。

ならば逆らわない。

メイルはスラツシユで放たれた斬撃の上に飛び乗って、あろうことかそのままリグへと飛び込んだ。

だがそれこそリグにとって絶好の機。スラツシユを放った逆の手に握った棍棒がメイルの命を刈り取るべく横一文字を描いた。

しかし、そこに手ごたえはない。違和感に目を細めるのと、振るった棍棒の重みに気付いて笑うのは同時。

棍棒の上にメイルが立っている。如何なる絶技か命知らずか。どちらにせよこの棍棒は、そのまま敵手の命へ届く道。

「カカツ、大道芸かい!」

「残念、辻斬りい!」

疾駆する小さな影が鋭い切っ先を鬼の眼球を狙い穿つ。

一瞬の交差。感触は硬質。

メイルは自慢の刺突がリグの額から伸びた鋭い角で弾かれた事実  
に戦慄した。

「それってインチキ……!?!」

「悪いが自慢のイチモツでねえ!」

リグが虫を払うように腕を振る。だがその数瞬前に飛び退いたメイルは、角との激突で痺れた手を軽く振って、良い笑顔を浮かべるリグを睨み上げた。

「下品ですね、お兄さん」

「オーガなんざそんなもんさね、強い奴は殺す。仲間とは酒を飲む。良い女は犯すつてな。ん? そういやテメエ、強くていい女だな。喜べ、殺されるか犯されか好きな方を選びな」

「もう一つ選べますよ。貴方を殺してその首を肴に酒を飲む。素敵じゃないですか?」

「ぎやははは! テメエ……とことん良い女じゃねえかあ!」

地面を爆発させる程の勢いでリグがメイル目掛けて走り出した。

たったそれだけで感じる圧力はアポロン山脈で倒したカリスを数十人以上束ねた以上。

どの能力も足りない。

あの体を斬る力がない。

だからと言って強化魔術を使えば宗司より教わった技が使えず簡単に潰される。

現状、考えられる全てを用いても勝てる気がしない。

「だけど、斬りたいな」

メイルは呟いた。

願わくばと思いつながら、それは祈りではなく誓いだった。

## 第十話 『修羅の兆し』

そして戦いは今へと続く。

宗司から受け継いだ技術を使うために強化魔術を切ったメイルは、怒涛と攻めたててくるリグの猛攻によって全身がボロボロの状態だった。

「ハッ、なんだあ？　ここそそと隠れた雑魚がまだあんなに居やがったのか？」

対して、遠目にクロナ達を捕捉したリグに傷らしい傷は殆どない。幾つか体に裂傷が刻まれているが、所詮は皮膚を裂いた程度、いずれも魔族の生命力を脅かす程ではなかった。

これが純粋な性能の差。

メイルが鍛錬によって築き上げた技を真正面から打ち砕く魔族の力。

そしてその威容はクロナ達の体をすくませるには充分だった。

「……オアー！」

だがメイルは決して怯まない。痛む体を無理矢理起こして、衰えぬ気力と再び展開した強化魔術を支えにリグへと飛びかかった。

「メイル!？」

煙を抜けて現れた血濡れでボロボロのドレスを身に着けたメイルを見てクロナが悲鳴にも似た声をあげる。

しかし、メイルは裂けた額より流した血で顔面を染め上げながら、その顔は決して崩れない笑みを象ったまま。

「ハハッ！　面白れえなあ嬢ちゃんよお！　まだやりたりねえってか!？」

その笑顔に呼応してリグはクロナ達を無視してメイルと再度剣戟を合わせた。

激突する両者より発生する衝撃が大気を震わせクロナ達の臓腑に響く。

強化の魔術に下級スキルのスラッシュを合わせた一撃でどうにかリグの軽い一振りとは互角。その事実がいつそうの戦意をメイルから



引き出す。

この強い相手を倒すにはもつと強く、さらに強く。

見切りで描き出される死線を身体能力に任せて掻い潜り、メイルは必死にリグの隙を見出そうと抗う。

だが誰がどう見てもメイルがリグに勝てる要素は見当たらなかった。

「な、んで……」

勝てるわけがない。

オーガ族の戦士と言えばレベル300に及ぶ恐るべき戦士だ。レベルだけならばクロナも近い領域にあるが、ステータスの成長具合も魔族と人族で違う以上、仮にクロナがリグのレベルを超えていたとしても敗北する可能性は高い。

そしてそんなクロナにすら未だに一本も取れないメイルでは何をしてもリグには勝てない。

それなのに何故戦う？

逃げてもいいはずだ。幾ら実力差があるとはいえ、メイルならばリグから逃げて宗司の元まで行くことくらいはできるはずだ。

例え魔族であっても、数値に換算してレベル1000に到達する聖剣すら制した宗司ならば容易く葬れるだろう。それでこの戦いは終わりだ。

それでいいじゃないか。

まだやりたいことがあるだろうか？

強くなつてからでいいじゃないか。

勝てないなら勝てないなりに、それでいいじゃないか。

「あははははははは！」

だが笑っている。

そんなことは分かっているながら、今ここでメイルは戦っている。

「あははは！ あはははははは！！」

「笑って、やがる」

メイルの笑い声を聞いて傭兵達が得体の知れない物を見るような眼差しをメイルに向けていた。

魔族という絶対強者を相手に、決死の覚悟で戦うのでも、悲壯の決意で戦うのでも、勇気を抱いて戦うのでも無い。

強者と死合える喜びの狂気。

これを超えることで得られる強さには興味がない。

それで死ぬならそれでいいと、メイルは本気でそんなことしか考えていなかった。

「最高だ！・最高だぜメイル！」

唯一リグだけがメイルの狂気を是としていた。

だがそれはリグが狂っているということではないし、そもそも、根本的な意味で彼には、魔族ではメイルを理解出来ない。何故なら、彼らは戦うことしか価値がないからこそ、似たようなメイルを歓迎しているだけなのだ。

善悪という価値を知らずに戦うだけの魔族。

善悪という価値を知らながら戦うだけの人間。

一方は純粹な戦士で、一方は純粹な修羅。

狂気とはそれだ。他の素晴らしき価値を知り、慈しむ心を持ち、悪に憤り、悲劇に涙しながら、それら全てをどうでもいいと言い切れる異常。

多様性を持つ人間だからこそ得られる狂気という純心。

人間という最悪の結晶。

「なんて……なんて様だ」

傭兵が呟き、その場の誰もが頷いた。

あんな者が自分達と同じ人間なのだと、認めたくないからこそその呟きだった。

戦いは激化する。

勝者と敗者の立ち位置が定まりだす。

「ゼヒッ……！・ゼヒッ……！・」

「クカツ、流石に限界が近いかよお？」

リグの軽口に答える余裕すらメイルにはない。呼吸すらまともにできない程に疲弊とダメージは積み重なっている。

見切りによって辛うじて保っているが、それでもリグの猛攻をメイ

ルでは捌ききれない。分かっているても体が動かない。振るおうとしても体が遅い。

もどかしさに苛立ちすらこみ上げる。

だがそれでも今持てる全てで戦うしかないのだ。

「ふうー……すー……」

強引に呼吸を整える。体の傷はどうしようもないが、呼吸を落ち着かせるだけでどうにか斬撃数回分の体力を確保する。

しかし、もう終わり。

「先に逝つてろ、そんでいつか地獄でやろうや」

リグはこの戦いの終わりを感じ取っていた。

ここまでぎりぎりを凌いできたメイルだが、技を捨てて強化魔術に絶った時点で勝敗は決した。

延命出来たのはここまで。後は全力の一振りで終わる。

「こいつぁ礼儀だ。テメエは俺の全力で殺す」

リグが右手を大きく振り上げる。

それは一番初めに使った上級スキル『メテオブレイク』の構えだった。

放てばメイルもろともその背後で戦いを見守るクロナ達にすら及ぶ、範囲殲滅では上級スキルでもトップクラスのスキル。

対して、抗う手の無いメイルは張り付けた笑みをそのまま、幾度も激突で至る所が欠けた剣を構え直した。

その眼は全く諦めてはいない。むしろその上級スキルの際に食らいつかんばかりの戦意に、リグは犬歯を剥いてその気概を喝采した。

「ありがとよ、このクソツタレな任務、テメエに出会えたつてのを皆の馬鹿共に自慢できるだけで受けたかいがあったつてもんだぜ！」

故に手向けと散れ。

「ハデに逝けやああああー！」

剛腕が唸る。破壊の奔流が炸裂する。

確定された死がメイルの視界に描かれた。

回避不能。

迎撃不能。

反撃不能。

死亡確定。

選択は一つ。

故に、斬る。

「行きます」

その意志だけを頼りにして、メイルは人生最期の斬撃を――。

『破邪装飾』！」

その間に割って入ってきたクロナが展開した光り輝く障壁が、全てを砕く破壊の一撃を受け止めた。

「ぬう!？」

「ぐ、おおおおおおあああ!!!」

裂帛の気合いを発して、最上級スキルが一つ『破邪装飾』越しに『メテオブレイク』の一撃を抑え込むクロナ。

本来ならば上級と最上級の差で受け止められるはずだが、リグとクロナの力量差によって、むしろクロナのほうが押されていた。

しかしクロナは必死の形相で目を焼く濁流から視線をそらさずに耐える。

何故動いたのかは分からない。むしろ心の中では『メイルは危険すぎる』と思つてすらいた。

自分も傭兵達と同じ、なんて様だと思った。

これが人間かと背筋が凍る心地だった。

「それ、でも……!」

クロナは知っている。

この旅の中でメイルが浮かべた笑顔、優しさ、無邪気さ。

どんなに相容れないと知っていても仲間であることには変わりなく。

「殺させて、たまるか……!」

――メイルは私の手で殺す。

激突の最中、クロナの答えは途中で途絶え、意味を変える。

されど今この瞬間、クロナはメイルを守るのだと間違えて、その意志を支えに『破邪装飾』は『メテオブレイク』の威力をそのまま反射

した。

「ぐ、うおおおおお?!?!」

全霊を込めた一撃がまさか自分に返ってくるとは思わず、リグは至近距離で彼自身の全力を真っ向から受け止めることとなる。

その巨体すら丸々飲み込む輝きがそこで止まらず破壊しつくされた貧民街をさらにかき乱した。

後に残るのは爆撃の後にしか思えない更地と化した貧民街の末路。

その光景を見届けたクロナの全身から力が抜けてその場に崩れ落ちた。

「ッ……!」

たった一撃。されど魔族が放つ最強の一撃。全ての体力を使い果たしてようやく反射出来たのだ。

「お、うおおお!!」

「スゲエ! 流石魔族殺しだ!」

「やったんだ、伝説が帰ってきたんだ!」

一瞬の、しかし無限にも等しい激突の決着に生き残った傭兵達が歓喜に沸く。

魔族殺しの復活と、魔族殺しの伝説の再来。

ここに刻まれた新たな伝説に沸く一同はその立役者たるクロナに駆け寄ろうとして。

「くははははは! そうかそうか! こいつがオグの爺さんをぶつ殺したっていうクロナ・クロルキスかよ!」

そんな彼らの足を止める絶望が、さらなる喜びに身を震わせながら再度立ち塞がった。

「ッ……生きてる、だど?」

「ハッ、驚くことかい? テメエでテメエをぶん殴ればそりやイテエけど、それで死ぬ馬鹿なんざ見たことねえよ」

そう豪快に言い切るリグだったが、凜々しい角は二本とも砕け、防御に使った左腕は筋肉が痙攣するだけで動く気配すらない。その他、全身に裂傷と火傷の痕が残っており、傍目からは重傷といってもいい具合だ。

「俺の全力を防ぐたあ、噂通りのいい女じゃねえか。聞いているぜクロナ、他の奴等もいつつもカスに邪魔されて最期までやれねえが、人族との殺し合いでテメエとの戦いが一番最高だったってな！ しかしよお、メイルにテメエと立て続けに最高の女とやりあえるたあ、クカカツ、こりや砦の奴等悔しがるに違いねえ！」

半ばで砕けた棍棒右手で握り直してリグが変わらぬ戦意を滾らせる。

たったそれだけで傭兵達の顔が絶望に染まり動きが止まった。恐るべき剣士と、魔族殺しの英雄が合わさっても滅ぼしきれぬ悪夢。

これこそが魔族。

天変地異の体現、リグ・ガ・ギガ。戦闘種族オーガ族の雄々しきガ<sup>戦士</sup>。「さて、続きといこうかい？」

気楽に告げる口許から多量の血を流してリグは不敵に笑った。

半死半生でありながら勝つヴィジョンが一切浮かばない。

勝てるはずがなかった。唯一無二の機会を逸したクロナの思考に小さくない絶望が過る。

だがその隣で息を整えたメイルがやはりリグと同じく笑いながら立ち上がってみせた。

「ありがとうございますクロナさん。あと一息です」

「メイ、ル」

「今なら、斬れます」

言葉に驕りも虚偽も含まれていなかった。

クロナの渾身の『破邪装飾』によって追い込まれている。そう、どんなに装ったところでリグの負傷は隠し切れない。

傷すら騙す威圧感で見誤っているだけなのだ。

メイルは冷静にリグの限界を見切っていた。ここに至るまで一分も見えなかった勝利への道標が今ならば見える。

「私達なら斬れます。クロナさん」

二人ならば届くのだ。

「君、は……」

これが人間か。

この状況で、絶望という言葉の重みを感じながらも迷いなく進める意志。

メールも感じているのだ。この状況下で心を潰す絶望が神経を逆なでるように精神を蝕んでいる。

だが斬る。

全てを知って、尚も斬ると告げられる。

狂っている。

純粹を極めようとする人間の狂気にクロナは恐怖した。

頼もしさ以上に、その在り方を恐れた。

だからこそなのかもしれない。

「ぐ、おおー」

絶望に染まりかけた思考を払い、震える足に喝を入れて立ち上がる。

全力の『破邪装飾』を使ったことで見えた目以上に体力は残っていない。残りの体力から考えれば中級スキルを一つ使えばガス欠だ。

だがそれは相手も同じ。

きつと勝てる。そう思えるのは、クロナもまたリグと同じくメールを、人間を信じているから。

「やるぞメール。君のその様に私は賭ける」

「言ってることは分かりません！ でも……やってやれないことはないな  
いですー！」

今だけは、その狂気こそが美しい。

爛々と輝く瞳で真っ直ぐ敵を射抜くメールを一瞥したクロナは、立ち塞がる災禍を打破するべく狂気に引きずられるように駆けだした。

## 第十一話『一心一身』

戦いは最後の局面へと入っていた。

リグの剛力が唸り、クロナの力と技が迎え撃つ。そしてその間隙を縫ってメイルの技が走る。まさに一進一退、どちらかが一つでも応手を誤った瞬間に終わりを迎える綱渡りの攻防。

その戦いを遠目から傭兵達は傍観することしか出来なかった。

生物の域を超えた超人の戦場。乱舞する力の渦は遠くに居ても圧力で後退ってしまう程の威圧感を発している。

「う、うう……が、頑張れ！」

「そうだ！ 頑張ってくれ！」

「頼む、勝て、勝てえ！」

人族の希望へと傭兵達の声援が送られた。

あまりに矮小な彼らに出来るのはたったそれだけのこと。

希望が折れないように、自分達の分も託すように。

「気持ち悪い」

「奇遇だな。俺もそう思うぜメイル」

その声援が戦いを汚すと何故分らないのか。

メイルの苦々しい呟きを、リグも苦笑混じりに肯定した。

「ツ……はあ！」

それは違うと叫ぼうにもクロナには彼らのように口を開く余裕はない。

リグの剛剣を捌きながら、クロナは彼らの希望に応えるべく尚も強く剣を振るった。

どうしようもない現状を打破する者に希望を託す。それを何故気持ち悪いと言えるのか。

脳裏を過るのはあの日の問答。

——お前さんだけ置いて逃げるアレらを守る理由がどこにあるのじゃ？

——違う！ 託された。託してくれた。私はここに私の意志で



立っている！

——戦士じやおのお。いや、流石は儂らの血を継ぐ者じや。

——ツ……黙れえええ!!

「私は……ッ」

人間なのだと叫ぼうとして、ふと、何故そんな矛盾を叫ぼうとする  
と心の中で誰かが囁いた。

つい先程、お前はマイルという人間に恐怖したくせに。

アレは私とは違うと、思ったのだろうか？

「ハハッ！ 貫ったあ！」

「ッ!」

一瞬の動揺より生まれた隙。当然それを逃すリグではなく、マイル  
の斬撃を使えなくなった左腕を強引に動かして受け止めクロナを強  
襲する。

大気を砕いて棍棒がクロナの胸部に迫る。咄嗟に両手剣の腹で受  
け止めたが、リグの一撃は両手剣もろともクロナの体を吹き飛ばし  
た。

「がふっ!」

家屋の瓦礫を巻き込んで十メートル以上も吹き飛んだクロナは、胸  
部の激痛よりこみ上げた血を盛大に口から吐き出す。

胸骨が砕け、臓器に突き刺さったのか。吐き出した赤黒い血が、動  
揺による手痛すぎる代償を物語っていた。

だが倒れている暇はない。この僅かな間に、リグと対峙するマイル  
がいつ殺されてもおかしくはなかった。

「オーガああああ!!」

治癒の魔術と強化の魔術の重ね掛けという荒業で痛みを誤魔化し、  
血反吐を撒きながらクロナが棍棒を受けて歪んだ両手剣を手に躍り  
かかった。

ダメージを受けたとは思えない苛烈な打ち込みに堪らずリグが防  
御に回る。巨人と巨躯の激突で大地が震撼し、それ以上の気迫が世界  
すら震わす。

「シィィィィィ!!」

鋭い呼気を吐いて、メイルは僅かに押されたリグの腹部へ渾身の刺突を放った。

狙いは破邪装飾で大きく裂かれた一点。傷口を抉り斬ることだけに専心し、鬼という牙城を突き穿つ。

「ガッ!?!」

そして、クロナの一撃を抑えるのに手いっぱいだったリグの腹の傷を、この日初めてメイルの一撃が貫いた。

久方振りの肉を貫く感触がメイルの心を震わせる。

持てる全てを出し尽くし、クロナの助力を借りてようやく届いた一閃。この歓喜にメイルの心は僅かに揺らぎ。

「クカツ」

失敗したと悟ったのは、半ばまで突き立った剣がへし折れたのを見た瞬間だった。

リグは笑っている。まさしくこれを狙っていたのだと男の笑みが物語る。

腹に刺さった剣を、腹筋を締めることでへし折るといふ魔族ならではの荒業。それほどにメイルを警戒しているというべきか。半ばで砕けた剣を見て己の失態に気付くメイルは、その失態に気付くという新たな隙をリグに見抜かれた。

瞬間、枯れ木を割る音をメイルは自分の中から聞く。

合わせてぶれる視界。右半身より紡がれる不快な旋律を演じたのは、右腕もろとも体を巻き込む丸太の如き真紅の足。

「あばよ」

リグの放った鋭い回し蹴りの直撃を受けて、クロナに続き今度はメイルが数十メートルも先に木端の如く吹き飛んだ。

「ッ、メイル!?!」

「ハッ、仲間を気遣う余裕はねえだろ!?!」

鏢迫り合いから容易くクロナの両手剣を弾いて、リグが再度クロナを防戦一方に追い込んだ。

その苛烈な攻めを受けて、クロナの一撃に押されたのが毘だったのだとようやく気付く。

確実に敵を一人潰すため、肉を斬らせて骨を断つ。格言通りの行動を実践してみせたリグの荒々しくも狡猾な一手の結果はこの通り。メイルは完全に持つていかれた。

安否は定かではないが、リグの怪力をまともに受けて無事で済むはずがない。

そしてクロナもまた胸部のダメージを庇いながらリグの猛攻を捌いて反撃は出来ない。

——ここに、戦いの勝敗は結実する。

魔族という絶対を前に、人はどう足掻いても無力でしかない。

そして例えリグを倒したところで、所詮彼ですら派兵される程度の兵士。その背後には何十ものリグ以上の恐るべき魔族が控えている。

さらに、北の大陸には全ての魔族を力で治めた生ける伝説、魔王クラウディア・ザ・ウロボロスと配下の四天王が虎視眈々と大結界を挟んで人族を睨んでいるのだ。

これが魔族という絶望。

種族滅亡を確信させる現状の証明。

だから人は、何も見ないように希望の光で目を眩ませるのだ。

「う、うわあああああ！」

「行けえ！ 進めえええ！」

最早ここまでと覚悟したクロナの耳に、勇ましくも情けない声が聞こえた。

それは恐怖に顔を歪ませ、涙を流しながら駆け寄ってくる傭兵達の集団。

誰もが死へ突撃する恐怖に屈していた。勝てるはずがないと涙していた。

だが、希望の光がその眼に宿っている。

——止めてくれ。

クロナが鉄仮面の下の表情をぐしゃぐしゃに歪めた。

誰もが自分を見ている。

魔族と戦える力の持ち主が生き残ればまだ希望は繋がるのだと。

そのために、種族を守るために彼らは死のうとしている。

魔族殺し。

我らが英雄、魔族殺し。

彼女がいつか、魔族を殺すと信じて。

「ああ？ クソが。最高のところに水差すんじゃないぞ!?」

「逃げてくだガッ!?!」

「俺達の希ぼ——!」

「ごちやごちやうるせえんだよ!」

羽虫のようにたかってくる傭兵達をリグの一撃が次々に薙ぎ払っていく。

いつか見た光景と全く同じだ。

何度と、幾度と繰り返された希望に繋がる死の行軍。

火に近寄って燃え尽きる虫だ。

何度となく見続けた地獄絵図。

また同じものを見る。

いつだって繰り返す。

過ちは際限なく、二度と繰り返すかと決めた誓いは数年前には消えていて。

——よくやった。素晴らしき戦士よ、お前さんになら儂の首をくれてやってもいい。

いつまで私は、偽りの英雄を演じなければならない?

血を撒き散らして消え続ける命の灯火を眺めて、クロナは心を犯す絶望に潰されてしまいそうになっていた。

そうしている間にも、誰も彼もが希望を託して死んでいく。

勝手に託して、勝手に祈って。

見たくないから光で目を眩ませて。

だからこそ、お前達は知らなければならぬ。

お前達が本当は何者なのかということ。

「ふざけるな」

雑兵を薙ぎ払うリグが。

絶望に染まるクロナが。

勝手にくたばる傭兵達が。

か細くも朗々と戦場に響く声を聞いて、誰もが動きを止めた。声の主がゆつくりと姿を見せる。

使い物にならなくなった右腕を揺らし、幽鬼の如き頼りなさで一歩を歩む少女。

この場において、只一人のか弱き修羅。

メイル・リンクキャット、この場で唯一、人間に退化した狂気の産物。

「どいつもこいつも……自分じゃできない馬鹿ばっか……」

砕けた剣の代わりに、鞘に収まった聖剣を左手に掴み、衰えるどころか膨れ上がり続ける戦意を瞳に宿して立っている。

歩くだけで限界の体を押し、しかして尚も狂気が進む。

「邪魔だから失せろ」

知るがいい、理性を忘れた獣達よ。

これより魅せる狂気こそが、お前達の本性だ。

「そいつは私が、斬るって決めた」

――

「ところであのオツパイチビはお前の何だ？」

「ん？ 藪から棒にどうした？」

鉄が奏でる高音と充満する熱気で満たされたダンの工房。かれこれ丸一日経過した室内で、久方ぶりに開いたダンの問いに宗司は逆に疑問をぶつけた。

ダンが錬鉄に注ぐ集中力はそのままに「まあアレだ。ちよつとした息抜きみたいなものよ」と軽く答える。

ならば答える必要があるかと宗司もまた気軽に応じた。

「めいるは俺の弟子だ」

「へえ。まあ確かに中々見どころはありそうだったが……ありや才能なんてねえぞ？」

「それはそうだろう。アレは凡才で秀才の類だ。しかしダン、お主は才能が無かったら鍛冶をやらなかったのか？」

「……ケツ。そんなん知らねえよ。俺は命を殺す武器が大好きなだけよ」

それはもう十分に答えとなっているではないか。などと野暮なこととは言わない。

だがダンも宗司の問いで得心したのか、「ついでにオツパイの刀も作ってやるよ」と言った。

「俺のだけではなく、めいるの分までも本当に良いのか？」

「良いも悪いもねえよ。俺は気に入った奴に武器を作る。それで、俺の作った武器がド派手にカス共をぶつ殺し、大した武器を持ってなかった強い奴を武器のおかげでぶつ殺す。最高だろ？」

「ははは、お主はやはり俺と同じ畜生以下だな。性根が腐りすぎておる」

「お前程じゃあねえさ色男……しかし弟子か。お前はオツパイが今後どうしたいんだ？」

「どうするか、か」

いずれ自分を殺させる。それは間違っではない。

だがどのような形でメイルの華が開くのか。そればかりは彼女次第だ。

狂気の芽は芽吹き、異形と恐れられる黒き華を咲かせた。

宗司がメイルに与えたのは気付きだけだ。

剣術、体術、戦術眼。

時に体に、時に言葉で、メイルの心に染み込ませた教えは既に、雑兵程度ならあしらえる程の力を彼女に与えた。

だが本当の目覚めはここから。

真の殺し合い。全てを出し尽くしても届かない相手に見出す、乾坤一擲の極み。

宗司も、あのナイルだって繰り返したに違いない、窮極の狭間で行われる進化の時。

宗司とは違う在り方へ。メイルだけが進むことが出来る未知へと一歩踏み込めば。

「修羅と化するのだ」

全てを尽くして届かなかった。

挫けて迷い、どうしようもないと理解した。

その時、我<sup>修羅</sup>らは思うのだ。

「故に、とな」

激痛がまともな思考を阻害していた。辛うじて行った治癒魔術では僅かな回復しか期待できない。右腕は肉と骨が潰れて弾け、ただ付いているだけの有り様。皮を引き裂いて飛び出た肉と骨は最上級魔術の治癒が無ければ二度と治らないだろう。

それでも咄嗟に折れた片手剣を間に挟めたおかげで、胴体は辛うじて戦闘に耐えられる程度のダメージしか受けずにすんだ。とはいえ骨は碎け内臓が損傷しているので、戦えても一分も持たないが。

否、正直に白状すれば戦うどころではなかった。

ダメージは限界を超え、軽く押せばそのまま倒れてしまう程に弱々しい。

死の足音だつて聞こえる。

この様だ。

手持ちは尽きて、万策も果て、望みは絶えた。

メール・リンクキャットの全霊は、届かなかったと理解した。

理解したうえで、メールは聖剣を手放さずに立っていた。鞘から抜けない聖剣を、ただの武具として構えていた。

「スウ……」

息を吸うだけで体中を激痛が駆け抜けた。だがメールは痛みを一切顔には出さず、鮮血で真っ赤に染まった視界の向こう側に立つ敵だけに腐心する。

「そうかい。やっぱテメエ、最高だ！」

リグにはもうメール以外の誰も目に入らなかった。それほどの鋭さと強さが、瀕死のメールより感じられるのだ。

戦士としての本能が告げている。

あそこに立つのは敵を超えた。無二の天敵として在る脅威。足掻きようもない現実<sup>零</sup>に唯一牙を立てる唯一の一手。

闘争から不純物を削り取った果ての一つの単位。

一に至った闘いの火が、不可逆の勝敗を覆す絶技を成すのだ。

「死ねやあー」

我慢出来ないとはかりに突撃してきたリグの気迫に相応しい豪打の嵐がメイルを再び追い詰めていく。

辛うじて避けているが、最早、一手を返すことすらままならなかった。

風圧だけで肉体が悲鳴をあげる。次に直撃を受ければ死ぬのだと頭の片隅でどうでもいいことを考える。

だが戦っている。

まだ戦える。

「そうさー！ 下らねえ雑魚をぶつ殺すのは飽き飽きだ！ テメエやアイツみてえな強い奴を殺すのが生きてる証だろうがあー！」

「……」

「テメエもそうだろ!? 強え奴に殺し殺されて！ それだけしか知らねえがそれ以外どうだっていいからまだ立つんだろ!？」

「……」

「ぎやはははははは！ メイル！ 死ねよ！ 派手に死んだり死なせたりしようぜええ!!?！」

リグの絶叫に応じられない。

だが、言っていることは確かに共感していた。

乱打の中を九死に一生の機を掴み続けて回避しながら、闘争の正しい在り方を素晴らしいと思った。

—— だけどね。

—— 知っているかしら？ リグ・ガ・ギガ。

「貴方が分かるわ」

—— 貴方はそれしか知らないからそうしているだけの人形みたいな存在だ。

—— だけど私は違う。無限と存在する素晴らしいことと嫌悪すべ



きごことを知りながら、私は自ら此処に居る。

——唾棄すべき悪意の渦の只中に一人。

——私はね、居るんだよ？

「ねえ、リグ・ガ・ギガ」

無感の冷徹、修羅場に一人。

善悪を超越した不退転の極み。

だから彼女——彼らは笑える。

故に、彼らだけが至るのだ。

狂気の真髄。

修羅の域。

「ようやく……見えた」

瞬間、メイルの眼がリグと自分の間を走る一筋の光を捉えた。

戦いの果て。勝者と敗者の確定。

絶対強者へ告げる狂気の宣誓を。

超越するは、我が無感。

——刹那、頭上から振り下ろされた棍棒ごと、メイルの一閃がリグの巨体を後退させた。

「……あ？」

何が起きたのか理解出来ないと首を傾げたリグは、棍棒が半ばから綺麗に切断されていることに気付く。

ただの鉄の塊ではない。リグの怪力に耐えられるように特注で作られた自慢の一振りだ。

その自慢が半ばより断たれた。斬られた。

視線を戻せば、聖剣を振り抜いた状態で動きを止めたメイルが立っている。

幾ら聖剣とはいえ、鞘に収まった状態でどうやって切断したのか。何をした？

どんなスキルを、魔術を用いた？

いや、そもそも——。

「テメエ、何者だ？」

これは、先程と同じ存在なのか？

「……」

答えはない。否、答える余裕すらない。

メイルは既に肉体の機能を纏めて捨てていた。

斬るといふ一点以外の機能は不要。余分に注いでいたりソースを全て斬撃に置換していく。

最早、臓器すら幾つも機能を消失してしまったただのデッドウェイト。その分の力すら魔力と筋力の覚醒に注ぎこむ。

今や、メイルは人型の斬撃兵器だった。

斬るのだ。

斬ることではしか意味が無いのだ。

目指す域へ至るのに必要なのは速さと力と技。

つまり全て。

今の自分に足りない全てを、不要な全てを捨て去って補填する。

メイルは宗司から与えられた全てを自分の中で本物へと組み立てた。

宗司より派生した短くも濃密な戦いの記録を全て掻き集めて、砂粒一つの欠片すら残さず斬撃へと変えた。

技だけでは斬れない。

強化だけでは使えない。

だからこの時、今、この瞬間。

この先すら要らない。我が理想に比する必殺を一つだけ。

「……」

メイルの体が強化の魔術で淡く輝く。

今こそ異世界の魔術と異界の技術を合わせる時。

成し得なかった奇跡を、自分だけの極みへと作り変えろ。

そして、窮極の狭間で超越が紡がれる。

メイルの全身から力という力が抜けた。まるで体が液体にでもなってしまったような脱力。見る者からすれば前のめりに倒れたとしか思えなかつただろう。

しかし、崩れていく体が地面に激突する瞬間、地面を食んだ親指が、

爪すら砕く力で大地を弾いた。

那由他の時を駆ける修羅の激走。

誰もその疾走を視認出来なかった。彼女が走る跡を示すのは、体より零れた魔力の残光と、神速を得たメール当人のみ。

もつと、早く。

もつと、強く。

そのために刻んだ時を引き伸ばし、伸ばした時をさらに刻んで長くする。

刹那の時が一秒へ、一秒が十秒へ、十秒が百秒へ。知覚領域が膨れ上がったメールは、宗司の居た世界で達人と呼ばれる侍たちが当たり前に知覚していた域へ、ようやく片足を踏み込んだのを理解した。

——これが、ソウジさんの見ている世界。

世界が停止していた。

音速が遅くなり、光速に反射が届く。脳髄からの電気信号にも手応えがあった。

一つの域。武芸者が是とした無限時間。

思考だけがさらに加速していく。速すぎる肉体が遅くなる。

もつと、早く。

もつと、強く。

いつか、宗司が目にした零秒の世界は遙か彼方。遅すぎる自分に辟易し、まだまだ未熟と自嘲したくなる。

だがメールは確かに自分が一つの域を超え、新たな世界に入門したと自覚した。

魔術と技術、異端の融合が掴んだ肉体の真髄。

己の中の余分を削いで、一心一身ひたすら鋭く。

感情すらも斬撃へ。

「ああ、そっか」

メールは声も出せないはずの世界でふと呟いた。

この世界に到達したから、宗司は気楽に告げたのだと知って。

嬉しくなって、最後に残った思いを一つ。

剣と化した、我が身に添えて。

「斬ろうかな」

成長した狂気に鍛え上げた肉体が追従したこの日。  
凜——。

今、祝福の鈴の音が鳴り響く。

## 第十二話 『人間』

鈴の音色が戦いの幕切れを告げた。

人々は静寂に染み渡る歌声に酔いしれる。

清廉にして下劣。恐るべき魔族すら凌駕する人の悍まじさが結実させた一刀の極点。

リグの棍棒ごとその肉体は斜めに斬り裂かれ、その厚い肉体が思い出したかのように傷口から真紅の熱血を吐き出した。

「見事……！」

リグは己より噴き出す鮮血で真っ赤に染まったメイルへ賛美の言葉を送ると、ゆっくりと仰向けに倒れる。

明確な戦いの決着。立つ者と伏す者、戦いの果てに勝利を手にしたのは変わらぬ狂気で動き続けたメイルだった。

「ハアツ……！……ハアツ……！」

とはいえメイルにも余裕があるわけではない。土気色に染まった肌は彼女自身の疲労を如実に物語っている。

どうにか聖剣を杖にして立っているが、一歩だって動けない状態にまで追い詰められていた。

「……ッ。良い、戦いでした」

メイルはこみ上げてきた吐瀉物を飲み干して、リグという強敵を讃える。残り数分も経たずに死ぬ相手とはいえ、そこには死闘を通じて紡がれた友情が存在した。

「ああ、そう、だな。最高の、殺し合い、だ、った」

魔族として素晴らしき敵と戦い、相応しい相手に命を奪われる。

リグは誇りある魔族として極上の生を楽しめたことを喜んだ。

きつとこの体は、今日この日、この女と戦うために生まれたのだ。リグは満足だった。与えられた任務や、人族殲滅など頭の片隅にすら存在しなかった。

素晴らしき女達と演じた素晴らしき殺戮演舞。あえて不満を述べらるなら、もう少しだけ戦いたかったということだけか。

それともう一つ。

「悔しい、ぜ。俺は、テメエを満足、させ、られなか……った」  
愛しき怨敵、メイル・リンクキヤット。

死線を超えて限界すら踏破した彼女の全霊を受けて、さらなる死闘に昇華出来なかった自分が不甲斐ない。

「悪い、な。俺、は、ここま、でだ」

申し訳なかった。

その超越に届かずに終わることを許してほしい。

「ううん、謝らないで、リグさん……貴方を斬って、次も斬る。貴方の力も、私の刃に——」

——その強さを私が証明し続ける。

残念ながら最後まで言い切れず、メイルは意識を失って気絶した。

「……そう、かよ。へ、へへ」

だが言わずとも伝わるものがあつた。

リグは笑う。ここで死しても終わりではないから笑える。

この強き乙女が生き続ける限り、リグは彼女の強さの一部なのだ。そして彼女が殺されても、きつと殺した相手が強さを引き継ぐ。

永劫に戦い、永劫に殺し合う。

充分だ。

「……満足してもらっては困るぞ、オーガ」

だがそのまま眠ろうとしたリグをふらつきながら近づいてきたクロナの言葉が引き上げた。

「教えろ。貴様、何故ここに現れた」

何故、わざわざアイアス城塞からここまで魔獣を引き連れて現れたのか。確かに他国と違ってアバド流通街は賑わっており、前線に送る武器制作の一翼を担っているから、狙うのは理解できる。

だが魔族が隠れて動く必要は無かつたはずだ。リグの戦闘力から分かる通り、アバド流通街を潰すだけなら真正面から突撃するだけで片がつく。もっとも、そうなった場合は宗司によってリグの進撃は止められただろうが。

しかし宗司の存在を把握していないならば魔族が隠れる意味は無い。

「あ？ そんな、こと……ああ、だがいいか」

リグは僅かに考え込むと、どうでもよさそうに口を開いた。

「もう一匹、魔族が……ここに、居る」

「ッ!」

「へ、へへ。俺あそい、つ、の、正確、な場所を、調べる役目、だったのよ」

人選ミスだと思わねえか？ などと笑うリグの言葉もクロナには入らなかった。

まだアバド流通街に魔族が居る。人知れず潜伏しているソレが一体いつから居たのかは分からないが、もしもリグの言葉が正しいならば。

激闘の末に打ち倒した魔族をもう一度倒すなど考えたくもなかった。この日の勝利が次もあるとは思えなかった。

「まっ、勝手に……やりな。それより、メールを、頼む、ぜ」

リグに言われてクロナは倒れて動かないメールを慌てて両手で持ち上げた。

「メール……！ おい！ 返事をしろメール!」

呼びかけに反応はなく、濁音が混ざった呼吸音しか返ってこない。

「良い、女、だった……こんなところで、殺すなよ」

「貴様に言われるまでもない……!」

状況は一刻を争う。クロナは傭兵の一人に「後は頼む」と告げると、急ぎ宗司の元を目指して走り出した。

「へ、へへ。あばよ、メール」

遠くなつていく二人の姿をリグは霞み始めた視界で見送る。

本当なら自分を打倒した彼女に首を貰って欲しかったが、こうなつては仕方ない。

悔いはもう無かった。満足のいく命の最後だった。

リグの霞む視界を、下劣で卑屈な表情を浮かべた傭兵達が取り囲む。

遅れてやってきていながら、まるで自分達こそが勝者なのだと誇る、浅ましき様に嫌悪感しか浮かばない。

「殺せ、確実に息の根を止めろ」

「こいつ、まだ生きてやがる」

「今しかねえ、へへっ、俺達でこいつにトドメを刺すんだ」

「死ね、死んで償え」

「お前みたいなのが死ね」

リグに降り注ぐ人間から滲み出る悪意と殺意。

勝手に希望を託し、勝手に絶望して、最後は勝手に断罪者気取り。

「くっだらねえ」

視界を埋め尽くす鋼鉄の鈍い輝きを見据え、リグは最期まで笑みを止めることなくその命を終わらせた。

——終わったか。

工房の外より鳴り響く轟音と衝撃が鳴り止んだのを感じて、宗司は戦いの先へと僅かに視線を飛ばした。

だがそれもすぐにダンの方へと戻る。突如として貧民街の何処かで始まった楽し気な戦いの気配すら霞む程の気迫と執念。宗司をして飲まれるかと思わせる圧力を放つダンは、近場が戦場になった気配を微塵も気にせず、眼前の刀にのみ全てを注ぎ込んでいた。

ある意味でこの男もまた一人の修羅だった。驚愕すべきは、武器へと注ぐ意志の総量は、あの修羅外道に比肩してすらいる。

宗司達のような闘争の場にて輝く修羅とは違う、闘争という場を彩るために輝く修羅。

悪鬼。

邪悪。

外道。

罵る言葉は数多あれど、ダンという男を知る者が決まって最後に彼を指す言葉は一つ。

劍鍊殺鬼。劍のために全てを捧げた鬼。

それほどの男が持てる全ての技術を注ぎ込んで作り上げた劍が遂



に生まれようとしていた。

そしてその時は、呆気なく訪れることとなる。

「……出来たぜ」

ダンは今までの饒舌さが嘘のように淡々と終わりを告げた。

無理もないと宗司は思う。丸二日近く延々と槌を振るい魔術を使い、遠くで待つ自分ですら熱さを覚える高温の炉から動かずにいたのだ。生命力にあふれていた顔は一気に老け込み、槌を握る手は震えてすらいる。

だがしかし、ダンを労おうとした宗司の思考は差し出された刀を見て吹き飛んだ。

「これ、が……」

手渡された刀は柄も鍔も無い剥き出しの刀身のみだ。完成とは言ったが、ここから茎なかごに柄を付けるなりサラシを巻くなりする必要はある。

ともあれ、ダンの言う通りこの刀は確かに完成されていた。

手に持った瞬間、宗司は全身を鋭い電流が走った錯覚を覚えた。

この刀は今まで存在していたあらゆる刀剣とは別次元の域にあった。

よく体の延長のように武器を扱えと聞き、事実、鍛冶師の作る武器とは担い手の体の一部と同化を目指すという。

しかし、これはそのような在り方とはまるで違った。

生まれた時から共に生きてきた相棒の如き頼もしさ。体の一部として在るのではなく、刀という殺人武器として宗司に応える素晴らしき鋼。

お為ごかしは要らない。

人は人。

鋼は鋼。

相容れぬ両者は相容れぬまま、在るがままで在り続ける。

そのうえで人が操る鋼の真髄を突き詰めたのがダンの最高傑作。

聖剣、魔剣によく付随される魔術の要素も微塵として存在しない。制作の過程で魔力を注がれながら、全てが担い手の技量のみを反映す

るためだけに練り上げられた極限の一。

これまでダンが作ってきたような奇怪な装飾品や美しさはこの刀には存在しなかった。刀身には波紋すらなく、銘も無い。

斬るためにあるだけの武器。

以上でも未満でもない。

それは、人斬り包丁ただの刀だった。

「銘はお前が好きに付けろ」

「良いのか？」

「それはお前のために作ったお前だけの武器だ。他の有象無象にも使えるように作っちゃいねえ。……俺も含めてな」

「そうか。益々気に入った」

宗司が感慨に耽っている間に、ダンは部屋の隅を漁り一本の木材を取り出した。

「柄と鞘はこいつで作る。まあ刀身に合わせるだけだから大した労力じゃねえがな」

「感謝する」

宗司の礼に軽く手を振ってダンが応じる。そして改めて名も無い刀を宗司から受け取ると、再び魔力を用いて柄と鞘を作り始めた。

最早、ここまでくれば自分が居なくても問題ないだろう。「少し外の空気を吸う」と言っつてその場を後にした宗司は、遠目からでも分かるクロナの姿を見た。

「ソージー！」

「ああ、あの戦場の喧騒いくさばはお前達のものだったか」

「話す暇はない！ それよりもメールが……！」

言われて、宗司はクロナの両手からそつと地面に置かれたメール見て、小さく笑みを漏らした。

顔面蒼白、出血は止まらず、右腕は折れるのではなく潰れ、停止させた臓器は復旧に失敗したために動いてすらいない。

半死半生どころか残り数分の命。

しかも相手の一撃ではなく、自壊によって瀕死となった愚かな様。

「こやつめ、道に踏み込んだな？」

だからこそ、メイルは確かに到達したのだと宗司は確信した。  
武器を手に取り、人を殺め、強くなり続けた日々。

宗司の教えだけでは届かない強敵との激闘の末、メイルだけが見出したメイルだけの武の極地。

いずれはと思っていたが、思いの外早い覚醒に笑いが止まらない。

「ソージー！」

「焦るな。何であれ聖剣があるのだから問題あるまいよ」

急かすクロナを片手で制し、宗司はメイルの手にしていた聖剣の鞘を引き抜いた。

瞬間、力を解放した聖剣チートの自己治癒能力によってメイルの折れた腕を含めた幾つもの怪我が治っていく。蒼白だった顔にも血の気が戻るころ、ようやくメイルは閉じていた瞼をゆっくりと開いた。

「ん……？」

「目覚めたか？」

「ソウジ、さん？」

「いつぞやとは立場が逆だな……それで、楽しかったかの？」

「あ……はい……！ 私、多分、きつと……って邪魔だなこれえ!？」

メイルは反射的に全能の力を与え続けるチートを地面に突き刺して手放した。引き継ぐように聖剣を手にとって鞘に収めた宗司は再び同じ質問をメイルにする。

「楽しかったか？」

「ツ……はい！ 私、やっと私だけの私になりました……！」

「そうか、そうか。ならば俺から言うことはもうない。一言も一聞も一見も終わりだ。これからは一身で盗み、一心に刻み込め。その下地は出来たであろう？」

「分りました！」

快活な笑顔が眩しいくらいだ。宗司は晴れやかな表情のメイルに「よし」と言うと、続いて神妙な面持ちのクロナを見上げた。

「どうかしたのかくろな殿。先程から黙ったままだが……」

宗司の問いかけにクロナはどう答えるべきか躊躇った。

おそらく、リグが最期に言い残した言葉を聞いたのは自分だけであ

る。

近くにもう一体魔族が潜伏している。爆発すれば最後、全てを根こそぎ消し飛ばす恐ろしい爆弾の存在を宗司に語ろうとして躊躇ったのは、一重にメイルの戦いぶりを見たからだだった。

道を歩み始めた人間の狂気。心だけならば一つの極みに達したメイルと、その師匠である宗司がクロナには怖かった。

だが、おかしい。

何故その程度のこと理由として成立するのか。

クロナ自身、定かではない理由の正体。その根底に根差す思いは――

そして言おうか言うまいか躊躇していると、「人の家の外でごちゃごちゃうるせえんだよ屑共が！」というダンの怒鳴り声によつて沈黙が破られる。

「つたく、締めの大仕事などだったのに……つてオイ、オツパイチビ！

お前丁度いいところに帰ってきたじゃねえか!？」

「え、ええ?」

「ガハハツ、こりや最高だ。人生最高傑作作つて最高のテンションのところにオツパイ込みでぎりぎり及第点の剣客まで来たなら話は早い！ お前の刀も打つてやるからこつち来い！」

「え、ちよ、ソウジさん、クロナさん！」

「オイ武器たらし！ こいつで仕上げは終わりだ、受け取りな！」

「応、だん殿。お主の仕事、誠感謝する。めいる、胸がでかくてよかつたな。遠慮なく打つてもらえ」

「うわあああん。この人達私の意志なんて無視してるよおおお、止めてえええ、犯されるうううう」

「ガハハハツ、テンション上がってきたぜえええええ！」

「殺すううう！ いぎとなつたら相討ちじゃああああ！」

「……まっ、大丈夫と信じよう」

ダンから刀を受け取った宗司は、そのまま工房に引きずられていくメイルを見送った。

刀を打ち終えた時はすっかり老け込んだと思いきやもうこれだ。

流石は一つの域を極めた男と言うべきか。道は違えど、その在り方には宗司をして賞賛するほかない。

そして再び鋼鉄が打たれて響く甲高い音色を聞きながら、宗司はクロナを改めて見上げる。

「さて、と。ともあれ用があるなら付き合おうか？」

腰に差した刀の柄を優しく撫でて宗司は笑う。

そのどうしようもない悍まじさに戦慄を覚えながら、クロナは己の感情を隠すように視線を切つて「ついてきてくれ」と宗司を伴つてグライドの元へと向かうのであつた。

宗司達がグライドの屋敷に着くと、そこでは中庭で報告がてら行われていた宴会の最中だつた。

飲めや歌えやの大騒ぎである。一体何事かと思う暇もなく、宴会に参加していた傭兵達は、クロナの姿に気付くと手にしていた盃を天高く掲げて出迎えてきた。

「おお！ 我らが英雄の帰還だ！」

「魔族殺しに嘘偽り無し！ 伝説の再来と新たなる伝説の誕生を祝つて！」

「乾杯！ クロナ・クロルキスとメイル・リンクキャットに乾杯！」

誰もが口々にクロナとメイルの活躍を口にしてている。まさしく、子どもが英雄譚を語るかのような言葉の数々は、本来であれば榮譽の一つとして胸を張つて受け取ることが出来るはずだつた。

「えっ？」

「これは、これは……」

しかし、クロナは、そして彼女の隣の宗司も傭兵達からの万雷の喝采は一切耳に入っていないなかつた。

二人が中庭で目撃したのは、陽気に笑い、英雄を祝福する人々の輪の中心。

そこに、見る影もない程に肉体を損壊したリグの死体があつた。

木に張り付けされたリグには四肢のいずれも存在しない。乱暴に切断されたあの逞しい四肢は今、酒に酔いしれる傭兵達が戯れに剣を突き立てて遊び道具と化していた。

だがリグ自身はそれ以上に酷いあり様だった。腹部は裂かれ、中の臓物は全てぐちゃぐちゃに切り刻まれたうえで、表情すら分からない程に切り刻まれた顔や口の中などに付着していた。

リグはあらゆる尊厳と誇りを穢されていた。戦いを見守り、一喜一憂し、祈ることしかしなかつた者達によって罵り者とされていた。

悪意だけで犯された強者の末路がそこにはあった。

確かに、リグは敵だった。恐るべき怪異、生きる災禍、人間では抗しえない脅威としてクロナとメールの前に立ち塞がり、事実、無数の人間を殺してみせた。

そして彼女が知らないだけで、前線では今回以上に人間を殺戮してきたのだろう。

それでも彼は武人だったのだ。強者として戦士に敬意を表し、彼女の価値観を以て戦いという場で覇を唱えていた。

そんな相手をどうしてここまで出来る？

そもそも、お前達に彼を辱める権利があつたのか？

戦いもせずに息を顰めていただけの愚者が。

勝算なく屍を晒すだけだった弱者が。

何もしないで茫然としていた俗物が。

——人間め。

——卑しいだけの、二本足の愚物め。

——だからこそ、お前達の極限に立つ修羅<sup>アレ</sup>はあそこまで悍ましいのか。

「落ち着けくろな殿。それ以上は気付かれる」

「ッ……!?!」

「ふん、理由は知らんが、アレは笑えんな」

鋭い戦意の込められた宗司の気当たりがクロナを一瞬で落ち着かせる。見渡せばクロナの様子を訝しむ傭兵達がチラホラと見て取れた。

「すまない……」

「礼は良い。お主の面子をこれから潰すからなあ」

「何？」

「まっ、見ておれ」

言うが早く、宗司はリグの亡骸に剣を突き立てようとしていた傭兵の一人に近づいて——躊躇なくその体を地面に叩き伏せた。

「がふっ!」

「て、テメエ何——」

「少し黙れ、不愉快だお主ら」

突如として乱暴を働いた宗司に声を荒げようとした傭兵だったが、宗司が殺気と共に鋭い眼光を向けただけで押し黙る。

その無様な負け犬の如き姿が余計に癩に障った。見る影もない死体となったとはいえ、鍛えた戦士の強さを見間違う宗司ではない。

きつと、メイルとクロナが自分の知らない場所で死闘を繰り広げた相手とは彼なのだろう。

——高く、厚い壁として、良くぞめいるの前に立ち塞がってくれた。

感謝の念を込めて、宗司は両手を合わせて静かにリグへ黙祷を捧げた。

その姿にクロナの中に渦巻いていた言いようのない不快感が僅かに洗い流されていく。どんなに宗司が強者と死合うことだけを願う修羅だったとしても、彼にはここに居る者達とは違って良識があるのだと。

そう思った刹那——宗司は腰の鞘から無銘の刃を解き放った。

凜、と鈴の音色が鳴り響く。

音色に溶けて消えてしまいそうになるような心地。斬撃というには美しすぎる旋律を奏でた後、張りつけにされたリグの首と胴体が分かれて落ちた。

「……良いぞ、素晴らしい仕上がりだ」

「な、あ……」

クロナはその一瞬の出来事に言葉すら出なかった。

宗司が行った一連の動きに躊躇も迷いも存在しなかった。

死体を髑りものにした不愉快な相手を叩き伏せ、死者に哀悼の意を示し、直後に試し斬りとして死体を斬る。

それは矛盾なく宗司の中で成立していた。

悪行に憤り、善を尊び、悪を成す。

これが宗司だ。

これが人間だ。

コロナは他でもない宗司のその在り方に恐怖を覚えた。

善も悪も知りながら、そのうえで自分の物差しで動く立ち振る舞い。

人間の極限值。

人の業。

まざまざと魅せつけられた人間の真実。

「ッ……！」

「ああ、くろな殿はそういう顔をするのか、」

誰もが沈黙する中、宗司の視線は憤怒と嫌悪と恐怖の入り混じった表情を浮かべるコロナに向けられていた。

痛い程の沈黙が流れる。

「いやはや、流石は کرونا・クロルキスの仲間だ。良い太刀筋をしている」

誰もが動けずにいる中、拍手と共に現れたグライドによって緊張した場の空気が僅かに緩んだ。

「お主は？」

「これは失礼、私はグライド。今君が斬った魔族の討伐を彼女達に頼んだ依頼主だ」

「俺は宗司だ。まあ見てもらったとおりの棒振りが得意なだけの剣客よ」

「ソウジ、か。珍しい名前と服装だが、もしや暗黒海の向こう側の者かな？」

「暗黒海は知らんが、まあここら一带の者ではないのは確かだよ……ところで、ぐりいど殿と言ったが、これはどういった催し物だ？はつきり言って気分が悪い」



今まさに傭兵達と同じく死骸を斬った人間が言う言葉ではないが、そうやって眉を寄せる宗司にグリイドが苦笑を返す。

「魔族と人族の長年に及ぶ殺し合いを知っていれば出ない言葉だ」

「生憎と世間知らずの根無し草なもので」

「なら教えよう。彼らは魔族が憎いのだよ。殺すだけ殺し、奪うだけ奪っていく彼らに幾度と煮え湯を飲まされ、怯え続けてきたか」

「こやつ等が自ら上げた御印でもないのに弄んでいたのはそれが理由か」

「そういうことさ。君が思うよりもずっと根深い問題なんだよこれは」

「気に入らん」

「だがソウジ君、君も斬ったであろう？」

「首を斬っただけだ。死ねば皆仏、首は洗って供養せねばならん」

そう言うには斬撃を放った直後に浮かべた笑みは愉悦に塗れていた。それが分かっているながら、グリイドはあえて指摘はしなかった。

この恐ろしい剣客の真髄を、彼もたった一太刀を見ただけでまざまざと魅せつけられたから。

そしてそれは傭兵達も同じだ。たった一閃の絶技だけで、宗司がクロナと互角、否、それ以上の何かだと悟る。

「ところで、どうだろう。折角だからクロナ君は別室で私と一緒に飲まないか？ 一応傭兵から報告は受けているが、実際に戦ったクロナ君の話をおききたいんだ」

「……だ、そうだが。くろな殿はどうする？ 俺は一度めいるのところに戻ろうと思うのだが」

「……そうだな。なら私は報告でもしようか」

「よし、それじゃあ話は早い。すまなかつたね君達！ 私達は別室に向かうが好きにやってくれたまえ！」

グリイドの言葉で押し黙っていた傭兵達が再び騒ぎ出す。その喧騒を冷めた目で宗司は見据え、すぐに視線を切った。

「ああぐりいど殿、あの亡骸は丁寧に埋葬しておいてくれ。流石に気に入らん」

「分かった。私の部下にやらせておこう。不快にさせたみたいですが  
なかったね」

「気にするな。アレはアレで慣れてる。人間なんぞ詮詰はそういう類  
の畜生よ」

グライドは困ったように頭を振って屋敷の中へと入っていく。宗  
司もまたこれ以上話すことは無いため、踵を返して歩き始めた。

「ソージ」

そんな宗司を、クロナは思わず呼び止めた。

「何だ？」

「いや、な」

何を言おうとしたのか。咄嗟に呼び止めたものの、それ以上の言葉  
はやはり出ない。

魔族のことや、メイルのこと。

傭兵達のことや、宗司の行動のこと。

そして、これからのこと。

言いたいことは沢山あつて。

きつと、どれもが本当に話したいことではなかったから。

「……何でもない。どうやら、あんな光景を見て気分が悪くなったよ  
うだ」

結局、言葉を濁してもっともらしいことを告げて終わりにする。

自分の中の本当すら定かにならないまま、クロナは曖昧な表情を浮  
かべた。

「まっ、気持ちはわからなくてもないが……そういうことではないだろ  
う？」

その内側の迷いを見透かすかのような鋭い視線を宗司がぶつける。

刀のように心を貫く視線を受けてたまらず顔を背けたクロナを数  
秒見続け、宗司は退屈そうに溜息を吐き出した。

「言いたいことがあるならばはっきりと吐き出しておけ。内で溜めた  
淀みはいずれ腐敗し、知らず己が身すらも腐らせるだけだぞ？」

かつて、メイルが本音を隠して賊を許すと告げた時と同じ。彼女は  
宗司によって殺人という一手で内の熱を全て吐き出したが、もしあの

時吐き出していなければきつと違った結末が待っていただろう。

「それでメールと同じ様となれと？ 闘争に生きるような様を晒せとでもっ。」

クロナはあてつけるように宗司に皮肉をぶつけた。

吐き出した結果がアレならば、今のほうがマシだと。惑いまどつて、迷い続けていたほうが正しいのだと。

「そうさな……うん。お主は正しいのかもな」

「だったら……」

「だがお主の迷いは、ただの言い訳ではないか？」

「言い訳だと？ 馬鹿な、私は——」

「答えなど、もう出ておるくせに」

宗司の断言に、クロナは何も言い返せなかった。

その間にも宗司は一方的に言葉を重ねていく。

「迷っているフリ。惑っているフリ。眼を背けて、言い訳を繰り返し、お主はそこまでして何を守ろうとしている？ 何を庇おうとしている？ いいや、俺が断言してやる。俺達を守る価値はない」

「な、にを……」

「分らぬか？ まだ分からぬと繰り返すのか？」

リグを斬った時に見せたクロナの表情が全てを語っていた。

彼女が迷っているのはそこだ。答えが出ないと迷っているのではない。

その答えを肯定すべきか否か、迷っているのだ。

「俺は人間だ。だが、お主は誰だ？」

いつか、メールも口にした言葉を宗司もまたクロナへと叩きつける。

「見いだせよ、くろな殿……お主の空を埋める解答を」

「私の解答……」

誰もが根差す、絶対の我。

故にと叫び。

これぞと立てる。

唯一無二の答えを、この騎士が導き出したその時こそ——。

「ではな、くろな殿。また何処かで、会うとしよう」  
まるで別れの言葉のように。  
宗司とクロナは別れ——言葉通りに、決別した。

## 第十三話 『魔族殺し』

「しかし驚いたな。このような場所まであるとは」

「元々は前線の拠点小屋敷としてリフォームしたものだからね。このように戦略会議場だったここには、巨人族ハーフも入れるように細工をされていたのさ」

グライドも、辺りを見渡すクロナを見て言葉を交わす。

ここは屋敷の地下にある、かつて人族同士の戦いにおける戦略拠点の名残として残されていた会議場だ。魔術的に空間が拡大されているため、クロナですら容易に動き回れる程に巨大な部屋となっている。

物という物は雑多に置かれた酒樽程度で、どちらかという運動場のような印象をクロナは覚えた。

「まあ理屈はどうでもいいが、地下だとは思えないな」

「驚いてくれたなら幸いだ。さっ、あそこにある酒樽は好きに飲んでくれていい」

「だったら遠慮なくいただこう」

グライドの指示で近くの酒樽ごとクロナが酒を持ってきたところで、上で騒ぐ傭兵達と真逆に神妙な表情でグライドが口を開いた。

「さて……部下から報告は上がっているが、改めて君の口から戦いの詳細を教えてほしい」

まるで罪人を問い詰める憲兵のようなグライドの圧力にクロナは知らず息を呑んだ。

「ああ……とは言っても私も魔族と直接刃を交わしたのは僅かな時間だ。殆どはもう一人のほう、メールの手柄だ」

「やはり、話で聞いたとおり君だけではなかったんだね」

「あのオーガははつきり言って恐ろしい相手だった。おおよそのレベルは300前後、中級魔族に手をかける程の強さだ。レベル差はそこまで感じなかったが、単純な素のステータスが頭一つ違っていたな」

「それはつまり、君以上の剛腕ということかのかの？」

「そうだ、技ではほぼ互角だったが、力の一点で——」

朗々と戦いの詳細を語り始めてからどれほどの時間が経過しただろうか。話は今回の戦いだけではなく、クロナがこれまで経験してきた戦いにまで及んでいく。

地下ということもあつて時間を気にせず話続けていたが、いつの間にか空いた酒樽が幾つも置かれていることに気付く程度には時間はあつという間に過ぎ去っていた。

「……しかし、こうして強い戦士の話を聞くのは楽しいな。私は見ての通り戦士としては不甲斐なくてね、時折、生粋の戦士が羨ましくなるよ」

そう言うグリイドの眼は、淡い炎のような揺らぎが宿っていた。

憧憬のようで違う感情のような不可思議な視線。その正体を酒の熱で誤魔化して、グリイドもまた自賛していた酒を一息で飲み干した。

一方、そんなグリイドの様子など知らないクロナは小さな苦笑を浮かべる。

「羨ましい、か」

こうしてこれまでの戦いを口にして、むしろ自分の不甲斐なさに辟易する。

中途半端であいまいな強さ。誇るべき矜持はあるが、矜持を貫ける強さが自分にはない。

いや、強い弱いではないのだ。その点で言うならば、リグという絶対強者を相手に弱さを言い訳にせず戦い、勝利をもぎ取ったメイルは何なのか。

否、あれを強さと言うべきか。狂奔の果て、死線を嬉々として跨ぐ狂気の心理は強さなのか。

「分からなくなるよ。強さとは何なのかと」

「君程の騎士でも……いや、君程の騎士だからこそそう思うのかな？」

「私など、まだまださ……ソージやメイルに比べたらね。いつだって迷いっぱなしで、時折彼らの真っ直ぐさに胸がかき乱される」

ふと、いつかどこかで宗司が言っていた言葉を思い出す。

正道を歩く迷子。その迷いが覚悟を鈍らせ、在り方を曇らせている。

彼女の戦いが、これまでの歩みが、迷いと惰性を如実に表わしているのは理解した。

「……その迷いの正体は、もしかして件の魔族殺しの時からかい？」

グリイドの鋭い指摘にクロナは押し黙った。

それでも口を開こうとして、再度閉じ、だが己の中の躊躇いを振り払うように頭を振ったクロナは、視線を下に落としたまま淡々と語り始めた。

「……これから話すのはただの懺悔だ」

前置きを一つ。前置きという言い訳を並べる自分の愚かしさに自嘲も一つ。

「私は魔族殺しではあるが——魔族に勝ったわけではないのだよ」

何処からこの話をするべきだろうか。

ああそうだな。私がどうして魔族との最前線に兵士として参戦したのかという理由から話そう。

当時、私を含めた半巨人とも呼ぶべき者を含めた、いわゆる半魔と呼ばれる人外が生活する隠れ里のような場所があった。

魔族に孕まされた女の子もだった者や、先祖返りによって魔の血を覚醒させた者。人型に近い形をした最下級魔族の性奴隷の腹から生まれた者。まあ色々な事情の人間が居たが、いずれも魔族とも人族とも馴染めない迫害された者ばかりが暮らす場所だ。

とはいえ、グリイドは知っている通り半巨人の種族は辺境で小さな領土とはいえ国を持つことを許された希少な半魔なので、私以外の半巨人の者はその隠れ里には存在しなかった。

私がそこで育った理由かい？ 簡単な話さ、私はいわゆる先祖返りの類だったようですね。普通の人族の母親だったが、私のせいで出産を

前に死んでしまったようだ。その後、紆余曲折あつて隠れ里に捨てられたという口だよ。とはいえ、本当の両親の顔は覚えていないからどうでもいいがな。

——前置きが長くなった。それからそこで成長した私は戦士として一角の実力者となった。そして隠れ里に住む者達のために戦士として魔族達と戦うことを決めただ。

最初は仕送り目的の軽い気持ちだったが、実際の戦場で人族の困窮具合を知ってすぐに戦う理由は変わったよ。隠れ里を守る。その信念だけを支えに戦い続けた。

それからどの程度戦ったかは分からないが、気付けば人族連合の中でも一目置かれるようになり、状況は逼迫しているというのに、何処か充実感すら覚えていた時期だ。

だが私の戦いが、ただ運がよかつただけだと思ひ知るのはすぐだった。

ある日の戦場。いつも通りにイシスの大結界までの血路を開くべく進軍していた私達の前に魔族が立ち塞がったんだ。

しかも純粋な巨人族。私と同等の巨躯でありながら、秘めた膂力は私を遥かに上回る恐るべき怪物だ。

あの時の感覚はどう表現するべきか……。ともかく、恐かった。

あいつの手にする金属の塊が振るわれる度に、先日まで笑い合っていた仲間達が無数と散った。

私達が手にする武器の悉くが奴の体を貫けず、魔術の悉くも通用しない。

一方的な蹂躪。魔族という種の圧倒的すぎる力をまざまざと見せつけられて、瞬く間に私達は撤退を余儀なくされた。

そしてあの場で唯一戦いと呼べるものを成立することが出来た私達が、皆が撤退するまでの時間を稼ぐために殿として残ったんだ。

戦いは殆ど一方的だったよ。今日戦ったオーガ相手と似たようなものだ。私はひたすらに蹂躪され、され尽くされ……。それでも見出した隙を突いてアイツに一手だけを返せたんだ。



そう、一手だけ。

私がああの戦いで届かせることが出来たのは……一手だけだったんだ。

半ば無意識に振り抜いた一閃であった。

暴風雨の如き怒涛の連撃の最中、一瞬だけ見出した隙を戦士の勘が見逃さず、奇跡的な刹那を縫ってクロナの放った刺突が巨人の胸に突き立っていた。

「ッ!?!」

「……ハッ、やりおるのお!」

クロナの脳裏を動揺と困惑が満たす。

動揺は一撃を返せたこと、困惑は相手からの反撃が無いことだった。

何故? という問いかけの前に、切っ先が僅かに突き立った刃を見下ろした巨人がゆっくりと一步引く。

「よくやった。素晴らしい戦士よ、お前さんになら儂の首をくれてやってもいい」

ずるりと刃が抜けて血の橋を描き、数秒とせずに千切れて消える間に、巨人は朗らかな笑顔を浮かべてクロナに賞賛の言葉を送った。

一体何故そのようなことを言うのか。巨人の理解出来ない行動に、クロナは剣を構え直すことすら忘れて、皺まみれの顔をさらにくしゃくしゃにして笑う巨人を見ている。

「つたく、人族はどういつもこいつも逃げ惑って諦める者ばかり。よく観察すれば儂がどのような状態か分かっただろうによお……」

そうぼやく巨人は全盛期のころより細くなった腕を振って苦笑を浮かべた。

「だが良い。お前という強き戦士と戦い、そして可能性を感じられる一撃を受けることが出来たのだ! これで儂に残された寿命に価値

が生まれるというものよ!」

「どう、いうことだ?」

「どうもこうもあるまい。闘争を根幹とする魔族のもう一つの本能である人族滅亡の宿業、この二つを満たすために素晴らしき人族の戦士と戦い、命をくれてやりたい……そう思うのが普通だろう?」

その主張は常人からすれば理解出来ないものだった。

だがこの巨人は、否、魔族という存在はそういうものなのだ。普遍的な善悪の基準は存在せず、闘争と人族滅亡のみを根幹に置いた異形。

人を殺すだけに生まれた殺戮機械。

それでもそこには戦士の誇りがあり、守るべき矜持というものがあつた。

「だから儂を斬れ、クロナ・クロルキス」

老巨人は自身に一撃を与えたクロナの名を誇らしげに呼んだ。

「儂を斬り、さらに研ぎ澄まされた力で他の魔族と戦い続けるんじゃ」「狂って……そんなの狂っている! 理解出来ない。訳が分からない!」

「狂っている、のお……いやさ、最期に聞いておきたいのじゃが、良いかの?」

「なんだ?」

警戒するクロナを横目に、瓦礫に背を預けて地面に尻をつける。そうしてゆっくりと空を見上げた老巨人はゆっくりと問いかけた。

「なあクロナよ、儂らは狂っているのか?」

「当たり前だ! 勝手に人族を滅ぼそうとして、かと思つたら勝手に満足して命を差し出す! 狂っているとしか言いようがない!」

「そうか、そうか……人族の価値観では魔族の生き方はおかしいのか」  
クロナは何を今更と吐き捨てたい気持ちを堪えて、代わりに握った両手剣に込める力を強める。

この戦いで思い知った魔族の矜持。これがこの巨人だけではないというなら魔族は種族として狂っているとしか言いようがない。

だが老巨人は軽く肩を竦めると改めて言葉を紡ぐ。

「ではなクロナよ……お前さん達はまともなのか？」

「……え？」

「儂らを狂っていると言うがなあ……儂らはずっと——お前さん達が狂っていると思っておった」

老巨人の言葉にクロナは言葉を詰まらせた。

人々が魔族を狂っていると思うように、魔族が人族を狂っていると思う。

在り方が根底から違うからそう思うのか。闘争を根幹に宿すからこそ理解出来ないのか。

否。

違う、違うのだ。

理由は分からないがその時クロナは思ってしまった。

これは、そういうことではないのだと。

「儂らが人族と戦う度にお前さん達は多種多様な表情を見せた。怒り、嘆き、悲しみ、諦め、命乞いや他者を生贄に差し出す奴もいたのお」

「それ、は」

「なあクロナ。少なくとも儂らは戦いには真摯に向き合っておるぞ？」

相応しい戦士とは雄々しく戦い、平等に殲滅してきた。それはここに来る前、魔族同士で戦っていた時も同じじや。だからこそ、魔王様という強者を筆頭に誰もが従っておる」

その点人族はどうだろうか。

彼らもまた雄々しく戦う者が多い。初め、魔獣との前線に立つ兵士は果敢に戦い、魔族相手でも引くことすらしなかった。

しかし、その一方で人族は魔族のように容易く連携は出来ていなかった。

大して強くもなければ頭もよくない王族や皇族、貴族諸々、彼らの無駄な矜持のために足を引っ張り合い、今日の状況を招いた。

それでも人は変わらない。まさに種族滅亡を控えながら未だに、賤め、蔑み、騙し、嘲り、互いに足を引っ張り合う。

「お前さん達は狂っておるよ。だからこそ、儂らはお前さん達を滅ぼしたいと思うのかのお……」

「私、は……人は……それでも……！」

「それでも、何じゃ？」

「戦うだけのお前達と違って、人には誰かを愛する気持ちがある！  
悪を憎み、正義を成そうとする意志が——」

「そう、それじゃ」

老巨人はクロナの言葉を遮ってニタリと不気味な笑みを浮かべた。  
まさしくそれなのだ。

それこそが人族の——人間の狂気なのだ。

「善と悪とは何じゃ？ 何故そのような枠組みを作りながら……悪を  
成す？」

「ッ……」

「少なくとも儂らは良いも悪いも無い。というか、ここを滅ぼしに  
来て、人族の書物を読んだり会話をしたり、勝手に殺し合うのを見て初  
めて知ったのじゃ……善悪とは、何じゃ？」

蔑み、貶し、見下すことは魔族だつて行うだろう。憤り、恨み、妬  
むことも魔族はするだろう。

だがそこに良い、悪いはない。

彼らの思考が行き着く先は強者が行うことだ、ということだ。

「まあ、なんとなくわかる。儂らも強者が上に立ち、弱者が下に付く。  
そう考えれば強者が善で、弱者が悪なのじゃろう？」

「そんな弱肉強食など……！」

「気に入らんか？ じゃがな、力も知恵も無い雑魚が上に立っておる  
お前達のほうが儂らには理解出来ん」

だからこそ、老巨人は問うのだ。

「なあ、儂らを狂っていると断じた強き戦士よ……お前さん達の正気  
は、誰が認めるのじゃ？」

告げられた言葉。

告げられない解答。

狂気の魔族と、正気の人族。

否。

否。

本物の正気は、どちらかで。  
本物の狂気は、どっちだ？

「常に迷いなく戦う儂らは狂っておるか？」

老巨人との戦いの後、クロナが幾度となく戦った魔族の全てが戦いのみに生を感じる狂人だった。

だが誰もが常に正々堂々と敵対者を迷いなく滅ぼす愚直さを持っていた。

狂いはなく、真つ直ぐな生きざま。

「善悪の基準を容易く乱すお前さん達は正しいのか？」

老巨人との戦いの後も前も、クロナは様々な人種を見てきた。

魔族のように純粋ではない。迷い、怯え、奮い立ち、戦い、死んで、泣き、喚き、絶望し、奮い立ち、また死んだ。

その間も後方では我関せずと生を謳歌する人が居て、くだらないこととで人同士足を引っ張り合う。

それが良いことだとも、悪いことだとも知りながら、善悪を知り尚、悪を成す愚かな者達。

正しさを理解しながら、狂った生き様。

「恐ろしいのお……人間は」

「ツ……うわあああああ!!!」

返答がないという恐ろしさを口にする老巨人に、クロナは己の中で生まれた迷いごとその首を斬り捨てる。

後に残ったのは静寂と、今に至るまで燻り続ける迷いの灯火。

クロナ・クオルキス。人種が誇る偉大なる『魔族殺し』。

それはきつと、勝利の栄光と呼べるものではないのだ。

## 第十四話 『散滅』

「それから私はずっと、あの魔族が残した言葉をまざまざと見せられてきた。勝手に期待し、絶望し、託し、投げ捨て、消えていく人々の姿をな……」

善を尊び悪を憎む。

これは人族が持つ尊い在り方で、魔族には決して持ちえない善性だと思っていた。

だが老巨人の指摘によってクロナは迷ってしまった。

善悪無く戦う魔族は、純粹だ。正しい、正しくないの前に、純粹で迷いが無い。

そもそも魔族の在り方を間違っているということすら、人族が勝手に決めた善悪のフィルターに通した指摘にすぎない。

ならば魔族を滅ぼそうとする人族は正しいのか？

殺戮を悪と知りながら、仕方ないと言って殺戮で対抗する人族も悪ではないのか？

だが人族は正義を掲げている。

我々は正しく、攻め滅ぼそうとする魔族は間違っている。

奴等を滅ぼし正義を示すために戦おう。

その旗印たるクロナを守り、生かそう。

正義の御旗は我にあり。

我らこそが正義の使者である。

「……私、は」

「ああ……ようやく得心がいった」

未だに迷っているふりをするクロナに対して、グライドはクロナが何を迷っているのか理解した。

いや、理解出来ない方がおかしい。むしろここまで語っていないながら、どうしてクロナは未だに悩んでいるかのほうが理解出来なかった。

だからこそ、口にする。

「君は人族が——人間が恐ろしく、そして嫌いなんだね」

眼を背けていた真実がクロナの前に突きつけられた。

「……あ？」

瞬間、クロナの頭は空白となった。

嫌い。

怖い。

直後、空白の頭蓋に二つの単語がぴつたりと嵌まった感覚をクロナは覚えた。

「う……げええええ！」

同時、その顔が青白くなっていき、堪らず口から吐瀉物がぶちまけられる。

脳内の爽快感とは違い、体調は絶不調そのもの。何故と自問する意味すら無い。

認めざるを得なかった。

クロナ・クロルキスは人族を嫌悪し畏怖している。

だが本来ならこの感情は芽吹くことは無かったはずだ。

迷いという種が感情の華を咲かせた理由は一つ。

人間の極地を知っているため。

「ソ……ジ……！」

「そうか……彼なのか。ああ成程、彼は薄い血潮を滾らせる程の純正品だったのか」

グライドの言葉すら耳に入らない程、今やクロナは己の脳髓を満たした解答に心酔していた。

あの男こそが人間だ。

人族という嫌悪と畏怖が行き着く果て、善悪を知らながらそれら全てを超越して我を張る狂気。

——この身に燻る魔の血が、コイツを殺せと叫んでいる。

「アレを、私は……！」

滲んでいく。

先程まで安穩としていた空気が歪んでいき、クロナの周囲で殺気が膨れ上がり破裂の瞬間を今か今かと待ち望む。

そんな極限状態の中、パンツと乾いた拍手の音が鳴り響いた。

「素晴らしい」

淡々と拍手を続けるグリイドが吐瀉物で口を汚したクロナに、喝采を送っていた。

今や戦士としての殺気を隠しもしないクロナの眼力を受けて、その顔には一切の恐怖は感じられない。

むしろ余裕すら感じられるその態度に、クロナは僅かな警戒心を覚えたと。

「クロナ・クロルキス。我々が魔族を破りし恐るべき人の戦士の素顔がまさかこのようなものだったとはね」

「我ら、だと？ ……貴様、まさか」

「ほう、その口ぶりだと、どうやらリグから聞いたのかな？」

グリイドがクロナを見る視線には隠し切れない好奇心の色が宿っていた。

全身を舐め回されるような不気味さにクロナの背筋を嫌な汗が流れる。

「初めましてだね、人間」

「魔族か!？」

「その通り、正解だ」

立ち上がったグリイドの贅肉ばかりの体が不気味に蠢いた。体内に埋め込まれた何かが皮膚を突き上げ、体内を駆け巡る。すると、グリイドの贅肉が徐々に失われていき、ふくよかだった肉体に贅肉と呼ばれるものは一切存在しなくなった。

そして爪先から徐々に肌の色が漆黒に染まっていき、真紅の瞳が鋭くクロナを射抜く。

「ふう……いやあ、この姿になるのは久しぶりだ」

体の調子を確認めるために腕を回すグリイドは、最早先程までとは別人だった。

だぼついた上半身の衣服を脱ぎ捨てれば、鍛えこまれた筋肉を搭載した戦士の体が現れる。精悍で逞しい青年の姿となり今一度二人を見たグリイドは、優雅に一礼を試みさせた。

「改めて自己紹介といこう。私の名はダグラ・ゼノン、アバド流通街に



根差した魔族だ」

刹那、これまで巧妙に隠されていたグリイドの——ダグラが内包していた莫大な魔力が噴出した。

物理的な圧力を伴う魔力の奔流がクロナを襲う。反射的に手元の刀で魔力の波を斬った宗司だったが、クロナは成す術なく魔力で吹き飛ばされて壁へと激突した。

「ガ、ハッ……!」

「む……これは失敗した。加減を間違えたかな?」

衝撃で地面に倒れたクロナを見て、ダグラはわざとらしく肩を竦めた。

「ぐ、う……! どういう、つもりだ貴様あ!」

しかし、即座に立ち上がったクロナは激情の赴くままにダグラへと突撃する。最早、そこには一切の躊躇いもなく、そのまま押し潰す勢いで天空から鉄塊を振り下ろしていた。

石畳を砕く程の踏み込みからの渾身の斬撃がダグラを襲い、当然の如くダグラの片手で受け止められてしまった。

「残念ながらこの程度では私の障害にすらなりはしない」

「ッ……!」

握られた剣を引き戻そうにも微塵と動かない。その膂力と感じる圧力は、つい先程死闘を繰り広げたりグと比しても圧倒的。

これまで感じたことも無い力に戦慄が走った。

「貴様、ただの魔族ではないな……!」

「そうだな、あえて細かに言うならば私は悪魔の最上位種、魔神種と呼ばれる存在だ」

「魔神種、だと……!? 馬鹿な、イシス大結界の内部にそんな奴が存在したのか!」

ダグラの種族名を聞いたクロナの表情が驚愕に歪んだ。

魔神種とは、膨大な種類の種族が存在する魔族の中でも、数が少ない希少種だ。それこそ人族側には文献でしか記されていないほどで、現在確認されていないことから魔族側の領土に存在するだけだと語られていた。

それほどに希少な存在である上に、文献には魔族の中でも頭一つ以上抜けた実力の上級魔族として記されている。

つまり、ダグラの言が真実ならば敵のレベルは最低でも500以上。この日、クロナとマイルがタツグを組むことで、辛うじて打倒したオーガの戦士であるリグを遥かに上回る強者。

リグが探していた魔族の正体。あろうことか人族側の有力者に化けていたというのも最悪だった。

「初めは、ちよつとした疑問と次の勝利へ向けた調査からだった」

戦慄を隠せないクロナに、ダグラはもう一方の手に持っていた優雅にグラスを煽ると静かに語りだす。

「私は魔族の中でも特殊な存在でね。我らが愛すべき魔王、クラウディア・ザ・ウロボロスが前回の勇者に敗れてから数十年後、人族を知り尽くすためにこの大陸に移り住むことにしたんだ」

「移り住む？ あり得ない、魔族は私達を殺すことしか考えていない奴等だろう!？」

「君の指摘は的確だよクロナ・クロルキス。確かに我々は三大欲求を超えた本能として、戦闘と人族抹殺を宿している。しかしね、君達が食事や睡眠や性欲を抑えられるように、魔族の本能も抑えようと思えば抑えられるのだよ。まあ私は憑依魔術を嗜んでいたからね、他の者よりも本能の抑制は簡単だった」

そうして、ダグラは今日に至るまで様々な人間に憑依して人族という存在を観察し続けてきたのだ。

時には農家の三男坊。時には成金の商人。時には娼婦として過ごし、王族として過ごしてきた時期もあった。

人族を影で殺しながら、彼らの営みを観察していた。

「そして君達を見続けている内に、私の中に生まれた疑問は、今尚膨れ上がり続けて私の頭を苛んでいる」

魔族と違って複雑怪奇な人間の価値観は、あらゆる立場に憑依したダグラであっても、いや、あらゆる立場に存在したダグラだからこそ理解が出来なかった。

「君達は一体なんだ？ どうでもいいことで争いを起こし、かと思え

ば戦うべき時に戦わない。そして現在、種族の滅亡を前にして逃避する者や戦う者、享楽に耽る者や我関せずと気ままに生きる者、その他数えられない程に大量の価値観で生きる者で人族は溢れている。弱肉強食で生きる魔族とはまるで正反対だ。だがね、そんな君達にも一つだけ共通点がある」

共通点と言う言葉にクロナが反応を示した。それを見て楽しそうに微笑んだダグラが小さく頷く。

「そうだ、そうだともクロナ・クロルキス。君が語ってくれた老巨人の残した言葉……彼らは善悪という価値観を知っているのだよ。人族は誰もが良いことと悪いことを知っていて——平然と悪逆非道を成してみせる」

一般的な道徳観の持ち主だけではない。例えばサイコパスと言われる存在ですら、良いことと悪いことは知っている。

問題なのは、人は誰もが悪いと知りながら悪を成せることにある。た。

「なあ、何故なんだ？ 君達は何故善悪という価値観を持っていないながら、良いことだけを行えない？ 悪いことは楽しいからか？ 良いこととはつまらないからか？ 面倒だから？ 簡単だから？ ともあれ、だとしたら何故そのような価値観を抱いた？ 善悪が無ければ、そのような面倒くさいことを考えなくてもいいというのに？」

ダグラには、魔族には分からない。

彼らは力こそ全てであり、戦いこそが生きがいであり、良いことなのだ。

「私は知りたいのだ。何故聖剣は人族を救う？ 君達に価値があるのか？ 意味はあるのか？ ……君達が聖を、正しさを掲げられる理由はなんだ？」

結論としてはそこなのだ。

前回の魔王と魔族達が、何故聖剣の担い手に敗北したのか。ではない。

何故、聖剣は人族を選んだのか。

「ずっと人族を観察したことで、良いと言われることと、悪いと言われ

ることの違いは知識として理解出来た。だがまだ完全に理解に至ったわけではない」

「ツ……ここで正体を明かす理由はなんだ？」

クロナが息のかかる距離でダグラを睨む。あるいは、彼の詰問から逃れるようだった。

「貴様のこの圧、上の鈍麻達はさておき、ソージとマイルは察するぞ？」

貴様も奴の剣捌きを見たはずだ。アレは、貴様では届かん」

ダグラも宗司の凄味と、隠し切れない実力の差を理解していないわけではないはずだ。むしろ、人を観察し続けたことにより、宗司こそが人間の極点だと確信すら持っていた。

彼らの血が絶やさんと願う人間の権化。嫌悪と侮蔑こそが相応しい、善悪を超越した歪なる者。

故に、ダグラは敗北を悟っていた。

「無論、分かっているさ。私も本来はここで正体を明かすつもりはなくてね。そもそも、魔族が私を察知したと知って、別の場所に逃げる時間稼ぎとして君達を雇ったのだが……もう、いい」

「もういい、だと？」

「ああ、そうさ」

答えは得たのだ。

いや、答えに至る可能性を見出したと言うべきか。

「君だ、クロナ・クロルキス。人族でありながら魔族としての血を発現させた者よ。人を嫌悪した君は、人族の本質を見抜いたのではないかい？」

彼女が見せた嫌悪と憎悪。

この場で語られた彼女の真実と、突きつけた解答が証明した。

人でありながら、魔として人を突き放した存在、クロナ・クロルキス。

魔族だけでは理解出来ない人間の悍ましさを、魔族として語れるのは彼女だけだと。

「たわけたことを抜かすなあ！」

クロナは両手で強引に掴まれていた剣を引きはがした。数歩、距離

を離れたクロナをダグラは追おうとはしない。ただ、迎え入れるように両手を広げるだけだ

「たわけたとは、どういうことだい？」

「人を嫌悪するだ?!? そんな、そんなこと!」

「そう言ったつもりだが……嫌かね？」

「当然だろう! これまで貴様らにどれだけの仲間が殺されたと思っ  
ている!? 酒を飲み交わした者も! 憧憬を向けてくれた者も!

信じてついてきてくれた者も! 彼らを憎悪するのではなく、貴様ら  
を憎悪する理由ならば腐る程あるぞ!」

「誰も彼もが、君に勝手を押し付けた愚物だ」

「ツ……!」

「君という存在にだけ全てを託した者だろう? かつて、聖剣の勇者  
へ向けられていたものと同じだ。あの時から、人族は全くもって成長  
していない……むしろ、悪化していると言ってもいい」

その証拠がこの街だ。

アバド流通街。前線より逃げ出した敗残者達が最後に行き着く楽  
園の如き煉獄。

現実から目を背け、惰性で生き続ける落伍者達の末路をダグラは  
知っている。

「我らのように強者を求めて戦い、死ぬときまで笑うことが出来る魔  
族とは違う。自分達だけの善いことを求めて足を引っ張り合い、平然  
と悪行を成し、駄目と思ったら戦わずに蹲る。彼らは何だ? 彼らは  
何故生きている?」

「黙れ……」

「教えてくれ、クロナ」

「黙れ、黙れ……!」

「君が人間を嫌悪する理由を聞かせてくれ」

「黙れえええ!!」

絶叫しながら、クロナは剣を握り直してダグラへと突撃した。

かつて否定するために老巨人の首を斬り捨てた時と同じように、今  
再び己の頭に宿った答えから目を背けるために。

もう無駄だと分かっているながら、剣を振るう。

「その自己矛盾！ ハハハハッ！ 素敵だなクロナ！ 君は実に人間らしいよ！ 正しい答えを知りながら、間違った行動を起こす君もまた——」

「黙れよおお!!」

先程とは違い、クロナの拳をダグラは後方に飛んで回避した。その影を追い続けるクロナだったが、いずれもダグラの影すら捉えることは出来ない。

当然だ。リグにすら勝てない自分が魔神種であるダグラに勝てるはずがない。

頭では分かっているでも戦いを続けるしかなかった。

「うおおあああ!!!」

刃を振るう。

刃で払う。

脳裏の答えを斬り捨てるべく。

だがどんなに足掻こうともクロナではダグラを黙らせることは出来なかった。

振るう刃は一度たりとも敵手を捉えず、当てられたところで痛みを与えることすら叶わないのは眼に見えている。

それでも振るうのは何故か。

もうクロナは訳が分からなかった。

老巨人によって突きつけられた人間の不気味さと、分不相応の魔族殺しとしての称号。

宗司とメールによってまざまざと証明された人間の根幹。

ダグラによって理解させられた人間への嫌悪と憎悪。

もう分かっている。

分かっているのに否定したいのは何故だ？

「私はああああ!!」

剛剣がついに会議場の壁を砕いて散らした。

直後、場内に仕掛けられていた空間拡大の魔術が解除され一気に縮小が始まる。

「ッ!?!」

「おっと、これでは生き埋めだな」

迫りくる壁の圧力にクロナが息を呑んだ刹那、これまで回避行動しか行つてこなかったダグラが初めて動きを見せた。

「インフェルノ」

片手間で右手に収束させた魔力は、物理的な干渉すら起こすレベルの密度と量。上級魔術規模の魔力を即座に練り上げた直後、単一詠唱で放たれた魔術は巨大な炎の柱となって地下から地上までを貫いた。

「ふむ……どうやら私の言うことを聞かずにまだ同胞を弄んでいたようだな」

突如発生した炎によって騒然とする宴会場を、炎の柱より現れたダグラが冷めた眼差しで見据える。そこには先程よりも凄惨な肉塊となつたリグの死骸が地面に転がっていた。

その死骸にダグラは片手で引っ張つてきたクロナの顔を無理矢理向けてさせる。

改めて見せつけられた人間の醜悪さの証明。この邪悪と醜態の源泉こそ、ダグラが知りたい人間の在り方、クロナにとっての悪夢。

「見給え。彼らは平然とこのような所業を成す」

「う、あ……」

「そして、ほら。見ろよ彼らを、怯え惑う彼らの姿を」

グリイドとは似ても似つかないダグラを見た傭兵達のいずれにも恐怖の色が見えていた。

人族最強の兵士であるクロナをひれ伏せさせるその姿。漆黒の肌と立ち込める邪悪な魔力を感じて、新たな魔族の襲撃に怯え、絶望している。

先程まで死骸となつた魔族を嬉々として嬲り者にしていたというのに、今や新たな脅威に震えるしか出来ない哀れな存在。

「本当に、気持ち悪い」

「うわあああああ!!!」

咆哮をあげて伏した状態から強引に振るつたクロナの拳を、ダグラは空へと飛んで免れる。その間に体勢を立て直したクロナは、空を舞

うダグラを睨もうとして、瞳の中に揺らめきが発生した。

「クロナさん！」

「魔族殺し！」

「クロナああ！」

そんな彼女の背に傭兵達からの声が降り注ぐ。いつもと変わらぬ不快な声援。誰も、自分では何かを成そうとしなくせに、平然と悪意だけはぶつける弱者の群れ。

「お前が戦うなら俺もやるぜ！」

「そ、そうだ！ ついさつきだつて魔族の奴を殺せたんだ！」

「ああ、俺達が力を合わせればあいつだつてやれるぞ！」

もう、駄目だった。

偽れない。眼を背けられない。突きつけられた解答に、違うと吼えられる意味が見いだせない。

「黙れ!!」

口から出たのは、ダグラだけではなく自分を取り巻く全てに向けた叫びだった。

「ほお？ ようやく人間の——」

「貴様もだ、囀るな魔族」

誰も彼もが、最早煩わしかった。

善悪に狂った人間も。

昆虫のように本能だけしか無い魔族も。

もう充分だった。

今や、全てが嫌悪に満ちていた。

「分かっていたんだよ、ずっと、ずっと前から」

クロナは、懐から一枚の白い布を取り出した。

真ん中に穴が空いたその布は、ただの布ではない。かつて、取るに足りぬという理由で自分に託された聖遺物の亡骸。

聖骸布ハツク。

万全の状態であれば世界すら変革できるこの遺物を握り締めたクロナは、漆黒の意志に染まった眼でダグラを、そして、背後の人間共を見た。



「私は分かっただけで目を逸らしていた」

かつて、共に居るのが楽しいと思えた仲間たちが居た。頼りにしていた大人が居た。守るべき子ども達が居た。

そして、僅かな間とはいえ、共に旅をして笑い合った『友達』が居た。

「でも、ああそうさダグラ。貴様の指摘した通りだ。私はね、きつと、魔族として目覚めてしまったのかもしれない」

理解させられた人間の業。善悪を認識して悪行を成す悪性の本質。

いつそのこと、闘争だけを是としている魔族のほうはまだ純粹で好ましいとすら思っていた。

だが、今は違う。

「しかしダグラ。貴様を見て考えが変わった」

「私を？」

「ああ……本能を喪失した魔族である貴様は、命令だけを実行するゴレムと変わらない。いや、魔族というのは本質的にそういうものだ」と理解した」

問答の中でのダグラはあまりにも無機質すぎた。人間を観察する手前、本能を抑圧しすぎた結果、本能を喪失した魔族の成れの果て。

理性というにはあまりにも機械的な魔族と、理性というにはあまりにも矛盾だらけの人間。

ああきつと、どちらもまともではないのだろう。

それでもまだ——魔族のほうがまともなのだ」と結論した。

「教えてあげよう、ダグラ」

クロナの手の中で聖骸布が淡い光を生み出した。

輝きは徐々に熱を生み、数秒もせず鉄の手甲越しでも熱さを感じる程の熱と閃光がクロナを飲み込んでいく。

だが不思議とそこに痛みは存在しなかった。むしろ、こみ上げる全感覚に高揚すら覚えてしまう。

そんな感情の昂りすら沈める内の激情を支えにして、クロナはただひたすらに聖骸布へと祈りを捧げた。

「人間というのは、狂気だ」

最早、世界を改変する力は聖骸布には残されてはいない。しかし、生命を一つ改変するだけの力ならば存在していた。

聖骸布より与えられる情報によって、クロナは今出来ることを行使していく。その中に、宗司かメール、どちらか一人ならば存在ごと消滅出来る力も存在したが——却下した。

「人間を理解することなんてできない」

どちらか一人では駄目なのだ。

悍ましき人間。正気の骸と化した修羅を、そして何れはそこに至る可能性と、歪さを持ち合わせた人間を滅ぼすために行うべきは一つ。

「前提を間違えたなダグラ。人間なんて、あの様としか言えないのさ」  
刹那、クロナの体内で光が弾けた。

一つ一つの粒子が、これまでクロナを塞ぎ止めていた見えない壁を砕いて、空っぽの肉体を満たしていく。

気を抜けば自分が全て漂白されるような力の濁流。聖剣による力の付与とは違うクロナ自身の根幹すら作り変える力の補填。

だがその濁流の中で、不思議とクロナは自分を見失うことは無かった。

もう彼女に迷いはなく、あるのはひたむきなまでの純粹さだった。

それは魔族のように真つ直ぐで、人間のような強欲で。

宗司との出会いからこの日に至るまでの偶然。振り返れば血と惨劇で満たされた日々が育んだ確信が、聖骸布による自己改変でも穢せない自我を支えていた。

「あの、様？」

「そうさ」

光に包まれるクロナを、傭兵達は言葉もなく見守って——否、息を潜めて怯え竦んで見上げていた。

神々しさすら感じられる美しい光景でありながら、彼らが感じるのは得も言われぬ恐怖だった。

きつと今から取り返しのことか起きる。

責任を全て押し付けてきたツケを払わされる時が来たのだ。

そしてダグラもまた、クロナに対して魂を震わせるような畏怖を覚

えていた。

「何だ、これは？」

ダグラの疑問は、その場に存在した全てが共有した疑問だった。光が収束していく。純粹無垢な光が飲み干され、次々にクロナが纏っていたはずの鎧が剥がれ落ちるように地面へと落下していった。

そして、光の中よりソレが現れた。

衣服を一枚も纏っていない全裸の乙女がそこには立っていた。地面に溢れる程の黒い髪で覆われた肌には日焼けも無く傷一つも存在しない。まるで生まれたての赤子のように穢れないというのに、黒髪の間より覗くその眼はこの世の汚物を全て纏めたように醜い漆黒だった。

「クロナ、なのか？」

「ああ、そうだ」

今となつては長大すぎる両手剣を、その細くたおやかな右手で造作もなく持ち上げたクロナが肯定の返事をした。

だがそれは一見ではクロナとは思えない程に様変わりしていた。

見た目も当然だが、放たれる圧力が、魔力が、膂力が。悉くがこれまでとは別次元の領域。

たった一瞬で現れた超越者。聖骸布を切っ掛けとして人間と魔族の全てを発現させた孤独の異形。

「私はクロナ・クロルキス」

刹那、ダグラの体が斜めにずれた。

「あつ？」

遅れてこみ上げる熱血を吐きだし、斜めに切断されたダグラの体が地面に倒れる。見上げれば、いつの間にか両手剣を振り抜いたクロナがダグラを見下ろしていた。

「かつて、魔族殺しだった者だ」

そしてダグラが何かを口にする前に、大上段より振るわれた両手剣がダグラを両断する。

たった一瞬のうちに、魔神種と呼ばれる上級魔族は絶命していた。

「……」

「……」

常識からは考えられない展開に、戦いを見守っていた傭兵達は言葉もない。だがそれも数秒、徐々に色めき立ってきた傭兵達は、すぐに歓喜と賞賛の声をあげ始めた。

「スゲエ！ スゲエよ！」

「何だアレ、訳わからねえけど、アレが魔族殺しの真の実力か!？」

「伝説だ！ 新たな伝説が生まれたんだ！」

「クロナ・クロルキス！ 我らが魔族殺し！」

「ああもう滅茶苦茶だがめでたいのは確かだ！ おい！ 吹っ飛んだ中でまだ飲める酒を持つてこい！」

「人族反撃の日だ！ 今度は俺達が魔族を追い詰める時が来たんだ！」

クロナを中心とした傭兵達の歓喜の声は収まらない。だがそれは沈黙し続けるクロナから目を逸らす行為のように見えた。

だが彼らは気付きながら気付こうとしない。自分達が今まさに台風風の眼に居るということを。

「へ、へへ。このクソヤロウが、いきなり現れてビビらせやがって！」

「そうだ、おいお前ら、このクソヤロウも滅茶苦茶にした後に流通街全域に死骸を晒してやれ！」

熱狂と言うべき狂った行為だった。

リグと同じく、魔族というだけでダグラの死骸も弄び、晒そうとするその行為。

醜かった。

もうクロナには、周りの全てが糞袋以下にしか見えなかった。

「黙れと言ったぞ、人間共」

そしてそれが当然の如く、クロナはダグラに剣を突き立てようとする傭兵を斬り捨てた。

剣圧だけで傭兵が肉塊へと変貌する。クロナの斬撃に耐えきれなかった肉体は四肢が千切れて四方へと吹き飛んだ。

「え？ え？」

飛び散った死骸を浴びた傭兵が、状況を理解出来ずに言葉を詰まら

せる。だが彼は幸いなほうだったかもしれない。次の瞬間にはクロナの手によつて彼も同じ肉塊へと姿を変えたのだから。

「な、あ?」

「何を、何をするんだ魔族殺し!?!」

「黙れ!」

どよめく傭兵達は、クロナの喝と共に発せられた魔力と殺気に当てられて言葉を失った。

何故? 何故同胞である人間を殺した?

魔族を滅ぼし、人族の英雄である魔族殺しのはずだろうか?

だがそんな疑問もクロナの眼光を浴びれば一瞬で漂白する。

そして思うのだ。

死にたくない。

希望が見えたのに、死にたくない。

「悍ましい」

いつそ哀れにすら思う。だがそれ以上の嫌悪感から、クロナの表情が歪みに歪んだ。

「そうやって情けない姿も醜いが、だがその果てがアレなのが私には悍ましくてたまらない」

今は震える者達。だが彼らこそがいずれ行き着く可能性を秘めているのだ。

惑いまだどつた果て、いつか至る。

修羅の域。人間が人間を極めた成れの果て。

「ダグラ、貴様には一生分かるまい」

人間とはソレなのだ。

善悪という価値観の果て——どうでもいいと一笑する悪性。

「奴らは悪だ」

生まれ持った悪性。

根幹より間違った設計図。神々の誤算。

人間と言う前提が誤った狂気。

「人間とは悪で、善悪を嘲笑う狂気の産物。正気の骸でしかない」  
故に、クロナは誓った。

聖遺物ハックにすら改変出来なつた唯一無二の解答。

この世界から、間違つた生命体を消去するという狂気の解答。

「だから死ね！ 死に晒せ！」

修羅よ。人よ。悍ましき二本足よ。

「我が名はクロナ！ 人でも魔でもない！ 私は魔人！ 魔人クロナ・クロルキス！ 二つの血の猛りに従い！ この日！ この世に存在する全ての人間に宣誓する！」

絶対の誓いをここに。

狂気を以て、狂気を滅ぼす証を手にして。

「散滅せよ！ 人間共！」

聖骸布を媒体として誕生した最強の生命体が、確殺の狂気を瞳に宿して、世界に己の答えを吐き出したのであった。

第十五話 『EAT, KILL ALL . 1』

「お前はまだまだ発展途上のボンクラにしかすぎねえ」

ダンが突きつけた言い分に、メイルは言い返すようなことはしなかった。

初めはやれ犯されるなどと喚いていたメイルだが、実際に錬鉄を行っている姿を見てからは静かなものである。

老害の極みでも言うべき男が見せる無二の技。匠と呼ばれるべき手腕は、素人目でもその技術の凄まじさを感じられた。

そんな繰り返し返される錬鉄の音色が響き渡る工房で、目の前の鉄に意識を注ぎ込みながら、ダンは説明するように言葉を紡いでいく。

「だがお前はさつきまでのお前から段飛ばしに成長して、カスからボンクラにまで成長しやがった。つまり、今のお前に合わせた武器を作ったところで、お前さんはすぐにそれを使い潰しちまうだろう」

そう言いながら、今まさにメイルが扱うための武器をダンは打っている。鬼気迫る勢いは宗司の刀を作った時と変わらず、だがこれより打ちあげるのは究極の一振りではない。

「アイツには俺の全部を注いだ一品をくれてやった。だがお前には俺のとつておきをくれてやる」

「とつておき、ですか?」

「ああそうさ。可能性の武器つてところだな」

「可能性、かあ……」

宗司からの師事を受けてから成長し続けてきた日々。その力が結実したリグとの戦いを経て、メイルは新たな境地へと達していた。

そして今後、メイルはさらなる成長をしていくことになる。他ならぬメイル自身にも確信があった。

だがこれも宗司という素晴らしい先達と、リグを含めた圧倒的強者との戦いによるものだ。

そして今後は、メイル自身が手に入れた魔術と技術の融合というオリジナルの道を独学で行くこととなる。

険しい道だ。道半ばで倒れる可能性だって十分にあり得る。

そんな自分の道を共に行く武器。

可能性という未知数を鋼に宿すという不可能を、ダンという希代の鍛冶師は果たそうとしていた。

「大事なものは親和性だ」

不意に、ダンは未だ赤熱化したままの鉄のインゴットを魔力で覆った右手で掴んでメイルへと振り返った。

ジツとメイルを見る目は、彼女の外見どころか内面すらも見透かすように鋭く深い。思わず身構えるメイルとインゴットを繰り返し見続けていたダンは、また炉へと向きなおって槌を構えた。

「オイ、オツパイチビ、お前の魔力をそこからこっちに放て」

「は、はいー！」

言われるがままに淡い魔力の光がメイルの体より溢れる。その一滴をそつと掌に乗せてダンの背中へと投げれば、振り返ることなく無骨な掌がメイルの魔力を掴み取った。

「……ふん。純粹無垢なツラして汚え魔力だな。殺しすぎてどす黒いくせに穢れなんざ一切見当たらねえ」

「酷い言い方ですね」

「俺好みの魔力だぜ」

「え、今の褒めてたの?」

「なんだオイ? グチグチうるせえぞ?」

「やっぱ酷い……!」

さめざめと肩を落とすメイルを背後に、ダンの武器を打つ手に力がかかる。集中するために呼吸を数度整えた後、ダンは掴んでいたメイルの魔力をインゴットへと注ぎ込んだ。

そして、一際高く振り上げられた槌がインゴットへと叩きつけられる。すると、槌で叩かれた部分が魔力をそのまま宿したかのように淡く輝き始めた。

「思った通りだ! 殺しまくりのクソつたれ魔力が武器との親和性が悪いわけねえもんなあ! 最高だぜオツパイチビ、お前のクソ汚え魔力で面白れえことになりそうだ!」



歓喜の声をあげるダンが嬉々として槌を打ち続ける一方、「あれは褒めているあれは褒めている」と行き場の見つからない怒りをメイルはグツと堪える。

「おお、中々捗っておるようだな」

そんな不思議空間とも言うべきところに帰ってきた宗司は、二人の様子を見て楽し気に喉を鳴らした。

「あ、ソウジさんお帰りなさい。クロナさんはどうしたんですか？」

「どうやら報告が残っておるらしくてな。俺は阿保らしい騒ぎが面倒だったからささつと帰ってきたのだ」

「阿保らしいですか？」

「うむ。お主が斬ったという魔族の死骸を弔り者にしていたのでな。さくつと首と胴だけ離してきたが……どうせあの程度の奴等のことだ。今も魔族の死骸を弄んで楽しんでるだろうよ」

「うへー、悪趣味ですね傭兵の皆さん。まああの人達性根から終わってる感じでしたから分らないでもないですけど」

「オイ、ぐちやぐちや話すなら外出てやつてくれや。オツパイチビも出来上がるまでもう来なくていいぞ。むしろ邪魔だお前ら、うぜえ」

「……一先ず出るか」

「……そうですね」

武器を作ってくれたとはいえ、あまりにも勝手な言い分に辟易しつつ、宗司とメイルは並んで外へと出た。

既に時刻は夕方に近い。僅かな肌寒さからすぐに夜の帳が下りるだろうと宗司は空を見上げて思った。

「そう言えば新しい刀はどうですか？」

メイルが興味深そうに宗司の腰に差した刀を見た。応じるように刃を抜き払えば、簡単な溜息が返ってくる。

「凄い、ですね……」

「ああ、俺も正直驚いた。はつきり言えば今の俺でも持て余してしまう一品だ。こういう言い方はややこしいかもしれないが、刀らしい刀とすべき物よ」

遊びは一切存在しない無骨な刀。それは極限にまで斬撃のみを追

い求めた至高の一振りに違いない。

担い手の使い方で只の棒か刀となるかが決定する純粋な鋼は、それ故に美しきすら感じられた。

「ソウジさんでも持て余す程ですか」

「過てば簡単にへし折れる繊細な刃だからな。だからこそ、血沸き踊るというものよ」

武器に自分が釣り合わないということは、まだまだ自分には成長の余地があるということだ。

そして宗司には理由の無い予感があった。この刀を手にした理によつて十分に操れるようになったその時こそ、宗司が目指す空の三日月——修羅外道に届く時なのだ。

「まつ、俺もお主も鍛錬あるのみということだな」

「うーん。これ以上ソウジさんが強くなったら追いつける自信がないですよ」

「ハッ、思つても無いことを口にするな馬鹿者が」

「えへへ、分かります?」

「当然だ。俺は先に行く、お主も早く俺に追いつけ」

「はい!」

笑顔で未来のことを語り合う師弟。だがそれは、追いついたその時こそ雌雄を決するという意味を持った破滅の語らい。

どこまでも歪で、どこまでも純粋な剣客としての性。

宗司とメイルはいずれ訪れるその時に思いを馳せ——。

突如、遠くより発生した力の奔流に表情を引き締めた。

「ッ……これって?」

「ほお……面白い」

二人が視線を投げた先は同じ。グリイドの屋敷の方角から発せられる力は、リグと比しても圧倒的。

単純明快でシンプルな力の圧力に、知らず宗司とメイルは笑みを浮かべていた。

「ソウジさん——」

「いや、駄目だ。悪いがこの獲物は俺が頂く」

早速行きましようとして告げようとしたメイルを片手で制して、宗司が戦意を漲らせて腰の鞘に手を添えた。

「えー！ 私も戦いたいですー！」

「駄々をこねるな阿呆。お主はさつき戦ったのだから次は俺だろうが」

当然、不満を口にするメイルだったが、宗司に言われてしまえば返す言葉はない。

「それに、コイツの試し斬りをしっかりと行っておきたい。お主は自分の刀が出来るまで留守番だ」

「むう。そう言われたら仕方ないです」

「ハハハッ、落ち込むなよ、めいる。強者には事欠かぬ世界なのだ。次の獲物はすぐに現れることだろうよ」

「はい。行ってらっしゃいです」

「頼んだぞ」

では行ってくる。そう告げる次いで、邪魔な聖剣をメイルに投げ渡そうとした宗司は、突然鞘から抜いていないにも関わらず輝きだした聖剣に目を剥いた。

「むっ?」

「え、え、え?」

宗司はおろかメイルも輝きだした聖剣を見て困惑を露わにする。

まるで警告を発するかのように輝く聖剣。一体何故、と思う間もなく、続いて二人が感じたのは物理的な重圧すら覚える程に強烈な殺気だった。

二人に浮かんでいた笑みが一瞬にして消えうせる。あの力の濁流が見戯に思える圧、宗司をして笑みすら無くなる圧力の元こそが、聖剣が光り輝く元凶だと判断する。

故に。

だからこそ、二人は静かな笑みを浮かべ直した。

宗司は渡そうとしていた聖剣を腰に差し直してメイルに告げる。

「めいる。行ってくる」

「はい、行ってらっしゃいソウジさん」

これより向かう死地を前に、気楽な在り方は変わらない。  
それこそが殺意の元凶であるとも知らずに、宗司は今再び元凶の元  
——グリイドの屋敷へと急ぐのであった。

そこは大嵐が過ぎ去った後の場所にしか見えなかった。

重厚な屋敷は跡形もなく消し飛び、砕かれた瓦礫が四散した先でさらなる二次被害が生まれている。倒壊した家屋、地割れが幾つも起きた大地。散らばった残骸によって死した人々の骸が辺り一面に転がっている凄惨な光景。

だがまだ天災によって死んだ者は幸せだったかもしれない。

グリイドの屋敷。そこのかつて中庭と呼ばれていた場所は、凄惨という言葉では言い表せられない惨劇の場と化していた。

肉塊と化した人間の成れの果て。徹底的に磨り潰され、かつての面影など微塵も感じられない死骸よりぶちまけられた血潮によって中庭は真紅に彩られている。

「……来たか」

その中央で、この惨状をたった一人で引き起こした張本人であるクロナ・クロールキスが、待ち望んだ来訪者を黒い殺意のこもった眼で出迎えた。

「これは、驚いたのお。お主、くろな殿か」

辺り一面の光景に顔を顰めながら現れた宗司は、最早別人と化したクロナを見て目を白黒させた。

単純に見た目だけとつても、見上げていたあの巨軀が小さくなり、メイルと同じかそれ以下にまで縮んでいる。さらに鍛えられ、健康的な小麦色をしていた体は真っ白となり、全身を隠す黒髪より靦く四肢は枯れ木の如く細く弱々しい。

一見ではクロナと見抜けるはずがない。だが宗司は彼女を見て即座にクロナ本人なのだと確信した。

どんなに見た目が変わっても変わらない在り方。迷いというフィ

ルターで隠されたクロナの根幹はかつてと同じ。むしろ迷いを払ったことで、かつて以上の力強さすら感じ取れる。

——怖くなった。

宗司は最早、かつてのようにクロナを格下の弱者として扱いはしない。単純な強さもそうだが、何よりも感じられる恐ろしさ。クロナという存在そのものが持つ重圧が、宗司に警戒の色と、それ以上の歓喜を与える。

「堪らぬ。まさかここまで豹変するとはな……聖骸布とやらを預けたかいがあつたというものよ」

聖剣が警告を発する理由はそれしかない。クロナは預けられた聖骸布を使って自分自身を改造したのだ。

聖剣によって貸し与えられる力とは違う。存在そのものを作り変えるという荒業は自我を失ってもおかしくない自殺行為。

だがクロナは耐えきつた。聖骸布の改造に自我を保ち続け、魂はそのままに立っている。

その魂の強さに惚れる。素晴らしいと喝采をあげたくなる。

「それだ、ソージ。貴様のそれが、ずっと不快だった」

クロナは笑う宗司に両手剣の切っ先を向けた。今の背丈の数倍以上はある刃には、たつぷりの血と臓腑が滴っている。刀身よりその残骸を流しながら、クロナは嫌悪に顔を歪めて宗司に怒りをぶつけていた。

「行き着く果ての汚らわしき。悍ましき。どう足掻いても生きている価値のない貴様らこそが私をここに至らせた」

「礼ならいらんぞ」

「するつもりはない。私が貴様に与えるのは、我が憤怒と憎悪が込められた鉄塊だけだ」

小さな指を柄にめり込ませて両手剣を構える。

最早、問答は無用だった。人間という嫌悪に対して交わす言葉は不要だった。

死ね。

ひたすらに死に続けて死を晒せ。

悪を用いて、悪を滅ぼす。殺戮という悪行を是としたクロナもまた、自分が矛盾に佇む人間なのだ和理解していた。

だからきつとこれから先、自分は笑うことはないのだろう。

いつだって嫌悪すべき人間を感じながら人間を殺し続ける。根絶やした果てに自分すらも虐殺する。

歪な殺意の権化。魔族としての本能を、人間という矛盾で成立させた魔人。それが今のクロナだった。

「殺す。必ず殺す」

「ははは、これは面白くなってきたな」

そう言つて宗司が引き抜いたのは——聖剣チートだった。

瞬間、全身に偽りの全能感が満ち溢れる。何故か、魔王に対してしか発揮しないはずのブーストすら上乘せされた今の状態は、宗司が戦った時の聖剣以上の力を漲らせていた。

だが事情はどうあれ、宗司が聖剣を引き抜いた事実にはクロナは犬歯を剥いて憤怒の形相を浮かべる。

「貴様あー！ どういうつもりだ！」

「いやさ、余興だよくろな殿。別に今更疑うつもりはないのだがなあ……お主、俺に勝てるつもりかよ？」

驕るでもなく、宗司は事実として己が勝利を確信していた。

アンと戦つて手にした奥義、心鉄金剛。修羅外道とは違う域の極みを十全に活かせる新たなる刀。この二つを手にした宗司は、今のブースト状態がかかった聖剣が相手でも、一方的に勝利を収められるだろう。

だからこそ、丁度いいのだ。

この世界の頂点である聖剣の最大解放状態。理由は分からないが、危機に際して覚醒した聖剣チートすら超えられない程度ならば、戦う価値すら宗司にはない。

今や彼の全力を受けられるのは、ナイル・アジフと、いずれ成長するメールのみ。少なくとも、変貌する前のクロナでは話にならない。

「来いよ、くろな殿。聖剣の担い手ごときも倒せずにして、俺に一手すら届けられるものか」

そう言つて、宗司は聖剣より送られた知識の通り、正眼に聖剣を構えてみせた。

魔王との戦いでのみ発揮されるブースト。ただでさえ最大値まで付与される能力が、そこからさらに1・5倍された現在の宗司は、単純計算でレベル1500という、魔王ですら配下の魔族を全て投入した全面戦争でのみ、辛うじて拮抗状態に持ち込める究極の生命体。

神と呼ばれるに相応しい神気を漲らせた宗司に対して、勝てる見込みなど本来ならば存在しない。

しかし。

ああ——それ故に。

「一手、だど？」

俯いた顔がゆっくりと上がる。伽藍の眼は嘲笑する宗司を捉え、徐々に、沸々と沸き立つ怒りの炎で満たされ——。

「それこそ驕るな……人間が」

人外の質量を片手にクロナが猛る。

その眼にはかつての迷いや怯えは微塵もない。

在るのは一つ、人間の殺戮という目的のみ。

「その驕りもろとも死ね、ソージ」

「やってみせろよ、くろな殿」

我意を示した嫌悪と恐怖の権化、魔人クロナ・クロルキス。

対峙するは人の守り手、聖剣チート。

長年にわたり人々を守護し続けた聖剣の打倒を以て、魔人の誓いを証明しよう。

太陽が消えた夜の世界。魔力で輝く互いの体を見据えた二人は、引かれ合うようにして激突した。

## 第十六話 『破壊の跡で、いつもと同じ』

疾駆する己の突き抜けた速度に宗司が楽し気に頬を緩める。対するクロナは宗司とは全く逆で、激走する己の感情をまだ発露したりないと、一目でわかる憤怒で顔を歪めていた。

激突と同時に両者の間で空気が膨れ上がりはじけ飛ぶ。大地が大きく陥没し、周囲を彩っていた真紅の血潮がさらに四方へと散った。鏢迫り合う両者の視線が交差する。聖剣と魔人の初手、出し惜しみのない激突は全くの五分と五分。

それはつまり、クロナ・クロルキスは全力全開の聖剣の膂力と伍する域に到達しているということに他ならない。

「ほう。背丈が縮んで膂力を失ったと思ったが……以前よりも力が増しておるではないか」

「その余裕からまずは剥ぐぞ、ソージ！」

全長五メートル以上はある巨大両手剣にさらなる力が込められた。互角どころではなく、全力の聖剣をもってしても、今のクロナを抑え込むには僅かに足りない。

「剥がせるものなら剥がしてみせろ！」

聖剣越しに圧してくる力の丈に喜びと驚きが半々。宗司は聖剣の指示に従って両手剣を刀身に滑らせて横にいなして、一気にクロナの懐へと飛び込んだ。

「そら！ 捌いてみせい！」

聖剣より離れた右手の中に集まる魔力が四つの属性魔術に分割されて顕現する。

無詠唱による中級魔術の掃射。かつて宗司も受けたことのある魔術の冴えを、ゼロ距離にてクロナへと解き放たんと掌を向けた。

しかし魔術が放たれようとした瞬間、いなされた両手剣が炸裂した地面を中心にして大地が再び大きく抉られる。それにより足場を失ってバランスを崩した宗司目掛けて、両手剣を手放したクロナが拳を振りかざす。



「おおお!!」

殺意に塗れた雄叫びを乗せた拳と盾として割り込ませた聖剣が激突した。

一瞬の均衡は即座に決壊する。聖剣もろとも拳を振り切られた宗司は、砲弾の如き勢いで真っ直ぐに吹き飛ばされた。

「う、おおおおお!!」

目まぐるしく変わる視界。数秒のうちに背中が突き破った家屋ほどの程度か。辛うじて聖剣を地面に突き立てて踏み止まった頃には、戦いの場は遙か先、大きく抉られた大地と吹き飛んだ家屋によって開けた視界で、宗司は天高く掲げられた巨大な鉄塊の存在を見つけた。

「来るか」

「ソオオオオオオオオオオジイイイイイイ!!」

数百メートル先からも響き渡る怨嗟が全身を震わせる。その怨嗟を嬉々として受けながら、体どころか着物にすら傷一つないという魔術の凄まじさも楽しんで、宗司は静かに聖剣を構え直した。

「そら、多少驚いたがこの程度では傷一つすら与えられんぞ?」

挑発の言葉は届かずとも、クロナの憤怒は変わらない。宗司が言葉を言い終わるや否や、局所的な地震すら起こす踏み込みで空高く跳躍したクロナが、大気を蹴るといふ荒業で加速しながら宗司目掛けて落下した。

「死ねえええ!!」

天高くより落ちる雷。合わせて振り抜いた聖剣が再度の衝撃を世界に轟かす。だが先程のような鏢迫り合いは無く、激突と共に後方に飛んだクロナは、その長大なリーチを生かして両手剣を宗司目掛けて振るい始めた。

「楽しいな。いよいよもって超人らしくなってきた」

その剣戟乱舞の只中、宗司も片手で握った聖剣で両手剣を捌きながら、中断されてしまった魔術やスキルも用いて反撃する。

そして、超常極まる攻防が開始した。

轟と空を割る鉄塊と無限魔力より描かれる四属性の魔術が乱れ飛ぶ。それは瞬く間に二人の周囲だけではなく、アバド流通街全域を巻

き込む巨大な災禍へと変貌した。

抉られた地面の土や砕かれた家屋の残骸が超音速で撒き散らされ、弾かれ、あるいは躲された魔術が無数の地獄を描き出す、遠距離スキルは破壊の濁流となつて、かつて王都を滅ぼした惨劇の一撃が幾つも舞った。

それは突如として現れた死刑宣告だった。

誰も抗うことも出来ない。所詮は戦いから逃げてきた者達や、未だに富を蓄えることしか能がない落伍者のみの街。

だがしかし、ここが前線へと武器などを供給する貴重な街であつたことも事実。

悪徳ながら人類守護に必要不可欠な街。人類という悪性の塊の如き世界は、魔人が宣告した通りに散滅していく。

死ね。

悉く死に絶え、絶命し続けろ。

たった一人の怨嗟。だがたった一人で人族の希望を背負い続けてきた騎士の怨嗟が悪徳の街を滅ぼしていく。

だというのに、宗司は笑っていた。

きつと、メイルだつて笑っている。

クロナが最も嫌悪した二人だけは、この地獄にあつても己の喜びに身を震わせて酔いしれている。

「だからだ！ だから死ね！ 死んで死ね！ 貴様が、貴様達が人間の根幹ならばここで死ね！」

「ははははっ！ いいなあこれも！ お主達が魔術に傾倒する理由も確かに納得だ！ こいつは病みつきになるのお！」

自分では決して操れない魔術という超常の技。宗司が手にした極みとは違った楽しさが魔術やスキルには存在した。

だからこそ、これは所詮遊びの類でしかないと再認識する。

魔術やスキルはどんなに極めても所詮、ステータスという枠を超えることは出来ない。明確な限界が定められ、どう足掻いても超えられないように設定されていた。

「……ふん、絡繰りが見えてきたな」

ステータスやレベル、魔術とスキルという制限。

魔族や魔王という間引きの存在。

人間ではなく、人族という枠組み。

これらを解き明かしていけば、きっと世界を巻き込む壮大な物語となるに違いない。

「まっ、どうでもよいか」

故に宗司は即座にそれらを思考することを止めた。

世界の仕組みなど些事ではない。今はこの一時、この刹那。

戦いに生きる今のみこそが至上の至福。

「ッ……それだ！ 貴様達のそれが怖いんだ！」

今の戦い以外どうでもいいと言えてしまう精神性。

何をどうでもいいと言ったかは関係ない。きつと修羅と呼ばれる者は総じてこの様なのだろう。

自分さえよければ、善悪など知ったことはない。

それこそ今まさに脳裏を過った、幻想世界ファークビュラスに秘められた巨大な仕掛けも些事。

それが怖くて、同時に殺したくなった。

クロナの斬撃がさらに圧力を増していく。レベル1500という最強ですら、魔人の赫怒は止められない。

気付けば、辺り一面が瓦礫の山と化していた。その気になれば国ごと滅ぼせる聖剣の全力が数分も続いた結果がこれだ。最早、生物の気配は何処にも感じられず、かつて街だった場所に生きる生命体は片手で数えられるのみ。

「ッ……何故、何故だ！」

クロナは瓦礫の山で唯一残っているボロ小屋の灯りを見て怒りに体を震わせた。

僅かに聞こえる鎧の音色と、小屋の前で両手に奇妙な形の剣を握った少女が見える。

メイル・リンクキャットが生きている。天変地異の只中を、無傷で生き延びて立っている。

本当に殺したい者は生き続け、どうでもいい者は勝手に死んだ。

「駄目じゃないか！ 死ぬべき人間は死んでなきや駄目だろう!？」

屈辱よりも、不甲斐なさにクロナは震えた。

まだ足りないのだ。魂以外の全てを別物に作り変えただけでは、修羅と呼ばれる怪物には響かない。

「死んでくれ！ 死ね！ 死んでよ！ ねえ、死んでよ！」

「童か何かかお主。そう駄々をこねられても死ぬというのは嫌に決まっておるだろ」

あれだけ人を殺しておきながら、これだけの惨劇を全く気にしていないくせに。

自分が死ぬのは嫌だとのたまう。

気が狂いそうな発言に、事実気を狂わせたクロナはさらなる狂気に身を浸す。

「貴様は！ 貴様が！」

苛立ちを叩き込み、怒りを刀身に注ぎ込む。

だがギリギリまで追い詰めているはずの宗司は未だ健在。後一步のところでは届かない。

クロナは尚もどうしようもない現実に齒噛みした。

こんなにも願っているのに。

ただ自分は、人間に死んでほしいだけなのに。

いや、ちよつと待て。

「あ、そっかあ」

不意に刃を振るうことをクロナは止めた。突然のことに訝しむ宗司を他所に、クロナはこれまでと打って変わって、歪ながらも笑みを浮かべていた。

「殺せばいいのか」

死んでくれと願うばかりではいけない。大事なのは自分から行動することにあつた。

分かれば単純な答えに可笑しくなってしまう。第一、自分で最初に呟いておいて忘れてしまうとは馬鹿らしい。

「そうだな。殺そう」

現れた怨敵を前に、大事なことをすっかり失念していた。

死ねではない。

殺す。

私が、殺す。

私だけが、殺し尽くす。

「死ななくていいよ、ソージ」

「うん？」

「殺す」

直後、クロナが放った斬撃はこれまでの全てを凌駕する珠玉の一撃だった。

一片の雑念すら存在しない透き通った殺意の結晶。聖剣で防ぐ暇すらなく、触れるだけで死に直結する死の一振り。

魔人の性能と魔人の根幹。全てが合わさった理想の斬撃はそのまま宗司へと吸い込まれ――。

凜、と。

響き渡る鈴の音色と共に、両手剣は半ばから切断された。

「俺に抜かせたな、くろな殿」

聖剣をいつの間にか手放した宗司が手にしているのは、腰に差していた一振りの鋼。

魔力の淡い輝きが消え漆黒の夜に同化しながらも、手にした刀が月明かりを反射してその身を照らす。

そこには聖剣を手にしていた時の圧力は存在しない。ただ、底冷えするだけの冷たさのみが存在した。

聖剣チートの全力、つまり人族の守護者はクロナの殺意に敗北した。

だがそれは所詮ただの前哨戦。本当の戦いは、殺し合いはここより。

「彼我一刀流、宗司」

改めて告げられた名乗りこそがその証明。たった一本の小さな、だが偽りの全能では決して届かない牙を、宗司はクロナへ突きつけた。

「お主を斬るぞ」

半ばで断たれた両手剣を構え直し、突きつけられた切っ先に怯むこ

となくクロナが応じる。

静寂が両者の間を流れた。距離にして十歩半、両者の実力なら一歩で越えられる程度の間。

ここから始まる戦いは、破壊の嵐を撒き散らすだけの荒々しいものとは無縁。一刀のみが勝敗を決する修羅の時。

宗司か、クロナか。

あるいはどちらもか。

戦いの果てに骸を晒し、如何なる結果に至るのか。

世界の在り方すら逸脱して、修羅場に佇む修羅が二人、今宵二度目の激突を果たそうと——クロナが刃を下げたのはその時だった。

「止めだ」

「……何？」

「止めだと言った。今回は私の負けだ」

言って、クロナは使い物にならなくなった両手剣を放り捨てた。

武器を捨てて両手を挙げるその仕草は降伏の証だ。それに対して、この日初めて宗司の顔に苦いものが浮かんだ。

「オイ、それはないだろう」

「いいぞソージ。貴様にその表情をさせただけで降参したかいがあった」

冷や水をかけられた形になった宗司の嫌悪を感じて、クロナは心の底からという具合の笑みで応じた。

だが別に本当に宗司の嫌そうな顔を見たいがために降参したわけではない。

「あの一撃を斬られた時点で、今の私では殺せないと理解した」

人間に対する殺意が無くなったわけではない。

今も心の中を満たすのは人間への、特に宗司とメールへの殺意ばかりだ。

だからこそ、クロナは殺すために全霊を注いでいる。

「だがそれは今の話だ」

「ほう」

「聖骸布によって私の限界は消滅した。貴様を殺せるまで無限に強く

なり、無限に殺し尽くしてやる」

いずれ必ず宗司を超える。もう彼女にとって勝敗はどうだっていいのだ。それこそ、宗司を、メイルを、この世に生きるありとあらゆる人間を殺すためなら、媚びへつらうことだって厭わない。

そんな彼女を縛る制約は一つ。必ずこの手で殺すこと。

それ以外のありとあらゆる行為を行い、殺す。

「待っている。貴様達を殺すのは私だ」

そして夜空に向かってクロナは跳躍した。あまりの脚力に飛翔と見間違う程の跳躍の後、発生した衝撃波を斬り捨てた宗司は、クロナの飛んでいった先を見送る。

「ふん。まあ、そういうことなら良しとするか」

だが一度見逃したとはいえ、二度目を逃すほど宗司も優しくはない。次に剣戟を交わす時こそが互いの死地。今よりもさらに強大となるクロナのことを思えば、成程、悪くないだろう。

消え去ったクロナとの再戦を思い描き、今宵の語らいに納得をつ。

これにて、終い。

「ソウジキーン！」

そして戦いが終わったことを察したメイルが、瓦礫の向こう側から手を振って宗司を呼びながら駆け寄ってきた。

どうにか破壊の嵐を捌ききったようだが、両手に持った剣はどれも刃毀れと罅割れが酷い。しかし、かつては捌くどころか逃げ続けることすら至難であつただろう破壊の中を生き抜いたメイルの実力は、もう宗司の手助けから離れた領域には到達している。

だが魔人と化したクロナと比した場合、メイルの敗北は必至だろう。

考えるに、間違いなくクロナは躊躇なくメイルを殺すはずだ。

「私の顔なんか変ですか？」

ジロジロと宗司に見られて首を傾げるメイルには、危機意識は殆ど感じられない。

強くなつたのはいいが、まだまだ前途は多難ということだ。

「ハア……お主は本当に、未熟だなあ」

「いきなり酷いなあ……そりゃあ、ソウジさんに比べたらそうかもしれませんけど……私だって頑張っているんですよ」

「だが精進あるのみだ。俺もお主も、目指す先は遥か彼岸よ。それよりは、なあ?」

「なあ? とは?」

「いや、お主。この光景を見て思うことはないのか?」

腰の鞘に刀を戻した宗司は、周囲を見渡して溜息を吐きだした。

アバド流通街。つい数分前まで人で賑わっていた街は完全に消え去り、宗司とメイルの声と、遠くよりリズムよく響く鎚の音以外に生命の気配は感じられない。

これで王都メビウス、アポロン山脈に続いて三度目の殲滅である。いずれも人族にとって致命的な被害を与えているのは、どういった因果なのだろうか。

魔族以上に人族に致命傷を与える勇者一行。字面にすると最低最悪、唾うのはナイルくらいか。

「どう思ってた。これソウジさんが滅茶苦茶にしたんじゃないですか」

「え、まあ……そうだが」

「ほらー、やっぱりソウジさんのせいじゃないですか! どうせまた悪ノリして遊んだんでしょ? 必死になってダンの工房守ってたからちゃんとは見てないですけど、それくらいは分かるんですからね! 少しは反省してください!」

「えー……」

「は・ん・せ・いー!」

「……すまぬ」

「ふふーん。分かればいいんですよ。あ、ところで空に飛んでったのってもしかしてクロナさんだったりします?」

「ああ、どうやら聖骸布を使ったみたいだな。背丈もお主より低くなっておった」

「え、マジですかそれ? じゃあこれで全部私より小さくなっちゃっ



たんですねクロナさん」

「お主、くろな殿に殺されたほうが良いのではないか？」

「酷い!？」

くだらない語らいをしながら、二人並んでダンの工房へと歩いていく。

凄惨な光景すらも、やはり二人の心を揺るがすことは叶わない。何処までもいつても我意はそのまま、クロナが嫌悪した人間として。

いつかくたばるその瞬間を迎えても、彼らの不変は変わることは無いのだろう。

## 第十七話 『最悪パーティーとアットホーム魔王軍』

「俺もそれなりに修羅場をくぐってきたつもりだがよお……渾身の一本打ち終わって外に出たら周囲一帯が瓦礫の山つてのは流石にビビるわ」

あの戦いの数日、ようやく工房から出てきたダンは、様変わりした周囲の光景を見て啞然としていた。

何せ見慣れた景色は何処にも無く、綺麗さっぱり瓦礫と化して人間の息吹は一切感じられないのだ。ダンでなくても誰もが驚く光景に違いない。

「あの状況で外のこと一切気にせずに武器打ち続けた人の台詞とは思えないですけどね。それと、私が必死で工房に直撃する瓦礫とか魔術とかスキルとか全部防いだんですから感謝してくださいよ」

そうして暫く惚けていたダンに、辺りの散策を終えたマイルが声をかけた。得意げに胸を張ってみせるが、胸が大きく揺れるだけで偉そうな雰囲気は皆無である。

「来たかオツパイチビ、ほれ、お前の刀だ」

「感謝の言葉がない……」

「あ？ むしろ俺に刀打って貰ったことを感謝しろよ。人として恥ずかしくねえのお前？」

「こ、この人は……！ で、でもありがとうございますう！」

人として恥ずかしいのはどちらか問い詰めたところであったが、今はそれどころではない。

ダンが差し出したのは二振りの大小の刀だった。どちらも宗司がダンより渡された刀よりは小振りで、マイルの体に合うように調整が施されている。

「銘は長いほうが赤飾あかかざりで短いほうが青飾あおかざり、二本合わせて飾比翼かざりひよく。いずれはお前にとつての翼になり得る成長する刀だ」

「成長する、刀……飾比翼……」

二本共鞘より抜き払ったマイルは、美しい波紋が波打つ刀身の輝き

に目を奪われた。

宗司の刀と違って、優雅で色気すらも感じる刀身は、ただ美しいだけではなく刀としての性能も完全に備えている。

その一方で、メイルは飾比翼を握った瞬間に違和感を覚えていた。感触が定かではないというか、上手く合わないというか、重さのバランスが不確かというか、何とも言えない違和感だ。

「ちよつと振ってみろ」

メイルはダンに言われるがまま飾比翼を振るった。

すると、最初に感じた違和感が無くなり、メイルに合わせて飾比翼の重さや握りが変わっているのが分かる。

そのことに言葉もなく困惑するメイルに、ダンは得意げに頬を緩めてみせた。

「どうだ？　振って分かっただろうが、そいつはお前の魔力に適應した一品、つまりはお前の体を感じ取ってその形を変える代物だ」

「確かに、凄いですねコレ。振るえば振るう程、私の身体に合っていく感じが……」

言いながら、メイルの剣舞は終わらない。振るえば振るう程、違和感は消えていくどころか、メイル好みの刀へと仕上がっていく。

そう考えれば慣れないはずの二刀も納得だ。今後、メイルの成長によつては二刀流になる可能性だって存在する。というか、現に今、二刀を使った動きがメイルに最適化されてさえた。

「飾比翼、赤飾と青飾……ありがとうございますダンス！　これで私、もつともつと強くなれるはずですよ！」

「へへ、良いつてことよ。お代にちよつとそのデカイ胸を——」  
「帰ったぞ……って、何をしておるのだお主ら？」

笑顔を浮かべるメイルの胸に両手の指を動かしながら迫るダンに、返ってきた宗司は冷めた眼差しを向けている。

——やはり最低な老害だなこやつ。

いつそもう斬った方が良いかという思考に、最高の刀を作ってくれた恩義で蓋をする。

「あ、ソウジさんお帰りなさい」

「チツ。後ちよつとだったのによ」

宗司を迎える二人の態度は対照的だ。それに肩を竦めて応じた宗司は、メイルがドレスのベルトに差した飾比翼を見て、いよいよ準備が整ったことを察する。

あの日よりかれこれ数日。いい加減、この瓦礫だけの場所に滞在する意味は無い。

「刀が出来たのなら話は早い。早速だが、今後の予定に関して話し合うとするか」

「今後の予定、ですか……まあいつまでもこんなところに居ても意味無いですしね」

「お、そう言えばそれだよそれ、オイ武器たらし、この惨状は一体何だつてんだ？ 街のカス共が一斉にヤケを起こして自分で自分のケツに爆破の魔術でもぶち込んだのか？ そう考えりやここいら一帯に漂うカスの味噌漬けみてえな臭いがするのも納得つてもんよ」

「臭いは間違いなくお主が垂れ流しながら武器打つてたせい……まあいい。話せば長いのだが、一言で言うとな俺のツレが暴走した」

「オイオイ、お前のツレつてあのデケエ女のことか？ まあでもあの貧乳じゃ絶望して暴走するのも仕方ねえか。体でけえのに胸が無いとか悲惨すぎるからな。哀れにすら思うぜ……」

「ほらソウジさん！ ダンさんも同じ意見ですよ！ 私も昨日、クロナさんがオツパイ小さいの気にして落ちこんじやったんだつて言つたじゃないですか！ やっぱりちよつと前にソウジさんが酔つ払つて「くろな殿は胸が小さいのに大きいのお」とか言つたせいですよ！

私、あの後励ますの大変だったんですからね？ オツパイなんて飾りですとか、大きくても重たいだけで無駄とか、戦つてる最中揺れすぎて大変だとか……」

「オツパイチビよお。それは励ましじゃなくてトドメつていうんだぜ？ デカパイがチチナシを弄るとか間違ひなく死刑もんだ」

「え、そうなんですか？ 私、いつもクロナさんに背丈が高くてオツパイ小さいの羨ましいですつて言つてましたけど……そんなに良いものですかね、これ？」

そう言いながら自分の胸を下から持ち上げて揺らしてみせるメイ  
ルから宗司はさりげなく視線を逸らして頭を抱える。

全裸マントからこれまで、メイルに羞恥心というものはとうとう育  
まれることはなかった。

ちなみにダンは凝視していた。それと、揺れに合わせて指をワキワ  
キ動かすのを止めてほしい。

「お主ら、話が脱線するから胸の話は止めろ……それとめいる、お主は  
もう少し空気を読め、本当に、頼むから」

宗司の知らないところで遠慮なしに鬼畜発言をしていたのか。こ  
うなると、メイルのせいでストレスを溜めこんでいたであろうクロナ  
が哀れになってくる。

むしろあの怒りも当然かと心の中でクロナに謝罪し「くろな殿は俺  
達と戦う気になったというだけだ。それよりも今後を話すぞ」と脱線  
した話を戻すことにする。

とはいえ、急に今後どうするかなどとすぐに分かるはずがない。

何せ宗司は異世界人故にこの世界の地理には疎く、ダンは世捨て人  
であるために周りに興味がなない。そしてメイルも箱入り娘なので何  
処に行くべきかなど出るはずもない、と思われた。

「あ、それなら私一つ面白い話を思い出しました！」

「ほう、なんだ？」

「いえ、実はグリイドさんっていう方の話に出てきたことなんですけ  
ど——」

メイルはグリイドからの依頼内容について思い出した。

魔獣が貧民街に現れたので退治してほしいという依頼の前、グレイ  
ドが語ったのはアイアス城塞が魔族に奪われたという、元を辿れば宗  
司が王都を滅ぼしたことよって起きた一大事である。

「ふむ、魔族によつて奪われた城か」

「はい、そこだったら試し斬りと修行にはもってこいじゃないんです  
か？ リグっていう魔族も強かったですけど、魔族にはもつと強い人  
が沢山いるはずですよ！」

「確かになあ。それに俺も魔族とやらと一度やってみたいと思ってい

ただ」

振り返れば、色々な強者と戦ってきたものの、異世界らしい強者と言えбайずれも人族に属する者しかない――勇者であることを考えれば最悪だ――。

「……よし。ではそのアイアス城塞とやらに出向くとするか」

「あ、でもアイアス城塞ってここからどう行けばいいんでしょうか？」

「むっ……お主も場所は知らんのか？」

「地図があればどうにかなりましたけど……このあり様じゃ地図なんて、ねえ？」

見渡せば瓦礫の山である。手荷物も吹き飛んでいるため、地図など当然見つからないだろう。

話が決まれば後は早い、とはいかないものだ。出鼻を挫かれる形になった二人が再び押し黙ると「アイアス城塞なら俺が案内するぜ？」とダンが口を開いた。

「お主が案内をするだと？」

「怪しいなあ。何か変な要求とかしてきませんかね？」

短い間とはいえ、唯我独尊悪逆非道を地で行くダンの性格を知る二人が半眼を向けるが、それが意外だとダンはわざとらしく肩を竦めた。

「あのなあお前ら、このナイスガイがわざわざ案内してあげようつのにその言い方はねえだろうが。まったく、人斬り連中はどいつもこいつも腕が立っても性格がクズでカスしかいなくて悲しいぜ。俺を見習ってほしいものよ」

「ソウジさんソウジさん。屑の代名詞に屑って言われるのって本気でムカつきますね。それとはまったく関係ない話ですが、無性に赤色のシャワー浴びたくなってきたんですけど一緒に浴びませんか？」

「斬ったら駄目だぞ」

「えー……」

「それで、どうするよ？」

許可を出せば本気で斬りかねないメールの過激な発言を気にも留めず、ダンが宗司に言い寄った。

ダンの発言の真意がどうであれ、現状ではどうしようもないのが現実だ。宗司はジツと自分を見るダンを見つめ返し、根負けしたのか盛大に溜息を吐きだした。

「分かったよ、だん殿。道案内はお主に任せるとしよう」

「よっしゃあ！ それじゃ善は急げつてもんよ！ くたばったカス共から使える物漁ったらさっさとアイアス城塞に出発と行こうじゃねえか！」

「ねえソウジさん。この人がしでかさないように足の健くらいは斬つてもいいんじゃない？」

「駄目だぞ」

「えー……じゃああの人が死骸漁ってるうちに水浴びしましょうよ！

あつちに水たまり見つけたんです！」

「俺とお主で？」

「はい！ 背中洗いつこしましょう！」

「駄目だぞ」

「えー……」

不満げに口をとがらせるメイルだが、宗司としてはこっちこそ不満だと言いたいところである。

危機意識ゼロかつすぐに辻斬り仕掛けようとするメイルと、口を開けば汚い言葉、前途多難とはこのことか。

振り返れば、この気苦労をずっとクロナは背負い続けてきたのだから。

「お主が人間嫌いになった理由、俺も少しだけわかったよ」

本人が居れば別の意味で激昂しそうなことを口ずさみながら、遺品漁りを始めたダンと結局同じく遺品漁りをするメイルの後に続いて宗司も瓦礫を漁り始める。

二人をどうこう言いつつも、宗司本人も大概に畜生なのであった。

アイアス城塞とは、魔族との最前線であるノートン帝国の南部に位

置する人族の技術の粋を注いで築き上げられた鉄壁の要塞だ。

直径数キロの円を覆うように築かれた堅牢な壁には隙間なく魔術的防御が刻まれており、城塞内部の地下に設置された魔術刻印と通じた龍脈より流れる魔力が常時流れている。これにより24時間止まることなく城壁の魔術は稼働し続け、上級魔族の魔術やスキルですら防ぎきる堅牢さを誇っている。さらに万一破損したとしても即座に再生魔術が起動して修復される。

その他、城壁に張り巡らされた魔術兵器、周囲一帯に散布された魔術地雷の数々も起動させれば、魔族の集団とて容易に攻め込むことは出来ないだろう。

元々は南部の国家群への睨みを利かせるための城塞は、現在、人族が拠り所とする最後の砦であった。

だからこそなのか、メビウス王国王都消滅の混乱によるしわ寄せで、多数の人々が列をなしてアイアス城塞へと殺到していた。

とはいえ、状況をまだ完全に把握していない現場の兵士達や上層部は対応に手一杯である。一応、上層部はある程度の情報を仕入れてはいたが、ただの門番でしかない一兵士、エルフのクランとヒューマンのベンは、止むことのない人の列を捌くのに慌てふためいていた。「クソ、一体全体どうしたってんだ」

「さてな、どうやらメビウス王国のほうで何かがあったみたいだけどよ……」

現在は、代わりの兵士に門番を代わってもらい、僅かな休憩を二人は過ごしていた。この間にも詰所の外から喧騒は届いており、いつ途切れるともしれない人の群れを思っただんまりとしてしまう。

「前線のほうもどうやらきな臭いみてえだし、かと思えば安全地帯の南で異常かよ……ったく、人族はどうなっちまうのかねえ」

クランの不安を表すように、エルフ特有の鋭く尖った耳が僅かにへたれる。ベンも心境は似たようなもので表情が暗い。

彼らも今はここで門番として働いているが、つい先日までノートン帝国で魔族との最前線で死闘を続けてきた兵士だ。今や希少となった熟練の兵士の僅かな休暇も兼ねて後方に送られたのだが、まさか休



暇を満喫すら出来ない状況になるとは想像もしなかったことだろう。

「……逃げちまったほうが、楽なのかもな」

ベンの呟きに「何処へ？」と返さなかったのはきつと、言ってしまうばそこで何かが終わってしまう予感があったからだ。

いつまでも届かないイシスの大結界への道、それどころか年々追い立てられていく人族連合。魔族が出てくるだけで部隊が次々に壊滅し、どれだけ知恵を絞っても人族に先は見えない。

日に日に募る不安と恐怖。前線では耐えきれずに逃げ出した兵士が、アバド流通街に流れ着き、そのまま廃人と化してさえた。

それでも耐えていたというのに、唯一の安全地帯と思われたメビウス王国で何かがあったとくれば、何処に希望を見出していいかもわからない。

「なんだお前ら辛気臭い顔をして」

先の見えない不安に沈黙していた二人の居る詰所に現れたのは、同じく門番として勤めていた兵士の一人だ。目深く門番用の軍帽を被った男は、部屋に流れる嫌な空気を払うように腕を振る。

「知ってるか？ そうやって凹んでいるだけで人間ってのはどんどん凹んでいくもんだぜ？」

言いながら、「ほら、俺の奢りだ」と男が片手に一つずつ持った串焼きを二人に渡す。遠慮なく受け取った二人はそのまま一口齧り付いた。

タレがよく染みた上等な肉である。後方にあるアイアス城塞でもそうお目にかかれない肉に二人の顔が僅かに綻ぶが、それでも完全に表情が晴れることはない。

「つてもよお、俺達が必死こいて魔族や魔獣とやり合ってる間に後方で勝手に問題起こされたら堪らねえよ、なあベン？」

「そうだな、食料を送ってるから兵力は送らねえとかほざいてるクソ国家のくせして、魔族が来ても居ないのに勝手に混乱してるとかふざけるなって話だぜ」

「クソ国家か。それってあのメビウス王国のことか？ 食料だけ送ってるって聞いたけどよ」

「そうそう。俺らも詳しい事情は知らねえけどな。たださつき城塞の中に通した商人の話聞く限りじゃ王都で何かがあったらしい」「つてかクソ国家ついたら普通に考えてメビウス以外ありえねえだろ。お前そんなことも知らな——」

そこでふと、ベンは軍帽を被っている男の顔をジッと見て。

「お前、誰だ？」

言い終わるのと、目の前に座っていたクランが突如倒れるのは同時だった。

「な、あ……」

何があつたと言う前にベンも視界がぐるぐる回りだし、声を出すことも出来ずにクランと同じく意識を失って地面に倒れる。

最後にベンが見たのは、口にした食べかけの——即効性の痺れ薬の塗りたくられた串焼き。

「すまないな。貴重な情報、感謝する」

先程までの乱暴な口調ではなく鋼のように冷たい言葉で思ってもいないことを言った男が、被っていた軍帽と軍服を一瞬のうちに脱ぎ去った。

現れたの黒い頭巾で目元以外を全て覆い、黒い衣装を纏った異世界の伝説。今や世界の敵である魔王の心臓を継承した忍者、ハットリだ。

「存外温い警護と思ったが、これは好機と見るべきか？」

魔族領土より出立して数日。たったそれだけの期間でイシス大結界を超えて人族の領土に到達したハットリは、易々と最前線の兵士に紛れる形でこのアイアス城塞にまで到達していた。

彼の目的は一つ。幾度となく魔王と魔族を滅ぼし、封印してきた忌々しき聖剣チートの新たなる担い手の調査だ。あわよくばこの手で葬ろうと思つてここまで来たのだが、どうにも人の入りがきな臭いと感じて侵入した。

そして人の列で会話する者達に聞き耳を立て、門番に扮して情報を仕入れたのである。

「……『解放』『私の声は空へ、私の耳は海へ、私の眼は地平を超える』」

ハットリは己の胸に手を当ててそこより溢れる魔力を解き放った。魔王による召喚によつて手にした、魔王の力を行使する権能。これを用いて、ハットリは早速イシス大結界の向こう側に居る魔王へと遠見の魔術と呼ばれる通信魔術を接続した。

空間を繋げるこの最上級魔術は、ハットリをしてかつての世界に存在したら戦そのものが変わっただろうと確信するほどに素晴らしい魔術である。

詠唱が終わると同時にハットリの前に鏡が現れる。この鏡によつて異なる場所と場所の風景を繋げることで、遠くの相手とも会話することが可能という――。

『あ、ヤッホー！ テストテスト、聞こえてるかなハットリ君！』  
「切るぞ」

『あわわわ！ 待つて待つて！ もう魔王様！ やっぱりハットリ君怒ったじゃないですか!?!』

一メートル四方の鏡一杯に映し出されたアフロディアの顔を見て魔術を切断しようとするが、慌てて彼女が横に退けば、クツクツと声を抑えて笑う魔王、クラウドディアが現れた。

「主……悪戯が過ぎるぞ」

『すまないな、我が懐刀ハットリよ。どうもここ最近は気分が良くて糞袋への殺意すら和らいでる始末なのだ。ちよつとくらい茶目つ気を出しても良いだろう?』

悪びれもせずと言つてのけるクラウドディアに返す言葉も無い。悪辣かつ老獪な魔王であると思えば、こうした悪戯をする無邪気な童にもなる女性だ。

だがそういった不思議なカリスマがあるからこそ、アフロディアのような天邪鬼からヴェンセントのような堅物、そしてハットリという修羅すらも従うのだろう。

とはいえ、ハットリも余興にいつまでも付き合っている程暇ではない。他愛が無いとはいえ、ここは敵地の真っ只中なのだ。

「それより主。俺は今アイアス城塞という人族の主要要塞に潜入したところだ」

『なんと……だがあまり無茶はするなよ。お前が死ねば私も死ぬからということもあるが、私はお前が心配なんだ』

『あー、魔王様つてば過保護なんだー!』

『おいリアー! 横から入つて……申し訳ありませんね魔王様! この阿呆は俺が抑えておきますので!』

『程々にしてやれよヴィン。リアはまだ甘えたい年頃なのだよ』

鏡に映らないところでアフロディアとヴィンセントの喧騒が響いてくる。そのあまりにも気が抜けた光景にハットリが呆れて頭を振り『重ねてすまないな、ハットリ』と笑うクラウドディアのハットリ達を見守る視線は暖かい。

記憶には無いが、母親が居たならばきつとこのような人なのだろう。そんな感想を心の内に留め、「そこで面白い情報を仕入れた」と脱線していた話をハットリは繋げた。

「どうやら最南部に位置するメビウス王国の王都で何かあったらしい。そこで物資を仕入れた人々が列をなして城塞へと入城している」  
『メビウス王国か。あそこの土地からいつも聖剣の勇者が現れていたな』

「では、勇者絡みの一件と見るべきか?」

『そう見てもいいと私は思う。ハットリ、それ以外の情報はどうだ?』  
「取り急ぎ連絡を入れたのでな。これから深部に潜つて……いや、待て。主よ、少しばかり頼みがあるのだが良いか?」

『言え、腹案があるとみた』

クラウドディアの視線が鋭くなり、母親とすら思えた慈愛の表情は消えうせる。ハットリは逆に、頭巾の下でニンマリと不気味な笑みを浮かべていた。

脳裏に閃いた妙案。行き当たりばったりではあるが、この数日で察した人族の力を考慮すれば、勝算は十二分。

その悪辣極まる腹案こそ――。

「ああこの際だ。勇者がどう出るか見るために――俺を媒介に、人族側で戦っている魔族の大半をここに召喚する」

史上最悪の内部崩壊。

魔族に従うた一人の人間による悪意によってこの日、人類の英知が結集された城塞はその力を殆ど行使することも出来ずに陥落した。

## 第十八話 『戦場を走る』

「( ) ( ) ( ) だ?」

かつてアバド流通街と呼ばれていた廃墟を出てから数日。時折現れる魔獣を斬り捨てながら旅を続けていた宗司達は、先頭を歩くダンの一言によって動きを止めることとなった。

「はい? え、ちよつとダンさん……今、何て言いました?」

「何だオツパイチビ。胸に栄養吸われて耳が悪くなったのか? 何もじゃねえよ、ここがどこだかわからねえって言ってんだよ」

「いや、そんな堂々と言うことじゃないですよねえ!? ってかこの状況で迷子とか本気で洒落になりませんよ!」

メイルの叫び声で周囲の木々がざわめき、遠くで鳥の群れが空目掛けて飛ばれた。

現在、宗司達が歩いているのは殆ど人の手が入っていない山の獣道だ。どうにか奥へと続く道があるものの、どう見ても人間が切り開いたとは思えない細い道である。

山に入った辺りから薄々予感があったものの、まさか本当に迷子となつているなど誰が考えるだろうか。数日前は「俺に任せりやすぐにでもアイアス城塞に着くぜ?」とか「こつちの道が近道なんだよなあ」とか「えつと、川沿いのが楽だわな」とか「お、こつち行きやすそう」とか自信満々にダンは言つて――。

「気付けばよかつた……! このクソヤロウを信用したのが馬鹿だつた!」

振り返れば危険なサインは至る所に存在した。しかし所詮は世間知らずの箱入り娘、特に気にせずダンの後を追いながら宗司と気楽に会話しているだけであつた。

「まあ仕方あるまい。俺としては別に、あいあす城塞とやらに行ければ僥倖であつたしな。迷子と言うならばそれを楽しむのも一興よ」

一方、宗司と言えはダンが道を外れていると知りながら特に指摘することなく彼の案内に従つていた。

元が根無し草の旅人なため、当てのない旅には慣れている。むしろ

これまでの旅路のほうが彼にしては珍しいとさえ言えた。

「だけどソウジさあん」

「お主の言いたいことも分かるぞ、めいる。だん殿、迷子になったのはいいが、何処から道が分からなくなったのかくらいは見当がついているのか？」

それでも不満げなメイルの意志を汲んで、代わりにダンへ問いかける。「つてもなあ……」と本人も多少の罪悪感があるのだろう。気まぐげに頬を搔いて記憶を探るが「駄目だな、さっぱりだ」と即座に思案を止める。

所詮は鍛冶の腕と戦い以外は軒並み人間以下の屑老人だ。これ以上問い質したところで逆切れされるのがオチだろう。

「となると……まずは山を越えるところか」

「超えたとしてもどうするんですか？ 道を引き返したところで集落だって見つからなかったんですよ？ こんな獣道を超えた先で集落があるとは思えませんけど……」

メイルが言う通り、この数日の道程で集落はおろか他の人族と出会うことすらなかった。会うとしたら知性にも乏しい野性の魔獣、ゴブリンやオークばかり。

言い換えれば、アポロン山脈を挟んだ魔族の最前線とはこれが当然なのだ。人族の滅亡が間近に迫った終末。人族の生存圏は殆どなく、メビウス王国に居たような商人なども、宗司達が問題を起こさなかったとしても十年もしない内に消えていただろう。

だが彼らに滅びゆく種族のことなど眼中にない。まずは現状をどうにかするほうが大事であった。

「だん殿から聞いた話では、あいあす城塞は山と山の間を埋めるように作られたのだろう？ ならばここはもしかしたら城塞に近い山の可能性もある。一旦山を越えたら、山を沿って歩くぞ」

「それで見つかりますかね？」

運が良ければそれでアイアス城塞のある場所に着けるかもしれないが、メイルの言う通り見つからない可能性が高い。アイアス城塞の近い山ではない可能性、アイアス城塞のある場所とは逆に歩く可能

性。その他、考えたら着かない可能性のほうが高い。

「案ずるな。もし誤っていたとしてもいざとなればこいつがある」

宗司はメイルの背中に背負われた聖剣チートを指さした。

「薬箱や移動手段として考えると、ちいとは素晴らしい」

「飲料水とかもすぐ出せますからね。おかげで毎日シャワー浴びれるから嬉しいです」

「なあオツパイチビ、俺もそのシャワーに——」

「ダンさんは気持ち悪いから嫌です。ねえソウジさん、私とシャワー——」

「嫌だ」

「えー」

「えー」

「お主ら……!」

こみ上げる怒りをどうにか堪えながら、宗司達は獣道を進んでいく。ここ数日、口を開けば下劣なダンと、自然体で畜生なメイルの相手をしていた、宗司の心労はかつてない程に重なっていた。

——くろな殿。俺が悪かったから帰ってきてくれぬかのお。

本人に言えば「私を馬鹿にするのも大概にしろ!」と激昂するとは微塵も思わずに、見当違いな謝罪を内心でする宗司。だがどんなに願ってもクロナはここには居らず、下劣な二人の会話は続く。

いい加減、堪忍袋の緒が切れそうになりながら獣道を歩いていた宗司だったが、ふとその耳が木々のざわめきとは違う音色を感じ取った。

「めいる、だん殿」

宗司に言われるまでもなく、二人も先程まで交わしていた汚い会話を止めて真剣な表情へと変わる。二人もまた宗司と同じく、遠くより伝わる剣戟の音と無数の怒号、そして微かに振動する大地を肌で感じていた。

「ソウジさん。これってもしかして……」

「お主の考えているとおりでらうよ。くくつ、これで厄介な馬鹿共の会話で胃を悼める心配も無くなったということだ」



「え、ソウジさん、共ってどういうことですか？　ねえソウジさん、それって私もダンさんと同列ってことですか？　こんなド畜生のクソ老害と同列ってことなんですか!？」

「そうだけ武器たらし！　こんな胸に脳味噌まで吸われちゃったようなビッチと一緒にすんじゃねえよ！　しかもビッチな見た目しときながら頼んでも一揉みすらさせてくれねえドケチビッチだぞこいつ！」

「はああああ!?　何で貴方みたいな変態に触らせなきゃならないんですう？　つていうかこの際言わせていただきますけど、いつもいつも私の胸見すぎなんですよ変態爺。しかもシャワーの度に覗きに来るし、爺なんだからもつと慎みとかないんですかあ?。」

「んだこらオイ文句あんのかお前。ちつとばかし腕が立つからってふざけた態度しやがってよお。年上は敬って胸の一つくらい触らせろって習わなかったのかよ。まったく、ケチなうえにまともな教育もされてねえチビとかどうしようもねえな」

「あ?。」

「お?。」

「先行くぞー」

「あ、こら！　抜け駆け禁止ですよソウジさん!。」

「武器たらし！　俺より先に行くくんじゃねえ!。」

馬鹿共にいつまでも付き合ってはられないとばかりに飛び出した宗司を追って、マイルとダンも走り出す。

何であれ、目指す先は殺意が入り乱れる至福の戦地。待ち望んだ死地に赴ける歓喜に酔って、知らず宗司達は喜悦の笑みを湛えていた。

そして音の方角へと疾駆すること僅か数分。木々の障害など意にも介さず駆け抜けた先、開けた視界に広がったのは、全長数十メートルに及ぶ巨大な城壁で覆われた城、人類の英知で作られた要塞であるアイアス城塞目掛けて、特攻を仕掛けて散っていく人族の兵士達という光景であった。

「うわあ……授業で聞いてはいましたけど、アイアス城塞の魔術防御ってえげつないんですね」

メイルが顔を顰めるのも無理はない。何せアイアス城塞へと突撃する兵士達は、城塞前で陣取っている魔獣どころか、その途中に存在する魔術地雷と呼ばれる地面に隠された魔術式によって次々にその命を散らせていた。

しかも、それだけでなく絶え間なく降り注ぐ魔術砲撃が彼らの行く手を阻んでいる。単純な魔術の数だけならば、聖剣ですら再現は困難なほどの苛烈な魔術による殲滅。

一方的に散っていく兵士達はそれでも前を目指して進んでいく。いつ弾けるか分からない地面に、降り注ぐ砲撃に、それらを越えたところで待ち受ける魔獣と魔族の群れに怯えながら。

「……まともではないな」

宗司の感想は正しかった。

誰も彼もが死に向けて走っている。絶望的な戦いに身を投じている。

彼らは良く分かっていた。ここでアイアス城塞を奪還出来なければ、人族の未来は完全に断たれる。残された僅かな存命の道すらも失われれば、人族は完全にこの世界の生存競争に敗北する。

だから彼らは奔っていた。

だからと言い訳して走り続けていた。

まだ希望がある。

まだ人族には明日がある。

ここを越えれば。

ここさえ耐えれば。

もう未来はないと知っているくせに、希望で目を眩ませて走っていた。

だからこそ宗司は言ったのだ。『まともではない』と。

死への恐怖を、仮初の希望で覆った姿など滑稽以外の何者でもない。そこにはきつと戦う意志など存在していない。

あれはもう人ではない。

火に飛び込む虫だ。

「さて、俺達もやるとするか」

だがそんな事情などはどうでもいい。ここに立つ三人は、種族の行く末など全く興味がなかった。

いや、極端な言い方をすれば自分以外どうでもいい。

希望へ疾走する兵士達をまともではないと言いながら、彼らこそが真にまともではない狂人の集い。

「めいる、だん殿」

宗司が再び二人の名を呼ぶ。

それに対する二人の答えも先程と同じ。

「生きてたならまた会おう」

これより先は己が闘争。修羅の時。

返事をすることなく戦場へと飛び込んだ二人の背中を追うようにして、宗司も舞うような心地で戦場へと飛び出した。

アイアス城塞が魔族の手に落ちた。これよりアイアス城塞奪還を行う。

戦いより一週間ほど前、この報を受けた時の前線で戦っていた兵士達に走った動揺は、想像を絶するものだった。

一向に終わらない戦い。それどころか徐々にイシスの大結界より離されていく日々。

刻一刻と迫る大結界解除の時と、その後に見れるであろう魔王を筆頭とした魔族の主力部隊。

これらだけでも、口にしないが誰もが種の滅亡を予感していたというのに、後方の要が魔族に奪われたとあれば戦意を失うのも当然だ。

だがそれでも彼らがアイアス城塞奪還へと赴いたのは、宗司が予想した通り、兵士達が思考というものを放棄しているからであった。

城塞さえ奪還出来れば人族の希望は繋がる。

だから戦い、散っていく。そうやって希望を抱いて死んでいくほうがましだ。

無意識にだが彼らの殆どがそう思っていた。

その考えを自覚しながら戦うことを選択したのは、兵士達を指揮する上層部の者や一部の兵士のみ。

だがある意味で死を恐れない思考が幸いしたのだろう。本来ならば怯え竦むはずのアイアス城塞一帯に張り巡らされた地雷や砲撃に突撃した兵士達は、ついに城塞前で陣を敷いていた魔獣達の前へと到達した。

「進め！… 進めえー！」

駆け巡る号令と言われずとも走る兵士の群れ。応じるように戦列を進めた魔獣達が数秒もせず激突する。

あつという間に人魔入り乱れる大混戦と化した戦場で、無数の血しぶきと絶叫が乱舞した。

伊達に前線を生き抜いた兵士達ではなく、一対一ならば人族の兵士が魔獣達を凌駕している。複数相手でも魔獣と互角以上に戦えてさえいた。

だがどうしても城塞近辺に敷き詰められた魔術によって疲弊した兵士では魔獣の群れを突破するまでには至らない。

これまで以上の熾烈な争い。しかもこれはまだ前哨戦でしかなく、後には魔族が無数に控えているのだ。

勝てるわけがない。

どんなに兵士を投入したところで不可能だ。

それでもと。

ただ愚直に進み続けていた兵士達は——戦線を走る一筋の光を見た。

「シイイイイ……！」

両手に持った鈍色を血潮で輝かせて魔獣達を斬り伏せていくのは、この場に似つかないドレス姿の少女。だが既存の術理を兎戯に貶める技の冴えで、一秒の間に数十の魔獣を斬り捨てていく姿は、戦場で輝く希望の光。

だがその実態は、闘争という悪夢に魅入られた珠玉の狂気。

「なんだ、あいつ……！」

「わ、分からないが……おい！ あの少女が切り開いた場所が薄く

なっている！ 一気に押し込めえ！」

兵士達の動揺は一瞬。少女によって手薄となった魔獣の群れへと殺到していきアイアス城塞へと迫っていく。

状況は不明だが、魔獣のみを滅ぼしていることから、卓越した味方が居るといのは事実。

思考を停止しているとはいえ、彼らも人族生存のために命を賭す兵士だ。新たに見出された希望へ向けて手を伸ばし——その手は空より落ちてきた一筋の流星によって砕け散った。

魔獣と人族もろとも空より落ちた流星は大地を破碎する。数メートルにも及ぶ巨大なクレーターは、今も続いている魔術砲撃以上の衝撃と威力。

そのクレーターを中心にした魔獣と人族が動きを止める。そして次の瞬間、クレーターより立ち込める煙幕を斬り裂いて巨大な鉄塊が姿を現した。

「……この瞬間を待ち望んでいた」

砂煙を払って現れたのは、一糸も纏わない少女だった。強引に剣の形に成型しただけの鉄塊をその細い手で握り締め、見据える先はただ一つ。

「人間よ！ 審判の時は来た！」

剥き出しの野生が咆哮する。

大気を弾いて荒れ狂う嵐。その嵐の中心で嵐を作り上げる大人の胴回り程の分厚さの鉄塊は、しかし見た目程の重量感などないかのようになられた狂っていた。

それを扱う者こそ、今や少女の身へと成り果てた、かつて人類と巨人のハーフとして人族の英雄であった魔人。

「臆せよ人間！」

暴風を突き抜けて響く声が、クロナ・クロルキスの本領。魔族としての本能を解放して、暴れ狂う力を一切躊躇することなく撒き散らす力こそ、魔人の本懐。

「かつて、貴様らの狂気を守ろうとした愚かなる私は死んだ！ 今やこの身は悪性で築かれた貴様らを駆逐することのみを至上とする一

「騎なり！」

宣誓は、同時に人類に対する新たな脅威の発生を意味する。遠くからその叫びを聞いた兵士達の誰もが、感じ取れる威圧感に臆し、腰が引けていた。

「我が怒り、我が絶望、この鉄塊の一振りに乗せて貴様ら全てに叩き込む！」

「じゃあ、クロナさんは敵つてこといいんですね？」

兵士達の列から、一人の少女が抜け出した。

その姿を見た瞬間、鉄塊を振り回していたクロナの動きが止まる。だがその代わりに、鉄塊で巻き起こっていた嵐すら見劣りするほどの、恐るべき殺気が周辺一帯に放出された。

その殺気に飲まれ、魔獣と兵士の幾人かが泡を吹いて気絶し、歴戦の勇士ですら気圧され、思わず一步引いてしまう程。

しかし、直接的な影響力を持つ殺気の中、少女は悠然とクロナに向かって歩みだす。

荒地の上に在りながら、上体を一切揺らすことなく歩く少女は、戦場には不釣り合いなドレスを着こなしていた。今も尚、遠くでは魔法による爆音に兵士達や魔物の雄叫びが響き、重ね合う鉄火の熾烈が空気を揺らしている。そこにあつて、まるで大道芸の一員の如き少女の服装は浮いており、故にそこに居た者の目を惹いた。

その少女こそ、かつては穢れを知らぬ聖なる泉で守護者の任に就いていた者。

そして今や、血潮と臓腑に身を染めた堕ちた聖女の名を。

「メイル・リンクキャット……！」

「久しぶりですねクロナさん」

憤怒を乗せて語られた己の名を聞いても、少女、メイルは平静であつた。

その腰には兵士達の持つ剣と形状の違う、片刃で細い不可思議な刀剣。それこそ、切断という一点のみに特化した異世界の刃、日本刀が、大小一本ずつ差してある。

日本刀と飄々とした立ち振る舞い。その全てがクロナの知る修羅、

宗司と重なっていた。

「形<sup>なり</sup>まで奴に飲まれたか！」

犬歯を剥き出しにして憤怒の形相を浮かべるクロナに対して、メイルは涼しげな表情で余裕たっぷり歩を進めた。

「最適だと知っただけですよクロナさん」

鞘走る刀を二つ両手に握り、メイルは刀身の波紋に濡れた視線を落とす。

「飾比翼、ソージさんの持っている刀の夫婦刀？　っていうのでして……私と一緒に成長してくれる……刀と呼ばれる代物です」

刻まれた銘の通り、手にした飾比翼を翼のように構えたメイル。その型は宗司の腰構えとは違う、彼女だけの型。

妖艶さすら感じられるその構えは、まるでこれから舞い踊るのではないかとすら思える。一瞬だが周囲の兵士もここが戦場であることを忘れて惚けるが、次の瞬間、空を砕かん勢いで振り回された大剣の暴威に誰もが目を覚ました。

「抵抗しなければ楽に殺してやるぞ、メイル」

「楽に殺す？　ふふ、じゃあしつかり抵抗すればいいんですね？」

クロナの鬼気に気圧されて、蜘蛛の子が散るようにその場から消えて行く者等、二人はもう気にも留めていない。

互いが互いだけを見つめる、たった二人だけの戦場。

そこに在って笑みを浮かべるメイルの表情が、何よりも雄弁にクロナの問いへの返答となっていた。

「ならば、是非も無し！」

天高く刃を掲げてクロナは宣誓する。或いはここに至っても未だ残っていた未練を振り払うための、決別の咆哮。

メイルもまたクロナの覚悟を受けて表情を引き締めると、その身に強化の魔術を掛け直した。

だがそれでも彼我の能力の差は圧倒的。肌が泡立つくらいの力がメイルを震わせて。

「いいなあ、クロナさん」

背中を押す衝動の赴くまま、メイルは小型の竜巻と化したクロナ目

掛けて一步を踏み出した。

「それが！ その在り方が！ 貴様という人間が生きているから！」  
「そんなこと——どうだっていいわ」

荒れ狂う台風の中に飛び込む。鉄塊の生み出す風圧だけで潰されそうになりながら、メイルは変わることのない喜びを湛えたまま、憤怒の形相で待つクロナに返答代わりの斬撃を放った。

「だって私、貴女を斬れるもの」

「メエエエイル！」

互いに譲れない信念の名の下に。

メイルとクロナ、短くも濃厚な旅路を共にしたかつての仲間は今ここに道を違えて激突を果たすのであった。



## 第十九話 『交差する者達』

死が走っている。

混戦となる戦場にて、それは徐々にその存在感を増していた。

それに最初に気付いたのは、魔族軍側の大将、レベル600に迫る怪物、ガングール・ダイ・アंकであった。

ともかく、大きい男である。熱した鉄のような赤色の肉体は二の腕だけで樹齢数百年以上の大木と錯覚するほど。全長も巨人族のハーフト比べても遜色ない巨体。剥き出しの上半身には幾つもの傷が目立ち、無数の戦場を括り抜けた風格がある。

彼はイシスの大結界が展開されたとき、結界の内側に居た三体の上位魔族の一体であり、その中でも魔王に仕える四天王にすら比肩、あるいは上回る実力を有している怪物である。

手にする武器はこれまで殺した敵の武器を溶かして固めただけの鉄塊。だが百を、千を、万を超えた敵手の武器を固めて作られた得物は既に、彼の巨体すら凌駕する質量兵器となっていた。

そして、その得物を用いて自身もまた前線で鬼神の如く奮戦して人類種の兵士を駆逐しながら、彼の戦士としての鋭敏な感覚は、迫りつつある脅威を捉えていた。

「報告！ 右翼より人間が一匹突出！ さらにアクス様が重傷により撤退！」

タイミング良く訪れた伝令の報告にガングールは舌を巻く。アクスは己に付き従う下級魔族の中でも五指に入る腕の持ち主だ。それを倒して尚前進しているとは、敵側にも予想以上の好敵手が居るのだと彼の闘争心が疼く。

何よりも敗走しているはずの人類軍が攻勢に出ている事実がもたらず、戦争という実感を与えてくれた相手に感謝すらしていた。

「レベルは？」

「後衛魔術師に探知魔術で調べさせている最中です！ ですが、相手のステータス詳細が特殊であるためか、探知に時間がかかっている模様！ しかしアクス様を一蹴したということから、最低レベルは40

0程である」と!

「ほう、アクスを一撫でとなると……魔王様が言っていた例の勇者とやらで間違いないか」

ハットリの空間魔術で通信を行った魔王より聞いた相手だとガングルルは察して、強者との会合を前に凶悪な笑みを浮かべた。

「面白い。俺自ら相手をしてやる」

「はっ!」

一軍の将が自ら戦場のど真ん中、しかも危険な相手の前に出るというのは、本来は愚行なのだろう。

だが魔族にとって強者との戦いは命よりも重い。それが例え害虫以下の人間という種族であったとしても、闘争の場で鎬を削る相手ならば、誰であろうと一定の敬意と、それ以上の殺意で応じるのが魔族というものだ。

「では俺も相応しい旗印を掲げるとしようか!」

眼前には、悲壮感を滲ませながら槍を突き出し、矢を放つ人間達。敵わぬと知りながら抵抗を続ける愚かな者達を鼻で笑うと、ガングルルは鉄塊に膨大な魔力を纏わせて、咆哮と共に湧き出る虫共を薙ぎ払った。

「受けよ! 『絶剣・轟』!」

上級スキルが一つ。絶剣の中でも殲滅力に特化した一撃がガングルルの視界全ての人間を飲み込む波となって襲い掛かる。

まるで巨大な壁が迫りくる光景に、兵士達は逃げることにすら出来ずに成す術なく飲まれて逝った。

これが人間と魔族の間にある絶対的な能力の差。

精々がレベル10前後の有象無象では、レベル600に届くガングルルに触れることすら出来ない。

まさに、鎧袖一触。

圧倒的な力で全てを消滅させたガングルルは満足げに喉を鳴らし、直後、広がり続ける己が奥義の一角が、突如として消滅したことに目を剥いた。

「ッ、こいつが!」

轟音すら掻き消す鈴の音色。清涼なる歌声こそが奥義を斬り裂いた一閃にして、その隙間より躍り出た相手を見て、ガングールの、その場に居た全ての魔族の体から冷や汗が滲み出た。

光の波を超えて、一枚の布を腰帯で留めただけに見える風変わりな衣服を着た青年が現れる。

それ以上に、青年が握る奇怪な剣にも眼がいった。

「……やはり、刀は良く馴染む。というか、前の所でもこれ以上の名刀は望めんな」

百を超える兵を飲み干した破壊を斬り裂いたというのに、のほほんとして青年が剣を、刀を掲げる。

僅かに曲線を描く波紋もない刀身。鏢も柄も遊びは一切なく、美しさよりも無骨な印象を覚える。

しかし、ガングール達は奇怪な見た目を除けば地味としか言えない刀に込められた壮絶なる意志に息を飲まれた。

「名乗りが遅れたな魑魅魍魎共。俺の名は宗司、そしてこいつは我が相棒の刀……つなき繫」

故あって、斬る。

異界の剣客、宗司はそう告げると共に、あまりの剣気に飲まれた魔獣の波に飛び込み、一瞬にして繫の範囲内に居た有象無象を細切れにした。

「おおー！」

魔法でも使用したかのような斬撃の乱れ撃ちに、魔族達から感嘆の聲が挙がる。

魔王クラウディアが恐れた勇者の技の冴え。足りぬ力を狂気の果てに手に入れた業に、鬪争に命を賭す魔族達の背筋すら凍り付く。

だがその直後、魔族達は是非もないとばかりに犬歯を剥いて魔力を放出すると、前線を維持する魔獣達を薙ぎ払いながら宗司目掛けて殺到した。

「ふははははは！ 勇者よ！ 我らが頭、ガングール様の前に我が爪の鋭さを味わえ！」

「なんの！ それよりも早く俺の牙が貴様を噛み殺すぞ！」

「くはは！ 遅いぞ鈍麻共が！ 人間の英傑よ！ 一番槍はこの私が頂いたあ！」

誰も彼もが宗司という極上を求めてそれぞれが誇る最強の武をかざして走る。その加速の余波だけで人も魔獣も纏めて挽肉する様は悪漢の一言。

肌にかかる圧力は、そのどれもがかつて一騎打ちをしたクロナの実力を凌駕していた。

故に宗司もまた笑う。

魔術を使わずとも身体能力でこちらを圧倒する化け物が、魔術によつてさらに肉体を強化したうえで、この身をすり潰すためだけに殺意をばら撒いているのが堪らない。

「この高揚、じつとりと味わいたいものだが……前座を愛でてばかりでは奥に立つ者に失礼というもの……」

「死ねばいいだろおおお！ 勇者ああああ！」

「では食い散らかすぞ、獣共。田舎産まれ故、無作法なのは許してくれよ？」

虎のような顔の魔族がその顔に違わぬ速度で宗司に肉薄する。人体を十体纏めて紙のように引き裂く鋭い爪は、暴風すら引き起こして唸った。

刹那、凜と冴える鈴の音色が戦場に鳴り響く。

そして確実に宗司よりも早く爪を振るったはずの虎の魔族の四肢と首が血の噴水に押されるようにして胴体から斬り離された。

音速の爪に遅れながら、五つの斬撃を先んじて敵手にぶつける。取るに足りぬ脆弱にて、遙か強大なる魔族を食らい尽くす絶技。

「おおー！」

その在り方に魔族達が驚愕の声をあげる。

これぞ明鏡止水では至れぬ斬撃。あらゆる感情を爆発させ、その振り幅すら一閃へと昇華させる人の極み、狂気の真髄。

宗司の体がぶれる。後退しながら前進し、刀を振るいながら刀を受けに回し、立ち向かいながら逃げるという矛盾の術理。あり得ぬ動きに魔族達が停止する中を、神速を経た宗司が一瞬にしてすり抜け様に

刃を走らせた。

「初手より奥義にて相手いたす」

奥義、心鉄金剛。

手にした極みは未だ極みを超え続け、瞬く間に数体の魔族がただの肉塊へと成り果てた。

その後、冴えわたる刃鳴りの残滓を耳にした宗司は、虚無と死闘を演じた月夜に手にした斬撃が、繫という刀によってさらなる段階に登りつめたのを確信する。

俺はまだ達せる。

いずれあの終わりすら超えた向こうへと、混沌と化した我が心中にて凌駕せんと吼え滾る。

「どいつもこいつも噛いおつてからに」

だが究極を超えた宗司の斬撃を見ても尚、魔族達の猛りは収まるどころかさらに過熱されていく。

誰も彼もが嬉々として死んでいく。殺すのだから殺されてもいい。それが当然であるからこそ、笑って死地へと飛び込む姿にこそ人間は怯えるのだ。

それは人には分からない正気の在り方。善悪を持たず、強者を求めて強者を屠り、弱者はすべからず殺し尽くす彼らの常識。

人外の不変価値。

人にあり得ぬ正気こそを、真実の狂気と呼ぶのか？

「くかつ」

否。

狂気の真髄はここにある。

宗司もまた笑んだ。

善悪を知りながら、人間の善性を尊いと悟り、悪逆を恥と知りながら——あえて闘争の螺旋に嬉々と身を投じることこそ、狂気。

故に魔族の在り方に、そうあることが普通である正気の在り方に感謝すらしたからこそ。

「楽しくなるぞ、お主達」

「言わずともなあー！」

「強者と死合える喜悦に勝れるものぞないわあ！」

続けて飛び込むのは無数の首に幾つもの武装を携えた大蛇と、クロナと比べても遜色ない巨体の筋骨隆々とした牛面の化け物。それが手にした獲物を、渾身の勢いで宗司へと叩き込む。

炸裂の瞬間、爆弾でも炸裂したかのように地面が破碎され噴煙が舞い上がる。

その噴煙に卷かれるように、大蛇と牛面の血潮と肉塊が周囲へと飛び散った。

「是非も無い。俺の狂気がお主らの抱く正気に等しいものならなあ」  
そして土煙を突き破って修羅は姿を曝け出す。

血の雨を超えて宗司は立て続けに襲い掛かってくる魔族達へと、自ら身を投げ出すように踏み込んだ。

相手はいずれもその腕の一振りです兵士達を薙ぎ払い、その口より吐き出す息は城壁すらも吹き飛ばし、一度走り出せば進路上の全てを骸へと変える一騎当千の怪物達。

対するは只人。力も無く、魔力も無い。勇者の証たる聖剣すらも手に持たぬ、吹けば吹き飛ぶ脆弱なる身。

しかして狂気その身に孕み、手にした鈍らのみを頼りに真正面より斬鬼となるならば。

これより先は存分と、一切合切皆殺し。

「互いに存分と歌舞くとしようか、正しく在りしものぶ武士達よ」

死して屍、拾う者無し。

戦禍渦巻く混乱にて、一振りの鋼のみを信仰する修羅の舞踏が、激動の魔族達を巻き込んで始まった。

鼓動の赴くままだった。

踏み出した足が無くなったように軽やかな感触に、これから始まる死闘の甘露にむせび泣く己をメイルは自覚する。

今、自分はたった一人で殺しあえている。

リグの時は傭兵とクロナが居た。

だが今はクロナと自分の二人だけ。

一対一の、殺し合い。

それが何故か嬉しかった。

理由は無い。

いや、あるかもしれない。

どっちだろうか。死への歓喜を是としたのか、死を忘我した愚鈍の否なのか。

理由が必要だと思った。

即座に、どうでもいいと嘲笑い、どうでもよくないと繰り返す。

クルクルとどうでもいいことを延々と、続けながらも走る切っ先は思考の余分すらそぎ落としながら敵手へと向かうのだ。

「メエエエエイル！」

己を呼ぶ声に思考は吹き飛んだ。同時、メイルは応じるように地面を疾駆すると、鉄塊を構えて不動と待つクロナの側面へと飛び込んだ。

「楽しいわクロナさん！」

飾比翼が地面に根差したクロナを切断せんと踊る。僅かとはいえ寝食を共にした相手への行いとは思えない迷いの無さ。

その在り方に、クロナは顔すら隠す黒髪の下表情を憤怒と畏怖に染め上げて、修羅の子の刃よりも早く鉄塊を振りぬいた。

「ッ!？」

鼓膜を割らんばかりの爆音に合わせて、大剣より巻き起こった風の壁がメイルの全身を強かに打ち付けた。

堪らず壁に押し出されるがまま吹き飛んだメイルへと、クロナは地鳴りを起こしながら走り出す。

「ここで死ねえ！」

「そういうの、嫌いじゃないよー！」

振るい続ければ街すら根こそぎ壊滅させるクロナの必殺が頭上より落ちてくる。

だがメイルは虚空で回転して地面に着地して、かつての宗司がクロナにしたように奇怪な歩法を開始した。

全力で走りながら小刻みに減速することによって、敵手の眼を欺く魔技。そこに強化の魔術の恩恵を加えたメイルのそれは、宗司と比べて幼稚ではあれど、加速と減速のふり幅の差によってクロナの眼に虚像を見せる技と成していた。

しかし、相手もまたハックと言う世界の理を逸脱した魔具によって限界を超えた超人。生み出された分身によって悲鳴をあげる脳髓を無視して、間合いを数歩外した距離で鉄塊を肩に担ぎ精神を統一する。

「おおあああああー！」

咆哮を乗せた剣戟が周囲一帯に解き放たれた。大気が弾け、地面が碎ける。つい先程メイルを吹き飛ばした大気の壁など児戯だと言わんばかりに、最早それは人工的に生み出された乱気流に等しかった。スキルでも魔法でもない。クロナ・クロルキスという超人の力のみで生み出された人知を超えた火力。

「なっ……い！」

驚愕の表情を浮かべながらメイルが土砂に飲まれて彼方へと飛んでいく。

筋力だけならば聖剣所有者を凌駕する破壊は、所詮は人知によって練り上げられた程度の技を使うメイルを、分身ごと巻き込んでいた。全方位を対象にした破壊を前には成す術などないのか。無数の瓦礫に体を打たれながら、メイルは――。

「あはっ、死んだかも」

目の死を噛う。

その姿の恐ろしさを才覚と告げた誰かを、クロナはメイルの瞳に見た。

「ソオオオオオジイイイ！」

眼前のメイルではなく、今はこの戦場の何処かに居るだろう男の名を叫ぶ。

貴様が私の全てを砕いて散らせた。



憎悪、嫉妬、あるいは恋慕。入り乱れた激情の波は最早クロナ本人ですら自覚出来ない何かとなつてその小さな胸の中を荒れ狂い、世界にまでその暴風を撒き散らす。

そしてその暴風にただ一人笑いながらメイルは突撃した。

死への転落。

愚拳の極み。

飛び込むことが等しく終末である死の旋風に、笑んで走るは愚者の如くか。

否。

全く持つて否なのだ。

「これ！　これこれえ！　死ねるからあ！　死んでないからあ！　うふふふふ！」

大剣の発生させる暴風に、あろうことか乗り込むことでメイルは対応していた。

メイルの視界にのみ映る風の流れ、人の動き、そして、死線。

外に張り付けた気狂いの在り方とは裏腹に、思考は冷静に取捨選択を行い、安全かつ攻撃に移れる風の流れにメイルは身を任せ続ける。

風に飛ばされながら、風を乗りこなし鉄塊の死地を掻い潜る。傍目から見れば風に卷かれる木端のようだ。

四肢をばたつかせ、乱気流に空中で四方八方振り回される無様な姿。

だが一定の実力を備えている者ならば、それがどのような絶技なのか理解出来よう。

理解したうえで、正気を疑うはずだ。

僅かに風の動きを読み間違えれば、全身の自由を奪われて破壊の餌食になる領域にあえて踏み込む。

それこそ、ばたつかせている四肢の末端、指先の動きを些細に間違えて風の乗りこなし方を違えれば、そこでメイルは自身の制御を失う。

だというのに、笑いながらその繊細な動きを行い、薄氷の上を歩くよりも至難な行為に笑って命を投げ出している。

誰にも理解出来ない。

それを成しえる技術があるとしても理解出来るはずがない。

これぞ、狂気と呼ばれる真紅の華。

咲き乱れて舞い散ることを是とした理解不能の姿こそ、絶対なる死を超える唯一の人間性。

正気の裏側にある人間という狂気の赴くまま、メイルは暴風を乗りこなして再度クロナの元にその刃を届かせた。

「だから死んでよクロナさん！」

「貴様が死ね！ 人間！」

風の勢いも味方につけたメイルの飾比翼が上空よりクロナに襲い掛かる。

最早、鉄塊の迎撃は間に合わない。

確定した斬撃の予感。

決別の代わりの鋼。

喜悦に混じった悲哀すら、凶器を震わす力と化して。

「一撃目えー！」

飾比翼が巨人の頭部へ突き刺さった。そう思ったメイルは、刃より伝わる感触に表情を濁らせた。

全霊を賭した一撃は、クロナの頬を一直線に斬り裂くだけで終わる。

咄嗟に体を引かれたことで辛うじて必殺を掻い潜られたのだ。

——違う！

メイルは自分が誘い込まれたのだということに、研ぎ澄まされた見切りによつて感づいた。

「ああー！ 一撃だなあ！」

しかし、既に遅い。

斬られた頬より血を流しながら、クロナは返礼とばかりに鉄塊より離れた左手を握りこむと、落下するメイルに叩き込んだ。

予想通りの最悪。

頭部への一撃を誘って、ぎりぎりを掻い潜って致命的な一撃を入れる算段だったのだ。

だがその展開を凌ぐ一手がメイルにはもうない。気付いた時には時すでに遅く、放たれた必滅に対して出来るのは、細い見た目は裏腹に、巖の如きイメージの過る鉄拳と己の間に飾比翼を壁として割り込ませるだけだった。

衝撃が飾比翼を超えて体全身に響き渡る。

両腕の骨が軋み、ほぼ生身の肉体が内部で無数の悲鳴をあげるのを聞いた瞬間、メイルは悲鳴をあげる間も無く地面へと鉄拳ごと叩きつけられた。

「ふ……ッ」

口内に溢れる熱血。耐えきれずに酸素ごと吐き出した血潮が身体力行と持つて行ったかのように、メイルの動きが完全に停止した。

まさに肉を切らせて骨を断つという格言を地で行ったクロナは、衝撃で動けないメイルを前に、躊躇など一切見せずに両手で鉄塊を再度握りこむと、断頭台の如く大上段に刃を掲げた。

「死ね」

辞世の句を読ませるつもりも無い。

クロナは最早メイルに対して一片の慈悲すら持ち合わせていなかった。

ここで必ず殺す。

淡々と作業をこなすように解き放たれた刃。

逃れられない死。

「あ……」

——これが絶望。

戦場に立てばいずれ誰にも等しく訪れる理不尽。成す術は存在せず、抗う理由も忘我し、生への活力が微塵も消し炭とされ、死という冷たさが甘美に思える感覚。

死ぬのだと悟る。

理解は早い。メイルの限界を超えた見切りの能力は、クロナの必殺がまさしく必殺として機能するのだと魂に分からせた。

だから死ねと。

口づけるように囁く声に、メイルは呆けた顔をして。

——だから、楽しいんだ。

「あははっ」

メイルは、嗤った。

そして、大剣は空を（・・・）裂く。

「ッ!？」

必殺を誓った刃に何の手応えも得られずに、たった一撃で周囲一帯の地面を破裂させたクロナは驚愕に目を見張った。

身動きの取れない状態でこれ以上はない一撃を叩き込んだはず。

だが、磨り潰す相手はそこには居らず、地面を砕いたことで舞い上がった噴煙の先で、凜と静かな鈴の音色がクロナの鼓膜を掻き巻いた。

「メイル！」

片手で視界を遮る煙を薙ぎ払った先、いつの間にか射程外に逃れていたメイルが立っていた。

だがクロナの声に反応もせず、メイルは口の端を吊り上げただけの笑みを浮かべたまま動かない。どころか、視線は虚空をさ迷っている。

先程の拳による一撃のダメージによって脳震盪でも起こしたのだろうか。油断なくメイルを見据えながら再び鉄塊をクロナが構え直す。

だがメイルは仕切り直された闘争の空気にも反応せず、ただただ光を失った眼で虚空を見つめ続け。

「ひい、ひふふ、うふいひっ。ふひ、ふひや、うふふ、うひやは！ひ、ひはっ！」

突如、正気では発せないような笑い声とも泣き声ともつかない奇声を可憐な唇から漏らしたと思うと、狂ったように全身を震わせて笑い出した。

その声に、対峙しているクロナはおろか、遠くから戦いを傍観していた者達すらも全身から冷や汗を流す。

常軌を逸している。

先程まで死ぬ直前にあった者が、九死に一生を得た奇跡に笑ったり

することはあるが、メールのそれはまるで違う。

その違いは、殺気。

クロナと比べてはるかに矮小な身だというのに、全身に絡みつくような粘着質な殺気が戦場一帯を覆うように滲んでいる。

それが、恐い。

狂ったように笑いながら、この場の誰一人として逃さないという冷徹な殺気が、恐い。

「いつまでも……」

それでもクロナの動きをいつまでも抑えられるものではない。むしろ、耳障りな笑い声に我慢できなくなったクロナはさらなる戦意を漲らせ、こちらに意志すら向けていないメールへと一歩踏み込み。

「次は私の番ですね」

声は、下。

音もなく間合いを詰めたメールの刃が、愚かに一歩を踏み出したクロナの体を袈裟に斬った。

「なっ」

痛みよりも、疑問。

それよりも、死の臭いに突き動かされた本能が、咄嗟に握っていた鉄塊を振るわせていた。

しかし追い払うためだけの稚拙な一撃ではメールを捉えられない。風圧すらも見切つてぎりぎり回避したメールは、発生した風の勢いすらも借りてクロナの右側へと回り込む。

連動して線を描く刃が続いてクロナの体に深々と出血を強いる。

速い。

速すぎる。

これまで以上の速度で、宗司と同じ奇怪な動きを見せるメールに怖気が走る。

だがその理由は、メールの走った軌跡をなぞるように残る魔力の残り香が示していた。

肉体の神速に追従する閃光。光すら後方に置く絶技の深淵。

「あの時の……」

その事実が示す真実は一つ。

メイルは再び、リグを一刀に伏したあの領域へと踏み込んだのだ。常軌を逸している。

狂っていると言いたいようがない。

本来なら相容れぬはずの宗司の技と魔術の二つを平然と組み合わせることも常識的に考えればあり得なかった。

「いや、これは……」

以前よりも、はるかに成長している。

違う。

「この戦いで、成長した？」

だとしたら、馬鹿げている。

あの極限状態で、己の死が一秒よりも短い間に訪れる直前で、メイルはさらなる進化を果たしたというのか。

あり得ない。

あり得てはいけなないと。

そう思つて、クロナは今更なことだと憤怒した。

「ああ……それが出来るんだよな。貴様らは！　それが出来る！　出来るからこそ！」

分かつていたはずだ。

道徳や倫理というものを知り、それを尊く、正しいと理解しながら、尚も過ちを犯さずにはいられない人間という愚者。

その中で、眼前のこれは誰よりも濃く人間を体現していた。

宗司という男が示し、宗司という男の背中を追っている少女にも根付く、才覚すらも食らい尽くす根源の名。

それこそ狂気。

人間という、修羅。

そうだ。

正義と邪悪、相反する二つの価値観を矛盾させることを苦としないからこそ。

人はいつしか——修羅を成す。

「だから殺す！　必ず殺す！」

クロナは傷ついた体を自然治癒に任せて大剣を構え直す。

最早、微塵の油断すらない。

己の中に未だに僅か燻っていた、旅の仲間としてのメイルへの感情をすり潰して、クロナ・クロルキスは吼え滾る。

「その先に奴が待っているならば！ 狂気の種子はここで殺す！ 殺して殺し尽くす！ 貴様を殺し！ 奴を殺し！ そして世界に蔓延る人間共を殺す！ 老人から赤子まで、我が鉄塊は貴様らの存続を一欠片たりとも許しはしない！」

成長を許されたのはメイルだけではない。

魔人として得た力。ステータスの限界値を喪失したことによる無限成長。

ハツク的能力にて限界を捨て去ったクロナの力は今も際限なく肥大している。さながら火山の噴火に似た殺気の唸りは、遂に敵手と認められた矮小なる少女一人に向けられた。

「そういうややこしいのはいいですから」  
だが進む。

普通なら身動きも取れない圧力をものともせず、風を切るように堂々と歩む足徐々に速く。

狂っている在り方を、凡夫と同義と嘲笑う所業にて、メイル・リンクキヤットは限界を超越した魔人の牙へと、挑む。

愚直なまでに、意の赴くまま、例えその先に死が待っていたとしても。

「さっさと斬られてくれませんか？ 私、今すぐソウジさんに会いたいの」

是非も無い。

死んでも斬ると、狂気の申し子は走り出した。

## 第二十話 『無題』ん

この物語は幕切れだ。

豪風が吹き荒れている。人魔入り乱れる戦場にて、唯一無二の魔人たるクロナが放つ剣戟の竜巻が、その余波だけで数多と存在していた魔獣と人族を周囲一帯から消し飛ばす中、メイルは縦横無尽に吹きすさぶ乱気流の只中に身を任せていた。

喜色に染められた表情とは裏腹に、虎視眈々とクロナへと刃を振るう隙を狙う眼光は刃のようにクロナの体へと突き刺さる。そしてそれは無尽蔵の体力で鉄塊を振るい続けるクロナがメイルに向けているものと同義であった。

互いが互いの絶命に向けて必殺を伺う緊張の一時。崩壊する戦場の光景とは裏腹に、二人の間に流れる空気はとても静かで冷めてすらいる。

必殺、そう、必殺だった。

HPという概念など無価値。直撃即ち自らの死であり相手の死。

何処か遊戯染みたこの世界の価値観から逸脱した二人の現実は、あまりに無情で非情。

故にと嗤ったのが人間で。

故にと憤ったのが魔人で。

二度と相容れぬ両者の価値観は明確に。互いの胸中を察した刹那、まずは虚空より降り立ったメイルが静かに飾比翼を構え直す。

「大道芸は終わりにしましょう」

一手間違えば風圧に押し潰される乱気流を乗りこなしたことを、その程度と断じたメイルが鉄塊の間合いより一歩前で佇んでいる。

「……」

クロナもまた、答えることなく鉄塊を構え直した。互いに様子見は終わり、見せ札は存分に敵へと示した。

ここよりは積み重ねてきた全てを出し尽くす死力の時。

一手のミスで絶命が確定するという、この世界では遙か昔に失われ



てしまった殺し合い。

真剣勝負、一本。

「まずは一手」

宗司のようなことをのたまいながら、メールが静かに鉄塊の間合いへと踏み込んだ。

「シッ！」

同時、クロナが鋭い呼吸を一つ吐きながら真一文字に鉄塊を振るった。膂力だけならば随一となったクロナの放つ一撃はそれだけで線上の全てを砕き散らす剛の一閃。

だがメールは焦ることなく間近に迫る鉄塊の下に体を滑りこませると、撫でるように鉄塊の腹を飾比翼で上に押し上げた。

結果、発生する風圧ごと鉄塊の軌道が空高くに変化する。

合気と似た受けの粹。武とは防御にあると言った宗司の教えを忠実に遂行したメールは、力の流れを逸らされて体勢を崩したクロナへと一歩間合いを詰め——いつの間にか頭上から落下してきた鉄塊の切っ先に目を見開いた。

「くっ……!?!」

咄嗟に鉄塊を弾く反動を使って横に飛び退くが、中途半端な逸らしによって刀越しに腕全体に痺れが走る。

だがそのことに思考を走らせる暇すら与えず、再度体勢を崩したはずのクロナが三度、膂力に任せて強引に鉄塊の一撃をメールへと放った。

「これ、は……!」

三度、続く四度、五度と鉄塊を逸らしながらメールは戦慄に体を震わせる。

今や一振りで竜巻すら発生させるに至ったクロナの膂力。だがメールを殺すのにクロナは何も全力で鉄塊を振るう必要などはない。

人が虫を払うように、竜が人を蹴るように。

クロナは全力を振り絞らずともメールを挽肉にすることが可能なのだ。

故にクロナは一割程度の力で鉄塊を振るいながら、メールに逸らさ

れた時の軌道修正のみに全力を振り絞ることで、体勢を崩されることで生まれる隙を限りなく零にしていた。

「技術を圧倒する力技と知れよメール！」

「なんて滅茶苦茶……！」

力と技を合わせたクロナのみに許された異常の応手。

小手先と笑いたければ笑うがいい。

だが殺すのだと魔人は吼え、修羅が震える。

そしてこうして剣戟を交えている間にも、メールだけではなくクロナの能力値も上昇していた。

メールや宗司のように技が極まるのではない。単純な数値の暴力、レベル制限を撤廃された無限成長の権化。

初めから存在していた実力の差がさらに開いていく。

振るわれる一閃は当初と比しても別次元。手にしていた獲物が飾比翼でなければ、メールは既に武器もろとも鉄塊に粉碎されていただろう。

だがメールは掠めただけで死に至る必殺の雨に打たれながら、未だに直撃を受けずに抗っていた。

「それだ……！」

無限成長する魔人に、狂気に浸った技の真髄だけで拮抗する異常。

「それなんだ……！ それを私はあ！」

これがゲームであれば、スキルを含めた数値の上では既にメールは死んでいるはずだ。

100レベルを超えた見切りと剣術での補正すらも届かない。覆しようのない戦力差は絶対であり、それが神の定めた摂理であったはずだ。

だからこそメール・リンクキャットは最早、人間と成り果てたと言えた。

数値では測れない不可思議を手練り寄せる狂気。

神が抑え込もうとして抑えきれなかった失敗作の真髄だけでここに立つ。

そして、際限なく上昇する死闘はこれ以上を求めて白熱しながら冷

めていく。

「メエエイル！」

「クロナさん！」

虚空中で幾つもの火花が散った。

必殺の鉄塊が逸らされ続け、必殺の間合いを目指して少しずつ二人の距離が縮まっていく。

もう、二人の在り方を語る必要は無かった。

逸脱した者が二人。数値では測定しきれない無限成長と、「あ」数値では見いだせない狂気の淵のどちらが戦いを制するのか。

二人だけの戦場に観戦者は殆ど存在しない。いや、もう周囲のことなど二人にはどうでもよかった。

殺し合える敵手だった。

殺し、殺してくれる強者だった。

死ぬ。

殺せ。

原初の思いだけで二人が刃を光らせる。

純粹に狂い、真剣に歪む。

そして悟る。

このままでは——この好敵手を殺せない。

「おおおおお!!」

「ああああああ!!」

そして遂に荒れ狂いながらも動きの無かった両者が同時に跳ねた。

一瞬にして空気の壁を突き抜けたクロナが躊躇なくマイルとの間合いを潰す。その間にいつの間にか魔術で生み出した漆黒の片手剣を右手で掴み、マイルへと投擲した。

意表を突いた一手は、歩法によって騙されてあらぬ方向に突き抜ける。だがその程度は予想通り、クロナはマイルが背後に回り込もうとするのにも構わず、鉄塊を勢いよく地面に叩きつけた。

轟音と共に巨大なクレーターが生まれ砕かれた大地が空へと噴き出す。

「ッ……!?!」

「浮いていればあの奇怪な足捌きもなあ！」

舞い上がる土砂の中で空に浮いているマイルにクロナが犬歯を剥いた凶悪な笑みを向ける。そして間髪入れずに鉄塊を振るい——今度はクロナが驚愕を露わにした。

「土砂を足蹴に!？」

「風に乗れて土に乗れないなんてえええ！」

周囲を舞う土の塊を踏み砕いて鉄塊を躲したマイルは、そのまま空を舞う土砂を足場にしてクロナの周りを飛び始めた。

クロナのように力任せの速さではない。技量と魔術を合わせた早さ。速度ではなく巧みによってクロナの視界を騙し、「いいな」ついにその反射神経を振り切って背後を取ったマイルが一直線にクロナへと飛んだ。

「このお……!？」

だが背後からの奇襲に直感で気付いたクロナが鉄塊の腹でマイルの突進を受け止める。飾比翼の切っ先で分厚いだけの鉄塊を半ばまで貫きながら、二人の体が土砂の雨より飛び出した。

呼吸すら感じられる程の距離で二人の視線が交差する。渦巻く狂気が絡み合い、相容れぬ二人の意志に応じて地面に触れる前に弾かれ合った。

「まだですー！」

着地と同時に、先に駆けだしたのはマイルだった。距離を開かれては先の二の舞。どころか今は追従できてい「そこだ」とはいえ、無限成長の前に悠長な隙を伺うなど愚行。

一拍の余地も与えず放たれた嚆矢となったマイルに遅れて地面に足を引きずりながら踏み止まったクロナが迎え撃つ。

———どれだ!？」

鋭敏になり過ぎた視覚が歩法で描かれた無数のマイルに騙される。見るだけで脳髓が激痛を訴えるのは技で遙かに劣る証拠。

見えているのに見えない敵。遮二無二と鉄塊を振るえば必殺で首が落ちるのは明白。

それでも博打で振るうか否か。

一呼吸にすら満たない隙で攻防の天秤は逆転した。今はメイルの必殺を防ぎ、そこより勝機を導き出すより無い。

故にここはあえて――。

「受けて立つー！」

鉄塊を手放して、クロナは己を奮い立たせるように声を荒げた。

かつての騎士だったころのように真っ向から。零秒で潰された間の中に現れたメイルが振るった飾比翼を並外れた身体能力に身を任せて掻い潜る。

避けられない刃は咄嗟に鉄塊か「惜しい」ら手を離し生み出した二刀で受け止めるが、僅かな均衡の後に容易く切断された。その僅かな間に刃より体を逸らす。地面にまで触れる黒い髪が飾比翼に切断されて無数と散った。

「このっー！」

乱れ咲く黒い花の中、修羅の剣舞が魔人を追い立てる。

だがようやく手にした勝機を手放すまいという焦りが僅かにメイルの切っ先を鈍らせていた。

その焦りが脆い片手剣しか持たないクロナを辛うじて生き長らえさせる。本来なら十手もせずには鮮血で染まったはずの飾比翼は鈍い輝きを光らせたまま。十手どころか二十を超えて、切断された片手剣の残骸と黒髪が地面にぶちまけられる中、クロナは必死に勝機を求めて抗っている。

度重なる死線を超え、宗司との試合もこなしたことで成長したメイルだが、彼女に足りない経験値。

それこそ己が有利な状況。常に弱者として戦ってきたからこそ、いざ己が有利になると経験不足が現れる。

クロナがそこに気付いたわけではない。これも戦士としての直感か、天秤が傾く一瞬で武器を手放す判断を下し「残念」た結果が綱渡りのような攻防。

しかし、博打で鉄塊を振るった後の隙を縫われるよりかはマシか。

いや、もしかしたら鉄塊を振るえば勝敗は決まっていたか。

どうでもいい。

だがもしもと考えてしまう。

それこそこの戦いはおろかこれまでのもしもも。

アポロン山脈に攻め入った間違いか。

山賊まがいの傭兵に雇われたことか。

ああもしもあの時、ソージがメイルにあの傭兵を殺すことをけしかけたのを止めていたなら――。

君は今でも、優しい笑顔で聖剣の守り手という役割をはたしていたのだろうか？

「甘いぞ、メイル」

焦りから大振りになった隙を搔い潜って、クロナが鋭い前蹴りを放った。

反射的に飾比翼で衝撃を受け流したメイルだが、あまりの衝撃に再び間合いが大きく開く。

「ぐっ……い……き、流石ですねクロナさん」

飾比翼を突き抜けて腹に響いた衝撃に苦悶の表情を浮かべるメイルの瞳には、変わらない狂気が渦巻いている。

クロナは静かに傍らの鉄塊を拾い上げた。

もう張り巡らせた思考は殺意に染められ消えうせた。

きつと殺すし、きつと殺される。

あらゆる選択の末にクロナとメイルはここに居て、この修羅場で戦っている。

戦った果てに、どちらかが世界の災禍と成り果てて。

——なんて様だと、言われるよ？

「次で、終わらせよう」

これまでの荒々しさが嘘のように、クロナは静かに鉄塊を正眼に構えて動きを止めた。

まだお互いに余力は残っている。直撃は互いに無く、切り傷すらない。

だが全てを出し尽くし、語り尽くす必要は無かった。











## 第二十一話『しゅらばらばらばら』

今や宗司は己こそが極限を体現しているのだと確信していた。

奥義、心鉄金剛。そして刀匠ダンの生み出した究極の一、繫。人と鋼が合わさった極みの斬撃は数値化された力という概念を超え、殺到する数多の魔族は鎧袖一触と斬り捨てる。

「は、はは、ははははははー！」

血風の只中で宗司が笑う。

あの夜を超え、刀を手にした己が放つ全てが愛おしい。虚無ですら埋め尽くす人間の可能性が全てを一刀に伏す。

最早、宗司にとって人族の絶望たる魔族ですらそこらの雑兵と大差なかった。

魔族の軍勢との激突からおよそ五分。たったそれだけの時間で、大将であるガングルを初めとした半数以上の魔族が地べたに骸を晒していた。

「ぎやはははー！ スゲエなー！ スゲエ男だぜ勇者よお!!」

しかし魔族もまた嬉々とした特攻を止めない。人とは違う思考回路、闘争を前提とした生命という矛盾。喰うために殺すのではなく、殺すために殺すことがあらゆる欲求を上回る異常の種族が、悉く宗司へと殺到し、悉く赤い花を咲かせて散る。

だがこれは決して魔族が弱いためではない。もしも異世界転移当時の宗司であったならば、手傷の一つや二つは受けていたのは間違いなく、万が一とはいえ敗北する可能性すら存在していた。

少なくとも、疲弊もせず全てを斬ることは出来ない。彼らにはそれだけの戦闘力があり、だからこそ、今の宗司がどれだけの高みに存在するかの指針となり得た。

数千を超える宗司の影が映りこみ、瞬く間に方に届く斬撃が降り注ぎ、珠玉の一刀がその命を奪われるまでが今の魔族に許された戦いの全て。

ありとあらゆる感情を以て刃を振るう心鉄金剛の粹こそこの光景。その手応えに身震いしながら、宗司は新しい玩具で遊ぶ童のように刃を振るう。

「これか……い……これがアレの頂に続く極みか……！」

半死半生の時とも、慣れない得物を使っていた時とも違う。万全の状態で最高の刃を手にして初めて行われる全力の戦闘行動が多幸感となつて宗司を包む。

そうしている間にも骸が増え続け、血潮が大地を潤す。だが幸福の時間も永遠には続かない。

いずれ魔族の数も限界が来る。在らぬ方向を斬り裂いた魔族を擦れ違いざまに斬り捨ててながらそんなことを考えて——違和感に気付く。

「……どういふことだ？」

「死ねや勇者ああああ!!」

「悪いが構つてはおられん」

あらぬ方向に立つ幻影の宗司を狙つた魔族の首を跳ね、次いで無言で襲つてきた魔族の一撃を躲し——躲す？

「ッ!」

宗司は瞬時に幻影に乱されずこちらを狙つた魔族の四肢を斬り飛ばし、そこでその魔族が数分前に袈裟に斬られた魔族だと気付いて目を剥いた。

絶命していたはずの魔族が再び地面へと沈む。直後、その骸を飛び越えて、体に致命の一撃を受けたはずの魔族が宗司の前へと現れる。

「……いっは」

そして宗司はまるで何かに引つ張られるように立ち上がり始める。魔族の死骸を見渡して表情を引き締めた。

手ごたえは確かにあつた。現に宗司を囲んでいる魔族は、いずれも壮絶な死に顔のまま微動だにせず、視線もこちらを一切向いていない。

だというのに、生前はあらぬ方向に向けられていた彼らの武器が全て宗司を向いている。

死してさらに高まったのか。死者を操る魔術でも行使されたのか。否。

否、否、断じて否。

彼らからは魔力が流れることによつて生じる奇妙な気の流れは感じない。

あるのはそう——見慣れた気の流れ。

刹那、宗司の思考を断ち斬るように魔族の死骸が一斉に宗司へと殺到した。

「ふう……！」

これまでの踏み込みとは雲泥の理合に沿つた足捌きに思考を挟む暇はない。宗司は鋭く呼気を吐いて身を屈めると、まずは目の前の数体を彼らの一撃が届く前に斬り飛ばした。

いずれも四肢を断たれこれ以上動きようはない。それにより生まれた間から包囲を抜け出すと同時に反転、反応が遅れた魔族を背後から斬ろうとして、宗司は突如背中を焦がす殺気に感づき背後へと刃を振るつた。

キンツと甲高い音を立てて宗司目掛けて放たれた漆黒の刃が二つに断たれて地面に落ちる。その特徴的な短刀——苦無と呼ばれる武器を見た宗司は「……驚いたのお」と喉を鳴らした。

「ないる殿にあの槍使いときたのだ。もう二、三人は居るかもしれぬと思つていたが……まさか同郷とはな」

虚空に向けて言葉を放つ宗司は端から見れば奇妙にも見えたことだろう。だがしかし、修羅の道を極まろうとしている宗司の眼は、視界を騙してそこに立つ奇妙な揺らぎの正体に気付いていた。

「名乗れよ、忍しのび」

「その言葉、お前にそのまま返すとしようか侍」

「彼我一刀流、宗司だ。そら、姿を晒せよ」

挑発するように鼻を鳴らす宗司に呼応するように、何もなかったはずの場所が歪み、蜃気楼で包まれていた漆黒が地面より滲み出る。どいう原理で何もない場所に隠れるという荒業を成せたのかは分からない。だが、それこそが歴代最強とも謳われ、忌み嫌われ、遂に歴

史から抹消された忍の証明。

「我が名ハットリ。我が主の命によって死ぬ、侍」

異世界より呼び出され、新たな主によって名を与えられた忍者、ハットリ。宗司という規格外に引き寄せられて呼び出された四人の修羅外道の一人が、いつの間にか取り出した苦無を両手に構えて、宗司に死を宣告した。

「ハッ、丁度良い。今の俺を試すに相応しい相手が欲しいと思っただとところよ！」

立ち込める気と殺意はナイルとほぼ同等。そして宗司がかつての世界で倒したことのある忍者と比して遥か極上の手合い。

つまるところ、敵もまた極限の申し子。可能性を完結させるに足る修羅外道と察して、宗司の気も高まる。

「行くぞハットリ！」

「いいや、行くのは俺だ侍」

そんな宗司の出鼻を挫くように、機先を制したのは宗司の背後に居た魔族の死骸だった。

「忍法、分け身骸」

「ツ……この死骸全てお主の絡繰りかよ!？」

「それだけとは思わなよ」

再び風景に体を同化させるハットリの言葉の真意を問い質すよりも先に、宗司は視界の全てを埋め尽くす光の雨に目を細めた。

天より降り注ぐアイアス城塞からの魔力砲撃。最早死骸を巻き込むことに躊躇は無いのか、放たれた光の柱は魔族の死骸を飲み込んで大地を炙る。

「ツツツツ……い！」

こちらに追いつがる魔族と魔力砲撃を掻い潜る宗司に先程までの余裕はない。どういう原理か定かではないが、ハットリはこの場の死骸を操るだけではなく、遠く離れたアイアス城塞の全権すらその場で操ってみせていた。

だがそれだけならば宗司の余裕が無くなるほどではない。恐るべきは、そこまで操って尚、宗司の死角から無数の苦無や魔族の武器を

放るハットリの技にあった。

「これ、が……！　本物の忍か……！」

影に潜み、夜より牙を剥く闇の戦闘術。互いの實力を出し尽くす宗司やナイルといった手合いとは前提が違う。忍者という在り方に特化したハットリの技の数々は、宗司をしてこれまで出会ったことのない類の實力者に違いなかった。

「卑怯と吼えるか？」

「まさか、流石と嗤うぞこの俺はなあ！」

しかし、ハットリの問いに宗司は良しと笑いながら魔族の四肢を斬り飛ばした。

肉体の技をぶつけ合うだけが戦いではない。その場にある全てを用いて勝利をもぎ取ることもまた戦い。

その極限を目指した者こそ忍者。その粋こそハットリ。まさしく何もかもを賭して戦うこの男の戦い方が宗司にはいつそ好ましくすら思えてたまらない。

故に、凜と奏でる鋼の音色を響かせながら、肩を揺らして宗司が吼える。

「お主の全てで俺を殺しにこい！　代わりに俺の全てでお主を斬ってみせようか！」

これぞ修羅。これぞ人間。

繋を構えて我を誇る。修羅に相応しい技の極みを魅せつけて、宗司は見えぬ影へと宣誓を果たすのだ。

「言われずとも……お前は殺す。必ず殺す」

その狂気に対してハットリもまた彼だけの狂気を胸に答えを返す。この男はここで殺す。全てを賭して、全てを利用しつくして殺してみせる。捻じれ狂った忠義と殺意で構成されたハットリの苛烈な攻めはさらに激しさを増して宗司を襲う。

魔王の魔力を用いて行うアイアス城塞の魔力炉の限界すら無視した砲撃の数々、肉体の限界すら超えた動きを行う魔族による突撃、地面に設置した地雷も無数と爆発し、その合間に見出した隙へとハットリは武器を次々に繰り出す。

だがそれでも未だ宗司に傷一つすら与えることが出来なかった。人間の可能性の終わりに到達した盲目の騎士すら凌駕した宗司は既に、転移当時互角だった他の修羅外道ですら手に余る域へと至っている。

宗司と魔族の戦いぶりを見た僅かな間にハットリも理解していた。殺すという誓いは変わらない。

必ず殺すことを確信すらしている。

だが、届かない。

ハットリ一人では、今の宗司には届かない。

だからこそハットリは魔族の死骸やアイアス城塞の砲撃などを使ってみせたのだ。奇しくも、アン・サルソンの覚醒と対峙した宗司と同等の、否、それ以上の絶望的な力の差を理解した——故に、この場こそが必殺出来る唯一の瞬間なのだ。

地形の有利、数の有利、こちらが相手の技を知っている有利、相手はこちらの技を知らない有利、それだけの有利を積み重ね、現状の拮抗。

「……認めよう。お前は俺が戦った中で最高最強の侍だ」

惜しめない賞賛を口にしながら、ハットリは徐々にだが確実に己が追い込まれていることを理解していた。

だが殺す。

意志は変わらず、現実も変わらない。操る魔族の数は失われている、魔力砲撃も残り数分で機能停止する。

そして全てが失われたその時こそ、ハットリの敗北が確定する。だからと言って打開策は無く、か細い勝機に全霊を賭けて刃を放とうが、悉くが心鉄金剛の前に碎ける。

だが殺そう。

きつと殺そう。

俺の全てでこの極上を、ありとあらゆる全てを投げ出してでも殺してみせれば——。

「くはっ……！」

忠義を捧げる主君を得ても変わらない。



生涯最高の忍を殺したとしても止められない。  
強さを求める。超えて、殺し、超え続け、研鑽する。

いずれくたばるその時まで、ハットリの闘争は終わらないから。

「俺の技、悉くを存分と味わえよ侍」

「是非も無し。かかってまいられよ、ハットリ」

短い会話を終え、ハットリが再び魔族の影に姿を消した。

物言わぬ魔族の群れが再度宗司へと襲い掛かる。鎧袖一触と斬り捨てられていた時とは違い、確実に宗司の場を見抜き攻めたてていた。

それでも宗司の斬撃は衰えることはない。どころか、より強さを増した魔族の軍勢を相手取り、心鉄金剛の冴えはさらなる域へと至ろうとすらしていた。

死山血河の上で踊る骸と戯れる外道。音すら断つ神域の刃は、虎視眈々と宗司の隙を伺うハットリをして戦慄を禁じ得ない技の極みだ。

——だからこそだ。

敵が強大であればある程、ハットリの中を流れる修羅の血潮が沸き立った。

魔族を壁にして、隙を縫って苦無が宗司を襲う。だがどの角度から武器を放つても、まるで後方にすら目があるかのように宗司はハットリの必殺を斬り払う。

全てが圧倒的だった。

死骸の気を操りスキルや魔術すら行使させた魔族の技を全て、降り注ぐ魔力砲撃、爆発する地雷の衝撃。いずれも宗司の刃は寄せ付けない。

それは斬るといふ行為の終着点に至っていたとすら思えた。だがハットリはそこにまだ無限の可能性が秘められているようも感じた。

「俺の知らない域か」

「彼我一刀流奥義、心鉄金剛よ。無限と広がる人の業を全て刃に投影した俺の斬撃は、完結すらも超えるものと知れ」

無限と放たれる斬撃を繰り返しながら、宗司は歌うように己が技を誇る。

だが虚無の完結すら斬るといふ荒業を成した奥義の深奥へ続く道はまだ開かれたばかり。

この戦いを経てさらなる習熟を見せる奥義は、未だ完結に至っていないハットリでは及ぶはずもない。

それでも彼は僅かな勝機を手繰り寄せるべく戦っていた。

迷いなど何処にも無い。あの夜に完結を前にした宗司と同じく、本能が否定する勝利を理性が確信していた。

明らかに前提が異常な破滅的思考。正しい本能を間違った理性が凌駕する狂気。

そう、狂気だ。

結局、この場で生きた二人はまともではない。

それで良いと二人は笑って戦場で鎬を削る。

夢のような戦いの日々。

練磨され続ける修羅達の喜び。

だがそれにもいずれ終わりが訪れるのだ。

「……さて、これで手札は全てなくなったようだのお」

「……」

戦いの開始より僅か五分も満たない、しかし二人にとって永劫のような時の終わりが訪れた。

操ることすら出来ない程に切り刻まれた魔族の残骸が辺り一帯に散乱し、遠くでは過剰な魔力によって内部より爆発して炎上するアイアス城塞が爛々と赤い光を発しながら爆発音を幾つも響かせて崩壊していた。

そんな場所に残された二人の修羅が互いに間合いの一步外で向かい合っていた。

宗司とハットリ、互いに目立った外傷はそこには存在しない。

だがハットリが宗司との拮抗を果たすために使用していた全ての駒は消滅し、残されたのは彼の肉体のみ。そこまでして手にした結果は、肩で息をする程度に宗司を消耗させたことのみ。

分りきった当然の結末。完結を超えた人間と、完結に至っていない人間の差が両者にはあった。

宗司の体力も一分もすれば回復するだろう。その間に攻め切れなければ今度こそハットリは宗司の刃の元に下る。

か細い、いや、もう途切れている勝利への道筋。

敵は強大で、ハットリの持つ全ては無限の可能性を前にしては無意味と同義か。

否。

否なのだ。

ここで折れるならば——彼は、彼らは修羅外道とは言われない。

「く、くかつ……！ はは、はははは！ 殺す！ 殺せる！ お前を殺せば俺は！ 俺の今を！ 今より、先に！」

敗北を前にして、己の死を予感して、故にハットリは無表情を崩して笑った。笑える狂気を彼もまた秘めていた。

「くくつ、良いなオイ。羨ましいぞお主」

ハットリの笑い声を聞いて、宗司も楽し気に肩を揺らす。

天秤は確実に宗司へと傾いている。だがそんなことはどちらかの命が散る瞬間まで意味が無いのだ。

宗司があの日心鉄金剛に目覚めたように、ハットリが死線の間際で宗司と同じ覚醒をしないと誰に言える？

出来るのだ。

繰り返して続けたのだ。

彼らはソレを成し続けた。限界と呼ばれる線を、才能ではなく狂気で飛び越えてきたからこそその修羅。

ここまでと思ったところから、ここまで以上の場所へ指をかけられるのが人間。

悍ましき二本足。

進化し続ける破滅。

善悪を超越した悪意が二つ、互いの破滅を互いに願い、再び刃を交わすべく動き——。

「そう、この混沌こそを私は望んでいたのです！」

互いに捻じれ狂う悪意の渦の只中に、新たなる修羅の悪意が歓喜の声と共に恐るべき修羅場へと降り立った。

そこは見渡す限りの死骸、死骸、死骸。

ここにはもう命の香りなど殆ど存在しない。誰も彼もが死に絶えて、どいつもこいつもくたばった。

故にこここそが命の証明だった。戦い続ける戦士達の命が輝いた刹那を積み重ねた死の世界。すなわち命が満ち溢れた輝き。

矛盾した混沌。愛すべき狂気。

ならば、この女が馳せ参じぬなどあり得ない。

「おお我が神よ！ 黒き混沌の神、偉大なるにやるよ！ 見よ、我らが使徒によつて生み出された世界を！ 冒瀆された命と尚も輝いた命が等しく黒に塗り固められた此処こそが我らが聖域！ 我らが故郷！」

謳いながら歩を進める女の顔は恍惚に染まっている。薬を嗅がされた女ですらここまでの色香は出せない程の艶やかさで、淫らに尻を揺らしながら歩く様は嬲られ貪られる女の化身の如く。

だがその実態は、その色香に誘われた哀れな者共を等しく殴殺する混沌の化身。

ナイル・アジフ。この世界に呼び出された修羅外道が一人もまた、幻想世界ファービュラス最大の戦争に引き寄せられていたのだ。

「久しぶりだのお、ない殿」

「……ええ、貴方も変わりないようですねソオジさん」

場を乱されて多少思う所はあるが、ナイルの体より溢れ出る殺気を感じ取り雑念はすぐに消え去る。

一方ハットリと言えば先程の哄笑が嘘のように収まり、黙したまま読めぬ表情でナイルへと鋭い視線を飛ばしていた。

世界はおろか、歴史を辿つても比肩する者は片手で数えられる程度しかない強者の視線を二つ受けて、ナイルも一層滾りを見せる。

「こんなにも素敵な光景が他にあるでしょうか？」

逸る気持ちを抑えて、ナイルは両手を広げて惨状の跡地を見渡した。

地平線の先まで積み重なった骸の群れ。人魔等しく肉片と化し、残された僅かな者は恐怖に怯えて蹲るばかり

嬉々と動ける者など、この場を除けば要塞を挟んで反対側で轟音響かせて戦っているクロナとマイルのみ。

「私が望んだ刹那の混沌です。儂く醜く美しい。愛すべき、修羅場」  
「修羅場、なあ」

狂気という点では一つ飛び抜けているナイルの言葉に同意するの  
も癪ではあったが、確かに宗司もナイルと同意見ではあった。

いや、これまで只見えなかっただけで、この三人が歩んだ道のりとはこの様だったのだ。

数えきれない死骸を積み重ねて出来た外道の道。ならばこれこそ彼らが愛した世界で、この誰も彼も救われない悪意だけが彼らの全て。

死ぬべき畜生だ。

しかし、彼らは胸を張る。これこそが人間なのだ。

足りぬ屍を欲する餓鬼であると。

そう笑う宗司にナイルも本心の読めない深い笑みで答えた。

「それで——別れた際の約束は覚えているのかのお？」

「しっかりと、私の心に刻みましたから」

言って、ナイルもまた静かに拳を握り半身を落として構えを取った。

この場において唯一の徒手空拳。だがその四肢はあらゆる魔剣、聖剣すら凌駕する珠玉の兵器。

だがそれでも足りない。ナイル・アジフという狂信者であっても、今の宗司に届かないのは他ならない彼女自身が二人の戦いを見て理解していた。

故に、ナイルとハットリは互いが互いを意識することを止めた。

突如として生まれた三つ巴の状態。修羅外道が食らい合う蠱毒の只中で、狙うべきは極上の敵手の首のみ。

「殺してあげる」

「殺すとするか」

二匹の修羅が、修羅道の化身へ牙を剥く。

重なり合った極上二つの鬼気は、その時点で覚醒したアン・サルソ

ンすら凌駕する圧力。

「良い。良いな、こいつは」

だが繋を片手に構えた宗司が放つ剣気もかつての比ではない。先の世界で見出した彼だけの刃は二人の修羅を前にしても劣らず、膨れ上がる鬼気すら押し返す勢い。

人魔の死骸が積み重なる戦場で、今、戦いの第二幕が切つて落とされた。

「おおー！」

「ひひゃー！」

「ッ……い！」

瞬間、一際巨大な爆発がアイアス城塞より発せられたのを切っ掛けに三つの影が激突した。

誰よりも先んじて先を取ったのは、百を超える無数の苦無の流星。正確に宗司の逃げ道を全て塞いだうえで、愚直に走るナイルの動きを阻害しない絶技を前に、堪らず宗司も足を止めて繋を振るって弾き飛ばす。

一拍遅れてナイルの剛拳が宗司の顔面への道を走った。直撃すれば頭蓋骨ごと脳髓を吹き飛ばす正拳はしかし、膝から崩れるようにしゃがみ込んだ宗司の頭上を掠めるにとどまる。

晒されたナイルの腹へ横一文字の斬撃は流星すら凌ぐ不可視の神速。ハットリをして遠距離のみに腐心しなければならぬ冴えだったが、腹を裂く直前で獣の牙の如く刀身を挟み込んだ膝と肘によって完全に抑え込まれた。

「挟み受け!?!」

「未来にまで伝わる東方の絶技です!」

朗々と誇るナイルだったが、その背からは大量の汗が流れていた。

このたった一合、しかしナイルは素知らぬ態度でこの一瞬にこそ全てを賭けていたのだ。

奇しくも先程のハットリと同じ、相手の技をこちらが知っており、相手がこちらを知らない刹那。

この一瞬のみ、実力が離れた両者に拮抗が生まれた。

そしてその隙を見逃すハツトリではない。ぬるりとナイルの股下からハツトリが体ごと宗司へと飛び込んだ。

「ぐう!？」

咄嗟に胸元を庇った左腕に激痛。差し込まれた苦無が腕を貫通している。

だがただでは宗司もやられない。「おおお！」雄叫びをあげ、未だ挟み受けされている繋を全身の力を振り絞って振り切り、さらに苦無を押し込もうとするハツトリの脇腹を膝で蹴り上げて突き飛ばす。

「ずッ!？」

受けより放たれた刃に腹を浅く斬られたナイルの顔に苦痛の色が浮かび、蹴られたハツトリが地べたを転がりながら体勢を立て直す。

宗司も左腕の痛みに顔を歪めながら傷を無視して両手で柄を掴みなおす。

驕りか慢心か、いや、ここは相手の覚悟に敬意を表すべきか。

代償に腕を一本、安いか高いか。少なくとも、これで二人がかりでも厳しかった戦況は五分五分にまで至った。

「はあー!」

苛烈に気合いを入れた宗司の左腕の苦無が筋肉の動きだけで腕より引き抜かれる。その勢いで多量の血も地面に飛び散ったが、すぐに出血は収まる。

「毒は効かんよ!」

「……侍め!」

苦無に塗られていた毒への対処をされて、ハツトリが頭巾より覗く両目を苛立たし気に細めた。

とはいえ僅かなりとはいえ苦無の毒は宗司に巡っている。霞む視界と左腕の鈍い痛みは今後の戦いに響いてくる。

そんな宗司目掛けて、同じく筋肉を締めつけて腹の出血を抑えたナイルが再度飛び込んだ。

応手の斬撃を手の甲で逸らし、返しの拳。足を止めることなく繰り出される技の数々。間断なく続く刀と拳の激突の合間を縫って、黒い影が幾度と宗司を攻める。

「あはははは！ こうして楽しむのは初めてですねえソオジさん！」  
「ああ！ そして予想に違わぬ鋭さだなお主は！」

「そういう貴方は私の予想をはるかに超えたああ!! 素晴らしい混沌！ 私ごときでは測れぬにやるの使徒に相応しき強さ！ だがしかし！ しかししかしかああああし！ 貴方を殺すことで私こそが真なるにやるの混沌を世に示すのです！」

「黙れ侍、そして南蛮の格闘術使い。侍を殺した後はお前の番だ。お前も殺す。全て殺す。敵は全て殺して殺す。俺を知り、そして死ぬ。我が技に誓い、我が魂に刻んだ宿業に従い、確殺こそが我が信念故に殺す」

「いいわ！ 貴方も素敵ねシノビ！ 二次大戦での航空戦力の跋扈を防ぐどころか潰したと言われる者の妙技！ 貴方もまたにやるの使徒に相応しいいいいい！ おお！ 我らが贄よ！ 私も貴方達もこの世界が全て！ 全てが全て混沌の玩具なりいいいい！」

「楽しくなってきたなあ！ これだ！ 俺の技、俺の高み！ 俺が欲する全てだよお主らがなあ!!」

修羅が踊る。死地を舞台に嬉々と踊る。

彼らが交わす言葉の全てが互いに通じていなかった。誰も彼も自分本位、辛うじて会話が成立していたクロナとメールとは根本から違う。

彼女達がまともに見える程に、彼らはもう根底が終わっていた。人間が人間を律するために生み出した正義という在り方を全否定した悪意の塊。つまりは人間という生物の善性という薄皮を剥いだ内側の根幹に従う理性の狂気、本能の死骸。

鈍い音と鋼鉄の残響が幾つも響いた。その音に合わせて入り乱れる三人の体から血潮が溢れ、殴打による骨の軋みが鼓膜を揺らす。

それ以上に噛い声がやたらに五月蠅かった。気付けば彼らは噛っていた。戦争の音すら消えた戦場全域に響き渡る程に煩わしく汚らわしい、歪で邪悪な声が木霊していた。

「はははは！ くかかかか!!」

「ひひ！ ひひやひや、ひやひ！ ひやひやひや!!」



「くくく、く、くか、くははは!!」

僅かに生き残った人族がその声に耳を塞いで蹲った。

この声が、この在り方が、こんなものが人間なのだと思いたくなかったのだ。

これが人間なら、自分達が生きる意味はなんなのか？ 正義などは嘘っぱちで、悪意こそが人の根幹で、滅ぼされるべき邪悪は人間でしかなくて。

だが認める認めないに関わらず踊り狂う修羅の狂騒は終わらない。

「う、おおおお!!」

荒々しい呼吸を繰り返す宗司が一際大きな気迫を発した。

頭上高く掲げた刃をナイルを両断する勢いで振るう。視界を走る縦一閃に半身で応じたナイルの肩に鋭い熱。躲しきれずに斬られた肩より溢れる熱血よりも早く、半身より右の拳を腰から打つ。

斜めから伸びてきた拳に、刃を振り切らずにとどめて、柄尻を添えて軸をずらす。さらに踏み込みの勢いでナイルと交差した宗司は繋の峰に手を押し当ててナイルの体に押し込もうとしたが、背後を取ったハットリの動きを察してさらに体を反転。勢いもろとも刃の圏内に居たハットリを袈裟に一刀——しかし、妙な手応えと共に、ハットリだったものが木片へと姿を変える。

——代わり身!?

気付くよりも早く、次いで宗司の背後を取る形になったナイルの回し蹴りを刃で受け止める。

だが、脛の骨をガリガリと削がれながらも刃を滑るようにしてナイルは足を振り抜いて宗司を吹き飛ばした。豪脚に姿勢を崩し地面を転がる宗司に休む暇はない。回転する視界の隅で空高く舞い上がった数人のハットリに感づき、跳ねるように飛び上る。

同時に分身したハットリが宗司目掛けて急降下してきた。

一刀に伏す——否、予感。直感。死。

必殺の妙手。

「ええい!!」

直感に身を任せて飛び退いた宗司の居た場所に顔面から激突したハットリが、その直後に轟音を響かせて爆発した。

驚く暇もなく二度、三度。繰り出される人間爆弾から逃れる宗司を熱波が炙り、発生する粉塵が視界を遮る。

ここに来てまだ必殺の手が隠されていたことに舌を巻くのも束の間、粉塵を超えてナイルが宗司の間合いに飛び込んだ。

幾度目になるか分からない背後からの奇襲。しかし今更この程度で後れを取る宗司ではない。ナイルが必殺の拳を放つ前に万全の状態から刃を掬い上げ、ナイルの体を斜めに斬り捨てた。

「ッ、いやこれは!」

「そうこれです!」

ナイルに変化させた変わり身の術。

万全からの斬撃故に生まれる隙。ハットリが仕掛けた二重の罠で掴み取った勝機、今度こそ背後より現れたナイルの一撃が左肩に深々と突き立った。

「ぐ、ふっ!」

肉と骨をすり潰す音が体内を伝播して、伝わる衝撃に宗司の口から苦悶の声が溢れる。

この戦い、遂にナイルとハットリがもぎ取った一手。隔絶した実力差すら練り上げた技と狂気で埋め尽くすからこそこの修羅。

「が、は……!」

咄嗟に自ら後方に飛ぶことで左腕が完全に潰れるようなことはなかったが、それでもこの戦いではもう左腕は完全に使い物にならない。

だからどうしたと宗司は笑い、対する二人もその程度では終わらないだろうと笑みを濃くする。

「まだだ……! まだだよなあ!」

そんな二人の在り方が宗司には心地よかった。

この修羅場の冷徹で、熱血を迸らせて嬉々とする修羅と競い合える喜びに勝るものはない。

「やはり貴方は最高ですわソオジさん! 惚れ惚れする! 神々しく

すらある！ ああそうよ！ 私はこの瞬間を待ち望んでいたの！

さあソオジさん、私の予想を超えてください！ 全てが思い通りになる私の脳髄を超えた奇跡を！ その時こそ私はあー！」

およそ美女がしてはならない悍ましい形相で声を張り上げるナイルとは対照的に、ハットリは静かに残された最後の苦無を構えることで意志を示した。

短くも濃縮された戦いの決着はすぐそこだ。

いや、あるいはここからが始まりなのかもしれない。

心鉄金剛をもってしても超えられるか分からない二つの巨大な敵を前に、沸き立つ心とは裏腹に、宗司の心はやけに静かですらあった。

雑念が満ち溢れながら、鋼のように固く静かな心持ち。発露させるばかりだった心が新たな高みに至った感覚。

「……ああ、そうさ」

強くなりたいたと思った。

刀を手にして幾年。刃を振るうことだけを繰り返した日々、他者を殺してでも強くなることだけが真実で、餓鬼のころからいつまでも変わらない思いを刃に秘めて。

「俺は、ここからだぞ」

「そして私もここからですよソオジさん」

「ああ、俺も……ここからだよ侍」

宗司との戦いを経て、二人の修羅も終着点へと至ろうとしていた。ナイルの握る拳に黒く塗り固められたかのような殺意が集まってく。全身より滲み出る殺意は純化の一途を辿り、その完成された暁に至る『殺意』という完結が体現するのは時間の問題。

ハットリも残された苦無に戦いへの渴望が満ち満ちていた。殺すばかりの日々で、強さを求める忍者という異端が見出した一つの答えは『闘争』という形に終わりを迎えようとしている。

だが彼らの在り方は完結では終わらない。無限を是とした宗司と戦うことで答えに至ろうとしているからか、いずれもたった一つの可能性に飲まれる兆候はなかった。

宗司が虚無の完結に追い込まれることでようやく至った場所に彼

らもまた辿り着こうとしている。

今はまだ明確な形ではないが、いずれ至るのは時間の問題。

心鉄金剛が無限の象徴ならば、人の数だけこの奥義は存在する。

人間の可能性を技という形に押し込めた奥義。それが意味するこ  
とは——今は、関係ない。

気が世界を埋め尽くす。もうこの戦いは誰にも予想の出来ない超  
越の向こう側。

だがはつきりしていることが一つだけある。

「斬<sup>cut</sup>」

勝敗は関係ない。残された全ての力を注ぎ込んで宗司はそれだけ  
を達成すると覚悟した。

その覚悟にナイルとハットリも胸に宿した答えで応じる。

故に、そう、故に、だ。

この日、あらゆる必然と偶然で集まった三人の修羅外道はもう誰に  
も止められない。

世界の理すら凌駕して、原初の狂気で突き進む人の末路達よ。お前  
達の決着は凜。

遠くで鈴の音が聞こえた。

「ッ!」

三人の視線がアイアス城塞の向こうから響いた音色の方角へと向  
けられた。

それは誰にも止められないと思えた彼らの激突を止めるに十分な、  
しかしあまりにもか細い旋律だった。

だがその音色に思考を挟む余裕は彼らには残されていなかった。  
何故ならばソレはもう全てを知っていたから。

この戦場で散った命も。

稚拙ながらも修羅の本懐を果たそうとしてた二人の戦いも。

この場で行われていた修羅外道達の狂騒を見ていたからこそ。

「やあ、元気かい?」

ソレは突如、向かい合う三人の間に降り立った。

「ッ!」

その姿を見た瞬間、三人は吸い寄せられるように一斉にソレ目掛けて踏み込んでいた。

半ば無意識、だが三人それぞれが手にした答えを元に放つ必殺の一撃。

例え神であろうとも必滅するに十分な攻撃を三方向から放たれたソレは、腰の鞘に手をかけて――。

凜と、再び歌が響く。

「ッ!?! うぎいいいいいい!?!?」

突然、ナイルが絞り出すような絶叫をあげながら、失われた左腕の傷口を抑えて地面に転がった。遅れて、胸を袈裟に斬られたハットリが声も漏らさずに地面に伏す。

そして――甲高い音色が戦場はおろか世界全てに波及した。

「ぐう!?!」

「やっぱり、君だったんだね」

「お、主、いや……お前、は……!!」

宗司は無意識に掲げた刀で受け止めた刃の向こう側を見て、一瞬の動揺も束の間、激しい怒りを露わにした。

ソレにはまるで特徴がなかった。黒髪がこの世界では珍しいがその程度、この世界の乞食が着ているのと変わらない檻縲を纏っているため、貧民街で地べたで突っ伏している乞食とそう大差はない。

だが、刀身から柄まで漆黒の大太刀を持ったソレこそが、一瞬にしてナイルとハットリを斬ったのは間違いないかった。

「久しぶりだね、宗司」

「何故だ! 何故お前が、ここに居る!!」

「彼らはお友達かい? 良いことだ。友達は大切にしないとね。そうだ、後で紹介してくれないか?」

まるで言葉が噛み合っていない。襲われたとはいえ、宗司の名を知り、宗司の友人だと思いなから、紹介してくれと嬉しそうに言って、既に斬っている。

特徴が無い?

違う。

刀を手にしていなければそう見えただろう。だが一度刀を手にした時、ソレは没個性とは真逆の異常へと変身する。

だから、ソレの言葉は滅茶苦茶だった。

「俺はずっと心配だったんだ。君が俺の元を離れた後、無事にやっていけるのだろうか、と」

「君は反抗的ですぐに突っかかってくるから人付き合いが上手くいかないんじゃないかと思っていた」

「だけどそれが杞憂だと分かって嬉しい」

「おめでとう宗司、師匠として一安心だ」

何を言っているのか、ソレを知らない人間にも理解出来ないことだった。

人並みに心配を口にしながら、まずは斬っていた。まるでそれが当然だとばかりに斬る当たり前があった。

斬撃が前提として存在していた。理解出来ないことだが、その男は斬撃という形の人間で、人間と言う名の斬撃だった。

「君の先生の代わりとしても誇らしいよ」

刹那、脳裏を過るのは——あの日の雨。

「ツ……それをお前があああああ!!!」

憤怒に任せて、宗司は刀もろともソレを吹き飛ばした。だがソレは多少驚いた素振りを見せるだけだ。

否、それどころか首を傾げてすらいた。

まるで、何故怒っているのか分からないとでも言わんばかりに。

「ツツツツ……ああ、久しぶりだな、師匠」

「師匠、です……か？」

しかし宗司は苛立ちを無理矢理飲み込んで、表面上は冷静を装ってソレと対峙する。

遅れて、傷口より血を滴らせながらナイルがゆつくりと立ち上がり、ハットリもふらつきながら体を起こす。

「ええ、そうです」

そして背後に居る二人へとソレはゆつくりと振り返った。

瞬間、ナイルとハットリの表情が凍り付く。

ソレは、普通の男だった。

中肉中背、覇気も無く、彼らのような狂気すら感じない。だがそんな印象は即座に消し飛ぶこととなる。

「初めまして二人共、俺はかつて彼の——宗司の師匠だった者です。とは言っても、恥ずかしいことに教えることは殆どなかったのですが」

黒い、とても黒い眼だった。

光すら飲み込む暗黒天体。美しさと醜さを同時に内包した漆黒の眼球を見た瞬間、二人は即座に全てを理解した。

ナイルはそこに黒き神の現身を見た。

ハットリはそこに口伝のみで語られた伝説を見た。

だがどちらも初めに感じた思いは一つ。

「なんて、様」

「はい、そうです」

どちらともなく呟いた言葉を男は当然と肯定した。

何故ならば彼は常にそう言われ続けてきた。誰もが認められない人の本質、眼を背けたくなる悍ましき、狂気に至った人間ですら心を苛む得体の知れないものに僅かな恐怖を抱く完結の化身。

それは、世界を跨ぎ恐れられてきた人の終わり。

無限と言われる人間の可能性の一つをその才覚で完全に完結させた修羅外道。

悍ましき真の名を——。

「だから俺は、青山と呼ばれていました」

## 第二十二話【人】

ダン・ダーレンダンは、孤高であり孤独の天才だった。

常に傲岸不遜、他者のことなど眼中になく、己が思うままに生き続けてきた彼だが、その本質は誰にも理解されない天才故の虚しさだった。

鋼という真理を得てから数十年。打ち続けた武器を振るうにたる戦士を探し続け、あるいは自分を上回る鍛冶師を探し続け、そして結局この世界には一人たりとも彼の境地に届いた存在は現れなかった。

はつきり言ってしまうえば、メイルはおろか宗司ですら結局のところ及第点というだけであり、ダンの武器を担うに足る器としてはまだ未成熟でしかない。現に宗司は未だ彼の全てを注いで作り上げた繋という刀を十全には使いこなせておらず、至った境地という点ではダンの遥か下でしかない。

それでもダンは宗司を選んだ。この世界でも頭一つ以上抜けた戦士としての技量ではなく、尚も成長し続ける彼の未来を信じて刃を練り上げて託した。

ダンはそこで満足した。いずれ宗司が至ったその時を見届ければいいと、無意識にそんなことを考えて彼の旅に同行することを提案もした。

しかし。

だが、しかしダンは欲していた。

希代の鍛冶師の技量を全て注ぎ込んだ一刀を十二分に操れる戦士を、そのためにメイルの刃を作った後に人知れず彼は一本の刀を打ち終えていた。

宗司に打った鋼そのものの刀とも違う。

メイル打った担い手と共に成長する刀とも違う。

ダンが打った三本目の刀は、呪いとも呼べる異形の刀だった。

何故、打ち終えた刀がそこに至ったのかは彼にも分からない。だがダンをして恐ろしいとすら思ったその刀を、ダンは空間魔法の応用で



懐に仕舞い——封印してから、宗司達と共に戦場へと訪れ、醜い殺し合いを一望できる場所で気分よく酒盛りをしていた。

だがそんなダンの悪趣味な酒盛りは、僅か数分もせずに破綻する。「こんにちは、お空が消えたお爺さん。そうやって自分ごと酔いしれた今が、真実に等しい嘘っぱちだと分かっているのかしら？ それとも、頑なに首を逸らしながら、甘いお菓子を宝箱に隠しているの？」何故ならその時、彼は遂に出会ってしまったのだ。

人の極みと呼ばれる狂気。際限なく狂い続ける珠玉のガラクタ。

口より語られるのは悪意のない理解不能な言語の羅列。鈴を鳴らすように儂い言の葉を紡ぎながら、ダン・ダーレンダンの背に、狂気という名の終わりが追いつく。

「だけど本当は、後ろが前のめりになるって知っている？ 本当よ、真下って実は真横の左側にあるの。でも右側が真上ではないから、貴方の嘘は真実の反対。一秒後が本物を笑うから、天才って一秒前に真正面が後ろになるのね。あはは、驚かないで可愛い可愛いお爺さん、その指先が汚いなら、隠した小さな宝石は腸の蛇口はらわたから流れる糞尿で洗うにかぎるわ。でないと、三つの心臓が澄んだ瞳に流されてしまうもの」

ダンが耳朶を擦る柔らかい女の声に振り返れば、そこにはいつの間にか幼い顔立ちの少女がいた。

数分前に追いはぎにでもあったかのように、襤褸を一枚羽織っただけのか弱く儂い少女である。だが自身の服装など気にも留めず、腰まで伸ばした黒髪を血潮の香りと共に流れる血風にたなびかせ、声と同じく柔らかい微笑みを浮かべた少女は、ゆつくりとダンの傍へと歩み寄ってくる。

一見すれば吹けば飛びそうな少女は、別に容姿が美しいわけではない。幼い顔立ちのおかげで可愛らしくは見えるが、眼鼻は大きくも小さくもなく、体も肉付きが足りず髪が長くなければ少年と勘違いしたかもしれない。

良く言えば中性的、悪く言えば没個性的。その少女は擦れ違う誰もが一瞥することも無い存在。

だからこそ、ダンはその異常なる才覚を一見しただけで見抜き、言葉を失っていた。

「そうやって今を唾棄するのはとても容易いけど、もしもと思ひ描くのはいつだって曖昧な絵空事ばかり。だって、ハミングバードの嘴が腐肉を貫くのかな？ その空虚が時に世界を彩り、形を偽ることもあるわ。右手はいつだって裏切りの証明ね、私は本の奴隷でいればよかったのに、現身は膨らんだシャボン玉。心に羽が無いから、両足を杭で貫いたの」

何も語らないダンの隣に、小さい体をさらに小さくするように体育座りをした少女は、膝の上に乗せた顔を横に傾けて、眼を剥いて唇をわななかせるダンを見上げている。

その眼に、ダンは吸い込まれるような心地だった。

「だから貴方は私に似ているのね。今よりずっと前の前の未来のお話よ、口づけをするよりもほんの少しだけ遠く離れたこととそこで、呼びかけても届かない記憶を思い起こすもう一度が今に訪れた。いやね、私は大っ嫌い。

彼らと呼んだのは彼女だけど、私と呼んだのはきつと貴方。月が三日月を描いても円であることに変わりないというのに、粘膜に焼き付いたのはいつも三日月。だから空虚に伸ばした指先がガラスをそつと擦って、引き伸ばされた窓越しの水滴が本物の私なの。

ごめんなさいね哀れなお爺さん、貴方の過ちは正解を願ったこと、それは満たされた致命傷で、俺に素敵で私が嫌いな白昼夢でしかないわ」

暗愚ですら理性を取り戻す空虚なる無限の器の如き瞳である。紡がれる全ての言葉に悉く意味が無いというのに、まさしく言葉よりも雄弁にその瞳が女の全てを物語っていた。

「ねえお爺さん。貴方の全てを俺が斬るけど、だからって私の右側を見ていたところで赤色は記憶に注がれるわ。悲しいことよ、ただ草原を走る一瞬を永遠にしたかっただけなのに、どうして眠りはいつだって夢の向こう側を手招きするのかしらね？

ううん、ホントは分かっていたのよ。一番最初を忘れられなくて、

独りよがりな左目は、弱くてつまらない右目を十一回かけて潰したの。水晶体から体液が溢れる度に、ちっぽけな私は幼女のように泣いてみせたわ……。

止めて。

止めて。

私が願ったのはこんなことじゃないのに。  
なんて。

いずれも全部、くだらないって咀嚼されたわ。おかしいわよね、家畜の香りがする呼気だつて意味を持つなら、意味の無い想像も象られる曖昧でしかないのに。ふふふ、嘘よ、全部嘘っぱち。夜空は遠いし、裸のままじゃ寒くて泣いちゃう。でもね、美味しいパンケーキは苺を乗せるまでお預けなの」

だからとつても残念と。まるで要領を得ない言葉を一方的に告げた少女は、乞食のように汚れた掌をダンへと差し出した。

その手が何を欲して伸ばされたのかダンは何も理解出来ないはずなのに、ダンは即座に理解した。

「私は斬りたくない」

不意に、少女はこれまでの意味不明な言葉ではなく、たった一言、己が欲求を口にした。そしてそれは、言語と行動が一致しない矛盾した行為であった。

存在そのものすら曖昧だったのから一転、鋭い眼光でダンを見据える少女から発せられる威圧感が存在しない。

それが、ダンには不気味だった。こんな眼球の持ち主が一般人程度の存在感しかない事実が異常そのものだった。

「ッ……お前はこいつを」

それ以上に、ダンは自分が作り上げたあの刀をこそこの少女が欲し、あるいは拒絶していることを察して言葉に詰まった。

何故、誰も知らない三本目の存在を知っているのか。いや、理由など必要あるだろうか？ 今、ダンに手を伸ばす少女が秘めた狂気こそが、ダンが完成させた究極と引き寄せられる必然なのだ。

だが、だからこそダンはゆっくりと立ち上がり数歩距離を開いた。

「理由は分からねえが……お前に俺のとおきを渡してやる義理はねえよ」

この女に渡してはならない。

本能と理性が既に結論を出していた。一目で見抜いた狂気の奔流が、この世界全てを台無しにする悪夢なのだ。

「そう、そうね……ありがとう。ありがとうございます。過ちばかりの悲しい貴方、だけど最期に大正解。貴方の指で紡いだ昨日が、私の明日を掻き消した本当の嘘つきね。もう私はこれで——」

そして、それをダン以上に理解している少女は手を差し伸べた状態で頭を地べたに突っ伏して感謝を露わにし——。

「斬るのです」

少女とは違う声が出た。伏した頭越しにダンへ届いた。

「何度も言いましたが、俺を呼んだのは彼女の剣で、私を呼んだのは貴方のソレよ。お願い、手を切つて、指切りに嘘はつきもの。本物が偽物の俺だ。貴方は私ね。誰かしら？ 呼んでいるんだ見たくないもの。斬ることに理由があるか、いつも口だけ、私は俺を裏切つて、俺の終わりはここでしかない。そこに行くのは私だけで、いいえホントは私が正直な嘘つきなだけ。ただ正直でありたいだけなのです」

直後、手を伸ばす少女の体が小刻みに震えだし、紡がれる言葉が高音と低音に、いや、女と男の声を繰り返し始めた。

「俺は斬りたいだけの私は嫌よ。私がおかしいのは俺の正しさを軸にしているというのに、薄っぺらな私は言葉だけで逃げ続けても俺が私に在るだけなの。理解してとは言わないわ。だって、愛してほしいとすら言わないようにしているから。そういうことを俺は愚かだと言っているんだ。酷いわ、だから私は大っ嫌い。私は俺が大っ嫌い」それはもう見るに堪えない異常者の姿だった。気狂いと、精神を病んでいると、関わるべきではない狂気の在り方だというのに、ダンは眼が離せなかった。

相反する存在。白と黒、陰と陽、男と女、狂気と正気。その全てをたった一つの肉体に内包した狂人の姿があまりにも醜くて——嘆息するほど、美しい。

「……大っ嫌いだけど、私の俺は綺麗でしょう？」

そして少女だった青年は静かに立ち上がり、檻樓の中に隠されていた錆だらけの刀を引き抜いた。

「申し訳ありません。ですがこれが、俺なのです」

錆びついた音色が響き渡る。

旋律を聞き届けたダンは、その音色を耳に響かせて――。

「……あ？」

眼を覚ましたダンは、静寂に包まれた戦場を見渡せる崖の上で首を傾げた。

手にした酒瓶はすっかり中身を全て地面に吸わせ、肴にするはずだった戦いは終わっている。

人族も、魔獣も、魔族も――修羅外道も。

死んだか、逃げたか。あの戦場で激突していた者達はもう居ない。戦いの跡地に残るのは、見渡す限りの死骸と、濃密すぎる血と臓腑と少々の火薬の臭いが混じった不快な香り。

「ちっ……俺としたことが寝ちまったのかよ」

持参した酒も零してしまっている。戦いすらも見逃してしまうとは自分も随分と耄碌したものだ。

だがいつまでも後悔しているわけにはいかない。古い先は短く、やり残したことは多々ある。

ダンは酒瓶を放り捨てると、変な体勢で寝たせいで凝り固まった体をほぐしつつ立ち上がり――顔を歪めて首筋をなぞった。

「ああ、クソツタレ――」

なぞった指先に付着した赤色で全てを察したダンの視界が、突如地面に向かって落下する。

遅れてもう一つ、どきりと地面に落ちた肉塊の音を最期に、彼はもう二度と、起き上がることはなかった。

そうして、この戦場からは全てが居なくなった。

誰も、誰であっても、死地こそ望む修羅すらも。

誰も。

誰も彼も。

いや、あるいはきつとと、そんな願いを血潮に託して――。

これより語るのは、とある物語の最低極まりない終わりである。

「青、山？」

「はい、よろしくお願いします。よければ貴女の名を伺っても？」

「……ナイル・アジフです。今後ともよろしくお願いいたしますわ」

人の腕を斬り飛ばしておきながら平然と挨拶をする青山に対して、流石のナイルも普段の飄々とした態度はとれずにいた。

それほど、青山と名乗った男が放つ気は異質なもの。刀を手にした刀とも呼べる人間の不気味さは、彼女自身も含めたあらゆる異常者を常識人に貶める程である。

これがかつて僅かに旅を共にしていた時、宗司が語った修羅外道の正体。何の因果か、あるいは何の理由もなく現れたこの男に対してどうすべきか。

音もなく現れ、三人の修羅による必殺を容易く掻い潜り、それどころかハットリとナイルに戦闘不能の反撃を与える戦闘力はただそれだけで脅威だ。

そして、だからこそ彼女は幾重にも被っていた仮面の内側、唯一無二の無貌の顔で青山を見据え。

——ああ、こいつか。

——こいつを殺せば私の幸運は……。

「貴女は面白い人ですねアジフさん」

その思考を全て見抜くような青山の一言に、ナイルは心胆すら凍り付く心地だった。

まるで身ぐるみを剥がされたうえで嘗め回されるような不快感。しかし、腸すら視姦する視線を受けてもナイルは決して折れない。

むしろ、それでこそ内の黒い炎をさらに燃え上がらせ、凍り付いた心を再び奮い立たせる。

「あら、一目惚れですか？ ふふ、残念ながら私、女性にしか性的興奮を覚えませんので口説かれても困りますわ」

「いや、その……そういうわけでは……」

「ではまさかからかったのです？ 青山さんは酷いお人ですね。いたいけな女性の心をそうやって弄ぶのですか」

「う、むう……」

そういうわけではないのだが、弁舌では敵わないとみて青山が口を噤んで押し黙る。

—— 会話は苦手。だが突破口にはならない。

どうにか取り繕った余裕の裏側で冷徹に青山を観察する。この僅かなやり取りで青山を凶ろうとしたが、どうにも意味があるとは思えなかった。それと言うのも、こうして会話していても青山から感じられる斬撃のイメージが微塵も拭えないのだ。

「こやつに何を語ったところで無駄だよナイル殿」

青山から一瞬たりとも視線を外さずに、宗司はこの男に何かを求める無意味さを語る。

「呼吸しながら斬り、食事をしながら斬り、人の尊さを、善性を語りながら斬り、人の醜さ、悪意に憤り、悲哀に涙しながら斬り、愛を語り、そして斬る……地獄すら生温い。人の身でなんて様を晒すのか」

「それが俺だ」

「そら見ろナイル殿。この男はコレだ。成り果てた畜生だよ」

青山を前にして宗司の表情はこれまで見せたことがないほどに陰しいものとなっていた。

胸中を苛むのはありとあらゆる感情だ。自制心なんて五秒前には消え失せていた。表面上、辛うじて冷静を装っているが、歪んだ顔は既に臨界寸前。発露を待つ激情を、それでも抑えつけたのは、遂に巡り合った怨敵へ伝えたいことがあったからだった。

「なあ、師匠。だから俺は強くなったよ。先生を殺したお前を斬って、その先に進むためにな」

あるいは、伝えたいのではなく違えないための宣誓だったのかもしれない。

宗司の歩みはここで終わらない。ここを間違えれば、そこが終わりなのだ。道の終わり、可能性の終点。

つまりは、目の前のこの男に成り果てるのだと。

「……そうか」

だが宗司の決意を聞いた青山の答えは冷めた鋼鉄のように感情がこもっていなかった。そんな些事などどうでもいいと表情すら一切変えずに佇む姿に、宗司は乾いた笑みを一つ浮かべた。

「……ハッ、相変わらずお前はつまらない男よのお」

しかし、それがこの男だった。

善人のような言動を行いながら、その実自分のことしか考えていないのが青山という男である。

「俺は、俺だ。これ以外の何者でもない」

言って、青山が掲げたのはナイルの腕とハットリの胸部を裂いた漆黒の大太刀だった。その威容を見て、知らず宗司の頬を汗が一筋流れる。それは、刀という形をした斬撃現象とも呼べる大太刀だった。

斬るために斬る。ただそれだけの狂気は、宗司の手にした繋に似ているようでその在り方はまるで逆であった。

「——彼はこれを、断斬たちぎりと名付けていたよ。まるで俺みたいな刀で、だから俺もこれなんだ」

「……」

「これでしかないんだよ、宗司」

宗司が繋によって果たす、人の手による斬撃ではない。

それは斬撃の手による人の業。目的と手段が反転した人間の究極。青山と呼ばれる男が見出したたった一つの解答。

「斬るんだ」

「ッ……」

「当たり前だろう?」

そう言って酷薄に笑う青山の眼には、理解者を得られたことによる多幸福感で満ちていた。



いつ振りの奇跡を噛みしめるように。あるいは、数年ぶりの好敵手を喜ぶように。

「……それにしても残念だ。どうやら少し割り込むのが遅れてしまったらしい。これでは成長した君との果し合いは叶わない」

だが今の宗司はナイルとハットリを相手取ったことによる負傷で万全とは言い難い状態だった。体に刻まれた打撲と裂傷の痕、特に肩を潰されたことでまともな体調とは程遠い。

この状態では真つ当な戦いなど望むべくもなく、突如として現れた青山という男が秘めた戦闘力を鑑みれば一方的に戦いが終わることは明白だった。

「ホント、残念だ」

『大いなる慈愛の歌声よ、罪深き我らの業を払いたまえ』

今にも爆発しそうだった青山と宗司の気に割り込むように、美しき旋律に乗った慈悲の手が宗司の全身を包み込んだ。

瀕死からすら即座に回復させる治癒魔法の最奥によって、瞬きの間に宗司の傷が癒える。二度と動かないとさえ思えた左肩も万全の状態へとなっていた。

見れば、いつの間にか聖槍ジムを手に持ったナイルが莫大な魔力を身に纏わせて治癒の波動を宗司だけではなく、自身と倒れ伏すハットリにも注いでいた。

「ちよっとしたおぜん立てですよ。あわよくばこのまま貴方達の戦いに参加したかったのですが……」

ナイルの左腕は、傷口こそ塞がったものの二度と取り戻されることはなかった。聖剣と同等の力を持つ聖槍であれば、失われた四肢すら即座に再生させることが可能なことはかつて戦った宗司自身が知っている。

ならば、それは如何なる魔技であるのか。

超常という点で言うならば宗司達武芸者の理解が及ばない魔法ですら届かない斬撃の冴え。

斬られたという事実が覆せない現実。

修羅外道と忌み嫌われた男の究極が失われたままの左腕に現れて

いた。

「……恐ろしいお方ですこと」

聖槍を再び光の粒子と化したナイルは、未だに意識を失ったままのハットリを肩に担ぎあげ、こちらを一顧だにしない青山へ嘘偽りない賞賛を―あるいは悪意を―送った。

「かたじけないな、ない殿」

語る宗司は決してナイルのほうを見ようとしなかった。

既に彼の全ては眼前の修羅外道のみ注がれている。一瞬の隙ですら致命傷、隔絶した力の差と底知れぬ狂気の密度は、相対していないにも関わらず、ナイルですら心胆凍り付かせて余りある。

そんな男へ、手に懐かせたたった一本の棒切れを頼りに、宗司は戦いを挑もうとしている。

あらゆる全てに対して害でしかない存在を打倒する様は成程、あるいは御伽噺で語られる勇者にすら見えたかもしれない。

だが真実は悪鬼と悪鬼の食らい合い。いずれが勝ったとしても、どうしようもない人間が残る事実には変わりなく。

「ああ、そうだ……もしも生きてたなら、めいるの回収も頼めるかの？」

「……承りました」

言葉を多くは交わさない。

先程の戦いとは違う。腕を失ったナイルは既に戦いに参加する権利はなかった。だから、ナイルは肅々とその場を後にする。

別れの言葉すら残すことは無かった。置き去りにする言葉すら、二人つぎりの修羅場には不要であると知っていたから。

——ああ、でも。

己の足でその場より離脱したナイルは、名残惜し気に遠くなる二人の影に視線を送り。

——折角なら、私が二人を殺したかった。

ほんの小さな願いの祈りも、巻かれた血潮の風に紛れて彼方へと消え去っていった。

だから、ここからは二人だけの愛しい地獄。

乾いた風に紛れた影の向こう側、腐食した黒真珠が一对、それ以外ない根幹を成すべく揺れ動くのを宗司は見た。

故に斬る。

刹那、音もない踏み込みと音すら断ち斬る斬撃が宗司を襲った。

無音の斬撃に対して半ば無意識に反応した宗司の刃が青山の一撃と交差する。もしも手にしていた刀が繋で無かったならば、刀身ごと切断されてもおかしくなかった。

そしてその疑問は斬撃を行った青山も同様。「ん？」と顰迫り合いの向こうで首を傾げる青山を、宗司は犬歯を剥き出しにした壮絶な表情で睨んだ。

「戯け、易々と斬られると思ったか！」

繋だけではない。宗司が体得した心鉄金剛は無意識の防御ですら行われ、繋だけなら切断されていた一撃を辛うじて防いでいる。

その事実が憤怒を充満させる宗司の内心に小さな喜びを生じさせた。

あらゆる全てを斬り捨てることが可能な修羅外道の刃を防ぎ、耐えられるところまで遂に自分は至ったのだ。

狂気を超えるは人の術理。

名付けられしは心鉄金剛。言語を超えた究極に、意味と原理を見出し技。

ならば、此処より先も踏み込める。

強さの果てがこの男なら、この男を超えた先にこそ本当の極みが存在するからこそ。

「お前を超えろぞ、修羅外道」

術理 人よ、狂気 人を超えてみせろ。